

---

# 神の名の下に

幸路 ことは

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

神の名の下に

### 【Nコード】

N9160J

### 【作者名】

幸路 ことは

### 【あらすじ】

スカートをはかせればナンパされること間違いなし。真正正銘男で不良の春日勇輝は自分の容姿をからかう奴を力でねじ伏せて不良の道をのし上がってきた。  
強気な彼女が消えて5か月、彼女と引き換えに現れた魔術師たちとも馴染み楽しい日々を過ごしている。

問題児の弥生が大人しくなったら、今度は他の人たちに嵐の種が…。

今までため込んだ伏線（気付かれていないかも）、数多ある謎？  
とかぼつぼつ出てきます。実はあの人が！？ という展開があると  
いいですね！

第4章終わりました！

## 第1章 プロローグ(前書き)

神の名の下に

ぼちぼち更新していくのでよろしくお願ひします。

## 第1章 プロローグ

剣、魔法、超能力

子供のころに当たり前だった世界は、大人になるにつれて色褪せて消えていく。

俺はまだ半分しがみついた状態だけど、現実を見ていないわけじゃない。

そんなものが存在しないことはよくわかってるし、このつまらない日常が劇的に変化することもない。

町を歩けば喧嘩を売られ、倒しては名をあげる。

夢なんてものは隠してでもいなきゃ、すぐに壊される。

俺たちはそうやっていきてかなきゃいけない

夢なんて、目の前に起こるわけないんだ……

## 第1章の1 不良だけど悪くはないよ(前書き)

コメディーとシリアスと半々くらいで進行していきます。

まあ、作者計画では長い作品となりますのでゆっくりつきあってください。

## 第1章の1 不良だけど悪くはないよ

秋の空は高く澄み、時折吹く冷たい風は迫りくる冬を知らせていた。

大通りの木々は枯れ葉を惜しげなく降らし春日<sup>かすが</sup> 勇輝<sup>ゆうき</sup>の足の裏で小気味いい音を立てている。

勇輝と同じ制服を着た学生が早足で、もしくは駆け足で勇輝を追い抜かしても勇輝はのんびりと歩いていた。同じ制服とは言っても着方は多少違う。勇輝はカッターシャツの中に柄シャツを着て、少し前を開けている。学ランのボタンも全ては留めずに開放していた。周りの生徒は勇輝を見ると、少し距離を取り始め、ちらりと視線をむけられる。

その中を勇輝は気にもせずのにんびりと歩いていた。そんなものだから勇輝が学校に着くころには遅刻ぎりぎりだった。

勇輝の通う高校は公立でも底辺に位置する学校で、校舎は長い歴史を感じさせる重みがある。悪く言えば古い。そして、特に目を引くのがガラスのはまっていない窓。

一日に数枚ノルマを達成するかのようには割られていくので、教師たちは直すのも放棄してしまった。

校内はかろうじて少数のまともな女子によって清潔に保たれている。そんな状態だった。

「よう、相変わらずおせえな」

勇輝が教室に入り席にかばんを置くと、隣の席の森本<sup>もりもと</sup> 歩<sup>あゆむ</sup>が声をかけてきた。

色とりどりの髪色がいるこの教室で数少ない黒髪であるが、白のメッシュが入っている。

制服の着方もかなり適当で、学ランの中は柄シャツだけだ。

「うるさい、朝は弱いんだよ」

歩が勇輝に近づいてきた。

そうなると思しいかな勇輝は見上げなくてはいけなくなる。

勇輝は平均的な男子と比べても頭一つ分は低いのである。

そこがまた勇輝を不機嫌にさせる。

「俺の前に立つな」

「なんだよそれ、後ろなら分かるけどなんで前なわけ？ あ、あれですかコンプレックスですか？」

勇輝の中で怒りがふつふつと込みあがった。

勇輝は背の低いうえに童顔でスカートを穿かせたら駅前でナンパされてもおかしくない容姿なのである。

「悪い？」

勇輝は歩をにらみ、拳を握る。

だがそれも歩から見たらキュンとくる上目づかいでしかなく、そもそも勇輝をからかうのが好きなのだからおもしろくてしかたがない。



「別に？」

歩は笑いをこらえ、それだけ言った。だがそれがまた勇輝の神経を逆なでた。

「そんなに文句があんなら拳で勝負だ！」

勇輝はこのあたりで名の知れた不良である。今までもからかってきた相手を片端から殴り飛ばしてきたのだ。た。

そして歩も不良であり、勇輝とは中学からの付き合いで数々の修羅場をくぐってきた。

「いよ。お前とやっただって楽しくねえし、それに俺お前に手なんてだせねえよ」

かわいいその顔に傷をつけたくねえし、と心の中でそっとつけた。

「あっそ、つまんないの」

「はるるゆききおはよ！」

勇輝がふてくされて自分の席に着くために進みだした時、明るい声が飛んで来て、背中に衝撃を受けた。

ちなみにはるゆきとは彩がつけたあだ名で春日の“はる”と勇輝の“ゆき”をとっただけらしい。

勇輝はなんとか踏みとどまりゆっくり後ろを向く。

「あ、彩……おはよう」

そこには勇輝の彼女である桜田<sup>さくらだ</sup> 彩<sup>あや</sup>がいた。

少し背の高い彼女を見上げながら勇輝は彩がいつになく上機嫌なこと気がついた。

(これは……嫌な予感がする)

「ねえ、はるゆき。これあげる」

と手に握らされたのは1枚の紙。

「楽しみにしてるね」

うふふふっと、彩は怪しげな笑みを残して去って行った。

第1章の2 不良の威嚇って？（前書き）

更新は土日のお知らせかです。

たまに平日になったりもする……でしょう。

## 第1章の2 不良の威厳って？

普通の男子ならラブレターかとウキウキするだろうが勇輝は違  
った。

なにしろ相手があんたの天使の笑顔で悪魔の心の彩だ。

勇輝は席につき恐る恐る紙を広げた。そこには、

“次の日曜日デートしようね。場所決まったら教えてね”

とあった。

これを彩の心の中の声に翻訳すると

“次の日曜私に付き合いな、私がわざわざつき合ってあげるんだからね。

場所は適当に選んでおいてよ。私が気に入る所じゃないとやだからね。

ふふっ、もし期待を裏切ったらどうなるかわかるよね？”である。

それを正確に感じ取った勇輝の背中に悪寒が走る。

(なんで俺、不良なのに彼女に脅されてるわけ?)

というかそもそも、と勇輝が自問自答を繰り返していると担任がやってきた。

「おう、だれか休んでる奴はいるか？」

担任が来てもしつこくに静かになる気配はなく、担任もそれを気にするわけでもなくさっさと教室を後にする。

勇輝のクラスは他のクラスの半分しか人数がない。なぜなら勇輝のクラスは落ちこぼれ学級で、学校にこなかつたり退学していたりするからだ。

しかし勇輝は教室を広く使えることに満足していた。

（んあ〜）

勇輝は机につっぷしながら彩から出された難問に頭を使っていた。数式なんか頭に入りはしない。

（この辺であいつが気に入りそうな場所あるっけ？）

今まで、水族館や映画館にも行ったがお嬢様のお気に召すものはなかったのだ。

（そついやまだ遊園地行ってなかったよなあ。そついや家になんかで当たったチケットがあったよな……家帰ったら探そ）

「<sup>かすが</sup>春日〜」

「ふあい」

「起きなさい」

教師の目は鋭い。特に数学の教師は一度も勇輝を熟睡させたことはなかった。

「起きてまふ」

勇輝は顔を机につけたまま手だけをあげた。

「ああ、そう」

（まあ、授業に出てるだけよしとするか）

そう思い、数学教師は再び黒板を白く染めていった。

「もしもし。勇輝？」

“もしもし、こちらはＹ。用件をどうぞ……”

“ただちに敵地に向かい奴と落ちあつて……”

「おい、起きろつてば！」

歩が寝ている勇輝の背中を叩いた。

「つつ」

“こちらＹ、被弾しました……”

「はるゆき？」「ご飯の時間だよ」

「しっ」

勇輝は夢から現実に戻された。  
顔をあげると彩と歩のデコピンが待っていた。

「う………いたい」

(二、これが今問題の逆DV………)

「これで目が覚めたでしょ！ 私お腹すいてるの！」

「うう……。すみません」

額を抑えながら勇輝は鞆から弁当を取り出す。  
その数二つ。

「どうぞお納めください」

と勇輝はそのうちの小さい方を彩へと差し出すのであった。  
そう、今は彼女の手作り弁当の時代でなく彼氏の手作り弁当の時代である。

というわけで勇輝は2つの弁当を作っているのだった。

「ほんとお前は見かけによらず料理うまいよな」

歩が勇輝のお弁当のおかずをつまみながら舌鼓を打つ。

「ほんと、お嬢さんにほしいわ。家事全般出来るもんね」

彩はお弁当をほおばりながら満面の笑みだ。

「さて、家政夫の間違いじゃ………」

「気にしない気にしない」

こうして勇輝の徒勞の多い日々は刻々と経って行くのだった。



**第1章の2 不良の威嚇って？（後書き）**

料理上手な人は羨ましいです。

### 第1章の3 いざゆかん遊園地へ悪魔の帝国

そして来る週末！

勇輝は駅で彩と待ち合わせし、仲良く遊園地へ向かったのであった。

「へ〜、遊園地かぁ。行くの久しぶりかも」

電車で揺られながら彩は楽しそうにそう言って笑った。

笑ったびに揺れるツインテール、私服もさることながら反則なほどの可愛さに勇輝はまともに見られない。

「俺もここ数年いつてない」

遊園地に行くぐらいなら借りてきたスパイもののDVDを見たい。

勇輝は内向的な不良だった。

遊園地までは駅5つ、他愛のない会話をしているとすぐについた。駅をでると目の前に観覧車が立ちはだかっている。そしてその周りを取り囲むかのようなレールの数々。

(ああ………恐怖の大帝国に見える)

「うわ〜。ジェットコースターいっぱい！ 楽しそ〜」

やや顔色の悪い勇輝とは正反対に彩は飛び上がって喜んでいる。

「じゃ、いきますか」

男勇輝、腹をくくって大帝国の門を潜り抜けた。  
さすがに休日とあって、人が多い。

家族づれもさることながらカップルもかなりいる。

二人は自然と手をつなぎ合い、幸せなカップルとして景色に溶け込んでいた。

「あれ乗ろー!」

と彩が指さしたのはゲート付近にあったジェットコースター。

勇輝は彩の指先に視線をやって短くうめいた。

(そりゃ、彩が大人しくて可愛いって感じじゃないのはわかってたけど、しよっぱなからあれ?)

「ほらいくよ!」

勇輝は彩にぐいぐい引つ張られて列の最後尾に並んだ。  
なぜかすぐに順番が回り、しかもなぜか一番前だった。

(な、なんで?)

彩の手前引くに引けず、勇輝は無言でレバーを閉める。

もしこの世に神様がいれば、この時勇輝は全力で呪っていたら  
う。

「私ジェットコースター大好きなの!」

「へ〜」

彩のうきつきさがにじみ出る声と裏腹に勇輝の生気のない声。  
勇輝は死刑執行人の心情を味わっていた。

(やれ！ やるなら早くしてくれ！ 何？ この時間！ もう見え  
てるんだよ！ やるならとっとしろ〜！)

そして発進の合図のブザー音が鳴り響いた。

(ああ……悪魔の笑い声だ)

勇輝の体は重力に従って後ろに引き寄せられる。 眼前に広がる  
青い空も今の勇輝には何の平穩も与えなかった。 徐々に重心が前に  
傾いてきて、レールの先が見えなくなつた。

そしてその瞬間、世界が止まるのを勇輝は感じた。

「ぎゃあああああああ」

「きゃあああああああ」

まっさかさまに落ちていく中で交差する悲鳴と嬉声。

遠心力に振り回され、地面を見下ろし、また落ちていく。

そして出発点に戻ってきた時には勇輝は精根尽きはてぬけがらと  
なっていた。

「あゝ楽しかった！」

彩は軽やかにジェットコースターを降り勇輝を振り返った。

「これなかなかおもしろかったよね」

「そ、そうだね。なんともスリリングな」

勇輝はぎこちなくレバーを上げよぼよぼと地上に上がった。

「今日の目標はねえ、ここのジェットコースター全制覇するの！」

その言葉に勇輝の脳は固まった。

そして脳の内部から危険信号が送られる。

“施設内 悪魔の乗り物 10 速やかに回避せよ”

そう、ここに売りは日本一のジェットコースターの数だ。だが脳の色ぼけたところからも司令が出される。

“彩 喜ばせよ”

しかしもつと奥底からも司令が出る。

“彩 不機嫌 〓 死 回避せよ”

「いい考えだね。いい記念になるよ」

勇輝はジェットコースターよりも彩のほづが怖かった。

そして勇輝は見事にすべてのジェットコースターとお付き合いをした。

やさしく手を引いてくれるものもあれば途中から手のひらを返されるものもあった。

最初からやられっぱなしのものもあった。

（うわー俺生きてる。すげー）

彩のジェットコースター全制覇記念は勇輝の“オレ、生きてます記念”にもなったのだ。

第1章の3 いざゆかん遊園地へ悪魔の帝国 (後書き)

最近遊園地行ってない…

そこらへんも含めて感想お願いします。

## 第1章の4 やられてばっかじゃいられない

「彩、彩？」

勇輝は買ってきたソフトクリームを彩の前にちらつかせてその顔を覗きこんだ。

彩は今勇輝の存在に気づいた様子で勇輝の顔を食い入るように見ている。

「お前、やっぱりジェットコースター十連続はきつかったんじゃない？」

…

「え？ そんなわけないじゃん！」

と笑う彩の顔を少しひきつつている。

「無理すんなって。じゃ、ほら、息抜きにあれ行こうよ」

勇輝は目についた建物を指差した。彩も頷く。

そうして二人は一息つくためにお化け屋敷に入った。

中に入ると、勇輝は悪魔から解放されて意気揚揚としていたが今度は彩が顔をひきつらせている。

それを見た勇輝は暗闇の中でにやりと笑った。

（へ〜。なるほどね）

独特の音楽、しつこいほど何かが出そうな雰囲気だ。



暗い墓地を歩いていると墓石が倒れて女の人が出てきた。  
彩は声にならない悲鳴をあげて勇輝にしがみつく。

「び、びっくりしたあ」

そんな彩に勇輝はますますいたずら心を掻き立てられた。

（可愛いな。へへん、こうなったら仕返ししてやる）

そして前方に井戸が見えてきた時、先ほどまでの仕返しと言わんばかりに彩の耳にそつと息を吹きかけたのだ。

「い、いやあああああ！」

お化けでさえも飛び上がるのではないかと思えるほどの悲鳴があたりを響き渡る。

そしてご満悦の勇輝のみぞおちに彩の鉄拳がめり込んだ。

「ぐえっ」

「はるゆきのばかあああ！」

そして勇輝を振り向きもせず一目散に出口へと駆けて行った。

「くう………」

よろめきながら勇輝も出口へと向かう。

その様は隣でうようよしているお化けよりもお化けらしく見えた。

勇輝が光の中に出るとご立腹のお嬢様がいた。

「はるゆき」

恨みがましい目で睨まれる。

「申し訳ございませんでした」

長い説教に入る前に詫びを入れる。直角九十度のお辞儀、完璧である。

「む。まあいいわ」

怒りの切っ先を真剣白羽取りで受け止められた彩は口を尖らせたままそっぽを向いた。

「ところでお前、なんか武道やってたの？」

「まさか、こんなうら若い乙女が武道なんてするわけないじゃん」

「じゃあさっきの不良顔負けのみぞおちクリーンヒットは何ですか？」

勇輝はみぞおちをさする。

まだ少しダメージが残っている。プロ並みの的確さだった。

「た、ま、た、ま」

満面の笑みでそう言われると嘘くささが倍增するな、とは心で思うだけにした勇輝である。

それから二人はお昼を食べ、午後からは動物のショー等を見て時間をつぶした。

セイウチのでかさに驚嘆し、ペンギンの可愛さに癒された。動物に餌をあげる彩も抱きしめたくなるほど可愛かった。

そしてお土産に二人おそろいのキーホルダーを買って携帯につけた。

「かわいい」

と彩は顔をほころばせるが、そこには少し思いつめたような表情が混じっていた。

だがそれはすぐにいつもの意地悪な笑顔の中に消える。

「えへへ、おそろい。ずっと一緒だね」

「当たり前じゃん」

二人は優しい笑みを交わしあって再び手を取り合って歩き始めた。

## 第1章の5 テンシガキエタ

「やっぱしめはあれでしょ！」

と閉園間近になって彩が指さしたのは観覧車。

日がだいぶ傾いてきたのでイルミネーションが光り、美しく輝いている。

「いいね」

とは答えたものの、勇輝の笑顔はひきつっていた……

小さく、可愛いゴンドラに乗り込むと二人は隣同士で座った。そしてゆっくり上昇を始める。

木と同じ高さになり、悪魔のレールを上から見下ろす。屋根がどんどん遠ざかり天がずいずいと近づいてくる。

「うわああ、きれいだよ。はるゆき見て！」

「わー。ほんとだー」

と言いつつも勇輝の視線は外に向けられていない。

そして棒読み感出まくりの言葉に彩がにやりと笑った。

「ふふふ。はるゆき、高所恐怖症なんですよ」

「ち、違う！ 恐怖なんか感じてない！」

勇輝は指摘に慌てふためいて反論するがその様子はその事実は裏付けするだけにすぎなかった。

「やっぱりそうなんだ」

「違っつて、ちょっと苦手なだけ！」

これ以上彩に弱みを握られてたまるか！ と勇輝は最後の意地を張る。

「あらあ……そうなんだ」

意地悪な彩は新たな情報で勇輝を困らせる遊びをいろいろ考えているらしかった。

「違っつからな」

彩はくすくすと笑いながら、隣で意地を張り通す勇輝の頬をつまんだ。むすつとした顔が形を変える。

柔らかい感触、そして女の彩が嫉妬するくらいすべすべな肌……

（念を押して、こっちが気づいてないとか思ってるところがまた可愛いよね〜）

「地味に痛いんですけど〜」

先ほどから自尊心ずたばらの勇輝は抗議の声を上げた。そして彩はそつと手を離す。

（もう少し一緒にいたかったんだけどな……）

「彩、今日は楽しかった？」

彩がその声に顔をあげると勇輝は満面の笑みでそこにいた。

「た、楽しかった。すごく！」

不意打ちに彩は言葉を詰まらせた。その笑顔が胸を打つ。そして、それを裏切る自分が許せなかった。

(どんなに振り回して困らせても最後はいつも笑ってる。ほんと、ずるいよ……)

「良かった。また来ような」

その言葉に彩は瞳を伏せ、髪を指に絡めた。髪をいじるのは彩考え事をする時の癖だった。

「彩？」

勇輝は不審に思っつて彩の顔を覗き込んだ。

「……あのね、はるゆき。伝えなきゃいけないことがあるの」

顔を上げ、勇輝の視線を真正面から受けた彩の瞳は強く澄んでいった。

「なに？」

彩は深く息を吸って、吐いた。

「あのね、私。もう行かなきゃいけないの」

勇輝はその言葉を頭のなかで数度繰り返してから訊いた。

「どこへ？」

「還るべき場所。ずっと、言えなくて……だけど、もう、時間が無くなった」

彩が静かに紡いだ言葉は勇輝の頭を素通りしていく。内容はわからない。

だが何かとても重要なことを言われていることは分かった。別れ話とか、そういう次元のものではない。もしそうなら彩はピントひとつで別れさせられているだろうから。

「時間が無くなったってどういうこと？」

「……私は消える」

少しのざわめきもない二人の世界で、何かが壊れる音がした。

「き、消える？」

「そうだよ。私の存在はこの世界から消える。最初から、期限付きの人生だったから」

彩は息をつくと寂しそうに笑った。その笑顔に勇輝は胸が締め付けられる。

この間から時々彩の顔をよぎるその表情に勇輝は気づかないふりをしていた。

そして告げられたことの意味が外側から染みてくるように分かり

始めた。

「いなく、なる？　この世界から？　俺の傍……から？」

言葉は勝手に出てくるが頭は空回ってばかりで“いなくなる”その一言だけが渦巻いていた。

「ごめんね。ずっと、一緒にいれなくて……私、ほんとはずっと前から気づいてたんだ」

彩の声は震えていた。

「でも、何もしてあげられなくて……はるゆきに優しいこと、何一つできなかつた！」

その瞳からはとめどなく涙があふれ始める。頬を伝う涙に、勇輝はもうこれが避けられないのだと悟る。

「彼女もぎりぎりまで期限を延ばしてくれたのに！　私ははるゆきに何をしてあげたらいいのか分からなかつた！」

勇輝はかけるべき言葉も分からずただ、泣いている彩を引きよせ強く抱き締めた。

「あのねはるゆき、ほんと私の人生はとっくの前に終わってたんだ……でも、期限付きで生き返らせてもらえた……そのおかげではるゆきにも会えたんだ。だから、けっこう感謝してるんだよ？」

生き返った。もう死んでいる。普通なら信じられないことでも、彩の口から紡がれれば全てが真実となった。



「だけど……消えるんだろ？」

彩は押し黙り、やがてぽつりとつぶやいた。

「私も、消えたくないよ……」

「ならなんで！」

「そういう約束だったんだ。十年の間だけ、私は桜田彩として生きられる」

「誰がそんなことを！」

勇輝は彩を抱く腕にますます力を込めた。

（いやだ！ 彩を放したくない！ 失いたくない！）

「わからない。彼女も何も教えてくれなかった……」

「彼女って？」

「……あ、もう時間だ。ごめん、もう行かなきゃ」

「彩？」

勇輝は彩を放してその顔を見つめた。彩はいつもの小悪魔な笑みを浮かべている。

「はるゆき、笑って送ってくれなきゃ嫌だからね。私ははるゆきの

笑顔が好きなんだから」

彩はとびっきりの笑顔で勇輝を見つめ返した。

その笑顔は今までのなかで一番綺麗で、苦しいほど恋しくて、壊れそうなほど儂かった。

勇輝もそれにつられて笑ったが、顔が引きつり上手く笑えない。

「もう、ちゃんと笑ってよ」

少し口を尖らせて拗ねる彩が呆れるほどいつもどおりで思わず笑ってしまった。

「うん。それでいい。やっぱりはるゆきは笑ってなきゃね」

眼尻の涙を拭った彩の指は透けていた。

「う、嘘だ」

勇輝はおそろおそろ手を伸ばした。

今触れて、彩が消えてしまうことが怖い。なのにそれよりも愛しい、この手で掴んでいたい。

「笑って。それと、忘れないでね。私のはるゆきを大好きだったことも。わたしがはるゆきの笑顔が大好きだったことも」

「ちょ、ちょっと待って。彩！ 彩！」

「も〜。笑って、て……言ってるじゃない。はるゆきが笑ってくれないと、私が笑えないじゃない……」

彩は再び涙をこぼした。その雫は窓の向こうを透かしていた。

「はるゆき……大好きだよ」

彩はそつと勇輝に口づけをし、その瞬間淡い光とともに消えてしまった。

「うっ、あっ、彩？」

勇輝は立ち上がって周りを見渡す。そこに彩の姿はない。ゴンドラからは地上が見えた。

「うそ、だろ？」

音も、色も全てが遠ざかっていく。まるで夕暮れが全てを飲み込んでしまったかのように。

（もう何も見えない、彩がない！ いやだ！ 嘘だ！ どうして彩がない？ 今まで、俺の傍にいてくれたのに……）

勇輝の頬に涙が伝った。声も出ない。泣いていることにすら気付かなかった。

（俺は……どうしていけない……？）

その夜、緩やかに動いていた空気に突如波動が走った。常人にはわからないほど微量の空気の震え、それは確実に世界全土に伝わっ

た。

「……こいつは、あいつか？」

それは町の片隅で。

「ほう。これは懐かしい覇動だ」

それはビルの一室で。

「幕が上がる」

それは深い闇の中で。

「帰って来やがった！」

それは誰も知らない場所で。

変化の余波はゆっくりと動き出していた。

## 第1章の6 天使は心の中に

どこかで人の声がする。時を告げる声だ。今日の天気を告げている。

(そうか、テレビがついてるんだ……)

勇輝はふわりと覚醒した。その眼に見慣れた天井が目飛び込んでくる。

「俺の……部屋？」

勇輝は体を起こし視線をのろのろと動かす。テレビをつけばなしで寝たのだろうか。記憶にない。そもそも家に帰ってきた時の記憶がない。

あれから一日がたったらしい。

勇輝は膝を抱えて縮こまった。

(本当に、彩は消えてしまったんだろうか……)

ニュースも何も言っていない。いつもどおりの平和な朝。

まるで昨日のことが全て嘘のよう。あれは夢だったのだろうか。

勇輝は重い体を動かし、制服を手に取った。

(学校へ行くころ。そうすればわかる。彩に会えるかもしれない……  
彩に会える)

外に出ると、秋はもうそこにはいなかった。冷たい風が北から吹き降り、勇輝の空っぽな心に容赦なく吹き込んだ。街路樹の葉も全て落ち、残っている数枚が風に煽られながらも必死に枝にしがみついている。吐く息も白い。

（この街ってこんなにも白かった？ ……こんなにも寒かったか？）

世界が全て入れ替わったような違和感。勇輝はぐつと拳を握って学校へと歩きだした。

期待しているのに否定している。

勇輝は双方の間で揺らぎながら教室の扉に手をかけた。

開けた世界はいつもと変わらず、目に毒な髪色をしたクラスメイトたちが好き勝手にしゃべっている。

勇輝は彩の席に目をやって異変に気づいた。

（席が……彩の机がない！）

胸の底が冷えていく、知りたくないのに突きつけられる。

勇輝が戸口で固まっていると後ろから頭をこづかれた。

「おはよーさん。そんなところでぼさつと突っ立ってんなよ」

勇輝が振り向くと歩がいた。

「なあ歩、彩がない」

「あや？ 誰だそれ？」

「彩だよ！ いつも一緒にいた……」

“存在が消えるの”

ふと彩の声が耳に蘇る。突如理解した。

（彩がない。彩はいなかったことになって……）

「おい、顔色悪いぞ？ だいじょーぶか？」

「……大丈夫」

勇輝はぐつと唇をかみしめた。こみあげる感情を必死に押しとどめる。

（覚えてる。俺は覚えてる。俺だけが彩を覚えてる。決して忘れてりしない……）

第1章の6 天使は心の中に（後書き）

土日に更新できなかったので……  
短くてごめんなさい



## 第1章の7 新たなる知らせ

そしてこの日は一時間目から歩と二人屋上でさぼった。

彩と付き合う前はずっとふまじめな生活をしていたことを思い出す。

屋上に寝転がっていると、薄い青の中を雲が泳いでいた。

見上げる空はいつも同じはずなのになぜこんなにも見え方が違うのか。

(彩……俺は絶対忘れない)

勇輝は顔の筋肉をほぐしてにっと笑ってみた。

「気持ち悪」

「見るなよ……」

(彩は俺の笑顔が好きだったんだ。俺が今できることは笑うことだ)

「変な勇輝」

「ほっとけよ」

歩は不満そうな顔をしたが、はたと思いだしたような顔をして言った。

「あ、そうそう。なんかうちのクラス転校生くるらしいぜ」

あまりの急な話の変わりように勇輝は目を丸くした。

「転校生？ 今？」

学期も中途半端な今に転校とはめったにない。

「なんか今日急に転校届が来たみたいですよ。職員室も騒然としてた」

「なんかやらかして学校追い出されたくちな」

勇輝のクラスは落ちこぼれクラスなので、そういった経緯で転校してくる奴はけっこういたのだ。

「たぶんそうじゃねえかな。なんたって一度に5人もくるんだからよ」

歩は手を開いて5の数字を強調した。

「まじ？」

これは一大ニュースだ。この時期の転校、しかも一挙に5人なんて聞いたことがない。

「なんか起きそうな気がしねえ？」

「するする。謎の転校生と大乱闘とか！」

勇輝の顔がぱっと明るくなった。

男だったらぜひ手合わせを願いたい。体を動かせばこの気分も少しはましになるだろう。

「乱闘好きだねえ」

「もしくは実はどっかの組の跡取りだったり……」

勇輝の想像は際限なく広がっていく。

「実は潜入捜査員とかでもいい」

「……ベタだなあ」

歩の感想を聞いた勇輝はきつと歩に顔を向け、拳を握る。

あ、やべえ……変なスイッチ入れちゃった、と後悔するがすでに遅し、勇輝は熱弁態勢に入ってしまった。

「ベタの何が悪いんだよ」

「……いや、悪くはねえけど。たまには意表を突いてほしいっていうか」

負けず嫌いが手伝って歩も応戦する。

「意表？ そんなの安心して見てられないじゃん！ 仲間は誰も死なない。異世界へ行けば助けてくれる人がいる。転校生が来れば事件が起きる！ そして最後はハッピーエンド！ 何が不満なんだよ！」

そこまで一息でまくしたてると勇輝は一息ついて歩の反論を待つ。

「……けどさ、現実そんな甘くねえし。転校生来るたびになんか起

こつてたら世界潰れてんだろ」

「現実と一緒にすんな！ ベタはベタな世界でしか生きられないんだ！」

もう何が言いたいのかもよく分からない

「……うん。わかったからそう熱くなんな……なんか虚しくなっちまった」

「わかってくれたんだったらいい」

と勇輝は握った拳を下ろして座り直し、そんな勇輝を歩は苦笑交じりで見っていた。

「まあ、ちよつとは元気出たか？」

「え……あ、心配かけてごめん」

「いって」

そうして二人は他愛のない話をして時間を過ごしていったのだ。た。

**第1章の7 新たな知らせ（後書き）**

ベタベタベタ。楽しいですよね。  
評価、批評お待ちします！

## 第1章の8 サヨナラテンシ

結局二人は学校を自主早退し、帰路についた。

「歩はこれからバイトか？」

十字路の別れ際に勇輝が訊いた。

歩は中学校のころからバイトをしていた。出張とか言って数日学校に来なくなること多い。

「そう。俺勤労学生だから」

「じくろーさん」

「お前も暇ならバイトすりゃいいのに」

「やだね。社会貢献なんか大人になれば嫌でもさせられるんだから、今は遊んどくって」

勇輝は軽く手を振って拒絶の意を表す。

すると歩はよよよと大げさに悲しんで

「ただでさえ母親がいないのにこの親不孝めが。とーちゃんは悲しいよ」

とつそぶいてみせた。

「よく言うよ。俺が作ってる弁当つまみぐいしてるくせに」

「だってうまいんだもん」

すぐにけろりと表情を変える歩に勇輝はほとほと呆れた顔を返した。

「今日なんか俺の分まで作ってくれたじゃん」

「違う。あれは妹の！」

「お前、妹いないだろ」

歩の指摘に勇輝は短くうめく。

「いるんだよ！ 隠し子が！」

「へへ。そりやく会ってみたいもんだわ」

もちはなっから信じていない。

「くそっ、とつととバイトにいけ！」

「はいはい。じゃあな勇輝」

「またなっ」

勇輝はゆっくりと足を家の方へと向けた。

うるさい声が消えたたん、心の温度が下がった気がする。

（もう、お弁当も一つでいい。少しゆっくり寝られる。だけど、もうあの笑顔は見られない……。なんだよ。俺を家政夫として雇ってくれるんじゃないかって……？）

勇輝は袖で目を強引にこすった。一つ思い出すと次から次へと湧いて出てくる。

勇輝は知らないうちに駆け出していた。歯をくいしばって、地面を痛いほど踏みつける。

（笑え！ 笑えよ！ 約束しただろ？ 俺は笑うって、俺は……）

家に駆け込み、自分の部屋に駆け上がる。

荒々しく扉を閉めたたん、ぷつりと糸が切れた。とめどなく涙が溢れる。

「うあああああ……うう、くっ」

（ごめん！ 彩、ごめん！ 今だけは許して……）

その場に崩れ落ち、声をあげて泣いた。自分だけになってしまったかのように静かな世界で、勇輝は誰にもはばかりことなく泣き続けた。

やがて力尽き、睡魔に眠りへと誘われるまでの誰も知らない時間を……。



## 第1章の8 サヨナラテンシ（後書き）

これが過ぎて、話が少しづつコメディーになればいいなと思います。

第1章の9 ベタのべたによるベタのための会議（前書き）

べたべた

## 第1章の9 ベタのべたによるベタのための会議

ベタのベタによるベタのための会議。

議題 目の前で彼女が消えた。

「どつきりだと思います。明日になればひょっこり出てくるのではないでしょうか」

それはない。今の科学技術にそんな芸当はできないし、どつきりにしては手が込みすぎだ。

「転校した？」

だから目の前で消えたんだって……  
それに、全員の記憶からも消えてる。

「はい。やはりここはなんかの悪組織が関係しているのでは？」

何？ 超能力者軍団とか？

そんなの現実にはありえないって……

「そこから勇者の冒険が始まるのです！」

今二十一世紀だし、科学の時代だし。俺にも特別な力はないからな！

「じゃあ夢オチじゃないっすか？」

そう、俺もそれを期待した。 夢オチ、ベタの中でもスーパーウ

ルトラベタな終わり方。

だけど、もう彩が消えて3日が経った。夢にしては長すぎだ……

勇輝は脳内会議を締めくくって薄らと目を開けた。

自分の部屋、ベッドの上である。外がまだ暗いということは日の出前らしい。

勇輝はなかなか寝付けず、永遠と脳内会議を開いていたのだ……

数十分後に携帯のアラームが鳴った。

携帯を持ち上げるとあの時買ったマスコットが目に入り、胸が締め付けられる。

今、彩と繋がるものは携帯のマスコットだけだった……

第1章の9 ベタのベタによるベタのための会議（後書き）

やっと、転校生登場です！

第1章の10 え、転校生？（前書き）

10話目でやっと出てきたよ転校生……

## 第1章の10 え、転校生？

教室に入るとにわかにはざわついていて、昨日までとは何かが違う。教室に圧迫感があるのだ。

勇輝はいぶかしんで教室を見渡した。

(あ……机が増えてる)

各列の後ろに一つずつ昨日までは無かった机が置いてある。

(例の転校生？)

「とつとつ来たぜ転校生！」

席に着くと歩が話しかけてきた。前の席を横取りして熱く語りだす。

「なんの変化もないこの日常に吹き込まれた新たな息吹！ ぜつこ  
うのカモだぜ」

「もう来たんだ……」

「どんな奴かな。やっぱり最初は力試しと行くか？」

歩は転校生とやり合う気満々だ。

「やるやるー！」

勇輝は出来る限りの明るい声で返事をした。

今は何でもいい。気晴らしがしたかった。

「よし。んじゃ決行はカモの情報が集まってからってことで、ひとまずさぼりますか」

「さんせーい」

というわけで、転校生の顔を拝むのは昼からにして二人は屋上へ向かった。

だいぶ屋上で過ごすにはきびしい季節になってきたのだがそんなことは関係ない。

不良に寒さなんか関係ないのだ。階段を登りきって、錆びついたドアを開けるとなんと、先客がいた。

音に振り向いた彼らを見て二人は言葉を失った。まずその奇抜な髪色に、そして次にその下についている顔に。

一目でわかった。

(こいつらが転校生だ！)

だが二人ともぜひお手並み拝見！ という気は起きなかった。もう、威圧感で負け確定だ。

どう頑張ってもこいつらの前では自分が情けなくなつて喧嘩どころじゃない。

人睨みされただけで逃げ出したくなる。全力で謝りたくなる。

それほどに、美形だった。まさに形容できないとはこのことだった。

二人とも口をあぐりと開けて彼らに見入っていた。



「まじかよ」

歩が思わず漏らしたその言葉に勇輝はやっと現実に戻り立ち戻る。

「あ……こんにちは」

(どんな人にもまずは挨拶！ 挨拶を交わせば心も通じあえる！)

「こんにちは」

「ちは」

五人のうち挨拶が返ったのは二人。茶髪の女子と金髪に黒のヘアバンドをした男子だ。

「……あの、転校生？」

勇輝は恐る恐る話しかける。転校生の心をほぐすには明るい笑顔と柔らかい口調！

なぜか頭のなかには転校生とのいろはが大音響で流れている。

「そっだよ。よくわかったね」

茶髪の女子が朗らかに答えてくれて勇輝はほっと胸をなでおろす。だが後ろに控えている三人はまだ警戒したままだ。

「見かけない顔だから……」

おかしい。ちゃんと会話は成り立っているのにこの空気に冷え冷えさはなんだ？

五対の視線に射抜かれて勇輝は早くも背中に嫌な汗が伝い始め半泣きになりかけていた。

「んで？ お前ら誰？」

金髪の男子がしげしげと二人を観察する。

「え、俺？ 俺は春日勇輝。二年」

（なんてことだ。すっかり自己紹介を忘れていた。相手の正体もわからなければ警戒なんて解けないだろう。かの有名なスパイも名前も名乗らない奴は相手にもしなかった）

「俺は森本歩。同じく二年」

「へへ俺らとタメじゃねえか」

金髪の男子はもう一度勇輝をじっくりと観察した。

（絶対俺一年だと思われてた）

その反応で勇輝は彼の思考を理解した。

「こつちにおいでよ。ちょうど聞きたいことがあったの」

と茶髪の女子が手招きをし、二人は吸い寄せられるように彼らの輪の中に入った。

そして近づけば近づくほど、彼らの威圧感はずぎましかった。

「じゃあ、まずは自己紹介ね。私は癒慰<sup>ゆい</sup>」

緩やかなウエ ブのかかった茶髪は肩より少し長めで柔らかい和み系を演出している。

瞳はくりつと丸く、肌も透き通るように白い、世の男性のタイプの一、二を争う容姿だ。

制服もよく似合っていて、着る人が違うだけでこつても可愛くなるのかと二人は感心する。

そしてにこりと笑った顔は子供っぽくて、春の日差しが来たように感じた。

(ああ、天然のオアシスだ)

この寒い北風の吹きつける屋上では唯一の救いに感じた。

「俺は秀斗ひしゅう。よろしくな！」

さらりと風に揺れる金髪は太陽の光を反射して輝いており、額に当たっている黒のヘアバンドが金色を際立たせる。精悍な顔が少し笑えばそこには少年の無邪気さが残っていた。

制服は不良らしく、カッターのシャツをはだけさせている。しかし憎いことによく似合っていた。

勇輝も見習いたいところである。

「私は零華れいかです。よろしくお願いしますね」

珍しい藍色の髪は腰まで広がっており、肌は陶磁器のようだった。淡い微笑を浮かべる彼女の周りには清楚な雰囲気漂う。

指先から足元に至るまで美しく存在しており、制服の着こなしもばっちりだ。

そして二人の視線は零華の隣にいた赤い髪の大人びた男の子へと注がれた。

彼はそれに気づくと煩わしそうに少し眉をひそめて

「錬魔だ」

と短く名乗った。

太陽に透けて光る髪は燃えるような赤で、不機嫌そうな切れ長の目が大人びたように見せる。二十歳すぎでも十分通りそうだ。

彼はカッターシャツを着ておらず、赤のシャツの上にボタンを留めずに学ランを着ている。

彼の鋭い視線に射抜かれた時、二人は強い北風を心の中に感じた。

そして、最後に残った女の子に目をやる。

「私は弥生。よろしく」

さらりと肩を落ちる髪は銀色で、長さは腰に少し届くくらい。肌は曇り一つない白さで、瞳には優しげな笑みが浮かんでいた。

彼女はリボンをしておらず、しかもスカートではなくズボンを穿いていた。しかし、それがなんの違和感もなくはまっている。

髪色と身に纏う雰囲気と研ぎ澄まされた美しさが人離れた印象を与える。

しかし、にこりと微笑むと、その笑みは普通の女の子。勇輝が知っているものと何一つ変わらなかった。

そして彼らの容姿を見て気づいたのは、全員が灰色の目をしていたことだった。

（ハーフとかかな？ あ、今はダブルっていうんだっけ）

そして自己紹介が済んだところで秀斗がさっそく質問した。

「でさ。やっぱりここにもボスがいんのか？」

二人は秀斗のいきなりの質問に驚いた。なんとも好戦的な転校生だ。

そして思うことは同じ、よかつた。早まって喧嘩ふっかけないで。

「ん〜どうだろうなあ。こいつっていったボスはいねえけど、小ボス程度ならうちのクラスにちらほらいるぜ?」

「それ何組？」

「五組。たぶんお前もおんなじだと思う」

その言葉に五人全員が驚いた顔をしていた。

「え、マジ？」

「初耳ですね」

「へ〜私たち五組なんだあ」

とそれぞれ驚きの声が漏れる。

「何も知らされてないの？」

「ここに来ることも急に決まったからな。そんで来たのはいいもの

の、どうすりゃいいかわかんなかったからここで時間つぶしてたんだ」

なんともびっくりの転校生事情だ。

「そんなのよく理事長が許可したぜ」

さすがにそれには歩も呆れ顔だ。

「理事長？ それってここの偉い人？」

「そつだよ。学校作った人」

知ったかぶって答えるが勇輝は理事長にお目にかかったことはない。

「へ〜。理事長はいつも学校にいるの？」

「いや……月に数度しかこねえかな。なんか会議とかで忙しいみてえだし」

「ふ〜ん。そうなんだあ」

ぼつぼつと話をしていると一時限目終了のチャイムがなった。

「あ、なんだかんだで一時間さぼっちゃったね」

「では、そろそろ行きますか」

「高校の授業ってのも気になるしな」

そうして本日のサボタージュは一時間で切り上げ、教室に帰った。

第1章の10 え、転校生？（後書き）

癒慰…なんでこんなに難しい漢字にしたんだろう。非常に書くのが面倒くさい。



第1章の11 転校生プラス1（前書き）

あれ

そんなに話が進んでいないのに11話目です  
ね。はい……1話が短いんですね。

## 第1章の11 転校生プラス1

二時限目は化学。担任の教科だ。

彼らがぞろぞろと教室に入ると一斉に目を向けられた。中にはあからさまにガンを飛ばしてくる奴もいる。

この教室では席はあつて無きが如しなので、五人は後ろの一行の好きな所に座り、勇輝の後ろには秀斗、歩の後ろには癒慰が座った。そして始業のチャイムが鳴り先生が来るまでの間に注がれた熱烈な視線を流しながら、勇輝は早くも乱闘を予感していた。

そしてそれが現実となり彼らは一日で教室を手中に収めるのはもう少し後となる……

普段、どの授業でも教師が来ようが怒鳴ろつが静かにならない教室が水を打ったように静かになったのは、入ってきたのが担任ではなかったからだだった。

「ど〜も〜」

寝ぐせのついたままの髪に白衣、眼鏡をかけた二十代後半の男は軽いノリで教室に入ってきた。

皆がその男を凝視している中、後ろでげつ、と低くうめく声が聞こえた。

その男は教壇に立つと満足そうに全体を見回し、自己紹介をした。

「初めまして。僕は葉月透<sup>はつぎとあゆ</sup>、事故で緊急入院された先生に代わって今日から君たちの担任兼化学の教師をすることになりました。よろしく」

そしてその男は挨拶もそこそこに授業を始めたのだった。

教室中、あまりの突然のことに教科書すら開けられない。という教科書すら出していない。

そして彼は楽しそうに授業をし終了のベルが鳴ると、まだ状況の把握ができていない生徒を残して颯爽と教室を後にした。皆でその背を見送った後、秀斗が急いで教室を飛び出していった。

「どうしたの？」

「トイレじゃない？」

勇輝の質問に癒慰が答えた。後ろを振り向くと彼らも教科書などを広げた形跡は無い。

彼らが教科書という物を持っているのか少し気になった勇輝であった……。

秀斗は見覚えのある男を追いかけ、廊下の曲がり角でその肩を掴むとそのまま壁に押し付けた。

「おい葉月！ てめえなんでここにいやがる！」

「いや〜。久しぶりだね秀斗君。すっかり男前になって」

葉月は秀斗の突然の狼藉にも動じず笑ってその顔を眺めた。

「お前が来るなんて聞いてねえぞ」

「僕も昨日言われたからね。もうびっくりびっくり。でも担任に暴力振るっちゃいけないんだよ？」

さすがに秀斗もやりすぎたと思ったのか罰の悪そうな顔をしながら葉月を放した。

「俺らの監視役ってことか……」

「ん〜ていうか、保護と抑制と援助って感じ？」

笑って受け流す葉月に秀斗はそれ以上の追及を諦めた。そしてふと気付いたような口調で問う。

「ところで、その元担任の事故ってのは偶然か？」

「さあ……なんか事故っていうか事件だったみたいだよ？ ひき逃げだって」

「おい……まさか」

「怖いよね〜。あんなに人通りの多いところなのに目撃者が誰もいなくてまだ犯人さん、捕まってるないんだってさ〜」

葉月の笑みが三割増しで輝いている。

「じゃ、僕は次の授業があるから」

啞然とする秀斗の脇をすり抜け葉月は鼻歌まじりで去って行った。

（おいおい……そこまでやんのか？）

そして午前の授業は滞りなく終わり、昼休み、校庭は戦場と化し

た。クラス内の派閥の頭がそろって喧嘩を叩き売り、血気盛んな秀才がそれを高額で買い取ったという簡単な図式だ。

不良クラスで無法地帯と言っても、暗黙のルールという物がある。その一つが校舎内でやりあわないこと。

これはこの校舎がオンボロで床が抜け、相手を床に叩きつけたと同時に下の階へと転落。両者もろとも全治二週間の怪我を負ったことに由来する。

そして教室の風景は朝と一変した。

「みんなやっぱり強かったんだ」

「お前らだって結構な数やってたぜ？」

勇輝たちは転校生側に肩入れし、日頃あまりやり合うことのできなかったクラスの連中を思う存分殴り飛ばし大勝利を収めた。

「でもよかったの？ こつちに味方して」

ちなみに女子三人は木陰で観戦していた。

「いいんだよ。俺あいつら嫌いだし、それに多勢に無勢は許せないしな」

「そーそー。だから気にすんなって」

「二人つて優しいのね」

そんななんともほのぼのとした会話をしているのは授業中。

血の涙を流している生徒達に教師が驚き怪我人を保健室へ強制

連行したので、教室は只今彼らだけだ。

「あの。この教室って女の子は私たちの他にいないのですか？」

零華が遠慮がちにそう訊いてきた。

連行されていった人の中にも女子はおらず、彼女がそう思うのも無理はなかった。

「あ、いや……たしか二、三人いたよ？ まだ見たことないけど」

「そうなのですか……学校は同じ年ごろの女の子がたくさんいるところだろ思っていたのですが……」

確かにこんな男だらけの場所では過ごしにくいだろう。

彩がいたら、少しは話し相手になれただろうが……。

「前の学校は女子多かったの？」

「あ、いえ。私たち初めて学校に通うんです」

予想外に言葉に勇輝は驚き、慎重に次の言葉を待つ。

「みんな、同じところで働いていて、そこの社長が学生というのを経験したほうがよいとおしゃったので」

「へ〜。じゃあおもいつきり高校生活楽しまないと」

人にはそれぞれ事情があるんだなあと思う一方で社長の思いやりに感動した勇輝は隣で歩が神妙な顔をしているのに気がつかなかった。

その時教室のドアが音を立てて開き、葉月が駆け込んできた。

「君たちは来て早々何をやってるんだい？」

担任の登場に誰かが舌打ちをする。

そして葉月はゆっくり彼らを見回し、勇輝に目を留めた。

「おや、可愛い」

ほろりと感想が漏れる。

勇輝の心にゆらりと怒りの炎が灯った。

「今何かおっしやいましたか？」

「あ！先生もそう思った？実は私も」

前の敵に集中していたら後ろからざっくり斬られた。

「っ！」

あまりの怒りに言葉もでない。

勇輝は今にも噛みつきそうな形相で葉月を睨んだ。

（おや、これは可愛い子犬かと思いきやなかなかの猛犬だね）

葉月は笑みの下で彼らと交流をもった二人を見定めた。

「ところで、この喧嘩騒ぎは何だい？」

葉月は勇輝の怒りをさらりと流して彼らに向きなあった。

「別に。てかあつちから吹っかけてきたんだぜ？」

「俺達は高値買取りをしただけです」

あきれ顔の葉月の間に、秀斗と歩が答えた。

「……よほど僕を倒れさせたいのかい？」

「大丈夫ですよ先生。あれだけやれば当分は私たちに喧嘩を売ろうとする命知らずは現れませんから」

おしとやかでいて芯のある笑みが炸裂する。 触らぬ神に祟りなし。

葉月はその笑顔の下にあるメッセージを読み取ると溜息をついてやや遠くを見やった。

「そういえば、明日の実験に使う菌を繁殖させないとね……」

葉月は意味の分からない独り言をつぶやくと逃げるように教室を去った。というか逃げた。

(いや、あの3人に睨まれるとさすがに生きた心地がしないねえ。

あはは、これは事件そのものをもみ消したほうが楽そうだ)

教師の片隅にもおけぬ発言を心の中でしながら、葉月は職員室へと続く階段を下りたのだった。

葉月の去った教室で、勇輝はゆっくりと癒慰を振り返った。

「俺が何だって？」



「うん？ 可愛いねって言ったの」

勇輝の怒りなどつゆ知らず、癒慰は子犬に語らうがごとき口調で答えた。

「俺が？」

勇輝は顔がひきつっている。これを言ったのが男だったらすでに地を這わされていただろう。

「そうだよ。それはもう女装とかさせたいぐらいに」

「あ、それ地雷」

ことの成り行きを楽しく見守っていた歩がつぶやいた。  
実際勇輝は中学の文化祭で女装をさせられたことがあったのだ。  
その年の文化祭は伝説の文化祭として語り継がれている。

「癒っ」

癒慰の名前を叫ぼうとして息を詰まらせ、行き場を失くしたエネルギーは虚しく口を動かしたただけだった。さすがに今日会ったばかりの人を名前で呼び捨てにするのは気が引ける。

「あれ？ 不発弾？」

（というか呼び捨て云々の前に……）

「苗字聞いてないんだけど」

「え、今さら？」

呆れた突っ込みは歩から、勇輝はそれに口をへの字に曲げる。

「苗字って言わなきゃだめなの？」

癒慰は小首をかしげて勇輝に訊く。

それだけで先ほどのことは水に流してもいいと思った勇輝である。

「いや……名前を呼ぶ時にさ」

「苗字なんて普段使わないんだよね」

「別にいいんじゃないの？ 名前で呼べば？」

「そうよ。耳慣れない呼び名で呼ばれても気持ち悪いからね」

勇輝のささいな希望は二人の気にするな論に封じられた。

第1章の11 転校生プラス1（後書き）

葉月先生。

彼について書く日も来るのかな？

それ以前に彼に彼らが止められるんだらうか…

## 第1章の12 なんか裏ある転校生！

そして、結局誰一人として帰ってこないまま五時間目終了のチャイムが鳴った。

その休み時間、にわか騒がしくなったと思ったら、可愛そうなミイラたちがしおしおと帰ってきた。

ミイラたちは彼らを見るとガーゼなり包帯なりをひきつらせ、直立の姿勢で彼らの前に立った。

その姿は死刑台に上がる死刑囚さながらである。

「喧嘩を売ってすみませんでした！」

教室に響く大合唱、そして風を感じるほどの礼。

緑みどりミドリ、赤、黄色きいろ、ピンク、紫……まるで花畑みたいだ。

「いいよ」。許してあげ、る」

癒慰の女神の微笑とその言葉に花畑が一齐に天に向かって茎をのばした。

「おい癒慰、お前なんもしてねえじゃん」

喧嘩を買った張本人の秀斗がムツとした顔で癒慰を見た。役を取られたことが気に食わなかったらしい。

「だって、こんなに誠意をもって謝ってるんだもん。許してあげなきゃね」

その言葉を聞いて花畑の下の土は一気に輝いた、お日様浴びて元気いっぱい栄養満点だ。

「でも、わかってるよね」

しかし、うららかに照っていた花畑に突如冬がやってきた。太陽なのにそこから降り注ぐ光は氷のように冷たい。

「はい！ おれたちは今日から皆様のために真心をもって尽くさせていただきます！」

癒慰はあっさりとクラスを掌握した。

その掌の返しように身内の秀斗たちまで目を見張っている。

「癒慰ちゃん。他人をいじめるのもほどほどにしてくださいね」

「わかってるよ」

癒慰は無邪気に笑っていたが、その背後には茨が蠢いていた……。

次の日から、クラスは快適空間に改造された。

だからといって彼らが真面目に授業に参加しているかと言えばそうではなく、ちゃんと学生の本業を全うしているのは零華と癒慰ぐらいだった。

朝、歩は一人屋上へと上った。

勇輝は例によって寝坊したらしくまだ来ていない。こういう時は大抵二時間目にならないとこなかった。

(ちょうどよかった。あいつがいるとゆっくり話もできねえしな)

戸口に立って、顔を引き締めるとドアノブを回した。

「歩君だ〜おはよ〜」

そこには全員がいた。各々の美貌が朝日をうけてひとときわ輝いている。眠気も吹き飛ぶ光景だ。

しかし歩はその声に答えずに、ゆっくり片膝をついて畏まった。その動作に一同の顔つきが改まり、空気が引き締まる。

「貴方方におかれましては如月の皆様かと存じ上げます。ご挨拶がおくれましたことをお詫び申し上げます」

畏まった口調は普段のそれとは別物で、ものものしい空気を作り出す。

「そつだがお前はどこの者だ」

警戒心のこもった低い声で錬魔が問う。

「黎冥<sup>れいめい</sup>、隼<sup>はやぶさ</sup>に所属<sup>しゆじゆく</sup>しています」

黎冥は情報収集を専門とする特殊な階級であり、その隼は唯一の隠密グループだった。

「隼!」

秀斗が声を荒げた。今にも飛び出しかねない様子に錬魔が手で制する。

「あの件について調べてるの？」

一番奥に座っていた弥生が淡く微笑を浮かべた。だがその目は全ての嘘を見抜くような光を持っていた。

「はい、逐次報告をしています。今回ここへ潜入なさったのはやはりその任務ですか？」

「そうよ」

そして彼らは互いに視線を交わした。秀斗が苦い顔をしているが、小さくうなづく。彼らにはそれだけで十分だったのだ。

「だから歩君、協力をお願いね」

全員、隼に協力を得るのに反対したものはいなかった。

「もちろんでございます！」

「ちっ、せつかくだからつかってやるよ。じゃ、今後一切敬語なし！俺そついう面倒なのやだ」

不機嫌そうな表情はすぐに人懐っこい笑みに変わった。歩はすつと立ち上がるとにっくと口角を上げる。

「わかってるぜ秀斗。これからよろしくな」

そこに組織の人間としての顔は無く、一人の生意気な不良が笑っていた。



**第1章の12 なんか裏ある転校生！（後書き）**

あはは、短いですね

もつと転校生たちのことに踏み込みたいけど、さて  
どれくらい先になるんだろう

### 第1章の13 族狩始動

一週間が何ということもなく過ぎ、勇輝はその間に彼らの非常識さに驚かされていた。

まず朝、屋上に行くと焚き火が出迎えてくれた。むろん即刻消火活動に奔走した。

次の日、焚き火には懲りたのかストーブを持ってきていた。しかも学校の備品。

だがこれでこれから寒くなってもなんとかしのげそうだと、手放しで喜んだ。

そして週が明けた今日、カーペットが出現していた……。

「おは……」

勇輝は教室にかばんを置き、屋上に行きつて絶句する。

「あ、勇輝君だ。おはよ〜」

もろくつろいでいる癒<sup>ゆい</sup>慰<sup>い</sup>がいた。どこで沸かしたのか優雅にお茶をたしなんでいる。

カーペットの端に靴が固めてあり、皆靴下で移動していた。

これいつか家建つんじゃない、と思いつながら勇輝は靴を脱いで揃え輪の中に入った。

「あれ、錬<sup>れん</sup>魔<sup>ま</sup>は？」

長身で寡黙、そのくせ存在感の大きい鍊魔は身長という点でのみ勇輝に尊敬されていた。

「今日は休み、頭が痛いんだって」

「へ、風邪かな」

最近ますます冷え込んできたからな、と勇輝はカーペットに寝ころんで空を見上げた。

(いつそのこと炬燵がほしいな)

本格的に冬が到来する前に、温暖設備は整えておかなければならない。

零華以外、暖かい教室で勉強するということは考えないのであった……。

そのころ、鍊魔は長い廊下を歩いていた。

ヨーロッパ風でところどころ絵も掛けられている。この建物は何年たっても変わらなかった。

第二次世界大戦が終わり、冷戦が終結し、世界が仮初かりそめにも平和を歌い始めても、この組織はなくならなかった。

組織の名を龍牙隊りゅうが、闇社会をまとめる組織の一つである。その歴史は古く、百年前にはすでにあつたとされている。

その隊長のもとへ、鍊魔は度々検診に訪れているのだ。

鍊魔は廊下を歩きながらこの前ここを歩いた時のことを思い出していた……。

その日の足取りはいつもよりも早かった。一刻も早く隊長に報告しなければならぬ。

早足で廊下をつつきる錬魔に隊員達が次々に振り返った。

そして錬魔は重々しい扉を叩き、返事も待たずに中へ入った。

「今日はだいぶと急いでいるようだね」

正面の机の向うに初老で白髪混じりの男性が座っていた。

表では会社を経営し、裏ではこの隊をまとめる隊長、龍牙だ。

「お体にお変りはないようですね。力の減少もなく、よいことです」

余命宣告をするような深刻な顔で錬魔は状態を述べる。

敬語で話しているのにもかかわらず、威圧感と上から目線を感じるのは彼の背が高いことだけだろうか……。

か……。

「私はいたって健康だよ。それで、何かあったのかい？」

錬魔は少し眉間にしわを寄せると重い口を開いた。

「……弥生が帰還しました」

その名はずいぶ長い間聞かなかった、かつての戦友の名だ。

「そうか、やはり……それは本人かい？」

龍牙の口元は笑っているがその目はしっかりと錬魔の表情を捉えていた。

鍊魔はその目を見る度、彼の底知れなさを感じる。

「はい。それは確認しました。ですが……」

妙に歯切れの悪い鍊魔に龍牙は目で続きを促す。

「十年間の記憶が全て消えています。おそらく奴らの仕業かと」

鍊魔は苛立たしそうに唇を噛みしめた。

「やられたね……他に不審なことは？」

「これについては、ただ……」

と、それきり鍊魔は黙ってしまった。言うべきか否か考えあぐねている様子だ。

龍牙が辛抱強く待っていると、やがて自分でも納得のいかない様子で口を開いた。

「よく、わからないのですが……性格が別人のように変わっています」

重々しい口調で語られた内容は少し拍子抜けするものだった。

「それは、ますますひねくれたのかい？」

溜息まじりで龍牙は問う。少し記憶を遡っても真面目に仕事に取り組んでくれた記憶はない。むしろ常に騒動の中心にいた。

「いえ、女の子らしくなりました」

「……ん？」

思わず聞き返す。今彼女に程遠い単語を聞いた気がする。

「そこらへんにいる普通の女の子になりました。しかも笑顔までみせるようになり……」

結構な言われ方だが以前の弥生を思い浮かべると納得もいく。年に数度しか会わない自分ですらそれはないだろうと思ってしまう。

まして長年一緒にいた彼らはなおさらだろう。

「あやしい素振りは？」

龍牙の硬質な声に鍊魔も身内の顔から部下の顔に切り替えた。

「今のところありません。ですが常に誰かが一緒にいるようになっています」

龍牙は満足そうに頷く。

「もし奴らとつながりがあるようだったら、処分下さい」

「わかりました。では……」

「待ち下さい」

一礼して出ていこうとした鍊魔を龍牙は呼び止めた。引出しからファイルを取り出す。

「四剣琅、如月の復活を祝って一つ任務をあげよう」

その言葉に錬魔は眉間のしわをますます深くさせ、隊長を見返す。

「君たちの好きな族狩りだよ。獲物は最後の一匹昂乱、今は名を高村修二と変え、ある高校に潜伏している。君たちにはそこに学生として潜入してもらう。そして、奴を消せ」

錬魔は渡されたファイルにざっと目を通す。

「どうして俺達なんですか？ 上がいるでしょう」

「あの二人とは相性が悪いんだよ。両方逃げられた」

錬魔はその男の能力の欄に目を落とす。

「道理で、単独でいけば逃げられますね」

「そう、制服は癒慰を通じて渡るようになってから明日から動いてくれ」

「承知しました」

軽く一礼して錬魔は隊長室を後にした。その頭の中には高校と制服の二文字が回っている。

（制服が必要な場所ということは軍事施設か何かだろうか……）

だが今はそんなことよりもこの面倒な任務をどう彼らに話したも

のか、そちらの方が問題だった……。



第1章の13 族狩始動（後書き）

錬魔、三白眼に睨んできそうですね。

好みだけど友達になるまで時間がかかりそう。

## 第1章の14 悩ましげに美しく

廊下をつかつかと進みながら錬魔<sup>れんま</sup>は舌打ちをする。今回の任務は今までのようにはいかなないことがこの数日で分かった。獲物は隠密の歩が探っているにも関わらず、なかなか行方が分からない。

まだ高校にすら姿を現さなかった。その上今回の獲物は表の社会で生活している。

人目についてはいけない任務だけにこの状況が歯がゆくてしかたがない。

そして隠れ蓑には高校という物は実に効果的だった。人から情報が漏らされにくく、セキュリティも近年強化傾向にある。データ管理にも細心の注意が払ってあった。

鋭く舌打ちをし、目の前の扉を叩いた。

返事もまたず入り、戸口で立ち止まらずに隊長のいる机の近くまで歩み寄る。

「具合が悪くなった……と聞いたのですが？」

錬魔は龍牙を一瞥して何ら異常のないのに気付くと眉を吊り上げた。

「いや？ 私は健康そのものだよ？」

とにこやかに返す龍牙は完全に確信犯だ。

「……それで？ 俺を呼び出して何かあったんですか？」

錬魔ははあ、と大きく息を吐いて壁に寄り掛かった。

(知らせを受けて急いでやってきたというのに……)

「それを聞きたいのはこちらだよ。あれからいつごろに報告がないし、今までの君たちなら数日でかたをつけるから気になってね」

「来週にはかたをつけます」

「楽しみにしてるよ。ところで、弥生は元気かい？」

錬魔はすぐには答えず、ややあつてから堅い口調で答えた。

「やはりあれは弥生ではありません。あの弥生が人間と話をしました。しかも協力まで許しました」

龍牙はくつくつと笑って

「それはそれは、実に社交的になったものだね。いい変化じゃないか、時には他人に頼ることも必要だ」

とまともに取り合わなかった。

「あの弥生がです」

そんな態度が癪に障ったのか錬魔の声が一気に低くなり不機嫌が露わになる。

普段寡黙なゆえに彼の機嫌は空気で直接伝わり、体感温度が一度下がる。

龍牙はすつと笑いを引つ込めて背中を椅子に預けた。

「だが君はその眼で弥生を視たんだろ？ 君の眼は真実しか映さな

「いはずだ。違ったかい？」

「はい」

錬魔は視線を落として答えた。

「彼女を敵と見なすのは動きがでてからでも遅くはない。それまで君たちは高校生活を楽しみなさい。疑われずに潜入するにはそれらしくふるまうことを忘れてはいけないよ？ 君たちは一七歳なんだから」

龍牙は含み笑いを残して椅子から立ち上がった。そして壁際にある本棚から本を一冊取り出し、錬魔にわたす。

「なんですかこれは」

隊長室にはふさわしくない可愛らしい表紙に錬魔は疑わしい視線を龍牙に向けた。

「言っとくけど私のじゃないよ。学生としての生活を知るために役立つと思って借りたんだ」

「わかりました。零華にでも読ませます」

その本は錬魔の図体と不調和を来している。なまじ仏頂面なのでそれがより際立つのだ。

「また来ます」

錬魔はそう言い置いて、足早に出て行った。本部とは疎遠な如月

において出現度を上げている錬魔は隊内でも噂になりつつあった。彼の美貌は悩ましげに美しい。

錬魔ネットワークが形成されつつあり、本部に顔をだす度に隊員に群がられる日も近いだろう。

彼が足早にここを去る理由はそれかもしれないな、とやけに広く感じる部屋で龍牙はふと笑みを浮かべた。

## 第1章の15 高校生をエンジョイしよう

時を同じくして、学校では……。

「おはよ〜ってあれ？ 勇輝寝てんのか？」

遅れて歩が屋上が上がってきた。カーペットはスルーして勇輝を見下ろす。

その寝顔はつい顔をほころばせてしまうほど可愛かった。

「可愛い寝顔でしょ〜」

癒慰が勇輝のほおを突いた。柔らかく滑らかな肌。

だが勇輝は突かれても一向に起きる気配がない。

そして癒慰の手にカメラが握られていることから歩は既に勇輝が癒慰の毒牙にかかったことを察した。

「ま、普段から可愛いけどな」

「それもそうね」

歩は靴を脱いでストーブの傍に座った。手を近づけて温める。

「それで？ 何か掴めた？」

「全然だめ。尻尾をださねえ。さすが、最後まで生き残っただけはあるぜ」

「まだ動けねえのか」

秀斗はつまらなさそうにファイルを捲っている。昴乱の情報が載っているファイルだ。

「せっかく障壁も全部作ったのによ。これがどこぞの組長なら殴り込めばいいだけの話だったのに」

「少なくとも来週の理事会には顔を出すってことは掴めてんだ」

歩はぼやく秀斗を宥めた。

「理事長が住んでいる家も分からないのですか？」

「いや、それは分かったんだけど、もぬけの殻だった」

「用心深いこつた」

秀斗がファイルを零華に投げた。そしてそのまま寝ころがり体を伸ばす。

「けどそいつらが抜けてからもう四十年も経つし、人間の寿命なんて短けえんだからほっとけばいいのによ」

「なんていつても能力者だからな、野放しにしとくわけにはいかないんだとさ」

「毒には毒をつてやつかよ」

「ほんと人間がやることは今も昔も変わらないよね」

「……そんな老人のようなこと言うなよ」

優雅にお茶を嗜んでいる癒慰が縁側のおばあちゃんに見えてくる。

「ほんと、若いころはよかったわ」

と冗談にも答えてくれる癒慰に歩は親しみやすさを感じていた。噂ではかなり突拍子もないことがささやかかれていたが会ってみればなんてこともない、普通の高校生だ。

突然秀斗があつと呟いて体を起こした。

そしてくいくいと歩に指でこっちに来るように合図する。

「何？」

歩が秀斗の傍に寄ると、秀斗は歩の肩に手を回し、声をひそめた。

「ところでよ、お前んとこのリーダーとはどんくらいで連絡とってんだ？」

なぜそんなことを小声で訊くのかと疑問に思いつつ

「一カ月ごとだけど……？」

と歩は答えた。

「歩、頼みがある。奴には俺らのこと一切報告すんな」

ずっと秀斗の声が低くなって凄味が増す。

「え、でも任務が……」



「今奴に知られるとややこしくなんだよ。一生言つなとは言わねえから、ひとまず伏せとけ」

歩は横から流れ込む威圧に顔を向けられずにいた。じんわりと背中  
中に汗を感じる。

「でもリーダーは独自に情報網もってるし……」

「言ったら殺す」

最後はもう頼みではなく脅しだ。

「……わかった」

歩にはほとんど合わないリーダーよりも今隣にいる秀斗の方が恐  
ろしかった。

「んで、今奴はどこに潜ってた？」

「たぶんFBI」

「よし、じゃあ当分こつちには戻らねえな」

よかったよかったと秀斗は歩を解放して満足そうに頷いた。  
その時、寒空にチャイム音が響いた。

「あ、おい勇輝。起きろ」

と歩は勇輝を揺さぶる。

「ん？」

少し体を起こした勇輝はまだ夢うつつの状態で歩を見上げた。

「次、体育だぜ」

その一言で勇輝は飛び起きた。

「まじ？ てか俺寝てた？」

「不良なのに体育は真面目に受けるの？」

癒慰が可笑しそうに訊いた。

「不良だから受けるんだ。喧嘩するにも体力は必要だろ？」

勇輝は靴を履きながら答えるときくりと秀斗の方を向いた。

「そつだ。秀斗もこいよ」

暇な秀斗は体を起して弥生へと視線を移した。

「だってよ。弥生はどーする？」

「……やらないけど見てる」

フェンスごしの景色を見ていた弥生はすくりと立ち上がった。

「じゃあ行いっせー」

と、四人はグラウンドへと階段を下りて行った。

残された静けさの中、カップにお茶を注ぐ音だけが響く。

「あら?」

しばらくして、零華が何かに気づいたように戸口の方に顔を向けた。

ほどなく戸が開き、長身の影が現れた。

「錬魔おかえり」

錬魔は戸口で首を巡らせると堅い口を開いた。

「弥生と秀斗は?」

「体育の授業に出るってさ」

その言葉に錬魔は眉間の皺をますます深くした。

「……あの弥生が?」

「見てるだけって言ってましたけど」

「ほんと錬魔君って心配症よね」

癒慰が苦笑交じりにお茶を錬魔に勧めた。

錬魔はカーペットの上に腰を下ろし、カップを受け取った。

「隊長から高校生らしく過ごせと言われた。零華、これが研究書らしい」

そして手を伸ばして零華へ本を手渡す。

零華はそれをまじまじと見つめ、ページを繰り出した。

「私、十分高校生らしくしてるつもりなんだけどな」

「まあ、癒慰ちゃんはともかく、もう少し高校生を研究しなくてはいいですね。幾度も勇輝君に怪訝そうな顔をされてしまいましたから」

「俺は早く任務を終えて戻りたい。こんな人が多い場所は苦手だ」

低い声で呟いた錬魔は静かに口元にカップを運んだ。

「え〜楽しいじゃん!」

「それはお前と秀斗ぐらいだ」

「ですが実際、少し引きこもりすぎましたね。人の暮らしが様変わりしてますし」

零華は会話に入りつつもその手は素早くページを繰っている。

「今はコミュニケーションの時代だよ!」

耳元で抗議を受けた錬魔は渋い顔で頷いた。

「わかったから。お前はそのコミュニケーションとやらを存分に試

していい」

言い終わると、鍊魔は残りのお茶を一気に喉に流しこんだ。

## 第1章の15 高校生をエンジョイしよう(後書き)

なんとなくですが、勇輝がいる話は軽めのノリでサブタイトルを  
いない話は固めとなっています。

あまり、サブと内容は関係ないです。

その場の思いつきですので

## 第1章の16 高校生の恋愛事情

翌日、勇輝が屋上に上がってみると、いつも見える景色が見えなくて固まった。

目の前は緑。それはテント。

なぜ屋上に？ 今夏じゃないよな？ とかいう疑問はもう浮かばない。

(ああ、とうとう屋根が出来た……)

しかもそのテントはなかなか大きく、骨組みもしっかりしている。どこか体育大会の本部席を思わせる光景だ。勇輝は入口を探してテントの周りを歩いた。

「おはよ〜」

布を捲って中に入ると、意外と広がった。そして何よりも暖かい。

「なんか秘密基地っぽいな」

もちろんカーペットとストーブがあり、電気も十分な明るさを提供している。

「なかなか快適だろ。朝の七時から組み立ててたんだぜ。感謝しろよ」

秀斗はアイスを片手にストーブにあたっていた。

(甘い……アイスはこたつで食うもんだ!)

感覚が麻痺して変なところに過敏になる。

「ほんと……お前らつてすごい」

勇輝はカーペットの端で靴を脱ぐといそいそとストーブにあたった。

(ああ……指先が解凍されていく)

勇輝がほっこり一息ついていると、癒慰が待ちかねていた様子で近寄って来た。

「あのね勇輝君、勇輝君つて好きな人いる?」

ストレートの暴れ球が勇輝の脳天を直撃した。

今勇輝が何かを飲んでいたら間違いないと噴き出していただろう。

「は、はい?」

癒慰は期待に満ちた眼差しを勇輝に注いでいる。

「いや、え?」

(話の流れとか全くなしで朝一番からソレ?)

「何? 勇輝、お前好きな奴いんのか?」

秀斗も瞳を輝かせて、勇輝の答えを待つ。



「……癒慰ちゃん、突然聞くのは無礼ですよ」

「だって〜気になるじゃない」

零華が窘めるが反省の色など微塵もない。

「仕方ありませんね。勇輝君、前に私たちが高校に通うのは初めてということとは話しましたよね」

勇輝はこくこくと頷く。てんぱった頭は情報を求めている。

「それで、何分高校生というのが分からなかったので研究書を頂いたのですが」

「そこにね、高校生は恋愛をするって書いてあったから、これは勇輝君に聞かなきゃって」

零華の言葉をついで癒慰がにこやかに説明した。

「で、実際のところどうなんだよ」

勇輝は秀斗に肘でつつかれてようやく頭を働かすことに成功した。

(好きな人……か)

問われれば、すぐに顔が浮かぶ。声も、今も隣にいるような錯覚さえ覚えるほどに鮮明に……。

「いたよ」

勇輝はぼつりとそう呟いた。

(そう、いた。大好きな、大好きな恋人が)

「きゃくじゃあ彼女は？」

「いた」

喜怒哀楽の激しい天使だった。

つまらなかった毎日を楽しくしてくれた女の子。

「え、いた……？」

「そう、消えたんだ。だからもういない」

勇輝の声は寂しさも辛さも含んでいなかったが、無機質なその声  
が逆に虚しさと呼んだ。

「……ごめん」

癒慰の謝罪の声に勇輝は慌てて顔を上げた。

「別に癒慰が謝るようなことじゃないって」

「でも勇輝君……」

「勇輝」

割って入ってきた声に勇輝は驚いてそちらへ顔を向ける。

弥生はテントの隅に座っていた。そしてその灰色の瞳を真っ直ぐと勇輝に向けた。

「その女の子に、会いたいとは思わないの？」

弥生の言葉は勇輝の心を強く揺さぶった。

（会いたい？ 会いたい、会いたい……でも）

勇輝はふっ、と息を吐いた。もう、答えは出ていた。

「……もう、会えないんだ。それだけは分かる」

勇輝は視線をストーブに戻した。

だが勇輝は眼の前の火は見ておらず、どこか遠くを見ているようだった。

それを見て弥生はついと目を伏せ、髪を指に絡めた。

「そう……」

「勇輝、彼女の名を聞いてもいいか？」

珍しいことに、鍊魔までが話に入ってきた。

「彩、桜田彩だ」

その名を口にした瞬間、懐かしい、甘い記憶が蘇る。

「可愛い名前だね」

「ああ、可愛い奴だったよ」

(可愛い、可愛い……彩……)

ストーブの炎の中に、彩の姿が揺れたようだった……。

第1章の16 高校生の恋愛事情（後書き）

ちよっとしんみり

だけど屋上にはテント

彼らの常識力のなさはこんなものじゃありません。

彼らの中で一番の常識人はやはり零華でしょうか…？

第1章の17 青春はピザの味！？（前書き）

多くの方に読んでいただき感謝です。

嬉しさでゆらゆら揺れながらの投稿です。

## 第1章の17 青春はピザの味!?

突かれるような沈黙の中、我慢の限界を迎えた癒慰ゆいが立ちあがった。

「も〜この空気をやめ！ さ、落ち込んだ時には食べるのが一番よ！  
勇輝君何食べたい？」

「え？」

急に現実に戻された勇輝は即座の対応が出来ない。

「ピザね！」

癒慰は勇輝の返答も聞かずに決め、零華れいかの持つ本を取り上げた。  
そしてページを繰りながら受話器を手を取った。その風景はどこかカラオケを思い出す。

「電話……布にかかっているけど、線どこから引いてんの？」

「ん？ その電柱」

秀斗ひゅうとはさも当然とそう答えた。

「あ〜なるほど」

あれ本当にできるんだ……と映画のワンシーンが浮かぶ。  
雰囲気雰囲気に吞まれ、うっかり納得してしまった勇輝であった。

「あ、もしもし。ミックスピザと照り焼きとシーフードください…  
…大手門高校です」

「え、ここに出前させる気？」

「まじ？ 来てくれんの？」

「出前なんて初めてですね」

「便利だな……」

勇輝が戸惑う一方、常識のない人々は各々の反応を見せる。

「はい、お願いしまーす」

くるりと振り向いた癒慰の顔は達成感に満ちていた。  
その顔に錬魔れんまが疑問を投げかける。

「それで、ピザとはなんだ？」

驚愕。ピザを知らない高校生。

「なんか知らないけど、高校生が頼んでるから」

「ちょっと癒慰、その本貸して」

勇輝が研究書と呼ばれる本を受け取る。

その本はまさにライトノベルと呼ばれるものだった。そしてあおりを見ただけで分かる。ベタベタの学園ものだ。



(確かにこれなら恋愛もあるし、ピザも食べるよな……)

「てかこんなんで研究しても意味ないと思うんだけど」

「そうなの？」

「悪意ゼロで訊き返す癒慰に勇輝は口が半開きになる。

「……高校生が知りたいんなら俺が教えるから」

「本当？」

「おう、高校生の粋な遊び、教えてやるぜ！」

と、そこに突然新たな声が割って入ってきた。

「歩？」

入口へと全員が視線を移すと、布がばさりと捲られ歩が入ってきた。

「森本歩遅れて参上！ 飯の臭いを嗅ぎつけたぜ！」

「おはよ〜遅かったけど、また寝坊？」

勇輝は片手を上げて歩に挨拶をした。

「おう、そのせいで朝抜き。でも来て良かった〜さっそく飯にありつけるなんてさ」

「朝からピザ食うのかよ」

秀斗が呆れた顔を歩に向けた。

「俺全然ヘーキ」

「ねえ、校門に出ておいた方がいいんじゃない？」

弥生が至極まともな意見を述べた。配達員も屋上まで届けにくいだろう。

「そうだね。じゃあ零華ちゃん行こうよ！」

「どうして私なのですか？」

しづる零華を癒慰は手を引いて無理やり立たせる。

「食べたいでしょ？ 青春のピザ！」

「え、ピザってそんなに青春？」

勇輝の小さな疑問を無視して癒慰は零華を連れてテントから出て行った。

「みんなで困って食うのが青春なんじゃねえの？」

秀斗は癒慰が開いていたページに目を通して苦笑する。

「へ〜」

そして届けられた。ピザ三種は十時のおやつとして七人のお腹に収められた……。

第1章の17 青春はピザの味！？（後書き）

癒慰 「ピザおいしかったね〜」

零華 「しかし配達のお兄さんは気まずそうでしたよ?」

作者 「……お金、持ってたの?」

癒慰 「勇輝君が持ってたよ」

作者 「かわいそうに……」

零華 「そつえば貴女、テスト週間なのでは?」

作者 「………言わないでください。今から勉強しますから」

第1章の18 嵐の前の静けさ(前書き)

やっと折り返し地点到達です。

読者の皆様へ感謝しつつ、がんばってコメディーターに……

## 第1章の18 嵐の前の静けさ

時は刻々と過ぎ、勇輝は転校生との距離をだいぶ縮めていた。秀斗と癒慰ゆいを連れて街を歩き回ったこともある。街ゆく人々は漏れなく振り返り、その上喧嘩けんかを売られた。

もちろん大勝利を収めたが……。

そして、理事長が学校へやってくる日が訪れた。

「やっとか」

朝の屋上で、鍊魔がフェンス越しに下に視線を投げかけていた。

「待たせやがって」

秀斗はフェンスの上に腰を下ろして校門を見ていた。すでに生徒がちらほらと校門をくぐっている。

そこを獲物が通った時から戦いが始まる。

「障壁しょうへきは万全？」

「当たり前えだろ。誰の目にも入らねえよ」

弥生の問いに秀斗は胸を張って答える。

「じゃあ、手順道理に、奴を殺すよ」

朝日を受けて輝く銀系の髪は不敵に笑う弥生をさらに美しく見せ

た。

「弥生……やっぱりお前」

「あ、勇輝君が来るわ」

秀斗の言葉を遮って癒慰が扉に注意を向けた。  
かすかだが足音が聞こえる。

「隠れるよ」

弥生の掛け声と共に、彼らはその場から忽然と姿を消した。

「おはよ〜って、誰もいないし」

テントの中に入った勇輝は無人の空間を前に思わず呟いた。

「……みんなそろって遅刻？」

勇輝が来たのは遅刻ギリギリ、今まで全員が遅刻するということはなかった。

(……仕方ない、久しぶりに教室に行くか)

屋上に一人ぼっちというのはなかなか寂しいものがある。  
勇輝はつまらなさそうにとぼとぼ階段を下りて行った。

「……なんか可哀想よね」

「だが勇輝ともこの任務が終われば関係も無くなる。慣れ合う必要はない」

「残念だよな」

勇輝が去ると、彼らはどこからともなく現れた。

「もう少し、高校生について教えて頂きたかったですね」

「そうね……もう少し……」

弥生の言葉はチャイムでかき消え、ただ寂しげな響きだけがその場に残った。

「さ、族狩りを始めよう」

弥生の声で彼らは互いに頷き合い四方に散った。後はただ、獲物がかかるのを待つのみ……。



第1章の18 嵐の前の静けさ（後書き）

勇輝 「これ、俺当分でない感じですか？」

作者 「ひ、み、つ」

## 第1章の19 不敵な笑み（前書き）

自分でも予想外の割りこまれた感。

何勝手に動いてくれてるんですか？

そしてタイトル、もう少しいいのが決まったら書き換えます。

## 第1章の19 不敵な笑み

町中のビル群の一角、最上階の部屋では龍牙が渋い顔で椅子に深く身を埋めていた。

そして、重厚感溢れる机には一人の男が腰をかけている。その男は優男風でにこやかに龍牙に話しかけていた。

「ひどいじゃないですか隊長。こんなおもしろいことを僕に隠しておくなんて」

その男は胸ポケットから写真を取り出すと龍牙に突き出した。そこには制服姿の五人の男女が写っている。

「まさか弥生が帰ってきたなんてね。しかも死堅牢全員が高校生…爆笑物じゃないですか」

「美月…仕事はどうした」

低い声で龍牙が呻く。

「終わらせましたよ。馬鹿なヤクザ連中は、向こう三カ月は病院から出られません」

美月は写真をひらひらと遊ばせてから胸ポケットにしまった。

「それは御苦労だったね……」

労いつつ、龍牙は心の中で溜息をついた。

極力弥生のは他の隊員の耳には入れなくなかった。弥生自身

に疑いが残る上、知れば必ずちよっかいを出しに行く者が現れるからだ。

そう、まさしく目の前の人物。

「彼らにも、だいぶ会ってないですね。みんな大きくなつたかな？あ、でもあの年で高校生はないですよね。」

美月は写真に目を落しながら笑いをかみ殺していた。

「君よりはだいぶましだから安心しなさい」

龍牙は皮肉めいた口ぶりでそう返すと葉巻に手を伸ばし、火をつけた。

「僕だつてまだ高校生に見えますよ。それにしても、こいつらが動いたつてことは昂乱ですか？」

「ああ、君が唯一失敗した任務だよ」

「……あれは油断したんです。それにあの能力は反則ですよ！」

龍牙はふーと煙を吐き出し、煙の行く先を見つめた。

煙の先に、昔部下だった男を思い出す。

龍牙が直々に彼のその能力を見込み隊に入れ、彼に様々な力を与えて強くした男だった。

彼は小隊を率いて戦乱を戦い、数々の武勲を上げ、隊の二番手にまで上り詰めた。

そして、裏切った。

裏切りの夜、隊舎には血の匂いが充満し、殺された隊員は五十名

を超えた。

彼は、志を共にする能力者を率いて隊を抜けた。彼と共に隊を抜けた族は九名、いずれもすぐに肅清されたが彼だけは生き残った。幾人もの隊員を退け、その能力を奪い取ってさらに強くなった。

「彼は強くなり続ける。これ以上強大な力をつければ世界を滅ぼしかねない」

「けど、あいつらで勝てるんですか？ 昂乱は僕ら二人の能力も持つてるんですよ？」

龍牙は面白そうに美月の横顔を見た。その視線に気がついた美月は不満そうに見返す。

「君が彼らの心配をするとはどういう風の吹きまわしだい？」

「ふん、僕はあいつらの心配をしたんじゃない。貴重な実験体の心配をしたんだ。昂乱は数少ない能力者の一人ですからね」

「君はまだそんな研究をしてるのかい」

美月は人間と能力との関係について調べるのを趣味としていた。今までも、生け捕りにされた族は全て美月の手元へと運ばれている。彼らの生死がどうなったかは龍牙も知らなかった。

「僕だけじゃありません。研究員たちが熱心にやってくれてるんですよ」

「だが彼らは獲物を確実に殺す。君の所にくることには彼はもう死

体だろう」

龍牙は長い煙を吐き出すと、葉巻を灰皿に押し付けた。

「そんなことはさせませんよ。いざとなればこの僕が出向いてでも」

「美月、君は今日一日事務をしなさい」

勢いづく美月の言葉を遮って、龍牙は引出しから書類の束を引き抜くと美月に押し付けた。

今日は彼らが動く日、美月に邪魔させるわけにはいかない

「え〜ひどいですよ隊長！」

「文句を言わずに働きなさい」

ぴしゃりと龍牙が言い放つと美月はその書類を受け取り、しぶしぶ机から降りた。

そのまま部屋のすみに備え付けられた小さな机に陣取り不満と書かれた顔で書類に目を通していく。

「それが出来たらちゃんとお褒美をあげるから」

龍牙も残りの書類を机の上に広げ、判を押ししていく。

「昂乱がいいです」

「鮮度が保たれてたらね」

ふと龍牙は手を止めて窓の外に目を向けた。

日はだいぶ高くなり、時折強く吹く風はこれから来る嵐を呼んでいるようだ。その風に紛れて霸動が伝わる。

(……始まったかな)

龍牙は視線を戻し、再び書類に朱の印をつけていった……。

## 第1章の19 不敵な笑み（後書き）

作者 「美月さん、あなたはもつと後での出演予定でしたよね」

美月 「ふっ、この僕がお前こときの予定にしたがうわけないだろう」

作者 「出番減らしてやる」

美月 「無駄さ。さて、読者の諸君の中には気づいたものもいるかもしれないが“しけんろう”という名称は二つある。一つは階級としての“四剣琅”、もう一つは通り名としての死堅牢だ」

作者 「このことについては本文中でいつか説明が入ります。だぶん」

美月 「もしもの時はこの僕が直々に教えてやるう。では、次の僕の登場をお楽しみに」



第1章の20 魔術で彩れ(前書き)

戦いって区切るのが難しい。

## 第1章の20 魔術で彩れ

一時間目が始まって少し経ったころ、一台の車が校門から入ってきた。

真っ黒な車が玄関に横付けされ、運転手が後部座席のドアを開ける。

そこから出てきた初老の男は、足が悪いのか歩行補助用の杖をつき、顔つきは厳しく、そして右手には革の手袋を嵌めていた。

報告書通りの姿、昂乱だ。

「来たぜ」

屋上で見張っていた秀斗が全神経を周囲に集中させた。見えない覇動が空気を伝わり辺りを包み込んでいく。昂乱はかすかな覇動に気づき、弾かれたように上を見上げた。

「守護障壁、完了」

「それじゃあ、狩りを始めよう」

弥生の一言で皆が四方に散った。

秀斗はポケットから拳銃を取り出し、校舎の壁を駆け降りた。

跳躍した瞬間、昂乱に向け引き金を引く。しかし、澄んだ破裂音は、硬質の物との衝突音にかき消された。

昂乱は突然の襲撃にも眉一つ動かさずに、不気味な笑みを浮かべていた。

「ど〜も〜。龍牙隊暗殺専門の死堅牢、如月で〜す」

秀斗は、銃は効かないと判断したのか早々に拳銃をしまっ。

「四剣琅……ああ、死堅牢の如月か。四番ごときがわしに勝てると思っっているのか？ 青いな」

「私たちを四番手だからって、甘く見ないでくれる？」

背後から投げかけられた声に昂乱が振り向くと、砂の波が目前に迫っていた。

「ふっ、無駄なことを」

砂は昂乱を飲み込み、収縮する。球形にとどまったと見えた次の瞬間、それは弾け飛んだ。

「土か」

昂乱は検分するような目つきで癒慰を上から下まで見た。その眼にはなんの危機感もない。

彼は、新たな能力をただ吟味していた。

「大地って言うてくれる？ 秀斗君、避けてね！」

癒慰は大きく足を振り上げると地面へ踵落としを喰らわせる。振り下ろされた所の地面には亀裂が入り、それは真っ直ぐ昂乱に向かう。

「みかけによらず。ずいぶん荒い技を使う」

「昂乱は持っていた杖で軽く地面を突いた。するとこちらからも亀裂が入り、衝突して地割れを引き起こした。」

「ふうん。貴方も大地の能力を？」

「ふ、わしのはただ気を地面に流しこんだだけさ。だから……貴様の能力、貰うぞ」

「昂乱は不敵な笑みを浮かべて、右手の皮手袋を外した。その瞬間、癒慰の視界から昂乱は消えた。」

「まずい！ 癒慰、後ろだ！」

「秀斗が癒慰に叫ぶのと癒慰が危険を察知して横に飛び退くのはほぼ同じ。」

「だが、昂乱の突き上げる右手は癒慰の首筋をかすった。」

「やられた！」

「あんた全然足悪くなんてないじゃない！」

「癒慰ちゃん！ 避けて！」

「その声に癒慰が飛び退くと、そこを水と炎の柱が過ぎ去った。二つは昂乱の結界に跳ね返り消滅する。」

「未熟者が」

昂乱が杖で地面を一度つくくと、砂がうねりを伴って零華と鍊魔に襲いかかった。

二人は横に飛び退いて避ける。

「土……癒慰の能力か！」

鍊魔は右手を昂乱へと伸ばし、炎を放った。

「無駄だと言っておるのに……わしの結界はそう簡単には破れんよ」

「しかし、どんな結界にも限界はあります」

零華は無数の氷の刃を出現させ、それらを一斉に昂乱へと浴びせた。それに癒慰も砂を針状に固めて放つ。

三方向からの一斉攻撃に結界が少し揺らぎ、昂乱が片眉をあげた。そして杖を持つ手にぐつと力を入れた。昂乱の足もとの土が盛り上がり、壁を形成する。

彼らの術は全てその壁に吸収された。

「ちよつと私の能力勝手に使わないでよ！」

癒慰は怒りをこめてそう叫んだ。

それと同時に昂乱の周りの土が盛り上がり、鋭い突起となって昂乱を襲う。

次から次へと形成される凶器を昂乱は老人とは思えぬ脚力でかわしていた。

「あの速さ、間違いない二番手の方の能力ですね」

「もく何やつかないな能力奪われてんのよあの人は！」

「力まかせの攻撃など何にもならんわ」

昂乱は嘲笑を浮かべるとまたふつと視界から消えた。

「来るぞ！」

彼らは神経を集中させて昂乱の動きを探る。

鍊魔か、零華か、秀斗か……。

「鍊魔！ 後ろだ！」

秀斗が術を放とうとするより前に昂乱は鍊魔の後ろを取っていた。

「緩慢な……」

鍊魔は体にひねりを加えて飛び退いたが、その背後に回られ手を掴まれた。

「うぐっ……」

掴まれた瞬間に激痛が走った。己の力と昂乱の力がせめぎあって、骨まで溶けてしまいそうな熱さだ。

「どうだ？ 自分の炎に焼かれる気分は」

「氷結花！」  
ひよつげつか

「刃華乱舞！」  
じんからんぶ

氷の刃と花と刃が昂乱に叩きつけられる。  
昂乱は軽く舌打ちをし、錬魔から手を放すと飛び退いてそれを避けた。

「錬魔君！ 大丈夫ですか？」

錬魔は手形がくつきりをついた己の腕を見た。  
まだ少し煙が上っている。

「問題ない……っ、零華！」

顔を上げた錬魔の目に、零華の後ろに回り込んだ昂乱の姿が映った。

## 第1章の20 魔術で彩れ（後書き）

神名の裏話的なもの

かれこれ書き始めたのは5年前。今とは文体も違い、一人称で進めていたりしている……。読み返すとめっちゃくちゃです。はずかしい。

昂乱もいませんでした。

没ネタでは転校生と勇輝は学校で生徒会と戦います。やくざがからんで命をかけたかくれんぼを始めちゃってます。

しかし！ ふと気がついた。これ……人多くね？

かき分けができず、結局何がしたいのかわからない。しかも話が甘い。世の中が甘すぎた。

そうして泣く泣く全面改定。だいぶ変わりました。

魔術もそんなに出てこなかったしね……。

よってパソコンには神の名の下に改と書かれています。

暴露話はこの辺で、また私の小説を読みに来てくださればうれしいです。



**第1章の21 強き者は遅れて登場し(前書き)**

一日のPVアクセスが200を超えました。

パソコンの前で3秒停止

1、2、3

調子にのって、続きを更新です。

たくさん読者の皆様、ありがとうございます。

## 第1章の21 強き者は遅れて登場し

「千変万化の水、よい能力だ」

奪われる。

そう零華は覚悟した。不覚にも身が強張って動くことができない。

「させるかよ！」

しかし昂乱の右手は零華に触れる瞬間に弾かれた。

昂乱がゆっくりと頭を秀斗へと向ける。無言で杖で地面をつくくと、砂と炎の龍が飛び出し牙を剥いた。

「なかなかセンスのあるもん出してくるじゃねえか！」

二頭の龍はその大きな口で秀斗を飲み込もうと突進する。それを秀斗は正面から受け止めた。

龍は噛み砕こうと牙を立てるが秀斗に触れることすらかなわない。

「そんなスツカスカの牙に俺の障壁が負けるかよ！」

秀斗は霸動で二頭を吹き飛ばすと昂乱に向きなおった。

「結界の能力者と言ったところか」

「やれんなら俺の首取ってみるよ」

秀斗の挑発に昂乱は片方の口角を上げて応えた。そして一気に間合いを詰めると手刀を叩きこんだ。

しかしそれも弾かれ、昂乱はその反動を飛び退いて殺す。  
再び間合いを詰めると今度は杖を突きだした。杖は障壁とぶつか  
って火花を散らしている。

「それ、ただの杖じゃねえな」

「ふっ、わしが十数年気を送り続けた代物だ。甘く見るなよ」

昂乱はさらに杖に力を込めたが、障壁はそれを押し返した。

「ムダムダ。俺の障壁は核爆弾だって防げるんだぜ？」

「くっくっく……」

「……何がおかしいんだよ」

昂乱は笑いをかみ殺しつつ一歩退くと、懐から数珠を取り出して  
右手に巻きつけた。

「青いな。結界破りは何も叩き壊すだけではないのだよ」

昂乱は一足飛びで踏み込み、手刀を繰り出した。

すると弾かれるはずの昂乱の手はすつと障壁を通り抜けて秀斗の  
首を掴みあげた。

「なっ、俺の、障壁を……」

秀斗は苦しそくに顔を歪めて昂乱を見下ろす。

全身の血が沸き立つ、力を持っていかれているのが感じ取れた。

(なんつー力だよ！)

「破魔の力を持った数珠だ。貴様の結界、貰いうける」

苦しげに呻いていた秀斗の口角が上がり首元の腕を掴んだ。

「なーんてな。やっと捕まえたぜ昂乱！」

異変を感じた昂乱は引こうするが、意に反して体は動かない。

「ざーん念でした。俺の能力は空間支配。人を見た目で判断すると痛い目にあうぜ？」

秀斗は逆の手でヘアバンドをくいっと上げた。その下には金色に光る環が嵌っており強い力を放っている。

「己……」

「それと、結界ってのは大抵何かを媒体にしなきゃ発動しねえ。一番扱いやすくて多いのが玉。今、お前の首にかかっているようなな！」

昂乱ははつとして自分の胸元に視線を落とした。先ほどまでの戦闘で服の下に隠してあったのが出てしまったらしい。

「どこのどいつから奪った術か知らねえが、安易すぎるってもんだぜー」

秀斗は昂乱の持つ玉に手を伸ばし、それに覇動をこめて粉碎した。その瞬間に昂乱を纏う結界もこなごなに碎け散る。

「今だ弥生！」

その声と共に弥生が上空に現れその手に持つ剣を振り下ろした。狙いは右腕、肩より下が寸断されるはずだったが、昂乱は杖で剣受けると薙ぎ払った。

弥生は後へ飛び退き、態勢を整える。

「銀髪に、西洋の剣……貴様か、わしの同士達を殺したのは」

昂乱は怒気を露わにして杖を後ろへ、秀斗へと突き上げた。突かれた先から衝撃が生まれ、爆風を巻き起こす。

秀斗は衝撃は防いだものの、爆風に煽あおられ後ろへと飛ばされた。

「痛っ」

校舎に体を打ちつける。

「「秀斗君！」」

慌てて癒慰と零華が秀斗へと駆け寄った。

弥生はそれを一瞥すると、再び昂乱に向きなおる。

「そうよ。そして、最後の族、昂乱。貴方も私が殺す」

「属性に縛られた魔術師如きが……同士達の無念。ここで晴らさせてもらおう」

昂乱が杖を弥生に向けると、先端から光が放たれた。

それを弥生は避けながら相手との間合いを詰める。

「さっきの若造は星か。使い勝手の悪い能力だな」

「人の能力にけちつけんじゃねえよ！」

壁に叩きつけられてもほぼ無傷な秀斗が特大の光の玉を昂乱へ投げる。

昂乱は跳躍して空中へと回避した。

「氷結花！」  
ひょうけっか

「氷如きにわしがやれるか」

昂乱は自分を炎で包み、刃の侵入を防ぐ。

そしてその炎を地面へと叩きつけ、氷の壁で直撃を避けた零華の背後へと回り込んだ。

（速い！）

零華は氷で身を守ろうとするが、それを昂乱の動きが上回る。

「お嬢さんは、家で本でも読んでいるといい」

昂乱は手刀を首筋へと叩きこみ、零華を気絶させた。

ほんの少し触れるだけ、能力を奪うにはそれだけで十分だった。

「零華から離れやがれくそじじい！」

秀斗が光をマシンガンのように連射する。

昂乱はそれを難なく避けていた。

「年齢詐称してんじゃねえよ！　じじいにはじじいの動き方ってのがあるだろーが！」

秀斗の怒声とともに弥生が昂乱に斬りかかる。

弥生の斬撃は寸での所で杖によって受けられたが、昂乱は剣圧に押され地面に叩きつけられた。

「そつひまごころ叢砂城の縛！」

昂乱が落ちたのを見計らって癒慰は術をかけ、植物の蔓で昂乱の動きを封じた。

「ちっ、植物ごときが」

「終わりよ、昂乱」

弥生が剣を振り上げ、その首筋へと振り下ろしたのと、彼らが新たな存在の気配に気づいたのはほぼ同時だった。

**第1章の21 強き者は遅れて登場し（後書き）**

区切り、いいかな？

これ以上やったら自分の首締めるんで……

秀斗 「俺の活躍期待してくれよな！」

作者 「勝手に入ってこないでください！」



第1章の22 さらに遅れて登場するのが主人公！（前書き）

お帰り主人公。

## 第1章の22 さらに遅れて登場するのが主人公！

「お前ら何してんだよ！」

怒声と共に現れた勇輝は弥生と昂乱「こっぴん」の間に割って入った。

「いくら不良だからってやっていいことと悪いことはあるだろ！私刑リンチなんて弱い奴のすることだ！」

とそこまで一呼吸で言い放ってから、違和感に気がついた。

「あれ？ なんかの撮影？」

弥生が持っているのは鉄パイプなんかではなく剣だ。  
そして風景がありえないほど変形している。まるで隕石でも落ちたかのように穴ぼこだ。

「勇輝君！ 早く校舎に戻って！」

「おい秀斗！ 校舎とは空間を切り離れたんじゃないやなかったのか！」

「切り離れたって！ 普通なら中の奴は出てこれねえし姿も見えねえよ！」

外野がうるたえている間に、昂乱は炎で蔓つるを焼き払った。

「勇輝！ 危ない！」

「え？」

弥生は勇輝の服を掴んで乱暴に横へと薙ぎ倒し、昂乱の鈍く光る杖を剣で防いだ。

だが受けきることができず、片口に鋭い痛みを感じた。奥歯をぐっと噛みしめ、弥生は剣を薙ぎ払う。

「痛つてえ！ 何すんだよ弥生！ つて、は？」

勢いよく立ちあがった勇輝は弥生の肩口が紅く染まっているのを見て慄然とした。

（あれ、血？ え、なんで？ なんで血が？ 血、チ？）

「しこみなんて、卑怯な手を使うのね」

「戦いなど、所詮そんなものだ」

そして昂乱は勇輝の背後へと回り込むと、その喉元に刃を添えた。

「勇輝！」

秀斗の悲痛な叫びが聞こえる。

「え？」

勇輝はゆっくりと、自分を捉えている相手を見る。恐怖で顔は引きつっていた。

（このじいさんは被害者じゃなかったっけ？ なんで今俺をハンテイングしてるわけ？）

唐突に命の危機に晒され、勇輝の頭が先に逝ってしまいそうだ。

「この小僧、貴様らが守るほどの者だ。相当の価値があるのだろうか」

昂乱は喉の奥で笑い、口角をにいと吊り上げた。

「さらばだ、四剣琅の諸君。よい能力を捧げてくれて感謝するよ」

すると、昂乱の背が盛り上がり、服は裂け、漆黒の翼が現れた。

「なんだよあれ！ あいつどっからあんな能力奪いやがった？」

昂乱は砂を巻き上げながら羽ばたいて上昇する。

弥生が攻撃の構えを見せるが、勇輝を盾に威嚇されれば黙って見ているよりほかない。

「秀！ 学校の敷地に、障壁は築いてあったよね！」

「ああ、でも力を奪われたせいでどうも強度が弱まってやがる……もたねえかも」

その言葉のとおり、昂乱は障壁を突き破って出て行った。

一つ二つと散ってくる羽の中、弥生は激情に任せて剣を地面に突き刺した。

第1章の22 さらに遅れて登場するのが主人公！（後書き）

グッバイ主人公。

勇輝 「ちよつと、俺久し振りに出てきて即囚われの身ですか？」

作者 「お約束のね」

勇輝 「……俺って主人公だよな？」

### 第1章の23 空を自由に飛びたいな

正直、あいつらのいない授業なんてつまらなかった。だから何気なく外の景色に目を向けたんだ。

もしかしたらあいつらが登校してこないかな〜とか思いながら。

だが、俺の目に映ったのは違う光景だった。

校門へと続く道には、確かにあいつらがいたが、穏やかに登校という風には見えない。

しかも一人の老人を取り囲んでいるようだ。そこまで気づいた俺は教室を飛び出した。

私刑<sup>リンチ</sup>なんて許さない！

そして、今俺は、空を飛んでいる……。

勇輝はなんとかこの危機を乗り越えようここに至る経緯を思い出してみた。

（おかしいだろこれ。 だって俺、このじいさんを助けようと思っ  
て出っただのに、何で逆に捕まってるわけ？ しかも、なんで羽生  
えてんだ？）

もしかしたらこれはなんかの撮影でワイヤーとかあるのかも、と  
淡い期待を抱いたが、そんなものは何  
かを突き破ったあたりからなくなっていた。

（そりゃ、空を飛びたいとか思ったことはあるよ。空を飛ぶなんて  
子供の夢の定番じゃないか。

俺だって、幼稚園のころはじいちゃんの作ってくれた竹トンボに夢を描いたよ。

でも、現実で起こるわけないってわかって俺の夢は散ったのに……)

勇輝の頭はぐるぐる回る。酔ったのか気持も悪い。

(しかもこんな捕獲された状態で飛びたくなんてなかった！やばいよこれ、俺絶対食われるって、さながら鷲に掴まれた兔だって！巢に持ち帰られて子供に分けられるって！)

もう自分でも意味の分からないことに頭を回転させていると、少しずつ高度が下がっていることに気がついた。

(まじで？もう巢？ え、まだ心の準備が……)

「なんでこんなことになったんだよ！」

学校では、障壁に空いた穴を見上げながら、秀斗が悪態をついていた。

ひとまず気絶してしまった零華を寝かし、今後の行動を話し合っていたのだ。

「まさか勇輝君を持っていかれるなんて……」

「おい！ さつさと助けにいくぞ！」

駆け出した秀斗の行く手に錬魔<sup>れんま</sup>が立ちはだかる。

「お前、あいつの本陣に乗り込むつもりか」

「決まってるんだろ！」

「忘れたのか！ あいつの本陣には奴の部下が何百といるんだぞ」

錬魔は珍しく声を荒げた。その顔には怒りと焦燥が滲み出ている。彼自身、この状況に戸惑っているのだ。

「そんなこと知るかよ！今なら奴の気を追って本陣が搦めんだ！」

「何故……人間相手にそこまでする。あいつが勝手に巻き込まれただけだろ」

「こんな時に人間がどうか言ってるじゃねえよ！」

秀斗と錬魔が互いに睨みあっている隣で、弥生は静かに地面に刺さった剣を抜いた。

「確かに、勝手に出てきて巻き込まれたのは勇輝よ。でも、巻き込ませたのは私たち……あの時一撃で仕留められなかった私にも責任はある……助けに行かないと」

「弥生……」

秀斗は呆然と弥生を見つめる。それは他の二人も同じだった。

「……わかった。お前がそう言うなら俺は反対しない」



鍊魔は苦々しい顔で秀斗に背を向けた。

(弥生が、人間を助ける……だと?)

「私も、行かせていただきます」

「零華ちゃん！」

零華の傍に付き添っていた癒慰ゆいが嬉しさに声を上げた。

「もう、いいのか」

鍊魔が零華の顔色を見て、状態を把握する。  
特に問題はなさそうだった。

「はい。力も少ししか奪われませんでしたし、戦えます」

零華は体を起こし、怪我の具合を確認する。外傷は特になく、  
いて言えば制服がかなり汚れた。

「癒慰、昂乱の本陣は掴める？」

「ちょっと待ってね」

そう言うと癒慰は神経を集中させて辺りを探る。癒慰は彼らの中  
で一番能力を感知することに長けていた。昂乱は能力を使っ  
たまま  
で移動した。そのおかげで気を追うのは容易い。

「弥生、怪我を見せる。治す」

「うん。ありがとう」

鍊魔は一瞬虚を突かれたような顔をしたが、すぐに普段の無表情に戻って弥生の傷を塞いだ。

鍊魔が使う魔術は治癒。使えるものは数少ない貴重な術だ。

「何度も言うが、俺の力は自己治癒力を高めるだけだからな。無茶をするとまた開くぞ」

「わかってるよ」

弥生は頷くと肩に手を当てた、すっかり傷は無くなり、破けた服からは白い肌がのぞいている。

「捕らえた！ 町はずれに空間が一つ隣接してるの、そこに入ったみたい」

「ありがとう癒慰。じゃあ、勇輝を助けに行くよ」

彼らは町の外れを目指して、学校を後にした。

第1章の23 空を自由に飛びたいな（後書き）

作者 「空を飛んだ感想は？」

勇輝 「なんかあれ、UFOキャッチャーの景品になった気分だった」

## 第1章の24 医者〜！ 精神科医と外科医はいませんか〜！

勇輝は未だに自分が見たものが信じられなかった。昂乱じゆうらんは町のはずれまで飛んでいくと、突然止まり、空間を刀で突き刺した。

何もなかった、何もなかったはずなのに、次の瞬間、大口を開けて二人を飲み込んだ。

そしてそこにある古ビルに降り立ち今に至る。

勇輝は椅子に座らされ、ごく丁寧に手足を縛られている。あれほど無抵抗だったのに、だ。

そして捕獲者と一対一で向き合っている。

勇輝は不良の称号を掲げる男、捕まったことの一度や二度ある。ついでに金属バットや鉄パイプで滅多打ち、なんてことも多々あった。

しかし今日の前の敵の得物は鉄パイプなんて可愛いものではなかった。真剣。しこみ杖というやつだ。

（あゝあれがしこみかあ初めて見るな〜）

と脳の半分が現実逃避し、逃げきれなかったもう半分はその刀身に付着している血から離れられなかった。

（俺のせいだよな。俺が割り込んだから弥生はかばって怪我したんだ）

まだ乾ききっておらず、光を反射してぬらりと光る血にますます

自責の念に駆られた。

昂乱は刀身を自分の口元へと寄せると、その身に舌を添わせた。それを見た瞬間、勇輝はぞっと全身の毛が逆立った気がした。

(なんでこいつを助けようなんて思ったんだよ俺！ いかれてる！  
このじいさんまじでやばい！)

昂乱は血を舐め取り、味わい、それを喉へと降下させた。

「ああ、力が漲ってくる」

(やばいやばいやばい！ 俺もやられる！ じわじわいたぶられて血を吸われちまう！)

驚愕し、脅えの色を見せる勇輝に昂乱は満悦の笑みを見せた。

「くっくっく。貴様らは知らなかったのだろう。わしは血からも能力を奪うことができるのだよ」

「の、能力ってなんだよ。つーかじいさん何？」

話しかけられたことで、勇輝は言語機能を解凍することが出来た。疑問は次から次へと湧いてくる。

「奪うって何？ 誰から？ 何であいつらと闘ってたんだよ」

今度は昂乱が目を丸くする番だった。杖を壁に立てかけ、勇輝へと歩みよる。

「お前、まさか人間か？」

「人間以外何があるのさ」

昂乱はそこでやっと自身の思い違いに気がついた。

「まさか貴様。奴らの仲間ではないのか？」

「え？」

（仲間？ いや、確かに仲良くはしてるけど、主に秀斗と癒慰だし、友達かもしれないけど仲間かどうかは……）

昂乱の端的な質問は逆に勇輝を悩ませた。

「たぶん、仲間ってのじゃないと思う」

なんか自分で言っただけで悲しくなる勇輝だ。

「では何故、あの女がお前を守った？」

「わかりません。俺に聞かないでください」

正直な言葉だった。むしろ勇輝が訊きたいほどだ。

「……まあいい。どっちにしろお前はわしの能力を見たのだ。生きては返さん」

（え、何それ！まさかのどっちに転んでも死にますパターン？ おーい！俺の現実カムバック！）

「まあ、助けに来たところを仕留めるのも悪くはない」

そう結論づけると昂乱は勇輝から離れ、刀の血を手元にあった布で拭いとった。

そして再び杖の先端をつけ、元の姿に戻す。

(助け？ 誰か助けに来てくれるかな……。来てくれるなら秀斗だろーな。……。来て、くれるかなあ)

十数分が立ち、勇輝がどんどん弱気になり始めた時鈍い音にっつられて顔を上げた。

どうやら昂乱が杖を落としたらしい。

「うぐっ」

その上片膝をついている。

「つて、え？ ちょっとじいさん大丈夫か？ なんか無理したんじや……。おい！ 聞こえてっか？」

さらに勇輝は異変に気付く、昂乱の左手から煙が上がっているのだ。

いや、あれは水蒸気といった方が正しい。

「じいさん！ 手から湯気出てるって！ その手袋外しなよ！」

苦痛に呻きながら、昂乱は手袋を剥ぎ取る。だが現れた左手はただのそれとは違った。

色は浅黒く変色し、その上血管が浮き出ている。

そして今、その血管が透けて、中で赤や青の光が暴れまわっているのが見えた。

「くっ、一度に5つ取りこんだからな。少し反動が大きいか」

「体に毒なことすんなよ！ その手、半分壊死してんじゃないのか？」

「ふん、敵の心配をするとは、殊勝なものだな」

「そんなこと言ってる場合じゃないって！ 医者！ 医者に行け！」

昂乱が右手を左手の上にかざすと、そこからとめどなく水が落ちてきた。

左手にかかったとたん、水蒸気へと変わり蒸発していく。

「……じいさん、人間じゃないのか？」

目の前で水を出現されたらもう信じるしかない。

「いや、人間だ。これほどの力を手に入れてもな」

魔術師には、なれないのだ。

「ってことは超能力者？」

昂乱が答えの代りに自嘲の笑みを浮かべると、爆音が轟いたのはほぼ同時だった。





**第1章の25 俺はヒーロだ！（前書き）**

PVアクセス3000突破です。ありがとうございます！

よろしければこれからも読んでいってください。

## 第1章の25 俺はヒーロだ！

爆音が聞こえると昂乱はさっと立ちあがり、手袋をはめ直す。

「来たか……」

「え、まじで？」

（来るのに爆音っておかしくね？）

「昂乱様、敵襲です。敵は死堅牢<sup>しけんろう</sup>。私たちが防いでみせます」

どこからか声が聞こえる。勇輝が頭を巡らすと壁にスピーカーを見つけた。

科学の力があることに安堵する。

ほっとした瞬間、窓の外で何か光った気がした。それが何か確かめる間もなく、窓ガラスは無残に飛び散る。

（え〜〜〜！）

勇輝は声にならない叫びをあげた。

先程の声から、助けは下から上がってくるものだと思い込んでいた。

しかしまさかの窓からのご登場。

（いやちょっと待て、ここビルの最上階じゃなかったっけ？）

侵入者は勇輝の前にふわりと着地した。銀の髪が揺れる。

「や、弥生？」

弥生はその声に振り返り、勇輝の無事を確認する。

「無事そうではよかった」

安堵の表情を見せると、その右手に握られていた剣で勇輝の縄を解いた。

「あ、ありがとう。って弥生こそ傷は大丈夫なのかよ」

「もう塞がったよ」

弥生は剣を構え直すと、昂乱と向き合う。

勇輝は壁際まで退いて、成り行きを見守ることにした。

「一人でここに来たか」

昂乱は再び杖をその手に持ち、弥生と対峙していた。

「みんなは下で大掃除中よ。貴方は、私の獲物だから」

「一人で、わしに勝てるん？」

「当たり前じゃない」

弥生が空を斬り上げた。そして次の瞬間、天井が吹き飛び、日の光が注ぎこんだ。

(剣、ただの剣なのに天井が吹っ飛んだ！)

「本当は、勇輝にだけはばれたくなかったんだけど……」

そう呟いて弥生は後の勇輝に目をやった。人間は未知の物を見ると、怯えて、拒絶をみせる。

「……か、かつけ」

弥生は少し目を見開いた。

その目には瞳を輝かせている勇輝が映っている。

(脅えないの?)

「……勇輝、下がってて、危ないから」

弥生は勇輝を下がらせると再び昂乱と向かい合った。昂乱は鞘を抜き去ると、にやりと笑った。

「本気というわけか。だが貴様の如き鈍足ではわしにはついてこれぬ」

弥生は空を見上げた。

天井の穴からは昼間の白い月がのぞいている。

「今夜は三日月ね」

「それがどうした?」

「足に自信があるのは貴方だけじゃないってことよ」

「昂乱がその場から掻き消えるようにいなくなると、弥生も消えた。」

「え？」

勇輝の目には二人は同時に消えたように見えた。

呆然としていると向かい側の壁が崩壊した。

「はああああ？」

そうこうしている内に横側の壁も崩壊して見通しが良くなる。

そしてその間には絶え間なく剣戟けんげきの音が届いた。

二人ともどこにいいのかは分からない。

勇輝の目には剣戟は光となって、ただそれだけが認識される。

「め、めちゃくちゃだ」

本能が身の危険を告げるが足が床に吸いついて動けない。

（朝は普通の朝だったよな。こんなアンビリーバボーな体験をするなんて朝の占いも言ってなかったし……。よし、切り替えていこう）

そう決心すると勇輝は眼を瞑った。

（ここは俺がいた世界じゃない。俺は異空間に飛ばされ、捕まった。ここは超能力と剣の世界。ベタな、わくわくの冒険が詰まった世界。俺はこの世界の主人公ヒーローなんだ！）

自己暗示発動。

勇輝が目を開けると、心なしか世界に希望が見えた気がした。

ここは俺の憧れたファンタジーの世界。  
とその瞬間、目の前で火花が散った。

銀色が目の端を掠め、弥生がそこにいたことが分かる。

剣と、超能力の……命のやりとり……が目の前で繰り広げられて  
いる。

「スットゥプ！ 戦い止めろ！ 平和！ 日本人の大好きな平和を  
この手に！」

いくらこの世界が剣と超能力で出来たって戦いが起こっていい  
はずがない。

昂乱が勇輝の視界に現れた。服が所々裂け、血が滲み出ている。  
昂乱が刀を斬り上げると弥生がそれを受けた。

「動きが見違えるほどじゃないか」

弥生は昂乱の刀を押し返して距離を取る。

「さすがに壊れたものを元に直す力は無くってね、あそこで本気だ  
したら学校壊れるから」

低く笑う昂乱は息が上がっている。

対する弥生は、息は整ってはいるが少し疲労の色が見えた。

「おい弥生！」

「氷結花」

弥生は放たれた氷の刃を交わし、左手を昂乱へと伸ばした。

その手から光が放たれ、昂乱を狙い撃ちする。昂乱が交わした後  
に大きな穴が開いてゆく。

少しでも触れればあの世行きだ。

「止めろってば！」

「つきかけ月影！」

弥生の手から縄状の光が昂乱へと向かい、その左腕を捉えた。

昂乱は刀で斬り捨てようとするが、まるで歯がたたない。

「ちっ、小賢しいまねを」

「逃がしはしない」

弥生は左手にその光をしっかり握り込むと上段に構え、斬りかかった。キーンと高い金属音がし、火花が散る。

まっすぐ振り下ろした先にあったのは、昂乱の体でも、刀でもなかった。刀の鞘だ。

「止めろって、言っただろーが！」

勇輝は痺れる手を我慢しながら弥生と向き合う。



「勇輝！ 邪魔をしないで！」

「この人が何したんだよ！」

「裏切り者は始末しなければいけない！」

弥生が剣を握る手に力を込める。

「生け捕ればいいだろ！ 殺す必要なんてない！」

勇輝も負けじと押し返した。

「勇輝には関係ないでしょ！」

「勇輝の視界に弥生が足を上げるのが映った。

そして気づいた時にはすでに遅く、回し蹴りが勇輝の脇腹に直撃した。そのまま勇輝は横へと飛ばされる。

弥生は昂乱へと攻撃を仕掛けるが、すでに昂乱は斬りかかっていった。それをぎりぎりのところでかわすが、一瞬縛りの光が緩んだ。その一瞬を昂乱は逃さずに光をふりほどく。

「叢むらさき砂城じやう」

昂乱の足もとから蔓が出現し、弥生へと向かった。 弥生は飛び上がって回避したが、蔓は止まらない。

昂乱の思惑に気づいた弥生は血相を変えて後を振り向いた。

癒ゆい慰ゐのあの術の本来の姿は敵を捉えるのではなく蔓の棘に含まれる毒で敵を殺すことなのだ。

(危ない！)

「逃げて！ はるゆきー！」

第1章の25 俺はヒーロだ！（後書き）

区切るのが難しい

## 第1章の26 は、る、ゆ、き

(逃げて、はるゆき?)

蔓は弥生の後ろ、勇輝の足に絡まった。

そのまま魚を釣り上げるように引っ張り上げられ、再び昂乱（あつらん）に捕まった。

それでも勇輝は声もあげず、先ほどの言葉を繰り返して考えていた。

(今、俺のことはるゆきって、呼んだ?)

「わしは、龍牙を倒す。それまでは死なん。お前には盾になってもらうぞ」

(毒で殺す気はないのね……でも)

弥生が苦りきった顔で勇輝を見た。

(弥生は、俺を違う名前で呼んだことに気づいてないのか……?)

勇輝は困惑を浮かべ弥生を見る。弥生はそれを捕えられたからだろうと、勘違いをしていた。

「……貴方如きが隊長を倒す?」

勇輝を助ける隙を作ろうと会話を続ける。

「そつだ。わしが裏社会をまとめてみせる」

「笑わせないで、貴方如きが隊長の代りになる？ 私たちを抑えることができるの？」

「そのために得た力だ。お前らのような系統に縛られず、全てを自由に使える力だ」

昂乱の瞳が青く変色した。

その目を見た瞬間、弥生は金縛りにあつたように動けなくなった。

「これはお前のところの一番手から奪った力だ。対象の全てを見通す能力。まあ、十分に奪えなかったから少しの過去しか見られんな」

弥生はなんとか逃れようとしたが体は動かない。

(まずい、あれはあの人の……)

青い目の持ち主は、かつてさんざんちよっかいをかけてきた。その度に剣で応じたがその刃が彼を捉えたことはなかった。龍牙隊、最強の男の能力だ。

「同士の敵だ。少しは苦しんでもらわんな」

「昂乱……」

(こんなところで知られてはいけない。勇輝に知られるわけにはいかないのに……)

弥生の胸に重いものがのしかかる。背中を嫌な汗が伝った。

「……ほう、魂の……桜田彩。それがお前の罪か」

勇輝は昂乱が口にした名に体を震わせた。弥生は目を見開く。

(彩？どうして彩の名前が？　もしかして、弥生が……？)

「そうか、その女……くくっこれはおもしろい」

「昂乱！」

勇輝と視線がかち合う、その表情を見て弥生は唇を強く噛んだ。驚愕の下に、微かに潜む怒りと憎しみ。

「勇輝……」

「弥生！」

弥生が何か言葉を紡ごうとした時、弥生を強く呼ぶ声がした。

三人は同時に声のした方に顔を向ける。瓦礫の山を踏み越えてきたのは秀斗だった。

後に残る三人も続く。

「勇輝！　無事か？」

「秀斗……」

勇輝はみんなの顔を見て安堵する。

（みんなも無事でよかった……）

「きゃ、勇輝くん！ 私の術をそんなことに使わないでよ！」

癒慰が捕らわれている勇輝を見て顔をひきつらせた。

「下の奴らは全て片づけた。後は昂乱だけだ」

鍊魔は昂乱を真正面から睨みつける。勇輝はそれを間近で受けて恐怖を覚え、体をこわばらせる。

（怖い……何で？ もしかして俺も睨まれてる？）

「いいところに来た。まとめて葬ってやろう」

昂乱は左手を掲げ、光の玉を出現させた。その光はバチバチと音を立てながら膨張していく。

「おい、あれは弥生の術じゃねえのか！」

「奪われたの？」

「触れられた覚えはないけど……」

「このじいさん！ 触れるだけじゃなくて血でも能力吸い取るんだ  
「！」

勇輝は自分の知っている情報を彼らに伝えた。自分で言ってその場面を思い出し、気分が悪くなる。

「死ね」

昂乱が光を放つと同時に彼らは空中へ跳んで逃れた。

光はそのまま進み、いくつもの壁を突き破り外まで貫通させ、光が入ってにわかにも明るくなる。

そして彼らは昂乱を囲むように着地し、対峙した。

「これでは攻撃のしようがありませんね」

「ちっ……人間が」

「さてどうしますかね」

三者三様に好きなことを述べる。下に湧くようにいた下っ端を片付けただけで、彼らは嫌気がさしていた。あれだけの前菜があると、メインディッシュは遠慮したくなる。

「……俺だって好きで捕まってるじゃない!」

逆ギレできる立場じゃないが、どうにも黙っていられなかった。

勇輝は捕まっているより闘いたかった。華々しく活躍したい。

弥生は髪を手で払うと、ふっと笑みをこぼした。

「まさか、奥の手を出す羽目になるなんて」



弥生が剣を握る力を緩めると、剣は淡い輝きとともに消えた。

「まだ足掻くか」

「本当は主義に反するから使いたくなかったんだけど、条件も整ったから……」

昂乱はいぶかしみ、勇輝ははらはらと事の成り行きを見守る。彼らの行動次第では今ここでぶすつとやられかねない。

「昂乱。いいことを教えてあげましょう。貴方は魔術師が属性に縛られていると言いましたね。しかし、私たちの術はただ元素を操っているだけ、魔術とは言いません」

零華は微笑を浮かべ続ける。

「魔術とは、複数の元素が絡み合っつて織りなす複雑なものなのです」

「だからなんだ？ どんな術であろうとも、わたしにはそれに対処できるだけの能力がある」

「だから、そこを断てばいいのよ」

弥生はすつと息を吸い込むと神経を集中させた。

この術は取り込まれた力を使って内から壊すために、彼らが創ったものだ。

よって全員の力が奪われることが絶対の条件となる。だからリスクも高い。

(これ、始末ができないのよね)

それが主義に反することだった。如月は今まで族は全て殺してきた。

裏切り者には死を、それを違うことになる。

それでも、関係の無い人を、勇輝を危険な目に合わせるわけにはいかない。

(約束は、守る！)

「月印げついんを持って、邪を清とす」

静かに紡がれた言霊は昂乱の中で取り込まれた力と共鳴する。

「何？」

昂乱はふいに重くなった右手を見た。  
そこには印が浮かんでいる。

「星印せいいんを持って魂の鎖とす」

「火印かいんを持って魂を焼き尽くす」

「水印すいいんを持ってその力を打ち砕く」

「土印つちいんを持って弔いとす」

印は左手、右足、左足、そして心臓と浮かび上がる。

「「「「「五刻戒縛ごこくかいばく、捕らわれし力を解放せよ！」「「「「「

昂乱が体中を駆け巡る痛み悲鳴を上げた瞬間、体中から今まで取り込んできた力が抜け出した。

多くのものは光となって抜けていく。その中で五筋の光がそれぞれのもとへと帰った。

「よっし、戻った」

秀斗がぐつと拳を握って、自分の中に力が満ちるのを確認する。

そして他の光は黒く淀み、あるものは鳥の形をとり、あるものは獣の形をして蠢いている。

床一面を這いまわる異形。その全てが助けを求めるようにもがいていた。

カラスの羽も見える。おそらくこれがあの翼の正体だろう。

「こいつ、人間以外からも奪い取ってやがったのか」

すべてが抜け出すと、昂乱は気を失ってその場に倒れた。それと同時に異形達も塵となって消え去る。

勇輝もその場に座り込んだ。

「すぐ〜かつけ〜」

常識も想像も超える状況に、先ほどの危機感は遙か彼方へと飛んで行った。

今の勇輝は初めてヒーローを見た幼稚園児そのものだ。

彼らはそんな勇輝に複雑な表情をし、弥生が口を開いた。

「秀、昂乱を隊長の所へ、任務完了の報告をお願い」

「はいよ」

秀斗は昂乱の手を縛り肩に担ぐと、じゃ、と言い残して去って行った。

「任務は終わりだ。俺たちも帰ろう」

「そうねって、勇輝君！ 貴方怪我してるじゃない！」

「え？」

血相を変えた癒慰に掴まれた右手の袖はなぜか血が滲んでいた。

「さっきのドタバタでガラスでも切ったかな？」

「ちょっと私たちのとこ寄って行って。手当くらいするから！」

「人間を連れ込むのか？」

錬魔が眉間にしわを寄せた。

「誰のせいであんなってるのよ！ 弥生ちゃん！ いいわね？」

「いいよ……」

勇輝は半ば強制的に彼らの家へと連れて行かれた……。

第1章の26 は、る、ゆ、き（後書き）

戦い終了}

お疲れ様でした！

## 第1章の27 人を欺く鳥の声

(このじじいけっこ重てえな……)

秀斗は龍牙隊の本部を早足で歩いていった。こちらに投げかけられる視線が痛い。

それもそうだろう。制服をきた高校生がぼろぼろの老人を担いで歩いていれば誰の目にもつく。

秀斗は隊長室の前に着くとノックもそこそこに入った。

「如月の秀斗ですけ……って美月さん。貴方が仕事してるなんて珍しいっすね」

挨拶よりも、秀斗の意識は隅で事務仕事をしている美月に奪われた。

「相変わらず失礼な……おお！ そいつは昂乱か？」

美月は秀斗の荷物に気付くと椅子から腰を浮かした。

「そうつすよ。任務は終わったんで、こいつは好きにしてください。あ、でも今は無能状態なんで実験はムリですけど」

秀斗は昂乱を床に転がして、龍牙に向きなおった。

「死堅牢如月、任務完了しました」

「しくろつ。弥生はどうしている」

「……元気ですよ。抱きしめてやりたいほど可愛いです」

秀斗はしばしの間の後、厭味なほど爽やかな笑顔を残して隊長室を後にした。

「いや、あれはそうとうなんか来てるね。今にもぶちぎれそうだった」

「抱きしめてやりたい……か」

美月は龍牙の黒い笑みは見なかったことにして昂乱じゆうらんへと視線を落とした。

足先で数度小突いて起こす。

「うっ……」

昂乱は頭を押さえながら体を起こした。力は全く感じられず、体が鉛のようで、頭も割れるように痛い。

「昂乱」

冷やかな声が頭上から降ってきた。

(この声は忘れもしない、龍牙！)

昂乱はその能力を奪おうと右手を動かすが、両手を後で縛られ身動きが取れない。

そして再び昂乱が顔を上げると側頭部に蹴りを入れられた。

そのまま壁際まで飛ばされる。



龍牙は大腿で近づくと、襟を掴みあげた。

「大事な実験体なんだから怪我を負わせないでくれるかい？」

「いえ、すみません。もうこの顔を見たら殴りたくて、殴りたくて」

そう言いつつも実際の行動は足技だったのだが……。

「貴様……龍牙ではないな！」

「ああ、そうさ。さて、今回はよく弥生に傷を負わせてくれたな」

龍牙から発せられた声は彼のものではなく、青年の声だった。

「貴様どう、ぐはっ……」

青年は昂乱の言葉など聞かずにその頬を殴った。

昂乱はあっけなく気絶する。

「気はすんだかい？ 鷺」

美月は呆れ顔でその青年を見た。

「ええ、まだやり残したことはありませんけど」

振り向いた青年はもう本来の彼の姿だった。灰色の髪に切れ長の目。

この青年こそが歩の所属する隼のリーダー、鷺だった……。

第1章の28 ほつと一息(前書き)

短いのもつひとつ

## 第1章の28 ほつと一息

彼らの家、では少し語弊があつたようだ。  
勇輝は彼らの称する家を見て絶句していた。

(いや、もうこれ家じゃなくて屋敷じゃね?)

どこをどう行つたかなど勇輝には分からない。  
ただ突如目の前に現れた洋館は、勇輝を圧倒した。

何者をも入れまいとする堅固な鉄の門、その先に見える屋敷は天にそびえるように鎮座している。

白い壁は美しく太陽の光を跳ね返しており、屋敷は完璧に左右対称で、手前に広がる庭園は色とりどりの花を咲かせている。

門を抜け、扉を開けると中もまたすごかった。

(たけ〜天井)

世界史図説の図6で見たようなベルサイユ宮殿を思わせる、シャンドリアがつり下がった高い天井。

正面に階段があるが、その幅が広い。ここから様々な部屋へと行くのだろう。

玄関ホールと思われるそこは、たくさんの扉があつた。どうも中は複雑らしい。

これほどの屋敷ならば執事の一人や、メイドの一人いてもおかしくないのだが、迎える者はだれもおらず。彼らは目指す部屋へと歩いて行つた。

(うわ〜螺旋階段まであるよ。貴族の屋敷って感じ〜)

勇輝はせわしなく首を動かす。どれもこれも勇輝の興味を駆り立てるものばかりだ。

「じゃあ、救急箱持ってくるから少し待っててね」

と言われて待たされるのはまた広い部屋。体育館分はあるのではないかと思う。

ところどころ島のようにソファアが固めて置いてある。そのうちの一つに勇輝は腰をかけると全体を見回した。

どうもここはホールのようだ。隅には暖炉があり、薪がぱちぱちと音をたてて燃えている。

見上げれば吹き抜けで二階の廊下の手すりが見えた。

(俺、とんでもないとこに來ちやったんじゃ)

気づけば一人残され、勇輝は少し不安になる。

冷静になって振り返ってみれば、彼らも怪しげな術を使っていたのだ。

(もしかしてあいつらも超能力者？　そんでなんかの組織が暗躍してて、それに巻き込まれちゃった感じ?)

勇輝は今まで見聞きしてきたそういう展開を並べてみた。

『お前は知りすぎたんだ……バンッ』

『そ、そんな……バタッ』

秀斗に打たれる勇輝。

そんなシーンをリアルに想像して勇輝は顔を青くする。

(どろしよ〜俺殺されるう……………)

ドアが音を立てて開かれ、勇輝は体をびくつかせる。

「さ、早くけが見せて！」

そこにいたのが癒慰だったことに心底ほっとする。

「大丈夫だって…………ほら、もう血も固まってるし」

勇輝は手を振って大丈夫なのをアピールしてみるが癒慰は黙ったまま消毒液を吹きかけた。

「痛つてえええ！」

勇輝は痛みに飛び上がる。

「ほら、大丈夫じゃないじゃない」

「それは癒慰が……………」

癒慰は勇輝の右手に包帯を巻いていく。  
しばし沈黙が流れる。

「…………ごめんね。巻き込んだじゃって」

「あ、いや。こっちこそ邪魔して迷惑かけてごめん」

「そんなの気にしないで……よし、できた」

勇輝は綺麗にまかれた包帯を見て感嘆の声をあげた。

「癒えつつて器用」

「本職なのは錬魔君れんまなんだけどね」

「へ〜……」

(そういえば弥生も錬魔に治してもらったとか聞いてたな。顔は怖いけど、優しいんだな)

気まずい沈黙が降りた。

聞きたいことは山ほどあるが切り出すには勇気がある。

しばし迷った挙句、いざ訊いてみようとした時、ドアが開いた。

## 第1章の28 ほつと一息（後書き）

神名の裏話的なもの2

彼らの屋敷から消えた二人！！

サスペンスみたいなあおりをしてみました。消したのは作者です。（いや、他にいないだろ）

改定前では彼らの屋敷には使用人かつ保護者のような人がいました。

名をミー子とポン助。安直な名前です。ピンとくるかもしれませんが、化け猫と化けたぬきです。ミー子は猫耳に尻尾とどこかのメイドカフェにでもいそうな格好、ポン助は太ったおじさんでした。

彼らがなぜ消えたのか？

人が多いのでリストラしました。それに彼らなら自分たちでやっていけそうだし。彼らのほかに人間じゃないものもいらなかったし。

ということでした。また人が舞台から消えていきましたとさ……

ではまた〜。

第1章の29 俺は知りすぎた？ (前書き)



第1章の29 俺は知りすぎた？

陽気な声とともに扉が開かれた。

「帰ったぜ」あ、勇輝」

秀斗は勇輝を見つけるとまっすぐ彼の下へ歩いて行った。  
そして、問答無用に殴った。

「ぎゃっ」

鉄拳制裁。

「秀斗君！」

癒慰ゆいが驚いてソファーから身を浮かす。

勇輝はすぐさま立ち上がって反撃の構えに入ったが、秀斗から放たれる怒気に思わず唾を飲み込んだ。

「さんざん危険なことしやがって……」

血の底から這い上がってくるような声に勇輝は応戦態勢を解いた。  
抹殺目的かとも思ったがよく考えれば今回勇輝はさんざん彼らに心配もかけたのだ。

「ごめん。俺が悪かった」

素直に謝る。彼らが来てくれなかったら今頃冷たくなって、土の下だろっ。

「お前が出てこなかったら弥生が怪我することもなかったんだよ！」

(……え、そっち?)

「しかも慣れ慣れしく……」

(なんか、怒りの方向ずれてない?)

「秀斗君！ 怪我なら錬魔君が治してくれたじゃない！ 勇輝君に八当たりしないで！」

「……ちっ、まあいい。さっきのでチャラにしてやるよ」

(それ、俺が痛かっただけじゃん)

「え……てかもしかして二人つきあってたの？」

そう言えば弥生だけは秀斗のことを秀と呼んでいた。  
お似合いといえはお似合いのカップルだ。その間に秀斗が顔を赤らめる。

それを聞いた癒慰が吹き出した。

「違う違う！ 秀斗君の一方的な片思い。ずっとぶられてるのよ」

「あ、癒慰てめえ！」

さらっと暴露された秀斗が少し哀れだった。

「そんで？ 他のやつらは？」

秀斗は憤慨しつつソファーに座った。  
二人も座って向き合う形になる。

「部屋で休んでるよ。ただ、弥生ちゃんはどっか行ったみたいだけ  
ど……」

「え、一人で行かせていいのかよ」

「ん〜でも一人になりたそうだったから……」

「仕留め損なったこと悔いてんのか？ ガラでもねえ」

（弥生、いないんだ）

勇輝はくつと奥歯を噛みしめる。

（会って、訊きたいことがあるのに……）

そしてもう一つ思うことには

（こっちも訊くタイミング逃しちゃったな）

彼らが一体何者なのか、知りたいが抹殺は嫌。

双方の間で揺らいでいると、秀斗が奇妙な顔をして見ているのに  
気がついた。

「どっしたのさ」

「いや、なんかすげえ顔してっから」

勇輝はそう言われて自分の顔を撫でる。

考えていることがそのままです。そのままです。そのままです。そのままです。

（もういいや、やばくなったらそんな時はそんな時で）

興味心は猫をも殺す。

そういう諺を勇輝は知っているのだろうか。

「……あのさ、訊いていい？」

「いいぜ」

「秀斗達って超能力者？」

口にしたとたんに鼓動が速くなり、頭には抹殺の瞬間の映像が繰り返して再生される。

「違いよ」

それに対する秀斗の答えはあっさりしたものだった。

「だ、だよな」

勇輝はほっとして肩の力を抜く。

（そんなごろごろと超能力者なんているもんじゃないよな）

「俺らは魔術師」

しかし安息も束の間、その一言が勇輝の脳を激しく揺さぶる。

「へ？ 魔術師？」

「そ、魔術師」

勇輝の頭には怪しげな儀式の図が描かれる。

ろうそくのもった祭壇に、床には怪しげな魔方陣。その上には何者かの生き血が……。

「いや、そんなヤバイもんじゃねえから」

「ぎゃ、俺の心読んだ！」

「そんなんできねえよ。お前の顔見たらそれくらいわかるぜ……」

勇輝は目をぱちくりとさせた。そして、電撃が走ったかのように一つのことが浮上する。

「え、そうなの……って、俺殺されたりしないよな！」

勇輝の思考は一気に数分前まで遡った。

必死の形相で秀斗に問い詰める。

「は？」

「だから『お前は知りすぎた…パンツ』とかないよな！」

すると突然隣にいた癒慰が笑いだした。

「大丈夫よ勇輝君。別に私たちのこと知ったって誰も殺しにはこないよ」

「まじ?」

勇輝は念を押す。

勇輝にとってこれは明日からの生活を左右する大問題なのだ。

「心配すんなって」

秀斗は勇輝の頭をわしゃわしゃと撫でまわした。

子供扱い。

勇輝の地雷の一つでもある。

「アッパーカ〜ット!」

「ぐはっ」

勇輝は秀斗の顎に拳を入れると立ち上がった。勇輝は頭の切り替えも早い。

「じゃ、俺帰るわ」

勇輝が腕時計に目を落とすと時刻はもう一時だった。安心したら急に空腹を感じだした。正直腹が減ってこれ以上持ちそうにない。

「じゃあ、その扉を進んでいくと出られるよ」

癒慰が指さしたのは他と比べると少し小さいドアだった。

「勇輝はドアノブを捻り、扉を開ける。」

「そこには長い廊下が続いていた。」

「今日は楽しかった。じゃ、また明日。」

「勇輝はじゃあな、と手を振ると廊下を歩いて行った。」

「楽しかった、ね。なかなか言えるもんじゃないよね。」

「あいつ、昂乱のことも組織のことも何も聞かなかったな。」

「今までで、一番おもしろい人間だったね。」

「二人は顔を見合わせると、少し寂しげに笑った。」

第1章の29 俺は知りすぎた？（後書き）

秀斗の恋は特に重要じゃないからさりと。

秀斗 「いや、これは重要だつて！」



第1章の30 お帰りはこちらになります

「まじっすか？」

驚きのあまり語尾が体育会系になっている。

勇輝は言われたとおり廊下を歩いた。走ってみたい誘惑に駆られながらも歩いていった。

そして、床がパカッと開いた……。

これは奈落へまっさかさまかと思っただが、足はすぐに地面につき、今勇輝は屋上にいる。

もう見慣れた学校の屋上だ。

魔術なのだろうとは察しがつくが、予告なしでやられると心臓に悪い。

(よし、ひとまず帰ろう)

そう思い、教室へと歩きだしたとたん背後から名前を呼ばれた。

「カスガユウキ」

機械のような声だ。

「へ？」

勇輝が振り向いた瞬間、光で目をやられた。

「まぶし！」

そして目が慣れた時には、屋上に誰の姿を見つけることは出来なかった。

「あれ？」

（今の、なんだったんだ？）

首を傾げる勇輝の頭上を蝙蝠「こつせう」が一匹飛んで行った。

通常の二倍はあるうかと思える大蝙蝠だ。

それは重そうに羽を動かし、どこかへと飛んで行った……。

（ま、いいや帰る）

大きなデンジャラス体験の後では小さな謎などどうでもよくなってくるのだった。

翌日、いつもどおり勇輝は携帯のアラームによって起こされた。

蒲団から手だけを伸ばしてアラームを切る。

気候はますます冷えてきて、蒲団からでるのが億劫で仕方がない。再びアラームが鳴る。

（スヌーズ機能は便利だけどうざい！）

勇輝がガバツと起き上がると携帯を開いてスヌーズ機能を止める。その時、ちらりとストラップが目に入った。彩との最後の思い出

だ。

(彩……弥生……)

勇輝は携帯を持つ手に力を入れた。

(何が何でも訊かないといけない……弥生は、彩のことを何か知っている)

勇輝は朝食を食べ、学校へと向かった。

第1章の30 お帰りはこちらになります(後書き)

零華 「最近私たちの出番がありませんね」

錬魔 「楽しい」

零華 「さぼらないでくださいね？」

## 第1章の31 セールスにはNOと言おう

勇輝が屋上に上ると、そこにテントはなく、代わりに歩がいた。

「おはよ〜勇輝」

「おはよ………って歩だけ？」

勇輝は歩の隣に座る。

(テントは教師達にでも撤去されてしまったかな………)

「わりいかよ。つーかお前聞いたぞ。昨日危ねえことに首突っ込んだんだってな」

「え、なんで知ってたんだよ」

歩は驚いて顔を向けた勇輝に、でこピンを喰らわせた。

「歩様を舐めんじゃねえよ。で？ お前どこまで知ってたんだ」

歩の声が少し硬くなり、緊張感が伝わる。

「は」

「あいつらのことだよ」

「魔術師ってやつ？」

さらっと言った勇輝に歩は深く溜息をつく。

「知っちゃったのか……」

「え、歩知ってたのか？　もしかして俺殺される？」

「殺されは……しないけどよ」

少しの間が気になったが追及しないことにした。

「なんでそんなあっさり受け入れてんだよ」

「なんでって……なんかあいつらならありえそうだなんて」

特に疑問にも思っていない口ぶりに歩は再び溜息をついた。

「しゃーねえか。俺も教えとくわ……俺のバイトな、隠密なんだ」

勇輝は言われた言葉がいま一つ理解できなかった。

「カタカナにするとスパイ」

電撃が走ったように意味が繋がる。

「スパイ？　すげえじゃん！　かつこいい〜」

歩は勇輝の反応に拍子抜けした。

「お前もつと他に驚くとかねえの？」

「なんで？ スパイってかっこいいじゃん！ うわ〜歩がスパイと最高なんだけど！」

（確かに今こいつがスパイ映画にはまってることは知ってたけどよ……）

そしてその前は異世界系のアニメだった。もう魔術とか剣とかのオンパレード。

（まさかこいつ、あいつらにも同じ反応したんじゃ……）

逆に怖え〜、と歩が内心青ざめていると、目を輝かせた勇輝が質問を浴びせ始めた。

「もしかして歩はこの学校になんか探りにきたとか？」

「スパイにそんなこと訊くんじゃねえよ」

（あ〜なんか必死に隠してた自分が馬鹿らしくなってきたぜ……）

歩はなんとか隠そうと、仮病や早退、遅刻をふるに活用したのだ。

「あ、情報漏らしたりしたら殺されるよな！」

「だからお前はすぐにそう言う方向に話をつなげやがって……」

「じゃあさ、あいつらと同じとこでバイトやってんならあいつらと会えんの？」

テンションの上がった勇輝はいつもの二倍頭が回転する。

よっていつもの二倍話も飛ぶ。

「いや、俺下っ端だし、あいつらああ見えてもけっこう上の奴らだし接点ねえ」

しかし歩も慣れたもので、自然に会話を続ける。

「あいつら学校来るかな」

「今んところ転校や退学の届出はないみたいだぜ」

(まあ、そもそもここに来たのは任務のためだしな。それが終わったら来る必要もねえだろけど)

「なんかあんのか?」

「……弥生に聞きたいことがあるんだ」

「弥生、ねえ」

歩は銀髪の美女を思い浮かべる。

彼らに関わるようになってから独自で彼らのことを調べてみた。

しかし彼らについての情報は極めて少なく、個人のものとなればさらに少なかった。

弥生については隊内三指の実力と、ここ十年姿を見せなかったことだけだ。

十年間の空白は如月全体のことでもある。

そんな如月が族狩りを済ませ、復活したのだから隊内は上へ下への大騒ぎだった。

無理もない、死堅牢如月はもはや伝説になりかけていたのだから



……。

しかし噂には尾ひれがつくものだが、今回はコバンザメがついてきた。

如月の復活とともに一人の人間の存在が実しやかに囁かれているのだ。

そして、そのコバンザメに食いついた人がいた……。

「勇輝、忘れねえうちに渡しとくわ」

と歩がポケットから取り出したのは子供のころ近所の悪餓鬼と打ちあつたモデルガン、のわりにはずいぶん重かった。

「え、なにこれ。おもちゃ？」

ずいぶんと小さいが質感がどうも威圧感を与える。

「そう、俺達にとってはおもちゃ」

「さ、さすがだな。やっぱスパイはこういうのも扱えないといけな  
いよな！」

勇輝はそつとそれを持ってじっくりと見た。

(なかなかかっこいい……)

「お前にやる」

「いいません！」

勇輝は慌てて歩に押し付けた。  
が、押し返される。

「護身用だから。頼むから貰っててくれ！ そうじゃないと俺の命が危ない！」

逆に拝み倒された。

「え、え、え？」

「頼む！ 上の人から頼まれたんだ！ だから持つてるだけでいいから！」

見たことのない歩の必死の形相に、勇輝は拳銃を引き寄せる。

「誰が俺に？」

(歩がこれほど焦るのだからあいつらじゃないし……)

と、しごく最もな疑問を口にしたとたん、両肩をひしっと掴まれた。

「世の中には知らねえほうがいいこともある」

歩の脳裏には羽織を翻して去って行った青い瞳の男の姿が甦る。  
あの羽織は階級を与えられた者しか着られないものだ。

(しかもあの紋はおそらく……)

歩はそこまで思い出して頭をふった。

(これ以上は俺の精神に関わる、止めておこう)

「あ、うん」

勇輝は剣幕に押されて頷いた。

(た、たぶん本物とかじゃ、ない、よな。……大丈夫、持ってるだけだし)

「で、ここ引いて引き金を引くと撃てるから」

「あ、うん」

さらりと使い方を教える步。

(なんか、モデルガンより簡単だな……)

モデルガンは地味に弾を込めるのが面倒なのだ。  
勇輝は深く考えるのを止め、上着の内ポケットにしまった。

そして寒空の下、惰眠へと突入する……。

## 第1章の32 真実

勇輝が攫われてから三日間、彼らは学校にこなかった。だが転校したとか退学したという話も聞かない。

勇輝は日々苛立ちを募らせていた。護身用とか言われて渡された銃の重さにも慣れ、憂さ晴らしにためしに撃ってみようかなと誘惑に駆られる。だが本当に弾が出たら怖いので思い止まる。それを何度か繰り返していた。

そして四日目、勇輝は悠々と午後から登校した。

歩は前日からバイトと称してスパイ活動に出かけて行った。

(あいつら、もう来ないのかな……せつかく、掴みかけたのによ)

勇輝は校門を抜け、何気なく視線を屋上にやった。いつもならあそこでさぼっている時間帯だ。

「あつ」

勇輝は銀色の光を見るなり走り出していた。

(間違いない、あれは弥生だ)

全力で階段を駆け上がる。

(やっと見つけた！)

勇輝は荒々しくドアを開けた。その音に驚いた弥生が顔をこちらに向ける。その瞳が悲しげに揺れた。

「弥生！」

弥生は勇輝を見るなりふっと視線を落とした。

(やっぱり来ちゃったか……)

「……一人、か？」

勇輝は息を落ち着かせてからそう訊いた。

弥生はフェンス際に座っている。他に人影は見当たらなかった。

「うん……」

勇輝は深呼吸をし、気を静めてから口を開いた。

(今しかない……)

「……訊きたいことがあるんだけど」

「なに？」

弥生は優しい表情で勇輝を見ていた。寂しさと覚悟が入り混じった優しい表情で……。

「なんで、俺のことをはるゆきって呼んだんだ？」

はるゆきは彩がつけたあだ名だ。彩以外知るはずがなかった。勇輝の震える声に、弥生は何も言葉を返さなかった。

「……彩が、彩が消えたことについて、なんか知ってるよな」

(彩が言っていた彼女は、弥生だ)

弥生は黙って、髪を指に絡ませた。弥生の背後に彩が浮かび上がる。

髪に指を絡ませるのは困った時の彩の癖だ。

初めて会った時から妙な親近感があった。

それは、弥生のしぐさがどこか彩に似ていたから……。

「彩……」

(彩がいてくれたから道を踏み外さずに済んだ自分がいた)

高校に入って、毎日あれまくっていた勇輝を学校につなぎとめたのは彩だった。

ことあるたびに絡まれて、最初はうざいと思っていた。

でも、いつのまにかそれが楽しくなって、寂しさまで感じるようになっていた。それが愛しさに変わるのに、それほど長い時はいらなかった。

(彩がいたから笑えてた自分がいた)

勇輝が喧嘩で勝っても負けても、傷の具合を心配をされ、強制的に手当てをされた。

散々わがままを言われながら、いつもそばにいて多くの話をした。

(彩は、いつも俺の傍にいたんだ。それを、弥生が奪った……)

遊園地へ行った日。あの日からすべてが狂った。

彩のいなくなった日常。勇輝は何度彩の名を呼びそうになったかわからなかった。

その度にいないことが思い知らされる。

(弥生が……彩を！)

悲しみや後悔や怒りが込み上げてきて、勇輝は知らない間に内ポケットへ手を伸ばしていた。

「弥生！ お前さえいなければ！」

拳銃を弥生に向ける。黒いそれが目に入り、勇輝は自分の行動に自分で驚く。

弥生は拳銃を見ると、すっと立ち上がり勇輝に近づいた。弥生は先ほどから全く表情を変えていなかった。

興奮からか恐怖からか、拳銃を持つ手は小刻みに震えている。

弥生は拳銃を掴むと自分の胸に引き寄せた。

「殺すなら殺して。それで勇輝の気が晴れるなら……勇輝には私を殺す資格がある」

(資格……？ 人を殺すのに、資格なんてない)

無意識に勇輝は弥生の言葉を否定した。

なのに指は引き金から離れない。弥生が安全バーを引いた。かちり、と不気味な音が寒空に吸い込まれる。

勇輝の手の中の拳銃が急激に冷たくなっていった。

(俺は、弥生を殺したいのか……？ それほどに、弥生が憎いのか？)

勇輝は弥生を見るのが怖くて、目を伏せた。唇を強く噛む。沈黙が流れる。痛く、息の詰まる沈黙だ。

「……違う、俺は弥生を殺したいんじゃない。俺は、ただ知りたいんだ」

（彩は俺を選んでくれた。あいつのことを俺しか覚えていないなら、俺はあいつのことを知らなきゃいけないんだ……）

「でも、怒ってる。私を憎んでる」

勇輝はぐつと奥歯を噛みしめた。

「ああ、憎いよ。怒ってるよ……でも、違うんだ」

（俺は……）

「俺は……俺自身が憎いんだ」

胸の奥から熱いものがこみ上げてくる。

（何も気づかないふりをした自分。後回しにして、逃げてた自分）  
そして、全てを弥生のせいにして楽になろうとした自分）

勇輝はそつと拳銃を手放した。

乾いた音を立てて拳銃はコンクリートに転がる。

「勇輝……」



弥生はしばらく黙りこみ、やがて口を開いた。

(私の……負けね)

「私は十年前、敵に捕まって彩の魂の中に封じられたの」

ぼつりぼつりと紡がれていく言葉に、勇輝は耳を傾けた。

「あの人が何を思ったかは知らない。でも、気づいたら彩の中  
に……年月が経つほどに意識がはつきりして、彩の声が聞こえるようになったんだ」

“私、彩っていうんだけど貴女だね？ 結構前から私の中  
にいるよね”

初めてかけられた声はとても気安くて、覚醒も間もなく戸惑っていた弥生を安心させた。

「彩と一緒に、たくさんのことをした。は笑ったり泣いたり怒ったり……ずっと、あのままでも良かったのに」

(勇輝に出会って幸せそうな彩を見るのは楽しかった……自分も、嬉しかった)

「なのに、一年前から枷が急に緩み出した」

弥生は十年なんてでたらめだと、思っていた。

「気を抜いたら弾き出されそうで」

弾き出されたら、弥生の器として存在していた彩も消えてしまう。

「なんとか引き延ばそうとしたけど。無理だった……」

勇輝はずっと俯いていた顔をあげた。その目には涙が溜まっ  
ている。

それを袖口で乱暴に拭う。

「ごめんね……勇輝」

それが今言える精一杯の言葉。

勇輝はゆっくり首を横に振った。

「弥生が、悪いんじゃない」

（本当は、分かった。それでも誰かのせいにしたかったのは、俺  
が弱かったから……）

「ありがとう……弥生が好きで彩を消したわけじゃないって分かっ  
て……よかった」

「勇輝？」

勇輝はにっこり笑った。怒りも憎しみも悲しみも、全てを包める笑  
顔だった。

「彩は、俺に笑って、て言ったんだ。だから俺はそれを守る」

それが彩の最後のお願いだ。

「……彩は、最後までお前のことを言っていた。『はるゆきはちょっと乱暴だけど弱いところがあるから、何かあつたら守って欲しい』と」

(彩……そんな時まで俺の心配かよ)

「不良、舐めんなよ。俺は、彩に心配されるほど弱くない」

(これからもっと強くなる。だから、安心して笑って逝けばいいんだ)

「そうだね」

二人は笑みを交わし合い、一人の女の子を胸に描いた。

「……俺、戻るよ。これだけ聞けたら十分だ」

「うん。私も、いるべきところに戻るよ」

勇輝は少し寂しそうに訊いた。

「もう、会えないのか？」

「私たちは任務でここに来たから」

「……じゃあ、俺が会いに行く。お前らの家に遊びに行くから」

勇輝は住所教えるよ、と言い残すと階段を下りて行った。



第1章の33 おかえり(前書き)

今回は短め

### 第1章の33 おかえり

勇輝の後姿を見送ると、弥生は拳銃を拾った。そして屋上の影に声をかける。

「隠れてないで、出ておいでよ」

「……あ、ばれてた？」

悪びれもせずに出てきた秀斗に、弥生はためらわずに拳銃を向けた。

「げっ、ちよい待て！ 今俺ノーガードだから！」

秀斗が慌てて止めようとするが、聞くはずもない。

「盗み聞きした罰よ」

弥生はためらいもせず引き金を引いた。乾いた破裂音が寒空に響く。

（もうこれは避けるっきゃねえ！）

秀斗は銃口に意識を向けたが、そこから飛び出したのは弾ではなく紙テープだった。

火薬の臭いが鼻につく。

「って、あれ？」

しかも紙吹雪も飛んでいる。

「ばーか。おもちゃに決まってるじゃない」

くすくすと弥生が笑っていると秀斗があからさまに不機嫌な顔になった。

「お前最初から知ってたのかよ……結局心配してたのは俺らだけってか？」

「本物かと思っていました」

他の三人も姿を現した。こちらは秀斗と違い複雑そうな顔つきだ。

「ねえ弥生ちゃん……あの話本当なの？」

癒慰が申し訳なさそうな顔で訊く。

「本当だよ」

「ではどうして早く言ってくれなかったのですか？」

零華は少し憤りが混じっている。

自分達よりも先に勇輝に話したことが納得できないらしい。

「……私の記憶がどこまで正しいのか、私にも分からなかったから。最初は勇輝にも言うつもりはなかった」

「そつ……ですか」

「疑って、すまなかつたな」

鍊魔は無表情ながらも瞳には弥生を信じきれなかったことへの後悔が滲んでいた。

「いいよ。気にしないで」

弥生は淡く笑った。

(無条件で受け入れられるより、疑われていた方がいい。それは、私のことをちゃんと見てくれていてくれるってことだから)

「じゃ、改めて、おかえり弥生」

秀斗が満面の笑みで軽く手を挙げた。

「ただいま。みんな」



第1章の34 お別れ（前書き）

思いのほか一章が長くなってしまった。

答えを言いますでしょうか？ 作者さん。

一話が短すぎるんです。

はい、猛省いたします。

## 第1章の34 お別れ

その夜、弥生は自室で窓の外を見ていた。

弥生の部屋には机とベッドの外に目立った物はない。

明かりもつけず、部屋に入る光は月光のみ。

自然と昼間のことが思い出された。

拳銃を向けた時の怒りに満ちた顔と、その後に見せた笑顔が交互に蘇る。

(勇輝は強い……)

風が髪を撫でて通り過ぎていく。

外界の風は冷たくなっているが、ここはいつも丁度よい涼しさだった。

“弥生ちゃん”

風の音に混じって声がした。

弥生は声のしたほうへ顔を向けた。

そこにいる女の子は宙に浮いていて、細い糸で弥生と繋がっていた。魂どうしの繋がりがりだ。

「彩……」

今の彩は魂が繋がっている者にしか見えなかった。

そしてその糸も弱くなっている。

“はるゆきを守ってくれてありがとう”

彩は、一部始終を全て見ていた。体が消滅しても、すぐに弥生の魂との分離したわけではなかった。同化していた期間が長すぎたのだ。

「約束したから」

弥生はふわふわと飛んでいる彩を目で追った。

彩は弥生の目の前で止まると、にこりと笑った。

“いままでありがとね”

「……逝っちゃうの？」

“うん。もう心残りはないから”

弥生は自分と彩を繋ぐ一本の糸に目を向けた。

逃れられない檻が、今はこんなに頼りない糸になってしまった。

「勇輝に、会わなくていいの？」

彩は少し瞳を揺らしたが、微笑んだまま答えた。

“いいの。今会ったらよけい心配させちゃうから”

それにね、と彩は続ける。

“お別れじゃないから。私、向こうで待ってる。はるゆきのことも、弥生ちゃんのこと、待ってるから……寂しくないでしょ？”

彩は小指を突き出した。  
弥生も小指を出し、絡める。

“約束だよ”

「うん。私も、彩との約束を守る」

弥生は自分の体から、魂から糸が抜けていくのを感じた。  
はっとして彩の顔を見つめる。  
それでも彩は笑っていた。

“忘れちゃ、やだよ。じゃあね、弥生ちゃん”

糸が完全に弥生から離れると、彩はすっと消えた。

ふわりと、風で髪が揺れる。

まるで彩が撫でていったような優しい風だった。

弥生は小指を絡めた手をぐっと握る。

(彩……ありがとう)

弥生は窓の外に視線を向けた。

三日月が雲の合間から覗いている。

その光が心に染みいるの感じながら、風の音に耳を傾けた……。

第1章の34 お別れ（後書き）

次回一章完結です。

## 第1章 エピローグ(前書き)

やっとなついたよー段落。

## 第1章 エピローグ

そして、昂乱の事件から二週間が経った。

担任代理の葉月を通して理事長の辞職が伝えられ、ここで初めて昂乱が理事長であったことを勇輝は知った。

その勇輝は喧嘩を売ったり買ったりと不良道を満喫中だ。

学校は相変わらず彼らがいなくなっても騒がしく、カラーバリエーションも変わらなかった。

何故か勇輝がクラスのリーダーとして決闘に呼び出されることは増えたが、今のところ全勝を挙げている。

あれから彼らからの連絡はない。

（やっぱり俺のような一般人と関わっちゃいけないのかな）

やーさんとはお付き合いしていないので勇輝は裏社会のことなど何も知らなかった。

歩に訊いても、あいつらが人と関わることなんて滅多にないという答えが返ってきた。

（せっかく友達になれたのにさ。スパイに魔術師、制覇までもう一步じゃん。幽霊だろ、魔王だろ……）

指を数本折ったところで止めた。やっぱり彼らが一番楽しそうだった。

（もっと、話したかったんだけど……）

勇輝は屋上へ続く階段を登り切った。寒くなくても、屋上でさばることは止めなかった。

そしてドアを開けると視界が暗かった。

一面緑色、体育大会のテントだ。

「え？」

勇輝は逸る心を抑えて入口の布を引いた。そこには、あの光景が広がっていた。

一面にカーペットが敷かれ、真ん中には学校の備品のストープ。そしてその周りには……。

「お前ら……もうこないんじゃないのかなかったのかよ！」

彼らが座っていた。思い思い好きなことをして、いつもの様子でくつろいでいる。

「よお勇輝！ 遅っせえぞ」

「な、なんで？」

勇輝は嬉しさと思議さが入り混じった顔で彼らを見た。

「隊長命令でね。もう少し高校生活という物を体験して来なさいって言われたの」

癒慰がティーカップを片手に答えた。

「だから勇輝。これからもよろしくね」



弥生がひらひらと手を振った。

勇輝は嬉しさがこみ上げて満面の笑みを作った。

「こっちこそ、よろしくな！」

楽しい学校生活はまだまだ続きそうだった。

勇輝はそんな予感を胸に躍らせながら、彼らの輪の中に入る。

裏社会を騒然とさせる号外が発行されるのはもう少し先。

そして彼らがそれを知るのはさらに先だった……。

## 第1章 エピローグ（後書き）

第一章完結です。読者の皆様とこのサイトに感謝です。

ここに来なければ書き上げることできなかったでしょう。あと何年かかっていたかわかりません。この話は今の時点で5年の月日が経っています。恐ろしい……

そしてこの先は少し手直し見直し期間に入ります。

二章は月が変わるころには必ず！

そして二章では一話をもう少し長くして話をまとめることを宣言します。

言っておかないとできませんから。

勇輝 「ありがとうございます！ 今まで俺が頑張れたのも皆様のおかげです！」

では、またお会いしましょう。

## 第2章 プロローグ(前書き)

第2章の始まりです。

読んでいってくれれば幸いです。

## 第2章 プロローグ

現実つてのは結構いいかげんなものだ。

今まで信じていたものが偽りだったなんてざらにある。

剣、魔術、超能力。

そんな子供の夢だと、簡単に切り捨ててはいけない。

そうじゃないといざ目の前にした時にパニックに陥る。

俺？ 俺は大丈夫。いつも現実と夢の間を行き来してるから。

だからどーんとこい。

妖怪以外ならなんとかできる自信がある。

なんでこんなことを言ってるかって？

消えちまった彼女が俺を非日常へ叩き落としたからだよ……

## 第2章の1 ドアの前は非日常

勇輝は軽い足取りで学校へと向かっていた。彼らがいる学校は楽しくて仕方がない。

誰かに因縁をつけられることも無くなり、毎日がさぼりたい放題。季節は冬だが、暖かいテントの中で快適に暮らしている。

彼らが来てからの一か月は怒涛のように過ぎ去った。

人生の全てのスリルが詰まったのではないかと思えるほど濃く、それを潜り抜けた勇輝は今後何があっても大丈夫、という変な自信を持ってしまっていた。

「おは……」

勇輝は屋上にあがり、テントの布を引いた。そしてすぐに閉める。一度空を見上げて今日もいい天気なのを確認すると、もう一度開けてみた。

見える景色は先ほどと同じ。  
見たことのある、景色だった。

だがそれはテントの、いつものテントの中ではない。  
まず広さ、テントの何十倍もある部屋がすっぽりと入っている。  
そして天井、立派なシャンデリアだ。こんなものはテントに吊れない。

そしてとどめは彼ら、彼らは実にこの部屋を使いこなしていた。  
まるで自分たちの家のように……

(いや、これこいつらの家じゃん！ こないだ行ったやつそのまんまじゃん！)

戸口で呆然としている勇輝に気づいた秀斗が近寄って来た。

「面倒だからよ。繋げたんだ」

胸を張って自分の仕事を誇る秀斗に、勇輝はただただ拍手を送った。

秀斗が持つ能力は空間支配。空間同士をつなげるなどお茶の子さいさいだ。

それゆえの彼らの屋敷インテント。

「すげーもうすげー。考えることが普通じゃない」

ひとしきり拍手を送るとこの間はじっくり見れなかったので、部屋を歩き回る。

部屋には全員がいるかと思っただが、鍊魔の姿が見えなかった。

(うわーやっぱすげえな)

さりげなく掛っている絵を見て、自分が中世ヨーロッパにタイムスリップしたような気分になる。

彼らの容姿が西洋っぽいので全くこの屋敷と違和感がない。彼らの髪はカラフルで、瞳も灰色っぽい。

ぼーとしながら歩いていると何かにぶつかった。

「うわっ」と

「どけ、邪魔だ」

切れ長の目に見下ろされ勇輝は凍りついた。

(ちよゝ機嫌悪。低血圧か……?)

勇輝が気を落ち着かせて振り向くともう錬魔の姿は部屋にはなかった。

向かいのドアからでていったらしい。

(うわ、あんなところにドアがある)

「勇輝、お前気をつけねえと焼かれっぞ？」

錬魔の属性は火だ。それは彼の髪の色にも表れている。

「大人しくしてます」

もう一人で探検はしないと心に決めて、大人しく座っていることにした。

## 第2章の2 スパイはつらいよ

しばらくすると、勇輝が来たドアが開いた。外の光が入ってくる。

(あ、テント開けたらこっちはドアが開くようになってるんだ)

地味に感動する。

そして開かれたドアはすぐに閉じられた。

(あ、やっぱりそうなるよな)

ドアの向こうに見えたのは歩だ。

いくら歩が同じ組織に所属していたって人間は人間、なかなか常識からは逃れられない。

そして再びそっとドアが開かれる。

勇輝と秀斗を互いに顔を見合わせ、歩を迎えに行くことにした。

「おはよ〜歩」

「入ってこいよ」

歩は秀斗を見た瞬間びくつと体を震わせた。

「い、いや。俺入れねえ」

歩は一步、二歩と下がり始める。

「遠慮すんなって」



秀斗は歩の腕を掴み、無理やり中へと引っ張りこんだ。  
歩は部屋に足を踏み入れたとたん、この世の終わりのような悲鳴をあげた。

「どうかした？」

勇輝が心配そうに歩の顔を覗き込む。

歩は長期の隠密のバイトから帰って来たばかりだ。

もしかしたら何か嫌なことでもあったのかもしれない。

歩は必死の形相で秀斗の胸倉を両手で掴んだ。

「ここテントだよな！俺は今テントの中にいるんだよな！」

あまりにも鬼気迫る表情だったので、秀斗はこくりと頷いた。

本当は自分たちの家だがそれを言うとは歩は失神してしまいそうだった。

「よし、テントなんだな。俺は今テントの中にいる。決して如月じやねえ」

ぶつぶつと呟く歩を、勇輝は心配の目で、秀斗は奇妙な目で見ていた。

「歩、お前バイト中になんかあった？ばれて拷問とかされてない？」

勇輝の心配はちよつとずれていた。

「いや、大丈夫。心配すんな」

バイトの探りの方はうまくいった。

問題はその後、家に帰った時だった……

歩は隠密の仕事を終え、アパートに帰っていた。

歩は一人暮らしなので、こういう仕事をするには都合が良い。

書類作って報告しなきゃな、とまだまだ終わらない仕事に憂鬱になりながらドアの鍵を開ける。

だが、部屋に入ると人がいた。

強盗かと少し青ざめるが、その人物が誰か分かると、完全に青くなっただ。

「リ、リーダー！」

灰色の髪に切れ長の目、忘れもしない歩の所属する隼のリーダー、鷺だった。

だが歩は下っ端。報告は全てこのエリアをまとめる担当者にしていたので、面と向き合うのは初めてだった。背中を嫌な汗が伝い落ちる。

彼はにこやかに歩を迎えた。

「おかえり歩。お仕事ご苦労」

「あ、あの。何の御用ですか？」

本来ならまだ彼はFBIに潜入中のはずだ。

「最近の報告をしてもらおうと思ってな」

「え、報告なら……」

最後の方は言葉にならなかった。

鷲と視線が合った瞬間、射竦められたのだ。

彼は顔こそ笑っていたが目が全く笑っていなかった。

(俺があいつらのこと隠してたのばれてる……)

「あ、あの。すみませんでした！」

直角の礼を取り、固く目も瞑る。一秒でも彼と目を合わせていた  
くなかった。

「いいから。報告しろ」

(いえ、全然いって感じの空気じゃないんですけど……)

歩は顔を上げ、口の中がカラカラになるのを感じながら報告を始  
めた。

「あ、はい。えっと……四剣<sup>しけん</sup>琅<sup>ろう</sup>、如月の五名が転校して来ました。  
彼らは族狩りを済まし、今は普通に高校生活を送っています」

こまごまとした彼らの不良生活ははしょっておく。

「弥生は？」

じわじわと鷺は歩に近づいていく。  
歩は無意識に引いていった。

「えっと、なんか普通の女の子ですけど？ あ、ただ剣は強いらしいです」

こちら辺は興奮した勇輝が話してくれたことだ。

「普通の女の子……か」

(ずいぶんと猫を被ってるじゃないか)

「彼らと行動をともしたのか？」

「いえ、俺は情報提供ぐらいしかできませんでした」

(というか俺はあれ以上近づけません)

とつとつ壁に突き当たった。

鷺は壁に手をついて歩の逃げ場をなくす。

不良として生活した中で、こつこつ風になんつけて相手をビビらしたことは結構あったが、それを逆にやられてビビることはなかった。

「お前、まさかあいつらの本陣に入ったりしてないよな」

声が一段低くなって威圧感が増す。

「してません、してません！」

歩はすごい勢いで首を横にふる。

「ならばいい。これからはちゃんと報告しろ。いいな」

「は、はい！」

そして鷺は口元に笑みを浮かべて続けた。

「それと、秀斗に会ったら殺してもかまわないから、ぼこぼこに殴れ」

「はい？」

「弥生のまわりをちよるちよるできなくなるようにな」

その一言でこの状況が全て繋がった。どうやら鷺と秀斗はそうとう仲が悪いらしい。

「あ、はい。やってみます」

（でこピンくらいで勘弁してくれませんか？）

鷺はよろしくな、と言い残すと部屋から出て行った。

彼の姿が見えなくなると歩は全身で息を吐いた。

## 第2章の3 お手紙

「お〜い。歩〜」

勇輝は歩の目の前で手を振った。

どうもどこかへ飛んで行ったらしい。

「戻ってこ〜い」

でこピンを一発喰らわせると、歩は短くうめいて我に返った。そしてすぐさま秀斗にでこピンを放つ。

「痛っ、さっきやったのは勇輝だぜ？」

「あ……つい」

だがこれではこぼことは言えないがぼこぼくらいにはなったのではないかと前向きに考える。

やっとリーダーにまともな報告ができそうだ。

「そつだ。弥生いるよな」

「弥生？ ああ、そこに……」

歩ははたと思いだしたように秀斗に尋ねた。

秀斗が指さした先には、癒慰と談笑をしている弥生がいる。食後のティータイムという優雅な時間が流れていた。

勇輝はそれを目にして、やっぱり俺と住む世界違うなど、遠い目をした。

歩は弥生に近づきながらポケットから封筒を出す。

「弥生」

歩の呼びかけに弥生が振り向いた。

「これ、リーダーから」

その封筒は彼が去っていくときに預けられたものだった。いや、むしろ押しつけられたと言った方がいい。歩はそれを懐にいれておくだけで心臓を握られている気持ちだった。

「鷺君さぎから？ なになに？ ラブレター？」

癒慰が身を乗り出して封筒を見る。

その封筒は目立った装飾もなく、白地にペンで弥生様と書かれたのみだった。

弥生は無言で封を解き、手紙を広げる。

「はあ？ 鷺の野郎がなんだって？」

話を聞きつけた秀斗が弥生の後ろから手紙を覗き込んだ。

鷺と秀斗は昔から事あるごとに衝突し、隊内外に被害を与えてきた。彼らの仲は爆裂に悪い。

「招待状よ。五日後に隼はやぶさに属する隊員を労うためにパーティーを開くみたい」

「え？ まじで？」

それにいち早く反応したのはその知らせを持ってきた本人だった。

「歩君聞いてないの？」

「初耳……」

「弥生。そんなとこに絶対行くなよ！ 鷺がいるっただけで、虫唾が走るぜ」

秀斗は弥生から手紙を奪おうとするがあっさりかわされる。

「秀は黙ってて。訊きたいこともあるし丁度いいわ」

「は？ 絶てえいかせねえ！ なんなら俺もついてく！」

「招待されたのは弥生ちゃんだけですよ」

零華は読んでいた本から視線を上げた。

「弥生ちゃん。鷺さんによろしく言っておいてくださいね」

「わかった」

弥生はこくりと頷く。

「おい零華！ ちっ、こつなりや乗り込んで奴の首を……」

「癒慰」

「おっけ」。秀斗君は私に任せといてね」



癒慰はすぐに弥生の言いたいことをくみ取って親指を立てる。

「なあ、お前のリーダーってそんなに危険な奴なの？」

彼女たちが弥生の着ていく服について話している隣で、勇輝は歩にそつと訊いた。

「いや……そんなことはないけど」

基本無害だが、その気になれば危害は加えたい放題だ。彼の持つ情報量は半端じゃない。

「けどおもしろい名前。鷺って鳥だよな」

「まあ……」

おそらく、というか絶対偽名だろう。

チーム名自体が隼と鳥の名から取ってあるから、リーダーの名前が鳥でもなんの不思議もない。

「でも鷺ってイメージ悪いよな」

歩は、それはお前の勝手な思い込みじゃね？ とは言わずに黙って続きを促す。

勇輝の話に下手につっこみをいれると何倍もの語数で言い返される。変なスイッチを押した日には長い弁舌が始まってしまう。

「なんならもつとかつこいい鳥から取ればよかったのに」

「たとえば？」

「んゝ鷺<sup>わし</sup>とか、鷹<sup>たか</sup>とか」

「あれ以上おっかなくなつて欲しくないんで嫌」

確かに切れ長の目や灰色の髪は鷺のイメージがあるが、猛禽類の名前なんて洒落にならない。

（完全に食われる）

「じゃあ鳩、すずめ、カラス」

今度は身近な鳥を挙げ始めた。どれも登下校のおりに見かけるものばかりだ。

「親近感湧くけど、なんか違う」

（そんな可愛い人じゃない）

「えゝじゃあ……」

そう言つて、勇輝は歩がもういいと止めるまで思いつく鳥の名前を挙げていった。

そして勇輝はそのまま授業をサボり、元気に帰宅した。

## 第2章の3 お手紙（後書き）

家の近くには鷺がいます。

さて、第二章での目標。

タイトルを内容と関わりのあるものをつける。

変なところで切らない。

二つだけか？ とか言わないでください。

はるかな目標として、まともな文章を書くがあります。

では、また〜

第2章の4 彼女が被っていたのは猫は猫でも化け猫でした(前書き)

タイトルがちょっと長い。でもこれが今日のテーマ。

## 第2章の4 彼女が被っていたのは猫は猫でも化け猫でした

翌日、勇輝は朝から喧嘩を吹っかけてきた自称この町の番長を地面に沈めてから学校へ登校した。

(んゝ朝からいい運動をしたな)

おかげで脳はすつきり、心もすつきり。

(そついや最近喧嘩ふっかけられる数が増えたな)

しかも以前のような他区域の不良では無く、やくざの末端のチンピラにからまれるようになった。この間は刺青男に絡まれたので即刻逃げた。やくざとやりあえばるくなことにならない。

もちろんその他の人々には眠ってもらった。

可愛い容姿をしているが喧嘩はめっぼう強いのが勇輝だった。

童顔をからかわれてはその相手を殴り飛ばし、ひ弱と見込んで力ツあげしようとしてきた奴は返り討ちに合わせて財布を川へと捨ててやる。

そうしている内に地元の不良の間に広まった言葉があつた。

曰く。

『人を見かけで判断するな。チワワにだってかまれりや痛い』

もちろん本人は知るはずもない。

チワワと称された勇輝は屋上に上るとテントの布を引いた。明るい室内。

勇輝はきよろきよろと人を探す。ホールには秀斗しかいなかった。

「おはよ〜今日は秀斗だけ？」

「まあな、つうか五人がここに同時にいることの方が珍しいって」

勇輝は秀斗の向かいのソファーに座った。

いつ座ってもこのソファーはふかふかだ。寝転んだらすぐに寝られそうだ。

「へ〜。そういえばこの屋敷ってどれくらいの広さがあんの？」

「さあ、詳しくは知らねえけどけっこう広いぜ？ なんなら歩くか？」

「行く行く！ 探検してみたい」

じゃあ行くか、と秀斗が立ちあがったとたん、覇動が体を貫いた。ぴたりと動きを止める。

覚えのある覇動。

研ぎ澄まされ、凜とした刃のような覇動だ。

もちろん人間である勇輝は何も感じず、不思議そうな顔で秀斗を見ていた。

(こいつは……まさか)

秀斗は勇輝の腕を掴むと強引に扉の前に引つ張って行った。勇輝は訳が分からず、されるがままにされている。

テントへと繋がる扉だ。

そしてその扉を開けると勇輝を押し出す。

「悪い勇輝。探検はまた今度だ」

「は？ なんで？」

「あと三日間ここにはくんな。いいな」

突然の宣告に勇輝は戸惑う。

「え、なんで？」

「俺にもまだわかんねえけど、ここにいたらやべえかもしれねえ。少し様子を見るから三日経ったら来い」

秀斗は早口で一気に言い切ると扉を閉めた。それと同時にテントも消える。

(え〜何があつたのさ)

呆気にとられる勇輝に北風がからかうように吹きつけた……

秀斗に言われた三日間を勇輝はぶーたれて過ごした。

その他諸々も一緒にぐちっている勇輝に歩は適当に相槌を打ちながら報告書を作る。

今回の潜入先は大手会社とあってなかなか身動きが取れない。

(これはじかに行くよりハッキングでもしたほうが楽だったか?)  
歩はパソコンの画面に文字を叩きこみながら思索していた。  
ちなみにここは空き教室だ。  
いい加減屋上が寒くなっただので使われていない教室に入り込んだのだ。

「よし、絶対明日問い詰めてやる」

勇輝は決意を新たに、翌日を向かえるのであった……

そして翌日、勇輝は一段飛ばしで階段を上がっていた。

今日は三日間の交流禁止がとける日だ。

屋上のドアを開けると緑色のテントがあり、勢いよく布を引いた。

「おはよ〜」

手前のソファーにいた秀斗が、やっぱり来たかという顔で迎える。

「早えよ」

「ちゃんと説明してくれよ」

秀斗は頭をかくと、立ち上がって勇輝へと近寄った。

そしてその肩をがしっと掴んで勇輝の顔をじっと見た。緊張した面持ちに勇輝は息を飲む。

(やべ〜、俺やっぱり殺されちゃっつ?)



「いいか、落ち着いて聞け。実はよ……」

「そこで何をしている」

秀斗の言葉を遮って、冷やかな声が入から落ちてきた。

聞いたことがあるような声なのに、知っているものとは質が違う。いつものご飯に一味をかけたような……

「秀、なぜここにこんな奴がいる」

見上げると、二階の廊下に弥生がいた。

こちらを見下ろす目は鋭く、冷たい。

「あ、弥生。おは……よう?」

勇輝もさすがに弥生の雰囲気が違うことに気がつく。

「弥生、覚えてるよな。春日勇輝だ。昂乱の時に協力してもらった」

「知っている。不愉快だ、消えろ」

口調も以前と変わっている。

柔らかかさや優しさは無くなり、表情も乏しい。

「俺の友達だ」

「そのような者が友だと?」

「ああ、手を出したら許さねえからな」

秀斗は勇輝を守るようにその前に立った。

「ちよ、弥生？ どうしたんだよ！」

勇輝は弥生を見上げて叫んだ。

「私に話しかけるな下等種が。約束は違えないが覚えておけ。貴様が私たちの邪魔になることがあれば即刻斬る」

「おい弥生！」

秀斗の呼びかけにも答えず、弥生はその場を去ってしまった。呆然とする勇輝を残して……

**第2章の4 彼女が被っていたのは猫は猫でも化け猫でした（後書き）**

第一章を手直し中ですが、直したいところが次から次へと出てくる。

こういつのをモグラたたきっていうんだなあ、としみじみ。

彼らの容姿を細かく入れてみました。前はひどくざっくりしていたので。

勇輝、歩は制服を追加、第1章の1話目へ。

転校生の服装および容姿は10話目へ。

気になったら覗いてください。

## 第2章の5 よくわかる魔術師講座

勇輝は呆然と立ち尽くす。

(カトウシユ? それって俺のこと?)

ぐるぐると同じ言葉が勇輝の頭をめぐる。突然向けられた敵意と別人のような弥生。

秀斗は溜息をつくと勇輝の肩に手をおいてソファーに座らせた。

「弥生って双子?」

まったくもって理解不能だ。三日前は普通の弥生だったはずだ。

「……実は、あれが弥生なんだ」

秀斗は難しい顔で話した。実際、彼らも相当戸惑ったのだ。

「え?」

「もともとの弥生の性格はああいう感じ。今までの方が異常」

勇輝は今までの弥生を思い出す。

(彩に似て、可愛らしい、女の子……彩に似て?)

「これは俺らの推察だけど。今まではお前の彼女の影響が残ってたんじゃないかと思う」

「あー、なるほど」

思い当たる節はかなりある。弥生は時々彩のようなしぐさをする時があった。

魂が繋がっていたので無意識の内に影響を受けたのだろう。

「それで、その影響も薄れて本来の弥生が戻ったんじゃないかねえかと…」

「え？　なんで彩のこと知ってるの？」

勇輝はさらりと流しかけたがつっこんだ。秀斗はこともなげに返す。

「お前が屋上で弥生と話してる時に俺らもいた」

勇輝の頭の中にこの間の出来事がすごい勢いで駆け巡る。

（え、見られてた？　俺が拳銃突きつけたところも？）

とたんに勇輝は青くなって、勢いよく頭を下げた。

「悪い秀斗！　俺もあんなつもりじゃなくて、ただちょっと頭にきてて！」

弥生に思いを寄せている秀斗が勇輝を許すはずがないのだ。勇輝は拳骨でも落ちてくるかと身構えるが、秀斗は怒るわけでもなく、やや目を伏せた。その瞳にさみしさが横切る。

「別に誰もお前を責めやしねえよ。逆にいい度胸してると思ったぜ」

呟くような秀斗の声に勇輝ははじかれたように頭をあげると、顔を輝かせた。

「まじ？ よかった。絶交されるかと思ったあ」

「俺たちも、似たようなことをしてきたからな……」

一瞬秀斗の表情に混ざった複雑さは、すぐにかき消えた。

「それより、だ。豹変した弥生にどう対応するか考えねえと」

「だなあ。変わった理由はわかったけど、なんで俺を嫌うのさ」

勇輝は好かれるような覚えはないが嫌われる覚えもない。拳銃を向けたこともあったがあれは雨降って地固まるで解決したはずだ。それなのにまさかの雨降って土砂崩れとは……

「……それがなあ、けっこうややこしいんだ」

ちよつと長いけど聞くか？ との問いに勇輝は即刻頷く。

「俺らが魔術師ってことは言ったよな」

彼らの人ならざる能力については、昂乱の一件で目の当たりにしていた。

「うん」

「弥生は人一倍魔術師ってことに誇りを持っててるから、無能な人間

「が好かないんだ」

「それってひどくない？」

秀斗は頭を掻きながら言葉を選んで話をすすめた。

「魔術師ってのは根本的に人間を嫌う。俺らの世界では人間の印象は悪いからな」

「俺らの世界？」

勇輝は気になる単語に目を輝かせた。

「魔術界つう、霊界、魔界、人間界と並ぶ異空間があんだけど……信じるか？」

「信じる」

勇輝は未だに死んだら霊界、妖怪は魔界から来ていると信じている純粋な少年だった。

（こいつは相変わらず強えな）

「それでき……俺らの世界では、程度に差はあっても人間は悪い奴って教えられんだ」

「え、なんで？」

「俺らは元々人間界にいたんだけどよ。迫害されて逃げたんだ」

迫害。

その一言が勇輝の胸に深く沈んだ。

それがどういうことかぐらいは知っている。

ナチスのユダヤ人への迫害。アンネの日記で涙を流したのは小学校四年生の時だった。

そして高校では魔女狩りには世界史の教科書を破りたい衝動に駆られた。

「ま、それも大昔のことだけだな……だから俺はもう気になんかならねえし、人間はおもしれえと思う。でも、まだ嫌ってる奴もいるんだ」

「もしかして錬魔も？」

最初に会った時からいい感情を持たれてないことは感じていたが、最近は特に顕著だ。

「まあな。でもあいつはまだまし……あいつは理由があって嫌っているからな。まだ解決の糸口はある」

「理由？」

「ああ、詳しくは知らねえけどこっちに来たときに人間といざこざがあつたらしい。問題は弥生だ。こっちは完全に食わず嫌い」

弥生が人間に協力したことはなく、会話を交わすことすらまれだった。ゆえに彼らは弥生が人間二人と行動を共にしたことを驚いたのだ。

(たとえ食われても俺はおいしくないです……)



例えなのはわかっているが洒落にならない。  
あの剣で三枚おろしにされそうだ。

「こればかりは俺らにもどうしようもねえ。まあ弥生は無差別に殺すようなことはねえけど……逆鱗に触れたら終わりだぜ」

秀斗は念を押しながら、その脳裏には今まで自分が受けた痛い目が高速で流れた。

守護障壁を身に纏う秀斗だから生きてこられたが、人間の勇輝ではあの世行きは確実だ。

「……仲良くなれると思ったのにな」

(彩のことを知ってる、数少ない友達だと思ったのに……)

「死にたくなけりゃ、極力弥生には近づくな」

秀斗の言葉が胸に染みる。その胸に広がるものはただの悔しさではなく、理不尽な壁への苛立ちも含んでいた。

(人間の、何が悪いんだよ……)

## 第2章の5 よくわかる魔術師講座（後書き）

### 神名の裏話

初期設定では転校生がもう一人いました。涼くん。風使いです。

髪の毛は緑色……ここらへんやめてよかったと思う。

転校生多すぎる、という理由でさよなら……

ついでに癒慰の属性は雷でした。

たぶん風神雷神感覚。

その後神名の迷走はさらに続く……

## 第2章の6 号外(号外だよ)(前書き)

PVアクセス10000突破です。皆様ありがとうございました。これを栄養に頑張ります。

## 第2章の6 号外／号外だよ

勇輝がしゅんと頂垂れていると、荒々しく扉が開かれた。音に釣られて二人は視線をそちらに向ける。

「た、大変よ！」

そこにいたのは癒慰だった。

走って来たのか息が上がっており、表情は硬い。ふだんの和み系の彼女からは考えられない表情だ。

「何かあったのか？」

秀斗が怪訝そうに訊いた。

癒慰はソファアームの間にある小さな机に持っていた紙を叩きつけた。それはやや薄いが新聞のようだ。

「まずいことになったわ……」

二人はその紙面を覗き込む。

目立つよう見出しもついており、新聞社名はないが普段目にするものと大した違いはない。

「死堅牢如月が復活」

秀斗が読んだのは一番大きな見出しだ。

「その影には謎の少年が……あれ？」

そして勇輝が読んだのが次に大きな見出しで、ごく丁寧に写真が添えてある。

可愛い男の子の振り向きざまの写真だった。

「これ俺？」

指をさして確認する。

(俺、新聞に載るようなことやったっけ？)

不思議に思いつつも勇輝はその記事に目を通す。

内容は昂乱を捕まえたことにより如月が正式に復活したということと、それにある男子高校生が協力したというものだった。全て事実だ。

「勇輝……さっき言ったことなしな」

その記事を読んで秀斗は呻くように言った。

「え？」

「弥生から逃げろって話はなし。どうにかしてあいつに人間《お前》の存在を認めてもらえ」

「なんで？」

(この記事に載ったからなんなんだ？ 少し悪名が上がっただけじゃないか)

「裏社会にお前の存在が広まった以上、お前にとばっちりがいく可能性が高けえ。自慢じゃねえけど俺らは恨まれまくってるからよ」

過去の因縁だけではない。この機に四剣琅を打ち取ってハクをつけようとするごろつきもでてくるのだ。

だろーな、という言葉は飲み込んで言葉の続きを待つ。

「勇輝、俺らの仲間になれ」

「はい？」

全く話の筋が見えていない勇輝に、見かねた癒慰が説明を加える。

「勇輝君、今のままでは殺されてしまうわ。それを回避するためにも龍牙隊に入ってほしいの」

勇輝は間抜けな顔で癒慰を見返した。殺されると言われても平和な日本、まったく真実味がない。

「龍牙隊の名を持っていれば襲撃の数はかなり減るし、私たちも隊外の間人では思うように動けないの」

癒慰が勇輝に向ける眼差しは真剣で、勇輝はじわじわと不安になる。

「殴り込もうにも大義名分があるからな」

「それで、弥生ちゃんに認めてもらわないといけないの」

二人はどんどん話を進めていく。ついていけなくなった勇輝が慌てて制止した。

「ちょっと待って。もっとわかりやすく」

癒慰はため息を喉元ぎりぎりまで飲み込むと、ゆっくりと話した。気は急ぐが、勇輝が理解しなければ話は進まない。

「あのね、この新聞は裏社会にしか発行されない特殊なものなの。影響だけ言えばやくざに絡まれるわ」

「あ……」

勇輝は短く声を上げた。思い当たる節がかなりある。

「もう絡まれたのね……仲間に入るのはそういうのを防ぐためでもあるの」

「でもなんで弥生が出てくるんだ？」

「弥生が俺らのリーダーだからだ」

(なんだって?)

「お前らのリーダーって弥生だったの？」

勇輝はてっきり鍊魔か零華だと思っていた。弥生はあまり発言をしなかったうえ、彼らをまとめたところも見たことがなかったからだ。

「そ、俺らの中で一番強えから。それで俺が副リーダー」

「え？ 秀斗が副？」

勇輝は明らかに疑わしい顔を向ける。なぜ一番ちやらんぽらんが副なのか、とそこからはつきりと心を読むことが出来るような顔だ。

「文句あつかあ？」

やや脚色気味に心の声を受け取ってしまった秀斗はガンを飛ばして戦闘態勢に入る。

「やるかあ？」

売られた喧嘩は高額買取りを信条とする勇輝も臨戦態勢を取る。

（喧嘩だ喧嘩！）

「はいストップ。今二人がここでやりあってもなんの進展もないでしょ」

見るに見かねた癒慰が呆れながら二人の間に割って入る。今ここで騒ぎを起して弥生が来れば間違いなく二人は血を見ることになるだろう。

「止めんなよ。癒慰」

「そーそー。久しぶりに楽しもうと思ったのにさ」



この瞬間に癒慰は悟った。勇輝君は熱血喧嘩バカの不良なのね、と。

「まず身の安全を確保しないと喧嘩もできないのよ？」

「そっか……よし、俺もお前らの仲間になりたいし、弥生と話を付けてやる！」

そう意気込んでたと気付く。

「そっいや、お前らって何の団体？」

昂乱の一件では彼らの組織がかかわっていたようだったが、勇輝は特に追及しなかったのだ。

今さらの質問に二人は脱力してソファーに座る。勇輝も座って、場は仕切り直しとなった。

「まず、俺たちの所属してる組織は龍牙隊。表じゃ普通の会社をやつてつけど、裏では政府の要人の護衛とか、密偵とか色々やってる何でも屋」

「龍牙隊？」

(ずいぶん古風な名前)

勇輝はもらったプレゼントを開ける子供のようになくわくわくしていた。自分が幼いころ憧れていた非現実的な世界がすぐそこにあるのだ。

「そう。それで俺らのチームが死堅牢、如月」

「はい。しけんろーの意味がわかりません」

勇輝は潔く手をあげた。外国人の名前でよくある、どこまでが苗字でどこからが名前ですか、の状態だ。

その質問に癒慰が親切に紙に死堅牢と書いてくれた。その上に龍牙隊とも書き加えてくれる。

「死堅牢ってのは階級の名前だ。これはもともとは四剣琅って漢字で……」

秀斗は死堅牢と書かれた隣に四剣琅と書いた。

「すごい字面。縁起悪」

その字を見た瞬間つい突っ込みを入れてしまう。これは物騒だがもう一つの字も普通じゃない。

「まず、階級つてのがあつてね。能力者の強さに応じて一から十まで割り振られるの。四剣琅の方はその四番目の呼び方。階級をもらった能力者は自分のチームを作ることができて、それが如月」

癒慰は紙を指さしながら丁寧に教える。

きつと面倒みのよい、いいお姉さんになるなあ、と勇輝はいろいろなことを考えていた。

「うんうん。それで？」

雑念を振り払って、聞いていますよアピールをする。

(四剣琅の如月つと)

頭のメモに書きつけておく。これを名乗ることになるとはなかなかかっこいい。

「で、死堅牢の方は通り名だな。あだ名みたいなもんだ。昔は一つの階級に複数のチームがあったから、各チームにあった当て字が使われててよ」

勇輝は死堅牢と書かれた紙に目を落とす。

チームにあつた漢字と言つ割にはずいぶん恐ろしい字ではないだろうか。

「俺らにつけられた意味は、狙われれば最後。脱出不可能の堅固な牢の中で死を待つしかない……んだとよ」

これは彼らが自分たちで言つたわけではない。いつのまにか誰かが言いだし、広まったのだ。

「へ〜。ということは前みたい危険がいつぱい」

勇輝の目が遠い。きつと昂乱との一戦を思い出しているのだろう。

「もうあんな仕事はねえよ。あれが最後の生き残りだったし、今不景気で暗殺の仕事なんて入ってこねえから」

「暗殺？」

不穏な言葉に訊き返す。

「そ、俺ら如月は暗殺専門だから」

しかし、彼らは暗殺を昼夜問わず堂々とやるので、暗殺の如月はいつしか抹殺の如月と呼ばれるようになったことを彼らは知らなかった。

(……聞かなきゃよかった)

あっけらかんと笑う秀斗に、本当にここに入って身の安全があるのかと不安に思う勇輝だった。

## 第2章の7 月光に浮かぶ鳥の影

勇輝が弥生となかなか接触を図れないでいたところ、鷺が主宰するパーティーの日となった。

ぎゃーぎゃーと煩い秀斗は癒慰の植物の蔓で縛りつけられ、妨害しようとも身動きが取れない。

弥生は一人、部屋で身支度を整えていた。正装に身を包み、鏡でその姿を確認する。

(これをはおるのも久しぶりだな)

鏡に映る自分は、あのころと同じだ。

彩の魂が体から抜けて、意識が戻ったような感覚になった。いや、眠っていた自分が全て覚醒したのだ。

彩との時間は全て覚えている。勇輝とのこともだ。今思うと正気の沙汰ではなかった。

(この私があのような下等な者と共にいたとはな)

彩との約束を今さら違えるつもりはないが、いざ斬るとなればためらわないだろう。

弥生は招待状を持って部屋を出た。

玄関ホールで癒慰と零華と二言三言交わしてから屋敷を後にする。その姿を見送った二人はは思わず呟いた。

「結局あの格好でいっちゃったね」

「ドレスを着せたかったのですが……」

二人は同時に溜息をついた。

招待状によると、会場は本部ではなくどこかのホテルの広間のようだ。

弥生は人目につかないように身軽にビルの間を駆け抜けていった。屋根つたいに飛び移ることも容易にやってのける。彼らの中で弥生が一番身軽なのだ。

弥生が外の世界にでるのは久しぶりだ。学校へは行ったが街を歩いたことはない。

だが夜の街を駆けるだけでその変貌ぶりは見てとれる。外灯は闇を無くし、ネオンの光は休まる心を無くした。人が、街が二十四時間動き、世の中が刻一刻と変わっていく。

(浅ましいな)

弥生にはこの発展が主義に反するのか、鼻で笑うと加速した。

ほどなく目的のホテルが見え、弥生はそれを上から下まで見た。

そこはこの町で一番の高級ホテルとして名高いところで、政治家や富裕層に利用されていた。

建物全体がライトアップされ、玄関にはいくつもの高級車が横付けされている。薄明かりに浮かびあがる庭園もきちんと手入れが行き届き、噴水の音が通りゆく者の視線を奪う。

一歩中に足を踏み入れれば、まばゆいほどの装飾が施されており、贅を尽くしたという表現がよく似合った。ソファ一つを取っても一級品に間違いなく、部屋の隅には珍しい花が惜しげもなく飾っている。

だが華々しい雰囲気割には静かすぎた。

弥生はそれらの装飾品には目もくれず、まっすぐフロントへと向かった。

弥生の存在に気づいた従業員がにこやかに話しかける。その変わった服装を前にしても表情一つ変えないあたりはこのホテルの指導の徹底さが伺えた。

「お客様、本日は当館貸し切りとなっております。失礼ですが招待状はお持ちでしょうか？」

まさかの全館貸し切りにしたらしい。

相変わらず考えることは分からんな、と思いながら弥生は招待状を出す。

「弥生様ですね。ようこそお出で下さいました。会場は五階です」

弥生の羽織を見ても何一つ表情を変えないことからして、彼女らは一般人らしかった。

弥生は警戒を解き、招待状を懐へしまつと階段へと向かった。

「あの、エレベーターがごさいますが」

「いい」

弥生は赤い絨毯が敷かれた階段を上がる。

外と関わった時間があまりにも短かかったため、正直エレベーターの使い方がわからなかったのだ。

階段をよく見れば手すりの細部にまで装飾が施されている。階を  
上るごとに彫られている文様が変わっていく。

五階の文様には鳥があしらわれていた。

そこそこのスピードで上がっていたのに弥生は息一つ乱さない。

(鳥か……悪くない趣味だ)

弥生は視線をその先へと向けた。階段を上った正面には大きな扉  
があり、半開きになっていた。

あれが会場だろう。その証拠に隊員服を着ているものが立ち話を  
している。

こちらに進んでくる弥生に気づいた隊員達は反射的に礼を取った。  
弥生は一瞥すらせずに会場に入っていく。

そして弥生の姿が見えなくなると囁きあつた。

「おい。今の誰だ？」

「知らねえよ。でもあの羽織来てたぜ？」

「だよな……けど牙軍に銀髪の女なんかいたか？」

「わかんねーよ。俺だって牙軍の顔全部覚えてるわけじゃねえし……」

二人は顔を見合せて同時に首をかしげた。

「ま、美人だったけどな」

「ああ、美人だったな」

そして、会場の中でもざわめきが生まれていた。誰もが遠巻きに



弥生を見ている。

弥生はそんな視線も気にせず、目的の人物を探した。

周りを視線を巡らすと、隊員服を着ている者も多いが、多くの女性がひらひらと動きにくそうな服を着ていることに気がついた。

(動きにくそうな服だな。あれが正装なのか?)

癒慰がたまにそういうのを着るが、もっとフリルが多い。

もしかするとあれが二人の言っていたドレスという物なのかという考えにたどりつく。

行く前に二人が着る着るとするさかった服はそういう感じで、弥生は頑として拒否した。

何かあった時に戦えない、その一つの理由で。

弥生が首を巡らせていると、人ゴミのなかに灰色の頭が見えた。

男は人に囲まれて話をしていた。詰襟の服に薄茶色の羽織をはおっている。

胸には彼のチームを表す紋章が入っており、その姿は抜きんできて目立っていた。

そしてさらに彼を目ださせるのが灰色の髪に鋭い切れ長の目。歳の頃は二十代後半で、すらりとした立ち居振る舞いは計算された美しさだった。

そんな彼の下へ次から次へと人が挨拶をしてくる。隊員服を着た彼らも同じ紋章を付けていた。

このパーティーは日頃の感謝と親睦のためにと全国に散らばる諜報員を集めて開かれた。それと同時に組織意識を高め、裏切りを防ぐという狙いもある。

だが彼はいささか飽きていた。ここには部下だけではなく協力し

てくるお得意様も招いてある。

そのためまったく気がやすまらない。とはいうのもこちらも相手の弱みを握っているが、相手もこちらの情報を知っているからだ。牽制し合い、均衡を保つ。

それに疲れてきた彼は、先ほどから部屋に引きさがる機会をうかがっていたのだ。

ふと、にわかに辺りがざわめき始める。

「あら、何かあったのかしら」

ワインを片手に談笑をしていた老婦人がざわめきのほうへと顔を向けた。

辺りにいる人が一歩、二歩と下がっていく。そうして現れた鷺は人物を信じられないといった面持ちで見た。

「や、弥生……」

鷺の口から思わず言葉がこぼれる。

そして彼の表情は先ほどまでの仮面ではなく、驚きと嬉しさが入り混じった、彼本来の表情だった。

最後に会ったのは十年前、あれから弥生は少し大人びて美しくなっていた。だがその雰囲気と表情はあのころと何一つ変わらない。

「来てくれたのか」

来るはずがないと思っていた。あの招待状すら届くか怪しかったのだ。まして、弥生が人間の集まる場所に姿を現すとは考えられなかった。

「ああ」

「来い」

鷺は踵を返して、手近なドアから出た。弥生もそれについていく。

「いいのか？ 話をしていたようだったが」

「かまわない。迷惑な依頼をされて困っていたところだったから」

そして鷺は一つの部屋ドアを開け、中に入った。どうやら鷺の部屋らしい。

鷺は明かりをつけ、弥生にソファに座るよう促した。そして自分はいかに座る。

「鷺か？」

弥生はまじまじと目の前の男を見たあとにそう訊いた。弥生が疑問に思うのも無理はない。十年の歳月は人を容易に変えてしまう。今の鷺にはあのころの少年らしさは残っていなかった。

「ああ、俺だよ。十年経ってんだ。外見くらい変わるさ」

そうかと呟く彼女はあまり変わっていない。

彼女だけではなく、彼らも、ではあるが……

「しかし、その格好で来るとはな。少し驚いたぞ」

弥生の服装はデザインこそ違いが鷺が着ているものと同じだ。裾の長い羽織に一見すれば軍服のようなデザインの上着、そしてシヨ

ートパンツ。しかも寒い冬だというのに足を露出している。  
しなやかな足は美しく、羽織で半分は隠れると言っても、パーテ  
ィーに来るような格好ではない。

「お前だって同じじゃないか」

「俺は男だし、主催者だからな……」

ドレスぐらいなら貸すぞ、と言いかけて止めた。下手に女の格好  
をさせて変な虫がこれ以上増えては困る。

「ならせめてレギンスでもはけ。さすがに寒かっただろう」

「まあな、外が冬だったことを忘れていた。しかし、レギンスとは  
なんだ？」

外の季節が冬だということすら気にしない弥生が、世の中の流行  
を気にするはずなかった。

「まあいい。それで何の用だ？ お前がここに何の目的もなく来た  
わけじゃないんだろ？」

鷺はゆったりとソファーに身を預けた。

十年が経とうとも違和感などない、目の前にいるのは弥生のまま、  
銀の髪に男のような物言い、そして人を射抜く冷徹な目、昔と何一  
つ変わらない。

（歩の奴、騙されてるな……まあ、あいつが狼狽する様も面白いか  
らもう少し待つか）

「私がいなかった十年間のことを知りたい。外も中もずいぶん変わったようだからな」

鷲は弥生の要求を聞くと、頭を整理した。様々な情報を組立、取捨選択をする。それを数秒で終わらせると話し出した。

「まず中のことから。ま、見てのとおり世界が平和になっても龍牙隊は存在している。ただ組織としてはずいぶん小さくなったけど。今牙軍でいるのは一、二、八、俺の零とお前らの四だ。五、六、七、九、十は引退、もう四十過ぎの奴らばつだから。半分は幹部へ、もう半分は表で生活してる」

牙軍とは異能を持ったもの達の総称で、その強さによって一から十の階級に分けられる。特殊部隊として零である情報部があり、弥生たちは四の階級を与えられている。牙軍は独自の小隊を持つことができ、それが如月だった。

「そんなにいたのか」

ぼんやりと知っている顔を思い浮かべる、弥生は自分より上の階級としか会ったことがなかったためその数は少ない。会ったというよりは半ば強制的に連れて行かれたのだが……

「残っている牙軍もほとんど代替わりしてる。お前が知っている奴で言うと、綾霸れんぱが鎌堂けんどう二で朧月夜と改名して後を継いだ」

鎌堂二は二番目の階級の名だ。弥生は以前負けた相手を思い出して眉根をひそめた。

「似合わん名だな」

「あと、美月さんは相変わらずだ。中はこんなもんだな。外は……これはお前らがひきこもったところから言った方がいいよな……ってことは二十年前からか」

鷲は脳内にある情報を遡っていく。二十年前というと、彼は十歳にも満たなかった。

「まず、ソ連が解体してロシア連邦になった」

「あの国が解体？ そんなことがあるのか」

ソ連は冷戦の二大国の内の一つで、弥生の記憶にもすっかりと残っている。弥生自身その冷戦に身を投じていた。

「ああ、今世界に明確なリーダーはいない。アメリカも強いが昔ほどの力はないし、核の火種が燻ってる状態だ。戦争はないが紛争は絶えない」

冷戦中は情報工作や暗殺、破壊が主な任務だったが、最近では警察捜査の協力や要人の護衛の任務が増えた。

「まだ争いをやっているのか」

「まあな……人間界の動きはざっとこんなもんだ……本部に詳しい資料があるがいるか？」

本部の資料室には世界中の情報がある。民間から国家機密までその種は多岐にわたる。

「ああ。他の奴に読ませたい」

「わかった。後で届ける」

一度話を終わらせると鷺は弥生の表情を改めて見た。

初めて会ったのは二十年以上前、あの時も何を考えているのか読めない表情だった。そして戦場でのみ薄く笑う……

「お前は、何も聞かないのだな」

鷺は弥生の声に現実に戻された。

言っていることの検討はつく。いなかった十年のことだろう。

「俺は、お前が帰ってきてくれただけでいい」

それに弥生に記憶がないことはすでに聞いていた。無理に探り出すのは鷺の主義に反する。

「借りを作ったままというのは嫌なのだが」

鷺は少々不愉快そうな顔をしている弥生を見て、昔から貸し借りが嫌いだったことを思い出した。

「そうだな……何か礼がしたいのなら、如月に行けるようにしてくれ。資料を届けるにも異空間に閉じこもられたままでは困る」

彼らが住む屋敷はそのチーム名から如月と呼ばれる。

鷺は何度かそこに行こうとしたが、本体内にある四剣琅の区画は無人で、繋がっているはずの扉も無限ループを繰り返すだけだった。

「ならばこれをやろう」

そう言っつて弥生が懐から出したのは掌に乗るほどの玉だった。全体に銀色がかかった水晶のようで、ところどころ黒い模様が入っている。

鷺はそれを受け取るとまじまじと見た。

「それを持つて死堅牢の区画にある一番奥の扉をくぐればいい」

鷺は彼の能力ゆえに、多少なら普通ならざるものの気配を感じることができると。

その玉が持つ空気は弥生が身に纏う物を同じで、手の平から伝わる力からもそれが自然界にあるものではないことが分かった。

「ありがとな、弥生」

これで何時でも如月に行ける。殴りたい時に秀斗が殴れるようになつた。

「私の用はそれだけだ」

「なら少しパーティーを楽しんでいけばいい。紹介ぐらいはする」

弥生はすつと立ち上がつてドアへと歩きだした。

「下等な奴らと慣れ合つつもりはない」

弥生はそう言い捨てると出ていった。

「人間嫌いも相変わらずつてわけか」



鷺は手の内で貰った玉を転がした。そして脳裏に報告の中にあつた一人の少年の姿が浮かぶ。昂乱の一件に関わったとされ、牙軍の間でも話題になった。

（近いうちに会えるだろう。その時は……）

鷺は玉をぐっと握りしめた。

（歓迎してやらないとな）

## 第2章の8 何事もまず話し合いから

最近何かと理由をつけて授業をさぼっていたが、そろそろ出た方がいいかというなげなしの良心に動かされ、勇輝は久々に教室にいた。最近まともに授業に出ている歩が珍しいなと驚いていた。

歩は如月におじやましたら鷺になにをされるかわからないので自粛中なのだ。

しかし、いくらこのクラスが落ちこぼれ組であったとしても授業は進んでいる。長らくご無沙汰していた勇輝がついていけないのは当たり前だった。

只今の授業は化学。担任代理を務めている葉月がどんどん黒板を白くしていく。

数字とアルファベットしかないその黒板を見ながら、勇輝は違うことを考えていた。

弥生に人間を認めさせる方法だ。

秀斗達の話では弥生と剣の勝負をして勝つことができれば必ず認めもらえるらしいが、学校の体育での剣道の経験しかない勇輝に到底勝てるはずがなかった。

(人間の偉大さを教えるってのはどうだろう)

人間は科学で空を飛べるようになった。遠くの人とも話せるし、世界中につながる事ができる。

(いやあ、でもそんなこと言ってもな)

あの態度を見る限り聞く耳なんて持つてくれそうもない。逆に馬鹿にされてしまうかもしれない。

(俺個人のすごさとかをアピールするか……俺のすごさってなんだ？)

勇輝はそこで思考を止める。無駄なあがきだった。

(やっぱりここは直接弥生に頼んだ方が早い気がするな。何事も直球が一番って言うし)

そう結論付けると、弥生に言う言葉を考え始めた……

勇輝は本日の授業にフルで出て、学校の日がかなり疲れることを知った。なによりも椅子にずっと座っているのが辛い。

そして、零華は毎時間授業を受けていることを知った。零華の姿を屋敷の中で見るのが稀だったのは、ちゃんと学生生活を送っていたからだった。癒慰もよく出席している。

そして放課後、勇輝は気合を入れてテントの布を捲った。

ホールにいたのは秀斗と癒慰で、二人とも快く迎えてくれた。秀斗は授業に出ていなかったのになぜか制服だ。

(そついやこいつらの私服って見たことないや)

勇輝はソファアに腰をかけ、水を一杯飲み干す。そして、目的を遂げるため尋ねた。

「弥生はどこ？ 話をしたいんだけど」

その問いに二人は固まって、勇輝の顔をまじまじと見る。その顔は正気か、と問いたそうだ。

「弥生は自分の部屋にいるけど、本当に会いに行くのか？」

「うん。話をしないと始まらないから」

勇輝の決心が固いことを見て、秀斗は立ち上がった。

「ついてこいよ。俺が案内する」

「ありがとう」

勇輝は秀斗の後に続いて部屋を出た。

ホールの外は長い廊下が続いており、多くの部屋が立ち並んでいる。廊下は一本ではなく多くの筋に分かれている。

時たま現れる甲冑に目を奪われながら、そこをくねくねと曲がりたどり着いたのは、他と比べると一回りドアの大きい部屋だった。両開きのドアで、重厚感がある。

(うつわどきどきする)

こんな気持ちになるのは、不良になることを父親に告げた時以来かもしれない。勇気を振り絞って宣言したが、あっさり了承され、その上頑張れと言われて拍子抜けを通り越して狼狽したのを覚えている。

秀斗がドアノブに手をかけて、ぴたりと止まる。

「ノックすんの忘れてた」

そう呟くと軽くドアを叩いた。

昔、ノックをし忘れて入ったところ、ナイフが飛んで来て壁に刺さった。忘れる度に得物が大きくなっていったからそろそろ銃あたりがきそうだ。

「秀斗だ。入るぜ」

秀斗は返事も待たずに部屋に入る。そつと勇輝もそれに続いた。弥生の部屋は広かった。その広さは家具が少ないせいにより強調される。

ドアを開けて正面に机と椅子。後の窓は出窓になっている。そして窓の隣の壁には一枚の写真。勇輝の所からは誰が写っているかは分からないが複数名が映っているように見えた。

そして壁伝いに視線を動かすと、バルコニーがあった。部屋の隅にベッドがある。

弥生は正面の出窓に腰をかけていた。彼女も制服を着ている。

「なんの用だ秀」

そしてすぐに後ろの勇輝に気がつくとすつと目を細めた。

前に見た時は遠くてわからなかったが、今の弥生は彩がいた時よりも圧倒的に美しかった。

研ぎ澄まされた刃のような美しさは勇輝の体を萎縮させた。

「なんのつもりだ？」

「話だけでも聞いてやってくれ」

そう言つと秀斗は勇輝の背中を押した。

勇輝はそれに励まされ、弥生の威圧に吞まれそうになるのをなんとか踏ん張り気を奮い立たせる。

「や、弥生。俺はお前らの仲間になりたい。俺を、認めてほしい」

全身から声を振り絞った。

弥生はその言葉を聞くと口角をすつとあげた。

美しさは微塵も損なわれることなく、逆により鋭さをましていく。

冷笑、それを見た瞬間、勇輝は息が詰まった。

「笑わせるな。貴様のような下等な者が私たちの仲間になるだと？

よほど首を刎ねられたいと見える」

弥生は冷笑を浮かべたまま霸動を勇輝に叩きつけた。向かってくる霸動を感じて秀斗が自分の霸動を障壁の代わりにする。

障壁を出せないほど、弥生の攻撃が早かったのだ。

勇輝は突然、水の中に突き落とされたような錯覚に陥った。全く息ができず、空気が上下左右全ての方向から迫ってくる。

秀斗が前に立ったことにより少しましになったが呼吸は正常にもどらず、喉を抑えて苦しそうに粗い息をしている。

(ちっ、こんな壁じゃあ防ぎきれねえ！)

秀斗は全身の力を集中させて弥生の霸動を押し返すと、一瞬の間をついて勇輝を抱えてドアを蹴り開け、部屋から転げるように出た。急に新鮮な空気が肺に流れ込んで勇輝は一気にむせる。苦しくて、その目には涙が滲んでいた。

(さ、さっきの、は、一体、なんだよ)

弥生有能力か何かかと勇輝は推測するが、混乱した頭では状況が把握できない。

「勇輝、立てるか？」

秀斗の間に勇輝はゆっくり頷く。

秀斗に手を貸してもらいながらゆっくり歩く。

「わりい、最初っから障壁張って守ってればこんなことにはならなかった」

「秀斗のせいじゃない……」

勇輝は荒い息を整えた。深呼吸をして気を落ち着かせる。

(正直、怖かった。本当に死ぬかと思った)

勇輝はぐっと唇を噛みしめた。

悔しさと悲しさがこみ上げてくる。だがそれらを押しつけて上がってきたのは怒りだった。

(弥生がなんで人間を嫌ってるかなんて知らない)

勇輝の怒りは人間を差別していることよりも、自分が人間としてではなく、春日勇輝として見てもらえなかったことのほうが大きい。

(俺は、春日勇輝だ。俺は必ず弥生に俺を認めさせる！)

二人はゆっくりとした足取りでホールへと向かった。早急に対策を練らなければいけない。

歩いていくうちに、勇輝の気分はだいぶよくなった。

そしてホールに入ると、癒慰が心配そうな顔で駆け寄ってきた。

「大丈夫だった？」

「まあ、生きてるし」

勇輝はふう、と息を吐いてソファーに座りこんだ。精神力を持っていたかれた感じた。

「しばらく様子見だな。あいつの機嫌が悪いとまじで殺されかねえ」

「……今日も相当機嫌悪かったと思うけど？」

そんなに危なかったのか今日、と勇輝は非難の眼差しを秀斗に向けた。

秀斗はついと視線を明後日に向けて

「んじゃ、今後の対策を練りますか」

とごまかした。

そして、二言三言話しだすとドアが開いた。

いつも勇輝が使用しているテントへと通じるドアだ。

(零華が帰ってきた？)

三人が顔をそちらに向けると同時に、呑気な声がホールに響いた。

「おじゃましてーす」



戸口にいたのは藍色の髪の美女ではなく、ねぐせ頭に白衣の担任代理、葉月だった。

「げっ！ 葉月！」

秀斗がものすごく嫌そうな顔で葉月を迎える。

「いや〜なんかテントあるか思ったら如月にでてびっくり」

あははと笑いながら葉月は勇輝の向かい、秀斗の隣に座った。びっくりとしたと言いながら、まったく驚いた様子ではない。

（ちっ、障壁の対象を一般人だけにしたのが悪かったか）

秀斗はこのテントが他の生徒や教師にはれないように四方を障壁で囲って姿を隠していた。

もちろん一般人から勇輝は外されており、組織の一員である歩にもテントは見える。同じ組織に所属している葉月もそれは同じだった。

（くそ〜こいつの存在忘れてたぜ）

転校初日に会って以来、特になんの干渉もしてこなかったので記憶から抜け落ちていたのだ。

「それにしても勇輝君。君いろいろ大変みたいだね」

葉月は慣れ慣れしく勇輝に話しかけた。

勇輝はそのテンションについていけず、はあと間抜けな返事をす

る。

「勇輝は俺たちの仲間だからな。やらねえぞ」

「だいじょーぶ。僕のところは手が足りてるから」

二人のやりとりを聞いて、勇輝は突如閃いた。

「もしかして、組織の人？」

「そうだよ。僕は龍牙隊の化学分野研究員。この学校で彼らのサポ  
ートをやってるんだ」

そう言っつて葉月は爽やかに笑うが、どうにも胡散臭い。だが勇輝  
にとっては彼が初めての龍牙隊の大人だ。

怪しくても、口には出さない。

「勇輝。こいつに氣い許すんじゃねえぞ。ろくなことしてねえやつ  
らだからな」

秀斗が騙されるなよ、と念を入れている隣で癒慰が紅茶を出した。

「どうぞ、お茶です」

ふらりとどこかへ消えたのは、紅茶を入れにいつていたらしい。

可愛らしいティーカップから立ち上る芳醇な香り。それだけで心  
を落ち着かせる効果がある。お茶菓子はクッキーだ。

「ありがとう。君は優しいねえ……研究室に来てくれるのは零華ち

やんだけになつたから寂しくてね」

葉月は一口紅茶を口に含むと、おいしいと呟いた。いま一つ話が見えていない顔をしている勇輝を見て、癒慰が彼らの関係を話した。

「私たちは葉月さんに化学を教わったことがあるの。まあ、最後までやったのは零華ちゃんと弥生ちゃんだけだったけど」

癒慰は難しくてやめ、錬魔は薬学の方がやりたくてやめ、秀斗は難しさとかんなガキに教わるなんてごめんだ、とやめた。

だが結局最後までやった弥生も、魔術とは相いれないとその後研究室を訪れることはなかった。

「国家規模の研究をしているすごいところなんだ」

「その研究自体が胡散臭いんだよ」

彼らが何の研究をしようが勇輝は気にならなかった、それよりも訊きたいことがある。

「葉月さんは超能力者ですか？」

一応龍牙隊の先輩に当たるため敬語を使う。

「僕？ 僕は違うよ。それに隊内にも能力者は数えるくらいしかないんだ」

そして、右も左もやばい人たちだったら怖いだろ？ といたずらっぽく笑った。

(今俺は右も左もヤバい人に囲まれてるってわけですか?)

「じゃあ秀斗達ってけっこうすごいんだ」

立て続けにいろいろな非日常を見たせいで感覚が麻痺している。

「当たり前。つーか葉月、お前マジで何しにきたわけ?」

「ん? 勇輝くんを見に。そのついでにお迎え」

葉月は紅茶を全て喉に流し込むとカップを置いた。

「はい?」

秀斗と勇輝が同時に訊き返す。

「もうとっくに完全下校時間過ぎてるから。そろそろ校門しまるよ?」

勇輝が携帯を取り出して時刻を確認すると七時を過ぎていた。

この屋敷には時計らしきものが見当たらなかったから気がつかなかったのだ。

「あ、ほんとだ。俺帰るわ」

不良に門限は無く、校門は閉まっていようがよじ登るが、迎えにまで来られれば帰らないわけにもいかない。

「僕も帰るよ」

勇輝が立ち上がると葉月も立った。

「勇輝、気いつけて帰れよ。葉月、てめえはとつと出ていけ」

「また明日学校でね」

と二人はドアの前まで送った。

「じゃあ明日」

「上にばれない程度にさぼりながら君たちを見守ってるよ」

「お前はとつと本部に帰れ！」

最後には二人ともドアから押し出されてしまった。

外は真っ暗で、冷たい北風がテントをはためかせている。ふと空を見上げると月が出ていた。ほぼ丸に近く、明日は満月だろう。

あまりの寒さに勇輝は自分の肩を抱いて温めた。

「勇輝君。彼らはけっこくせものだけど頑張ってるね。君に期待してるよ」

そう言い残すと葉月は颯爽と屋上から出て行った。

(くせもの……?)

勇輝は小さくしゃみを一つし、結局彼が来たせいでなんの対策も練れなかったことに気がついた。

(ま、明日もう一度考えよ)

勇輝は早足で階段を駆け下り、家路についた。

## 第2章の9 錬魔を攻略せよ

翌日、勇輝は盗人のようにそつとテントの布をめくった。少し覗いて中の様子をうかがう。

見える範囲には誰もいなかった。

勇輝は身を滑らせて入り、そつとドアを閉める。ホールに人影はない。

隅々まで目をやってほつと息をつく。

(弥生はいないな)

だが逆に誰もいないのも困りもので、本当の空き巣になった気分だ。

呼び鈴とかはないかと周辺を物色するも、インターホンのような近代的な物はない。

しばらくうろつろつしていると一つのドアが開いた。

勇輝ははつと身構えて、入ってくる人物に注目する。相手によっては、逃げる、隠れる、挨拶するのどれかの行動をとらなくてはいけない。

「よゝ勇輝い。ちよつと遅かったな」

間のびした声に勇輝は脱力する。気を張って損した気分だ。

「あ、秀斗か。いや、今日はちよつと寝坊した」

いつのまにか携帯の電源が切れていてアラームが鳴らなかったのだ。よつて学校はさぼりだ。

「それはそうとき。ここインターホンとかない？ 誰もいないときどーすりゃいいかわかんないんだけど」

「あ？ 別にお前が来れば分かるから必要ねえだろ」

秀斗は手まねきをして、来たのとは違うドアを開けた。  
勇輝は秀斗の後についていく。

「どーいうこと？」

「この屋敷は俺の障壁で守られてるから、誰かが入ってきたらわかんだよ」

「秀斗の力って守るのばっかだな」

「ま、俺の得意分野だからな」

逆にいえば守り以外の魔術はぼろぼろだ。

「へ。で、どこに行ってるの？」

秀斗は先ほどからあちらのドアを開けたりこちら側のドアを開けたりと忙しい。いくつのドアをくぐったかわからないほどだ。

「昨日弥生は駄目だっただろ。だからまず錬魔から落とそうかと」

零華はもう了承済み、と付け足して、秀斗は足を止めた。

「あゝ、見込みは？」



「ない」

はつきりと断言すると、秀斗はそのドアを開いた。この部屋も弥生と同じ両開きのドアで、少し高さがあった。

「錬魔、ちよつといいかあ？」

「え、俺心の準備が……」

有無を言わずに連れ込まれた部屋は、全体的に白い印象を与えた。

正面にはソファ、壁際には大きな机が並んでおり、試験管やらピーカーやら実験用具が並んでいる。反対側の壁は本棚で埋め尽くされており、医学関係の本が並んでいた。

（錬魔、つて本当に医者だったんだ……いや、まだ一七くらいだし、医者志望？）

「秀斗、ノックくらいしろ……なんだその餓鬼は」

実験道具類の傍に置かれた机で、錬魔は分厚い本から目を離し、振り向いた。

すぐ隣で息をひそめている勇輝に気がついて眉をひそめる。

「錬魔。俺、勇輝を仲間に入れようと思う」

錬魔は回転椅子を回して、勇輝と向き合う。

錬魔は？字のシャツに白衣を着ていた。こえが憎いほどよく似合う。これで眼鏡でもした日には、どこそそのゲームに出ていてもおかしくない。

「弥生は何と言っている」

「まだ了承はもらってねえ」

「話にならん」

そう切り捨てると、鍊魔は椅子を戻し本へと視線を落とす。

「お前の意見が訊きたいんだ」

秀斗が鍊魔に近づいて無理やり椅子をこちらに回した。

鍊魔は足を組むとまじまじと勇輝に視線を注ぐ。勇輝はそれを正面から見返した。

(うわゝ、三白眼で睨まれてる。怖ゝ)

「俺はその人間が如月に入ろうが入るまいが興味はない。仲間かどうかは別だからな。」

弥生がそれを認めるなら俺は反対しない」

鍊魔が勇輝に向ける敵意は、弥生のもとはまた違った。存在自体を否定するのではなく、人間というものを知ったうえで嫌っている印象を与える。

勇輝はぐっと、握った拳に力を入れた。

「鍊魔。なんで人間が嫌いなんだ？」

「その理由をお前に言ったところで何になる」

取りつく島もない返し方だが、勇輝は引き下がらない。

「俺は、お前らの仲間になりたい。そして、鍊魔にも認めてもらいたい」

鍊魔は小さく嘆息すると、立ち上がった。

秀斗がおい、と止めるのも聞かずに勇輝へと歩を進める。勇輝の前に立つと、見下ろした。

鍊魔は彼らの中で一番背が高く、勇輝と比べると大人と子供ほどの差になる。

勇輝は負けじときっと見上げた。

「人間は……欲深い。自分のことしか考えない。だから嫌いだ」

鍊魔はそう言い捨てると、勇輝を掴みあげてドアの向こうへほうり出した。

「勇輝！ おい鍊魔！ 勇輝はちっちなんだから優しく扱えよな！」

秀斗がボールのように投げられた勇輝を追って廊下に出ると、無情な音でドアが閉められた。

「勇輝……大丈夫か？」

「うん……ちょっと体が痛いだけ」

どうやら二人とも口より手が先にでるタイプらしい。勇輝は打ちつけた腰をさすりながら、話しあい以前の問題じゃん、と独りごちる。

人間は嫌いだと告げる鍊魔の表情が脳裏に蘇る。

(欲深い……気のせいかな、少し錬魔は悲しそうだった)

その表情で、理由を深く追求することができなかった。その理由は、勇輝が簡単にどこまでできる問題ではないような気がしたのだ。二人はホールにむかってとぼとぼと歩きだした。

第2章の10 全力疾走、逃げるが勝ち！（前書き）

## 第2章の10 全力疾走、逃げるが勝ち！

重たい空気の中を歩いていると、勇輝が口を開いた。

「鍊魔攻略すんの失敗したな……」

「いや、鍊魔はお前が如月に入る自体は反対しねえって言ったから  
そんだけでも十分だぜ」

秀斗は頭の中で次の算段を整え始めていた。

最後の手段としては四人がかりで弥生を説得するという手もある。  
だが当分は勇輝を交代で護衛するしかなさそうだ。

「ごめんな、秀斗。面倒なことにつき合わせて」

考え込んでいた秀斗の耳に、勇輝のうなだれた声が届いた。

「気にすんな。もともと俺が言い出したんだし」

「……俺、やくざに追われても逃げるからさ。無理に仲間に入れよ  
うとしなくてもいいよ？」

静かに決意を述べる勇輝の頭を、秀斗は思いつきりはたいた。

軽い音ともに脳に振動が響いて、勇輝は短く呻く。

「馬鹿なことやってんじゃねえよ。俺がお前を気に入ったから仲間  
にしようと思ってんだ。誰があきらめるかよ」

「……ごめん。ちょっと弱気になった」

勇輝は頭をさする。その痛みもなんだか嬉しかった。

「それに弥生に人間の存在を認めさせるんだろ？」

「うん。必ず」

「そのいき……」

秀斗が言葉を切ったのは二人の前方で廊下の筋から人が出てきたからだ。二人のいる廊下を横切ろうとしたその人は、二人の存在に気がつくとも足を止めた。

(ぎゃああ！ 弥生！)

勇輝は心の中で絶叫する。今会いたくない人断トツのナンバーワンだ。

「秀……珍しいところで会うな」

弥生は無表情のまま、勇輝にも視線を留めるとその手に剣を呼び出した。

「月契<sup>げっけい</sup>。人間の血を吸うことになるが、許してくれ」

月契とは弥生が持つ中剣の名で、幾多の戦場をともにくぐった愛剣だった。柄には見事な装飾が施されており、細い刃は両刃で光を鈍く反射している。

「うわあ、剣が現れた」

自分が斬られる対象だなど、露にも思っていない勇輝は素直に感嘆をもらす。

「おい弥生！ お前なにする……」

弥生は秀斗の言葉には耳も貸さず、踏み込んで横に薙ぎ払った。

「うわあっと」

勇輝は緩んでいた顔を引き締めるときりぎりのところでしゃがんで避けた。

「喧嘩で鍛えたプロボクサー並みの動体視力舐めんなよ！」

と勇輝は避けられたことを誇らしげに叫ぶが逃げながらでは恰好がつかない。

（剣を振り回してくるような奴相手にまともにやりあえるかよ！）

勇輝は後も振り返らずに全速力で逃げる。それを秀斗と弥生が同時に追った。

秀斗の方が先に勇輝に追いつき並列で走る。

勇輝が後ろを少し振り向くと、弥生は三メートルほど後ろにいる。

「なあ！ 弥生ってもっと動き早くなかった？」

昂乱と闘っていた時は勇輝の目に映らないほどのスピードで剣を交えていた。

そのスピードで来られれば、勇輝が避けられるはずがない。



「今日満月だろ」

「あ……うん。たぶん」

昨日の月の様子から推測すると、今晚あたりが満月だろう。

「弥生の属性は月だから月の満欠けに影響を受けんだ。満月の日は身体能力が著しく落ちる」

二人の間を小さな光の玉が通った。それはちょうどピンポン玉くらいの大きさで、真っ直ぐと廊下を突き走り、突き当りの壁に当たると爆発した。

日の光がまっすぐ射し込んで、外の景色が見える。

(え〜〜！ 今ほんの小さな玉だったよな？)

秀斗はそれを見て口笛を鳴らさすと、言葉を続けた。

「けどその代り魔術の威力は格段にあがる。最大威力は地球破壊可能」

「何その差！ うわ！ また来た！」

続けてまたもや光の玉が放たれた。今度は二つ。

(スピードはそんなにない。スマッシュくらいだ)

勇輝はそう分析すると、身をよじって避けた。

その二つは壁に開いた穴から外へと飛び出すと、遠くの方で爆発

音を轟かせた。

「げっ、あいつ障壁破りやがった」

びりつと軽い電流が流れ、障壁が破られたことを感知する。修理という二文字が頭に浮かんで軽く溜息をつく。

「弥生！　なんで急に攻撃してくんだよ！」

勇輝は肩越しに振り返りながら叫んだ。これくらいでは息は切れない。日頃の喧嘩の賜物だ。

「この国には仏の顔も三度までという、三度同じことをされれば殺してもよいという法があると聞く。お前が私の視界に入ったのはこれで三回目だ」

弥生は左手に力を集めながら答えた。左手の光は徐々に膨らみ大きくなっていく。

「違〜う！　仏の顔も三度までつてのはいくら優しい仏様でも悪いことを三回やったら怒るって意味で、殺しちゃダメ！　しかも法律じゃなくて諺！」

そんな理不尽な理由で殺されてはたまらない。勇輝はさらに走る速度を速めた。

（逃げの勇輝を目指してんだ。そう簡単に追いつかれるかよ！）

「あ、あれはちょっとやべえ」

弥生の手の内にあるものを見て、秀斗がへアバンドに手をかけた。

「俺を守れ。星鎧！」

秀斗が後ろ走りのままへアバンドを取り去ると、その下から鈍く光る金環が現れた。額を全て覆えるほど面が広く、複雑な文様が彫り込まれている。

「守護障壁発動！」

秀斗が障壁を二人の後ろに張ったのと、弥生が光の玉を投げたのはほぼ同じ。

光の玉は障壁に阻まれてそこで爆発する。

そのすきに二人は崩壊した壁から外に出た。

出た場所は中庭のようで、噴水が平和そうに水しぶきを上げている。

花々に目をやることもできずに二人はただ逃げる。

「月光は刃の如く、その鋭き刃で敵を貫け。偃月！」

弥生が手刀を払うと無数の光の刃が二人に向かって迫る。術は構文を唱えることで威力が増す。光の刃一つでも当たれば確実にあの世いきだ。

「本気で来やがった！ 星は月と類をなしその心を分かち者なり。その心を持って刃を跳ね返せ。星鎧！」

秀斗の言葉と呼応して障壁が光沢を帯びる。

言葉どおり刃は跳ね返り弥生へと襲いかかるが弥生はそれを身軽にかわしていった。

「満月の日は身体能力落ちるんじゃないのかよ！ あの時点で人並みはずれてるって！」

「言っただろ？ 俺たちの中で一番強いって」

「ちょこまかと逃げるな」

弥生が力をこめて剣を振るうと、その剣圧で二人の前に植わっていた木が倒れた。

「逃げ場がなくなった！」

「至近距離でこられたらヤバい！」

逃げるのを諦め、戦うべく身をひるがえした瞬間。目の前が急に陰った。

視界を染めるのは藍色と茶色。

「そこまでですよ、弥生ちゃん」

「これ以上庭園荒らしたら許さないよ」

間に割って入ったのは零華と癒慰だった。

「お前ら、学校に行ってたんじゃない……」

秀斗はほっと息をついた。さすがに少し息が荒い。勇輝もその場に座り込んで身を休める。

(助かった)

「覇動が漏れて伝わってきたので、授業を抜けてきました」

おそらく、弥生が開けた障壁の穴から覇動が漏れだしたのだろう。弥生は不愉快そうに二人を見比べ、剣を下ろす。

「お前たちもそいつに味方するのか？」

「そうよ。勇輝君は殺させない」

「彼がこうなったのには私たちの責任もありますから」

弥生は無言のまま、一人一人に視線をすべらせ、最後に勇輝を見ると剣の実体化を解いた。

そしてくるりと彼らに背を向けると、屋敷へと向かって歩き出す。

「殺す気が失せた。秀はともかく、お前ら二人を巻き込んで傷を負わすのは嫌だからな」

(おい、俺はいいのかよ)

去りながら投げられた言葉に、秀斗は心の中で突っ込む。

勇輝は弥生の姿が見えなくなると、全身で息を吐いた。

「ありがとう。癒慰、零華……二人がこなかったら俺死んでた」

「お願いだからあんまり無茶しないでね」

「命がいくつあっても足りませんよ？」

二人は呆れ顔で勇輝に手を伸ばした。

勇輝は二人に立たせてもらうと、改めて中庭の惨状を見渡した。土がめくりあがり、木が多数折れている。噴水の水も濁り、蝶も鳥の鳴き声一つない。

そして、その中庭に面する窓辺に人影があつた。窓によりかかつて悠然と見物をしている。

鍊魔はこの一部始終を見ていたのだ。

「所詮、人間はこんなものか」

鍊魔はよれよれの勇輝を一瞥すると、身を翻して自室へと戻っていった。

そして中庭では、勇輝が決意を新たにする。

「勇輝君。まだあきらめないの？」

「当たり前。俺は何が何でも弥生に俺の存在を認めさせるんだ！」

(ここまでやられて引き下がる男がいるかよ。俺はやると言ったら絶対やるんだ)

太陽は頭上近くまであがり、やわらかく勇輝を包み込む。それは冬の太陽の日差しではなく、春のものであつた。花や気温、山に囲まれた風景という、ありえないものたちに勇輝が気づくのは当分後のことになる……

## 第2章の11 伝書バトってなんでハトなんだろう

勇輝の何度目かの命の危機から一夜が明けた。

秀斗は徹夜で障壁を直し、癒慰は植物たちを応援して中庭を修復した。

しかし壁は直しようがなく、本部つきの大工でも呼ぶかという結論に至った。彼らの魔術は基本、攻撃しかできないのだ。

休日だったことが幸いし、秀斗は修理が終わるとすぐにベッドに倒れ込んだ。

一方の勇輝は寝て疲れを癒そうとアラームをかけずに自然に目を覚ますまで寝続けた。

そして二人が目を覚ましたのは昼を少し過ぎたころになる。

(あゝよく寝た)

勇輝は伸びをして体をほぐす。カーテンから漏れる光はずいぶん強い。今日は晴れのようにだ。

勇輝はゆっくり朝食兼昼食を食べると、あくびをひとつする。

(暇だな)

勇輝の休日は歩と街を歩いて喧嘩をするか、ゲームに没頭するか、趣味の映画を見るかのいずれかだ。しかしゲームは昨日の深夜にめでたくエンドロールを迎えた。勇輝が昼過ぎまで寝ていた理由はこちらのほうが大きい。

歩からメールも返ってこず、映画を見る気分でもない。

(よし、あいつらのとこ遊びにいこう)

勇輝はコートを羽織って学校へと向かった。  
さすがに午後とあって人通りも多い。

勇輝は辺りを見回してから学校に入った。私服とあって、少し気兼ねしてしまう。

学校はクラブ員のために毎日開放されているので、生徒の影はちらほら見えた。

卒業生が訪れることも多いので、私服であろうと堂々としていればばれることはない。

勇輝はテントの布を引こうとして手を止めた。

すぐ脇に昨日までなかったものがある。

男子の間では度胸試しの一環としてピンポンダッシュに使われ、勇輝も何度も押し逃げした。間違いなく近代の科学、インターホンだ。

どうやってテントにつけたのか、そしてこれは機能するのかと疑問に思いつつ真ん中のボタンを押した。よく見るとカメラ付きだ。

ピンポンとおなじみの音が鳴った。しばらくすると誰かが応答に出た。

「はい。こちら如月です」

「勇輝だよ」

「え？ あ、どうぞ」

声の主は癒慰だ。勇輝は布を捲って入った。

「おじゃましてーす」



「……うわぁ、まじで来やがった」

と目の前には秀斗。彼も勇輝と同様カジュアルな私服だ。

「何その反応」

「いやぁ、昨日あんな目に遭ったのに普通にやってくるってすげえなど」

昨日、と言われて勇輝は記憶を遡る。

そしてデンジャラス体験その二を思い出した。ゲームをし、爆睡してすっかり忘れていた。

「ま、昨日は昨日ってことで」

「うらやましい性格」

二人が手近にあったソファアームに座ると癒慰がお茶を持ってきた。彼女の私服はフリルが多めで色は淡いピンクで統一されている。それがよく似合い、たちまち癒される。

「はいお茶。外寒かっただろうから」

机の上に湯呑が置かれた。なかなか渋く、この部屋から非常に浮いている。

「ありがとう」

勇輝はありがたく頂いた。ずっと飲むと縁側にいるようだ。

(やっぱり日本人は緑茶だな)

それだけで幸せだ。

「それで？ 今日は何しに来たの？」

「ん？ 暇だったから遊びに」

「……その度胸に敬意を表すわ」

勇輝は少し胸を張った。中学時のピンポンダッシュ記録は回数、逃げるまでねばった時間ともに未だに抜かれていない。

「そりゃどうも」

勇輝がほっと一息ついていると零華が入ってきた。彼女も勇輝を見るなり驚いた表情をする。そしてややあって微笑にかわると、勇輝の隣に座った。彼女は清楚さが漂うワンピースだった。

「それで、今後どうやって弥生ちゃんに認めさせるつもりなのか？」

「ん〜ひとまず二人に俺の存在に慣れてもらおうかなあって」

人間一番怖いのは慣れだと聞いたことがある。

魔術師だって例外ではないだろう。

「あ〜まあ錬魔はそれでもいけるかもな。でも弥生には殺されねえようにしろよ」

そうして他愛のない話を続けていると、秀斗が急に黙った。

「どうかしたの？」

「弥生ってどっか行つた？」

「いえ、自室にいますか？」

秀斗は考え込むような顔つきになって、皆次の言葉を待つ。

「誰か来たみたいだ。ただ弥生の覇動に似て……」

秀斗が言い終わらないうちにピンポンと音がした。

いつもの習慣で勇輝はインターホンを探して受話器を取った。

「はい……」

春日ですがといいかけて止めた。ここは如月だった。しかし言い直す間もなく目の前のドアが開かれた。

（せっかちな人だな）

入ってきた人に挨拶をしようとした瞬間、後ろから声が飛んできた。

「あゝてめえ鷺さぎ！ 何しに来やがった！」

秀斗はソファーから身を乗り出し今にも殴りかかりそうな勢いだ。勇輝は来訪者を見上げる。灰色の髪が目を引きいた。

鷺は自分を見上げる少年に気がつく、三拍じつと見つめた。

「俺は龍牙隊黎冥、隼のリーダーをやっている鷺だ」

見慣れない顔だと思ったのか、鷺は丁寧に自己紹介をした。

勇輝はこの人が歩のリーダーか、と彼の姿を上から下まで見る。

「お前は春日勇輝だな」

「あ、はい」

よろしくお願ひします、と頭をさげようとした瞬間、頬に衝撃を感じてよろめき尻もちをつく。熱さの後に痛みが走った。

「痛ってええ」

殴られたのだと気付くのに数秒かかった。いくらなんでも初対面の人に殴られるとは思ってもよらなかったのだ。

後ろの三人も啞然としている。

「お前が昂乱に関わらなければ弥生が傷を負うこともなく、お前が捕まらなければ弥生の手を煩わせることもなかった」

勇輝は鷺を見上げたまま開いた口が塞がらなかった。ほぼ同じことを言われた記憶がある。

「鷺！ てめえ勇輝を殴りやがったな！ 覚悟できてんだろーなあ。如月は倍返し主義だぜ？」

怒り心頭の秀斗を女の子二人が必死で押しとどめる。もう修理に追われたくはない。

(いや)秀斗。お前同じような理由で俺のこと殴ったよな)

完全棚上げの秀斗は拳を握って攻撃態勢に入っている。

目の前に立ちはだかつている鷲は無表情で勇輝を見下ろしていた。その姿は孤高の鷲を思わせる。

(秀斗といい、鷲さんといい……なんで俺ばっか……)

「あれ？　もしかして鷲さんも弥生のことが好きなんですか？」

気づけば思ったことがそのまま口に出ていた。

「ちよつと勇輝君。そういうのははつきりと……」

「その馬鹿のような薄い感情と一緒にするな。俺は弥生の情報を集められればいい」

鷲は癒慰の言葉を遮り、指で秀斗を指しながら断言した。

(それ軽くストーカーですよ?)

「つゝかてめえどうやって入ってきたんだよ」

馬鹿呼ばわりされた秀斗は低く呻く。彼の張った障壁を破られた気配はなかった。それ以前に鷲は障壁を破れるような能力は持っていないかったはずなのだ。

「あ？　弥生にこれをもらったんだ」

そう言つて鷺は胸にかけていたペンダントを持ち上げた。それを見た瞬間秀斗は全機能を停止した。

急に抵抗がなくなった秀斗を不思議に思つて女の子二人は彼の顔を見上げる。

秀斗はまるで幽霊でもみたかのように顔面蒼白で、虚しく口の開け閉めを繰り返していた。

「秀斗。大丈夫？」

魂でも抜けたのではないかと、勇輝はおずおずと声をかける。

憎き秀斗の呆然自失の態を見て、鷺は勝ち誇つたような笑みを浮かべた。

「いい顔だ。丁度いい。一発殴らせてもらおう」

鷺が秀斗へと足を踏み出した時、ドアの開く音がした。

「鷺……本当に来たのか」

鷺はその声にぴたりと歩みを止め、顔をそちらへ向ける。そこには相変わらずの無表情で弥生がいた。勇輝はその姿に心臓が飛び跳ねた。逃げようにも足が動かない。

「当たり前だ」

「……来い。そこでは秀がうるさいからな」

弥生は勇輝には目もくれずに身をひるがえした。鷺は腰に付けていたカバンから書類を取り出すと手近にいた癒慰に投げ渡した。

「ここ数十年の外と中の動きだ」

短く内容を述べると、弥生の後を追ってホールから出て行った。癒慰は確認のためパラパラと書類を捲る。

「細かいわ……」

勇輝は弥生出現により驚いた心臓を宥めながら秀斗へと近寄った。先ほどから言葉も発することなく固まっている。

「……一体どうしたんだ？」

勇輝が目の前で手を振ったり髪を引っ張ったりするが何の反応もない。

「きつと鷺君のペンダントが問題ね」

「あゝ。なんか水晶ぽかったやつ？」

「私たちが持つているのですが……」

そう言って零華が見せてくれたのは青みがかかった水晶体で、中には水を流し込んだような模様が入っている。

「へ〜これ何？」

勇輝は水晶のようなものを手にとって明りにすかした。水のように光を反射して綺麗だ。

「これは私たちの髪と血を媒体にして力を押しとどめたものです。」

微量ながら覇働を放っているので小石くらいなら弾き飛ばせます」

髪と血という言葉に危うく水晶を落としそうになる。

「でもなんで秀斗がやられてんの？」

「聞いた話では秀斗君の国ではプロポーズをする時にこれを上げる風習があるらしいのです」

それを聞いた瞬間、勇輝はなるほどと納得した。

おそらく秀斗は弥生が鷺にプロポーズしたと思い込んだのだろう。

「可愛そうな秀斗」

「静かになっていいことです」

本当に憐れむべきはみんなの冷めた態度かもなあ、と固まっていた秀斗の隣で勇輝はぽつりと思った。

「でもさ、弥生人間嫌いなのになんで鷺さんは迎え入れんの？」

「弥生ちゃんの中では無能力な人が人間なんです。鷺さんは異能者ですから弥生ちゃんい言わせれば人間ではないのですよ」

「鷺さん超能力者なの？　どんな？」

零華は少し考えるそぶりをみせてから口を開いた。

「詳しい能力は知りませんが、変装が得意のようです」



「諜報員やってるしね」

鷲の能力は隊の中でも特殊で、名称も持たなかった。その特徴は人に化けられること。その目で見た人物であれば、骨格から全て写し取って化けられるのだ。

「それって能力？」

「身長も伸び縮みしてますから、能力だと思います」

勇輝はふっと遠くに目をやった。

(身長が伸びるなんてうらやましいな)

「だからあの顔が本当の顔かはわからないのよね」

「へ」

(ほんと、この隊って変な人ばっか)

勇輝がこれを言葉に出さなかったのは、懸命な判断だっただろう……

## 第2章の12 鳥が告げるは(前書き)

これをアップしようとしたら停電した。

ノートだから電源は落ちなかつたけど回線が切れた……。

更新ボタン押したのに……あとがきとか書いたのに……消えた。  
あうう、絶望。

## 第2章の12 鳥が告げるは

鷺が通されたのは弥生の自室で、あまりにも物のがない殺風景な部屋を少し呆気にとられて見渡す。弥生は出窓を開け放ち、窓辺に腰をかけた。彼女の部屋に客人のためのソファなどない。

そして鷺に机の椅子に座るように勧めるが、鷺は弥生の隣で外の景色に目をやった。

心地よい風が二人の間を通り抜けていく、弥生の部屋のすぐ下は鍛錬場のようで、まだ切り口の新しい丸太が転がっている。

砂地の一角を囲うように低木が植えてあり、少し視線を先にやれば色とりどりの花で彩られている。

(さすが異空間。外の季節とかは総無視か)

これなら真冬に薄着で来たのも領ける。

鷺は隣の弥生に視線を移した。弥生は鷺のことを気にも留めず、部屋の隅を見ていた。

二人は昔から一緒にいても会話をせず黙っていることが多かった。

それはほんのわずかな時間だったが、鷺には永い時に感じられた。

「鷺、お前も暇な奴だな。わざわざお前が届けに来ることもなかっただろう」

昔の記憶に浸っていた鷺は弥生の声にハツとした。そちらに顔を向けると弥生の顔が同じ高さにあった。手を伸ばせば触れられる距離だ。

「あいつらにも会っておきたかったんだ。それに俺はそんなに暇じ

やないぞ？ 明日から半年は世界諜報の旅だ」

「まだ飛び回っているのか」

「ちよつとアメリカとロシアの間で派手なスパイ騒ぎがあったんだ。そつちは派手に取り上げられたが盗まれた情報のことはさっぱり。スパイ騒ぎを隠れ蓑にして、まだ知られたくないことがあるのかもしれないからな」

当然国家規模になると潜入先も国家中心部になる。政府の要人に化けられるのは隊内でも鷺だけだ。

「ご苦労なことだな」

再び沈黙が下りた。鷺はすつと息を吸うと、静かに訊きたかった言葉を紡ぎ出した。

「どうしてあの人間を中に入れている？ お前は人間が嫌いだっただろっ」

「あれは勝手に入って来ているだけだ。如月に入れたわけではない。目ざわりだ」

「ならなぜ殺さない？」

鷺はそれが当然のように言った。その言葉通り弥生は自分の前に立ちふさがる人間を片っ端から葬ってきた。

「……約束をした」

「約束？」

「亡き者との約束だ。何かあれば、あれを守ると」

鷺は渋い顔をした。一度した約束を違えないのは弥生の信条だった。

（またそんなものに縛られているのか）

「それで、奴を守るのか？」

「ああ。だが私の邪魔をすれば殺す。守るとは約束したが、殺さないとは約束していないからな」

自分の論理を貫く弥生に、鷺は苦笑を浮かべた。

「気をつけるよ。今の世の中は人が一人消えただけで大騒ぎする」

「難儀だな……まあ上手くやるよ」

鷺は窓辺を離れ、弥生の前に立った。弥生の目をまっすぐ見る。

「弥生……もう一つ忠告だ。最近黒騎が動き出した」

黒騎、その言葉に弥生の表情が硬くなった。

「ここ十年その存在さえ掴めなかった黒騎がお前が帰ったと聞くと勝手に表に出てきやがった」

そして次の瞬間、鷺は弥生の目に起こった一瞬の変化にぞっとし

た。弥生の瞳に今まで見たことのないほどの憎悪がよぎったのだ。

「……気をつける。奴らがこの十年、何をし、どれほどの力をつけたのかわからない。間違っても一人で戦おうとするなよ」

鷲の言える精一杯の言葉だったが、それは弥生の耳を素通りしていた。そのことに気づいた鷲は弥生の肩を掴んだ。そしてその細さに驚き、それと同時に時の流れを実感する。

そして、言いたくない言葉を絞り出した。

「弥生。死ぬなよ」

考えたくもない未来。それでも、何かで弥生を縛っておきたかった。ここに、自分に繋ぎとめておかないと、簡単に命を投げ出しそうな予感がした。

弥生はすっと口角を上げ、冷笑を浮かべた。

「それはお互い様だ。お前も死ぬなよ、鷲」

鷲はしつかり頷くとそっと弥生から離れた。

そして弥生に背を向け、ドアへと歩き、ドアノブに手をかけて振り向いた。

「今度、お前の故郷の話聞かせてくれ。魔術界がどんなものか知りたいんだ」

弥生は突然の言葉に少し驚いたようだが、やがてこくりと頷いた。そしてじゃあな、と鷲がドアを開けると、その先は隊の四剣娘にある大きな扉の前だった。

鷲は少々面を食らうが、小さく笑って足を踏み出した。

静かに閉められた扉を眺めながら、弥生は黒騎、と口の中で呟いた。

(あの女が……会った時は……必ず殺す)

そして憎悪を深く湛えた笑みを浮かべると、窓の外に視線を飛ばした。

春の風は花の香を運んで弥生の透明感のある灰色の髪を揺らした。花の香が弥生の鼻孔をくすぐることはなく、ただ血に似た甘美な香りが深い記憶を呼び起しただけだった。

## 第2章の12 鳥が告げるは（後書き）

神名の裏話的なもの。

作者は机の棚からノートを発見した。ノートを開く。

ノートは真つ黒。中学生の時に書いた話でした。

神名のもっと先、ネタばれ警報発令の場面。なんで書いた私……。

そこには鷺もいた。  
衝撃のキャラ。

弥生のことをそなたと呼んでいた。その上無口。

そなたっていつの時代の人？

いやびっくり。もうこのころの鷺は跡形もない……。

なんで忘れてたんだるキャラ設定。美月さんも感じが違った。

しかも、この話はめっちゃくちゃなところで終わっていた。

飽きたのだと推測される。

そして思うことは……

中学生のころの方が字、きれいじゃん。



## 第2章の13 何事も準備が大事

翌朝、秀斗は制服に着替えて弥生の部屋を訪れた。たまには学校に行こうと思いい、その前に弥生の顔を見に来たのだ。

昨日の鷲との一件が気になっていっているというのが大きいのだが……。

トントン、と軽いノックをして、くぐもった声が聞こえるとドアを開けた。

そして机の椅子にもたれている弥生を見つけたが、すぐに用件を切り出せなかった。

弥生が寝起きだとかそんな理由ではない。

弥生は常に早起きだし、身なりも整っている。学校に行く気などさらさらなはずなのに制服を着ていた。

問題は弥生が今やっていること。弥生は愛剣、月契げっけいの手入れをしていた。

(うわゝ嫌な予感がするぜ)

弥生の剣は刀鍛冶が打ったような普通の剣ではない。弥生の力自体が具現化し、剣の形をとったものだ。だから刃がかけることも剣が折れることもなく、手入れをしなくても錆びるということもない。弥生がそれにも関わらず月契の手入れをしている時は、弥生の気が高ぶっているか、大きな戦いが起こる前だ。

「なあ弥生。お前鷲に何を言われた？」

弥生は剣の具現化を解くと秀斗に視線を移した。

「お前には関係ない」

秀斗は弥生の瞳の奥にちらりと灯った憎しみの火を見逃さなかった。

(そうか……黒騎か)

秀斗は察しをつけると重い口調で言う。

「一人で殺ろうとするなよ」

「お前に何ができる？ 戦う術を持たぬお前が」

秀斗は自分の手を見た。昔は守りたいもの全てがこぼれおちたほどの小さな手も、今は大きくなった。

そしてぐつと力を入れて握った。

「確かに俺は弥生みたいに強くない。でも、お前を守ることはできる」

弥生は小さくそうか、と呟くと窓から空を見上げた。今宵は下弦の月、魔術の方が強い状態だ。身体能力はだいぶ落ちているだろう。

「なら、さっさと学校へ行け。今日は愉快な一日になるぞ」

弥生はそう言うつとすつと口角を上げた。それを見た瞬間、嫌な予感が走って秀斗は回れ右をする。

愉快の内容を訊きたいが、薄ら笑いを浮かべる弥生が怖くて訊けない

(早く学校に行かねえと)

弥生の愉快は他人にとっての迷惑と恐怖であり、大抵血の雨が降る。

今までの経験からそれを知っている秀斗は、早足で学校へと向かった。

一方、弥生は秀斗が出て行った部屋で最後の支度をしていた。机の抽斗から黄色がかった玉を取り出すとズボンのポケットに入れる。そして壁にかかっている写真をちらりと見ると、もう一人の戦力の下へ向かった。

弥生は永遠に続くような廊下を早足で歩いていった。途中脇の廊下に入ったり、ドアを開けたりと複雑な進路を取っている。彼の部屋はこの屋敷の中でも一番入り組んだ所にあつた。

弥生は他より一回り大きい扉の前に着くと、ノックもせずに入つた。忘れたわけでもなく、その必要がないことを確信していたからだ。

そつと開けた部屋は暗く、ほとんど日の光が入っていない。

弥生は暗い中でもお構いなしに部屋の隅にあるベッドへと歩いた。そこではこの部屋の住人、鍊魔がまだ眠りの中にいた……。

鍊魔は朝が弱く、その上夜は遅くまで起きているので日が高く昇つてからではないと起きてこなかった。机の上に散らばる本や器具などを見るに、昨日も遅くまで研究をしていたらしい。

弥生は布団をかぶって寝ている鍊魔の脇で少し考えるそぶりを見

せたが、おもむろに月契を出現させた。

それを逆手に持つと、ためらいもせずには錬魔めがけて突きおろす。剣先は錬魔の髪を掠め、ベッドに突き刺さり、顔の数センチ横に穴を開けた。それと同時に錬魔は飛び起き、敵に向けて手刀を繰り出す。

そして敵の姿が目に入ると、その手を寸前で止め、目をしばたかせた。

「……めずらしいな。お前が起こしにくるとは」

起こし方については追及しない。直接喉元に突き立てられなかっただけまだましなほうだ。

「学校へ行く。用意をしろ」

「学校？　なんであんな人間だらけの場所にいかないといけないんだ」

錬魔はぼうつとする頭を必死に起して返答する。

「鷲が今日、死堅牢の区域にある二三の組が高校に攻め入ってくると言った」

その言葉で眠気は吹き飛んだ。

(とうとう来たか)

錬魔は苦々しい顔をした。

龍牙隊はヤクザを多く傘下に持ち、それらを統括することも大きな任となっていた。よって牙軍の階級ごとに地区が割り振られ、そ

ここにある組を従わせて秩序を保たなくてはいけない。

しかし今は欠番も多く、一つの小隊が複数の地区を管理しているのがほとんどだ。

如月はこの十年活動を停止していたので、死堅牢の地区は夜一星よいつせいが管理していたのだが、復活したことにより死堅牢の地区は夜一星の管理からはずれたのである。

その隙を狙って、あわよくば死堅牢を倒してこの地区の覇権を握ろうと複数の組が動き始めた。

「……わかった。着替えたらすぐにいく」

「私は先に行っている」

「わかった」

弥生は踵を返すと、扉から出て行った。

錬魔は髪をかき上げてベッドから降りた。

(ヤクザ相手か、やりにくいな)

錬魔は体を起こすため、カーテンを開けた。開いた窓から心地よい風が部屋の中の空気を掻きまわした。新鮮な空気を吸って錬魔は肩の骨を鳴らした。軽く筋肉をほぐし、本日の戦闘に備える。

手早く着替えて身支度を整えると、抽斗から小瓶を取り出した。中に入っていた丸薬を二粒口に放り込み噛み砕く。

緊急用にと作っておいた物で、朝食に最適な栄養とカロリーが取れる。戦闘のためのエネルギーも補給し、錬魔は学校へ向かうため体の向きを変え歩き出した。

赤い髪が、赤い線を引くように揺れ、風が錬魔の背中を押すように吹いた。

## 第2章の14 不良は喧嘩が好き

錬魔がテントから出た時には、皆屋上に集合しており、弥生から状況を聞いた後のようだった。

すでに辺りには秀斗の障壁が張られており、学校内からは見えないうようになっていた。もちろん防音もついている。

「また錬魔君朝寝坊よ」

「……コーヒーを飲んでくればよかった」

錬魔は肩を回して、あくびをこらえる。

「朝からきついものを飲んではいけませんよ。コーヒーはこれが終わってから淹れてあげますから」

零華は朝でも夜でも変わらない穏やかさで錬魔に微笑みかけた。

「お前の淹れるコーヒーは薄い」

「スプーンで三杯も入れる貴方がおかしいんです」

「カフェインは怖いよ」

戦闘前とは思えないほど和やかな会話を楽しんでいると、予鈴が鳴った。

「じゃあ、私たちは教室に行くね」

「くれぐれも無理をしないでくださいね」

そう残る三人に声をかけると、二人は階段を下りて行った。今回の戦いは相手がヤクザという人間なので、やすやすと魔術を使うわけにもいかない。

人間相手だと力加減も難しい上に、人の目についていいものでもないのだ。よって接近戦に不向きな癒慰と零華は教室で万が一敵が侵入してきた時に備えることになった。

「んで？ 敵はどんくらい来るんだ？」

フェンス越しに校門付近を見ながら秀斗が訊いた。

「五十は超えるだろう」

武闘派三人の筆頭である弥生が答えた。弥生の得物はもちろん愛剣の月契だ。

「やっぱ喧嘩は大勢でやるのが楽しいよな」

秀斗は守りが専門だが武道の心得はある。喧嘩に近いが貴重な戦力の一人だった。

「怪我はするなよ。しょうもない理由で怪我したら治さないからな」

そして錬魔は拳法を得意としていた。

医者である自分が他人を傷つけるのはおかしいと武器は持たない。見た目に反して、彼は三人の中で一番思考が平和的だった。

「ん？ 雪か……」

錬魔が視界に映った白いものに釣られて空を見上げた。灰色の空からはぼとぼと白い雪が落ちてきていた。

「雪……」

弥生はその一欠けらを手のひらで受け止めた。それはすぐに水になって溶けてしまう。

「ほぐら。そうこうしてるうちに団体様の御到着だぜ？」

秀斗は四方から押し寄せてくる人ごみを見て、愉快そうに口笛を鳴らした。彼らが一步校門に足を踏み入れた瞬間、彼らは外から遮断され、出ることができなくなる。

先陣をきつて歩いて来た、いかつい男たちが敷地内に入った。

「私達に刃を向けたからには、殺されも文句は言えないな」

弥生はその手に月契を出現させると、太陽の光を反射させて、刃の具合を見た。

（人間の血を吸わせるが、今日は敵の血だ。とくと味わえ）

「如月。てめえらがこの学校にいることは分かってんだ。さっさと出て来やがれ！」

下ではドスを聞かせた声でわめいているヤクザたちが殺気を立ち昇らせていた。

「それじゃ、呼ばれたんでお片付けと行きますか！」



秀斗の言葉を合図に三人はそれぞれの方向に屋上から飛び降り、それぞれの方法で戦いを始めた。

その頃教室では、ざわざわとうるさい中で勇輝と歩がひそひそと頭をよせて話をしていた。

「お前、あんな怖い人の下で働いてんのか？」

「俺がリーダーの本性知ったの、つい最近なんだよ」

二人の脳裏には高圧的な目が蘇る。

「歩、頑張れよ」

「お前も、目をつけられるなよ」

互いに手を握り合い、固く誓う。

危険な人には逆らわない、近づかない。

不審者注意の標語みたいな言葉が二人の胸に刻まれた。

「なんか怪しいよ？」

「お二人とも密談ですか？」

頭の上でした声に、二人は顔を上げた。朝から見目麗しい二人が立っていた。

「今日も二人だけか？」

「みんな忙しくてね」

「じゃあ遊びにいつでも相手にしてもらえない？」

「ええ、おそろく」

そう言つて零華は窓の外に視線をやつた。彼女には雪が降る中乱闘を繰り広げている三人の姿が見えていた。

ちようど金髪が蹴りを決めて一人落としたところだった。

(秀斗君、楽しそうですね)

闘志を漲らせて闘う秀斗に対し、鍊魔と弥生は無表情で敵を片づけていく。

「なんか外に……あ、雪だ」

零華の視線に釣られて窓の外を見た勇輝は、吸い寄せられるように窓を開けた。

「これ積もるかな」

勇輝はうきうきしながら空を見上げた。

「お前、何がキミみたいなこと言つてんだよ」

「いいじゃん。みんな雪合戦。楽しいって」

「積もるといいですね」

雪が積もればこの赤く染まった地面を隠してくれだろう。零華は違う意味で積雪を祈った。

そして勇輝が不可解な行動をしていることに気付く。

「何をしているのですか？」

勇輝は両耳を引っ張ったり叩いたりしていた。

耳を下に向けて片足でジャンプ。懐かしいプールでの水抜きの方  
法だ。

「なんか耳鳴りがしだしたからさ」

「寒さで？」

「ていうかそんなんで耳鳴りは治らないと思うよ？」

勇輝はもう一度耳を引っ張った。キーンと高い耳鳴りの上にその奥がちくちくと痛む。

（これが噂の中耳炎？）

勇輝が不安になり始めた時、急に視界の端に金色が飛び込んで来た。驚いて下を覗き込むと秀斗がいた。

「あ、秀斗」

「え？」

女の子二人が同時に声を上げた。

（秀斗君が境界からはみ出してる！）

（だからもつとぎりぎりまで障壁を張ればよかったのです！）

秀斗は回し蹴りを見えない何かに喰らわすと、消えた。境界の内に戻って見えなくなったのだ。

「あれ？ 秀斗の奴消えやがったな」

「今秀斗闘ってなかった？」

事情を知っている二人はだんまりを決め込んだ。

勇輝がじーと二人を見つめる。二人はそれに微笑みを返した。なんとなくかしてごまかしたい。

「あの三人が闘ってるんだよな」

「勇輝君が気にすることはないよ」

「……もしかして、組の連中が攻めてきた？」

歩が顔を強張らせてそう言った。歩の所にもそついう動きがあることが入っていたのだ。

「どついつこと？」

「如月を気に食わない組が喧嘩売りに来てんだ。そつだよな」

歩が二人を見ると、二人はしぶしぶ頷いた。

「俺行ってくる」

言っなり駆けだした勇輝の腕を癒慰が掴んだ。

「何言ってるのよ！ 相手は銃とか刃物とか持ってるのよ？」

「そうです。私たちはここで見守っているのが一番なのです」

勇輝はぐつと拳を握って二人に向きなおった。

まっすぐ二人の目を見る。

「俺は、友達が闘ってるのに黙って見ているなんてできない。それに、俺は如月の仲間になりたいんだ！」

勇輝は癒慰の手を振り払うと止める声も聞かずに駆けだした。ちよつどその時本鈴が鳴った。

「勇輝！ ちょっと待てよ！」

後ろで歩が追ってくる気配がしたが、勇輝は振り返らずにグラウンドへと向かった。

## 第2章の15 人間なめんな！（前書き）

ちよつと本格的に戦闘を書きたかったので上の警告をつけてみました。

どれぐらいが残酷か自分でもよくわかってない……。

しつこく言いますが、これはコメディーたまたにシリアスです。

## 第2章の15 人間なめんな！

予鈴と本鈴の間の五分で、グラウンドは阿鼻叫喚の地獄絵図に変わっていた。

手を斬られ、足を斬られて、もがくヤクザたちが転がっている。人が屍のように積み重なって倒れているが、その大半は気を失っているだけだ。まだ正気を保っている人たちのうめき声が校舎に反響して、そこは戦場のようだった。

その光景を見て、勇輝は一步後ずさりをした。

確かにヤクザが攻めてきたとは言っていた。だが勇輝は乱闘だと思っていたのだ。だがグラウンドに近づくとその異様さに背筋が寒くなる。

赤く染まった地面。倒れ伏す人々。弥生が剣を振るう度に人が倒れていく。

息がつまるような鉄の臭いに、勇輝は胃から酸っぱいものがこみ上げた。

（なんだよこれ……これじゃあまるで殺戮じゃないか）

勇輝は彼らの加勢をするつもりで来た。それがこれを見た瞬間その決意が鈍る。

（ひるむな俺！俺は、俺の正しいことをすればいいんだ！）

勇輝はその手に握るものをぐっと握りしめて戦闘の中心へと入っていった。

開始直後は銃弾が飛び交っていたが、弾切れになったのかすぐに接近戦となった。

秀斗は力任せに殴って蹴って、敵を沈めていく。自分に張った障壁のおかげで無傷だ。

敵の数は思ったより多く。組の数も二三どころではなかった。敵の数は総勢百を超えている。

秀斗は振り下ろされた鉄パイプを避けると、その男の鳩尾に拳を叩きこんだ。

残る敵の数を把握しようと思いを見渡した時、視界をすごい速さで誰かが横切っていた。

「げ、勇輝！ あいつまた俺の障壁抜けやがって！」

声をかける間もなく、勇輝は走り去る。

秀斗は勇輝が走っていく方向へ首を巡らせた。

一際大きな軍勢が取り巻いているそこは、弥生が闘っているところだ。

（あのヤローまた危険なことを……っーかあれでどうやって戦うんだ？）

秀斗は軽く舌打ちをすると、周りを囲む敵の片づけを再開した。

勇輝を援護するにせよ、まずこの囲いを突破しなくてはいけない。

（やられんじゃねえぞ）

秀斗は集中力を高めると、前方の敵に殴りかかった。



勇輝は辺りを見ながら弥生のところへ走っていた。

(俺は弥生を止める)

秀斗は血気盛んに敵を倒し、鍊魔は無駄のない動きで相手の骨を折っていた。

勇輝は自分の手にある得物に目をやった。来る途中の体育館倉庫で拝借した金属バット。

手に馴染み、滑らないグリップ。最高威力は頭蓋骨陥没程度の安全仕様。先に向かって太くなり、殴る面が広くなっている使いやすさ。

どれをとっても一級品の武器だ。

それに対して敵の得物は使用済みの拳銃。幾度か使用されたであろうばこぼこの鉄パイプ。

そしてヤクザと言えばこれ、長ドス。中には鉄拳を武器としている者もいる。

そして向かう先にいる弥生は剣。

(俺、なんて平和的なんだろ)

はははっと乾いた笑みを浮かべ、人々の輪に割って入ろうとしたその瞬間、睨みあっていたヤクザが動いた。

一人の男の雄たけびと共に四方を囲んでいたヤクザが一斉に弥生へと躍りかかる。

勇輝はその勢いに弾かれて後ろへ飛ばされ、尻もちをついた。

「弥生！」

弥生の身を案じた勇輝の目に飛び込んだのは、弾き飛ばされたヤ

クザたちと、灰色の空に雪にまじって点々と浮かんだ血しぶきだった。

ヤクザたちの悲痛な叫びの中で、一人立っている弥生は剣に付いた血を振り払う。その顔にはうつすら笑みが浮かんでいた。それを見た瞬間、勇輝に寒気が走った。

「全員で来い」

その挑発に乗せられるままにヤクザたちは次々に弥生に躍りかかり、斬り伏せられていく。

ある者は手を、ある者は足の腱を斬られ地面に転がる。中にはぴくりとも動かない者もいた。

弥生が動く度に血しぶきがあがり、呻き声が二重三重に響く。瞬間に弥生の周りに立つ者はいなくなつた。

勇輝はその光景から目を背け、胃から込み上げる物を堪え切れずに地面に撒き散らした。

嗅覚も麻痺し、視界は涙で滲む。

「軟弱な。戦も知らずに、こんなところへのこのこ出てくるからそうなるんだ」

バットで体を支え、うずくまっている勇輝に冷ややかな声がかから降って来た。

勇輝はきつと見上げて、口の端を手の甲で拭くと立ち上がった。

（戦争なんて俺は経験したことはない。でも、何が悪いことかくらいは分かる！）

勇輝は震える足で踏ん張り、返り血に塗れた弥生と向き合う。

「人殺し……確かにこいつらは敵かもしれない。でも、殺すことないだろ？」

恐怖からか興奮からか、その声は震えていた。

「またお前はそんな甘いことを……だが」

弥生は足もとに転がっていた男の手の甲に剣を突き立てた。新たな血が飛び散って、男は叫び声を上げる。

「殺してはいない。虫けらに殺す価値などないからな」

虫けら、その言葉に勇輝は怒りが込み上げる。

「人間は虫けらかよ」

勇輝はバットを痛いほど握りしめた。今までにこんな屈辱を味わったことわない。

「軟弱で、すぐに死ぬ。その弱さゆえに群れ、他を嘲る。醜い生き物だ」

「弱いことは、そんなに悪いことかよ」

一方的に価値を決めつけられて、存在を否定されることがこんなにも悔しく、腹立たしいとは思わなかった。

「この世界は強さが全てだ。弱ければ死に、捨てられる」

もう勇輝の視野には弥生しかいなかった。音もなくなり、怒りが

全身を支配する。

「ふざけんな……」

足の震えも止まる。

「何だと？」

「ふざけんなって言うてんだよ！俺たち人間だって、自分が出来る範囲で懸命に生きてんだ！そりゃ、お前らのような特別な力はないし、弱いし、すぐ死ぬさ。だけどそれが悪いことのように言われる筋合いはないんだよ！」

勇輝はバットの先を弥生に向けた。キツと、弥生を見据える。

「お前は人間のことを何も知らないだけだ！」

「貴様ら下等種のことなど知りたくもない」

「人間が劣ってるだつて？お前らだつて親から生まれて最後は死ぬんだ。魔術師も人間も同じじゃないか！」

勇輝がそう叫んだ瞬間、弥生はびくりと剣先を動かした。

「……人間と私たちが同じだと言うのか」

弥生はすつと目を細めた。冷笑が消えうせる。

「ああ。それを認めさせてやる。俺がお前に勝って、人間の存在を認めさせてやるよ！」

弥生は喉の奥でくつくつ笑うと、剣を構え直して切っ先を勇輝へ向けた。その目は獲物を狩る目だった。

「おもしろい。この私に挑むとは……いいだろう。その勝負受けてやるっ」

二人が睨みあい、空気が緊迫した瞬間、大勢の足音と威勢のいい声が聞こえた。

「弥生がいたぞ〜！ 殺せ！」

二人は押し寄せる敵に体を向け、迎え撃つ態勢に入った。

「貴様との勝負は大将の首を取ってからだ」

そう言うとき弥生は敵の中へ突っ込んでいった。

立ちほだかる敵を薙ぎ倒し、後方にいる男へと走る。

「待てよ弥生！」

勇輝もその後を追うが、すぐにヤクザたちに囲まれてしまった。

弥生との勝負はひとまず後だ。

勇輝は小さく舌打ちをして、ヤクザたちと向き合った。

「チビは家でおねんねしてな！」

そう言って前方のヤクザが長ドスを振りかざした。だがヤクザは、その言葉がワーストスリーに入るものだといいことを知らなかった。ぶちりと、脳内血管が切れる音を勇輝は聞いた気がした。

「ああ？ 誰がちびだつてえ？」

勇輝は怒りの瞬発力でヤクザが長ドスを振り下ろす前に相手の懐に滑り込み、バントの構えでその脛を打った。威力があがっているのは八つ当たりも含まれていたからだろう。

ヤクザの悲鳴を聞きながら一回転して、その勢いを殺さずにすぐ走る。顔を上げると、弥生は十メートルほど先にいた。

走りながら襲いかかってくる敵を地面にねじふせていく。辺りを見ると、秀斗の所も錬魔の所も終盤だった。おそらくこの一団が最後なのだろう。

(間に合え！)

勇輝は歯を食いしばって足を動かした。

弥生は敵を斬り、その頭を飛び越えて、今回の首謀者である利根組の頭の下へ降り立った。

鷲によれば、夜一星が管理していた時から裏で不穏な動きを見せていた野心家だ。

その男は目の前に現れた弥生を見るとあくどい笑みを浮かべた。

「死堅牢如月。お前たちには私の覇道のためここで死んでもらう」

男は三十代後半で中肉中背。スーツのベルトに日本刀を差していた。

「子分どもの無念は晴らさせてもらおうぞ」

男は鞘から刀身を抜き、上段に構えた。きつ先はぴくりとも動かずに、まるで時が止まったようだ。剣術の心得があると見えた。

「貴様も部下と同じ苦しみを味わってみるか？」

一泊の静寂の後、両者は同時に動いた。しかし速度は弥生の方がはるかに上回る。

弥生は一足飛びで男に斬り込むと、男の効き手の腱を切断した。男が斬られたことに気付くのに三秒。そしてその痛みに叫び、手放した刀が地面に刺さったと同時に、弥生はかがんで男の足の腱も切断した。

男は足を奪われてその場にもんどりを打って倒れた。弥生を見上げる目には、はつきりと憎悪が映っていた。

高校に通っている子どもにも足も出なかった。その屈辱と怒りに男は唇をわなわなと震わせている。

「やはり弱いな。残るはその左手と、首だけだ」

弥生は男の脇に立つと、月契を振りかざした。

「じわじわと殺そうとも思ったが、いささか飽きた。もう死ね」

「待ちやがれ〜！」

転がるヤクザを飛び越えて、勇輝が弥生の前に躍り出た。

剣を持つ相手に一番隙が出来るのは最後の一撃のために大きく振りかざした時だ。

勇輝はそれを狙って割り込み、弥生の剣筋に集中する。大きく足を開き、バットは自分によせて構える。そしてタイミングを見計らい、渾身の力でフルスイングをした。

重い衝撃が走り、手が痺れる。それでも振り切ると、真夏の甲子園に響くようないい音がした。

ホームランのような爽快な音だが、飛んでいったのはボールではない。月契が回転しながら弧を描いて地面に突き刺さる。

「貴様はまだ私の邪魔をするのか！」

「当たり前だ！ 目の前で人が殺されたら胸糞わりいんだよ！」

弥生はちらりと飛ばされた剣を盗み見る。その距離は十メートルほど、取りに行くよりは魔術でとどめを刺した方が早い。

「そもそも敵だから殺すなんて、単純すぎんだろ！ 死が一番の苦しみとは限らないだろーが！」

勇輝は興奮と疲労とで息が上がっていた。

その言葉に弥生は一瞬虚を突かれたような顔をしたが、すぐに口角を上げた。

「肉体の死をも凌駕する苦しみを……か」

弥生は喉の奥で怪しげに笑う。

（忘れていた。私はいつもそうしていたではないか）

そして顔から一切の笑みは消え、男を見下ろした。

「幸栄に思え。この術は貴様らのために作ったものだ」

術と聞いて勇輝は後ろに飛び退いた。剣は打ち返せても魔術は無理だ。



「愚かなる者よ。神の裁きを受けよ……月華夢幻げつかむげん」

弥生がそう唱えた瞬間、弥生の目が怪しく光り、男は気を失った。弥生は男には目もくれず月契のもとへ歩いて行った。

「おい。何したんだ？」

勇輝は光の玉を出すようなら服を引つ張ってでも男と引き離そう  
と思っていたが、術らしき術が発動しないので、そつと訊いてみた。

「一種の幻術だ。さて、こちらは終わった。勝負といこうか」

その場の勢いで大変なことを言ってしまったと後悔してももう遅い。

弥生は月契を引き抜くと、構えた。あれだけ戦ってもまだ体力があるらしい。少しずつ勇輝へと近づく。

勇輝はバットで牽制しながら、戦い方を考えていた。

まともに戦えば勝ち目はない。当然相手の隙をつくことになる。速さが互角となれば、逃げ回って相手の隙を待つしかない。

「考え事などしている場合ではないぞ」

勇輝がはつと我に帰ると、弥生の顔が目の前にあった。慌てて後ろに飛び退き、バットを縦に構えて盾がわりにする。

身を縮めて弥生の剣戟を避けると、バットが急に軽くなった。走って弥生と距離を取りながら見てみると、先端部分が無くなっていった。

（勝てる気しないって！）

全速力で弥生と間合いを取っていると、地面を影が通り過ぎた。

(あ、やべ)

顔を上げると弥生が前方に立っている。

速さは互角でも、脚力は弥生の方が数段上なのだ。

(あの脚力は反則だろ……)

勇輝は急停止し、バットを構えてじりじりと間合いを詰める。

(覚悟を決めてやるしかない)

勇輝は気を鎮めて神経を集中させる。

弥生は右上段に構えて突きの態勢を取った。

(一撃目を避けて、その隙に気を失わせる)

少々手粗ではあるが、それ以外に思いつかなかった。

張りつめていた糸が切れた。二人は同時に動いた。やはり弥生が出した攻撃は突きだった。

勇輝はそれをぎりぎりまで引きつけて避ける。その瞬間、勇輝の目には弥生の向こう側で光る、黒い銃口が見えた。まだ拳銃を持ったヤクザがいたらしい。

(まずい！ 弥生が危ない！)

弥生の二撃目の薙ぎ払いは、バットを犠牲にしてかわし、弥生に体当たりする。それと同時に銃声が二人の鼓膜を貫いた。

「くっ」

勇輝は左腕に溶岩が染みだしたような熱と痛みを感じて、弥生とともに地面に倒れ込んだ。

弥生は受け身をとって立ち上がり、銃を持っている男を見つけるとその腕を斬り落とした。

その男は絶叫して気を失う。

勇輝は激痛が走る左腕を押さえながらのろのろと立ち上がった。

「余計なことを」

弥生は勇輝の傷を一瞥すると、苦々しげに吐き捨てた。

「おい。そこは人間としてまず礼を言えよ」

「私は人間ではない。魔術師だ」

弥生は鼻で笑うと、月契の血を払って具現化を解いた。

「魔術師も人間も関係ない。人としての問題だ！」

そうしている間にも勇輝の傷口からはとめどなく血が溢れる。幸い弾は掠っただけだったが、出血が多いのだ。

「弥生！ 勇輝！」

険悪な雰囲気になりかけた時、切迫した声が聞こえた。顔を向けると秀斗が走って来ている。

「弥生。無事だな」

「誰に聞いている」

「勇輝……」

秀斗は勇輝の前に立つとげんこつを落とした。

「この大バカが！ 死にてえのかよ！ また俺の障壁すり抜けやがって何様もつもりだ！」

頭ごなしに怒鳴りつけられ、勇輝は少し反省する。幼いころに戻った気分だ。

（また心配させたなあ）

「それになあ！ 弥生を守るのは俺の役目だ！」

（ああ……また怒りが変な方向に）

「そもそもてめえ……」

秀斗は赤い染みが広がっていく勇輝の腕に目を止めると、言葉と顔色を無くした。

「怪我してんだったら一番先に言え！」

「だって口はさめなく、うわっ」

秀斗は勇輝を抱きかかえると校舎に向かって走り出した。

「俺こいつの手当をしてくるぜ！」

「やめろ秀斗！ 降ろせ！ 恥ずかしいから降ろせ！」

お姫様だっこをされた勇輝は逃れようとものがくが片手の自由も効かず、秀斗の腕にすっぽりと収まっている。

「俺がこの腕に抱くのは弥生だけって決めてんだ。幸栄に思えよ」

「そんな幸栄いらないって！」

秀斗は軽々と階段を駆け上り屋上へでると、テントの布を足で蹴り上げて中に入った。

そして近くのソファアに勇輝を座らせると、薬箱を探しに走る。

ほんの少し前と同じ状況。ただ傷の痛みは何倍もひどい。

勇輝はぐったりとソファアに身を沈めた。

第2章の15 人間なめんな！（後書き）

二週間分の働きと量。長いけど、戦いつて一気に読みたいかなあ…  
…って。

読んでくださった方、ありがとうございます。

## 第2章の16 開戦宣言

「人間に庇われたか」

グラウンドでは、戦場跡を眺めながら二人が話をしていた。意識を保っている者が少ないのか、グラウンドは先ほどまでの喧騒が嘘かのように静まりかえっていた。降り積もる雪が音を消していく。

「それはあれが勝手にやったことだ」

「だろうな」

錬魔には勇輝を治療をする気はさらさらなかった。言葉をかけるとすれば自業自得。先ほどの勇輝の戦いぶりを見ても、仲間だと言うにはまだ一歩踏み出せない。

「……あいつは、私たちが人間と同じだと言った」

唐突に弥生が独り言のように呟いた。

「人間と何も変わるところが無いと……」

「ほう。あの餓鬼がそんなことを」

錬魔は興味深げに返した。今まで真正面から同じだと断言されたことはなかった。

むしろ化け物、と吐き捨てられることの方が多い。

「やっぱり、私は人間が嫌いだ。人間は非力なくせに頑張ろうとする。危険だと分かっても意志を曲げない。その上体はもろい……だから人間は嫌いなんだ」

「ああ。俺も好きではない」

錬魔から弥生の表情を知ることが出来なかったが、いつもどおり無表情に違いなかった。

弥生の背中から空に視線を移す。ゆったりと雪が顔に降ってくる。

(やはり人間はこんなものか……何一つ変えることはできない)

錬魔はその瞬間、勇輝に期待していた自分を見つけて自嘲の笑みを浮かべた。

(馬鹿らしい。弥生は人間を嫌ったまま。そして俺も……)

ふと、先ほどの弥生の言葉にひっかかりを覚えた。今までにない違和感があったような気がする。

その違和感に気がついて、錬魔は弾かれたように弥生を見た。

(弥生が人間という言葉を使うのを、初めて聞いた……まさか……)

「錬魔、用が出来た。私は先に帰る」

弥生はそう言い置き、当惑している錬魔を置いて歩きだした。

「おい、こいつらはどうするんだ？」

錬魔はとっさに呼び止めた。弥生はぴたりと歩みを止める。



死んでいる者はいないといえ、自力で帰ってもらうまで待つとなると生徒に見つかる危険性がある。

「燃やせ」

弥生の断定的な言い方に、つい頷いてしまいそうになる。

「いや……殺しては意味がない」

ヤクザたちを消し炭にしまえば今までの苦労が水の泡だ。

「別に殺しはしない。火をつければ逃げるだろ？」

「……それは人道と俺の主義に反する」

確かに驚いて逃げていくだろうが、逃げ遅れる者も出てくるに違いない。弥生に足をやられたものは間違いなく丸焼きになるだろう。

「なら送り届ける」

「え、ああ」

急にまともな案が出たので鍊魔驚きつつもすぐに頷いた。

「後は任せる」

弥生は残る死体もどきには一瞥もくねずに、校舎に向かって歩き出した。

（まさか、俺が一人でやるのか？）

鍊魔は颯爽と立ち去る後姿を見ながら、深いため息をついた。

その後、零華と癒慰に協力してもらい全てのヤクザをそれぞれの組に送り届けた。寒空の下に放置したが、誰かに気づいてもらえるだろう。

そして三人は証拠隠滅作業へ入った。血で染まった地面は砂を巻き上げて隠し、落ちていた武器は燃やして灰にする。

雪が降っているというのは本当に都合がよく、うまい具合に荒れたグラウンドを隠してくれる。

一通り修復作業が終わり、彼らは屋敷へと帰って行った。そしてそこで見たものは……

「痛い！ きついつて！」

「悪い。じゃあこつか？」

「ぎゃああー！」

傷の手当に奮闘する秀斗とさらに傷が広がっている涙目の勇輝だった。

三人はそれを無言のまま見詰める。二人の足元には失敗した血染めの包帯が落ちていた。

鍊魔は眩暈を感じた。

「秀斗どけ」

鍊魔はそう言うなり秀斗を押し避けて勇輝の前に座る。治療をする気などなかったが、あまりにもひどい秀斗の手当を見て、医者

良心が頭を出したのだ。

勇輝は何が飛んでくるかと身構える。

「腕を出せ」

命令されるままに従う。逆らいでもしたら焼き殺されそうだ。

「……掠り傷か」

錬魔はもくもくと傷の手当をする。さすが医者というだけあって手慣れたものだった。

(全く嫌な性分だな。俺が人間の手当をするとは)

「すごい。やっぱり錬魔は医者なんだな」

きれいにまかれていく包帯を見ながら勇輝は感心する。

「錬魔にかかればどんな傷もすぐ治せるんだぜ」

秀斗は自慢げに言った。背後で零華が治癒魔術と言います、と付け加えた。

しかし錬魔がその力を使うのはよっぽどの時だった。普段は通常の治療をしている。

「へー。でも俺は包帯巻いてるほうが好きだな」

錬魔は包帯の端を切って結んだ。止血も完璧で、痛みも和らいでいる。

「なんで？」

「だって、怪我は不良の勲章だから」

もちろん勝った場合に限る。

錬魔はそうにこやかに言った勇輝の顔をじっと見た。少し当惑しているように見える。

「お前は、変な奴だな」

「は？」

錬魔はふっと落とすように笑って、勇輝の目を見て言った。

「弥生を守ってくれたこと、礼を言う。お前が助けられなければ厄介な怪我人が増えていた。ありがとうな」

無表情で、声にも抑揚のないまま言われた言葉に、勇輝は雷に打たれたような衝撃を味わった。

（れ、錬魔が俺に礼を言った。秀斗にも言われてないのに！）

勇輝は口を閉めるのも忘れて、錬魔の顔を食い入るように見つめる。

（錬魔って本当はいいやつかも）

「が、これ以上怪我をするなよ。次はその命が無いと思え」

錬魔に対して好感を持ったのもつかのま、三白眼で睨まれ背筋が

凍りついた。

「あ、はい」

錬魔が勇輝の傍を離れ、勇輝がほつと肩の力を抜いた時、上で扉が開く音がした。

吹き抜けとなつている廊下に皮靴の音が響いく。

二階の廊下に姿を現したのは弥生だった。無言で下を見下ろしている。

「お、弥生じゃん」

秀斗が弥生にむかつてひらひらと手を振る。弥生はそこに勇輝たちの姿を認めると、手に持っていたものを投げつけた。

それは正確に勇輝の足もとの床に突き刺さる。

勇輝は驚いてソファアの背にすがりつく。

音を鳴らして震えているそれは、剣。

遅れて鞘も投げ込まれる。

「それをお前にやる。勝負の続きと行こう。いつでもかかってくるがいい」

勝負、その言葉に勇輝の不良としての、男としての血が騒ぐ。

勇輝は弥生と剣を交互に見てから柄を握った。剣を引きぬき、きつ先を弥生に向ける。

「受けて立ってやるよ！絶対お前に俺の存在認めさせてやるからな！」

勇輝は勝気な笑みを見せる。

弥生は何も答えずに、踵を返して見えなくなった。皮靴の遠ざかる音だけが響いていた。

## 第2章の17 お飲物は何にいたしましたでしょうか？

叩きつけられた挑戦状を自信満々に受け取った数分後、勇輝はソファァーが凹むほど落ち込んでいた。それを遠巻きに秀斗と癒慰が見ている。錬魔と零華は出ていった後だった。

「どーしよ。勢いに任せて勝負受けちまった」

ソファァーの上で体育座りをし、後悔の念に小さくなっている勇輝。旅行先の高いテンションで変な土産を買ってしまった記憶が蘇る。

「俺、絶対殺される」

勇輝は鞘に収められた剣を少し抜いた。刀身に自分の顔が映る。弥生から投げ渡された剣は、軽めの中剣。質感、長さともにバツトに近かった。鞘には細かくレリーフが施されており、柄も上品に飾られていた。美術館に飾られていてもおかしくない品だ。

「何落ち込んでんだよ。良かったじゃねえか」

突然秀斗に背中を叩かれて勇輝はむっとして振り返る。

「どこが！ 何一つ進んでないのに！」

「は？ 何言ってるんだよ。お前仲間に入れたじゃねえか」

「……え？」

勇輝はきょとんと秀斗を見た。その間抜け面に秀斗は思わず噴き

出す。

「弥生ちゃんは、仲間として認めた人にしか剣をあげないの。だから、勇輝くんは如月の仲間って認めてもらえたのよ」

笑いを堪えている秀斗の隣で癒慰が言葉を付け加えた。

「……俺、認めてもらえるようなこと何一つしてないんだけど？」

「まあ、弥生なりに筋が通ったんじゃないかね？」

「ひとまず、勇輝くんの仲間入りを祝おうよ」

いまいち納得のいかない勇輝に二人は畳かけた。

「そつだぜ勇輝。騒いで酒を飲もうぜ！」

「そつよ、ぱーっとしましょ！」

その言葉に釈然としない顔の勇輝は目を輝かせた。

「飲む飲む。俺未成年だけど」

「よし！俺の取っておき出してやるから待ってる！」

「じゃあ私はなんか作ってくるね」

と、さっそく二人は酒宴の準備を始める。

二人が意気揚揚と出ていった後、勇輝は自分の手にある剣を見てはたと気付く。



(もしかして弥生との勝負って、真剣勝負?)

勇輝はちらりとよぎった嫌な予感を、頭を振って払うと久々の酒に思いを馳せた……。

鍊魔は自室で湯を沸かしていた。暖炉の火にキャンプのようにやかんが吊るされている。

暖炉の火はごうごうと燃え、時たまやかんを飲み込んだ。

鍊魔は薬品が並ぶ棚の一つから瓶を取り出した。その棚に入っている瓶は全て趣味で集めた嗜好品だ。コーヒーから緑茶までさまざまなものがあるように詰まっている。

(今日はこれだな)

鍊魔はその瓶からコーヒー豆を取り出すとミルで挽いた。ふわりと芳しい香りが昇る。すぐに飲みたいので今回はドリップで入れることにした。

挽き終えた粉をフィルターに入れていた時、ドアが開いた。

「やっぱりコーヒーを飲もうとしていますね」

零華は鍊魔をみるなり呆れ顔でその手から粉を奪い取った。

「一体何杯入れるつもりだったんですか？」

零華がフィルターを覗き込むと、すでに並々粉が入っている。そ

の上でまだ積もうとしていたのだ。

「人の好みだ」

「カフェインの取りすぎは体に良くないんですよ？ 先ほど私が入れてあげますと言ったのに勝手にしてますし……」

「……お前の入れたのは薄い」

零華はそう言いながらフィルターから余分な粉を取り除く。

量が減っていくにつれ、錬魔が不服そうな顔になっていった。

そして零華はお湯を淹れようと暖炉に近づき、燃え盛る炎の前で足を止めた。

「止めてくれませんか？」

暖炉は湯を沸かしていると言うより、やかんを燃やしていると言った方がしっくりくる。

「ああ……」

錬魔が暖炉に手を向けてちよいと動かすと、暖炉の火は瞬く間に普通の大きさに戻った。

火に包まれていたやかんの取っ手は赤みを帯びるほどに熱されている。コンロさえない部屋に、ミトンなどあるはずなかった。

零華は火傷防止のため水の膜で手を包んで、取っ手を掴んだ。たちまち水蒸気が上がる。そして煮えたぎっている湯をフィルターに注いだ。

こぼこぼと静かな部屋に音が響き、一層香りが花開く。

「……それで、何をしに来た？」

「コーヒーを淹れに」

「お前がそれだけで来るはずがないだろう」

零華は抽出したコーヒーをカップに注ぐと錬魔に手渡した。

錬魔はそれを受け取ると机の側にある椅子に座った。

「ええ。どうやら今日は酒宴のようですよ」

「は？」

「先程廊下で秀斗君が言っていました。久しぶりに蔵を開けるそうです」

錬魔は渋い顔を見るとコーヒーを煽るように飲んだ。

（薄い……）

飲み終えたカップを机の上に置く。

「浮かれ馬鹿が」

「あら、参加しないのですか？ 秀斗君のコレクションが飲めますよ？」

零華は苦笑を浮かべた。

「……酒は飲みたいから行く。だが祝うつもりはない」

「弥生ちゃんが認めたのですよ？」

「だから俺は反対しない。だが奴を認めただけではない」

零華は大袈裟に溜息をついた。

（どうして二人はこうもそろって頑固なのでしょうね）

零華は粉の残りを違う瓶に入れ、豆の瓶と一緒に棚へ戻した。

「酒宴は六時から始まります。ではまた」

零華は最後にそう告げると、鍊魔に背を向けて歩きだした。

「おい」

「……なんですか？」

歩いて数歩のところ呼び止められ、零華は振り向いた。

「何故奴の仲間入りに賛成した？」

「おかしなことを訊くのですね。私は人間のことは嫌いではありませんから」

零華はにこやかに返す。それは本心を見せない完璧な笑顔だった。

「だが好きでもないだろう」

「ええ、まあ」

「俺はお前が一番如月にこだわると思っていた」

零華はくすりと笑った。鍊魔は不愉快そうに顔をしかめる。

「確かに私は如月が好きです。でも貴方と一緒になのですよ」

「どつという意味だ」

「期待したのです。少し、変革が欲しかったのです」

その言葉に鍊魔の顔はますます苦くなる。

では、と言いつくと、零華は部屋から出ていった。

(期待……か)

“怪我は不良の勲章だから”

脳裏に甦った言葉に、自虐的な笑みをみせる。

(人間と俺たちが同じ……か。やれるものならやってみろ)

鍊魔は時計で時刻を確認すると、体を休めるためソファーに横になった。寝過しても誰かが起こしてくるだろう。深い眠りに落ちる一歩手前で昼間の戦う勇輝の姿が目蓋に映った。

鍊魔は小気味のいい笑みを浮かべると、すぐに眠りに落ちた。

そして酒宴は盛大に行われ、秀斗によって年代物のワインや珍し

い酒が、癒慰によつて軽くつまめるものが用意された。

弥生は出てこず、練魔は隅の方で苦い顔をして飲んでいた。

零華は飲む量は少ないが、全種類の酒を飲んでいた。

勇輝は秀斗とともに飲んで馬鹿騒ぎをし、女の子二人が笑いながら盛り上げる。

酒宴は夜中まで続けられ、翌日、勇輝は二日酔いに苦しむことになった……。

第2章の17 お飲物は何にいたしましょうか？（後書き）

はい。第二章の前半終了です。

次回予告

ズバリ、テーマは龍牙隊と迷惑な人たち、プラス負けず嫌いによる戦い。

酒宴の詳しい内容と、龍牙隊の人たちと、後は意地をかけたバトルです。

そして見どころは個性的な龍牙隊の皆様と、弥生の問題児っぷりです。

## 第2章の18 はしゃぐのもほやほや(前書き)

更新再開です。

ストックなしのぎりぎり綱渡りですが、また読んでくれたら嬉しいです。



## 第2章の18 はしゃぐのもほどほどに

木枯らしが窓ガラスをがたがたと揺らしている。  
雪が降らないのが不思議なくらい寒い。

コンクリートで固められた学校は巨大な冷蔵庫に等しく、冷気が体を蝕む。いかに暖房があろうとも、割れた窓ガラスからは容赦なく風が吹き込み、ガラスはその用をなさない。  
そんな教室で、勇輝は机に突っ伏していた。

「おい、勇輝？ 何朝から死んでんだよ」

背後からやって来た歩が背中を叩いて朝の挨拶をする。

「しゃべるな……頭が割れる」

地面から這い上がるような低い声が返り、歩は吹き出した。

「だっせえ。二日酔いかよ」

「うるさい……」

のろのろと頭をあげた勇輝は体を起こし、歩をじとつとした目で見た。自分より酒に弱い歩に馬鹿にされるのは癪だ。

「お前けっこう強いのかな。一体どれだけ飲んだんだよ」

「覚えてない。仕方ないだろ？ 注がれたら飲んじゃうし」

「サラリーマンかよ」

「飲み比べ仕掛けられたら受けてたつだろ」

「ナイスファイト。で、負けたと」

そもそもの原因である飲み比べはむろん秀斗が仕掛けたものだった。ジン、泡盛、白酒、テキーラと、様々な酒で返杯すること五回。勇輝の意識が朦朧としたところで鍊魔が杯を取り上げた。呂律の回らない状態で抗議し、飲み比べを続けようとした勇輝だが、さすがにその事は覚えていない。

「あいつら底なしだつて……全員顔色一つ変えないしよ」

「うわ、なんていうか、さすがだぜ」

「うえ……俺、昨日世界中の酒を飲んだ気がする」

「ま、親睦が深まっていいんじゃないかねえの？」

「親睦、ねえ」

仲間にはなれたが完全に認められたわけではない。少なくとも二名とは今後ぶつからなくてはいけないだろう。

(どーすれば親睦が深まるんだ?)

ガンガンに痛む頭で考えてみるがすぐに思考は止まる。

(やめやめ。考えたって、なるよーになるだろ)

「おっ、勇輝見つけ！」

勇輝が面倒な悩み事を払った頭を、今度は陽気な声が直撃した。

「うがぁ……いてえ」

呻く勇輝を見て秀斗はにやにやと笑っている。

「なっさけねえなあ」

「自力で帰っただけでもすごいことですよ」

そう言った零華は少し呆れ顔だ。

(辛いのなら家で寝ていればよかったのに)

だが酒如きに負けて学校にこられないとは不良の恥だと、勇輝は体を引きずって登校したのだ。

零華の後ろには癒慰と錬魔がそれぞれ対照的な顔で立っていた。

「無理するからだよ」

と朗らかに笑う癒慰と、

「脆弱だな」

と鼻で笑う錬魔だ。

これだけの人数がいて弥生がいないのは不自然だと勇輝が教室を見回すと、隅に立っている弥生を発見した。

これで久々に全員が登校したことになる。

「……え〜っと、弥生は一体」

弥生はものすごく孤立していた。カラフル頭の不良も弥生には話しかけにくいのか遠巻きに見ている。

「まあ、人間嫌いは変わってねえから……威嚇してんじゃね？」

「ああ……確かに今にも剣出しそうな雰囲気だね」

「つーか全員が出てくるって珍しいな」

ひとまず弥生は置いといて、歩が言葉を投げた。

「まーな。たまには学生っぽいことをするのもいいかなってよ」

「頑張つて弥生ちゃんと錬魔君を連れ出したの」

その錬魔もいつのまにか遠くの席に座っており、一欠片も交流の意思が見えない。

(うわ〜。まずどうやって話しかけるかからだよな)

人間拒絶オーラを発する二人に、早くも勇輝は頭を悩ますのだった。

「ま、俺たちも協力すつから、あの二人を落とせ」

「耳元で声を出すなって……頭に響く」

「ほーそうか苦しいか、なら可愛そうな勇輝のために優しい秀斗様が施しをやるう」

突然、尊大になった秀斗の態度に、勇輝は訝しそうな眼差しを向ける。これは何かを企んでいる顔だ。

勇輝が身構えていると、秀斗は胸ポケットから小瓶を取り出した。

「ほら、飲めよ」

「……毒？」

ついそう言ってしまうほど、その液体はおどろおどろしい色をしていた。その色が全力で飲むな危険と訴えている。

「んなわけあるか。二日酔いに効く薬だ。錬魔のここからくすねてきてやったぜ」

「それ本当に薬？ 騙されてない？」

錬魔の所から、と聞いてますます疑う勇輝である。

「大丈夫。俺も飲まされたことあつから」

秀斗の笑顔に後押しされ、恐る恐る喉に流し込む。少々苦味があり、甘党の勇輝は顔をしかめた。

「うゝ、なんか効きそう」

「れっきとした医者ですからね。ああ見えて病人はほっとけないの

ですよ？」

ちらりと鍊魔へ視線を投げかけながら、零華は微笑む。  
が、どうも腑に落ちない顔で勇輝は、

「……医者、か？」

いまだに半信半疑のようだ。

二言三言と会話を進めた時、担任の葉月がやってきた。彼を見るのも久しぶりである。

「おはよ〜。おやあ？　なんか久しく来てなかった顔もいるねえ。  
先生は嬉しいよ」

先生、を強調した葉月は満面の笑みで彼らを見るが、誰ひとりとして担任と目を合わせる者はいない。

そして勇輝は教室の異様な静けさに驚愕した。ありえない事態だ。たとえ鬼のような体育教師に怒鳴られようが反抗する彼らが大人しく座っている。

（一体、俺がさぼってた間に何があった？）

荒くれどもを手中に収めた担任に、ただならぬものを感じた勇輝だ。

「今日の連絡は特にな〜し。あ、来週からテストだから忘れないように」

とってつけたようにそれだけ言って、葉月は早々と出ていった。彼がいなくなると、すぐに教室はいつもの無法地帯に戻った。

(そ〜いやあの人も隊の人だったもんな)

今さらながら自分が入った組織の恐ろしさを知った勇輝だった。

そしてまじめに全ての授業を出た彼らは、口数少なく屋敷へと帰ったのだった……。

「は〜。零華と癒慰は毎日あんな苦痛を受けてたんだな」

ぐったりとソファーにもたれかかって感心した風で言うのは秀斗だ。

ずっと座っているという苦行に早く脱落し、午後はずっと机に突っ伏していた。

「別に苦痛でも何でもないわよ。あれが普通なの」

「そうです。いつもさぼっているからそう感じるだけです」

二人の正当な言い分に秀斗は返す言葉がない。

錬魔も疲れているのか普段にまして口数が少なかった。

「やっぱり不良はさぼってなんぼだと思っ」

勇輝は固まった筋肉を伸ばしながら秀斗を援護した。腕をぐるぐると回して体操をしている。二日酔いは薬のおかげですっかり治っていた。

「だよな〜」

秀斗も肩を鳴らして体をほぐすと、一日中ご機嫌が麗しくなかつた弥生の姿を探した。

やはりというか、すでに部屋に戻ったらしい。

(会話の場にすら出てこねー)

今弥生の部屋に行つて無事に出てこられる可能性はどれくらいかと思案する。

(地雷踏んで剣突き立てられんのは勘弁だし、そーいや昨日遊びに行ったら拳銃向けられたっけ)

全て秀斗の言動が原因で起こっているのだが、改めるつもりは毛頭ない。

「あ、そうだ。勇輝。お前に銃の使い方教えてやるよ」

唐突にそう言われて、女の子二人と会話中だった勇輝は目をぱちくりとさせた。

「銃?」

勇輝の頭の中に水鉄砲、拳銃、マシンガン、ロケットランチャーと銃から連想された武器が浮かぶ。

(いやいや。さすがにそれはないって。ということなんかの隠語?)

このご時世に高校生が銃の扱いを覚えてどうするんだと思いはや



った自分を戒める。

(俺は平和主義者。そんなものかっこいいと思っただめだ)

一人勝手に頷く勇輝に、秀斗はまた一人どっか行ってるなど呆れ顔だ。

「ま、行くぞ」

説明するより見せるのが早いと、秀斗は勇輝の腕を掴んで歩きだした。

「え、どこに?」

「射撃場」

(……まじで?)

そうして勇輝が連れてこられたのは紛れもない射撃場だった。

白い壁に囲まれた殺風景な部屋の端には人をかたどった的が置かれ、向いの壁には大小様々な銃器がかけられている。

勇輝はそれらをまじまじと見つめていた。

(うわ〜かっこいい。すっげえ年代物)

自称平和主義者は好奇心にあっけなく敗北した。

秀斗はその中から適当な物を一つ取って弾を込め、勇輝に手渡した。

それもずいぶんと重い銃で型も古く、昔の西洋映画に出てくるようなものだ。

勇輝は手の中にあるそれをじっと見た。歩と交わしたやりとりが思い出される。

「え〜っと、これは？」

「撃ってみるよ」

冗談を期待したが、秀斗はさらりと的を顎で示す。勇輝の顔がひきつった。

「いやいや、待ってよ。まじで？　なんで？」

歩といい秀斗といい、龍牙隊には親睦を深めるために拳銃を渡す文化でもあるのかと思ってしまう。

「お前もいつ狙われるかわかんねえからな。自分の身くらい守れるようになれ」

「守るところか相手殺しそうな勢いですけど？」

「じゃあ足狙え、足」

相変わらず甘えな、と秀斗は手近な拳銃に弾を込めて撃った。銃声が鼓膜をつんざき、弾は的の足の部分に当たった。火薬の匂いが鼻につく。

「お、すげえ」

「次お前な」

と促され、勇輝はしばしためらい拳銃を構えた。

撃ち方を覚えておけば威嚇ぐらいにはなるだろうと考えなおす。

「最初はちゃんと両手でもっとけよ。んでよく狙え」

勇輝が集中して引き金を引くと、銃声とともに衝撃が腕から肩へと突き抜けた。想像以上の痛みである。弾はどこへ行ったのか、的に当たった気配はなかった。

「う、痺れる」

「慣れだ慣れ」

秀斗は連射し、その全てを的に当てた。

それを見せられれば負けず嫌いの血が騒ぐというもので、勇輝は再び拳銃を構えた。

そして十発ほど練習した後、勇輝は思っていたことを口にした。

「なあ秀斗。この銃古くない？」

「そーなのか？」

「俺の記憶ではもう八十年くらい前のやつに似てるんだけど」

秀斗は自分の手のものに視線を落とす。

「まあ、前からここにあったやつだからな。けっこう古いかも」

「いつそ麻醉銃にすればいいじゃん。そうすれば人も死なないし」

そうすれば心おきなく撃つことができる。

さすがに甘いかと、勇輝は半笑いを浮かべるが、秀斗は麻醉銃か、となにやら思案顔だ。

「まずは足に弾が当たるようにしないと」

かすりもしない銃弾に、途中で消えているのではないかと本気で疑ってしまう。

「心を落ち着かせて狙え」

勇輝は息をゆっくり吐いて狙いを定めた。

狙いは足、確認してから引き金を引き、衝撃を足で受け止める。

銃声とほぼ同時に今度は破壊音も聞こえた。

「お、ナイス」

勇輝の弾は的の頭を撃ちぬいており、小さな穴からは向こうの壁が見えている。

「いや、だめじゃん。あれ即死だった」

その後二人は数十分射撃練習をし、勇輝の腕に限界が来たところで引き揚げたのだった。

第2章の18 はしゃぐのもほどほどに（後書き）

停止前の予告で、フルコメディーと言った作者ですが。

ちよっぴりまじめが入ることをここにお詫びいたします。

めりはりってことで、甘さも塩で引き立つように、神名を楽しんでください。

## 第2章の19 敬語を思い出さないと

射撃練習を終え広間に戻ると、女の子二人は私服に着替えて雑談をしていた。

癒慰はゴスロリ、零華はワンピースとそれぞれお似合いの服装だ。

「うわ〜ゴスロリ初めて見た。意外と似合ってるし」

「ありがと。勇輝君も着る？」

「いえ、全力で遠慮させてもらいます」

勇輝と秀斗もソファーに座り、机の上にあつたお菓子をつまむ。

「それで、射撃はどうだったの？」

「あ〜全然だめ。もっと練習しねえと使いもんになんねえ」

秀斗の答えにむっとして勇輝が返す。

「ゲーセンだったら一位取ったこともあるし、練習すればあれぐらい……」

「腕は痛くありませんか？」

気づかいを見せる優しい零華に、勇輝は腕を叩いてにっこり笑った。

「大丈夫。こんなの腕折られた時に比べたらどうってことないって」

それを聞いて彼らは、勇輝が不良だったことを思いだした。可愛い見た目につい忘れてしまう。

彼も不良なりに数々の修羅場をくぐったのだらうと、勝手に勇輝の人生に思いを馳せる。

「ほんと、男の子って痛い好きよね」

「……いや、別に男の子に限ったことではないのでは？」

零華の言葉は沈黙を生み、皆が一人の女の子を頭に浮かべた。

どうすればもう少し女の子らしくなるだろうか、それが如月の長きにわたる悩みだ。

そんなことを考えていたものだから、本人の声が聞こえて心底驚いた。

「おい」

背後からかけられた声に勇輝は驚きつつ振り向いた。

そこに立っていたのは悩みの種である弥生だ。

彼女は制服を着替え、何やらものものしい服装をしていた。

まず目を引くのは胸に紋章が入った裾の長い羽織、その中には軍服のようなデザインの長めの上着を着込み、ショートパンツの裾からはしなやかな脚が伸びている。

そして腰に帯刀されている西洋の剣。

異世界から連れてこられた人のようだった。

「それ正装じゃねえか。……てことは行くのか？」

「ああ。こいつの服もいるしな」

そんな弥生にあっけにとられている勇輝の頭を会話が通り過ぎる。

「行くぞ」

「……え？ どこに？」

「本部。隊長に会う」

隊長と言えば隊の一番偉い人ではないか、と勇輝は口をパクパクさせる。

(はい？ いきなり隊長？ 俺ただのバイトですけど？)

普通の会社で例えるならバイトが社長に会うようなものだ。

「え、でも俺制服だし……」

「それが学生の正装なのだろう？」

「それに心の準備が……」

「そんなものはいらん。行くぞ」

高圧的な口調に勇輝は飛び上がるように立った。このままでは剣を突き付けられかねない。

緊張で鼓動が速くなる勇輝に零華が声をかけた。

「勇輝君。本部では弥生ちゃんから離れないでくださいね」



なんだかデパートに行く子どもみたいだな、と勇輝は思うが、

「命が危ないですから」

そつと付け加えられた言葉に固まった。

「それと、弥生ちゃんが来てるような羽織を着た人を見たら、会釈しつつ全力で逃げてね」

その肩をがしつと掴んで癒慰がありがたい助言をする。

その他にも二三、注意を勇輝が受けている間、秀斗はすつと弥生に近づいて何かを話していた。

「俺、生きて帰れる？」

よかれと思った助言が返って勇輝の不安を倍増させたらしく、勇輝はすでに及び腰だ。

「命までは取られはしない。行くぞ、勇輝」

弥生はドアへと歩きだした。留守番たちが互いに顔を見合わせる。

(今、勇輝って呼んだ?)

それは弥生が初めて勇輝を名で呼んだ瞬間だった。

「あ、今行く！」

一歩距離が縮まった嬉しさに、勇輝の不安は一瞬で消し飛んだ。ドアを開けて魔の巣窟へと向かった二人を、残る三人は微笑まし

く見送ったのだった。

勇輝はぼかんと周りを見ていた。

廊下の突き当たりにあるドアの向こうは、景色が一変していた。同じような西洋造りの屋敷だが、薄暗く、わずかに自然光が入っているだけだ。

人気もない埃っぽい廊下を会話もなく進むと、大きな扉の前に出た。

そしてその扉を開けた瞬間、強烈な光に勇輝は腕で顔を覆った。光に慣れた目で見ると、そこは先程よりは何倍も明るい廊下だった。人がいるのか小さな喧噪が聞こえる。

(廊下ばっかじゃん)

勇輝が出てきた扉を振り返ると、その両脇には石のオブジェがあり、その台座に四剣琅と刻まれていた。

どうやらあの場所は四剣琅に与えられた部屋らしい。

(……実はあいつらけっこうすごい奴だったりして)

そして勇輝は弥生が先に歩いていることに気付くと、慌てて後を追ったのだった。

歩くに連れて喧噪が大きくなってきた。

一際広い廊下に出ると、同じ服を着た人たちが行き来していた。

(この人たちが隊員かあ)

隊員服を着た彼らを勇輝はきよきよと見ながら弥生についていく。

出る時には物騒なことを言われたが、そんなに危険な雰囲気の場合ではない。

すれ違う隊員たちは皆二人に目を止め、ささやき合う。

「牙軍がくんのかたよ。あまり見ない顔ね。どなたかしら」

「あの紋章、如月じゃないか？」

「え、あの死堅牢しけんろうの？」

「銀髪の女っていやあ、弥生さんじゃねえか？」

「うそ！ あの？」

わいわいと遠巻きに騒ぐ隊員を気にかけることもなく弥生は進む。勇輝はささる視線がくすぐったくて仕方無かった。

「てことは後の男はこないだ隊報に載ってた……」

「もっと怖い感じかと思ってたけど、けっこう可愛い顔してるわね」

「小さいせえな。ほんとにあいつが昂乱とやりあったのか？」

ところどころで勇輝の感情線をぶちぎりそうな言葉があったが、同じ隊のメンバーを殴るのは失礼だろうと思いとどまる。

「弥生さんって美人だったんだな」

「零華さんや癒慰さんに劣らないぜ」

「いや、零華さんのほうが……」

「いや、そこは癒慰さんだろ……」

男の隊員たちの言葉に勇輝は心の中で頷いた。

この三人の中で誰が一番かなんて決められない。三者三様に美の形が違うのだ。

そして角を曲がると、一際大きな扉が現れた。

その前には二人の人間が立っている。よく鍛えられた屈強な男たちで、そこだけ異様な雰囲気に含まれていた。おそらくここが隊長室なのだろう。

見張りの二人は近づいてくる二人に気付くと姿勢を正した。

「失礼ですが。所属をお聞かせください」

きびきびとした態度で一人が問う。

軍人のような動きに勇輝は憧憬の眼差しを二人に送った。

(うわっかっこいい。俺もやりたいな)

子どもの頃にやった騎士ごっこや兵隊ごっこを思い出して、勇輝は少し興奮気味だ。

「死堅牢如月」

硬い声で弥生が答えると、二人の顔がさらに引き締まりすぐに扉が開けられた。

「お会いできて光栄です！」

「右に同じく！」

扉をくぐると、後ろから大きな声が飛んできたので、勇輝はびくりと肩を震わした。振り返ると男たちは胸に手を当て敬礼を取っている。

そして前に視線を戻すと、そこは広間のようだった。待合室として使われるのか、ソファが数台置いてある。隅の方に机と椅子があり、そこに一人の女性がいた。

彼女は来訪者に気付くと椅子から立ち上がり二人に近づいた。

「如月の弥生だ。隊長に会いに来た」

相手が言葉を述べるよりも前に、弥生が用件を述べた。

女は少し驚きの表情を浮かべ、それから静かに礼をした。

「弥生さん。この度はご帰還を嬉しく……」

「つまらん挨拶はいい。隊長はいるか？」

弥生は彼女の言葉を遮り、奥のドアへと歩いていった。

「はい」

女は特に気分を害した風でもなく、短く答える。

「勇輝。お前は少しここで待っている。話がついたら呼ぶ」

そう言い置いて、弥生はノックもせずに入ってしまった。

そして置いていかれた勇輝は、女に会釈をすると居心地の悪そうに扉の前で立つしかなかった。

弥生がドアを開けて中に入ると、正面の机に龍牙はいた。十年前と変わらない位置。服装も、風貌もさほど変わっておらず、ここだけ時の経過から取り残されたようだった。

外での声が聞こえていたのか、机の上は片付けられ、弥生を待っていたようだ。

「お帰りと言うべきなのかな、弥生。君から来てくれるとは嬉しいものだ。あまりにも来ないから誰かを迎えにやるうかと思っていたのだよ?」

あくまで龍牙はにこやかではあるが、目が全く笑っていないかった。本当にもう少し遅ければ上の二人のうちどちらかが乗り込んできたかもしれない。あの二人なら喜んで来るだろう、と弥生は無表情の下で思った。

「私はここにあまりなじみがないもので」

弥生は適当に返した。もともと来る気などさらさらなかったのだ。

「君がいなかった十年のことはあえて聞かないことにするよ。このことについては今後の君の働きで判断させてもらう」

「お好きにしてください。私は借りを返すまでは隊長を裏切ることはしません」

龍牙はその答えに満足そうな笑みを浮かべた。

「ではゆっくり返してもらおう。ところで、族狩りはどうなったんだ？ 昂乱は美月に渡ったようだが、誰も私の所に報告にこないとは……一体どういうことだい？」

龍牙の顔から笑みが消え、部下に対する隊長の顔に変わった。その声には非難が含まれていたが、弥生は頭に疑問符を浮かべる。

「……秀斗に行かせましたが？」

「来てないから訊いているんだよ」

しかし弥生は昂乱を捕獲後、すぐ秀斗に本部へ報告させたのを覚えていた。その上秀斗も隊長に報告をしたと言ったのだ。

しばし考えた弥生は、はたと思いついたような顔でこう言った。

「心配しなくてもいいのでは？ 人間はそういう症状のことを老人ぼけと言っそうですから」

龍牙の顔が盛大にひきつった。

「そういう問題ではない！」

「しかし、秀斗は隊長と美月に会ったと言いました。隊長が忘れただけでは？」

「美月に……？」

龍牙はしばし記憶を遡らせた。彼女たちが族狩りを決行した日は美月も共に仕事をしていた。

しかし後半は表の仕事で彼はこの部屋にはいなかった。だが秀斗は龍牙に会っているという。

（まさか……）

龍牙の脳裏に一人の青年が浮かびあがった。龍牙に化けられる者は彼を除いてはいない。しかも動機も見えてくる。

（今度、詳しいことを聞かないとね……）

今はモスクワに潜入中ですぐに問い正せないことが腹立たしい。

「わかった。それはもういい。ところで君にいい話がある」

「いい話？ 任務ですか？」

「いや。つい先日あけみ暁美の帰還が確定した。一週間後、こちらに着く」

暁美という名に弥生の表情がわずかに動いた。



驚きから喜びへ。長年を共にした者にしか分からないささいな変化だ。

「暁美さんが……」

「くれぐれも迷惑はかけないでくれ彼女はもう……」

龍牙は言葉を繋げようとして、はたと思いだした。

「そういえば、今回の任務で民間人を巻き込んだらしいが、問題を起こしはいないだろうね」

「はい」

やけにあっさり頷く弥生に、龍牙は言い知れぬ不安を感じた。

「そのことで、今日は来たのです。勇輝、入れ」

ドアに向かって呼びかける弥生に、龍牙は額を押さえた。弥生が来る時は決まって面倒なことが起こっていたが、今回もご多分にもれずそうらしい。

人間嫌いの弥生にここまで連れてさせた人間。

龍牙は開かれていくドアの向こうにいる人間に視線を移した。

入れ、その声を聞き、勇輝は意を決してドアを開け、

「あ、あの。春日勇輝です」

と、ぎくしゃくとした動作でお辞儀をした。

弥生に放置されていた間に、緊張が高まり、現在最高潮である。そろっと顔を上げると、正面に体長と思われる人がいた。

彼は厳しい顔つきで勇輝を見ている。

勇輝はその威圧感に心の底が冷えた。何か大きなものに凝視されている感覚になる。

「バイトとして如月に入れました。承認してください」

龍牙は勇輝と弥生を見比べ、内心溜息をついた。

彼は人間が巻き込まれたとは聞いた。しかしそれが少年だったとは聞かなかった。

しかも弥生が戻ったと思ったら人間を仲間に入れると言います。バイトの身分で階級つきに入るなど黎冥を除けばありえないことだし、しかもそれが超戦闘部隊の如月……。

問題が多すぎる。

「隊長。これは決定事項です」

弥生が余命宣告をするような調子で告げた。

「……春日、勇輝」

突然話しかけられ、勇輝はびくっと背筋を伸ばした。緊張が全身に走る。

「君はそれでいいのかい？ 如月に入るということは危険と隣り合わせだ」

「か、構いません。俺が仲間になりたかったんです。それに、危険でも彼らとならなんとかなりそうな気がします」

勇輝は口の中が乾ききっていたが、なんとか声を振り絞った。

龍牙はもう一度弥生を見た。相変わらず彼女は無表情だが、その目は確信を秘めていた。

この様子では何を言っても無駄なことを確信した龍牙は、勇輝を正面から見据えて言った。

「わかった。春日勇輝の入隊を認めよう」

その言葉に勇輝はほっとして息を吐いた。

龍牙は席を立って勇輝へと歩み寄る。近くで見ると、彼の大きさは倍に感じられた。

「もし何かあったら、すぐにここに逃げるように」

重々しい口調で告げられて、勇輝は直立不動で、はい、と返事した。

「ありがとうございます、隊長。お歳を召しても判断力は鈍っていないようで安心しました」

弥生の言葉に勇輝は固まっている体をさらに強固にした。石化が始まってもおおかしくはない。

(や、弥生？ それすっごく失礼だよ？)

先程から危ないセリフがあったが、どれも聞かなかったことにし

ていたのだ。

「弥生……君の敬語には一欠片の敬意も感じられないんだが？」

「はい。一欠片もありませんから」

勇輝は今度こそ心臓が止まるかと思った。敬語だから全てが丁寧になるわけではない。

目上の人には言っていないことと悪いことがあるだろ、と勇輝は念を送ってみるが、弥生に届く気配はない。

忠誠心の低い如月の中でも、弥生はゼロに近かった。

「では私はこれで失礼します」

弥生は爆弾を落とし、しっかり礼をしてから、ドアを開けて出ていった。勇輝も礼をし、とロボットのような足取りで部屋を出た。

扉が閉まった直後、勇輝は全身で息を吐いた。体の緊張が解け、代わりに疲れが押し寄せる。

「勇輝何をしている。いくぞ」

勇輝の気持ちなど一切介しない弥生はすでに歩きだしていた。

「行く？ どこに？」

「匠のところだ」

勇輝の頭に浮かぶのは竈を前にする陶芸家だ。

情熱的なテーマソングとともに、勇輝は弥生の後を追った。

第2章の20 匠のお仕事（前書き）

久しぶりに筆が進んだ。

## 第2章の20 匠のお仕事

再びひそひそ声の中を二人は進んだ。隊長に挨拶したことはすでに広まり、時々、ようこそうちの隊へ、などと声をかけられるようになっていた。

弥生は相変わらず無言で、勇輝は会釈を返しながらついていく。そして隊員を注意深く見てみると、隊員服にも種類があるようだった。

一番多く見るのが、無地に線が入ったタイプ。時たま、胸に紋章をつけた隊員もいた。

弥生の胸にある紋章とはまた違う文様だ。

（俺知らないことばっかだな。後で聞いてみよう）

弥生に訊いても答えてくれなさそうなので、秀斗あたりにするかと検討をつけておく。

進むにつれて、今度は人が少なくなってきた。

そのかわり奇妙なオブジェが多くなる。石像があればブロンズ像がある。人を形どったものや、神話の生物、もはや名のつけようのないものまである。その間隔は徐々に狭まり、その大きさは徐々に大きくなり、廊下は人一人が通れるほどの広さになった。

そして急に廊下は開け、新たな建物が続いていた。上にかかる看板には、裏技術研究所と書いてある。

（裏技術研究所？）

怪しいことこの上ない建物へ、弥生は迷うことなく入っていった。勇輝は裏、ってなんだ？ と思いついてく。

開け放たれたドアから入ると、そこは隊長室と同じような広間だ

った。回りには武器や、用途不明の物体が置いてある。どうやら展示室のようだ。

そこを抜け、次の部屋に入るとそこも広間だった。さっきの部屋ほどではないがここにも武器が飾られている。

「あ、こんにちは。何か御用ですか？」

その部屋で飾り物の手入れをしていた少年が尋ねてきた。歳の頃は勇輝と同じぐらいで、白衣を着ている。顔が理系だ。

「匠はいるか？」

「所長ですね。今お呼びします」

少年は早足で部屋の奥へと消えていった。

「……所長？」

呟く弥生の隣で、勇輝は匠が人名であることに気がついた。奥の部屋に入った少年は作業台の上で人形を作っている所長を見つけた。

その肩を叩いて来訪者を告げる。ただ呼びかけただけでは集中状態の所長を現実世界に呼び戻すことは不可能だ。

「俺に客？ 今は忙しいから後にしてくれないか？」

「それが、どうやら牙軍の方のようです」

「癒慰かい？」

「いえ。銀髪の美しい女性です」

「……銀髪？」

男はしばらく記憶を漁り、ややあつて立ち上がった。頭を掻きながら戸口へと向かう。

(銀髪美人ちゃんねえ)

そして彼が見たのは、話どおりの銀髪の美人だった。

「うわゝもしかしなくても弥生ちゃんかい？ 十年ぶり。美人になったねえ」

「匠、か？ そうか、十年……お前所長になったのか」

「そ、けっごう出世したでしょ」

そう言つて笑う男は三十代前半、髪はぼさぼさで着ている服もしわがよっている。そして何日も寝ていないのか目の下にはくまが出来ていた。彼がこの裏技術研究所の所長である匠だった。

「君は、とういふか君たちはほとんど歳をとつてないみたいだね。あ、でも少し成長したかな？」

と顎に手を添えて匠は弥生をまじまじと見る。

しかし注がれる視線は全体でも顔でもなく、顔の少し下、胸であった。



その視線を明確に感じ取った弥生は月契に手をかけた。

「冗談冗談。で、今日は何の用？」

弥生は柄から手を離すと要件を切り出した。

「まずは武器を作ってもらいたい」

「武器？」

「麻醉銃だ」

匠は顎をさすりながら考えるそぶりをみせる。

「型は拳銃。軽い方がいい。弾倉は複数に分けて、個別に取り外せるように。それを六つ頼む」

「職人殺しの要求だね。俺が人のくくりに入ってること知ってる？」

「一応だろ？ 一週間不眠不休で動ける奴を人間とは言わない。それで、やってくれるのか？」

「麻醉銃つてのに惹かれるからね。なかなかいい目のつけどころだ。他には？」

「あと隊員服が欲しい」

匠は弥生の隊員服を上から下まで見た。目には非常に嬉しいが、寒そうである。

「そうだね。生足は惜しいが、レギンスなんかどうだい？ いや、  
タイツも捨てがたいか」

「いや、私ではなく勇輝のだ」

「ゆづき？」

匠に首を傾げられて初めて、弥生は隣に勇輝がいないことに気が  
ついた。

部屋を見回してみるがいない。

いつからだと思いつ返すが、会話をしていなかったので全く分から  
なかった。

「もしかして、さっきから向うの部屋でうろつろしている男の子か  
い？」

そう言われて弥生が後ろの部屋を見ると、勇輝は壁の武器に目を  
輝かせていた。隣で先ほどの少年が説明をしている。

「勇輝、離れるなと言われただろ」

その声に勇輝は弾かれたように弥生を見た。あ、と呟き慌てて駆  
け寄る。そして部屋にいる匠と対面した。

「君があの子か。昂乱で協力したとか言う……へえ、可愛いね。  
俺のところにこれば、毎日楽しめるのに」

にこにこ人当たりのよさそうな笑顔を向けているが、言葉の最  
後は怪しいものを含んでいた。

「もしかして匠さん？」

「そうだ。裏技術研究所の所長で、小女趣味のセクハラ変態親父だ……と癒慰が言っていた」

弥生の言葉で心がえぐられた匠は笑顔をひきつらせた。

「ひどいよ癒慰ちゃん。お得意様だからいろいろよくしてあげたのに」

「毎回変な服ばかり作るからだ」

「君のその服も僕がデザインしたんだけど？」

匠は恨みっぽい眼差しを弥生に向け、その後勇輝を査定するような目で見た。

「まあいい。で、この子の服が欲しいわけか。うん。メイド服なんてどうかな」

あまりに匠の顔が真剣だったので、勇輝は言葉の意味を理解するのに時間がかかった。

「なんでもいい。それにしてくれ」

「ちょっと待った！ メイドって何？ てか弥生メイド服って何か知らないだろ！ お願いしますから普通のにしてください。他のみんなが来てるのと同じのにしてください！」

脳内回路が繋がった勇輝は早口でまくしたてた。これを秀斗が

言おうものなら問答無用でぶん殴っていたらう。

「それは無理。あれは普通の隊員服だからね。君は牙軍の小隊に入るわけだから、あんなの着せられないよ」

「へ？」

「もしかして何も説明されてない？」

「はい。まったく」

匠はそうかそうかと得意げな顔で頷いた。

「よし、では俺が説明しよう」

そしてわざとらしく咳ばらいをすると、胸をはって説明を始めた。

「まず、弥生ちゃんのような能力者は牙軍と呼ばれ階級をもらうんだ。それが四剣琅で、その下にある小隊が如月だ。どの小隊でも入れる人は優秀な人間のみ。だから普通の隊員とは違う隊員服になるってわけ」

新人隊員への説明というイベントをクリアした匠は大得意になっっていた。

それを見た弥生が何を思ったか小指の爪ぐらいの光の玉を指ではじいて匠へと飛ばした。

「ん？」

匠の額に当たると、小爆発を起こした。ぼさぼさだった頭が見る

も無残な形に変わった。

絶妙な力加減だ。

「ちょっと弥生、何してんだよ！」

「確かに私はこいつに隊について教える気はないが、お前に説明されるのは死堅牢としてのプライドが許さない」

（理由になってないって……）

匠は頭についたすすを払って

「すいませんでした。すこし舞い上がりました」

と大人しく頭を下げた。

「さっさと勇輝の服を作ってくれ」

「了解。なるべく可愛いものにするから……脱いでくれるかい？」

勇輝はその瞬間全身鳥肌がたった。

「サイズとかと測らせてほしいんだけど」

とじりじりと近づいてくる匠。

「ふつーのでいいんで！ サイズとか適当でいいんで！ とにかくお願いします！」

勇輝は最速で三度お辞儀をし、全速力で隣の部屋に逃げた。

「あゝあ。逃げられた」

「お前が変態だからだ」

「つれないね。そうだ、ちょっと見てほしいものがあるんだけどまだ時間はある？」

弥生は後の部屋の勇輝に目を向け、勇輝がそこにいるのを確認すると頷いた。

「じゃあちょっと奥に来て」

後の部屋に避難した勇輝は再び飾られている武器を眺めていた。最新のものから、独自に開発されたものまでところ狭しと並べられており、勇輝の目をなかなか離さない。

中には匠の発明なのか、怪しげな物もある。

そうして時間を潰していると、部屋の中を風が通り抜けた気がした。

窓が開いているのだろうかと思きかけた時、声が聞こえた。

「春日勇輝、見つけた」

次の瞬間、風景は傾き、姿を無くした。

## 第2章の21 迅速の舞、綾霸

地球が傾いたのだと思った。ゆっくりと景色が傾いていく。地に足をつけている感覚がなくなって、人類滅亡の文字が頭の中で点滅する。予言も何もあつたものじゃない。

世紀末、予言が外れて、恐怖を返せと叫んだ自分を思い出す。そして外れたことに心底ほっとしていた。だがこんなことなら当たつた方がましだ。

（不意打ちとか、卑怯じゃん）

だが、次に勇輝の目に映つたのは暗黒でも、隕石衝突による炎でも衝撃でもない。

勇輝の目に映つたのは、高速で流れる風景だった。相変わらず向きは横のままだ。

「おわっ」

一瞬体が宙に浮いて、今度は腹の辺りに圧迫感を感じ、靴が見えた。どうやらこちらが下らしい。

ここまでできて勇輝はなんとなく状態が掴めてきた。

（なるほど、気を抜いたら攫われるのか）

勇輝は零華に言われた言葉の意味を理解した。

しかも相手は片腕で支えられるほど力のある男だろう、と勇輝は推測する。小脇に抱えられるなんて経験はそうあつたものではない。案外冷静なのは、昂乱に攫われ空を飛んだ勇輝にすれば、これく

らしい誘拐は物の数にもならないからだ。  
走っているようで、小刻みに振動が伝わり、靴が視界を出たり入ったりする。

(よし、男の顔を見よう)

勇輝は興味心で首を巡らせた。  
しかし、男の顔を見ることはできなかった。  
頬にあたる障害物、その感触はムニユツという表現がよくあっている。

勇輝は首を元に戻して、自分が攫われている図を頭に描く。

俺は小脇に抱えられている。つまり俺の頭は相手の腹の辺りのはずだ。

そこから上に顔を上げると障害物があった。  
つまりそれは………胸？　といことは、今俺を攫ってるのは女？

そう結論付けると、勇輝は決心した。

(よし、逃げよう。女からなら逃げられそうだ)

勇輝は水から揚げられた魚のように暴れだした。

(男勇輝！　黙って攫われてたら不良の名が泣くぜ！)

だが勇輝は、女の中には例外もいることを、身近によい例がいるにも関わらず、忘れていた……。

「わっ、ちよっと、暴れない！　絞めるよ！」



はりのある声で一喝され、勇輝はびくりと身を震わす。強気な女性のような。

そして逃がさないようにとさらに強く引き寄せられ、頬に柔らかいものが当たると。

「ぎゃあ！ ダメ！ 放して〜！」

勇輝の頭は沸騰寸前。しばらくは手足を動かしていたが、やがてゼンマイが切れたように動かなくなった。

勇輝、胸に負ける。

不良にあるまじき、情けない負け方だった……。

しばらく運ばれると、前方に大きな扉が見えてきた。首を起してよく見ると、死堅牢と同じ造りだ。オブジェに刻まれた文字は、運び手の走りが速すぎて見ることはできなかったが、うつすら二の文字が見えたきがした。

扉の隙間から入ると、わっと音が押し寄せる。男の掛け声、金属のぶつかり合う音。

廊下には人もいたが、誰も勇輝に視線を向ける者はおらず、剣を持つ男たちの合間を抜けて、勇輝は一つの部屋で下された。

勇輝はぼーとする頭で部屋を見回す。

広い部屋で、壁には様々な武器が立てかけられている。剣の数が多いが、槍や鉄球まである。

「ようこそ。鎌堂二、朧月夜へ」

女は誘拐などなかったように、カラリと笑った。赤いショートカ  
ットのいかにも勝気そうな女性だ。弥生と同じ羽織を着て、その  
服は胸を強調したデザインとなっている。

彼女の大きな胸を……。

「あたしは綾霸あやは。この朧月夜のリーダーを張ってるのよ。よろしく  
ね」

「あ、俺は春日勇輝です。新しく如月に入りました……えっと、よ  
ろしく願います」

雰囲気を押され、誘拐理由を問い詰めるのも忘れて自己紹介をし  
てしまう。

そして勇輝は彼女の羽織に気づき、会釈して逃げるなんて無理だ  
ろ、と思った。

「知ってるわ。あんた牙軍でも有名だもの」

「え、有名？」

「うん。あのへそ曲がりの弥生に認められたたった一人の人間って  
ね。ふふふ、あんたが攫われたと知ったらあの子、どういった反応  
を見せてくれるかしら。殴りこんでくれないかな」

うふふと魔性の笑みを浮かべる綾霸に、背筋に冷たいものを感じ  
た勇輝だった。

(この人絶対弥生と同じ戦い好きのタイプだ)

勇輝は綾霸からすつと目を離し、壁の剣を眺める。

彼女の体の真ん中にある兵器を見ていると、嫌でも先程の感触が蘇り、拳動不審になってしまう。

「剣に興味があるの？」

「あ、いえ。すごい数だなと思って」

「こんなの序の口よ。奥がコレクションルームになってるの。見る？」

「はい。見させてもらいます」

断れるはずのない勇輝は綾霸について奥の部屋に入る。そしてその景色に圧倒される。

「すげえ」

壁を覆い尽くす剣の数々。それは大小様々で、時代はもちろん、国を越えて集められていた。遺跡から出土したようなものもあれば、宝剣のようなものもある。

たいした剣マニアだ。

「これを集めるのに何年もかかったんだから」

自慢のコレクションを褒められた綾霸は得意そうに説明した。

「あれは秦王朝ので、あつちはローマ王の宝剣……あ、これはグルシードの剣、伝説の剣闘士の愛剣よ。弥生のコレクションから頂いたの」

「弥生も集めてるんですか？」

「そう。以前勝った条件で入らせてもらったけど、ムカつくぐらい持ってたわね」

綾覇はその時のことを思い出したのか、少し不満そうな顔になる。

「え、弥生に勝ったんですか？」

「当たり前じゃない。剣の腕は私の方が上よ」

勇輝は勝ち誇った笑みを浮かべる綾覇に畏敬の眼差しを送った。弥生が最強だと思っていたが、上には上がいるものなのだ。

「そつだ。お近づきの印に、一つ剣をあげる」

唐突な申し出に、勇輝は慌てて首を横に振った。

「いいです。俺、弥生から剣もらってるんで」

正直、ここにある曰くつきの剣なんて持てない。豚に真珠の話どころではないからだ。

「へへ、弥生が剣を……見せて」

綾覇の目がすつと細くなり、纏う空気が鋭敏なものに変わる。

「あ、今は持ってないです」

と慌てて勇輝は手を上げて丸腰をアピールする。だが綾覇は気にする様子もなく、勇輝に近づく。

「クスツ、そんなの関係ないわ」

綾覇は怪しい笑みを見せて、勇輝の胸に手を置いた。そのまま少し力を入れると、その手は勇輝の胸の中に入っていく。まるで吸い込まれるように滑らかに。

「え？ ……ぎゃああああ！」

剣のぶつかる音が響く夕方、朧月夜に絶叫が響いた……。

時は少し遡り、裏技術研究所では、匠が命の危機を迎えていた。

「言い残すことがあれば聞いてやるっ」

「ナース服着てみない？」

「死ね」

見せたいものがあると言われ、奥の部屋に入った弥生は、可愛い小物かつ、武器などの実用品を見た。

匠はそのうちの二三の武器を手にとって、勧めたり、使えるかどうかを訊いたりした。

彼の発明品を使用し、評価していたのは昔から弥生を含む如月だったからだ。そのおかげで使用者も使用された者も迷惑を被ったこともある。

「そうやって武器を談じているうちはよかった。」

しかし、人間の本性というのは隠しきれないようで、匠は主に変装用に置いてある服の中から一着を取り出して、

「これを着てくれないかい？」

と爽やかに弥生に勧めた。

その手に握られているのは魔女っ子セット。

返事は、弥生の掌に出現した光の玉だった。

それを弥生は無言で投げつける。

「そんなものくらうか！ 見ろ！ 俺の発明千五十一号、匠の盾！」

匠は後ろに立てかけられていた盾を掴んで防御した。弥生の攻撃も見事に弾く。

これにはさすがに弥生も目を見開く。

「相変わらず最悪の名だが……おもしろい」

弥生の闘志に火をつけてしまったらしい。

弥生は先程より大きな玉を作ると、今度はそれを己の霸動で飛ばす。速さはざっと十倍だ。

「効かん、効かん！」

匠は高笑いをして悦に入る。だがそれが弥生を本気にさせてしまった。

「弥生ちゃん。メイド服は？」

匠は調子に乗って、メイド服をひらひらと弥生の前で泳がせる。

弥生は月契を抜き、薄く笑った。

「殺す」

弥生が剣を抜くがいなや、匠の盾は真つ二つにされ、あっけなくその切っ先を目の前に突き立てられたのだった……。

「ほら、俺はちょっと今の服じゃ地味かなってさ。女の子は着飾ってなんぼだしね？」

冷や汗を流しながら匠は必死に弁明する。

久し振りの再会にはめを外し、弥生の隊内三指に入る実力と、冗談が全く通じないことを少し忘れていた。

弥生はしばらくその態勢のまま動かなかったが、やがて剣を納めた。

「帰る」

そう宣言するなり踵を返し、弥生は部屋から出ていった。  
匠は助かったと胸を撫で下ろした。

「彼の服は出来次第届けるね」

「ああ。武器を早く頼む」

弥生は振り返らずにそれだけを言い、その部屋を後にした。  
武器が飾られている部屋に戻り、弥生は勇輝の姿を探した。だが、  
どこにもいない。

研究所の外にも目をやるが、そこにも姿はない。

弥生は部屋で突っ立っていた少年に目を止め、声をかけた。

「おい人間。小さい男の子を知らないか？」

呆然としていた少年は、ややあってゆっくり弥生の方を向いた。  
その顔は青ざめている。

「あ、あの……き、消えました」

「は？」

「急に、風が吹いたな、と、思ったら、いなくて……風が、赤くて  
……いや、赤い風？」

「赤い、風」

弥生は動揺している少年には目もくれず、短く舌打ちをすると、



走り出した。

その脳裏にかつて自分を負かした女の顔がよぎる。

(あの女……)

銀の髪がなびき、廊下を歩く隊員は皆一様に振り向く。綺麗な人と口々にもらし、牙軍の方かしらと記憶をさぐる。

その中の誰もが、道を、脅しともいえる方法で訊かれる時がくるとは思ってもいなかっただろう。

弥生が全力で朧月夜の場所を探している頃、勇輝は激しく動揺していた。

自分の胸に、他人の腕が入っているのである。今までどれほど非現実的なものを見ようが、それはあくまで他人の身に起こっていることだった。だがこうして自分の身に起こると、感嘆できるはずがなかった。

(俺、このまま心臓掴みとられて死ぬのかな)

昔読んだ漫画のワンシーンが目に見えぬ。

不思議と痛みは感じない。だからといって、恐怖感が減るわけでもない。

綾覇の手がゆっくり勇輝から抜けていく。

(ああ……心臓とご対面かな)

しかし、綾覇の手に握られていたのは心臓ではなかった。硬質な、剣の柄。

(え、剣?)

傍から見れば、今しがた剣で胸を一突きされたようにも見えるが、実際はその逆、剣が体から出てきているのだ。

柄が全て出たところで、綾覇は一気に抜いた。

勇輝は奇術のような現象を見届け、床にへたりこんだ。膝が言うことをきかない。

(俺、体の中に剣を持っていたのか?)

綾覇は勇輝から出た剣を、検分するように隅々まで見た。

「へ」。なかなかいいやつじゃない」

勇輝はその様子を見上げ、気づく。

「それ……俺の剣」

「勇輝から出てきた剣は、間違いなく弥生がくれたものだった。

「ふふつ、驚いた? 私の能力つて、身体強化の方が有名だけど、実はこういう小技もできるのよ?」

綾覇の能力はその体の身体能力を極限にまで高めるもので、そのスピードと剣の才によって、隊内一の剣の使い手と呼ばれている。

この能力のことを知る者は隊内においても少ない。

「相手の体に触れば、その人に関係するものを呼び出せるの。まあ、実践では全く役に立たないんだけどね」

「……心臓に、悪いです」

綾覇はいたずらっぽく笑うと、立てない勇輝に合わせてしゃがんだ。

「ふ〜ん。弥生はけっこうあんなのこと考えてるみたいね」

「え？」

綾覇は鞘から刀身を抜いて、それに手を添えた。

「うわっ、危ないですって！」

「大丈夫。刃は潰してある」

綾覇の言うとおり、全く切れていないらしい。

「これは守り刀ね。元が何かはわからないけど、けっこういい剣を潰してる。強度も素晴らしいわ」

綾覇が刀身を爪ではじくと、甲高い音が空気を震わした。透明な澄んだ音だ。

「けっこういい剣は、相手の剣戟から身を守るために使うの。いわば盾の代わりね。攻撃する時は殴る。まあ、これくらいなら頭蓋骨陥没

程度かしら」

綾覇はためしにそれを振ってみた。ヒュン、と空気を切り裂く音がする。

「うん。邪念もないし、いい剣よ」

「邪念？」

気になる単語に勇輝が訊き返した。

「そう。強い剣にはね、邪念が宿るの。刀鍛冶の念だったり、殺された者の恨みだったりね。そういう剣は人を狂わせ、殺人鬼にしてしまうの。……ぞくぞくするくらい素晴らしい剣よ」

真剣に聞いていた勇輝は、最後の一言に剣マニアの真髄を知った。そしてある結論に達する。

この世界から剣が消えれば、女の子は可愛らしいままでいるのではないかと。

(いや、弥生が可愛くないとか、綾覇さんが女の子らしくないとか、そういうわけじゃないんだよ?)

勇輝は誰に向けてでもなく、心の中で言いわけを始める。

(でもさ、剣がなかったら世界は平和で、女の子はふわふわと生きていけると思うんだ。弥生がトゲトゲしてるとか、そういうわけじゃないよ? ないけど……)

ぐるぐると考える勇輝だが、妙な音が聞こえた気がして顔をあげ

る。

綾覇はすつと笑みを消してその音に集中する。

聞こえているのは男たちの声だ。しかしさっきまでの規則正しい掛け声ではない。不規則に上がっては消えていく、その内容もぎやああ、やら、うがああ、と穏やかではない。

(うわ〜これ、もしかして)

勇輝はここ最近の命中率百パーセントの嫌な予感を感じる。

勇輝が攫われても助けを願わなかったのは、こうなると予想していたからかもしれない。

「あ、弥生が来たね」

頭を抱えそうな勇輝に対し、声が弾む綾覇。

その目はドアに注がれている。

そしてほどなく、そのドアは荒々しく開かれた。

現れた弥生はあくまで無表情。だが、勇輝には背後に鎌を持った死神が見えた。

「勇輝から離れる。さもなくば、殺す」

静かに告げる弥生から見れば、勇輝が綾覇に脅されていると見え

なくもない。

飛ばされる殺気から誤解を察した勇輝は慌てて弁解する。

「違うって、これは俺の剣を綾霸さんが見てくれて、それでいい話  
も」

「勇輝。こちらに來い」

弥生の峻烈な言葉に、勇輝は背筋をピンと伸ばして、綾霸から剣を受け取り弥生の傍へと駆け寄る。

「その、弥生。俺大丈夫だから、もう少し表情を柔らかく……」

「ふふん、相変わらず無愛想ね、弥生。そんなんじゃそのぼつやに  
逃げられるよ?」

綾霸はすつと立ち上がって、口角を上げる。

その目は獣のようならんと光っていた。

「だまれ、貴様に……あ?」

苛立ちながらも首を傾げる弥生に、綾霸は得意そうに胸を張った。

「どつ? 気付いた?」

「この間会ったときは平原だったと記憶しているが……」

「これが十年の重みよ」

綾霸はびしつと弥生を指さし、ご満悦のようだ。

「あんたたちが亀みたいな歳の取り方してる間に、私はこんなに成長したのよ？ どう？ 羨ましいでしょ？」

「誰が、三十路を越えれば女は終わりだ、そうだな」

「なっ！ 私はまだ二十九よ！ それならあんたたちは私の何倍生きていると思ってるのよ！ ふんっ、どうせこの胸に嫉妬してるんですよ？」

弥生は盛大に鼻で笑った。

「そんなものはいらない」

「あら？ でもそのぼうやは好きみたいよ？ ねっ勇輝くん。私の胸に顔を埋めてきたもんね」

勇輝は先ほどの感触を思い出して、真っ赤になる。弥生の無言の視線が痛い。

「違う！ 弥生、これは不可抗力で……」

「勇輝くんだって大きい方がいいよねっ」

勇輝は綾霸の背後に虎が見えた気がした。  
かたや弥生は無言で圧力をかけている。

「あ、いえ、俺は、大きくても、小さくても、あゝゝ！ 男の俺にそんなこと訊かないください！」

耐えられなくなつて勇輝は叫んだ。心臓が口から飛び出しそうだ。

「勇輝はそんなことどうでもよさそうだが？」

「うふふ、照れてるのよ」

「ふん、そんなもの、戦いにおいては邪魔なだけだ」

「あら？　じゃあ試す？」

「望むところだ」

弥生が月契を鞘から抜いた。綾覇は手近にあった剣をとり、刃をむける。

（あゝあ）

勇輝は壁際へと後退し、ひとまず自分の安全を確保する。ひとまず見物を決め込むらしい。

今回自称平和主義の勇輝が止めようとしなかったのは、二人のノリが不良のものに似ていたからだった。

つまり、

よつ、しばらくぶり。

おう、元気だったか？

からの殴りあいだ。彼らなりの手合わせである。

「行くわよ」

「来い」



言うなり、綾覇の姿が消えた。部屋の中に風が巻き起こり、赤い残像を残していく。

弥生は途中で動かずに、気配を探っていた。

「すげえ」

どつりで誰も視線を向けないはずだ、と勇輝は一人納得する。

これだけ早ければただ風が吹いたようにしか見えない。

勇輝は自慢の動体視力で二人の対戦を見る。

漫画に影響され、俺ボクサーになる、とジムの門を叩いたのが二年前。入るなり、動体視力のみ神童と言われ、選手たちのパンチを避けまくった。

しかし、お前体小さいからな……、の一言で勇輝は夢をあきらめた。夢見た三か月で勇輝が得たものは、動体視力に対する自信と、わずかな筋力という悲しい思い出がある。

突如空間から綾覇が現れ、弥生に斬りかかる。弥生は即座に反応し、剣で受けながす。

「へ〜、やるじゃない」

「いくら早くても、斬りかかる瞬間がわかれば十分」

再び綾覇は消え、今度は弥生も動いた。駆けながら、剣を打ちあい、飛びずさる。

弥生も早いがまだ目で追える範囲だ。

金属がぶつかる音が響き、二人は近づき、また離れる。弥生が斬りかかったところに綾覇の剣があり、綾覇が斬り上げたところに弥生の剣がある。見事にかみ合った剣技だ。

(あ、壺が割れた)

部屋の隅に置いてあった高級感あふれる壺は見るも無残な姿になり、

(あ、窓……)

全ての窓が剣圧で吹き飛んだ。

それほどの被害の中、壁にかかっている剣だけは無傷である。

(さすが剣マニア)

「ふうん、この十年で強くなったってわけじゃないみたいね」

「お前は弱くなったんじゃないか？ 歳には勝てないな」

「うるさい！」

再び剣戟が続き、部屋はさらに無残な姿になる。

いつ止めようかと思案していた勇輝は、人の気配に気づいて後ろを振り向いた。

(……ん?)

いつのまにか戸口には人だかりができていた。よく見れば窓にも人が群がっている。

これだけ派手にやりあえば人を呼び寄せるとも当たり前だが……。

「弥生」

ひとまず呼びかけてみる。もちろん聞こえるはずがない。

勇輝は辺りを見回し、おもむろに近くの壁にかかっていた剣を掴むと、自分の剣と打ち合わせた。

「おい。そろそろ帰ろーよ」

要領はフライパンとお玉だ。耳障りな金属音に、二人は足を止めた。そしてギャラリーに気付く。

「なんだこいつらは」

「あらみんな……気づいちゃった？」

ギャラリーは口々に綾霸さんが綾霸さんと騒ぎ立てる。

「ちっ、この人ばかりではやりにくいな」

「そうね。日を改めましょ」

二人は休戦に合意し、剣を鞘に収めた。

「帰るか、勇輝」

「りょーかい」

弥生はくるりと綾霸に背を向け歩き出す。

その背中に綾霸の思い出したような声が届いた。

「そうそう。秀斗は元気？」

弥生が同胞の名に振り向いた。

「秀？ お前と何の関係がある」

「あら……やきもち？ ちょっとタイプなだけよ」

「趣味が悪いな」

そして前を向きなおり、ドアを塞ぐ人だかりに目を止めると、

「どけ」

と短く命令する。

「はい！」

威勢のいい返事とともに、人が通れる道が出来た。さっきの闘いから逆らわない方がよいと判断したらしい。

弥生はその中を悠然と歩く。

「ぼつや。如月が嫌になったらいつでもおいで？」

「いえ、俺は如月にいるのが楽しいんで。ではまた」

勇輝も和やかに返して弥生の後に続いた。

「もう。如月ったら、ガードが堅いんだから」

綾覇の呟きが、二人に届くことはなかった……。

長い廊下を歩いている。如月に帰るはずだが、一向に見知った風景にならない。

これほど広いのだったら、廊下に案内をかけておくべきだと、勇輝は一人龍牙隊改造計画を練っていた。

ちらりと隣を歩く弥生を見て、気になっていたことを聞いてみる。

「あのさあ弥生。弥生って今何歳？」

「歳？ 八十六だが？」

「あ、そうなんだ」

当然のように答えられたその数字を、勇輝は見た目で割ってみる。

（俺が今十七だから……ざっと五倍？）

弥生はそれ以上訊いても答えてくれそうにないので、ひとまず勇輝はそこで打ち切る。

(なんとなく、時代を感じた事はあったけど、ほんとに長生きしてたんだ)

人間で言えばとっくにご老人だ。

勇輝は少しおかしくなって小さく笑う。

二人は果てしない廊下を如月に向って歩いていった。

## 第2章の21 迅速の舞、綾霸（後書き）

一番長いんじゃないの？　　ってくらい長くなった。

神名の裏話的なもの

リストラから正社員へ！

匠のことです。

彼は最初の設定では如月の隊員でした。武器専門の職人なのは変わってませんが……。

大規模なリストラで彼もさよならをしたのですが、新たに小隊をつくっていると、武器屋がないことに気づく。

うーん。ここは匠かな。

と、所長に格上げされての復活です。おめでとうと言っておきましよう。

446

しかし、少々暴走しすぎたか？

匠は普通の職人だったはずだし、綾霸は高飛車な女って設定が、両者ともにちょっと変人になってますね。

まあ、それぐらいじゃないとあそこじゃやっていけないんですよが……。

二人ともいい歳してるから、次でるときはもうちっと自重してもらいますか。

次あるか……わからないけど。

では、また次にお会いいたしましょう。

## 第2章の22 俺、家出する！

「ただいま」

行く時と比べればやや疲れ気味の勇輝の声が如月のホールの響く。

「おかえり。どうだった？」

ホールには癒慰をはじめ、全員が待機していた。

「……大変だった」

その一言に尽きるだろう。

そして彼らの視線は勇輝の隣にいる弥生へと注がれる。

「……ちゃんと、会って話をした。服も用意した」

やや心外そうに弥生は答えた。弥生の性格を知っている彼らは気がではなかったのだ。

誰かに喧嘩を売ってはいないだろうか。

くしくもそれは当たったのだが……。

「無事でよかったです」

そう和やかに笑う零華を見て、勇輝は攫われたことは言わないでおこうと心に決めた。

「ああ。それと、あけみ 曉美さんが帰ってくる」



「暁美さんが？」

弥生がその名を口にすると、ホールは喜びの声でいっぱいになった。

「十年ぶりか……」

めずらしく錬魔も表情を和らげている。

「……あけみさん？」

一人事情を飲み込めない勇輝が、頭に疑問符を浮かべる。

「暁美さんつてのは、龍牙隊の幹部で、俺らの後見人をしてくれた人。ここ最近はずっと海外で活動してたんだ」

すぐに秀斗がフォローを入れる。

勇輝はへえと頷いた。そしてその名前にひっかかりを覚える。

（あけみつてどっかで聞いたよな……こないだやったゲームのヒロインだっけ？）

少し考えてみるが、たいしたことではないだろうと考えを打ち切る。一度思ってみれば、ゲームのヒロインだったような気もする。

「それで、暁美さんはいつ帰ってくるの？」

「一週間後だ」

「どこに迎えに行けばいいのかしら」

「……クーコー？」

弥生は龍牙から聞いた言葉をそのまま口にした。弥生の知識に空港はない。弥生の一般常識は深窓の姫君よりも少ないのだ。

彼らはすぐにそれを空港と変換して、理解する。

「じゃあ、みんなで迎えにいこうぜ」

「俺も？」

「いいんじゃないの？ 早いとこ会っどけば」

感動の再会に自分がいていいのか、と勇輝は少々不安になるが、決定は決定である。

そして、この日はこれで解散となった。

その翌日、勇輝は憤然と如月のソファーに座っていた。その隣にはリュックがでんと置いてある。

そしてこう宣言した。

「俺、家出する！」

時は少し遡る。

勇輝は朝から派手な口喧嘩を繰り広げていた。相手は父親である。喧嘩の理由は、勇輝が寝坊したせいで朝食を作れなかったことだった。母親がいないので、家事の全てを勇輝がやっているのだ。

いつものなら何か食べられる物を昨晩の内に作っておくのだが、昨日は色々あり、疲れた勇輝は全ての家事を明日へ回して眠りについたのだった。

そして寝過した。

目覚ましは父親の、飯を作れ、の催促。

勇輝は跳ね起き支度をするが、その間にも父親の催促は止まらない。

味噌汁はわかめを入れてほしい、あと豆腐も、目玉焼きがいい、のりは韓国のも、それと……。

勇輝がわたわたと朝食を作っている間も、父親は後に立っていた。まだか、あと何分？ 遅れそうだけど、云々……。

勇輝が注文通りの朝食を作り、それを食べていると、父親に恨みのこもった目で見られた。

「味噌汁熱い。火傷した」

プチッと、勇輝の血管が切れた。

勇輝は食卓を蹴りあげてぶち壊したい衝動に駆られるが、ここに  
あるのは自分が作ったご飯。そんなことできるはずがない。

そうなれば、口が出てくるのは当然である。

「文句言うならお前が作れバカ親父！」

勇輝はぐいっと味噌汁を飲みほし、味噌汁茶碗を乱暴に食卓に置いた。

確かに少々熱かった。

「誰に向かってそんな口きいてんだ？」

父親は目玉焼きに醤油をひとかけすると、醤油さしを勇輝に投げつけた。

勇輝はそれを受け止め、自分も目玉焼きにかけてから食卓に叩き置く。

「お前だよ。この自活能力ゼロ野郎が！」

父親は怒りにまかせて、海苔の袋を引き裂く。

「男らしくていいだろーが！ あゝあ。母さんだったら、ちゃんとした朝食を作ってくれるんだがな！」

勇輝は目玉焼きをご飯の上へのせ、黄身を憎々しげに箸で潰して嘲笑った。

「母さんに逃げられといて何言ってるんだよ！ 親父がそんなんだから母さんはどっかいったんだろー！」

「違うわ！ 母さんは泣く泣く俺の所から旅立ったんだ！ 父さんは笑って送りだしたぞ！」

父親は海苔巻きご飯を口にいれつつ反論する。海苔は全て消費されていた。

「毎年離婚記念日だとか言って、泣いてんのはどこのどいつだよ！」

勇輝はご飯をかきこむ。味が足りないのか醤油をもう一かけ。

「お前には分からないのだ、父さんの愛が！ 母さんは今にもどこかで死んでるかもしれないんだぞ！」

父親は味噌汁を冷ましながら、喉奥に流し込む。

「別れた女に未練持つなんて全く男らしくないんだよ！ こんなことなら俺は母さんと一緒に出て行きたかったよ！」

勇輝は米一粒までかきこむと、茶碗を味噌汁茶碗の上に重ねた。

そして両者湯呑のお茶を一气飲みし、同時にそれを置くと言い放った。

「ごちそうさま！ 出ていきたいなら出ていきやがれ！」

「ごちそうさま！ ああ、出て行ってやるよ！ せいぜい俺のいな間に野たれ死なないように気をつけやがれ！」

そして、今に至る。

勇輝は数日分の着替えをリュックに詰め、如月に駆け込んだのだ。今日の学校はさぼりだ。

鼻息荒い勇輝の前で心配そうな顔をしているのが制服を着た癒慰と零華。面白そうに見守っているのが私服の秀斗である。

「あのバカ親父……せいぜい、俺のありがたみを思い知ればいいんだ。毎日毎日、俺が家事をやってるからって調子に乗りやがって……」

いつになく黒い勇輝になかなか声をかけられないでいた。

「……てことで、しばらくここで世話になるから、よろしく」

勇輝は心の毒を吐き終わると、晴れやかな顔でそう言った。

「おう。好きなだけいりゃあいいぜ」

楽しくなりそうだとケラケラ笑って迎える秀斗に対し、女の子二人はまだ心配そうだ。

「でも、お母さんには言っておかなくていいの？」

「そうです。心配なさるのでは？」

「いいんだよ。俺母親いないから」

勇輝は笑いながら手を振って打ち消すと、三人がはっとしたような顔をした。

「それは御不幸で……？」

「違う違う。母親は親父に愛想尽かして出ていったんだ」

どうしようもないよなあ親父、と再び黒いものが渦巻く。

「そっか、お前母親いねえのか」

「秀斗たちは？　すでに一人立ち？」

「私たちは両親ともにもう他界しています」

「あ……ごめん」

勇輝は少し申し訳ない気持ちになって、目を伏せた。

「親は……俺たちが殺したようなもんだ」

「え？」

深刻な秀斗の声に勇輝が驚いて顔を上げるが、秀斗はにたにたと笑っている。

「なぐんてな。ま、それも昔のことだしな」

「龍牙隊は孤児の保護もやってるから、こつやってお世話になってるの」

「そうなんだ、昔……あつ！」

急に大声を上げた勇輝に、三人はびくつと肩を震わせた。

「秀斗たちって何歳？」

勇輝はぜひ訊かなくては、と思っていたことを思い出した。

「ん？ 俺は八十六」

「あはは、またまた〜。癒慰は？」

と勇輝が癒慰へと顔を向けると、彼女はひきつった笑みをみせていた。

「うふふふ。勇輝君、女の子に歳を聞くつもり？」

その表情で、勇輝はその数字が事実であることを知った。

「信じられないかもしれませんが、見た目よりは五倍ほど長く生きてます」

「……そっかあ、やっぱり」

頷きながら、この屋敷に電化製品がないのも時代のせいかも、と余計なところまで納得していた。

「私たちの歳のことは置いといて、勇輝君の部屋を探しにいこうよ」

「部屋ならいっぱいあるじゃねえか」

「その中からいい部屋を探すのよ」

屋敷は二階建て、部屋の数は相当ある。部屋の趣も様々なのだ。

「あの、俺ここから近いところがいいな。迷いそう」

それぞれに勇輝に合いそうな部屋を考えていた彼らは、それもそ



うだと、ホールに一番近い部屋に案内したのだった。

「うわ〜広〜い」

部屋に案内された勇輝はきよろきよろとせわしなく首を動かし、感嘆の声を上げていた。

要望どおり、ホールから一番近い部屋。ドアを開けて首を出せば、ホールの扉が見える距離だ。

「俺の部屋の二倍はある」

家具はベッドと机のみというシンプルな部屋だが、奥にはトイレもついており、ホテルの一室のようだ。

勇輝は靴を脱いでベッドに飛び乗り、頬を埋めた。

「やわらか〜い」

今すぐにも寝てしまいそうな寝心地の良さだ。

「嬉しそうね」

「気にいったのなら、なによりです」

「餓鬼みたいだな」

ベッドの上を転がる勇輝を見ながら、孫を見る老人のような心境になっていた。

そしてリュックから出ている剣に気がつく。さっき勇輝がリュックを投げ置いた時に飛び出たのだろう。

「そっぴゃあさ、お前弥生との対決どーすんの？」

剣を見て、そのことを思い出した秀斗が勇輝に声をかけた。勇輝はぴたりと動きを止めて、飛び起きた。

「……やばい、忘れてた」

弥生に勝って、自分の存在を認めさせる。そう言ったのは一昨日のことだ。

「剣でやんのか？」

「まさか……俺そこまで馬鹿じゃない」

あれほどの力を見せられれば、挑戦しようと思わない。死にたいですと言っているようなものだ。

「じゃあどーすんだよ」

「うーん。弥生ってなんか弱点とかない？」

やはり強い敵に立ち向かうには弱点を責めるべきだと、後ろめたい気持ちをこまかしながら訊いた。

「弱点？ 性格かしら」

「さらりと零華は答えるが、それは弱点ではなく欠点だ。

「言語能力かな。話が噛み合わないことも多いし」

「弱点があっても弥生は可愛い」

一人色ぼけが入った。

「……どこで勝てと？」

勇輝は彼らのアドバイスを諦めて、ベッドの上から下りた。おもいつくかぎり勝負していくしかなさそうだ。

(スポーツで俺が得意なのってなんだっけ?)

色々な部活を覗いたことはあるが、どれも二か月ほどで飽きてしまい、どれも基礎どまりだ。

「では私たちは学校に行きますね」

「二人はどうせさぼりなんでしょ？」

と制服の二人はあきれ顔だ。

「あ、ごめん。時間とらせちゃって」

「いいのよ。じゃ、また後で」

ドアが閉められ、部屋は静かになった。秀斗はまだ何か考えてい

るようで、腕を組んでいる。

「勇輝……寝込み襲いにいくか？」

「誰が行くか！」

秀斗の言葉に、まともに考えなければと、危機意識を持った勇輝だった……。

そして時は過ぎ、夕方。

勇輝は台所にいた。だが台所というのは、勇輝の家では、という意味で、そこは厨房だった。

部屋の大きさが違えば台所の大きさも違うのか、と驚きをとおりこしてもはや感心してしまう。

勇輝は鼻歌交じりに鍋をかき回す癒慰の隣で野菜を切っていた。

暇だったので目印をつけつつ屋敷を探検していたら、癒慰が調理している現場に行き合わせたのだ。料理は勇輝の得意分野。暇つぶしをかねて、手伝いを買って出たのである。

「勇輝君って料理上手なのね」

勇輝の慣れた手つきを見て、癒慰が感心する。

「癒慰がいつもご飯作ってんの？」

「うん。零華ちゃんと交代制。他の人は色々と危ないから」

弥生は料理ができないのか、と勇輝は頭の中のメモに書きつける。弱点を一つ見つけた。

「うん、おいしい」

癒慰は味見をして、それを皿に盛りつける。お皿の数は四つ。勇輝は首をかしげた。

「二つ足りなくない？」

「いいのよ。錬魔君は研究してるみたいで声かけても返事がなかったし、弥生ちゃんは食べないから」

「なんで？ こんなにつまそうなのに」

「うん。なんていうか、小食？ 偏食？ 絶食？ みたいな感じで、ほとんど食べなくても生きてられるし、食べても果物だけなのよな」

勇輝は再び頭のメモに弥生は好き嫌いが多いと書き込む。

「アレルギーとかあんのかな」

「ないと思うわ。昔あまりにも食べないんで、心配した錬魔君が無理やり食べさせてたことあるもの」

だが弥生は味が気に入らなかったのか、食後の運動のように荒れまくった。それが数回続き、弥生の健康被害よりも屋敷の被害の方が大きいと、弥生の食事問題は放置されたのだ。

「ふうん。じゃあ俺、秀斗を呼んでくる」

「じゃあ私はこれを食堂に運んどくね」

勇輝は厨房から出て秀斗の部屋に向かう。秀斗の部屋の位置はすでに覚えていた。

そして秀斗を誘い、長い机のある食堂で夕食を食べたのだった。薄暗くなりつつある夕暮れ時、夜がゆるゆると如月に迫っていた。

勇輝はお風呂に入り、ホールでほっと一休みをしていた。風呂と言っても大浴場だったわけが……。

そして風呂上がりにと、秀斗とともに牛乳を飲む。背が伸びるようにと、気づいた時には飲むようにしているのだ。

時計があるのはこのホールだけで、その大きな時計によれば、十時を少し回ったところだ。

勇輝がそろそろ寝るかと思った時、一つのドアが開いた。そして入って来た人物に目を見開く。

「え、誰？」

入って来た長身の男は、腰まである長髪で、まだ濡れているのか

ルビーのように赤い輝きを放っている。そして彼が来ているのは和服。それを着流し風に着こなしていた。それが不思議とよく似合っている。

勇輝の呆けた顔を見たその男は、眉を吊り上げた。

「なぜいる？」

「え、鍊魔？」

不愉快そうな低い声は間違いもなく鍊魔ものだが、容姿が昼間と全く違う。昼間は普通の髪の毛の長さだ。

「へ？ 髪伸びた？ まさかこれが夜の姿とか？」

鍊魔の変化とも言える変わりように、動揺する勇輝を見て、秀斗は吹きだした。

「ちげよ。もともと鍊魔は髪がなげえんだぜ？ お前鍊魔の後姿みたことねえのか？ 昼間は後ろで束ねて垂らしてんだ」

鍊魔の髪は一房だけ長く残しており、あとは短く切りそろえられている。ひとたびそれを解けば、混じりあって見事な長髪になるのである。

「すげえかつこいい。でもなんで和服？」

「なんか鍊魔の故郷の服装に似てるんだとよ」

その問には秀斗が答えた。

「で、なぜお前がここにいるのかと聞いているのだが？」

「へ？ 家出したから」

鍊魔は大変嫌そうな顔を見ると、寝ると短く吐き捨てて開けたドアから出ていった。

「おやすみ〜」

自分の存在に慣れてもらおう作戦実施中の勇輝はこれぐらいではめげない。

「俺も寝よ」

勇輝はあくびをしながら、自室へと戻っていった。

「おう。おやすみ」

「おやすみ〜」

そして勇輝はふかふかのベッドに入るやいなや、夢の中へと旅立った……。



## 第2章の22 俺、家出する！（後書き）

実は髪が長かった錬魔。

そう、これが書きたかったんだ！ 作者の趣味が100パーセントつまった彼。

主人公周辺に長髪が一人はいて欲しい、でも学生が長髪とか、現代もので長髪とか……いやや。とか思い、普段は普通の長さってことで落ち着きました。

実は彼が長髪だという伏線があったのですが、それはどこでしょう？

答えは第2章の13 最後の文です。

ではまた次回。

## 第2章の23 メイドイン匠（前書き）

ショートショート形式でお送りいたします。

## 第2章の23 メイドイン匠

朝の学校。

秀斗は窓際の席を陣取って、ペンをくるくると回していた。窓際  
といってもそれは窓ではなくただの穴なのだが……。  
そこにあくびを噛み殺しながら勇輝が近づく。

「おはよ〜。秀斗が文房具持ってんの初めて見た」

「ど〜だ？ キマってんだろ？」

そう言っって見せるペン回しは無駄にうまい。

「似あわないけどね」

「おい……ま、いいけどな。これペンじゃねえし」

秀斗はニタツと笑ってペンを勇輝の前で振った。それはどう見ても二色ボールペンにしか見えない。

「どーいう意味？」

「この通り書けるけど」

とさらさらと机にインクで文字を刻む。見にくいが、赤い文字が

見てとれる。

「……勇輝のバーか。あ？ 秀斗のバーか」

「ムキになんたって」

可愛い奴だな、と言わないのは、さすがに秀斗も学習したらしい。あのアツパーはなかなか痛かった。

「ここを回して、この赤印どうしを合わせて」

秀斗はグリップの部分を回して、赤い印を合わせた。赤印がハートなのはつつこまないほうがいいのだろう。

「そしてぐつと押しこむと」

「押し込むと？」

ノックのところがピカピカと点滅する。

勇輝はどこに電球が入っているのだろうと疑問に思ったが、そんなものは次の言葉で吹き飛んだ。

「爆発する」

「は？」

勇輝はまたまたと秀斗の肩を叩く。

「見てろよ？」

と、秀斗はそれを窓から放り投げた。窓の下はグラウンドだ。

数秒後、光とともに爆発音が響く。

勇輝はぼかーんとその光景を見ていた。

「……クレーター」

グラウンドに開いた丸い穴。砂煙がもうもうと舞っている。音に驚いたクラスの不良は花火か？ と空を見ていた。

「匠が学校に行くならこれぐらい持って行けっさ。試作品だってよ」

「いや……学校に爆弾はいらないと思う」

カモフラージュをするなら、本物そっくりに。  
細部へのこだわりと確かな威力。  
それが匠クオリティ。

放課後の如月。

癒慰が自室で小躍りしながら服をとつかえひつかえしていた。  
服と言っても、クローゼットに吊られているのは変装服の類なの  
だが……。

「迷うわね。この可憐なお嬢様もいいけど、深窓の姫君も捨てが  
たいわね。ここはむしろメイド？　ねえどう思う？」

手当たりしだいに服を出しては見比べていく、それはドレスであ  
ったりメイド服であったり、巫女装属であったり……。  
振り返った先にあるのは植木鉢。そこに植わっている植物の茎が  
右に左にと揺れていた。

癒慰の属性は土であり、植物を育てるのが趣味なのだ。たとえそ  
れが動こうとも、植物は植物である。

「メイド？　うん、やっぱりそうよね。一つ目は決まりっと、次の  
お色直しは……」

癒慰はメイド服をベッドに置いて、クローゼットの奥へと進む。  
その広さはもはや部屋と言っても良かった。

「バニーガール？　猫耳？　はあ、何でも似合っちゃう。あ、セー  
ラー服もある」

結局、猫娘セットと魔女っ子セットを持ってクローゼットを出る。

それらをベッドの上に広げて置く。

「あとはネグリジェね」

癒慰は別のクローゼットを開けた。そこにあるのは全てネグリジェ。きわどいシースルーからフリフリの可愛いのもまで種類は多様だ。

「この水玉もいいし、フリルもリボンもいいわね。で、も、やっぱりベビードールよね！」

寝苦しそうなほどフリルがついたネグリジェを引っ張りだし、ベッドの上に置いた。

ベッドの上には四つの衣装。一度にそれを見ると少々うなされそうだった。

「は、いいわあ。勇輝君って罪ねえ」

妄想の被害者が、現実の被害者となる日はそう遠くはない。

変装用具はおまかせあれ。どんな制服も細部まで再現し、全ての女の子と男の子を可愛く変身させます。

密かに人気、匠ブランド。可愛さで女の子の心を掴む。それも匠クオリティー。

夜の裏技術研究所。

匠は徹夜七日目を迎えていた。そこに忍び寄る影。

「た、く、み」

「うわっと、びっくりさせないでくださいよ美月さん……」

美月は匠の作業を興味深そうに覗いたが、すっとズボンのポケットに手を入れると写真を取り出した。

「この子をモデルにして人形を作ってくれ。もちろん細部までリアルにね」

「もうそれ、フィギアですが……」

「かまわん。そっくりにつくってくれ」

軽く溜息をついて、その写真を見る。

写真に写る美少女はやんわりと笑っている。

「俺が言つのもなんですが。……変態ですよっ」

「愛だよ、愛」



「しつこいと嫌われますよ？」

「いいから、作ってくれ」

写真を押し付けると美月はさっさと研究所から出ていった。その写真を見て、匠は頭をかいた。

美月の依頼はこの写真の女の子にバレるところが水没する危険がある。

「はあ……こういう依頼が来るから、俺が変態だって疑われるんだ」

細密な再現は人型でも可能。お客の望みは最大限に実現する。それも匠クオリティー！。

「まあ、優先順位はこっちな」

匠は作業机に座り直し、目の前の写真を見ながら紙に線を足していく。

壁に貼られている写真は勇輝のものだ。

顔のアップと全身の写真。

会った時に隠しカメラで撮っておいたものだ。

レンズは白衣のボタン。シャッターは左手に嵌めた指輪の小石だ。ピントがずれるのが難点だが、なかなかうまく撮れた。

さすがに弥生にはバレ、彼女を取ることは出来なかった。ついでと言わんばかりにあのどさくさで両方真っ二つにされたのだが……。

「うん。ふわっと裾を広げるのもいいけど、やっぱりスタイリッシュにいくか。泣かれても困るしね。……あ、いや、それはそれで」

匠の足もとには段ボール箱が二つ。大きいものと小さいもの。思いつくものがそこに放り込まれ、大きい方はもういっぱいになっている。

会ったばかりの少年を想いながら、ペンを滑らせる。

「よし、これで行こう。喜んでくれるような服を作らないとね」

匠はペンをくるりと回し、服のデザインを決めた。

明日からは服を作る作業だ。

オーダーメイドもメイドイン匠。

服はその人の特徴に合わせてそれぞれ違う。

相手のことを考えてつくる。

それが一番の匠クオリティー。

## 第2章の23 メイドイン匠（後書き）

少し短めです。

もともと独立の短編だったので、（ネタは秀斗オンリー）いろいろつなげて一つにしました。実際授業中にペンを見ながら爆弾にならんかと考えていた……。

そして話の種をまきまき。花開くのは、すぐ先か、まだ先か、咲かないか。

それは作者にもわかりません。

ひとまず。変態と間違われそうな匠ではなく。

職人としての匠を（え、まだ変態？）出してみたのですが……。  
いかがでした？

さて話は変わり、もうすぐバレンタインですね。

書けたら短編として神名メンバーでバレンタインをしたいと思います。

本編の軸とはずれるので番外編となりますが、たぶん……載せられるかな。

まだ白紙だけど。

では、次回、もしかしたらバレンタインデーに。

## 番外編 愛の小粒を召し上げれ

雪が降ったと思えば少し暖かくなり、また雪が降る。煮え切らない態度を見せる気候の中、煮え切らない男子に思い切っつてアタックする日。

近年ますます女子同士での交換が増え、男子は壁際で盗み見る程度となった少し悲しいイベント。

このイベントで告白して付き合う、そういう王道も数えるくらいとなった。そしてホワイトデーまでに別れる者も多い。

だが、今年の空気は違った。学校全体が妙にピリピリしている。女子たちは朝から互いに牽制しあっている。そんな教室に、その原因である彼らはいた。

「はーい、勇輝君。あげる、友チヨコだよー」

「どうぞ春<sup>かすが</sup>日君。生チヨコなの」

「私のはクッキーよ」

勇輝の机に置かれていく可愛いラッピング。

それを可愛い顔をした勇輝が満面の笑みで受け取っていた。

「ありがと！マジで嬉しい」

勇輝はその容姿で特に上級生によく好かれる。と言っても一方的に可愛がられるのだが……。

「相変わらず、すげえな」

隣の席では歩が毎年の光景にうんざり顔だ。  
そんな歩の机にもチョコが二三個置いてある。

本日教室は女子でいっぱいだ。もともとこのクラスに女子は三人しかいないはずなのだが……。

「バレンタインデーって女の子が男の子にチョコレートをあげる日なんだ」

そっか、と癒慰は初めて見るイベントに興味津津だ。

「正確には好きな男の子に、ですが、近年では薄れているようですね」

その隣で零華が的確に説明を加える。

「私も帰ったらつくろっと」

癒慰は情報収集と、女子の中へ混じっていった。

「しかし、二人はもらっているのに、あちらの二人には誰もくれませんね」

零華が指す二人とは秀斗と鍊魔だ。二人とも何かの気配を感じるのか今にも出ていきさそうだ。

「甘いよ。よく見なよ。女子はみんな二人にあげようとしている」

秀斗は窓際に、鍊魔は廊下側に座っているが、しっかり女子に囲

まれている。女子の手には黄色と赤色でラッピングされたチョコ。

「抜けがけしないように水面下で戦ってるんだ」

「怖いよな」

歩が茶々を入れた。

とその時、包囲網を作っていた女子の一人が秀斗へと近づいていた。回りの女子は睨みを利かしながら、その成り行きを見守る。彼女たちには受け取ってもらえるかが重要なのだ。

「あ、あの、秀斗君。これ、もらってください」

「……何だ？」

おどおどしながらも目がぎらついている女子に秀斗は警戒しながらそれを受け取る。普段は気軽に女子に声をかけるが、こうやって迫られると怖い。

「チョコだよ。今日バレンタインデーだから」

その女の子はチョコを渡すと、早足で教室から出ていった。そしてそれを皮切りに女子の波が秀斗に押し寄せる。

事態を理解した鍊魔は鍊魔包囲網が動く前にドアから出ていった。

「あ、鍊魔君待って」

「待ってくださいーい」

鍊魔を追って女子の半分が教室から出ていった。

一方餌食になった秀斗は、

「秀斗君、初めて会ったときから好きで」

「そこうるさい！ あの、前からかっこいいなあって」

「ジャマすんな。秀斗先輩……好きなんです！」

告白大会に巻き込まれていた。

女子たちの燃えるような告白に押されていた秀斗は突如立ち上がってこう宣言した。

「俺の恋人は弥生だ！」

それは隣の教室に届くぐらいの大声で、一気に囲んでいた女子たちが静かになった。そして全員の目がその女の子に注がれる。

教室の隅で様子を眺めていた弥生だ。名前を出された弥生は無表情で、足音もなく秀斗に近づく。

「な、俺お前のこと好きだから、問題だよな？」

「秀、そうだな、色々と問題だな」

口元を上げて造り出した笑みは冷笑で、秀斗が一番の問題に気がついた。自分の身が危ない。ここが学校という人間だらけの場所ではなかったら、速攻で剣を突き立てられていた。

「来い。その問題を解決してやろう」

弥生はそう言って秀斗を引き連れて出ていく。  
その後グラウンドで何かが光っていた気がしたが、勇輝たちは考  
えないことにした。

二人を見送った女子たちは、申し訳ない気持ちになりながらも、  
秀斗の机の上に積み上げていった。

「とんだ災難ですね」

「あはは、楽しいだろ、バレンタインデー」

しみじみと同情する零華に対し、勇輝が他人ごとと滅多に見られ  
ないラブイベントを楽しんでいた。

そして昼休み、教室にいた四人は逃走に失敗し両手で抱えきれな  
いほどのチョコを貰った鍊魔と、疲労困憊の秀斗と、体を動かして  
ご機嫌の弥生と合流し、生徒会室で昼食を食べていた。  
生徒会長に避難させてくれと、秀斗を使って落としたのだ。ここ  
でも秀斗はチョコを貰っていた。

「バレンタインデーは、女子が好きな男にチョコレートをあげて告  
白する日なんだ」

「くっそ、だから今日お前は叩き起こしてきたんだな？」

重箱から卵焼きを箸で取りながら、秀斗が勇輝を睨む。重箱五段  
のお弁当は癒慰と勇輝が朝作ったものだ。



「せっかくのバレンタインデーに二人が休むなんてもったいないじゃない。二人なら歩いてるだけでチヨコが降ってくるよ」

「……人間の女は怖い」

消え入りそうな声で鍊魔が呟いた。いつも三白眼で睨んでいる彼からは考えられないほど弱弱しい。

「大丈夫ですか？ トラウマになったのでは……」

人間嫌いに拍車がかからないかと、心配顔の零華だ。

「え、一番の楽しみは放課後なのに」

心外そうに勇輝が声を上げると、二人にジトツとした目で見られ、スーと視線を逸らした。

そして、勇輝が楽しみと言った放課後となった。

勇輝は紙袋を両手で抱えて廊下を歩いていた。気の利く女の子がチヨコと一緒にくれたのだ。

その後ろには如月の皆と歩。秀斗と鍊魔も紙袋を持っているが、その顔は疲れていた。

「勇輝くん、あげる」

「秀斗さん、どうぞ！」

「錬魔先輩。食べてください」

歩いている間も、紙袋はどんどん重くなっていく。

そして目的の場所に着くころには、紙袋はいっぱいになっていた。この時点で一番多いのは紙袋が二つに増えた秀斗だ。

「降りて〜」

「ここ見たらすぐ帰るから」

彼らがいるところは下駄箱だ。生徒が靴を履きかえる場所だが、この高校は上靴がなく校舎内は下靴なので運動用の靴の保管庫として使われている。屋上のテントから登校している彼らは転校後の数日しかここに来たことはない。

「ここにもチョコが入ってることがあるからさ。二人も見といた方がいいと思って」

「これ以上いらねえ」

「同じく」

渋い顔をする二人をまあまあと宥めて、勇輝は自分の下駄箱を開けた。

「三つかあ、うん、悪くない」

「それだけ貰ったのにまだ貰いたいのですか？」

「俺甘い好きだし、あまったら近所のガキにやるから」

勇輝はそのチヨコも紙袋に入れて満足げに袋を叩いた。

「お、俺も一個入ってる」

歩が嬉しそうに鞆にそれを放り込んだ。一人暮らしに歩にすれば、夕食がわりになるので結構重宝しているのだ。

秀斗と鍊魔もしぶしぶ靴箱を開けた。

「あれ？ どさどさっところない」

期待する眼でそれを見ていた勇輝が首をひねる。

「は？ ほら、やるよ」

「俺はいらん」

と二人から投げられたチヨコは一つずつ。

「わ〜い。ありがと。でも残念だな、二人の靴箱だったら漫画に出てくるチヨコの雪崩が見れると思ったのによ」

「それはあれじゃね？ 次入れる女子が前のやつを捨てるっていう……」

歩がよくあるじゃん、と解釈を加えた。

「ああ、他のところに入れといたりするあれか」

女の子はオンリーワンを目指して他のチョコを蹴落とすのである。

ドサドサ。

しかしその音は少し離れたところから聞こえた。

「ほらこの音……え？」

その音の発生源にいるのは弥生。その足元には色とりどりのラッピングが散在していた。

「勇輝……バレンタインデーとは、女が好きな男にチョコレートを作る日と聞いたが」

「うん、そう」

「……私は女だぞ？」

弥生の靴箱から出てきたそれは、全て弥生宛で、丁寧にメモまで挟んであった。それを秀斗が拾って読み上げる。

「え〜つと、弥生先輩へ、いつもきれいでかつこいい先輩は私のあこがれです。今度一緒にお茶してください」

へ〜と、秀斗は次のメモを読み上げた。

「弥生先輩、私のお姉さまになってください」

それを読んだとたん、秀斗が堪え切れなくなったのか噴き出して、

腹を抱えてうずくまった。

「他にも凜としたお姉さまや、華麗な弥生さんもありますよ」

零華も面白そうにチョコを拾っては読んでいる。勇輝も紙袋を広げて拾っていった。

そんな中弥生は呆然と立っていた。

確かに弥生はズボンをはき、立ち居振る舞いも女の子のそれとは違うが、それでも自分が女であることを疑ったことはなかった。

「それほど、私は男に見えるのか」

「いや、さっきの言葉聞いてた？ みんな弥生が女の子ってこと前提でアツタクしてるから」

「くくくっ、お姉さま……あははははっ！ モテモテじゃねえか！」

笑いの止まらない秀斗は、違うメモを見てはまた笑っていた。その頭頂部に弥生の踵落としが炸裂した。

「ぐはっ、いてエ……」

うずくまっていたのが仇となったようだ。

「勇輝、それは全部お前にやる。片づけろ」

弥生はもう見たくないと言わんばかりに早足で如月へと帰って行った。

「じゃあ私はチョコレート買ってから帰るね」

「では私は用意して待ってますね」

「俺は食べるの待ってるから」

「俺はバイトあるんで、またな」

下駄箱で癒慰と歩と別れ、勇輝たちは如月へと帰って行った。

そして癒慰が帰った後の厨房では、女の子二人の楽しいお菓子作りが始まっていた。

勇輝は二人の近くのテーブルで、その過程を見ながら戦利品を食べていた。

「次は小麦粉をふるうそうですよ」

「オツケー」

レシピは癒慰が女の子から聞いたチョコレートケーキだ。

「おいしーの期待」

勇輝はチョコチップクッキーをほおばりながら、わくわくと完成を待つ。

「それ何個目ですか？ よく入りますね」

「そんだけ食べて太らないって何様あ？」

二人は紙袋から出されたチョコレートがどんどん減っていく様子を見て、呆れ顔だ。

「甘党舐めんなよ。まだ全然へーキ」

勇輝の足もとは後四つ紙袋がある。鍊魔と秀斗も全て勇輝にあげたのだ。

「ふわふわと混ぜると書いてあります」

「楽しい」

そして型に生地を流していると、人の気配がした。三人が戸口に顔を向けると、それは弥生だった。弥生はスーと寄ってきて、物珍しそうな顔でそれを見る。

「やりたかったの？」

「いや……だが、チョコレートはまだ残っているか？」

「ええ、ありますよ」

癒慰が余分に買ってきたので、板チョコが二枚余っていた。

「これをどうやって使うんだ？」

それを受けつつた弥生は指先で突いて硬いことを知ると、勇輝が食べているガトーショコラと見比べて訊いた。

「溶かして使います。膨らましたければ小麦粉が要りますし、形を変えて固めるだけでも一味違ったものになりますよ?」

一度料理を始めれば厨房を破壊しかねないので、できれば後者が望ましい。

「そうか、わかった」

弥生は二度頷くと、厨房を後にした。

「弥生ちゃんはどこで作るつもりなの?」

如月の厨房はここだけだ。

「他に弥生ちゃんが行くところと言いますと……」

「弥生ちゃんの、二つ目の部屋ね」

如月に住む彼らはそれぞれ二三の部屋を持っている。普段の寝る場所と、物を保管する場所や研究をする場所だ。

研究を目的とした部屋を持っているのは錬魔と弥生。錬魔のものは薬や治療術のためだが、弥生のものは魔術を編み出すための部屋だ。魔術は元素の組み合わせで発動するので、新たに術を作ること可能。月花夢幻もそうやって作られた術だ。零華もたまに利用するが、使用頻度は弥生の方が多い。

「でも、お菓子作りに魔術が必要でしょうか」

「いやあ、いらなと思うけど」



胸に不安が広がる二人だが、勇輝は、

「何か作る気になってるんだからいいんじゃない？」

と樂觀していた。

（何事もやらないと成長しないしな）

二人は生地をオーブンに入れ、出来上がりまで座って待つことにした。勇輝がいる机を囲むように座って、勇輝の戦利品をつまみながら談笑が始まった。

「なんかすげえ甘い匂いがすんな」

焼きあがり近づき、甘い匂いが漂ってくると、それに釣られたのか秀斗が入って来た。

水を飲みに来た錬魔も捕まえ、焼きあがりの時を待つ。

チーンと可愛い音が鳴って、癒慰がケーキを取り出した。ふんわり膨らんだケーキはスーとしぼんで程よい厚さになる。

「早く食べよーぜ」

「でも冷まさないといけないのでは？」

「うーん。零華ちゃんが冷やしてよ」

彼らの中で冷却出来るのは水を属性に持つ零華だけだ。

「私は風ではありませんのに」

零華は右手の親指と人差し指で輪を作ると、そこからぷーっと息をかけた。水の膜を通った空気は少しずつケーキを冷ましていく。癒慰もうちわで扇いで応戦する。

少しすると荒熱も取れたようなので零華が切り分けた。綺麗なお皿に分けていく。

「ところで弥生は？」

お皿を自分のところに引き寄せて秀斗が訊いた。

「チヨコを作るそうですよ」

「マジ？ 俺にかな」

「違っつて」と勇輝。

「そんなわけないよ」と癒慰。

「好きな男の子にですからね」と零華。

すかさずもちろんこれは友チヨコですよと付け加える。

「天地がひっくり返ってもないな」と錬魔にまで言われ、秀斗はがくつと頂垂れた。

だがその下を向いていた顔は、近づいてくる足音に気がついて勢いよく上がった。

「秀、いるか？」

秀斗の想い人、弥生が厨房に入って来た。その手にはチョコレートの粒が入っている小瓶があった。

呼ばれた秀斗は顔を輝かせて弥生が近づいてくるのを待っている。それは餌を待つ子犬のようだ。

「これ、お前にやる」

「マ、マジか。お、お前、俺のことが好きなのか？」

天地がひっくり返っても起きない事態に、周りは固まってそれを見ている。

「ああ」

その言葉にさらなる衝撃が走る。

(何か飲んだか、頭を打ったのか?)

鍊魔が本気で診察を始めようとしたが、その表情を見て伸ばした手を引っ込めた。

弥生が浮かべた笑みは微笑。滅多に見れない貴重な表情だが、それが普通の時に見せるならいい。だが今日は色々あった。それはもう弥生の機嫌を損ねるようなことがいろいろいると。

その表情を見た後にチョコを見ると、小瓶の効果か薬に見えなくもない。

「じゃあ、食わせ」

周りの彼らには恐怖に映るその微笑も、恋愛フィルターがかかった秀斗には甘い微笑だ。

秀斗は小瓶から五六粒のチョコを出し、口に入れた。

「うん、うまい」

そして感動している秀斗は弥生を熱っぽい目で見上げていた。

「そうか、うまいか」

怖いぐらい弥生は上機嫌だ。

周りで見守っていた彼らは、すぐに変化に気がついた。秀斗の髪が変色しだしたのだ。いや、色だけではない。変質し始めていた。

髪の毛の根元から、金髪は徐々に茶髪に、ところどころ立たせてある髪は硬質に、だいぶハードな髪型になった。

周りが息を飲む中、そんなことに気がつかない秀斗は幸せで蕩けていた。

「……………失敗か」

その幸せを蹴飛ばしたのは弥生の言葉。

「え？ ん？ なんか甘い匂い、っーか頭が重っ」

髪に手を触れてみて変化に気付く。ずいぶんと硬く、とげとげと痛い。

「なんか、チョコレートじゃない？」

と勇輝が恐る恐る秀斗の髪に手を伸ばし、ポキンと折った。

「ぎゃ、俺の髪!」

そして匂いを嗅いでから、口に放り込む。

「食うな!」

「あ、チョコだ」

「ほんと?」

「そうなのですか?」

と女の子二人も折って食べてみる。その味わいは板チョコよりまろやかで、口どけもいい。

「おいしいな」

もう一つと手を伸ばす勇輝の手を払いのけ、秀斗は壁際に逃げる。

「や、弥生! てめ、何しやがった」

「ん? いや、人形型のチョコが欲しかったのな。作ろうと思ったのだ」

「俺でか!」

「嫌か? 私に食われるのだぞ?」

と、微笑を浮かべたままの弥生はじりじりと秀斗に近づく。どうやら、恋人騒動に始まり、下駄箱のことも怒りを増幅させたらしい。かなり手痛い仕返しが出来てしまった。

「絶てえヤダ！」

そう叫ぶと秀斗は脱兎のごとく逃げて行った。最後に俺のケーキ残しとけよ〜と言いつつ残すことを忘れずに。

「弥生……あれは、元に戻るのか？」

医者として人体への害が心配なのか、錬魔がそつと弥生に訊いた。

「ほつとけば自然と治る。まあ、おられた髪はどうしようもないがな」

つまり、折られた所は短いままということだ。

「……よし、食べましょうか」

癒慰がひとまず秀斗君には後でお気の毒にと言っておこうと、目の前のケーキに話を戻した。

「そうですね。いただきましたしょう」

さらに冷めていい感じにしっとりしただろう。

「いただきますーす」

勇輝はフォークで突き刺して豪快に食べる。

甘いのが苦手な錬魔は少しずつ食べ、

「まずくはない」

と渋い顔をしながらも全て食べた。

「どうです弥生ちゃんも」

偏食の弥生はケーキなど食べたことはなかったが、勇輝に挑まれるような目で見られれば、受けて立つのが負けず嫌いだ。

「食べる」

そして恐る恐る口に入れ、ゆっくり咀嚼した。口に広がる甘さは果物よりも強い。

「うん……食べられる」

「そう言う時はおいしいうって言うんだよ」

勇輝がにやっと笑って言う。偏食の弥生に食べさせてやってやり顔だ。

「……おいしい」

その言葉に勇輝がひそかにガッツポーズをしたのを弥生は知らない。

こうして不幸な秀斗を残して、楽しいバレンタインデーが終わったのだった。



**番外編 愛の小粒を召し上げれ（後書き）**

予告通りバレンタインデーです。

今回は重くなるかもしれないので、ちょっと遅れるかも……。

第2章の24 赤き涙、紅に燃ゆ（前書き）

注 少し残酷描写ありです。

注 これは神の名の下にです。大事なことから二度言います。

これは、神の名の下にです！

## 第2章の24 赤き涙、紅に燃ゆ

赤い、赤い夕日が荒野を染める。土は一面が朱に染まり、夕日か血かの区別もつかない。

火柱が上がる。雷鳴が轟く。水が津波となって押し寄せる。人が倒れ、また倒れていく。

ここにたどり着ける者はいない。彼らにそれは許されていない。仲間が戻ってくる。その身に傷を負い。その腕に仲間を、味方を、敵を、救える者を抱えて戻る。手がない、足がない、内臓もやられている。それでも、まだ息はある。

もうすぐ時間だ。掃除が始まる。

太陽は、地平線に一本の線を残し、今にも沈もうとする。

まだまだ、まだ沈まないでくれ。あと少し、まだ人がいる。終わらない戦いに身を投じている者がいる。

そう願うのに、暗闇は訪れる。いや、暗闇だったのはほんの一瞬だ。すぐに爆炎が上がり、地上にいる人々を照らした。

鼓膜が破れそうな爆発音。大地はえぐれ、土煙が舞上がる。人々の断末魔さえ聞こえない。人々は手を食われ、足を千切られてもお、敵と戦うことを止めなかった。彼らの力は、全て旧代の科学に食われていく。

人の形を失っていく人たち、倒れ伏してもなお、その身は炎に焼かれ、新たな爆弾で散り散りとなる。骨すら残らない。明日にはまた、そこは真っ赤な荒野となる。

一人の女の子が、こちらに這って来た。軍服から敵だと分かる。その手はいびつに変形し、腕自身が武器のようだった。そしてその

目は敵意を持っている。

来い。こちらへ。ここならば、助けられる。  
たとえ刺されようとも、助けられる。

突如、強烈な光が目を焼いた。短く呻いて、目に手を当てる。魔力を流し込むと、それはすぐに癒えた。

だが、その目に映ったのは、女の子の首。  
手も、足も、もうそこには無かった。血すら熱で気化している。  
女の子は恨みのこもった目で見あげている。

また、救えなかった。駆けよれば、この力で救えたのに。見ているだけしかできない。

大きく抉られた大地は、足元で切り取られたように終わっている。  
ここが境界線。ここからこちらは、異能も科学も効かない。  
死の匂いすら感じない。あるのは目に映る人だった物と、眼が映す人の最後の輝きだけだ。

爆弾は雨のように降り注いでいる。きのこ雲が空の月を、星を隠す。大地は、太陽が要らないほど明るい。

まだ、仲間もいただろう。国のためにと、その能力を使った。彼らもまた、国だけのためにと、新代の科学でその能力を与えられた。もう、立っている者はいない。それでも、爆音が鳴りやむことはない。朝日が昇るまで、それが止むことはないのだ。

ズキリと眼が痛む。赤く縁取られた瞳。もうそれは人の光を捉えることはできない。痛むのは先ほどの傷ではない。眼が訴えているのだ。

救え、救えと。

後ろでは、傷を負ったものがうめき声を上げている。それを仲間が治療していた。

この力を使えば、彼らの傷を治せる。だが、治ればまた戦場に行かなくてはならない。その先は、死だ。

そして、治せるのは傷だけだ。彼らの身を蝕む、毒までは治せない。その毒は夜が明ける度に濃度が増す。もはや人間が一日そこに立つただけで、死に至るほどだ。

“ 救え、救え。逆らえ、逆らえ。その赤き印に触れよ。さすれば… ”

できない。できない。

この足は動かない。

誓いを、破るわけにはいかないんだ…… 火煉<sup>かれん</sup>。

火煉、その眼に映るのは、命の灯火。その苦しみ、痛み。

彼らの命はここで終わるはずではなかった。

彼らには彼らの人生があった。

赤い印が、花のような印がふっと消えた。まるで散りゆくように。ここで、死ぬはずではなかったのに。

彼らの運命を捻じ曲げたのは誰だ？

彼らを道具として扱い、その手に負えなくなった兵器を作りだしたのは誰だ？

この愚かな戦争を始めたのは誰だ？

……………全て人間だ。

目を開けると、部屋はすでに明るかった。窓から入る太陽の角度を考えると、だいぶ日が昇ったらしい。

気だるい体を起こすと、長く、赤い髪が目に入る。

錬魔はその気だるさを吐き出すように、息を吐いた。

（この夢を見るのは何回目だろうか……………最近は見なかったのだが……………）

錬魔は起き上がり、窓まで歩く。そしてそれを開けて、新鮮な空気を肺に送り込んだ。

思い当たるのは、春日勇輝だった。勇輝は家出中で、休日であるのをいいことに、昨日一日錬魔の周りにひっきりなしに出没していたのだ。火の球で驚かせてもケロリとしていた。さすがに冷汗は浮かべていたが……………。

(あいつのせいだな)

あまりにもしつこいから、昔のことを夢に見たのだろう。あまりにもしつこく、人間嫌いの理由を訊かれるから。

鍊魔は視線を遠くに向ける。小高い丘の、もっと先。

鍊魔は窓から離れ、身支度を始めた。

勇輝は如月の廊下をうろつくと歩いていった。

探検をしようと歩いている。はつきり言えば迷った。

先ほどから歩いてだいぶ経つが、廊下と等間隔に並ぶドア以外に何も無い。

(うーん。あいつら魔術師だし、困ってる俺を察して助けにきてくれないかな)

時々ドアを開けて見ても、行きどまりで、たまに怪しい部屋に遭遇する。歩いていれば誰かに会わないかなと、期待しているのだ。

しばらく廊下を歩いていると、人の声が聞こえてきた。勇輝は天の助けとその声がするドアを開ける。それは一つだけ金属のドアだった。

(あれ？ 食糧庫？)

そこは玉ねぎやら人参やら、隅の方では肉も保存してある、食糧庫だった。人の声はさらに奥、光が漏れている方から聞こえる。

この先に繋がっているのは厨房だ。

勇輝は水でも貰おうと、野菜の間を縫って厨房に入ってしまった。

「水をくださいーい」

遭難者のような声に、厨房にいた二人は驚いた顔で勇輝を見る。

「勇輝君？」

「お前、どっから出て来てんだよ」

癒慰と秀斗だ。二人とも遅めの朝食を取っていた。食堂に持っていくのも面倒なのでここで食べていたのだ。

「み、水を……」

「はいはい」

「迷ったんだな」

すぐに見抜かれた勇輝は息も絶え絶えの演技を止め、少し膨れて癒慰に渡された水を飲んだ。

「広すぎるここが悪いんだ」

「いやいや、本部の方がでけえよ」

「ちえっ……あ、そっいや錬魔は？ もう起きた？」

腕時計によると、針は九時を少し回ったところだ。

「さっき水を飲みに来たよ？」



水だけ飲み、朝食はいらないと断って出て行った。

「そっか。よし、後で部屋にいこ」

「お前、昨日髪の毛焦がして帰ってきたのに懲りてねえのかよ」

「不良は懲りたらそこでお終いなんだ！」

熱を入れて、そのまま語りだしそんな勇輝を横目に、秀斗は自分の朝食に戻る。

「そういえば、どうして勇輝君は不良になったの？ クラスの不良ともまた違う感じなのに」

パンをかじりながら、ふと思い出したように癒慰が訊いた。

秀斗に不良とは何かを語り始めていた勇輝は、しばらくその質問の意味を考えていた。

不良として生きて、避けられたり喧嘩を売られたりしたことは多くあるが、その理由を訊かれたことはなかった。

「あゝ。昔っからこの顔だから、けっこうからかわれてたんだ。小学校に入ってからからかう奴に拳骨でお返しを始めて……」

ことの始まりは小学校一年生。からかわれて泣いて家に帰ったところ、母親に叱咤されたのだ。

曰く、男ならやり返しなさい、と。

「んで、問題児だった俺は、中学に行っても同じように殴り続け、とうとう不良ともやりあつたんだ」

女男と呼ばれ、激情し、殴る蹴るの大乱闘のすえ勝利した。

「そつからやたらとガラの悪い奴らに絡まれるようになって……気づいたらその中学のトップになってた」

この頃から歩と組んで暴れ始め、精力的に他校と交流試合をし、その名を轟かせていった。

「……以外と強いんだ」

ぼつりと癒慰が本音をこぼす。その可愛い外見のどこに強さが隠されているのだろう。

「素手勝負なら負けない」

自信満々に胸を張っていると、秀斗が食べ終わったらしく食器を片づけ始めた。その時を待ってましたと言わんばかりに勇輝が話を持ち出す。

「なあ秀斗。なんかしない？ 俺暇なんだけど」

せつかくの休日だがやることもなく、屋敷を探検するにも案内人がいなくてはまた迷ってしまうのだ。

「俺は暇じゃねえよ。そんなに元気ならガキは外で遊んでな」

泡立てて皿を洗いながら、顎で窓の外を示した。料理はだめでも

これくらいはできる。秀斗は半分冗談だったが、勇輝は何かひらめいた顔をした。

秀斗はやっちまった、と後悔するが遅い。勇輝の関心はすでに窓の外に向いていた。

「そうだな。俺、外で遊んでくる！」

と元気にドアから飛び出して行った。

「あゝあ。いつちまった」

呆れた顔の秀斗に対して、癒慰は心配そうな表情を浮かべる。

「大丈夫かしら……あそこに近づかなきゃいいけど」

「あ……けど、あの様子じゃ錬魔がいるんじゃないの？」

「もっと危ないでしょ……」

「あ、今日の機嫌最悪だったな」

時々錬魔は非常に不機嫌になる。そういう時はふらつと外に出て行って、大抵夕方にならないと帰ってこない。行く場所は決まっていた。

「勇輝君。無事帰って来てくれるといいんだけど」

物憂げなため息をついて、癒慰も食器を片づけ始めた。

第2章の25 赤き怒りに、春風の吹きわたる（前書き）

長くなったので二分割。

第2章の25 赤き怒りに、春風の吹きわたる

(外、外、外?)

勇輝は小走りに廊下を進み、首をかしげた。

考えてみれば、勇輝は玄関を知らない。一度だけそこから入ったことがあるが、場所など覚えていないし。誰もそこを使っている様子もない。

しばらく記憶を探ったが、諦め、目についた窓に近づいた。少し固い窓を開け、地面との高さを確認する。ここは一階、飛び降りられる高さだ。

窓枠に足をかけて飛び降りる。

「ま、これが一番早いよな」

そして勇輝は散策を始めた。

温かい春の日差し、鳥のさえずりに、蝶が花の間で舞っている。

(この空間、季節違うよな)

色とりどりの花に、音を立てて存在感をしめす噴水。どこか見たことがあると思えば、以前弥生に追われて逃げ込んだ庭園だった。

(昼寝して〜)

いい夢が見られそうだと思いついてみると、前方に大きな黒い蝶が見えた。それは勇輝に向って飛んでくる。

「クロアゲハ？ のわりには模様がおかしいか」

その蝶は黒い羽根に銀色の模様を持っていた。それはふわふわと勇輝を通り過ぎると、屋敷の方へと飛んで行った。

（今度見たら捕まえて標本にしよう）

ここは異空間なのだから、少し変な生き物がいるくらいありえる話だ。

勇輝は庭園から遠ざかって、森の方へ歩いていく。その森は明るく、木もそれほど高くない。あまり人が入らないのか、道のようなものはなかった。だが深くはないらしく、すぐに視界は開けてきた。

「おゝ草原……？」

勇輝は森の出口で立ち止まる。森の砂地は、そこでぷつぷつと草に変わっていた。左右を向けば、同じようにそこで森と草原が分かれている。まるで線が引いてあるようだ。

勇輝はどこか国境を超えるような気持ちになりながらそれを踏み越えた。その瞬間体の中をフワリと何かが通過した気がしたが、すぐに高揚感で忘れられる。草原の先に続くのは丘だ。異世界に来た気分になりながら、勇輝は歩き出した。

柔らかい土の感触。風が草原を走り、音を立てる。

ここで寝転がって昼寝をすれば最高だろうなと思いつながら勇輝は丘に登る。半分ほど登ったところで振り向くと、如月はずいぶん遠くにあった。しみじみとその大きさを実感する。だがその大きさのおかげで帰りは迷わずに済みそうだ。

なおも登っていくと、石が目立ち始めた。同じ大きさの石が等間隔に並んでいる。

勇輝は疑問に思いながら足を進める。石はいびつで、ずいぶん古そうだ。

なだらかな丘を登り終え、眼下に広がる景色に勇輝は息を飲んだ。丘の反対側は全て石で埋まっていた。そしてその先は荒野。地平線がくつきり見えるほど何も無い裸地。黒っぽく、ところどころ焼けた跡がある。奇妙な風景だ。

勇輝は言葉もなく石の間を通り抜ける。

この世界はずいぶんと急激に景色が変わるようだ。

(まるでつぎはぎの世界だな)

勇輝は丘を下り、そばに建物があることに気がついた。これも古い造りで、人気はない。

覗く気にはなれずに草原を歩く。その先は荒野だ。

その境界も、また線が引かれたように綺麗に分かれていた。勇輝の足もとには草が生え、青々としているのに、一步先は砂しかない。砂漠ではない。まさに荒野だった。

「それ以上近づくな」

「おわっ」

勇輝は突然かけられた声に驚いて、あげかけた足を下ろした。低い、不機嫌そうな声の主は丘の中腹から勇輝を見下ろしていた。

「れ、錬魔？」

「離れる。死にたくなければ」

切れ長の目はますます鋭く、放たれた言葉の不穏さに、勇輝は丘の手前まで後退する。

「なんで錬魔がここにいるんだ？」

「それはこちらのセリフだ。目障りだから早く失せろ」

付き合いの浅い勇輝でも分かるほど機嫌が悪かった。昨日は追いかけてまわしても迷惑そうに火の玉を飛ばしたぐらいで、これほど敵意は向けなかった。

だが、ここで引き下がれば不良として名折れと、勇輝は錬魔と同じ高さまで登る。

「やだね。俺は錬魔に訊きたいことがあるんだ。それを訊くまでは帰らない」

「失せろ」

「教えてよ」

「失せろ」



その言葉とともに掌から火の玉が放たれたが、勇輝はそれをなんとなく避ける。勇輝は昨日一日で鍊魔は決して人に危害を加えようとしないことを知っていた。今の攻撃も、弥生に比べればずいぶん遅い。

「俺は諦めが悪いんだよ。なあ鍊魔。お前が人間を嫌う理由ってなんだ？ どーしたら俺を認めてくれんだよ」

「本当にしつこいな。それを知ってどうする」

「わからない。俺は鍊魔が優しいことを知ってる。だから俺は鍊魔の仲間になりたいし、仲良くなりたい。理由もわからずに嫌われるのは、嫌いなんだ」

鍊魔の眉がわずかに上がった。

（意志を曲げない……か）

鍊魔の脳内に弥生の言葉が反芻はんすうした。目の前の少年は強い目をしている。火の玉で脅しても顔色一つ変えない。

「……いいだろう」

鍊魔は苦りきった顔でそう言うと、手を石の上に置いた。見極めてやるのもおもしろいと思っただのだ。

「これが何か分かるか？」

「え、いや……」

勇輝は改めてその石を見るが、特に変わったところはない。

「これはな、墓だ」

低い声が重々しく告げた言葉に、勇輝は風が止まり、一切の音が消えたように感じた。

「仲間の、味方の、敵の……」

「これ、全部？」

勇輝は丘を見回す。その数はざっとみても数百はあり、反対側を合わせればさらに増える。

「ああ。俺が、救えなかった。見殺しにした、者たちだ」

錬魔の声には抑揚がない。このことを悲しんでいるのか、怒りをもっているのかも分からない。勇輝は静かに聞き入った。

「あの荒野は、かつての戦場だ。つい数十年前まで、あそこで戦争をやっていた」

勇輝は、錬魔の視線を追って荒野を見る。錬魔の目は遠く、昔を思い出しているようだった。

「アメリカとソ連、二つの大国がぶつかりあった。表の世界では冷戦と呼ばれているものだ」

「……でも、武力衝突はなかったって」

「ああ。お前らの世界ではなかった。戦争は、全て異空間で行われ、俺もそこにいた」

戦争という言葉が勇輝の胸に重たく押し掛かる。勇輝は戦争を知らない。だがそれを経験した者が目の前にいる。このことは勇輝を当惑させた。

「あの戦争は、表の兵士は誰も戦わなかった。全て、人形兵器での戦いだ」

「人形兵器？」

「第二次世界大戦の頃、戦争の裏でDNA研究や脳の研究が急速に発達した。それはすぐに人間に適用され、ある兵器を作り出した。奴らは赤子で人体実験を繰り返し、人工的に異能を作った」

鍊魔の口調には不快感が滲み、憤りも感じられた。

「嘘だ……」

反射的にそう返してしまう。

「事実だ。そして両国とも大量にそれを生みだし、成長を待つて実践に投入した。お前と同じぐらいの年ごろの子どもだ。国への忠誠のみを教えられ、人を殺すことしかできない子どもたちだ」

「まだ子どもだった……」

「ああ。最初は互いの成果を見せ合うために殺し合っていた。だ

が次第に消耗戦になり、掃除が始まった」

石の上に置く錬魔の手に力がこもった。視線は一点から動かない。

「敵兵として捕らえられることを恐れた奴らは、日暮れとともに自分たちの駒を壊し始めた。互いにまだ予備があることを誇示するために。何故あの荒野がいまだに草一つ生えないかわかるか？」

勇輝は静かに首を振った。

「掃除にはあらゆる爆弾が使われた。一番多かったのが原爆と水爆だ。放射能のせいかな、別の原因か、あの土地はあと何千年も経たなければ再生しなくなった……」

もともとは如月の空間と戦場は別空間だった。それがつい十年少し前に、二つの空間が衝突しあって結合したのだ。まるで忘れるなと言っように。

錬魔は一息ついて、また話し始めた。

「だが、人形兵器をつくるには少なくとも十年はかかる。すぐに両国とも品薄となった……。そして、ソ連が黒騎こっきと手を組んだ」

「黒騎？」

「俺たちと同じ、異能集団だ。今も存在し、その全てが不明。それを知ったアメリカも、大慌てで援軍を探した。そして、当時西側だった日本は、龍牙隊を献上した」

「もしかして他のみんなも？」

「知らん。戦場はここだけではないからな。だが、弥生と秀斗は従軍したと聞いた」

勇輝の顔が暗くなる。弥生が、なぜヤクザに襲われた時に戦争という言葉を使ったのかがわかった。彼女は戦争を経験したことがあったのだ。

「もしかしたら、二人と会ってたかもしれないんだ」

「ああ」

（敵同士だっただろうがな）

勇輝は鍊魔の横顔を見つめる。そこから何か読み取れないかと懸命に探す。

「俺は治癒の力を買われ、医療部隊としてここにいた」

「治癒魔術……」

零華に言われた言葉をそのまま繰り返した。

「厳密に言えばこれは魔術ではない。能力だ」

呆けた顔に疑問符を浮かべる勇輝に気づいた鍊魔は仕方ない、と呟いて顔を勇輝へと向けた。鍊魔を、その瞳を正面から見た勇輝ははっと息を飲む。

「赤い……きれい」

鍊魔の瞳は赤く縁取りされていた。鍊魔は眉をわずかに動かす。

「魔術師は、同時に特殊な能力も持っている。俺は火煉、弥生の月げつ契けいや秀斗の星鎧せいがいもそれだ」

「火煉……名前みたい」

「……当たり前だ。これはその能力固有の名だからな」

鍊魔はすぐに視線を荒野に戻した。その瞳は灰色に戻っている。

「だが、この力を持ってても放射能に蝕まれている彼らを助けることは出来なかった。俺に出来るのは、ただ安らかに……殺してやるだけだった」

勇輝はぐつと唇を噛む。この墓は、鍊魔が作ったのだ。救えなかったことを悔いて、自分を責めながら。そう思うと、勇輝はやりよ  
うのない怒りがわいた。

「そして、唐突に戦争は終わった。ソ連側が停戦を申し入れた。聞いた話では、黒騎の中で騒動があったらしい。数えてみればたったの数年だ。その後も表で冷戦は続いていたがな」

鍊魔はやさしく石を撫でる。そこにいる人の頭を撫でるように。

「こいつらを生み出したのはお前ら人間だ。あいつらを焼き尽くしたのもお前ら人間だ。そしてそれを闇に葬り、何食わぬ顔で生きて

いるのも人間だ。……だから、俺は人間が嫌いだ」

錬魔は苦々しげに吐き捨てた。

(ごめんなんで、言えない。言っただって仲間が生き返るわけじゃない……)

錬魔は視線を勇輝に向けた。少年の答えを聞くために。

勇輝はしばらく俯いていたが、意を決したように顔を上げ、錬魔と向かい合った。

「それでも俺は、諦めない。錬魔が、人間を許せないのは、わかった。許せないままでもいい。だけど俺は、俺を春日勇輝として見てくれるまで、ずっと錬魔の周りをうるついでやる」

「聞き分けの悪い……」

「悪いよ、俺は」

まっすぐと錬魔を見つめる目。その目には恐怖も蔑みも映っていない。そこにあるのは、対等な目だ。今まで見てきた人間とは違う、純粹にそのまま彼らに接している。

“ 変革が、欲しかったのですよ ”

そう言ったのは零華だった。誰よりも如月を愛している彼女は、人間を迎え入れた。

(何を、変えたいんだ？ こいつに何を期待している)

“貴方と同じですよ”

(俺も期待しているのか？)

問いかけても答えはでない。目の前の少年は鍊魔の答えを待っていた。

鍊魔は苛立たしげに舌打ちをする。まだ、答えはでないのだ。

「ならば、人間がどこまで出来るか見届けてやろう。春日勇輝、仲間に相応しくないとせば、即刻追い出す」

勇輝の顔が明るくなり、すぐにそれは挑むような顔つきになった。

「ああ。よろしくな」

鍊魔は不愉快そうに顔をしかめると、無言のまま丘を上がり始めた。

「あつ、ちょっと待ってよ」

なぜ呼び止めると言いたそうに、鍊魔は足を止めて振り返った。勇輝は丘全体を見回して、静かに手を合わせた。丘全体に祈りを捧げるように。

(俺は、忘れないから。……安らかに眠ってください)



鍊魔はその姿を見て目を見開いた。そして複雑そうな笑みを浮かべた。それは困ったような、それでいて泣きそうな笑みだ。

(かなわんな)

じんわりと氷塊が溶けていく。その水が渴いた心を潤していく。浸食されていくような感覚なのに、不快ではない。こそばゆいのが逆におかしかった。

「置いていくぞ」

鍊魔は再び歩き出した。

「ひどっ」

その後を早足で勇輝が追う。

ふわりと、森の奥から花の香が風に運ばれてやってきた。如月に咲き乱れる花の香。森でひっそりと咲く花の香。

「こごっていつも春？」

勇輝が前を歩く鍊魔に訊いた。長い一房の髪が背中中で歩調に合わせて揺れている。

「春？ …… ああ、確かにそうだな。当分能天気な春が続きそうだ」

鍊魔は空気を肺の隅々まで循環させた。

(春も悪くない……)

鍊魔は口元に笑みを浮かべると、少しゆっくりと歩きだした。久しぶりに感じる、穏やかな空気を堪能しながら……。久

第2章の25 赤き怒りに、春風の吹きわたる（後書き）

スパイスを一滴。

錬魔の過去編。パート1です。

そして忘れたところに出てくる黒騎。彼らが出てくるのは第3章の予定です。

第2章の折り返しもだいぶ終わり、後は……あけみさんと弥生を残すのみ。

春までには、3章に入っておきたいんですけどね……。

ではまた、次回。

## 第2章の26 手始めに勝負といきますか

週が明け、月曜日。

勇輝は少し早く如月を出た。ドアを開ければ学校の屋上にあるテントなので、登校は楽々だ。

勇輝は鼻歌交じりに階段を降り、教室へと向かった。

錬魔のことが少し分かったので機嫌がいいのだ。あの後から錬魔が勇輝を名前で呼ぶようになり、それも勇輝がご機嫌の理由だ。

(後は弥生だよな……何で勝負しようか)

考えながら廊下を歩いていると、すれ違う不良達が挨拶をしている。それは下級生だけではなく、上級生もだ。皆勇輝に負けた人達である。

勇輝はそれらを適当に流して、教室へと入った。

教室は、珍しく不良の着席率が良かった。いつもならふらふらとそこら中でしゃべっている不良たちは、机の周りに固まって、何やら話しこんでいる。

その上、歩も席について教科書を広げていた。勇輝は雨でも降るのではないかと窓から空を窺う。まだ空気は冷たいが、晴天だ。

勇輝は歩の隣の席にかばんを置いて

「なんで勉強してんだ？ 珍しー」

と声をかけた。

歩は、奇妙な生物を見る目を勇輝に向け、ややあつて言葉を返し

た。

「お前、もしかして今日がテストだって、忘れてねえか？」

「え？」

本気で訊き返した勇輝に、歩は呆れ果ててため息をついた。

「お前なり、こないだの中間赤点ギリギリだったんじゃないの？  
ちよつとは勉強しやがれ」

「……マジで今日テスト？」

「ああ。みんな勉強してんだろ？」

そう言われて周りを見ると、皆何らかの教科書を持っている。先ほどの怪しい塊はどうやらヤマを張っているらしい。

「テスト、点数がつく……勝負。よっしゃ！ 俺あいつら連れてくる！」

「えっ、おい」

知らねーぞー、という歩の声を背中であいて、勇輝は走り出した。

（俺は今日テストのことを知り、今まで授業にろくに出てない。それは弥生だって同じだ。というか俺よりひどい。てことは、勝てる）

勇輝は内心ガッツポーズをしながら階段を駆け上がり、テントの布を開けた。

ホールには制服姿の零華と癒慰。登校しようとしていたようだ。

「忘れもの？」

「今日テストだって」

「知ってますよ？ 先週葉月さんが言っていましたし……」

葉月の言葉を適当に聞き流していた勇輝は覚えているはずもなく、零華の言葉にも返さずにホールを飛び出して行った。

「俺あいつら連れていく！」

ボタンとドアが閉まり、女子二人はしばし無言だった。ややあつて零華が口を開く。

「みなさん起きてましたっけ？」

「弥生ちゃんは起きてたと……」

確実に起きていないのは鍊魔だ。だが起こすにしても、弥生の部屋に入るにしても、もそれなりの技術が必要なのだが……。

「大丈夫かしら」

二人は一抹の不安を抱えながら、学校へと向かった。

勇輝は廊下を走り、まず秀斗の部屋をノックして入った。返事など待たずに、

「おはよ〜。学校だよ！」

と音に驚いて目を覚ました秀斗に元気な挨拶を送った。

秀斗は暗がりの中枕もとに置いてあったヘアバンドを掴みとると額に当たるようにつけ、じろりと勇輝を睨む。

「少しは待ちやがれ。寝込み襲う気がコラ」

勇輝はそんな苦情はどこ吹く風と、カーテンを開ける。

「今日テストだから急げ！」

射し込んできた太陽は秀斗の金色の髪に反射してきらきらと光る。それを黒いヘアバンドが引き立てていた。

「早く学校に来いよ〜」

やるだけやると、勇輝はすぐに出て行った。

次に近いのは弥生の部屋だ。

秀斗は無言で勇輝を見送り、少しずついていたヘアバンドを直すと、  
呟いた。

「テストってなんだ？」

勇輝は再び走っていた。全力ではないので息が切れることはない。もともと日々の喧嘩と逃走で走りには自信がある。

勇輝は弥生の部屋で止まり。少しためらったが、ノックをして入った。

(寝てたらごめんってことで！)

勇輝は入った瞬間何か飛んでくる気配を察知し、しゃがもうとする前に、ドスツと頭上で音がした。

見てはいけないと思いつつ、上を向くと、ドアにナイフが刺さっている。反動でまだ揺れていた。

「……勇輝？」

正面の窓辺に腰をかけていた弥生がやや驚いた声をあげる。

「弥生……おはよ」

弥生は朝から一分も隙なく隊員服を着込んでいる。勇輝は弥生がそれと制服以外の服を着ているところを見たことがなかった。

「秀かと思った。命拾いしたな、秀の身長だったら、丁度頭を貫いていたところだった」

「そ、そう」



自分の身長が悲しくも低いおかげで事なきを得たらしい。

「で、何かようか？」

「あ、今日学校でテストがあるんだ。だからそれで勝負しよう。俺が勝ったら認めてくれるんだろ？」

「……テスト？」

弥生は耳慣れない言葉に小首を傾げる。

「学力試験。行けば分かるって」

そうか、と弥生は頷いておもむろに上着を脱ぎ始めた。

「ぎゃあ！ 弥生ストップ！」

下にアンダーウェアを着ているとはいえ、薄いそれは弥生の体の輪郭をはっきりと映し出していた。勇輝は回れ右をして弥生に背を向ける。

「……ああ。お前は男か」

「弥生、絶対勝つからな！」

勇輝は捨てゼリフを吐いて、部屋から出て行った。

(ぜってえ勝って、俺が男だって認めさせてやる！)

少し目標がずれた勇輝だが、それを気にすることもなく最後の部

屋へと向かう。一番奥まった場所にある錬魔の部屋だ。

荒々しくドアを叩いて入る。部屋は明るく、ベッドはもぬけの殻だ。だが部屋に錬魔らしき人影は……。

「あ、いた」

錬魔は机に突っ伏して寝ていた。机には分厚い本が積み重ねられ、夜遅くまで研究をしていたらしい。

(うわ)。研究熱心)

勇輝はすやすやと眠る錬魔の寝顔を覗きこんだ。普段の陰しさが消え、少し優しい顔つきになっている。顔にかかっている髪もさらさらと艶がある。

一房だけ長い髪は、変わった装飾品で止められていた。金属の輪っかで、幅のある面には複雑な模様が彫り込まれている。

(よくこんなんで止まるよな……ってそんなこと気にしてる場合じゃない！)

勇輝は錬魔を起こそうとその肩に手をかけ、揺すった。

「錬魔……。朝だ……」

最後まで言い終わらないうちに錬魔はカッと目を開け、勢いよく立ちあがった。その勢いで椅子が倒れるが、勇輝は椅子の横に立っていたので直撃は免れる。

が、視界を何かが高速で横切り、続いて風を感じた。

「へ？」

勇輝の目の前には錬魔の足。正確にはふくらはぎの辺りが鼻先に来ている。

「あ？ 秀斗ではない……勇輝？」

眠そうな声を出して、錬魔は足を下ろした。

錬魔の回し蹴りは正確に秀斗の頭の位置を捉えており、勇輝の身長がもう少しあれば……今頃床に転がっていただろう。

「……何か用か？」

「えっと、今日学校でテストがあるから、行かない？」

「……テスト？」

どうやら彼らは今までにテストを受けたことがないらしい。

「ま、行けば分かるから。着替えて来て」

勇輝はじゃ、と踵を返して部屋を後にする。胸に手を当てると、心臓は忙しく動いている。朝から二度ひやりとした。

（二人とも秀斗に照準を合わせてたつてことは、いつもあいっすら起こしているのって、秀斗なのか？）

毎回あの攻撃を受けているかと思うと、胸の痛む勇輝だった。むしろ、絶対守護の能力のある秀斗だからこそ、できることなのであるが……。

そして勇輝が学校に戻ると、朝のシヨートホームルームが終わったところだった。弥生と秀斗がテストについて零華から説明を受け、錬魔がやって来ると、試験監督の先生が入ってきた。生徒が着席していく。

テストの時だけは、不良もちゃんと名簿順に並ぶ。勇輝がその時知ったのは、彼らに見苗字があったことだ。ただ読み上げられただけなので覚えられなかったが、当たり障りのない普通の苗字という印象だった。

そして答案用紙が配られ、チャイムとともにテストが始まった。

勇輝が通う学校は通常一週間がテスト期間となる。だがそれは通常だ。勇輝のいるクラスは皆さま不良なので、集まった時に一気にやらせると、全てを二日間で終わらせる強行スケジュールとなる。

勇輝のクラスは科が違うので、他のクラスより科目数も少なく、実技系統が非常に多い（それも不良が集まってくる理由でもある）。よってテスト一日目は計五科目。世界史、数学、英語、化学、現代文プラス古典といった内容だ。

勇輝は勘と鉛筆コロコロに運命を託し、午前中の四科目を乗り越えた。見事に記憶に引つかかるものすら無かった。もう清々しいほどに。

「お昼にしよう」

癒慰がお弁当を持って勇輝の席にやって来た。零華も机を動かして準備する。歩と秀斗も加わって楽しいお弁当の時間だ。

弥生と錬魔は四時間目が終わるなり姿を消した。午後もあること

を知っているから時間までには帰ってくるだろう。

「俺の分は？」

一人お弁当がない秀斗は、ん？ と首をひねる。

「ないわよ。来るなんて思わなかったもん」

お弁当は朝に癒慰と勇輝が作ったのだ。数は三つ。秀斗の分は含まれていない。

「マジで？」

「購買で買ってこいよ」

歩も自分で作った弁当を持参している。一人暮らしは節約が大事ならしい。

「俺金持ってねえ」

「貸すよ？」

と勇輝はポケットから財布を出して、五百円玉を秀斗に渡した。

「サンキュー」

秀斗は恩に着るぜ、と教室を出て行った。

「後で返せよ」

その背中に声をかけ、勇輝は弁当の蓋を開けた。彩りも考え、バ  
ランスもばっちりのお弁当だ。

「いただきます」

と各々口にして、食べ始める。

「ねえ、昨日中学でトップになったって言ってたけど、ここでもそ  
うなの？」

談笑の始まりは、癒慰の勇輝への質問だった。

「どうだろ。この学校、小ボスはいるけど大ボスはいないから……  
分かんない」

全学年に不良はいるが、リーダーとして誰かを祭り上げているわ  
けでもなく、ただ個人同士が気に食わない奴を血祭りにあげるぐら  
いだ。たまにグループが出来るが大抵内部分裂で消滅してしまう。

「あゝ。たぶん、一番強いんじゃない？」

「そうなのかな？」

「ほら、ちょっと前に喧嘩売って来た三年がいるじゃん。角刈りの  
熊のような奴。あれ、一応三年のトップだったから」

勇輝は記憶を手繰り、熊男を発見した。あれは、丁度昂乱の件に  
片が付き、彼らが学校に姿を見せなかった時だった。

「あゝ。あの、隙ついて鳩尾殴ったら気絶した奴か」

勇輝は廊下で喧嘩を売られ、その場で即買い取った。そして相手の大ぶりで威力のある拳を避け、相手の体力を奪い、ふらついたところを懐に入った。驚く相手に極上の笑みを見せ、鳩尾に拳を叩きこむ。見物人が慌てふためく様が愉快だった。

「拳は壁にひびが入るくらい強かったけど、遅い奴だったよな」

勇輝はその闘いを思い出して、しみじみと感想を述べる。

「だから、今お前が暫定一位」

「あ、だから俺、あの後三年に絡まれてたのか」

その後絡んできた三年も全員床に沈めたのは言うまでもない。

「へっやっぱりトップなんだ」

癒慰がやけに嬉しそうにしている。

「でもなんで？」

「ん？ えへへ、実はさあ、誰かかっこいい人紹介してくれないかなあって。この学校のトップなら、出来るでしょ？」

つつこむべきところは二つある。

「え、かっこいい人って何？」と勇輝が、

「トップ関係なくね？」と歩が、

それぞれつつこんだ。

「私さ、甘い恋がしたいの。だって高校生よ？ 高校生って彼氏の一人や二人、いるもんじゃない？」

二人のつつこみはスルーして、癒慰はきらきらと乙女の望みを告白した。

「気にしないでください。恋愛小説の読みすぎですから」

さらりと零華が氷の言葉で癒慰を刺したが、癒慰は太陽のような笑顔でそれを溶かし、話しを続けた。

「だから、かつこいい人いない？」

と相談された不良二人は、顔を見合わせ、同時に答えた。

「いない」

「え、なんで？」

「だってよ、癒慰。この学校に秀斗と鍊魔以上に顔のいい奴なんていないし」

「つーか、あの二人でよくな？」

勇輝と歩は思いつく限りで生徒の顔を並べたが、あの二人に敵う



顔はない。

「だめよ。秀斗君は弥生ちゃんが好きだし、鍊魔君はタイプじゃないから」

バツサリとかつこいい男の代名詞二人を斬り捨てた癒慰は、ぐりりと教室を見まわした。

「ここにはいないしね。タイプの人」

「……ちなみに聞くけど、タイプって？」

勇輝は鋭い目で男たちを観察する癒慰にそろっと尋ねる。

「イケメン」

断言する癒慰に、やっぱりと肩を落とす二人だった。

「大人っぽい人で、私の趣味に付き合ってくれる人がいいなあ」

「趣味？」

勇輝は訊き返したが、癒慰の顔を見てすぐに後悔した。にやーと笑っている癒慰は、かなり危険人物に見えた。

「知りたい？」

「いえ、全然」

「うふふ、実はずっと我慢してたんだあ。帰ったら、教えて、あ、

げ、る」

獲物を狙う鷹のような目で、癒慰は勇輝を見ていた。勇輝は背中に嫌な汗を感じ、スーッと視線を逸らした。

「ご愁傷様です」

そこにもくもくと食べていた零華が一撃を放つ。それは正確に、勇輝の体を貫いた。

(か、帰りたくね〜)

そうこうしている内に秀斗が帰り、楽しい昼食時間は過ぎていった。

## 第2章の26 手始めに勝負といきますか（後書き）

原稿用紙換算で10ページ後半（空白除く）。気づいたらどんどん長くなる一話。なんでだろ。

とつくに、一章の分量を越し（まだ話数が下なのは一章の一話ごとが短かったせい）、どうすればスリムになるのか。

書きたいことが多すぎる。それだけ、内容が濃くなればいいなあと思つてますが……薄い？ 気のせいですよ。まあ、2章には中ボスすらいませんかね。

さて、作者は伏線を張るのが大好きです。そこらじゅうにちりばめておきながら、回収を忘れ、存在を忘れていることも多々あります。

どこかで伏線の存在に気がついたら、それが回収される日を、お楽しみに。

では、また次回へ。

## 第2章の27 手始めに稽古といきますか

五時間目の化学も終わり、彼らは如月に帰っていた。

勇輝は着くなり全力で部屋に駆け込み、籠城した。ドアは鍵がかからないので私服に着替えたなら窓の近くで待機する。

もし癒慰が来たら、速攻で逃げるためだ。

そして三十分が過ぎたころ、誰かの足音が聞こえてきた。勇輝は窓を開け、ドアの向こうの気配を窺う。その人物は勇輝の部屋の前で足を止め、軽くノックをした。

「おい。勇輝、服が来たぜ」

勇輝はその声が秀斗だったことに、心底ほっとしてドアを開けた。

「服って……あの？」

勇輝の頭に変態所長の姿が浮かぶ。

「普通のだといいなあ」

「普通って、あいつの作る服はけっこういいんだぜ？」

そういやまだ秀斗が隊員服着ているところを見たことがないな、と思いつながら勇輝は秀斗についていく。

そしてホールに入ると、癒慰と零華がいた。彼女たちが囲んでいる机の上には段ボール箱が二つ。床にはアタッシュケースが一つ置いてあった。

そして一番目を引くのは、癒慰の服装だ。

制服でも可愛い私服でもない。フリルをあしらった上着は短めで、

太めのベルトを可愛らしく見せている。ショート丈のキュロットから伸びる細い脚に、もこもこのついたブーツ。何かのキャンペーンガールにも見える。

型は弥生と似ているが、弥生のものが動きやすさを追求されているのに対し、癒慰のものは可愛さを追求されていた。

そして、胸元には弥生と同じ紋章が入っている。

「それって隊員服？」

「そうよ。正装は、上に羽織を着るんだけどね」

癒慰は二人を手招きして、小さな段ボール箱を勇輝の前に押しやった。

「匠のところに頼んでた服を取りに行ったら、ついでに渡されたの」

「え、これ全部癒慰が運んだの？」

「まさか、隊員に手伝ってもらったよ。さ、開けてみて」

癒慰がコンコンと叩く段ボール箱には、勇輝君へと書いてある。

名前の隣には「丁寧」にハートまでついている。

「う、うん」

どうか着られるものがありますように、と念じながら勇輝はそれを開けた。

「……………うわぁ」

勇輝は出てきたものを手に取ってまじまじと見る。

「かつこいい」

「な？　いいって言っただろ？」

服の色には明るい茶色とベージュが上手く取り込まれている。弥生も癒慰もこの色を身にまとっていることから、龍牙隊統一のカラーのようだ。

服の型は勇輝の着ている制服に似ている。だが白やこげ茶のラインがそのデザイン性を引き立てた。両胸にはポケットもあり、機能性にも優れている。

「でもこれ、サイズ大丈夫？」

「平気よ。匠製はフリーサイズだから」

「いや、フリーってでかいじゃん」

勇輝は毎回服を買う時に苦労をしている。男もののSは数が少なく、Mでは少し裾が余るのだ。

「大丈夫、伸縮素材だからぴったり合うの」

勇輝は疑わしそくに制服の上着を脱いで、それを着てみた。

「やっぱりブカブ……ええ！」

袖を通した瞬間袖は短くなって勇輝の腕にぴったり合っていた。裾も縮んで体にフィットする。

「す、すごい。なんで？」

「長年の研究の成果らしいですよ」

勇輝はぴつたりサイズに感動し、服一式を段ボールから取り出した。服以外に小物は色々入っている。

「じゃ、俺部屋で着替えてくる」

「いつてらっしゃーい」

と癒慰に送り出されて勇輝が出ていくと、入れ替わりに弥生が入って来た。上機嫌な勇輝の後姿を肩越しに見て、不思議そうな顔をしている。

「弥生ちゃんの分もあるわよ」

「私の？ 私は服を頼んだ覚えはないが」

不審顔の弥生の隣で、癒慰は期待に胸を膨らませて段ボールを開ける。それにも弥生へ、と書いてあり、ハートは二つに増えていた。

四人の目が段ボールの中身に注がれる。

まず出てきたのはコートだ。彼らの羽織をアレンジしたもので、女子のコートには毛皮も使われ、暖かそうだ。それが人数分。勇輝の分もあった。

そしてその次に出てきたのは弥生の隊員服だった。ただ今着てい

るものに比べれば、生地は厚く、色合いも濃い。スリム系のズボンもついていた。

その下に埋もれていたのはタイツ類。ストッキングやレギンスと手当たり次第に投げ込まれたようだ。

弥生はそれらを無言で見続けている。

色とりどりのタイツをどけると、こまごまとしたものが出てきた。その雑然とした物に彼らはしばし無言で、癒慰がそつとその内の一つを手にとった。

「これ、猫耳ね」

「そのようですね」

「……殺す」

物騒な言葉が混ざったが、彼らは黙殺することにした。秀斗も普段なら笑い転げているが、横に立つ弥生の怒気が恐ろしくて笑い声一つあげられない。

「これとか使えんじゃねえの？」

と秀斗が取り出したのはカメラだった。見た目は使い捨てカメラだが……。

「はい、チーズ」

秀斗は勝手に弥生を被写体にしてシャッターを押した。とたんにポンツと音がしてレンズからばよーんとミニグローブが飛び出した。ボスツとそれを受けるのは弥生の頭。



どうやらびっくり箱仕様だったらしいが、笑いを生むはずのおもちゃは災いを呼んでしまった。  
その場がスーッと冷えていく。

「秀……」

「す、すみませんでした！」

秀斗が逃げの態勢を取ろうとした時、ボタンとドアが開いて勇輝が転がるように入ってきた。

（ナイスタイミング！）

秀斗は助かったと、その主を見る。そして、その仕上がりを見て、口をぱかりと開けた。

「全然、違和感ねえ」

「よく似あっていますよ」

「ああ」

「可愛い〜」

制服を常に着ているからか、動きも自然で、隊員の中にもすぐに溶け込めそうだ。癒慰の言葉に少し反応した勇輝だが、今日は流しておくらしい。

「剣ホルダーもついてるし、すっげえ動きやすい」

勇輝の腰には弥生から貰った剣が提げられている。

「弥生の中身は何だったの？」

「……冬服」

弥生は出したものを段ボールにしまって、蓋を閉める。後でじっくり見定め、相応の対価を与えるつもりだ。

「癒慰、渡されたのはこれだけか？」

「ううん、そっちのケースもよ」

と癒慰が指差したのは現金がぎっしり入っただけのケースだ。重量感が溢れている。

弥生はそれを机の上に置き、留め具を外して開けた。

「ふむ……なかなかの出来だ」

ケースの中身は現金ではなく、拳銃が六丁並んでいた。どれも小型である。その一つを手にとって、弾倉を確認する。中には銃弾の代わりにケースが三つ入っていた。その内の二つは液体が入っている。一見水鉄砲のように見えるが。

「拳銃？」

勇輝は驚き半分、興味半分でケースに近づくと、黒光りするそれに、勇輝は唾を飲み込んだ。

「もしかして、こないだ俺が言った奴か？」

秀斗がその一つを手にとり取って、弥生に訊く。  
弥生が本部へ行く前に、射撃場で勇輝が言っていたことを伝えたのだ。

「ああ。勇輝、お前が言っていた麻醉銃だ。説明書きによると、痺れ薬も追加したようだな」

「実現した……」

勇輝はそつとそれを持ち上げる。拳銃は思ったより軽く、ポケットに入れておいても邪魔にならない大きさだ。

「あれ？ オートマなのになんでシリンダーもついてんの？」

スパイものの映画にはまった時、ついでに銃にもはまったので、勇輝は人より銃器に関する知識を持っていた。

勇輝の掌にある拳銃は、弾倉があることからオートマチックタイプなのだが、そこには本来リボルバータイプで銃弾を込めるシリンダーも備わっていたのだ。

「それで液の種類を変えるらしい」

勇輝はカチカチとそれを回していく。シリンダーには窓があり、発射される液体の色が見える。憎い匠の技だ。

「後で鍊魔君にも見せないかね」

鍊魔は現在夢の中。寝不足だと言って、帰るなり自室で寝ている。

「よし、服も届いて、新しい武器も届いたことだし、弥生。ちょっと付き合ってくれよ」

勇輝は勝気な笑みを浮かべて、腰の剣を叩いた。弥生はその意図を解したようで、口角をあげた。

「いいだろう。鍛錬場に行こう」

それを見て秀斗が慌てる。

「ま、待てよ、俺も行く！」

「私は着替えてくるね」

「怪我をしたら、すぐに錬魔君を叩き起こしてくださいね」

女の子二人は闘いには我関せずと、各々の部屋に帰って行った。

鍛錬場は、丸太が数本あるだけの砂地だった。広さはグラウンドの半分ほど、野球がぎりぎり出来る広さだ。

ここで朝、体を動かすのが弥生の日課である。その弥生は中央に立つと、勇輝に向き合った。受けて立つと言わんばかりだ。

「おい、勇輝……考え直せ」

勇輝の横で、秀斗が耳打ちする。絶対守護で守られている秀斗ならともかく、生身の人間が弥生と闘えば、死ぬのは確定事項だ。

「大丈夫」

勇輝は弥生に歩み寄り、毅然と言い放った。

「弥生。俺に剣を教えてください！」

背後で秀斗がガクツとこけそうになった。

「もしもし」

「勇輝。勝負ではないのか？」

心配が大空振りし、気の抜けた秀斗と、期待が外れ、残念そうな弥生だ。

「俺そこまで馬鹿じゃないし、どーせやるならもっと強くなってからじゃないとな」

ぐつと伸びをして、勇輝は剣を抜いた。

「てことでよろしく！」

「……俺帰るわ。弥生、いいか？ 勇輝は人間だからな。手を抜いてやれよ」

秀斗は軽く手を振って屋敷の中に入っていった。  
弥生はふうと息を吐いて、その手に月契を召還した。

「仕方無い。少し付き合ってやる。適当に打ってこい」

弥生は空いている左手で勇輝を誘う。

「え、マジでこれでやるの？ 木刀とかは？」

勇輝は木刀か模擬剣での練習を想定していたのだ。前のくだりは少し格好をつけただけだったのだが……。

「その剣に慣れないでどうする。その重さで剣を振り続けなければいけないからな。そもそも、お前の剣が当たるか」

平然とそう言われ、勇輝は少しへこむ。実力差は自覚しているが、初心者にはもう少し優しくてもいいのではと思う。

「じゃ、お言葉に甘えて」

勇輝は剣を握る手に力を込めて、地面を強く蹴って踏み込んだ。  
振り払った剣は弥生に易々と受けられ、流される。勇輝は続けて二撃、三撃と打ちこんだ。

罅迫り合いに持ち込み、反動をつけて後ろに飛びずさる。その間弥生は値踏みをするように勇輝を見ていた。

「動きは悪くない。次はこちらから行くぞ」

と言うや弥生は一足飛びで勇輝に接近し、斬り上げた。それを自慢の動体視力で捕らえた勇輝は、剣で受け止めた。衝撃に手が痺れ

る。

(見えてても、耐えられなきゃ意味ないか！)

その後の剣の応酬もしのぎ、再び間合いを取る。剣は振るうほどに手に馴染む。

(かゝ、手が痛てえ)

だが負けじと勇輝も斬りかかる。弥生とのやりあいはいはやくザとの戦いの折に経験している。その時に比べれば殺気がない分、やりやすい。

弥生は考えるようなそぶりでも、勇輝の剣を受けている。すばらしい跳躍で勇輝と距離を置くと、

「勇輝。少し素振りをしてみる」

と剣を休めて観察を決め込んだ。

「え、あ、うん」

素振りと言われるとバットを連想するが、すぐにそれを打ち消して一心に剣を振る。剣道とはまた違う、片手での素振り。足が自然と開き、重心が剣とともに移動する。

「勇輝。お前、剣を教わったことがあるのか？」

「え？ ないけど」

「そのわりには慣れた感じだな」

弥生はヤクザ襲来の折に勇輝と剣を交え（勇輝はバットだったが）、やけに鬨いに慣れているという印象を持った。それだけなら不良だということ片がつくが、剣の扱いは別だ。

「そう？ …………… あ、あれかな。俺ちっちゃい頃、よく剣士ごっこしてたんだ」

素振りを止めて首をひねる勇輝は、記憶の中に答えを見つけたようだ。

「剣士ごっこ？」

「うん。母さんが師匠役で俺が弟子。朝から晩まで素振りさせられた。他にも、スパイごっこや、王様ごっこもしたな」

「人間は母親とそうやって遊ぶのか」

「いや、母さんの仕事が劇団員だったから、その役作りも兼ねて」

母親の仕事柄、ことにごっこ遊びに関しては容赦がなかった。一度遊びが始まれば、劇が始まったも同然。終わりが告げられるまでその役でいなくてはならない。

剣士役であれば剣をしごかれ、スパイ役であれば体を鍛えさせられ、王様役では所作の細かいところまで練習させられた。

ごっこ遊びの中で最も回数が多かったのは召使ごっこで、その間は母親が主人、勇輝が召使として家事の手伝いを強要された。勇輝の家事能力はここで磨かれたのだ。

「げきだんいん？」



「えっと、お芝居する人。分かる？」

疑問符を浮かべている弥生に勇輝が説明を加える。言語能力が不自由とは聞いたが、どうやら知っている単語の数が常人よりずいぶん少ないようだ。

「何となくは」

「もし俺が慣れてるって言うんだったら、たぶんそのせいだな」

「ごっこ遊びで使っていた剣は、重さのある小道具だったからだ。

母親は自室に大量に小道具を持っていた。なんでも劇団が小さくて管理しきれないらしい。今でも残っている母親の部屋には様々な民族衣装や、モデルガン、剣のレプリカが散在しているだろう。

「ふむ……母が師か」

弥生は納得したようで、剣を持ち直して大地を蹴った。

「予告ぐらいする…!」

慌てて剣を握り直し、それを受ける。連撃が放たれ、勇輝は剣を立てて顔をそらした。手への衝撃は止まることがない。手の感覚が無くなりそうだが、歯をくいしばってそれに耐える。

「剣の筋を見ておけ、目を離せば……死ぬぞ」

「はい…!」

そうして一時間ほど打ち合い、鍛錬場は汗にまみれてぐったりと地面に座り込む勇輝と、息も乱さず、汗一つかいていない弥生という、圧倒的実力差を表す図となっていた。

勇輝はフーと息を吐いて、額の汗をぬぐうと弥生にニッと笑った。

「ありがと。いい運動になったよ」

「毎日鍛錬を積み」

「了解。ほんと弥生って強いよな、弥生の師匠って誰？　もしかして親が師匠だったりするわけ？」

剣道道場の子どもは強い、それと同じかと考えた勇輝だ。

「師はいない」

「そーなんだ。剣術一家かと思った。弥生の親……」

ってどんな人だった？　と訊こうとしてはっと口をつぐんだ。秀斗に両親のことを訊いた時に『俺たちに親はいない』と言われた。つまり、弥生もということだろう。

「親は……私が殺した」

冷たい、凍てるような声。顔も瞳も、何の感情も映していなかった。

「いや、その、ごめんなさい」

弥生は剣の具現化を解き、勇輝に背中を向けた。今日の稽古は終

わりにするらしい。

「勇輝、私は剣の基礎を教えることはできる。だが、私の剣を教えることはできない。強くなりたければ、他を当たれ」

弥生はそう言い残すと、颯爽と去って行った。

如月最強の弥生に他を当たれと言われた勇輝は、砂漠に一人放り投げられたような気分になった。

(あゝ、機嫌損ねたあ)

勇輝はあゝと呻いて空を仰いだ。弥生と近づけないかと稽古を頼んでみたが、逆に遠くなってしまった。

はあと重い溜息をつく勇輝は、もうしばらく休んでいこうとそよ風を身に受けていた。

背後に忍び寄る影に気づかず……。。

## 第2章の28 手始めに助けてください

息を整えて、体力の回復を待っている、後ろに人の気配を感じた。

勇輝は誰だろうと、肩越しに振り返る。

「勇輝君。お疲れ〜」

「ゆ、癒慰!」

反射的に逃げようとするが、稽古で疲れ切った体は動こうとしない。そして、彼女の服装がもつと危険だと信号を発している。

癒慰は、フリフリの服を着ていた。だが、それだけならいつものことだ。ただ今回着ているのは、俗に言うメイド服である。黒いフリル過多の生地、真白のまたフリル過多のエプロンをつけ、茶色の髪からは、黒い猫耳が出ている。

それらを総称してなんとというかというと、コスプレである。

「な、ど、どうしたんだ?」

ずりずり、と体を引きずって後退する勇輝。

メイドが可愛いなと思うことはあるが、癒慰が着るとなると、意味が変わってくる。ただお帰りなさいませご主人さま、と言うわけがない。

「うふふ。これが、私の趣味。仕事から潜入で変装してたらやみつきになっちゃって」

と微笑む癒慰の後ろで蔓がうねうねと動いている。勇輝は幻影かと目をこするが、何度こすっても、緑色の蔓は癒慰を取り巻くように存在していた。

「勇輝君、汗まみれでしょ。お風呂入って着替えないと」

「いや、大丈夫。ちゃんと、やるから」

身の危険を感じ始めた勇輝は必死で癒慰と距離を取ろうとするが、後の蔓がその存在意義を発揮した。

「捕まえてちょうだい」

癒慰がそう指示すると、蔓は一斉に勇輝に向かって伸び、手に、足に絡まり勇輝は宙に浮いた。

「土の能力じゃないのかよ！」

何とかして逃れようと手足を動かすが、ますます絡まってがんにがらめになってしまう。

「ええそうよ。植物は土が育むの。支配できて当然でしょ？」

と、癒慰は勇輝を連れて屋敷の中に戻っていく。

「やゝめゝろゝ！ はゝなゝせゝゝ！」

どこから出ているのかもわからない蔓に絡まれ、勇輝は簡単に癒慰の部屋に。

「汗を流して来てね」

と、癒慰がひらひらと手を振って勇輝を送り出したのは癒慰の部屋に隣接するお風呂。

大浴場ほど広くはないが、それでも浴槽は普通のサイズの二倍はある。

だが勇輝は蔓に巻きつけられたままで、蔓はひょいひょいと勇輝の服を脱がしていく。

「ぎゃ〜！ 止めて！ 自分でするから止めて！」

抗議するも虚しく、身に付けていたものを全て取られた勇輝は、湯船に投げ入れられた。

運び屋の蔓はそこでお役御免なのか、ひらひらと蔓の先を振ると、浴室から出て行った。

「はあ〜」

と大きなため息をついて、勇輝は湯船の中で足を延ばす。急にお湯に投げ入れられて溺れるかと思ったが、正直疲れていたなのでこの暖かさはありがたい。

じんわりと体の疲れが抜けていく。

勇輝がほっとくつろいでいると、肩をつんつんと触れられた。

癒慰が入って来たのかと、風の立つ勢いで振り返るがそこには人はいず、その視線の先に、鉢植えがあった。そこから蔓が伸びている。

「で、出た〜！ 親玉ああ！」

蔓が勇輝の体に巻き付き、勇輝を引き上げるとイスに座らせた。そしてシャンプーを勇輝の頭にかけて複数の蔓で髪を洗う。

「ちょっと、待って！ 自分でやるって！」

他にも蔓はたくさん出現しており、その内の二本が器用にスポンジと石鹸で泡を立てていた。頭のことではいっぱいの勇輝に体が追加される。

「ぎゃああ！ こそばい！ あはははっ、だめ！ そこダメ！」

じたばたと暴れる勇輝を抑えるために新たに蔓が動員される。

「か、顔は、痛い！ 頭痛い！ 苦しい！ 鼻、息が……」

全身泡まみれになると上からシャワーをかけられた。

（し、しんどい）

シャワーが引っ込むと、次はリンスが振りかけられて、またシャワーを浴びる。

そして、蔓たちによって浴槽に投げ入れられた。

全くリラックスの出来ない入浴に、勇輝はぐったりして、浴槽に浮かんでいた。

（俺、このまま溺れ死ぬかも）

ゆつくり沈み始めたところで、蔓達によって釣り上げられる。勇輝一本釣り。

脱衣所に運ばれると、バスタオルで全身を拭かれ、ドライヤーで髪を乾かされた。

蔓たちは器用に勇輝に下着を穿かせ、上にはキャミソールを……。

「なんでここに俺のパンツがあんだよ！　っーかこれ女もんじゃ！」

髪もすっかり乾き、下着姿の勇輝は蔓に担がれ癒慰の部屋へ。

「嫌だ。離せ！」

「綺麗になった？　これからもっと綺麗になるからね」

と癒慰はうふふと魔性の笑みを浮かべている。

「今日の私の衣装は、御主人さまに恋をするイケナイ猫メイド。勇輝君はね……」

と最後まで聞く間もなく、蔓たちが勇輝に服を着させ始める。

「止めて！　ほんとに止めて！　俺のプライドが、俺の、俺の……」

どんどん勇輝の声からは力が無くなっていき、逆にどんどん勇輝の格好は可愛くなる。

最後に猫耳を頭につければ、可愛い猫メイドの完成だ。

「いや〜ん。やっぱり可愛い〜」

身悶えする癒慰に対し、勇輝はすでに屍になっていた。



蔓達によって鏡が前に持ってこられ、勇輝はその姿を見て泣きたくなった。

そこにいるのは、女の子だった。

猫耳の、メイドちゃん。やや長めの黒髪からは、白い猫耳が出ている。

「俺、もう生きていけない」

同じように無理やり女装させられた中学での文化祭で、勇輝は地獄を見た。

情けなくて目が潤みっぱなしの勇輝を見て、男たちが男と分かっていたながら、（おそらく知らないものもいた）アプローチをしてきたからだ。

襲われそうになって、相手を回し蹴りで撃退したこともあった。

それから、何があっても女装なんかするかと心に決めていたのに……。

「自信を持って。すっごく可愛いから」

ぐつと親指を立てて癒慰は絶賛しているが、それが逆に勇輝を凹ませる。

「いつそ丸刈りなら……」

「無駄よ。かつら付けるから」

夢い望みはすぐに断ち切られた。

「じゃ、行こっか」

癒慰は勇輝の手を引っ張って、部屋から出る。勇輝は呆然自失のあまり、引かれるままに足を動かしていたが、やがて行先がわかって血相を変えた。

「やだ、やだやだ！ 俺行きたくない！」

登校拒否のようなセリフを言って、勇輝は近くのドアノブにしがみついた。

「も〜、諦めが悪いわねえ」

癒慰は再び背後に蔓をうねらせ、勇輝を拘束した。軽々と空中に持ち上げて、ホールへと入る。そこには、事前に癒慰に集められていたらしく、全員が顔をそろえていた。

「あら、癒慰ちゃん。その趣味は勇輝君がいるから慎むのではなかったのですか？」

ホールに入ったのは癒慰だけだ。勇輝は蔓に巻きつかれて廊下で浮いている。

「やめたの。だって、我慢って体に悪いし。勇輝君だって、分かってくれるしね」

「……お前、まさか」

先ほどから勇輝の姿が見えないことを気にしていた秀斗は、すぐに癒慰の笑顔の後ろにある意味を理解した。

「私の友達。勇輝ちゃんです！」

わざとらしい紹介とともに、勇輝はホールの中に担ぎ込まれた。するすると蔓が離れて楽になるが、逆に彼らの視線が絡まってきた。

全員言葉が出なかった。

ひどいとか、可愛そうとか、そういう問題じゃない。似合いすぎた。始めから女の子だったかのように思える。

つやかに光る黒髪に、のぞく白い耳。羞恥に赤く染まる頬が、可愛さに拍車をかけている。ほっそりとした足に、白いタイツはよく似合った。靴も可愛いらしい。

「すごい」

零華も思わず感嘆の声を上げた。

「可愛いじゃねえか」

秀斗も目を皿のようにして見ている。これがにぎやかな不良だとは思えない。

「可愛い」

鍊魔も驚きの表情を浮かべ、称賛を贈った。

弥生はじっと、勇輝のその姿を見ていた。

勇輝は内心絶叫する。

(これから戦う敵にこんな情けない姿を見られてどーすんだ！メ  
ンタル面ですでに負けてるんだけど！)

勇輝の心とプライドはずたばろだ。泣かないのが最後の意地だ。

「勇輝……その姿、私は好きだぞ」

その言葉は勇輝に脳天をハンマーで叩かれたような衝撃を与えた。

「そ、そんな……弥生まで」

勇輝は、灰になった。

その後勇輝は癒慰とともに寝るまでメイドとして生活し、（悲しいことに、メイドとしての所作は母親とのごっこ遊びの中で身についていた）勇輝はその夜、一人枕を濡らしたのだった……。

第2章の28 手始めに助けてください（後書き）

今回は少し短めです。

前話にくつつけるか悩んだのですが、そうするとけっこう長くなるので分割。

テスト一日目がやっと終わりました。

予定では一話で終了するはずだったのにな。あれ？ 三話？

つつい話を盛り込んでしまつくせがでてますね。

さあ、頑張つて春までに次にいくぞ！

## 第2章の29 世間が狭いにもほどがある

テスト二日目。勇輝は事前に秀斗と錬魔の部屋に目覚まし時計をセツトし、全員遅刻せずに登校した。

本日のメニューは生物、政治経済、保健体育だ。

「弥生、負けないからな」

昨日のショックから立ち直った勇輝は、さらに闘志を燃やしていた。

「私も負けるつもりはない」

ろくに授業に出ていない二人が何を言っているのかと、零華は思ったが口には出さない。

「俺も勇輝には負けねえ」

いつの間にか秀斗も参戦していた。しばらくにらみ合っが、秀斗はすぐに頬を緩ませた。

頬が引きつき、笑いだすのを我慢している。

「何が、おかしいのかな？」

勇輝はにこにここと笑いながらも、しっかりと拳を握っている。

「いえ、なんもありません」

口元を押さえながら、笑いを噛み殺している秀斗の脳裏には、昨日のメイド姿の勇輝が浮かんでいた。本人の顔を見ると、自動的にあの姿が思い出されるのだ。

なので、みんな朝から勇輝を見ると顔がにやけるか、微笑を浮かべるという、幸せ気分を満喫していた。不愉快なのは勇輝一人だ。

「お〜い、席につけ〜」

試験監督の先生が来て、不良たちはそれぞれ自分の席に座る。これからは、自分との戦いだ。

仲間内で交換した情報を厳選して、答えを導き出さなくてはいけない。

この日は三時間だけなので、午前中で終わる。

だが、その三時間が曲者で、勇輝は生物お手上げ、政治経済は二ユースの知識で、保健体育は知っている筋肉の名前を書き連ねて乗り切った。

（あ〜、死んだああ）

試験終了とともに、ぐったりと机に突っ伏す勇輝。不良たちもやっと終わったと、帰り支度を始めた。

「早く帰るよ勇輝君。今日は大事な用事があるんだから」

癒慰が急かしに来て、勇輝は歩にじゃ、と手を振ると彼らの後を追った。

（お〜見事に如月の一員になってやがる。すっげえ）

隼の下っ端である歩には、如月に入ろうなど恐れ多くてできない。あの戦闘集団の中に入る気など起きはしない。

特に面識のなかった下っ端にも、如月の強さは轟いていたのだ。

（頑張れ勇輝）

不良の友人は、密かにエールを送るのだった。

この日の午後は、龍牙隊の幹部にして如月の後見人を務める曉美が帰ってくる。

そのため、彼らは空港に迎えに行くことにしたのだ。昼ご飯を済ませた彼らはホールへと集まり始めた。皆それぞれ私服である。

「てつきり、隊員服でいくんだと思ってた」

勇輝はパーカーにジーパン、そしてダウンジャケットを着ている。偉い人を迎えに行くのにこんなにラフな格好でいいのかと疑問に思ってしまう。

「あれで行ったら、警備員につまみだされてしまいます」

そう答える零華はセーターにロングスカート。その上にコートを着ている。お姉さん系のファッションだ。

「そうそう。控えめでいないとね」

だがそう発言した癒慰は、ふわふわとファーがついたコートで隠



されてはいるが、その下はロリータである。本日のイメージは、窓辺に飾られているロール人形だそうだ。

「暁美さんだって、普通の格好してるだろうしな」

秀斗はアンダーシャツに、ズボン。その上にコートを着ただけという薄着だ。

言葉を発せずに時を待つ二人も私服である。

錬魔はロングコートの下に、タートルネックとズボン。全体的に落ち着いた色遣いで、大人っぽい。

勇輝は初めて弥生の私服を見たが、初めて見るせいか、どこかちぐはぐに感じた。

弥生はショート丈のダウンジャケットの下はブイネック、下はシヨートパンツにロングブーツを履いている。

全て弥生の、動きやすさ重視の注文をもとに癒慰が仕立てたものだ。

「そろそろ行きますか」

零華が時計を見て、そう言った。

「どつやって行くんだ？」

勇輝はそう零華に尋ねた。

空港はこの町からずいぶん離れた所にある。

そこに行くには電車に乗るしかないのだが、彼らが交通機関を利用する様子が想像できないのだ。

「心配いりませんよ。先日、秀斗君が下見に行って、空間をつなげてくれましたからすぐに行けます」

つまり、龍牙隊に通じているように、ドアを開ければその向こうは空港ということになっているようだ。

「普通に行けばいいのに」

「無理ですよ。私たちが街を歩くと一歩乱起きますから」

さらりと恐ろしいことを言われ、勇輝は必死の思いで聞き流した。学校がヤクザたちに襲われたことや、自分が保護されたことを考えると嘘だとは思えないからだ。

「じゃ、いつてきまーす」

と癒慰がドアノブをひねって、そのドアを開けた。数あるドアの内の一つを開け、彼らは空港へと入る。後ろを振り向けば、出てきたドアには関係者以外立ち入り禁止のプレートがあった。

(うまいこと出来てるよな)

勇輝はただただ感心するしかない。

「暁美さんが出てくるのはどこだ？」

「どこかに入国ゲートがあるはず……」

彼らは入国ゲートを探して空港をうろつろ歩いた。全員空港を利用したことなどなく、勝手が全くわからない。

「そこまで下見の時にわからなかったのか？」

と錬魔が問えば、

「俺は空間を繋げるだけで精いっぱいだったんだよ」

と秀斗が言い返す。

「あ、あれじゃない？ 人がたくさん出てきてるし」

癒慰が指さす先には人の流れ、そして天井には入国ゲートの看板が吊り下げられている。

「ここで待っていれば見つかりますね」

そうして彼らは入国ゲートの出口付近で待つことにした。

同じようにここで待っている人々は、彼らにちらちら視線を送る。たとえ隊員服を着ずに、普通の格好をしていても、彼らの髪色と顔では目立ってしまったのだ。

暁美が来るまではまだ時間があるようなので、勇輝は彼女について詳しく訊いてみた。

「こついつ時に頼りになるのはやはり零華だ。」

「暁美さんは龍牙隊の幹部の一人です。幹部と言うのは、隊の中でも年長者がなります。」

幹部は主に外国での紛争解決や、時には制裁にも関わりますね。今の日本は内部の抗争は少ないので、私たちのような牙軍よりも数が多いと聞きます」

勇輝はなるほど相槌を打つ。そして重ねて質問した。

「その暁美さんも能力者？」

「いえ、暁美さんは人間です。幹部の中には牙軍から上がった人もいますから、能力者もいますけど」

勇輝は暁美が人間だということに親近感を抱いた。能力者の中で唯一人間というのも、少し寂しかったのだ。

「そっか、どんな人なんだろう」

「会えばわかりますよ」

それもそうだと、勇輝はゲートの向こうに目をやった。どうやら飛行機が到着したようで、人の波がやって来た。

「あ、暁美さん！」

その人ごみに待ち人を発見したのか、癒慰が大声でその名を呼んだ。

「暁美さ〜ん！ こっちです〜！」

その声に、キャリアケースをひいた女性が反応した。サングラスをかけた女性はこちらに向けて手を振っている。

彼女は彼らに近づくとそのサングラスを取って、朗らかに笑った。

「みんな久しぶり！ みんな大きくなったわね〜」

暁美は一人一人の顔を見て、驚いている。

彼女は四十代前半だが、見た目はそれより若く見える。髪はポニテールでまとめてあり、顔だちも整っていて、可愛いと言われる顔だ。

彼らはすぐに駆け寄って暁美を取り囲んだ。その姿は母親に駆け寄る子どもたちのようだった。

「暁美さん、お久しぶりです」

「まあ弥生ちゃん。元気そうで良かったわ」

弥生が最初に声をかけた。その顔は分かるものには分かる、嬉しさが滲んでいた。

彼らも口々に再会の嬉しさを述べる。

勇輝は彼女を見て、若い人だな、とも、意外と普通の人だな、とも思わなかった。いや、思えなかった。ただ、その顔を凝視する。

あ、け、み、その名を口の中で呟く。

その顔は、その背格好は、なぜか自分の記憶の中にあつた。

口の中がカラカラに乾く、足も動かない。

そして、ぽつりと零すように呟いた。

「……………母さん？」

髪を一つに結って、凜々しく立ち、それでいて可愛い顔で笑う。それは、母親その人だった。最初に名前を聞いた時に感じたひつかかりは、それが母親の名前だったことを告げていたのだ。

その呟きが耳に届いたのか、暁美が視線を一番後ろにいた勇輝に向けた。目がぱちりと合う。

彼女は一瞬声を失くすと、勇輝へと真っ直ぐ近づいた。目線の高さはまだ暁美の方が少し高い。二人は互いの顔をじっと見ていた。

「勇輝？ 勇輝じゃない！」

暁美は顔をぱあっと輝かせて勇輝を抱きしめた。ぎゅっと力強く抱きしめられて、不覚にも勇輝は泣きそうになった。

母親と会うのはほぼ十年ぶりだ。

突然の母子再会ドラマに、他のみんなは固まったままだった。

「え、暁美さんって、勇輝君のお母さんだったんですか？」

最初に衝撃から復活したのは零華だった。まだ信じられないと言いたげな顔で、そう尋ねた。

「そうよ。きゃく、こんなところで会えるなんて運命ね！ ちっちゃい頃も可愛かったけど、そのまま大きくなってくれて、母さんは嬉しいわ！」

そして、勇輝も再会の衝撃からゆっくりと立ち直り始めた。

「へ？ 母さんって、劇団員じゃなかったの？」

だが、ここに現れ、彼らに歓迎されているということは、幹部の暁美ということである。

「ああ、あれは嘘よ」

「なんですと！」

さらりと嘘発言に、勇輝は変なツッコミを入れてしまう。

「まだ幼稚園の子どもに、お母さんは裏の組織で働いて、国のもめあいの解決や、悪い国をちよつと懲らしめてるのよ……なんて言える?」

これには勇輝を含め、外野全員が心の中で無理です、と答えた。

「え……じゃあ、母さんの部屋にある劇団関係の小物は?」

「ああ、あれはね、本物よ」

「はっ?」

「さすがに銃に弾丸は入ってないし、剣も刃は潰してあるけど、本物」

暁美はなんのためらいもなく、息子にそう暴露した。

勇輝は小さい頃に遊んでいたものが全て本物だと知って、軽く眩暈を覚える。

(あれ、モデルガンじゃなかったのか……)

人生生きて十七年、不良ではあるが、人と同じように生活をし、普通の人間だと思っていた。だが、現実はそう甘いものではなかったようだ。

シヨックが積み重なって、なんだかその全てが些細なことに思えてくる。

暁美は勇輝を解放して、もう一度上から下まで見る。

「お父さんに任せておくの心配だったけど、ちゃんと生活できてるみたいね」

裕真は父親のことを出されて、両親が離婚した子ども特有の気まぐさを感じた。その上只今家出中だとは、口が裂けても言えない。

「うん、大丈夫」

そう言ってから、けっこうな日数を放置しているが、本当に大丈夫だろうか心配になってくる。

「それで、どうしてここにいるの?」

しごく真つ当な質問である。

「えーっと、俺、如月に入りました」

紆余曲折は全て省いて結果を伝える。

「まあ! さすが私の息子ね!」

(そこは危険なことに首突っ込むなって叱るとこじゃないのか?)

だが母、曉美は息子が隊に入ったのが嬉しくて仕方がないらしく、よくやったと勇輝の肩を叩いて褒めている。

「おかげで楽しい日々を送ってるよ」

「それならいいのよ。じゃあ母さんは隊長に挨拶してくるから、ま



「た後でね」

そして暁美は黙って見守っていた彼らに顔を向け、

「みんなも、迎えに来てくれてありがとうね。勇輝とも仲良くしてくれてるみたいで嬉しいわ。また如月に行くから、おいしいお茶、よろしくね」

とさっぱりとした挨拶を述べると、キャリアケース片手に去って行った。

その後姿を彼らは黙って見送る。

「……びっくりしたわ。暁美さんが勇輝君のお母さんだったなんて」

暁美の姿が見えなくなったところ、癒慰がしみじみとそう言った。

「俺が一番驚いてるよ」

「だろーな」

「……じゃあ、ひとまず帰りますか」

零華の言葉に皆、ゆっくり如月へと続くドアへと歩きだした。

驚きの連続で精神的に疲れた勇輝は、さらなる衝撃と混乱が待っているとは、思いもしなかった……。

暁美はカツカツと靴音を鳴らして龍牙隊の屋敷を歩いていた。向

かう先は隊長室である。

キャリーケースを引く女性に、隊員は視線を向ける。

幹部の詳細は一般隊士にはあまり広まっていない。ゆえに彼女が幹部だと分かる者はいなかった。

隊長室の見張りに、名を告げると、二人とも数拍の間の後姿勢を正し、暁美を迎え入れた。

幹部は日本にいたことが少ないので、めったに会えることはない人たちのだ。

二人の見張りは暁美が扉の向こうに消えた後、手を取りあつて感動に震えていた。

「あ、あの暁美さんだつてよ」

「幹部の暁美さんかああ」

「優しそうな人だつたなあ」

「可愛い方だつたなあ」

歩くだけで好感度があがる暁美であつた。

暁美は隊長室のドアをロックすると、名を告げながら開けた。

「暁美、中東の平定から帰ってきました」

龍牙はいつものように正面の椅子に座り、机の上の書類に判を押していた。

その書類から目を離して、穏やかに笑った。

「お帰り暁美、御苦労さまだったね。君の帰還を心から歓迎するよ」

龍牙は心の底からそう思っているようだった。

「隊長もお変りなく」

「君には、彼らの後見を再び頼む」

「承知いたしました。ところで、隊長が私の息子を如月に入れてくれたのですか？」

「……君の息子？」

龍牙は暁美の言葉をつなぎ合わせて、この間挨拶に来た人間のことを思い出した。

「勇輝君のことかい？」

「あら？ ご存じなかったんですか？ てっきり隊長の配慮かと思っただけですけど」

「そうか……息子がいたと聞いていたが……彼か」

そう言われれば、愛らしい顔立ちが似ていなくもない。

「ええ、しかるべき歳になれば、ここに入れようと思ってたんです」

龍牙は、それはやめた方がよかったのではないかと思ったが、隊長という立場上それは言えない。

「しかし、君の息子なら、危険は減るだろう」

龍牙はまだ、そうか、彼が……と感慨深げに呟いていた。

「では私はこれで失礼します」

「ああ、如月を頼んだよ」

「はい」

暁美は綺麗なお辞儀をして、隊長室を出て行った。

勇輝は如月に着くなり、荷物をまとめて家に帰った。

猛烈に父親のことが心配になったからである。早足で家へと帰り、玄関を開ける。

案の定鍵はかかっていなかった。

勇輝の父親は休みが平日となることも多く、カレンダーによると今日は休みの日だったはずだ。

玄関を開けて、一步家の中に入ると、勇輝は意識を手放しそうになった。なんとか踏みとどまって目をカッと開く。

「なんじゃこりゃ〜！」

ついつい変なツツコミになるのも仕方がない。だが、その言葉がふさわしいほど、家の中は荒れ放題だった。

出迎えてくれたのは大量のゴミ袋。しかもかなり異臭がする。

(クソ親父め、ゴミ出しさぼった上に、生ゴミも全部ぐっちゃにしてやがんな！)

父親はごみの日も分別すらわからない家事音痴なのだ。

リビングもひどかった。床は新聞やチラシで埋め尽くされ、机の上にはコンビニ弁当の残骸が散乱している。

(よかった、ちゃんと飯は食ってたみたいだな)

そしてキッチンを覗くとここもまたひどかった。流し台にはこれでもかと積み上げられた皿とコップ。そこにお弁当のゴミがも混ざって反乱を起こしている。

勇輝の心配は、この燦々たる状況を見て、怒りへと変わった。

(あんのクソ親父、家をこんな状態にしゃがって……片づけんの誰だと思っただけ！)

勇輝は階段を駆け上がり、父親の自室のドアを開けた。

「親父！ ……あれ？」

しかし、そこはいたって綺麗で、勇輝が出て行った時のまんまである。

(親父、ここでは生活してなかったのか……てことは、下？)

勇輝は階段を駆け下りてリビングに直行する。

「親父！ どこに居やがる！」

とその時、ゴミの山ががさつと動いた。

それは、丁度ソファアがあつた辺りのはずだ。

勇輝はソファアを埋め尽くしている雑誌やごみ袋を放り投げて、人の姿を発見した。

「親父！」

「……ん？ 勇輝か？ 帰つて来たか……」

眠たそうに眼をこすりながら父親は起床した。そして自分の周りを埋め尽くしているゴミたちを見て、ん？ と首をかしげた。

「おかしいな。昨日はちゃんと積み上げてから寝たはずなのだが……」

「大ボケが！ 寝てる間に雪崩が起きたんだよ！ もうどーでもいから、風呂に行つてこい！」

と父親を強引に立たせて、風呂場へと押しやった。本当に仕事に行つていたかすら怪しまれる。

そして父親を追い払った後、その惨状をもう一度見渡して、勇輝は頬を引くつかせた。

「ちよつと家出しただけでこれかよ」

勇輝が取るべき行動は一つ。大掃除である。

まずゴミは全て分別して、圧縮してからひとまず裏に運んでおく。明日は可燃ゴミの日だから大抵のものを出すことができる。

新聞はまとめて古紙回収用の箱に入れ、コップや皿を洗い、掃除機をかける。

ゴミにまぎれていた大量の洗濯物は全て洗濯機に入れて回した。

(ク〜ソ〜お〜や〜じ〜！)

と怒りを込めて動きまくったら、ものの一時間で全て元通りになった。

ふっと、満足気に一息をつく勇輝は立派な主夫である。

そして冷蔵庫を開け、晩ご飯の献立を考える。てつきり空っぽかと思えば、中は出て行った時と変わっていない。料理など作るはずがなかった。

(賞味期限ヤバイよな……今日は炒め物だな)

献立をたてると、勇輝は部屋の隅に放り出されたリュックを持って自分の部屋に入った。

リュックの中の服をたんすにしまって、またリビングへと下りる。そこではさっぱりした父親がテレビを見ていた。

勇輝は父親の背中を見ながら、母親のことを言うべきかどうかについて考えていた。

(教えたほうがいいんだろうけど、泣かれると面倒だし……。でも、まだ愛してるとか言ってるし……。会いたいとか、言いだすよな) 複雑な息子の心境である。

(つーか、親父は母さんの仕事について知ってたんだろうか)

実は勇輝もバイトを始めたことは言ったが、詳細については伏せたままにしてある。

父親に向かって裏の組織でちよこつと暗殺したり、偉い人を守ったりしてます……などとは言えない。

（どーしたらいいんだろ）

勇輝がしばらく悶々と思い悩んでいると、玄関の扉が開いた音がした。

勇輝はその音を耳にするが、空耳だろうと思いなおす。まさか堂々不法侵入する人間はいないだろう。

が、何か嫌な予感がした。急速に、先ほど母親とあった時の会話が勇輝の頭に蘇る。

“また後でね”

玄関では人の気配がしている。ガラガラと何かを引っ張っているようだ。

（まさか、まさか……）

勇輝は玄関からリビングへと出るドアを凝視した。父親はテレビの音でか、全く気付いていない。

「たっただいま」

陽気な声と共に、暁美がリビングへ入って来た。その手には先程のキャリアケースが……。

（離婚した母親が来たあああ！）



勇輝は内心絶叫して父親に目を向けた。父親はぽかんと口を開けて暁美を凝視している。

(さ、最悪のタイミングだ)

勇輝は頭を押さえて、頭痛をやり過ごす。

これで明日から父親を慰めるという面倒なオプシオンが付いてくる。

「あ、暁美か？」

父親は立ち上がって、目を見開き、口をパクパクとさせていた。

「他の誰に見えんのよ」

「よ、良かった。生きてたんだな！」

と父親は暁美に駆け寄って力強く抱きしめた。

「修二、ただいま」

修二とは父親の名前である。父親は涙を流して良かった、良かったと何度も繰り返した。

(これが離婚した夫婦の会話か?)

勇輝は開いた口が塞がらず、ただただその光景を見ていた。

(い、意味わかんねえ)

やがて勇輝の存在に気がついた暁美が、恥ずかしそうにそっと父親から離れた。

「……離婚したんじゃないの？」

勇輝の消え入りそうな問いに、暁美は首をかしげ、父親はあつと声を上げた。

「それ、嘘」

すまん、と軽く手を上げて父親はそう言った。笑顔までついている。

「なんですと！」

「え、ちょっと、離婚って何？」

暁美が父親に詰め寄ると、父親はあははと目を逸らした。

「いや、母さんが中東に行く時、けっこう危ない任務って言ったんだろ？ それで、勇輝を悲しませることのないように……離婚したことにしました」

話が進むにつれ、暁美の目はつり上がり、それと比例して父親の声は萎んでいく。

「マジ……ですか？」

「だって、母さんが死ぬかもしれないなんて、言えないだろ？」

(返せ！ 俺の涙を返せ！)

勇輝は母の日に、母親を恋しく思っただけ涙を流した。置いて行かれたことが悲しくて、一人枕を濡らした夜もあった。

父親は号泣していたが……。

(それが、全部嘘だってえ？)

勇輝は怒りのあまりに震えていた。この場に母親がいなければ、速攻で殴りに行っただろう。

「勝手なこと言わないの！」

暁美はがくがくと父親を揺らす。目を回す父親は、それでも幸せそうだった。

「いや〜。無事戻ってきたんだからいいじゃないか」

「良くねえよ！ やっぱ俺、この家出ていくからな！」

捨て台詞を吐くと、勇輝は階段を駆け上った。

(絶対許すもんか、あのクソ親父！)

勇輝は、今度はより大きなリュックを取り出して服を入れていく。テストが返ってこれば、すぐに冬休みである。勇輝は、冬休みは如月で過ごそうと決めた。

(俺の生活、最近めちゃくちゃ……)

勇輝は、ぱたりとベッドに倒れ込んだ。そしてそのまま眠りに落ちた。勇輝は、ご飯を呼びに来た母親に起こされるといって、感動を味わったのだった。

## 第2章の30 テスト返しだ！

朝、母親にいつてらしゃーいと送り出された勇輝は、心を弾ませながら学校へと向かった。

少しこそばゆいが、母親が戻ってきたのである。

家事の手伝いはするが、勇輝の負担は軽減した。よって、何時もよりもだいたい早い登校となる。

暁美は幹部だが隊で働く必要はなく、必要に応じて呼び出される。国内での幹部の仕事は国家レベルに及び、その数はそう多くない。それ以外はすることがないのだ。

勇輝は鼻歌を歌いだしそうなほど上機嫌で教室に入る。

今日はテストが返ってくる日だ。勇輝はこの日をテストの嵐デーと呼んでいる。

お前たち（不良）にテストの解説などなんの薬にもならん、と通常授業時間が半分にされ、一日で全ての教科が返ってくるのだ。

（絶対負けない）

勇輝は歩の隣の席にかばんを置いて、口元に笑みを浮かべた。

テストのほとんどの問題が記号問題。

不良に記述をさせたら全員卒業など出来んわ！ という先生たちのありがたい配慮である。

（俺、運いいからな）

どうやら勇輝は実力で勝とうとは、思っていないようだった。ボ

ロボロのテストの時の神頼み、コロコロ用鉛筆は苦楽を共にした相棒である。

「……勇輝、気持ち悪い」

隣の席に座っていた歩が、おぞましいものを見るような目で勇輝を見ていた。

「勝者の笑みだ」

「意味分かんねえよ。……そういや、お前のとこ、幹部が戻ってきたんだって？」

さすがスパイ。情報が早い。

勇輝は椅子に横座りして、歩と向かい合う。

「あ〜うん。帰って来た……俺の母さんが」

「は？ 母さん？」

歩は目を見開いて、口も開けている。

「いいね〜その顔。そう、母さん。ついでに離婚話も嘘だった」

「……びっくりだな」

「だろ」

朝目覚めて、昨日のことが全て夢だったらどうしようかと不安になった勇輝だった。それはおいしそうな飯の匂いですぐに解消さ

れたが……。

「そっか、じゃあ組織で困ることはねえんだな。良かったじゃねえか」

「……おつ、組織で思いだした。俺誰かに訊こうと思ってたことがあつたんだ」

突然の思い出したが、勇輝には多いことなので歩は特に驚かない。

「なんだ？ 先輩として何でも答えてやるよ」

ニツと笑って先輩面になった歩に、ノツた勇輝は、

「お願いします、先輩」

と軽くお辞儀をした。

ふんぞり返った歩は、うむ、苦しゅうない、とでも言いたそうだ。

「俺、本部の廊下を歩いた時、牙軍がくんってという言葉聞いたんだけど、それは何？」

弥生に向けてささやかれた言葉だ。

「あゝ。牙軍ってのは、能力者達の総称。強さによって階級を与えられるんだ。牙軍の人たちは羽織がもらえるんだぜ」

勇輝は弥生が来ていた羽織を思い出した。癒慰は来ていなかったが、簡略したのだろう。

「へへ。その人たちのこと教えて」

「そうだな……じゃあ一番上から。夜一星よいつせいの美月さん」

「女の人？」

「いや、今回は男だ」

勇輝は歩の説明にふんふん、と相槌を打つ。

「鎌堂れんどう二の綾霸さん」

「その人、会ったことある」

勇輝は勝気で魅惑的な女性を思い出した。マシユマロのようなあの感触まで思い出して、勇輝は慌てて頭を振る。これを思い出してはいけない。

「マジ？ やるな……で、吟三ぎんざんしゃ鉦は欠番。その次が死堅牢しけんろうの弥生やゆいたちになる」

「数字が入ると分かりやすいな」

「本当は十まであるけど、欠番も多いし、そもそも死堅牢とは関係を持たないだろうからカット」

歩はバサリと手ぶりも付けて、カットした。

「後は、俺のいる黎冥れいめいの鷺さぎさん。それと裏技術研究所の匠たくみさんかな。匠さんは人間だけど」



「……匠さんにも、会った」

強烈な個性、もとい変態の匠を思い出して、乾いた笑いを浮かべる勇輝だ。

会ってきたメンバーを並べると、鷺が一番まともに見えてくる。

「てことは牙軍のほとんどのメンバーに会ってんじゃん」

そもそも如月だけで牙軍の大半をしめているのだ。

「そーなるね」

牙軍の危険度はよく承知しているので、できるならばもう会いたくないと願う勇輝だった。

(……これだけ会っというて、あの人がいないなんて。……怖いな)

歩はふと疑問に思うが、考えるのを止めた。

彼に刷り込まれた恐怖はなかなか消えない。あの笑顔の下が怖い。

(どうか、勇輝が危険に会いませんように)

そう願っただけだった。

他にも二三、気になることを訊いていると、如月のみなさんが登校し、チャイムがなった。

怒涛のテスト返しの始まりである。

紙切れ一枚に一喜一憂し、互いに点数を見せ合う不良たち。

勇輝も一枚一枚にリアクションを取りながら、赤点のスリルを楽

しんでいた。

そしてテストの嵐が過ぎ去って、現在勇輝は如月にいる。

ホールには弥生と秀斗と勇輝が一つのテーブルを囲んで立っていた。互いに緊張感を漂わせている。

勇輝は全員に点数の競い合いを提案したが、鍊魔はくだらんと一蹴し、零華はみなさんを落ち込ませたくないのと回避し、癒慰は秘密だよ、と着がえに行った。

「よし、行くぞ」

ルールは簡単。受けた順にテストを出していき、その合計点を競うというものである。

「まず、世界史」

勇輝の言葉を合図に、三人が答案を机の上に出す。

「俺、四十二。弥生、四十五。負けか。秀斗四十一」

「みなさん同じくらいですね」

審判役を押し付けられた零華が感想を述べた。彼女がそれらの倍以上の点数を取っているのは言うまでもない。

「次、数学……俺、五十一。弥生、五十。俺の勝ちだな。秀斗、三十二、赤点ギリギリ」

零華がそれぞれの得点を足してくれている。

その横で、弥生は点数は高い方がよいのか、と呟いていた。テストを知らない弥生にとって、点数は数字でしかなかったようだ。

「英語……俺、三十五。弥生、四十。負けた……秀斗、三十六。うわ、秀斗にも負けてる」

「おい、俺だけなんかなげやりじゃねえか？」

勇輝は秀斗には勝てると思ったのに、とぶつぶつ呟いた。少し勇輝のプライドが傷ついた。

「次、化学。俺、三十。弥生……百？」

勇輝はもう一度弥生の答案に目を通す。丸しかない答案の上には、百の数字と花丸がある。

「弥生ちゃんは、昔化学を教わってましたからね」

ショックに打ちひしがれる勇輝の隣で、零華が頷いている。当然の結果ということだ。

「俺、五十二ね」

さりげなく秀斗が主張するが、あっさり勇輝は無視する。

「くそつ、次国語！。俺、七十九！ どうだ！」

勇輝は昔から国語だけが得意だった。作文には自信がある。

「弥生、十八、十八？」

勇輝は先ほどの落差に驚く。弥生の言語能力の未熟さが、ここにも表れていた。見事に赤点である。

「よっしゃ〜！ 勝ってる！ あ、秀斗は五十四か」

満足気に勇輝は言って、二日目のテストに移った。

「生物、俺五十三。弥生、五十二。秀斗、六十……。次、政経。俺六十。弥生、五十二。秀斗、五十二」

勇輝は俺の勝ち、とガッツポーズを作って、テストは最後の保健だ。

「保健。俺……二十三。弥生、六十五。秀斗……三十七。俺、赤点」

筋肉は総外れ、記号も見事に外していた。

以上、とても優秀とは言えないテストの公開は終了した。

「え〜っと、では合計を発表します」

三人は、零華の計算結果をじっと待つ。運命の瞬間である。

「一位、三百七十点。弥生ちゃん」

「マジかよ！ 負けたの俺!？」

「ふん、当たり前だな」

勇輝は化学のせいかと頭を抱えた。百点取るなんて想定外だったのだ。

「二位、三百十三点。勇輝君」

「げっ、俺勇輝に負けたのか!？」

秀斗は勇輝には勝てる自信があったらしい。

「はい。秀斗君は三百四点です……が、みなさん？ 八科目あって半分にも満たないとは、何事ですか？ しかも皆さん赤点が一つずつありますね？」

零華の視線と言葉が痛い。三人はすつと視線を逸らせた。

「ちゃんと授業にできればもっと良い点が取れるのです。それを貴方達はさぼりにさぼって、一体高校生をなんだと思っているのです？  
そもそも貴方達は……」

優等生、零華のお説教はその後一時間続いた……。

勝負一本目、勇輝の負け。

## 第2章の30 テスト返しだ！（後書き）

今回は少し短め。

### 神名の設定公開

本文中でカットされた五番以下の名称です。

- 5 五鎗斬ごしやうざん
- 6 六迅穹むしんく
- 7 七幻刀しちげんとう
- 8 鳳八兜ほうやとう
- 9 鎧九浪がいくろう
- 10 渾十盾こんとうじゆん

考えたけど、使われなかった階級です。

では、また〜。

## 第2章の31 冬休み、それは熱き勝負だ！

翌日、勇輝達の科（不良科）の生徒は、通常の終業式に出られるとつるさい、との苦情から一足早い終業式を終え、冬休みとなった。勇輝はリュックと共に再び如月に戻って来ている。勇輝は曉美にみんなによろしくと気軽に送り出され、慣れ親しんできた部屋に荷物を下ろした。

「こういつのを、世間では出戻りと言っそうですね」

「楽しい冬休みじゃねえか」

「別にいいじゃん……」

勇輝はアンティークなタンスに着替えを入れていく。二人が適当なタンスを運んできてくれたのだ。零華は能力に頼っていたが……。

「ん？ その袋はなんだ？」

秀斗が指さすのは、角ばった手提げかばんだ。明らかに服ではなさそうだ。

「あゝ、それはゲーム。俺の勝負道具」

と勇輝がその袋から中身を出した。それはゲーム機であった。テレビに繋がば時間などいくらでも潰せる。

ただし、テレビに繋がばである。

「勇輝君。ここにテレビはありませんよ？」

博学な零華はそれの使い方も知っていた。

しかし、中世の雰囲気は漂う如月に、テレビのような科学はない。

「なんてこった！ 俺の部屋を持ってこればよかった！」

さすがに如月にも電気は通っているので、持ってこれば出来なくはないが。

「コンセントを作らなければいけませんね」

「そうだな。電圧も下げねえと」

「……ここ、電気どうしてんの？」

ランプもあるが、シャンデリアもあり、豆電球もある如月なので、電気は通っているらしいが、異空間に発電所は無い。

「それはあれ、魔術で電気を起こして、流してる」

水と炎と星の力を混ぜ合わせて、電気を作っている。一種の落雷である。

「へ」

「……そうだな。うん、そうしよう」

魔術すげえと驚いている勇輝を見て、何やら頷いた秀斗は、部屋の暖炉へと近づいた。



「お前、いちいちテントからくるの面倒だろ。だからお前の部屋と繋いでやるよ」

各部屋に備え付けてある暖炉は、人がかがめば入れる大きさだ。秀斗は手掛かりを見つけると、それを引いた。壁が現れ、それを押すと回転して隣の部屋に出られるしかけになっている。

「うわ、忍者屋敷みたい」

「二こと、お前の部屋とを繋げっから」

秀斗が空間に手を向けると、片方の手で額のヘアバンドを取った。その下から面の広い金環が現れ、ほのかに輝きを見せる。

「星鏡<sup>せいがい</sup>、空間を編みし者よ。この者との繋がりを構築せよ」

その輝きに魅せられている勇輝の頭を、秀とはガシツと掴んだ。

「お前の部屋を思い浮かべろ」

「……お、オツケー」

勇輝は戸惑いつつ目を瞑って、自分の部屋を思い浮かべる。

ベッドに机、テレビがあって、タンスにクローゼット（物置）。なかなか快適な部屋である。

「よし、出来た」

その声に勇輝が目を開けると、目の前には見慣れた風景。自分のベッドが見えていた。

「お。すげえ」

勇輝が入ってみると、出たところはクローゼットだった。物があつたところがぽっかりと穴が空いている。

「向うの部屋を思い浮かべながら、開けると発動するようになってる」

秀斗が勇輝の部屋を覗きこみながら言った。

キョロキョロ見まわし、現代の男の部屋が珍しいようだ。

勇輝は小さなテレビを抱えると、如月の部屋に戻った。

「楽だな」

「すげえだろ」

得意そつにそう言う秀斗は、すでにヘアバンドをつけていた。

「秀斗がヘアバンド着けてるのって、それを隠すため？」

「いや？ これは出し入れ可能。ただ、額になんかねえと落ち着かないんだ」

勇輝はなるほど納得した。ただのファッションではなかったよ  
うだ。

「後で適当な台を探しましょうか」

床に置かれたテレビを見て、零華がそう提案した。テレビが不憫

だ。

「そうしよ。後、零華には俺の打倒弥生作戦に協力してほしいんだ」

「いいですよ」

「じゃあ、これ考えといて」

と手渡したのは一枚の紙。

秀斗が覗こうとするが、勇輝に止められた。

「秘密」。秀斗は弥生と通じてそうだしな」

「どーの意味だよそれ」

抗議する声も無視して、勇輝は低く笑う。

その悪者のような笑い方に秀斗が一步退いた。

「この冬休みの間に、弥生に勝って俺を認めさせてやる」

ふふふふと笑う勇輝の後ろに悪魔が見えたのは、二人の幻覚ではなかっただろう。

「とこういうことで、まず射撃で勝負してくる！」

と弾丸よろしく勇輝は部屋から出て行った。

「……弥生の射撃の腕ってさあ」

「ええ、暗殺者顔負け……でしたね」

勇輝は弥生を誘って射撃場にいた。

弥生は勝負を快諾し、各々銃を選んでいる。

勇輝はリボルバーを選択し、シリンダーに銃弾を込める手つきも慣れたものだ。

勇輝はひっそりと練習を重ね、的を外さなくなっていた。

的は祭りの射撃屋にあるものを選択。等間隔に区切られ、中央に近づくほど点数が高い。

「じゃ、五発勝負で」

「かまわん。先に撃て」

と弥生に促され、立ち位置に立つ。ヘッドフォンをつけ、鼓膜を守る。匠からの荷物の中に入っていたものだ。

「では、お言葉に甘えて」

勇輝は深呼吸をして集中力を高める。足を片幅に開き、銃をしっかりと両手で固定して、的を見据えた。

バン、バンツと五回銃声が響いた。

衝撃をしっかりと足で受け、最後はふっと銃口の煙を吹いて、西部劇を気取ってみた。脳内では敵が倒れている。

勇輝が的に近づき、銃痕を確認すると弾は全体的に当たっており、中央の赤い円にも入っていた。

周囲の点数を見て計算する。

「百二十点」

自分の結果を報告し、的を新しく変える。

弥生は同じリボルバータイプを選択し、すでに装填していた。

「早くどけ」

銃口を勇輝に向け、脅しをかける。

勇輝は手を上げ、弥生の後まで走った。

（迫力半端ねえ）

弥生は片手で銃を構え、連射した。

五回の銃声が響き、弥生は薬きょうを捨てた。

（かっこいゝって、見とれてる場合じゃないって）

勇輝は的まで走り、

「え？」

ともう一度弥生を見て、的を見た。

五回銃声は聞こえたが、的の穴は一つだ。

「言っとくが、全て当たっているからな」

勇輝がそつと的を外すと、壁には一本につながった五発の銃弾が刺さっていた。

「マジ……で？」

勇輝は、弥生は剣しか使わないと思っていた。だからこの勝負を持ちかけたのだ。剣を愛する弥生が銃に浮気などしているはずがないと、信じて……。

「有りえないって！ 弥生には月契があるじゃん！」

「誰が、私が剣だけと言った」

勇輝はするいするいとわめきたてる。

「なら、もう一度するか？」

弥生が弾を込めながらそう挑発する。

「望むところだ！」

その後六回勝負をしたが、全て弥生はまん中一点を打ちぬぎ、完封勝利を収めたのだった……。

勝負二本目、勇輝の負け。

「ありえねえ」

勇輝は厨房の机に突っ伏して愚痴をこぼしていた。

「なんだよあれ。弥生は剣だけを愛せばいいんだ」

「まあ……あいつは武器の扱い上手いから」

「不公平だ」

慰めるのは秀斗。癒慰は本日の夕食を作っている。今晚はカレーのようだ。

「……料理、で勝負するか」

ぐつぐつと煮立っている鍋を見ながら、勇輝は思案顔だ。

「ふうん、いいんじゃない？ 弥生ちゃん味音痴だし」

癒慰はカレーの味身をして、一つ頷くと火を消した。最新式のコンロで、火は錬魔が提供しているらしい。

古い屋敷だが、厨房だけが最新式なのは、癒慰の好みであろう。

「やっぱここは玉ねぎのみじん切り勝負だよな」

顎に手を当て、目をキラリ輝かせてキメる勇輝に、

「なぜに？」

とつつこんだ勇輝の脳内回路が理解できない秀斗だ。

「料理は味もさることながら、技術もいる。みじん切り、これこそお約束じゃん。しかも玉ねぎ、あの涙との戦い！ 熱いバトルだと思わない？」

突如熱くなつて語り出す勇輝に、秀斗は目を白黒させて頷く。

「それに俺はそこまで外道じゃないし、少しはハンデも上げたいじやん。味音痴なら、技術で勝負だ！ それでも俺は勝つけどな」

家事歴十二年を舐めんなど、勇輝は息を巻いて己を鼓舞している。

「その方が、こちら嬉しいわ。弥生ちゃんに味付けされたら悲惨なことになるもの」

「……だな」

「そんなにひどい？」

癒慰が野菜を洗う手を止めて頷いた。

「以前カレーを作ってもらった時は、見た目はおいしそうなんだけど、なぜかリンゴの味しかなかったのよね」

「あいつ、どんな育ち方したのか知らねえけど、甘味以外の味覚を理解できないらしいんだ」

「そもそも知らないのよね」

勇輝は、それはもう病気に近いのではと思うが、口には出さない。

「じゃあ、果物以外には全く食べないんだ」

「ええ。あ、でも……昔、一度だけ緑豆のスープを作ってほしいって言われたわね」



「みどりまめ？ リヨクトウではなく？ …… 緑豆もやし？」

「ううん、緑色の豆で作られたスープだったらいいんだけど、どの豆を使っても、それとは違ったようなの」

癒慰は試行錯誤の日々を思い出して、軽く溜息をついた。あの頃は本気で弥生の心配をしたが、今はもう放置に限る。

「料理人としては、挑戦してみたいよな」

「ううん、と唸って何かを考え始めた勇輝だが、しばらく立つと考え疲れたのか再び机に突っ伏した。

その一部始終を見ている秀斗は、ほんと飽きない奴だな、と観察を決め込んでいた。

珍獣と言うと失礼だが、彼ら魔術師にとって人間は異種であり、その中でも勇輝は特に異種だった。

しかも可愛いので、珍獣でもパンダの扱いだ。

（ここまで俺たちに馴染む人間もすげえよな。 暁美さんの教育のおかげか？）

つい手慰みに勇輝の頭をつんつんと突いて遊ぶ。勇輝は嫌がることもなく、ううと唸り声を上げていた。まだ何か考えているらしい。

「そっだ！」

と勇輝はがばつと頭を上げ、秀斗の手に頭突きを喰らわせた。

「痛っ」

「知らないんなら、教えればいいんだ！」

「突然すぎんだよお前は！」

思い立ったが吉日、即断即決が売りの勇輝である。

「俺、弥生を更生する！」

不良が、人間ではない問題児を更生すると言いだした。

「はあ？」

秀斗の腹の底から発せられた、喧嘩前のいちやもん並みの訊き返しも、勇輝は無視して決意を高々に宣言する。

「弥生の常識が欠けてるんなら、俺が教えればいいんだ。俺、常識人だからな！」

「まずてめえが更生しやがれ！」

「秀斗がその髪黒に染めたらな！」

荒い口調で言われれば、そのまま返してしまうのが不良、もとい春日勇輝だ。

「俺のは地毛だ！ 逆に不良なら俺のように金髪にしやがれ！」

勇輝の髪色は黒。不良要素は主に喧嘩歴とサボリ歴だけである。

「は？ やだね。んな面倒なこと誰がするか！」

「……何をそんなに熱くなってるの？」

横から冷や水を浴びせたのはサラダを作り終えた癒慰だ。呆れた顔で二人を見ている。

「……知らない」

「んなもん知るかよ」

「あっそう。もういいから、みんなを呼んで来て」

ワゴンに皿と鍋を置いて、癒慰は夕食の準備を終わらせた。

「弥生の分も少しでいいからよそっというて、呼んでくるから」

「え、でも弥生ちゃんは」

「だ、か、ら、教えるって言ったじゃん」

ニタリといたずらっ子の笑みを見せ、勇輝は厨房を出て行った。秀斗も他の二人を呼びに出ていく。

（ほんとに、何をするかわからない子ね〜）

癒慰はわんぱくな子どもを持つ母親の気分で、ワゴンを食堂まで押して行った。

そして食堂では、如月が全員集まるといって、記念撮影ものの光景が広がることとなった。

長机には三脚ずつ向かい合う形で置かれている。

弥生は端に座り、その前にはもちろん勇輝が座った。

彼女のお皿だけ周りより小さく、お子様用なのは、勇輝の言うハズらしい。

「それで？ 私をここに連れて来てどうするつもりだ。何で勝負すると？」

勝負という一言だけで連れてこられたらしく、目の前のカレーやスプーンを怪訝そうな目で見ている。

「カレー食べ勝負」

ここで、全員がネーミングセンスが無い！ と心の中でつつこんだことを、勇輝は知らない。

「私は食べない」

「だから勝負だって。俺はこれを食べれる。弥生は俺より優れてるんだろ？ じゃあ食べれて当然じゃない、違う？」

こういう言葉を屁理屈やごり押しと言うのだが、弥生の辞書にこれらの言葉と対処法は載っていない。

「当たり前だ」

と云ってから、弥生はもう一度皿の中身に目を落とした。

弥生の記憶にそれはある。ずいぶん昔に作ったが、それ以後なぜか料理当番がこなくなったのだ。

(リンゴの味がしておいしかったのだが)

二人の勝負を他の四人はひっそりと見守る。

勇輝の狙いが勝負ではなく、更生にあるのは分かっているが、弥生の荒れを知っている彼らは心配で仕方がなかった。

「時間は無制限。弥生が食べ切れたら弥生の勝ち、残したら俺の勝ち。オツケー？」

「わかった。勝負を断るのは武人の名折れ、この勝負受けて立つ」

弥生は硬い顔で銀のスプーンを握った。

ほんの少しの量をスプーンに乗せる。それを全員が固唾を飲んで見守った。

弥生はしばらくスプーンの先と睨みあっていたが、意を決したのか、それとそっと口に入れた。

恐る恐る咀嚼し、視線を勇輝に向ける。目は戦いの目で、激戦を物語っていた。

辛口、お口の中は銃撃戦である。

「……まずい」

なんとか飲み込み、弥生はすぐに水を飲む。

「口が痛い。ヒリヒリする……毒か？」

「違っつて、それはまずいんじゃない。辛いって言うんだ」

「……辛い？」

勇輝も一口カレーを口に運ぶ。香辛料のいい香りが鼻に抜け、辛味が後を追ってやってくる。喉を下つても、舌の上は爆心地だ。

「これがカレーのおいしさ」

「果物が欲しい」

「全部食べれたら」

勇輝はとどめの言葉を口にして、おいしそうにカレーを口に運ぶ。弥生は勇輝が平気な顔で、一口二口と食べ進めるのを見て、自分もとカレーを一すくいした。

言わずもがな、負けず嫌いである。

「すごい。弥生ちゃんがカレー食べてるわ」

「歴史に残る日になりましたね」

「うまく乗せやがった」

「……明日はやりが降るな」

見守り部隊は静かな、未知の勝負の火蓋が切って落とされたことを見届けると、自分たちの食事を始めた。

「この辛さがいいんだ。カレーは甘口なんてふざけたことを言っちゃダメだ。甘党である俺でさえ、カレーは辛口を食べるんだ。ま

あ、卵でごまかすぐらいなら見逃してやるけどな」

カレーを食べながら、勇輝はカレーの持論を語り始めた。弥生は黙々とカレーを口に運び、水を飲み、聞いているのか分からない。

(痛い。いや、辛いというのか。これは、拷問に使えるな)

口の中が火山地帯の弥生は、味わったことのない刺激に、無表情の下で苦戦していた。

だが白旗を上げるわけにもいかない。

「ごちそうさま。あゝおいしかった」

わざとらしいセリフを口にして、勇輝は完食する。サラダもきれいに食べてある。

一方弥生はやっと半分を食べ終えたところだ。

「遅いなあ弥生。まあ時間はゆっくりあるけど。……よし、じゃあ俺リンゴ食べよ」

と勇輝はデザートとして置かれていたうさぎリンゴを一つ掴んで尻尾からかじった。

無残、うさぎは真っ二つである。

「ん〜、おいし〜」

誰が見ても、嫌な奴だ。

これ見よがしに食べる勇輝に、弥生の意識もこのカレーをどうしてくれようか、から、この勇輝をどうしてくれようか、に変わり始めた。

怒りの力に後押され、弥生は二倍の速さで食べ進める。水を飲む回数も減った。

勇輝がうさぎリンゴをじわじわと食べている間に弥生は完食し、スプーンを机に置いた。

そして勇輝からリンゴの皿を奪うと、うさぎリンゴを掴んで、頭から口に入れた。

容赦なし。

「皮も食べられるもんな」

と勇輝がその皿に手を伸ばそうとすると、バシッと弥生に手をはたかれた。

「お前には絶対やらない！」

皿を抱くように持って一人リンゴを食べる弥生。その姿は全員が笑いを我慢しなければならぬほど、可愛らしかった。

魔術師四人にしてみれば、カレーを完食しただけで、頭を撫でまわしてあげたいのだ。

「けち！」

唇を突き出して不満そうな顔をするが、内心勇輝は嬉しくて仕方がない。

偏食、拒食、絶食の弥生がカレーを食べた。

計画どおりである。

「ふん。これで勝負は私の勝ちだな」

全てのうさぎを狩り終えた弥生は誇らしげにそう言った。



「まだ。おいしかった、ごちそうさま。まで言わないと勝ちじゃないから」

もう一押し、勇輝は更生をしかける。

「何、だと？ ……おいしかった。ごちそうさま。 ……これで勝ちだ！ 私は帰る！」

そう吐き捨て、弥生は足音荒く食堂から出て行った。

勇輝はドアが閉まると、よっしゃと拳を天に振り上げた。

「一つ更せ〜い！ よし、明日もやる」

ふふふと低く笑う勇輝を遠巻きにして、四人は小声で言いあう。

「まだ信じられねえ、あの弥生がカレーを食べたぜ……」

「これで、嵐が来なければ最高ですね」

幸い弥生から幽かに怒気はあれども、殺気は無かった。勝敗を重んじて、八当たりは止めていたきたい。

「物怖じをしないとは思っていたが、ここまでとはな」

「これ本当に更生出来んじゃねえの？」

「うふふ、じゃあ私も見習って、勇輝君を更生（調教）しちゃお」

癒慰の危険な言葉に、秀斗は勇輝逃げるよ〜と念を送っておいた。

調教されたらされたで可愛いから別にいいのだが……。

「明日から勝負づけだ！」

意気込む勇輝を肴に、彼らもつさぎ狩りを始めたのだった……。

勝負三本目、勇輝の負け。

裏勝負、勇輝の勝ち。

## 第2章の31 冬休み、それは熱き勝負だ！（後書き）

内容が小学生っぽい。勝負のレベルが低い。

でも、彼らはそんな感じでいつか、と気にしない作者。

作者はやつと、勇輝がつつこみに属するものということがわかりました。

秀斗につっこまれることもあるけど。

ポケはその他の人々。ネタやうけ狙いのポケはなく、あくまで自分たちの価値観に基づく真剣な意見です。おや？ この小説コメディーだよな？

二章も、あと三話で終るはずなんだが、容赦なく長くなる気が…。

まだ、後一つ爆弾が残っているので……。

では、また次回。

## 第2章の32 涙の逃走

記念すべき弥生の完食が終わり、嵐も来ることなく如月は朝を迎えた。

勇輝はすっかり朝の習慣となった剣の素振りを鍛錬場でやっていた。弥生は超早起きなので既に終わらせ姿はない。

ほどよく汗をかいたら朝風呂に入ってさっぱりといい気持ちだ。

そして朝食を食べるとさっそく勝負だと弥生の部屋を訪ねる。学習したのもう返事無しにドアを開くことはしない。はっきり名前を告げるようになった。

「弥生、勇輝だけど勝負しよう」

弥生、あそぼーのノリでドアを叩くと、弥生が顔を出した。その顔にはまたか、とはっきり書いてある。

「今日は厨房で料理対決だ！」

「わかった」

あっさり了承した弥生は、勇輝につれられて部屋を出たのだった。

というこで厨房。

広い厨房の真ん中に机が置かれ、まな板が二つ並んでいる。その上には包丁も置いてあった。それらの隣にはざるに入った玉ねぎが五個。

「で？　これで何を？」

「玉ねぎのみじん切り対決」

そのセットを見て首を傾げる弥生に、当然だと胸を張って勇輝が答える。答えになっていない答えに進行役及び審判である零華が説明をする。

「ざるの中には皮を剥いた玉ねぎが五個入っています。その上と根の部分以外をみじん切りにしてください。早く終わらせたほうの勝ちです」

「みじん切り？」

と料理素人の弥生に、勇輝はやれやれと言わんばかりに余っている玉ねぎをまな板に置き、包丁を握った。

「見てて」

そこから勇輝のわかりやすいみじん切り講座が始まった。包丁の持ち方、手の添え方から教え、みじん切りを披露した。

「なるほど。わかった」

弥生はふむと頷いて包丁を手を取った。持ちやすい場所を確認するように何度も持つ位置を変える。

その様子を見て、普段は剣を持つ弥生が包丁を持つととたんに女の子らしくなるなど、勇輝は少し頬を緩めた。エプロン姿も似合うだろうと妄想しかけたところで、雑念を振り払う。今は勝負に集中

しなくてはならない。

「では、用意始め！」

零華の合図で二人は玉ねぎに手を伸ばしまな板に置いた。

玉ねぎの根の部分の部分を切り、縦に半分にする。無数の線を入れて後はひたすらに包丁を動かす。

弥生は慣れない手つきで根を切り取り、二つにした。力を入れすぎてまな板がガコツと嫌な音をたてる。

「弥生頑張れ！」

観客席から秀斗が声援を送る。そこには癒慰と錬魔もあり、対決を見守っていた。ようするに皆暇なのだ。

「勇輝君早い！」

癒慰はいけいけくと勇輝を応援していた。

弥生が玉ねぎに線を入れている頃、勇輝は二つ目の玉ねぎに手を伸ばしていた。勇輝は刻んでいくスピードが尋常じゃない。まな板からは小刻みに音が聞こえてくる。

「おりゃあああ！」

その顔には鬼気迫るものがあり、弥生が一個目を終えたころには四つ目に入ろうとしていた。

勇輝はちらりと弥生の状況を盗み見て、内心高笑いをする。

(あゝはっは！ どうだ！ この俺の美技！)

弥生は目にも留まらぬ速さで玉ねぎの原型を失わせていく勇輝を見て、舌打ちをした。

「つまりは、この状態になればいいのだから？」

と弥生は二個目の玉ねぎを取り、それを空中に放り投げた。続けて残りも空中へと送り出す。

勇輝は突如舞い上がった玉ねぎに視線を奪われた。

「気の毒だな」

錬魔の呟きは、誰に向けたものだったのか……。

弥生は四つの獲物に狙いを澄ますと、包丁を縦横無尽に振るった。その速さに包丁はその姿を視界に見せることはなく、銀の軌跡だけが残る。そして玉ねぎはその形を失い、まな板には非食部と、大量の玉ねぎのみじん切りが出現した。

最後の仕上げと、弥生は包丁についた玉ねぎを振り払った。その所作は剣そのものである。

「どうだ。私の方が早かっただろ」

そう問われても、呆然自失の勇輝は何も答えられない。

勇輝のざるに残る一つの玉ねぎが、悲しそうに勇輝を見ていた。確かにみじん切りではあるが、みじん切りとはその工程も含めてみじん切りなのであって、空中のあれをみじん切りとは……と頭の中はうるさいほどに言葉を並べているが、何一つ口からはでなかった。

「えっと、勝者弥生ちゃん」

零華はこれでいいの？ とためらいがちに勝者宣言を出した。あまりにも勇輝が可哀想だ。

その勇輝は負けという事実には打ちのめされた。そこに玉ねぎのあの現象が追い打ちをかける。

ツンと鼻から眼へと刺激臭が突き抜け、目がしらが熱くなってきた。泣いてたまるかと勇輝は息を止めるが、

「だが、これほどの腕前なら勇輝はいい嫁になるな」

と弥生が言葉で止めをさした。

勇輝の手からカランと包丁が滑り落ち、厨房に虚しい乾いた音が響いた。

「弥生のバカアアア！」

主人公、涙の逃走。涙を零しながら走り去った勇輝を、可愛いと思ってしまったのは癒慰だけではなかっただろう。

「少しは手加減して負けてあげたらいいのに」

「何故？ 手加減などしては勝負ではない。それに、負けてしまえば終わってしまうのではないか」

これはいい退屈しのぎだからな、と弥生は無表情で、それでいて少し楽しそうな声で言った。

「ほんと、気の毒ね」

癒慰がしみじみと同情する。



勝負四本目、勇輝の負け。プライドにキズあり。

一日中部屋に引きこもり自暴自棄になった勇輝は、夕方癒慰ととも  
もに立った厨房で、憂さ晴らしと言わんばかりに野菜を渾身の力で  
みじん切りにしていった。

本日の献立は野菜たっぷりのスープとなりそうだった……。

## 第2章の32 涙の逃走（後書き）

いろいろ訳ありで短め。

初めてプロットを失敗した。なんてこった。最終二話で順番を入れ替えるはめになりました。しかも二話で終わらないことが決定してますし。

これについては次回、もしくは次々回くらいに詳しく。

次回は一度、休戦して新たな敵と戦います。

宣伝

出張神の名の下にを短編で載せました。内輪の企画作品です。

弥生ちゃんが闘いにいつてます。レアな弥生が見れるので興味のある方はどうぞ足をお運びください。

## 第2章の33 俺は男だ！ 男なのに……

そして数日が経過し、その間にも勇輝は様々な競技で弥生に挑んでいた。

勝負五本目、百メートル走。

運悪く三日月により、勇輝の完封負け。

勝負六本目、釣り。

両者ゼロ匹につき引き分け。暇つぶしに参加していた錬魔、五匹と圧勝。

勝負七本目、コーディネイト対決。

数多ある服の中から自身をコーディネイトしてそのセンスを競うものという癒慰の発案。

勇輝、身の危険を察知し棄権。

と、全ての勝負で負けを喫している勇輝である。なかなか勝てない勇輝は広間のソファーに座ってぼーっとしている。

広間には秀斗と癒慰がいて、放心している勇輝をそっと見ていた。勇輝が抜けがらになっているのには理由がある。

勇輝は今日も午前中、弥生に勝負を挑んでいた。

得意な格闘ゲームだ。勇輝はこのゲームに関しては四天王の一角をしめていると自負していた。勇輝は裏必殺技を編み出していたからだ。

それに引き換え弥生はゲームすら知らない。

説明書を読み、コマンドとボタンを確認して少し動かしたぐらいだ。

ボタンに合わせてキャラが動くたびにすごいと驚いていた。無表情ではあるが……。

だが試合が開始された直後、弥生のキャラが消えた。

勇輝は最初は少し様子を見てから、などと余裕を見せていたが、いつの間にか後ろに回られ、コンボを決められる。

三発パンチを入れられ、蹴りあげられ宙に浮かばそこからはいたぶるかのように連続で殴る蹴るの大盤振るまいだ。裏必殺技をしのごく、超必殺二十連撃のすえ、勇輝のキャラは即KOとなった。

今のは油断したと再度試合をしてみても、結果は同じだった。カウンターを決められて連撃でやられる。

勇輝はもう、自分がわからなくなっていた。

（俺、ゲームですらかなわいなんで、何？ 俺の今までの人生って、何？）

ズドンとブラックホールを背負う勇輝を秀斗はなんとか励まそうとするが、秀斗は結局弥生の味方じゃん、と拗ねられた。

癒慰も励まそうと可愛い服を着て気を紛らそうとしたが、選択がまずかった。チャイナドレスは格闘ゲームを思い出させたのである。

「はぁ……俺、なんでこんなに弱いんだろう」

いや、弥生が強すぎるんだ、と二人は思ったが、ますます勇輝が落ち込みそうなので口にはしなかった。

「勝負に負けて落ち込むとは女々しいな」

後ろから不意打ちに投げられた言葉が勇輝の傷をえぐった。この落ち込みの張本人、弥生がいつのまにか後ろにいたのだ。

「弥生……もうちょっと優しくしてやれよ」

これにはさすがに秀斗も勇輝の肩を持つ。

「ふん。人間が私に勝とうなど百年早い」

弥生は容赦なく勇輝を叩き斬ると、勇輝の向かいのソファアに座った。厭味かと言いたくなる。

「いいもん。とっておきで勝つから」

と勇輝はソファアの上で三角座りをして、いじけモード突入だ。

秀斗はやれやれとソファアに寝転がる。四人が四角に並べられたソファアを一つずつ占拠していた。

くすん、と勇輝の周りに涙の妖精が出現し始め、秀斗はくかーと寝始めた。どこでも数秒で眠りにつける人間というのはいるものである。

(俺は弱い、か弱い子よ)

勇輝が悲しい自分のための独唱をしていると、秀斗がガバツと跳ね起きた。

勇輝は何事かと心の中のリサイタルを中止する。

「誰か来やがった!」

秀斗は一つのドアをジツと覗む。如月は秀斗が張った障壁で守られ、侵入したものがいれば察知できるのだ。弥生もその手に月契を召還し、いつでも敵と対せるようにする。

「て、敵襲？」

勇輝はソファアの背もたれを掴み、皆が見つめるドアに注目した。空気が張りつめ、ドアが開くのを待つ。

ほどなくそのドアは開かれ、

「いやゝ。みんな久しぶり」

と、にこにこ顔の男が片手を上げて入ってきたのだった。

「げっ、美月！」

秀斗が顔をひきつらせて叫んだ。弥生もそれが敵ではないとわかると、月契をしまう。

「きゃっ、美月さんだわ。かつこいい」

一人癒慰だけが好意的な反応を見せた。

「え？ 癒慰はこうというのがタイプなの？」

勇輝は、入ってきた人物をまじまじと見た。

まず目を引くのは首筋にかかるほどの青色の髪と青色の目。そして彼が歩くたびに翻る羽織。下に着ているのは詰襟で、ズボンを着ている。

「おや。そこにいるのが春日勇輝だね。写真でみるより可愛い男じゃないか」

彼はつかつかと大股で勇輝に近づき、につこりと笑った。

とつさに立ち上がった勇輝は、その眩しい笑顔に顔を背けたくない。彼はかっこいいというよりはむしろ、美しい。その形容詞が似合う男だったのだ。

「初めまして、僕は夜一星聖祈のリーダー、美月だ。よろしく」

勇輝は差し出された手を握り、今牙軍のトップと握手してるよ、と感動していた。

「弥生も、元気そうでありより。僕としては一番に会いに来てくれなかったことが不満だけだね」

弥生は不機嫌そうな表情を浮かべ、美月とは視線を合わそうとしない。

美月はやれやれと肩をすくめ、まだ握っていた勇輝の手をぐいっと引き寄せた。

「勇輝。弥生に冷たくあしらわれてはいないかい？」

「へ？」

「てめえ美月！ 馴れ馴れしいんだよ、勇輝の手を離しやがれ！」

秀斗は目を開いて美月に噛みついた。おそらく彼が夜一星でなかったら、殴りかかっていただろう。

「ほら、野蛮だ。勇輝？ こんなところにいるので僕のところにおいで、絶対満足させるから」

美月は妖艶にウインクをした。底知れない恐怖が勇輝を駆け巡る。

「えっと、美月さん？」

「そんな潤んだ目で僕を見上げないでくれ。どうにかなくなってしまいそうだな。はあ、可愛い」

目が潤んでいたのは先ほど気分が落ちていたせいだった。

勇輝は禁句に彼の顎に拳を突き上げてしまいそうになったが、彼は彼らの大先輩だ。立てなくてはいけない。

「目はあくびでちょっと……」

「勇輝。君は可愛い、僕のタイプなんだ。ねえ、僕のところにおいでよ」

「勇輝は俺たちの仲間だ！」

秀斗が勇輝の手を引いて美月と離そうとしたが、美月は勇輝を自分へと引き寄せて肩に手を置いた。

「まったくうるさい奴だ」

美月はハアとおおげさに溜息をつくとき、くるりと勇輝を回転させて自分と向き合わせた。

「勇輝」

じっと見つめられて勇輝はつい、はいつと姿勢を正して返事をし



てしまう。

「僕は初めて君を見た時から君を求めてやまない。僕は、君を好きなんだ。僕と一緒に来てくれるかい？」

キラキラと光が刺すような美顔で言われたセリフを、勇輝は理解するのに数秒を要した。

「はあああいいいいいい？」

それが告白だと気付くやいなや、絶叫が響きわたる。

「きゃああ！ 美月さんが勇輝君に迫ってるわあ！」

癒慰は祈るように手を組んで、身を震わせた。

「癒慰！ 憧れの人が少年に愛を語ってるんだよ！ ここは引き裂いて！ ぜひ引き裂いて！」

「いい男が可愛い少年に迫る。きゃああ！ なんて、なんて胸がときめくシチュエーションなの！」

癒慰は頬を赤くして期待の眼差しを二人に送っている。秀斗は怒りで顔を赤くして目をぎらつかせている。弥生は我関せずと涼しい顔をしていた。

「待って、待ってください美月さん！ 俺は男です！」

必至に手を振って、そして胸を叩いて男アピールをするが、美月に頬を艶めかしくなぞられて動きを止める。

「わかってるよ。僕、男が好きだから」

ズドーンと頭上に雷が落ちる。勇輝は事の重大さを理解した。

（これは冗談やからかいじゃない！マジだ！）

勇輝が慌てて身をひねって美月から離れようとするが、肩に手を置かれて手をつないでいるだけなのに体はびくともしない。

「勇輝」

弥生が勇輝の名を呼んだ。もしや助けしてくれるのかと期待に目を輝かせて弥生を見る。

「美月は気に入くわん奴だが、悪い奴ではないぞ」

あろうことが美月のフォローを入れてきた。

「弥生、そこ違ああう！」

美月は勇輝の顎に手をかけ、上を向かせると空いている手で勇輝の髪を弄んだ。

「まず手始めに口づけでも」

「ぎいやああああ！」

秀斗が必死に勇輝を掴もうと手を伸ばすが、足が動かないようで全く届かない。美月が足止めをしているらしい。

壮絶美形が目前に迫り、勇輝はもう終わったと思った。さよなら、俺、そう思った時ドアが荒々しく開かれた。

「美月さん！ いらしたんですか？」

彼女らしからぬ素振りが入ってきたのは零華だ。走って来たのか、少々息が乱れている。

美月は、零華の姿を見ると、あと数センチで唇が重なるところで止め、勇輝を解放した。

勇輝は魂が抜けてその場に崩れ落ちる。

「零華、久し振り。愛してるよ。」

美月はすぐに零華に歩み寄り、両手を広げて抱擁しようとするが、あっさり避けられる。

「毎日僕のところに来てくれればいいのに。恋しくてついっ  
い来てしまったよ。」

（切り替えはえええ！）

秀斗は死人と化している勇輝の背を撫でながら、美月の変わり身の早さに舌を巻いた。

「早く帰って下さい。貴方のせいですでに犠牲者が出ているじゃない  
りませんか。」

「零華、君はいつ見ても美しい。さあ、僕と愛を語り合おうじゃない  
か。」

「嫌です」

微笑みを浮かべつつも、口から飛び出る言葉は峻烈だ。

「なるほど、皆がいる場所では恥ずかしくて素直になれないんだね。よしわかった、二人つきりになろう」

美月は零華の手を取り、連れ去りを決めた。

「美月、後で話があるからそれが終われば私のところに来い」

弥生は勇輝の撃沈や、零華の拉致はどうでもいいのか、用件を伝えると二人に背を向けて出て行った。

「わかったよ。ただちょっと遅くなるかもしれないけどね」

美月は意味深な言葉を残し、ドアを開けて出て行った。零華も大人しくその手を握り返し、付いていく。否、美月の手に爪を立てながら……。

「ほう。美月さん素敵」

癒慰はきらきらと乙女オーラを出しながら一部始終を見守っていた。強引な美月の行動も、恋愛フィルターを通してみると、美しい愛に見えるらしい。

「癒慰……あいつだけは止めとけ」

秀斗は灰となって散っていきそうな勇輝を介抱しながら、そっと首を振る。

当代美月は歴代の中でも危ないと評判だ。

伝統的に誓祈のリーダーは代々美月という名を襲名する。彼は初めて男性で、奇行の数々は底知れず。沈めた敵も、落とした女も数知れない。

龍牙が頭を抱える、弥生と並ぶ問題児なのだ。

だが秀斗の忠告も上の空の癒慰は、イケメンと目をハートにしていたのだった……。

そして零華の手を引く美月は、適当なところでドアを開けた。そこは本棚が立ち並び、書庫のようだ。

「いい場所だ。逢い引きにはぴったりだね」

「そうですね。誰もいないので、心おきなくいたぶれます」

零華は美月の手を振り払うと、すっと笑みを引つ込めた。

「さて、美月さん。一体ここに何をしに？ 貴方にしては遅い登場でしたが」

彼の性格なら、昂乱を倒し、勇輝の存在が裏の社会に明るみになった時点で乗り込んできそうである。

「寂しくさせてすまなかつたね」

「いえ、全く」

「実は昂乱の一件が終わった頃から任務がやたら入ってね、とどめ

に海外出張まで入ってこんなに遅くなったんだ」

「ずっと海外にいらしたらよかったのに」

おそらくは隊長の配慮だろうと零華は思う。「ごたごたしている間に来られていたら、一悶着あつたかもしれない。

「ふう。零華の愛情表現はいつも胸に刺さるよ」

互いに笑みを浮かべているが、美月の後ろには柔らかな春の日差しがあるのに対し、零華の後ろには北極の風が吹きわたっていた。

「あら。言葉に込められた嫌いを理解してもらえないのですか？死んでください」

美月は零華の厭味を綺麗に聞き流し、ふっと笑みを蠟燭の火を消すように消した。お遊びはお終いということだ。

「さてと、僕が見たところ弥生は特に異常があるようにも見えなかったが、問題はないかい？」

美月の顔は先ほどのへらへらした軽いものではない。返答次第ではこの手で、と告げている。

「美月さんが心配するようなことは何もありません。弥生ちゃんは私たちの仲間です。むしろ状態は良くなっています」

零華はキツと美月を見上げ、口調も強くなった。

「……みたいだね。神経質なところもましになったらしいし。前の

彼女なら即行で僕に斬りかかってきただろうね。相手を確認するようになったのはよいことだ」

美月は弥生と少年を思い浮かべた。彼がいることで如月の殺伐とした空気が和らいでいた。以前はもっと刺々しい空気が流れていたのだが。

「見守らせてもらうよ。君の言葉に免じてね。だが、彼女が隊長に不利益となる行動を取った場合、僕はためらわずに彼女を殺す。隊長に害をなす奴は、許せないからね」

そう言った美月の目は、強い光を帯びていた。言動や正確に難があっても、彼が夜一星を任せられたのは、誰よりも強い隊長への忠誠心故だ。

「わかっています。ですが、貴方の手を煩わせるようなことはありません」

二人はしばし互いの瞳を見続けた。その中にある言葉を読み取るうとするかのように。

やがて、美月がクスクスと笑いだした。

「零華がこんなに人のことを思いやってくれて僕は嬉しいよ。その愛情の一部でも僕にくれればいいのに」

「お断りします。お話が以上ならば私は下がらせてもらいます」

零華は踵を返して、ドアから出ていこうとした。だが、手がドアノブに触れるよりも早く、美月に手を引っ張られて後ろから抱きすくめられる。

「美月さん！」

零華は体をひねって抜けだそうともがくが、ますます強く抱きしめられる。抵抗するだけ無駄なことを悟った零華はひとまず抵抗をやめ、抵抗手段を力から口に移した。

「セクハラで訴えます」

「僕は夜一星だよ？ どっちが強いのかなあ」

「ではパワハラも付け加えさせていただきます」

美月はぐつと零華を抱く腕に力を込めた。その顔が苦しげに歪む。悲しみのように、寂しさのように、切なさのようだった。

「零華……限界だ。もう一度僕の所に戻って来てくれないか？」

「何を？ 私がお世話になったのは先代です。あなたには関係ありません」

「僕はその先代から君を頼まれたんだ。それに、藍色の髪は人間では現れることはない。これほど興味がそそられるものはないよ。君の全てを知りたいんだ」

美月は愛しそうに零華の長い髪を掬った。さらりと指の間を滑り落ちる髪は、絹糸のようだった。

「青色が珍しいのであれば、御自分の髪を調べられたらよろしいのでは？ きつとおもしろいことがわかりますよ」



美月はこれはやられた、とおかしそうに笑った。

「それに、先ほど勇輝君を口説いておられたようですが？」

「ああ、あれは大丈夫。半分しか本気じゃないから」

零華は次彼が来たら勇輝君は強制退避させようと心に決めた。零華は美月の絡みには慣れていているが、免疫のない勇輝が立ち直るには少々時間があるだろう。

「僕なら君を守れる。それに、君の願いを叶えられる」

美月は零華の耳もとで囁いた。甘い響きを含むそれは、女の子たちを震撼させるが、零華はますます表情を無くしていった。

「私の願い？ 美月さんが私の前に現れないことです」

「隠さなくてもいい。僕は知っている。君のことも、彼らのことも」

「そういえば。貴方の能力は人の過去を勝手に覗き見するという、プライバシーの侵害で訴えられるようなものでしたね」

その青色の眼は人物の過去を映し、その情報で相手の動揺を誘い、勝利を収める。それが美月の得意とする戦法だった。

その他にも空間を操る能力を持っていたり、素手で綾覇を圧倒出来たりと、その実力は謎が多い。

「ふっ、褒めないでくれ」

「あら、褒める？　くすっ、幸せな方ですね」

「だから、もし君が僕のことを話したら……分かってるよね」

美月の物腰は柔らかいが、その内容は脅し以外の何物でもない。

「どうぞご安心ください。私たちは気安く他人のことを口にはいたしませんので」

「ほんと、君たちは秘密主義だよね。もっと語りあえばいいのに。同じ同胞なのだから」

「……美月さん。それ以上その口を開くと、私は貴方に私の全ての力をぶつけてしまうかもしれません」

零華の顔には一切の表情はない。絶対零度の怒り。零華の声は怒りに震えていた。秘密主義、それは正しい。だがそれは、互いに分かっているからだ。他人に踏み込めば、自分が傷つくことを。そして、怖れているからだ。

「怖れるのかい？　闇を」

零華の目がかつと見開かれた。少し緩んでいた美月の腕をすり抜け、彼の頬を平手打ちする。

「それ以上、私たちを愚弄すると承知いたしませんよ！」

零華の髪が、群青色へと変化した。色合いが深く、濃くなっている。所々黒も混じっていた。

「零華、くくつ、それが怒りか。いい顔だ。いつものとりすました顔よりずっといい」

美月は赤くなつた頬に手を添え、相好を崩す。  
零華がその手に氷の刃を出そうとした時、後のドアが開いた。入ってきた人物を見て、一瞬で髪色が藍色へと戻る。

「あ？ 美月さん？ 逢い引きだったか」

鍊魔はたいして気にすることもなく、二人の脇を通り過ぎると、本棚から資料を掴みだした。ここの書庫は主に薬草関係のものが集められている。おそらく研究に必要な本を取りに来たのだろう。

「違います！」

零華が激しく否定するが、鍊魔はそうだろうな、とだけ呟いてこの部屋を後にしようとした。その進路に美月が回り込む。

「君も、僕のこと教えたら、後悔することになるからね」

鍊魔は無言で美月を見返す。

「君の目、いい色してるから」

鍊魔の眉がぴくりと動いた。

「なるほど。それで零華が動揺したと……。俺もお前のことについて他言するつもりはない。だからとつと出ていけ」

鍊魔の口調には有無を言わさないものがあつた。弱身を握り、握

られている。二人は視線の上げけで駆け引きをしていた。

「……はあ。もう少し零華と愛を紡ぎたかったんだけど。また今度にするよ」

美月は零華にウイंकを送ると、手をひらひらと振ってその部屋を後にした。今回は退くと決めたらしい。

彼がいなくなった部屋に、静寂が降りる。

「……零華」

静かに激昂しているであろう仲間に、鍊魔はそろっと声をかけた。今変な所を刺激すると、怒りの矛先がこちらに向かってくる。

「クスクス。次、会ったら私は、きっと、大変な過ちを犯してしま  
う気がします。ふふふ、鍊魔君。記憶を消す薬って、ありませんか  
？」

「……善処する」

不気味な笑みを残して目の前を通り過ぎて行った同胞を、彼は見  
送ると溜息をついた。

（美月さんも気の毒に。いや、自業自得、か）

美月は如月で一番恐ろしい人物を怒らせたのだ。自分がまいた種  
ではあるが……。

そして、只今好感度がだだ下がりの美月は弥生の部屋を探していた。覇動を察知することもできるので方角は分かるが、屋敷が入り組んでいるのでなかなかそこに辿りつけないのだ。

壁を壊した方が早いか、と考え始めた時、人が廊下の脇筋から出てきた。

「勇輝」

美月を見た勇輝の顔は、まさしく天敵にあった小動物の顔だった。会釈して逃げようとしたところを捕獲される。

「そんな態度をとられると傷つくんだけど？」

ぐいつと肩を抱きよせ、一緒に歩く。

（うわああ。俺食われる）

勇輝は逃げることも叶わず、体をびくつかせながら歩いた。

「大丈夫。僕は優しいから、そんなにおびえないですよ」

（信用できません！）

そう言って騙すのが詐欺の手口だとテレビで聞いたことのある勇輝はどうしてこの場を切り抜けるかを考えていた。

（このまま連れていかれたらどうしよう。俺、もっここに帰ってこれないとか……）

気分は身売りされる少女である。

「勇輝」

「はい！」

「弥生の部屋はどこだい？」

勇輝は問われた内容がまともなことに心底安心した。

「はい、じゃあ俺が案内します！」

勇輝はこの人少しはまともなところもある、とほっとして美月を先導した。弥生の部屋に着くまでの間、相変わらず勧誘と名付けられた愛の告白は続けられたのだが……。

美月はここです、と勇輝に指されたドアを開いた。

背後でノック！ と勇輝が叫んだがもう遅い。一本のナイフがドアを隙間から、向いの壁に突き刺さった。美月は勇輝を振り返って、甘い声でささやく。

「手厳しいね。勇輝、次は君を攫うから。その時は僕が腕によりをかけて君を少女にするからね」

美月は覚えていて、と優しく微笑みかけるが、その眼は本気だった。

美月がドアの向こうに消えたと同時に、勇輝はその場から走り去った。

（怖い！ マジで怖い！ 俺は男でいたああい！）

今回で勇輝の中で美月がトラウマとなってしまうのは、言うまでもないだろう。

一方弥生の部屋では、突然緊迫した戦闘シーンが展開されていた。対峙する二人。弥生の手には拳銃が握られ、まっすぐ美月に向けられている。

美月はおもしろそうにその銃を見ていた。命が危ないなど、考えていないようだ。

何故こうなったのか。遡っても何も無い。美月が入った時には、弥生は銃を構えて待っていたのである。

「やっぱり神経質なところは治ってないね」

「黙れ、撃つぞ」

弥生が引き金に指をかけた。

「みんな怒りっぱいね。カルシウム足りてる？」

気にせず一歩踏み出した美月に、弥生はためらいもせず引き金を引いた。

パンと乾いた銃声が響いて、銃口からは弾丸ではなく、紙テープが飛び出した。火薬の臭いが部屋に充満する。

「うわっ、びっくりした。よく出来たおもちゃだね」

美月はおくと手を叩く。

「白々しい。分かっていたから何もしなかったんだろ？」

「何が？」

弥生は拳銃を美月に放り投げた。

「それはお前が仕込んだんだろ？ 歩を通じて勇輝に渡した。何が目的だ」

拳銃を受け取った美月は、その状態を確認するように全体を見て、ポケットにしまった。

「あはは、バレた？ つい、手を出したくなってさ」

「仲間に手をだせば、わかっているな」

「死を、だろ？ 君たちの、唯一の決めごとだ」

「そうだ」

美月は肩をすくめて、降参とでも言うように手を挙げた。

「わかったから。今回は君たちの顔を見ただけで帰ることにするよ」

「二度と来るな」

弥生の言い草に、ひどいなと額に手を当て嘆いてみるが、暖簾に腕押しである。

「まあ、今回のことは隊長にも報告しとくから、近々会いに行くよ



うに。というより、牙軍会議に来るように」

びしっと指されて指導を受けるが、弥生は美月の言うことに従う気はさらさらしない。さらには、牙軍会議という耳慣れない言葉に首を傾げていた。

「では、僕はこれで帰るとするか」

「快く送ってやろう」

二人はホールへと向かう間、終始無言だった。話題がないというよりは、迂闊に話せば戦闘に発展するので互いに自粛したのだ。どうせやり合うなら広い所でやりたい。それが双方の思いだった……。

ホールには勇輝以外の全員集まっていた。

彼らは美月を見送ろうと、否、彼が本当に帰ったかを見届けるために集まっていたのだ。

「見送り御苦労。僕はいい後輩を持ったねえ。勇輝は照れて出てこないのかな？」

勇輝は現在自室にて布団にくるまり、巣穴で怯えるリスの如く身を丸めている。

「ふふっ、そうですね。美月さん、近いうちに会いに行きますので、その時は、ゆっくりお話をいたしましょう」

美月は零華からの誘いの言葉に感動して目を輝かせたが、彼らはその笑みの奥にある絶対零度の怒りに身を震わせた。

「楽しみにしてるよ。じゃ、またね」

美月はドアノブを捻って、外へと一歩踏み出した。その瞬間、彼の身体は消える。お得意の空間移動だ。ドアが独りでに閉まって、静寂が訪れた。

「秀斗。障壁を強化して塩をまいておけ」

「了解」

弥生の冷ややかな命令に、秀斗が額に手を添え、敬礼のポーズをとって答えた。

嵐が去ったことを確認すると、それぞれ動き出した。皆考えることは、いかにして勇輝を立ち直させるかである。

そして癒慰と秀斗を筆頭に、勇輝を癒そう作戦が始まったのだ。

## 第2章の33 俺は男だ！ 男なのに……（後書き）

作者は美月の今後が心配です。特に、彼の好感度が心配です。美月へのラブメッセージも、批判メッセージもお待ちしております。

しかし、牙軍の筆頭は容赦がありませんね。容赦なく文量を増やしてくれました。

彼の登場は二章の最後に持ってくる予定でしたが、思わぬ誤算で一つ前に移動。

その誤算は次回で明らかに！

牙軍は変態の集団か？ と思われそうですが、まあ個性的なんですよ。（なぜ作者が弁解しなければいけないんだ？）

一つ言っておきますと、綾覇と匠は予想以上に変人部分が出来上がりましたが、彼は生粋、そのまんまです。（フォローになっただけね？）

何が言いたいかといいますと、彼は自由だということですよ。おそらく作中で一番おいしい人。やりたい放題できる人です。また出てくるでしょう。作者の予想できません。

では、次回はすぐにやってきます。

第2章の34 クリスマス？ 関係ないな勝負の続きだ！（前書き）

クリスマス？ 今の季節なんて関係ないな。

## 第2章の34 クリスマス？ 関係ないな勝負の続きだ！

本日はクリスマス。だがイエスの誕生日など知るか！ と勇輝は次の勝負を考えながら朝から特大ケーキを作っている。勇輝は完全に美月から与えられたショックからは立ち直っていた。

癒慰も零華も夕食の準備をしている。

プレゼントなどはないが、せつくなのだから豪華にしようと、イベント好きの癒慰が張り切ったのだ。ちなみに本日の衣装は真っ赤なサンタである。ミニスカートに帽子も全て赤なので目が痛い。目のやりどころに困る衣装だ。

「これで下ごしらえは完了ですね」

「クラッカーも買ったよ」

勇輝は作ったスポンジケーキの生地を型に流し込んでオーブンに入れた。

「後は焼いてデコレーションだ」

「楽しみだね」

うきうきと並べられた食材を見ている癒慰。

勇輝がオーブンのタイマーをセットしていると、零華が耳打ちをしてきた。

「勇輝くん。例のもの、準備できました」

「ほんと？ よし、じゃあこれ焼けたらやろっ」

「ちょっと〜何そこで内緒話してるの？」

「こそこそと囁き合う二人に、癒慰は口を尖らせて自分もいれろと言ってきた。

「後で分かるよ」

「楽しみに待っていてくださいね」

と二人は意地悪な笑みを浮かべたのだった。

厨房でケーキの良い香りがしている頃、広間には舞台が出来ていた。腰の高さの台にボタンが一つつけられている。そのボタンを押せば台に備え付けられた点滅灯が光る仕組みだ。背後には掲示板がつき、点数が出るようになっていいる。一言で言い表せば、クイズ番組のセットである。

もちろん役者は勇輝と弥生。両者とも、そのセットをまじまじと見ていた。セット正面には観客席も用意され、おなじみ三人が座っている。秀斗と癒慰が頑張れーと盛り上げてくれていた。

零華は司会者なので少し横の司会台にいる。

勇輝が零華にお願いした内容は、弥生と国語能力クイズをしたいので、その問題を作ってくれというものだったのだが……。

(まさかクイズ番組になるとは思わなかった)

無駄に博学な零華は、雰囲気が出るだろうとセットを用意してく

れたのである。

「で、これは何だ？」

「クイズ勝負。早押しだよ」

勇輝は青い台の後ろに立ち、ボタンを押した。とたんにポーンと音がしてライトが点滅する。

「答えがわかったら押してくださいね。問題は諺、慣用句。難読語、四字熟語。古文からです。ちなみに古文はこの間のテスト範囲ですから、もちろんわかりますよね」

零華はにこやかに笑って、クイズを開始した。

「では最初は諺と慣用句です。始まりを言うので、それに続く言葉を答えてください」

二人は頷いて、問題に集中した。

「花より？」

ポーンと勇輝のランプが青く点灯する。

「団子！」

するとピンポーンと効果音があった。勇輝の後ろの掲示板に十点と映し出される。

観客席からは拍手が上がった。

「次。犬も歩けば？」

次は弥生のランプが赤く点灯した。

「犬も歩けば……道に迷うだろう」

ブーと派手にブザーがなった。それをポーンと勇輝のボタンを押した音が消す。

「棒に当たる！」

「犬はそんな馬鹿なことをしない」

音は正解を告げているのに、弥生は納得できないと不満顔だ。

「迷うこともないって」

勇輝は本当に何も知らないのかと逆に感心していた。どう生きればこれらの言葉を知らずに生きてくれるのだろう。

「鬼に？」

「金棒！」

と続く四問も勇輝が答え、只今六十対ゼロという勇輝の圧勝だ。

「最後に、清水の舞台から？」

問題が出るが、なかなかランプは光らない。

勇輝も首をひねっている。弥生は先ほどから全く動かなかった。



「時間切れです。答えは飛び降りる。清水の舞台から飛び降りると  
いう諺です」

「それ死ぬじゃん」

勇輝の素朴な感想を零華はさらりと聞き流した。

「危険を顧みずにやるという意味です。次は難読語と四字熟語です」

一旦区切りがつき、勇輝は勝ち誇った顔で弥生を見る。日本人を  
舐めるなよ、と。

それに対して弥生は、それが何ださつき答えられなかっただろ、  
と目で答えた。両者水面下で激しく戦っている。

「漁火<sup>これ</sup>を何と読みますか？」

零華はフリップを取り出して、立てた。

勇輝と弥生がともにボタンを押したが、ランプがついたのは勇輝  
の方だった。

「いさりび！」

これで勇輝の得点は七十となった。

「魑魅魍魎<sup>これ</sup>を何と読みますか？」

続いて光ったのは弥生のランプだ。勇輝は手を動かすことも出来  
なかった。

「ちみもつりよう」

正解音が響いて、勇輝がうっそおと声を上げる。

（マグレだマグレ。次は俺が取る）

勇輝は再び集中して問題を待った。

「薔薇は？」

「ばら！」と答えたのは勇輝。

「石榴は？」

「ざくろ」と答えたのは弥生。

この問題に入ってから弥生が追い上げを見せ始めた。漢字は読めるらしい。

問題は続いていく。

「四面楚歌……」

「しめんそか！」

零華が問題を読む声を遮って、勇輝が答えた。自信満々の勇輝をブーというブザー音が叩き斬る。

「四面楚歌ですが」

（お決まりのパターン来たああ！）

「四面楚歌の言葉が生まれた場面の主人公は誰でしょう」

(知るか！)

まんまと早とちりして嵌められた勇輝は内心逆ギレだ。

ポーンと音がして、勇輝は驚いて弥生を見る。

(まさか分かるのか?)

弥生は無表情で、淡々と答えた。

「項羽」

ピンポーンと正解音が鳴り、勇輝はあぐりと口を開ける。彼女はただ知らないのではない、あまりに知識が偏りすぎているのだ。

そしてこの問題で、二人は九十対九十と同点となっていた。

「次は古文の問題です」

これが分からなかったら零華にどやされると、二人は真剣に問題に集中した。

「源氏物語の作者は？」

勇輝はこんな常識だとポーンとボタンを押し、ランプが点灯する。気分はカルタ取りだ。

「枕草子！」

そう叫んでから何かが違うと気付く。それを肯定するのがイラっとするブザー音だ。

続いて弥生がボタンを押した。

「清小納言」

勇輝の答えと繋げれば正解だが、間違いである。残念、勇輝にっ  
られた。

「答えは紫式部です。二人とも？ テスト、復習しましたか？」

零華の冷ややかな笑みが怖い。二人は黙って頷いた。もちろん複  
習などしているはずがない。

「光源氏の初恋の相手は？」

勇輝は知らね〜と内心絶叫する。本当にテストでこんな問題は出  
たのだろうか。

「……藤壺？」

やや疑問形で弥生が答えた。本で読んだが記憶がやや曖昧だ。  
零華がにこりと笑って、ピンポンと小気味いい音が響いた。

「では史記の作者は？」

勇輝はえいやっとボタンを押した。

「司馬遷」

ありがとう世界史。丁度テストでも出ていた。  
零華はニコニコとご機嫌である。問題は続き、勝負は百四十対百四十の接戦にもつれこんだ。

「これが最後の問題です」

二人はぐつと身を乗り出した。

「源氏物語の作者は」

勇輝は押しそうになった手を寸前で止めた。先ほどと同じ問題の  
はずがない。

「紫式部ですが、彼女が仕えた女性は誰でしょう」

もうそれ歴史じゃん！ やべえ、藤原の女二人いる！ と心の中  
でつつこんだのがいけなかった。 ボタンを押す手が鈍り、弥生  
のランプが点灯した。

（終わった〜！）

勇輝が頭を押さえて天を仰いだ時、弥生の淡泊な声が耳を通過し  
た。

「藤原定子」  
ふじわらのていし

負けたと勇輝はがくつと肩を落とした。その名前は勇輝の頭にも  
ある。

が、広間に響いたのはブーという嘲笑ったような音だった。  
一縷いちろうの希望を見出した勇輝は、水を得た魚のように元気になって、

ボタンを渾身の力で叩いた。

勇輝は頭の中にあるもう一人の女性の名を叫んだ。

「ふじわらのしょうし藤原彰子！」

しばしのタメがあり、ピンポンピンポンと軽やかな祝福の音が勇輝を包んだ。

「勝者、勇輝君！」

おくと秀斗が立ち上がって拍手を送った。  
全員が拍手を送って勇輝を称賛する。

「弥生、俺の勝ちだ！」

勇輝は満面の笑みを弥生に向けた。弥生はついと視線をそらして、拗ねた子どものような行動をとる。無表情ではあるけれど……。

勇輝は台から下りて前に出た。弥生もそれに倣う。二人が向かい合った。

目的を果たす時である。

勇輝は肺をめいいっぱいに膨らませて、目的を叫んだ。剣を投げ与えられた時に、宣誓した言葉。それを今……。

「弥生！ 俺が男だと認めろ！」

感動のクライマックスを聞いていた全員が、ん？ と首をかしげた。確かこの勝負の始まりは弥生に人間の存在を認めさせることでは無かったか。

「ああ、お前は男だ。心配するな。認めている」

答える弥生も頭の半分に疑問符がちらついていた。

(本当にいいのか勇輝)

だが勇輝は目的のすりかえにも気付かずに、弥生に認めさせたとご満悦だ。ふんぞり返っていて、もう少しで頭を床で直撃するだろう。

外野四人は固まって勝負の決着を微笑ましく見ていた。

「勇輝君らしいよね」

「ほんと、抜けてるっていうか、なんとというか」

ひたすら喜ぶ勇輝に無表情の弥生。ただ、男、男とメロディー付きで口ずさんでいる勇輝を見る弥生の口元には、微かな笑みが刻まれている。

「まあ、勇輝の勝負は全て無駄だったかな」

鍊魔が勇輝を見る目はどこか優しく、以前のとげとげしさはない。少しずつ皆が勇輝を中心に変わって来ている。

零華はふわりと笑った。

「ええ、弥生ちゃんは、もう人間を認めていますから」

誰でもない、目の前の少年によって。

秀斗と癒慰が二人に駆け寄った。秀斗は良かったなと勇輝の頭を撫でまわし、勇輝にアッパーを決められた。

癒慰もクリスマスのついでにお祝よ、とはしゃいでいる。

「目論見は成功したか？」

鍊魔は零華に視線を落として、そう訊いた。両者の視線が絡み合う。

「あら、何のことです？」

零華はにこやかに返した。以前鍊魔が問うた時と同じ、本心を見せない笑みだ。

「俺も弥生もお前の掌の上か」

鍊魔は苦々しげにそう言うと、視線を外した。

「何ですかそれ。まるで私が悪者みたいですけど」

無然とする鍊魔に零華はクスクスと笑って、彼らに呼び掛けた。

「癒慰ちゃん、勇輝君。晚餐の準備の続きをしましょう。今日はお祝も兼ねて、おいしいものを作りますよ」

二人は元気に返事をして厨房へと走っていった。

そして夕食。長机いっぱいには並べられた料理に皆の心は躍った。

「メリークリスマス！」



魔術師たちは初めてその言葉を口にする。

どこか心が浮き立つ、不思議な言葉。

楽しい食事はみんなに笑顔を与える。弥生も少しではあるが口に運んでいた。

サンタからのプレゼントは、毎日の小さな楽しさ。退屈な日々  
に風を吹き込む小嵐。

零華は和やかな空気を肌で感じ、ずっと笑みを浮かべていた。先  
ほど錬魔に問われたことを思い出す。

(目論見？ まさか、まだ成功なんてしていませんよ)

零華はワインを一口飲み。空になっていた錬魔に注いだ。

勇輝と秀斗はまた飲み比べをやっている。

「勝負になるはずがありませんのに」

「本人たちが楽しんでいるんだからいいだろう」

飲み比べは癒慰が煽ることでますますヒートアップしている。勇

輝は明日二日酔い決定だ。

零華はその様子を見ながら、グラスを傾ける。喉を滑り落ちるま  
るやかな風味。秀斗が蔵から厳選してきた極上のワインだ。

(メリークリスマス勇輝君。感謝していますよ)

そして晚餐は、完全に夜の帳が落ちるまで続けられたのだった。

## 第2章の34 クリスマス？ 関係ないな勝負の続きだ！（後書き）

作者もびっくり、クリスマスだってさ。

さてと、プロットをねじまげてこの話を最後に持つてくることになった原因は、ずばり零華。この話を書き終えて、首をひねる。

あれ？ なんか零華がきれいにまとめてしまったぞ？

なんか、これで終るノリじゃない？

さて困った。この後に美月の爆弾を落とす雰囲気ではないぞ？

となり、慌てて美月編を書くこととなった。

ほんと、おいしいとこ持つて行きましたね、零華ちゃんは。

いつもホールでスタンバイしてくれている二人よりも、途中からドアを開けてやってくる人たちのほうがおいしい役を奪っていくのは理不尽じゃないかい？（お前のせいだろ）

さて、次はエピソードですね。ではまた。

## 第2章 エピローグ

勇輝は現在自宅にいた。クリスマスが終わり、二日酔いに苦しんでいるところに母親、暁美がやってきた。

みんな元気？ と前触れもなくやって来た彼女はお茶を呼ばれて談笑していた。普通に様子を見に来たらしい。

それを見て、そっぴや保護者的立場だっけ？ と勇輝は母親の役割を確認していた。

しかし、帰る時になって勇輝は首根っこを掴まれた。曰く、大掃除はあんたがいないと話にならない、そうである。

勇輝は猫のようになりながら、家の状況を思い浮かべる。昔から、掃除が大変だった。

父親が容赦なく散らかし、母親がそれを片づけていくが追いつかない。勇輝が加わることでなんとかバランスを取っていたのだが、いない今、家はどうなっているのか……。

考えたくない。

荷物をまとめ、簡単に別れを告げて家に帰った勇輝が見たのは、きれいながらも汚い我が家だった。綺麗なのはごみが固まっているから。しかし物があふれており視覚的圧迫感を感じる。清潔感はある。ただ乱雑なだけだ。

年末の大掃除、これは三日はかけないと家の垢は落としきれないだろう……。

そして怒涛の掃除デーを完走し、本日は大晦日。夕食を軽めに済まし、除夜の鐘を聞きながら年越し蕎麦を食べるのが恒例だった。

十二時までには少し時間があるので、勇輝は自室のベッドで横になっていた。

特に見たい番組もなく、というかテレビを如月に置いてきたので何も見れない。両親は下で歌合戦を見ているのだろう。

年末。ずっと父親と二人きりだった。それが今年からは違う、母親が帰ってきたのだ。

勇輝は携帯を持ち上げた。めったに使われることのないそれは、時を告げるだけだ。

可愛いストラップが揺れている。彼女、彩との思い出が残る唯一のもの。

勇輝は突然消えてしまった彼女の姿を思い浮かべた。消える瞬間の、綺麗な笑顔は記憶にこびりついている。

「彩……」

名を呼んでも、以前のような悲しみには襲われない。ただ懐かしい、心地よい風が胸を掠めていく。

例えば、あの時から勇輝の世界は動きだしたのだ。良い方向にも、悪い方向にも。

彩をあのような状態にした人物のことはまだ分かっていない。それでも、

(あいつらに出会えたのは、良かったよな)

そう思える。

失って得たもの。いや、失ったから得たもの。この三カ月で勇輝の生活は目まぐるしく変わった。

ただの不良では経験できない喧嘩をした。空も飛んだ。銃も使った。

いろんなことを知った。隠された世界や、人の痛み。

ぶつかって、見えたものもある。諦めないで、じたばた見苦しく

もがいて、少し分かった気がした。

勇輝はくくつと笑った。

あそこまで人に関わられるようになったのは、彩のおかげだ。以前、彼女が自分にしたように、勇輝は彼らと接した。

彩の最後の願いが、その言葉が蘇る。

(ありがと、彩。今俺、すっげえ楽しいよ)

笑顔が好きだった彼女。勇輝に笑顔を与えてくれた彼女。

彼女が彼らを呼んだ。彼らが母親を呼んだ。

全てがどこかで繋がっている。これからも繋がり続ける。

「大晦日に一年振り返るって、恥ず……」

自然と顔がにやける。新年まで後三十分。きっと、楽しい一年になる。

部屋に置かれている時計がカチカチと時を刻む。後二十分、勇輝はリビングに下りた。

暁美が年越し蕎麦の準備をしている。普通の家庭の風景がそこにある。

勇輝も皿の準備をしてあと十分。テレビがニュースに切り替えられ、除夜の鐘を待つ。

残念ながら近くに寺は無く、あったとしてもこの寒さの中つきにいく気にはなれない。

後五分。三人で蕎麦をすすりながら、テレビを見ていた。和やかな食事風景が手に入る時がくるとは思っていなかった。

勇輝はカウントダウンを待つ人々の映像を見て、ふと笑みをこぼ

した。

毎年同じ光景。日常が流れていく。だが、日常と同様に非日常も流れていることをどれぐらいの人が知っているだろうか。

誰が、突然非日常に巻き込まれると予想できるだろうか。

(ほんと、運命ってわかんないよな)

勇輝がかまぼこを口に入れた瞬間、除夜の鐘がテレビから流れた。

「明けましておめでとう」

暁美が箸を止めて、そう言った。男二人は豆鉄砲を食らったような顔をし、それを居心地の悪そうな表情に変えて、

「明けましておめでとうございます」

と返した。二人でいた時には交わしたことのない言葉。年は超すが、挨拶は朝起きてからが多かったのだ。

(新年明けましておめでとう。今年も良い年でありますように)

勇輝は心の中でそう願った。

新しい年が、どういったものになるのかは、あけてからの楽しみ。

除夜の鐘が人々の家に、寒い街に鳴り響く。

百八煩惱を払い。新しい気持ちで新年を迎えられるように。

煩惱から逃れるのが難しいが故に。

寒い、暗い夜の闇を、人の吐息が白く染めた。

## 第2章 エピローグ（後書き）

とまあ、こんな感じで二章は完結いたしました。

一章と同じ話数ですが、中身は倍以上に膨れています。

大きな山場もなく、爆弾が降りつづける二章でした。思えば魔術といえるものを使っていませんね。それだけ平和ということだ！

エンディングももっとチャラけたものに……いえ軽いものにしようかと思いましたが、主人公が出張って真面目にまとめましたね。エライよ勇輝君。

三章は、少し彼らの過去の一部に迫れたらと思います。

ちよっぴり、いえ、ざっくり、ざっくり？ シリアスです。コメディイが入りつつですが。だって、コメディイですから！

主人公が奮闘するのは毎度のことなので、暖かく見守ってあげてください。

最後に、いつも私と並走して応援してくれている方々！ 柱や草むらに隠れて見守ってくれている方々！ ありがとうございます！

四月まであと少し。作者はこれから見直し期間に入ります。

小休止したら、三章へ。では、また新たな章でお会いしましょう。

## 第0章の1 春の風が桜の枝を揺らすころ

とある高校には、一クラスだけ全く異色な科があった。通称不良科。内容はやや体育系で、座学が少ないのが売りだ。そのせいでそのクラスは不良が大半を占める。

たとえ真面目な人がいても、不良に染まってしまうか、登校拒否となってしまうので、結局不良しかいなくなるのである。

季節は春。桜の花びらが風に舞い上がり、やわらかな日差しが人々の心を和らげる季節。

そして、学校には新入生が来る季節である。

校門を通って登校してきた新入生は熱い体育会系の部員から熱烈な歓迎を受けている。だが、誰でも歓迎を掲げる彼らも、近づけない新入生がいた。カラフルな頭をして、目をぎらつかせた新入生である。

「知ってるか？ 今回の新入生の中によ、なんかやばい奴がいるんだって」

少し不真面目な勧誘役の先輩たちが、噂話を始めた。

「どうせいきがった不良だろ？」

「不良でも、中学のトップだってよ」

「うげ、また熊みたいな奴じゃねえの？」

と二年の彼らは、自分たちの学年の不良科トップの熊男を思い出した。



すぐに忍び笑いが漏れる。

「いやいや、それが女たちが言うにはよ。ちよーかわいいんだってさ」

「なんだそれ」

「ちっこいらしいぜ。こんくらい」

と一人の男が自分の肩くらいで手を止めた。

「ちっせえ」

「あ、あれじゃねえの？ ほら、あの金髪の子ビ」

一人の男の子が生徒の波を指さした。そこだけ頭一つ分沈んでい

る。彼は勧誘の女の先輩たちから手を振られていた。彼はそれに視線で答えていた。それはもう、眼尻を吊り上げ、凶悪そのものの視線で。

その隣には凶悪顔の友人にやや呆れ顔の男の子がいた。頭一つ分は高い彼は、何か言葉をかけているようだった。

「本当にあんなんが中学のトップか？」

「ま、金髪でいきがってんのは確かだよな」

「高校の不良つてのを、教えてやるさ」

突然割って入ってきた声に、彼らは体をこわばらせた。

「せ、先輩」

三年の不良科トップの先輩だ。熊ではないが、それなりにいい体つきをしている。

「くくく、挨拶は大事だから」

彼らはもう一度小さな不良新入生に目をやって、彼の不運を不憫に思った。

いくら中学で強くても、ここには上がいる。あの体では体格差のある先輩たちには瞬殺されるだろう。可愛い顔が台無しだな、そう彼らは笑いあった。

そして登校しただけで多くの方々に話題を提供した彼は、教室で無然と大きな態度で椅子に腰を下ろしていた。

「勇輝、眉間にしわ。目が三角」

勇輝と呼ばれた少年は、金髪をいじりながら目つきをますます悪くした。大きな目が細くなり、眉がつり上がる。春日勇輝、成りたてはやはやの高校一年生である。

「ああ？ なんだよ歩。文句あんのかよ」

森本歩は黒髪に白いメッシュを入れており、カラフル不良のなかでもなかなか目立つ。

「いや、ねえけど」

勇輝と歩は同じ中学でツートップとなり、ともにこの高校に入学した。

勇輝は登校中、毎日喧嘩が出来ると言つてご機嫌だったのだが、校門での熱烈な嬌声にすっかりつむじを曲げたのだ。

あからさまに可愛いやら、ちっちゃ〜いと叫ばれれば無理もない。

「くそつ、イライラする」

歩は可愛らしい友人の頭に手を置いた。険悪な顔の友人を撫で撫でしてみる。とたんに顎に拳骨が飛んできた。

怒りも上乘せされ威力は常の二倍だ。

「死ね！」

「……ちよつとすつとしたか？」

勇輝は少し悪いと思ったのか、頬づえをついて歩から顔を背けた。

「けつ、このクラス全員をぼこぼこにしなきゃ治まんねえよ」

どこまでもとんがっていて、ご機嫌ななめで、歩はお手上げと隣の席に座った。

うるさいクラス。互いにガンを飛ばしている男たち。その中で女子は数少ない。

勇輝は、始終イライラしてクラスメイトを眺めていた。

片っ端から殴って行ってもいいが、手当たり次第にやっても自分が疲れるだけだ。ある程度序列が出来たところで殴りこみに行くのが、楽で確実だ。

そつやって歩と数多の他中学のボスを潰して行つたのだ。

「勇輝、俺たちはここに戦争しに来たんじゃねえだろ？ 一番強い奴をさくつとやって、その後ザコが絡んでくるもよし、俺らにひれ伏すもよし、だろ？」

「その前に喧嘩売ってくれても俺は即高価買取するけどな」

まずはストレスを発散したいが、まだ顔見せの段階であり、喧嘩は勃発しそうにない。

勇輝は、入学式をぶーたれて過ごしたのだった。

桜も散って葉桜となった頃、勇輝は喧嘩に身を投じていた。クラスの中で決闘が始まり、強さの序列ができて始めていたのだ。そして、トップが出現し始めたので、横やりと取られかねない殴りこみをはじめたのである。

今回の敵はクラスの三強の一人だった。あと二人はすでに倒している。

場所は教室。タイムンだ！ 外に出やがれ！ とはなかなかならない。その場で挑発し、その場で喧嘩が起るのだ。喧嘩が始まればクラスの気の利く人たちが机をどけていく。

勇輝は不規則に出される拳や蹴りを避け、または受け。相手を見極める。

相手はもちろん自分より背が高い。しかも体重もあり打撃に重みがあった。しっかり足で踏ん張っておかなければ飛ばされてしまう。相手は大きく腕を振りかぶって横殴りを繰り出した。勇輝は身を沈めてそれをかわすと、相手の懐に入る。そして足払いをかけ、相

手の重心が傾いたところでその襟を掴み、背負い投げを披露した。この技は歩の多大な犠牲の上に物にしたものだった。

教室にがたいのいい男を叩きつける。埃が舞い上がり、みしつと、何やら嫌な音がした。

彼の体の悲鳴ではない。彼の、下。教室の床。木造のそれにひびが入っていた。

ギャラリも危険を察知して壁際に後退する。

「……これ、まずくね？」

歩も闘う勇輝を気にしつつ壁際へと下がる。だが、背負い投げは連続技の始まりだった。

勇輝は不穏な音を耳にはしていたが、一度動き出した技の勢いはなかなか殺せず、ふり上げた足を彼目がけて振り下ろした。

「あの、バカ」

歩は額に手をやった。訪れる結末を見たくないというように。

それが最後の一撃だった。バキツという音とともに、二人の姿はギャラリーの視界から消えた。勇輝の悲鳴とともに……。

すぐに聞こえる硬い衝撃音と、人々のざわめき。歩は誰よりもさきに教室に出来た穴を覗き込んだ。そこからは階下の教室の机の上に、木片とともに横たわっている二人の姿が見えた。

二人とも小さく身じろぎをしている。呻いているようだが、小さくて聞こえない。

（良かった、生きてる）

歩は携帯で救急車を呼びながら、不幸にも上から人が落ちて来るという事件に遭遇したクラスへと向かった。一番心配なのは誰かが下敷きになっていないかということである。

だが幸いというか、はじめのひびが警報となってクラスの人々はそこから逃げており、最悪の事態は回避された。

「勇輝！」

下の階は二年生。歩は人々を掻き分けて勇輝へと駆け寄った。

近くで見るとその状態はやや深刻だった。頭から血がドクドクとはなっていないが、手が不自然に曲がっていた。

「い、痛え」

そりやそうだろうと歩は思う。喧嘩をしてもここまでの重傷は負わない。

ほどなく救急車と騒ぎを聞きつけた先生が駆けつけ、二人は病院へと送られていった。

この事件以後、不良たちの間には暗黙の了解が出来た。曰く、喧嘩は外でやる。

教室でやると全治二週間の怪我を負うぞ、と自らを強く戒めたのである。

有名な、勇輝の名を学校中に轟かせた事件だった……。

勇輝は三日を病院のベッドの上で過ごし、松葉杖をついて登校してきた。

左手を骨折し、右足には罫が入っている。よって、右手で松葉杖をつき、左足一本でけんけんして歩くという可愛い、いや無様な姿

での登校だ。隣に歩がいて鞆を持ってあげている。

喧嘩相手は勇輝よりも重症だったらしく、まだベッドの上である。

「お前らのおかげで、授業はなし。しかも床が張り替えられて綺麗になったぜ」

歩は階段を上る勇輝に肩を貸しながら、面白そうにそう言った。

「それはよかったじゃえの？ くそっ、動きにくいな」

少しずつ階段を上りながら悪態を付く勇輝に、歩は苦笑いを浮かべた。ひよこひよここと、見る者の同情を引くほど可愛い、いや痛々しい。

「おい歩。次その顔にやけさせたら、階段から突き落すからな」

「俺が落ちる時はお前も道連れだぜ？」

「やだね。お前だけ落ちやがれ」

教室に入ると、確かに床が新しくなっていた。周りの壁が汚いでやたらと浮いてしまう。

クラスメイトは二人を遠巻きに見ている。クラスのトップを下し、教室を破壊した勇輝は、近づかない方が良くと判断されたらしい。

「ちっ、ヘタレ野郎が。誰一人かかってこねえ」

勇輝は皆の視線が不愉快なのか、どかっと椅子に座ってギプスがハマった足を投げ出した。

「いや、さすがに怪我してる奴に挑もうとはしねえって」

「来たらこの松葉杖で応戦してやんのに」

松葉杖は怪我人を助けるものであって、新たに怪我人を増やすものではない。

勇輝の松葉杖生活は、歩の苦笑いとともに始まった……。

ひよこひよこ歩く勇輝が人々の目に馴染み始めた数日後。この日は用事があるからと学校を休んでいた。つまり勇輝が自力で何とかしなければならぬ。

右手に松葉杖を持ち、けんけんで教室まで階段を上る。鞆は邪魔なので持ってこずに、財布だけがポケットに入っていた。

なんとか教室につき、授業を寝て受けたが、困ったのは昼食だった……。

勇輝は父と二人暮らしだ。毎朝自分でお弁当を作っていたのだが、怪我人が台所に立つことはできない。よって朝と夜はレトルトやデリバリーで済まして、昼食は売店で買っていたのだ。人だからができるので歩が行ってくれていたのだが……。

(くそっ、この足じゃ着いたころにはほとんど売れてるよな)

そもそも人ごみを掻き分けるのが困難だろう。不良たちなら松葉杖を使って一人一人沈めていくが、一般の生徒も多く利用する売店だ。勇輝も無関係の人間を巻きこむのは好きではない。

一階の売店につくと、人はちらほら、商品もちらほらの状態だった。

(ちっ、先に買った奴殺す!)



内心穏やかではない勇輝は残り物があるだけでもましだと思い直して、売店のおばちゃんに商品を渡した。いちごミルクロールという、激甘の菓子パンだ。隣にあったミックスジュースも追加する。

「三百八十円です」

勇輝はポケットから財布を出したが、片手では上手く開けることができない。鋭く舌打ちをして売店の人に頼むかと思った時、その手から財布を抜き取られた。

勇輝が驚いて脇に立った人を見ると、女の子だった。彼女は勇輝の財布から小銭を出して、おばちゃんに渡す。

「二十円のお釣りだよ」

その二十円を財布に戻すと、怪訝そうな顔の勇輝に渡した。

「はいどうぞ」

勇輝はその財布をひったくると、ポケットにねじ込んで礼も言わずに松葉杖を前へと動かした。大きく前に突き出して、ずんずん進んでいく。

女の子はその後姿を見て、不敵な笑みを浮かべていた……。

ちっ、とまた勇輝は舌打ちをしていた。手がふさがっている。階段の一番楽な上り方は手すりをもって片足で上っていく方法だが、先ほど買い求めた商品が邪魔をする。資源節約のためビニール袋はなく、パンは右手の人差指と中指ではさみ、ジュースは左手を吊っ

ている布の中に入れてある。

松葉杖をつきながら階段を上つてもいいが、パンかジュースかどちらかは振動で落ちてしまつたらう。

(歩の野郎……)

歩はたまにふらつと二三日学校に来なくなる。本人は用事だよと言っているが、怪しいことこの上なかつた。

「お困り？」

と声が聞こえると同時に勇輝のパンが抜き取られた。続いてジュースも取られ、松葉杖も手から無くなる。

「何しやがんだ、この女！」<sup>あま</sup>

そこにいたのは先ほどの女の子だ。にこにこ勇輝の荷物を持っている。

にこにここと、愛らしい笑みを浮かべている女の子は動いた。その手はまつすぐ勇輝の胸倉に伸び、掴んだ。

「あまあ？ 人が親切にしてあげてるのに、なんなのその口の利き方は！」

張り手でも飛んで来そうな勢いで怒鳴られて、勇輝は身をすくめた。

笑顔が一瞬で般若の相になる。女は怖いと勇輝は思った。

「うるせえよ。誰も頼んでねえだろ！ 失せろ！」

とは言いつつも、勇輝は荷物を彼女に持たせたままで階段を上っていく。

女の子は先に階段を上ると、踊り場で振り返り荷物をひらひらと見せつける。荷物質を取ったとでも言いたいらしい。

「遅いわね。カメ？」

「ああ？ その口塞がねえと張り倒すぞ」

「そんななりでよく言っわ」

そんなやりとりを続けて、二人は教室に帰った。勇輝が席に着くと、彼女はその前に座った。椅子を反対に向けて、向い合う形になる。

「何やってんだてめえ」

女の子は勇輝のパンを開け、ストローを刺して勇輝の机に置くと、自分も売店で買った物を並べた。

「え？ 昼ごはん食べるの悪い？」

「自分の教室で食べやがれ」

勇輝はパンを一齧りする。いちごの香料が鼻孔を突き抜け、砂糖の甘さが舌をつく。

甘党の勇輝には、他人が胸やけする甘さも守備範囲だった。

「ええ！ 私ここのクラスなんだけど？」

彼女は自分のメロンクリームパンを開けながら、驚愕に目を見開いた。

「は？」

勇輝はそう言われて、もう一度彼女の容姿を見る。彼女の髪は黒で、スカートは短いがピアスもしていない。化粧もゴテゴテメイクではなく、ふんわりと品の良いナチュラルメイクだ。このクラスの女子とは正反対である。

「ひどっ、こんな可愛い私が入っていないなんて！」

自分で言うなよと思いつつ、確かに可愛い部類には入るなと勇輝は評価していた。しかし、全く記憶にない。

「で、お前は誰なわけ？」

ジュースを飲みながら訊いてみる。名前が分ければ情報通の歩に詳しいことを聞けるからだ。

彼女はため息をついて、こう答えた。

「私は桜田彩。よろしくね、可愛い可愛い春日君」

勇輝は、ジュースの紙パックをぶん投げそうになった。

「で、その子誰？」

二日ぶりに歩が登校した時には、彩はごく自然に勇輝の傍にいた。自然に、勇輝は仏頂面ではあるが……。

「桜田彩。迷惑で乱暴な女」

勇輝がむすつとした顔で答えている間も、彩は笑顔で、勇輝にでこピンを喰らわせた。

「いだっ」

「いや、それは知ってるけど。なんでここに？」

勇輝へのプチ制裁を無視して、歩は彩に問いかける。

「ん？ だって春日君ひよこひよこして、可愛い、可愛そうだったから」

故意に間違えている。

歩が友人に目をやると、彼はふるふると震えていた。歩はそれから容易に彼がこの二日で感情線をぶち切る言葉をたらふく頂いたのだと理解した。

「なあ歩。お前を友達と見込んで頼みがある」

「なんだ？」

あまりいい予感がしないが、訊いてみた。

「お前を三発ほど殴っていいか？」

「八当たりは勘弁してください」

そのやりとりに彩は鈴のような声で笑った。

そして不良二人に女子がプラスという、奇妙な友達関係が始まった。

## 第0章の1 春の風が桜の枝を揺らすころ（後書き）

勇輝と彩の馴れ初め編。

彩ってもう出てこないの？ と数度訊かれ、そっぴや二人の馴れ初めって考えてなかったなあと気づく。

このタイミングで投下。零章となりました。

勇輝君が可愛い。ツンケンしてます。とんがった不良ですね。作者的にもいろいろ発見がありました。それは次に……。

次の話は、タイトルが決まり次第投下します。めずらしく、タイトルが決まらない……。

では次回。

第0章の2 空に浮かぶ白雲は綿飴となって二人を包む(前書き)

一晩考えてタイトルこれかよ……。苦しい。



## 第0章の2 空に浮かぶ白雲は綿飴となって二人を包む

教室の床がぬけてから二週間。勇輝は医者も目を見張る回復力でギプスを卒業し、今までの経験を生かしギプス中でもひっそりと腕と足を動かしていたので筋力の衰えも最低限で終わらせた。少しリハビリをすれば問題なく喧嘩が出来る。

勇輝は歩と二人屋上でさぼっていた。松葉杖をついている時は屋上まで上るのが面倒くさくて自粛していたのだ。

せつかくの春のよい天気。さぼらなくてどうすると、二人は日向ぼっこ中だ。

「なあ勇輝？ お前あの子とどうなってるの？」

勇輝はあの子という言葉に首をひねって、少しして彩のことを頭に浮かべた。

「桜田のこと？ どうって、別にどうい関係でも……」

「うわ、おもしろくね」

「はあ？ お前何考えてやがる」

歩は意地悪そうな笑みを浮かべた。

「いやあ？ 俺人の情報の中でも恋愛ごとに関するものが一番好き  
なだけ」

「最低。人の恋路を邪魔する奴は死ぬんだろ？」

「馬に蹴られてな。で？ 関係じゃなくて、お前の気持ちだよ」

勇輝はしばらく無言で空を見上げていた。

「……とくにどういった気持ちもねえ」

「え〜。もうちょっとドギマギしてくれてもいいのによ。桜田けっ  
「うっ可愛いじゃん」

「確かに可愛いな」

勇輝は頷きながら答えた。彩の顔は他クラスの女子と比べてもひとときわ可愛らしい。ひそかに男子の中でも人気なのだ。

「一緒にいると楽しいし」

「楽しいな……って誘導すんなよ」

勇輝はバカバカしい、とごろつと根転んで空を眺める。  
その顔は少し赤みが差していた。話を逸らそうと逆に訊いてみる。

「お前はどーなんだよ」

「興味ないし」

即答で斬られた。

「あっそ」

「でもお前さ、中学のころも寄ってくる女はいたよな。つきあっても長続きしてなかったけど」

勇輝は嫌なことを思い出したとでも言わんばかりに顔をしかめた。

「うるさいだけの奴らだった」

勇輝を子ども扱いしたので勇輝がぶちぎれてすぐに別れてしまうのだ。

歩は黒歴史を思いだして顔をしかめる勇輝に苦笑いを浮かべていた。すぐにそれはどこか期待した顔になって、ごろりと勇輝の隣に寝ころんだ。

柔らかい日差しにつつまれて、二人はうつらうつらと眠り始めた。学校というのは不思議なもので、チャイムの度にわずかに覚醒する。だがまだ時ではないと再び眠りに落ちる。それを数度繰り返し、最後に目覚まし時計となるのは空腹だった。

「ん〜腹減ったあ。飯食おうぜ」

伸びをして歩が、飯だ飯だと勇輝を起こす。

勇輝はあくびを噛み殺して自分の鞆を手繰り寄せた。その中からお弁当を取り出すと包みを開け、またうつらうつらしだした。

怪我也治ったのでお弁当も復活したのだ。

「こら、シャキッとせえ！」

歩の拳骨が勇輝の脳天を直撃した。

「痛え……俺、昨日あんま寝てないんだよ」

原因はゲームであるが……。

「食べようぜ」

歩もお弁当を持参している。

「……ん」

いただきます、と勇輝が箸を持って手を合わせた時、強烈な目覚ましが現れた。

「ここにいた！ 探したんだからね！」

勇輝はパチリと目を開け、ドアへと顔を向ける。そこには唇を尖らせて腕を組んでいる彩がいた。手にはお弁当を持っている。

「うわ、来やがった」

彩はツカツカと二人に近づき、勇輝にでこピンを喰らわせた。

「一日中さぼって、どーゆーこと？ ひとりぼっちで寂しいんだけど」

勇輝は額を押さえながら、ジトツとした視線を彩に向ける。

「そんなん知るかよ。他の女のところ行けよ」

「甘いわね。クラスの女子はもう私だけよ」

彩は鼻で笑って、お弁当包みを広げる。

「は？」

「いや、マジだぜ？ みんな学校来てなくて、現在貴重な女子がこちらの方」

と歩が補足説明をしてくれた。

「……へえ」

勇輝はたいして興味もなさそうにお弁当を食べ始めた。

「うわ、おいしそう。お母さんの手造り？」

勇輝はお弁当を覗きこまれて眉間にしわをよせる。歩がその反応にやついた。勇輝はここから始まる会話が容易に予想できた。

「いいや。それ勇輝の手作り」

と歩がばらすと大抵の女の子は、

“え、意外。勇輝君って家事とかできないひとだと思ったあ。それで女の人のところにお世話になってるみたいなの？”

とびつくりし、イメージと違うと大騒ぎし、中には勇輝を完全なる不良と思っている女の子はダサイと離れていくのだった。不良の花は喧嘩なのだ。

しかし彩は、

「きゃあ、最高！ 卵焼きも〜らい！」

ばんざーいと大喜びして、勝手に勇輝のお弁当から卵焼きを奪った。

「おい！」

彩はそれを口の中に放り込むと、少しして

「おいし〜」

と満面の笑みを見せた。

「これ最高！ この甘さ！ 絶妙ね！」

「マジで？ それすっげえ甘くね？」

以前勇輝の卵焼きを攫ったことのある歩は、その甘さに衝撃を受けたものだった。

それは砂糖そのものと言ってもよかった。勇輝は卵焼きだけは甘くないと嫌らしい。

「え？ 普通よ。私甘いのが好きだもん」

二人そろって重度の甘党のようだ。

そして他のおかずにも手を出し、全てを褒め尽くした。勇輝も自分の料理を褒められてまんざらでもないのか、口元が緩んでいる。

和気あいあいとお弁当を食べ、時間は流れて行った。

二人が屋上でさぼっていることが彩にばれてからは、彼女もたまに屋上でさぼるようになった。

そして自分が戻るついでに彼らをひっぱっていくので、二人は不本意ながら、出席回数が増えていた。

お昼になれば、屋上でお弁当を食べるのが習慣となり、勇輝と彩との会話も、少しずつ笑いが混じり合うようになっていた。

「ねえ春日君。私ね、春日君にあだ名考えたんだ」

今日さぼっているのは三時間目、科学の時間だ。三人でごろごろしていたら、彩が急に起き上がって勇輝にそう言った。

「あだ名？」

「そう。はるゆき。どう？ 私の力作」

と彩は胸を張って発表した。勇輝は、は？ と口を開けた。

「どっから来たんだよその名前」

「春日のはると、勇輝のゆきを取ってはるゆき」

そう説明されても、勇輝は納得がいかん、と仏頂面だ。

「なんで名前よりあだ名のほうが長くなんだよ。おかしいだろ」

「いいじゃん、可愛いんだから」

「はあ？ てめえ、何様のつもりだ。ああ？」

勇輝は跳ね起きて彩と睨みあう。彼女が男だったら拳が飛んでいただろう。

「彩様よ。はるゆき、前々から思ってたけど、あんた金髪おかしいわよ」

超上から断言され、その後不意打ちに容姿を斬られて勇輝は多大なダメージを負う。もうはるゆきは決定のようだ。

「てめえには関係ねえだろ」

「はるゆき、あんた女の子の間でなんて呼ばれてるか知ってる？  
王子よ王子」

まさかの王子発言に、勇輝は口をあぐり開けた。隣で歩が爆笑している。それにチョップで制裁を加えて、ストレス発散。

「もともと顔が可愛いのに金髪になんかするから、よけい幼く見えるし、王子様っぽくなるのよ」

ガーン、と勇輝は頭上に岩が落ちてきたようなショックを受けた。ガラガラと崖崩れが起きる。

勇輝は顔の可愛さをどうにかしようと、あれこれ考えたのだ。黒のままでは純情すぎていけないと思い、金髪に染めてみたのだが……。

「まあ、王子だよな」

どうやら王子呼ばわれされていることを知っていたらしい歩は、眼尻に涙を浮かべていた。

今度は拳骨で制裁。



「だから、黒に戻しなよ。その方が断然かわ、かつこよくなるから」  
彩の言い直しも、ショック状態の勇輝は気づくことができなかつた。

「なんてこった」

頭を抱え始めた勇輝に、彩はだからあ、と黒染めを勧める。  
歩はその様子に笑いを噛み殺していた。

そしてその翌日。歩の隣には髪を黒く戻した勇輝がいた。

「やっぱりそっちの方がいいわ！」

登校してきた勇輝を見て、彩はグッドサインを出す。  
髪が黒に戻ったことで王子感はなくなったが、可愛さは微塵も損なわれていない。むしろ倍増。

「ね？ 私の言うとおりだったでしょ？」

「誰がてめえの言うとおりにするかよ。俺が飽きたから染めたんだ」

「うわ〜可愛くなあい！」

「上等だ！ 可愛さなんか、みかん箱に詰めて川に流してやらあ！」

朝からハイテンションなやりとりに、歩はこっそりあくびを噛みしめていた。

「胸糞悪い。俺先に上に行ってるからな！」

勇輝はそう吐き捨てて、一人ずかずかと屋上へと上って行った。

「なあ桜田。お前、わざとだろ」

歩はにこにここと笑っている彩に、そつと尋ねてみた。

「そつよ。だってはるゆきは黒の方が可愛いんだもん」

彩は悪びれもせず、あっけらかんと即答する。歩は内心惜しみない拍手を送った。

勇輝に近づくと女の子はたくさんいるが、ここまで勇輝とやり合う女の子はいなかった。

「確かにな。で？ 桜田はあいつに気があるわけ？」

「うわっ、このタイミングでそれ訊く？」

彩はうーん、と唸りながら髪を指に絡ませた。

「そつね、うん。言うておくわ。私はるゆきが好きよ。悪い？」

「だろーな」

「だから、応援してね。私必ずはるゆきを落とすから」

歩はこくりと頷きながら心の中で舌を巻いた。協力は不要。むしろ、自分から攻めて落とす気満々だ。

(これが流行りの肉食系か)

歩は、勇輝はどっちだろうな、と考えながら階段を上った。性格は草食の部分もあるが、行動派でもある。

そして屋上に着いた二人が見たのは、二人が遅かったことにさらに不機嫌となつてふてくされてくされている可愛い勇輝だった……。

それから、数度言い合いと喧嘩、遊びを繰り返した。互いに遠慮なしに口喧嘩をして、程よいところで歩が止めに入る。それよりも圧倒的に勇輝が折れることが多いのだが……。

「だからそれはおかしい！」

「はるゆきが間違つてるのよ！」

今日も二人は仲良く元気に口喧嘩をしていた。場所は屋上。そうでなければこれ程の大声は出せない。

一週間に一度は起こるこの状態を歩は孫を見守るおじいちゃんのような目で見ていた。

(青春だねえ)

本日の論題は、甘党とカレーの関係についてだ。

「だから、たとえば甘党といえどもカレーは辛口を食べるべきだ！カレーは辛くなけりや意味ねえだろ！」

と主張するのが勇輝。

「何言ってるのよ！ 甘党よ？ アイスクリームにさらに蜂蜜をかけて食べるのが甘党なのよ？ それがカレーが甘口で、卵を入れて、蜂蜜を入れないなんてどうかしてるわ！ 裏切りよ！」

と反論するのが彩。

それをしょーもね〜と思いつつ歩が見守っている。ちなみに歩はカレーは中辛だ。最初にそれを主張してみたが、二人に中途半端と一刀両断された。

「ふっ、プリンに自家製激甘カラメルソースをかけて、その上砂糖をふんだんに使った生クリームを飾って食べる甘党といえども侵しちやいけねえ領域があんだろ。カレーはなんだ？ スイーツか？ いや違う。カレーはカレー。辛いままで食べてこそ敬意を払うってもんじゃねえのか？」

二人の甘党主張を聞いて、早くも胸やけのする歩だった。

「はるゆきには分からないのよ！ あの舌を突き刺す痛みがどれほど苦痛か！ これは拷問よ！」

「それが何だ！ カレーを食べるならそれぐらい受け止めやがれ！」

二人とも肩で息をして、ゼーゼーと苦しそうだ。

「仲がいいね〜」

暇な歩はそうからかってみた。

「んなわけあるか！」

「そんなことないわ！」

すると両者同時に反論してくる。その反応を見て、歩はますます顔をニヤつかせる。

「痴話げんかみたいだぜ？」

とたんに二人とも頬に赤みがさした。もともと興奮して顔は赤かったが、ますます赤い。

歩は、それを見てこれいけんじゃねえの？ と一人ほくそ笑んでいた。

「何言ってやがんだ、しばき倒すぞー！」

「そうよ、からかわないで！ もう、森本君が決めてよ！」

「それはいい考えだ、よし、お前が決める」

いつの間にか二人は結託し、歩に結論を出せと迫る。完全にとばっちりを受けた歩はしばし悩んで口を開いた。

「……じゃあ、ひとまずカレーは辛いものだと思う。ただし、人の好みもあるし、甘党は甘さを貫き通す姿勢も必要だとも思う。だから、カレーは辛口、ただし卵を入れてまるやかにするのはあり。これどう？」

一応二人の折衷案を出したつもりだが……。

「卵でごまかし？ 子どもっばいけど、まあそんなくらいの配慮はしてやるか」

「辛口？ ふん、まあインドの人に敬意を払ってあげなくもないわ」

互いに見栄を張っているが、この意見で手打ちとするらしい。  
歩はやれやれと呆れ顔だ。

もうすぐ梅雨に入ろうとしている。歩はいつまでこれが続くのだろうと、進展のない二人を少しもどかしく思うのだった……。

梅雨も明け、期末テストが近づいた頃。歩が熱出た、と学校を休んだ。

四時間目、二人は次の数学面倒だよなと珍しく意見が一致し、屋上でさぼっていた。

「森本君熱だつて？」

「いや、絶対仮病だろ。熱出たので三日間休むって、どんだけ計画性のある熱だよ」

二人はフェンスにもたれて並んで座っていた。

「心配してないの？」

「誰がするかよ。あいつは殺しても死なねえよ」

「森本君可愛そ〜」

「うつせえ」

勇輝はついつとそっぽを向いた。沈黙が降りる。

(何話せばいいんだろ)

歩がいればなんだかんだで話が出てくるが、こつ二人つきりになると会話の糸口がつかめなかった。

(うつ、どーしょ。森本君がいないと、緊張する)

それは彩も同じで、三人でいることに慣れすぎて、今さら何を話せばいいのかが分からなかった。

「ねえはるゆき」

「ああ?」

勇輝は慌てて口をつぐむ。少し考え事をしてたので、返事がかなりガラの悪いものになってしまった。

二人の視線がバチリと合った。

「ほんとに口、悪いよね」

彩もしまったという顔をするが、言葉はひっこめられない。

「うつせえ、関係ねえだろ」

出てくるのは憎まれ口ばかり。言葉になった瞬間に後悔するが、もう遅かった。

「もう我慢できないわ！ そんな可愛い顔してんのに、もったいないじゃない！」

楽しい話をするはずが、口喧嘩になってしまった。

「てめえ、人が嫌がることを……」

「何度でも言うわ、はるゆきは可愛い。目はくりんとしてるしまつ毛も長い！ 唇も愛らしいし、髪もさらさら、肌もつるつる。女の子はみんな羨ましがってるのに！」

「んなこと知るかよ！ 俺は男だぜ？ 嬉かねえよそんなもん！」

「だから何よ！ 可愛いものは可愛いんだもん！ 自信を持てばいいじゃない！」

勇輝はくつと拳を握り締めて奥歯を噛みしめる。

「はっ、お前に嫌々女装させられた奴の気持ちがわかるかよ！」

「その女装に誰かは癒されたはずよ！」

「俺はこの顔のせいで散々からかわれて、舐められてきたんだ。俺はこんな顔大っ嫌いなんだよ！」

「私は好きよ！」



彩はそう叫んでから、自分の言葉に気がついた。顔に血が上って真っ赤になる。

勇輝は虚を突かれた顔をしていた。

「私は、勇輝のその可愛い顔が好き。ていうか、勇輝が好きなの！  
悪い？」

勇輝は何も言い返すことが出来なかった。初めて自分の顔を好きだと言ってもらえたのだ。そして、自分を好きだと。

可愛い、守ってあげたいという好きではなく、正面からぶつかつて、対等な目線での好き。

頭の上っていた血が、頬に集中する。心臓がバクバク暴れて、呼吸が苦しい。

「黙ってないで何か言いなさいよ！」

彩がぐいっと勇輝の胸倉を掴んだ。彩の瞳の中に、勇輝がいる。

最初はうざい女だった。突っかかれればムキなって、いつかその言い合いが楽しくなっていた。

途方もなく我がままだけど、それすら可愛く見える。

何故か。それはずいぶん前から分かっていた。

「……………好きだ」

そう呟いてから、勇輝は恥ずかしくなって視線を逸らした。胸倉を掴まれていた手が離され、彩が少し遠くなる。

「…………嘘」

「嘘じゃねえよ！」

つい勇輝は声を荒げてしまう。彩と視線がぶつかって、その潤んだ瞳に惹きこまれた。

「じゃ、じゃあ。一緒にいてくれるの？」

「こういうのは男が言うもんだろ」

勇輝は悔しそうに唇を尖らせ、そして彩の目をしっかりと見て言った。

「桜田……俺と付き合ってくれ」

「うん！」

あまりにも気持ちのいい即答に、勇輝は嘖き出した。彩もつられて笑う。

「じゃあ、彩って呼んでね」

彩がそう頼んでみると、

「……彩」

勇輝が耳まで真っ赤にしてその名を呼んだ。可愛い顔がますます可愛くなる。

「照れてる」

「うつせえ」

「言葉づかい」

「うつせえ」

「うつせえ、でしょ？」

「……うつせえ」

彩はえへへ、と笑って勇輝の肩に頭を乗せた。

勇輝は目を泳がせながら、その重みを愛しく思った。

「はるゆき」

「ん？」

「ずっと、一緒だからね」

勇輝は、強く頷くと空を見上げた。

空に浮かぶ白い雲が、全て綿あめに見える。それぐらい、今の勇輝の気分は甘かった。

トクントクンと心臓が鮮明にその音を告げる。

彩からふわりと香るいい香りに、胸が締め付けられる。

愛しい。そう感じる。

(やばい。これは重症かも)

今まで味わったことのない感覚。ただの好きとは違う。もう、離したくない。

勇輝は完全に負けたな、と苦笑いを浮かべて風に吹かれた。

「で、その子誰？」

三日後に遅刻して登校してきた歩は、朝から屋上にいる勇輝にその声をかけた。

その隣にはべったりと彩がひっついていて、劇的な変化が起きていた。

「ん？ 俺の彼女」

勇輝はニツと笑うと、彩と視線を交わして、微笑みあう。

「……………お幸せに」

そそくさと歩は屋上から立ち去った。激甘の甘党カップルに胸やけが起きそうだ。

（春が来たな〜）

歩は屋上でハートが乱舞しているのを感じながら、微笑を浮かべて階段を下りた。

甘い甘い二人の話は、まだ始まったばかりである。

第0章の2 空に浮かぶ白雲は綿飴となって二人を包む（後書き）

甘いのか、甘くないのか、それが問題だ。

神名の裏話

一章を読み返して、不良たちの間に喧嘩は外でやるという暗黙の了解があつたことを発見。

その瞬間、勇輝のせいか。と思いました。（作者自分なのに……）  
勇輝は伝説の不良だったんです。たぶん！

そして、勇輝の言葉遣いも解決。  
ずっと、不良のわりには口悪くないなと思ってた。（だから作者は自分だろ？）

彩の更生の成果だね！ えらいね彩！

そしてカレーの談義もこんなところに入りましたね。いろいろ繋がったね！

零章はこれで終了。さすがに一話だと寂しいから分割しました。  
ただ、またふとした時に零章が復活している気も……。

ひとまず、前に進みますか。いざ、三章へ。  
では、次回。いつになるでしょう？

### 第3章 プロローグ

今日もまた闇夜が訪れる。音を吸い込んだ静かな夜。黒い空に月が穴を空けている。

満ち欠けを繰り返す月。

それに影響される不安定な力。

削がれていく月の力、蝕みゆく力。

夜風になびく銀系の髪も、いつかは黒に染まるだろう。

それでもかまわない。願いが叶うなら。

新月の、光が届かない夜は、あの女を思い出す。黒髪の、闇を纏う女。

憎い。

ただ、その感情が全てを支配する。

敬愛も、尊敬も、全て憎しみに変わった。

あと一度、あの女とは相対さなくてはならない。この願いを叶えるために。

この願いを果たすまで、私は死なない。

私は死ねない。

### 第3章 プロローグ（後書き）

プロローグ明けは普通のテンションですので、しご安心ください。



### 第3章の1 職業さらわれ屋

夜、町のとある屋敷の一室。仄かな明かりだけが灯る部屋で、密談が行われていた。

屈強な男たちが膝を突き合わせて何やら話しこんでいるようだ。部屋の一つ高くなった場所に、一人の男がおり、話し合いを黙って聞いていた。

畳に並べられているのは六枚の写真。どれも制服姿の少年少女だ。

「よし、まずは何だか弱そうなこの子から！ いいですか、親父」

話をまとめていた年長の男が、写真を指差して和装の男を振り仰ぐと、男は黙って頷いた。明りが消え、話そのまま闇へと紛れていった……

新年が明け、勇輝は三が日を家で過ごした。

おせちを食べ、お正月番組を見て笑う。

母方の祖父母はとっくの昔に他界し、父は祖父母に勘当されたと笑っている。帰省というイベントはない。よって祖父母からお年玉をもらうこともなく、少しばかり両親から頂いただけだ。

三が日が過ぎて如月に戻り数日すればもう学校が始まった。お正月気分が日々を過ごせばもう一月も終わり、一月が行くとはよく言ったものだ。

そして春日勇輝十七歳。

彼は広い日本家屋の一室で、椅子に座っていた。畳の上に不自然に置かれたただ一つの椅子。肘掛がついて座り心地は最高だが洋風で違和感この上ない。一人座らせられて、王様の気分を味わってい

るのだろうか。

その椅子に、肘掛に腕を縛られ、胴を背もたれに括りつけられていなければの話だが……。

只今勇輝は、今年三度目のヤクザによる誘拐に遭っていた。

ヤクザからの絡みは学校へ攻め入ったあの時にけりがついたものと思っていたが、彼らはヤクザのなかでもひよっこだった。

昔からの任侠と呼ばれるような、筋のある漢たちは期を待っていたのだ。死堅牢如月を徹底的に潰し、その座を奪い取るうと画策する彼らは、勇輝をさらって脅すという古典的手法を取った。

目の前に広がるは組員たちの宴。肴はもちろん勇輝。

少し視線を向こうにやれば、相對するように組長の親分が勇輝を睨んでいる。

そんな喧騒の中、勇輝は心の中で必死に謝っていた。

(ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい！俺がすっかりしてたのが悪かったんです。でも、でもさ、後ろからいきなりスタンガンは無いと思うんだよ……ね)

しかし、この全力の謝罪はこれから勇輝を助ける面倒を行う仲間に対してではない。

これから助けにくる彼らが起こす肅清によって、路頭に迷う目の前の組員に対してだった。

(酒とか飲んでないでさっさと逃げてください。ていうかヤクザに連絡網はないわけ？)

勇輝はタオルで口を塞がれ、必死に伝えようとするが籠った唸り声になるだけだ。

つい先日さらった二つの組も、決戦の景気づけにと飲めや歌えや

の大騒ぎだった。

もちろん、見張りはしつかり勇輝の傍にいるが……。

先の二つの組がこうやって失敗していることを彼らは知らないの  
だろうか。いや、おそらく知っていても、信じているのだ。自分た  
ちの勝利を。

たかが高校生に自分たち任侠の者が負けるはずがないと。

彼らがただの高校生なら、そうだったはずだ。しかし、彼らは魔  
術師。ただ残念ながらその事実は龍牙隊の中でのみ知られることで  
あり、一般人には秘匿それがヤクザであつてもされていることだった。

（頼むから。誰もこないで。来るなら弥生以外にしてええ！）

先の二回の誘拐では、一番最初に弥生が救出に来、組の全員を半  
殺しにした拳句、屋敷を剣一本で全壊させた。

次に来たのは錬魔で、全員を催眠ガスで眠らせた後、同様に眠る  
勇輝を担いで帰っていった。ヤクザたちは身体的には無事だったが、  
零華によって社会的に抹殺された。

勇輝は路頭に迷ったヤクザたちに真剣に同情したのだ。もう、あ  
のような過ちは犯さないと誓ったのだが……。

（なんでこう、俺は攫われやすいのか）

そう思った瞬間。爆発音が轟いた。

今までのなかで一番派手な乗り込み方に、勇輝は一発で誰が来た  
のか分かった。

（秀斗が来た）

安堵が半分、不安が半分。弥生ではないことで安心したが、爆発  
音に不安が募る。

組員たちが騒然とする中、組長は部屋の隅に飾られていた日本刀をその手に取った。

「勇輝。無事だな！」

廊下をバタバタと走る音が聞こえ、ついで声とともに金髪美形、秀斗が姿を見せた。

今日も黒いヘアバンドが金髪を引き立てて見目麗しい。

秀斗は隊員服を着ており、羽織は着ずに綿のズボンにTシャツ。それに上着を羽織っていた。特徴は、ズボンと上着に多数のポケットがあることだ。

（無事だよ）

と伝えてみるが、秀斗には不明瞭なうめき声しか聞こえない。

「単身一匹乗り込んでくるとは命知らずな奴め、者どもかかれ！」

組長が立ち上がって、そう叫ぶと、四方の襖が開かれて大勢の組員が姿を現した。それぞれ長ドスやらナイフを持って牽制している。

「おっと？　なんだ、正気の奴らがけっこういるじゃねえか」

先ほどまで酒宴を楽しんでいた人々の姿は消え、四方敵に囲まれた状態になる。

「先の二組はそうやって負けたからな。あれはフェイクだ」

組長は恰幅の良い体を揺すって笑う。

「お前ら！ この餓鬼を葬って死堅牢の座を奪え！」

それを合図に組員たちが一斉に動き出す。

次々に秀斗に襲いかかるが、ヘアバンドの下で星鎧の能力、絶対守護を発動している秀斗には掠りもしない。

「おらおら！ まとめてこいよ！」

秀斗は向ってくる敵を殴り飛ばし、蹴り飛ばし、時には麻醉銃で眠らせて床に沈めていく。

そしてその数も数えられるほどになったところで、勇輝の背後に人が立った。

「こいつの命がどうなってもいいのか！」

お決まりの脅しが発動した。

勇輝は組長によって添えられた首元の日本刀に目をやって、塞がれた口の中で溜息をついた。

(こんなの脅しにならないって)

弥生の場合は問答無用で間合いを詰め、脅した男の脳天を剣の柄で強打した。その速さは人のものではない。否、人ではなかった。

秀斗は早撃ちで残りの組員も眠りにつかせると、銃口を組長に向けた。

それに応えるように勇輝の首筋に刃が押し当てられる。少しでも動かされれば、一筋の赤い血が流れるだろう。

「そんなことすると、可愛い勇輝が泣いちゃうんだけど？」

これは組長に向けられたものではなく、勇輝に対する嫌がらせだ。

(誰が泣くか！ 後でぶん殴る！)

「ふん。こいつを殺されたくなければ、その武器を置け。お前も交渉の材料にしてやる」

秀斗はしばらく躊躇い、やれやれと言わんばかりに銃を前に投げた。

「タイムアップ、みたいだぜ？」

軽く両手をあげて、爽やかに笑った。あまりにも爽やか過ぎて逆に嫌な予感がする。

「死ね」

物騒な声は別の方向から、そして別の声質で勇輝の耳に届いた。勇輝の視界を銀色の髪が掠め、首元から刀が離れた。えっ、と思ったのもつかの間、すぐにああ……と驚きは同情に変わった。

振り返ると同時に組長が膝から崩れ落ち、勇輝の体は自由になる。

「ご苦労さん、弥生」

組長の背後に出現し、その頸椎に剣の鞘を叩きこみ、勇輝を縛る縄を切った。その間二秒、見事な早業だ。

弥生は美人を損ねる無表情で月契を鞘に納めると、具現化を解いた。

「あ、ありがとう」

勇輝は椅子から立ち上がって体を伸ばす。ちらりと組長の無事を確認すると、ぐるりと部屋を見回した。現在立っているのは如月の三人のみ。

「……まあ、屋敷が無事なだけよかったほうだよな」

彼らに雨風をしのげる家が残っただけでも万々歳である。

「つーか弥生。今回は俺の出番なんだけど、なんで来たんだよ」

「お前と同じ理由だ」

「あ、なるほど」

二人はつかの間視線を交錯させると、別々の方向へ歩き出した。

「え、ちょっとどこ行くんだよ」

勇輝はどちらを追うべきかと二人を交互に見る。やけに二人があっさりしすぎていて嫌な予感がするのだ。

「酒蔵。ここのじいさん、酒のコレクターとして有名だからよ」

「私室。こいつは日本刀の蒐集家として名高いからな」

返事は完全に私欲であり、勇輝は呆れてすぐに言葉が返せなかった。つまり彼らはここに漁りに来たと言ったのだ。堂々と。

（もしかして、俺を助けるとか頭に無かった？）

おそらく、勇輝を助ける方がついでだったのだろう。

勇輝はしばらく悩み、酒蔵へと進む秀斗の後を追うことにした…  
…。

酒蔵は屋敷の外にあった。蔵の鍵を壊して入ると、そこには棚中に並べられた酒の数々。瓶ではなく樽で置いてあるものもあった。秀斗は喜々としてそれらを見ていく。

「あゝ、日本酒類は全部持ってるな」

どうやら棚に並んでいるのは全部日本酒らしい。が、ざっと見ても数百種類は並んでいる。これらを全て持っているという秀斗の蔵は一体どんなものだろうか、と勇輝は少し興味が湧いた。

「秀斗ってそんなに酒が好きなの？」

「当たり前。俺らにとつちゃ酒はお茶だからな。ないと困る」

アル中のような発言だな、と思いつながら勇輝も辺りを探った。酒には詳しくないので見てもさっぱり分からないが……。

戸口付近をうろついていると、足に引っかかりを覚えた。不思議に思っただけを探ると、一部が開くようになっていたらしい。

（隠し扉？）

勇輝はわくわくして、取手をつかんで持ち上げる。重たいそれは、ゆっくりと開いていった。

階段が現れ、地下に続いているらしい。



「秀斗、地下室見つけた」

勇輝は得意満面で二階を物色している秀斗に声をかける。

「おっ、でかした!」

秀斗は階段を駆け下りて来て、その入口を覗き込んだ。

「暗いな」

そう言うと秀斗は、二の腕にあるポケットから小さな懐中電灯を取り出した。突如現れた便利道具に勇輝は目を丸くする。

「このポケットって飾りじゃないんだ」

「当たり前。色々入れてるんだ、便利だぜ?」

「色々?」

「色々」

秀斗はにたつと笑った。深く詮索するべきではないと本能に訴える笑みだ。

そして懐中電灯の光を頼りに下りていくと、空気はさらにひんやりと冷たくなる。

「最高の保存場所だな」

秀斗が辺りを探って電気スイッチを見つけると、明かりをつけた。

「すっげえ」

二人同時に感嘆する。電球に照らされて露わになったのは、所狭しと並べられた洋酒の数々。樽で保管されているのも多かった。

「おおお！ すげえ、ノッキーン・ポチーンじゃねえか！」

秀斗が瓶の一つを手にとって目を輝かせている。

「それ何？」

「アルコール度数九十。アイルランドで作られてんだ。最近まで密造酒になってたからなかなか手に入らなくてよ」

アルコール度数九十？ と勇輝は首を傾げる。そんな度数は聞いたことがない。

テキラーも四十から五十のはずだ。

「こっちにはハプスブルグ・アブサン・プレミアム・レゼルヴ・ストロングがある！ 八十九・九！ アブサン最高！」

呪文のような名前に、付いていけない勇輝は自分にもわかるワインを探し始めた。

（シャンパンとか、ないかな）

「ごそごと、泥棒そのものだが秀斗を見ていると良心も動かなくなつた。

「マジ？ スピリタス！ 勇輝見ろよ！ これが世界で一番強い酒だぜ？ アルコール度数九十六！」

それほど度数が高ければグラスに注いだ瞬間に気化するが。

「……頼むから、それ俺に飲ませようとかすんなよ？」

飲んだ瞬間あの世行き決定だ。

アルコール度数の世界三強が揃い踏み、一体この組長はどういう趣味をしていたのだろうか……。

しばらく家探しをして、日本刀を二振り持った弥生と落ちあつて如月へと帰つた。

彼女も彼女でよい得物を見つけたようだった。

如月のホールに入ると、三人が帰りを待っていた。

「お帰り〜勇輝君の奪還ご苦労さま」

肩までのゆるくウェーブがかかった茶髪に愛らしい顔をした癒慰が癒しのオーラを纏つてお茶をしていた。本日の衣装は呪われた屋敷に現れる吸血鬼らしく、ミニスカに短いマント、笑顔から鋭い犬歯が覗いている。

「怪我はないな」

あつたら殺すぞ？ とでも言わんばかりの高圧的な物言いと鋭い視線。三人の無事を確認すると、如月の医者、鍊魔は踵を返して出て行った。一房だけ長い赤髪が背中揺れている。普段着の上に白衣を着ていたので実験でもしていたのだろう。

「組のみなさんに迷惑をかけてはいませんか？」

才色兼備、品行方正の零華は藍色の長い髪を揺らして、優しく微笑みかけた。

その問いは主に人体損傷、屋敷破壊をしていないかというものであるが、今から社会的な抹殺を図る彼女が言々と説得力に欠ける。

「酒三つゲット。度数九十越えだぜ」

「あらあら、それは楽しみですね」

「これも勇輝君が攫われてくれたおかげね」

癒慰がよくやったと親指を立てた。

「ほんと、お前はよく攫われるよな」

潰す口実が出来るからいいけど、と秀斗は付け加えた。勇輝は完全な餌である。

「どーせ俺は職業さらわれ屋ですよーだ」

ぶいっと少し拗ねた勇輝は、お茶淹れようか？ と訊く癒慰の言葉を無視して部屋に帰って行った。

「でも、ちょっと危ないわよね」

「ええ、今はまだ攫われるくらいですんでいますが、いきなり後ろからグサツともいきませんしね」

「でも歯向いそうな組ってこれが最後じゃねえの？」

「私たち、どれほどの恨みを買ってると思ってるのよ」

三人は各々思い当たる人の顔や団体を頭に浮かべた。大小様々だが、厄介なものもある。

「対策を打つべきですね」

「何かあんのか？」

「ええ。癒慰ちゃん、匠さんのところに行って、今から言っものを作ってもらってください」

それから三人は、零華の策について話し合いを始めた……。

### 第3章の2 カフェイン騒動

季節の移り目というのは気温の変化が激しく、風邪が我が物顔で活動を始める。

特に冬はインフルエンザの季節である。しかも近年はニューフェイスが躍り出た。

ブヒブヒ言いながら遊んでばかりいたあいつがこんなに立派になつて……と親類縁者は涙を流したという。

引きこもりが後に世界をまたにかけて活躍するなんてのはよくある話だ。

そしてご他聞にもれず、勇輝の学校にも奴は攻め入り、勇輝のクラスはあっけなく陥落した。

そして学校は白旗の代わりに学級閉鎖を掲げたのであった。

朝起きたら、なんか喉がイガッぽかった。

最近乾燥してるからなあでも手洗いうがいにはちゃんとしたのにな、と勇輝はベッドの上で喉を押さえながら思索していた。学級閉鎖につき寝坊し放題だ。

(風邪ってほどヤバくもなさそうだし……)

勇輝の頭にニューフェイスの影がちらつく。

(いやあ……熱ないし。やっぱり乾燥だって。うん、俺は風邪に負けるほどやわな男じゃない！)

気持ちの整理が付いたので、彼は活動を開始した。適当に朝ご飯を食べ、リビングに置いてあった飴を鷲掴みにしてポケットに入れておく。

カフェオレキャンディー、ちょっと大人の気分が味わえる代物だ。それを舌の上で転がし、如月の部屋を思い浮かべながら自室のクローゼットを開けた。

物が詰め込まれたそこはポツカリと穴が開き、違う景色に繋がっている。

その穴をくぐり、勇輝は如月の自室に暖炉から入った。

そしてすぐに部屋を出てホールに向かう。

とその時右の遙か向うに金色の影がちらついた。颯爽と歩く少年は長いコンパスですぐにみえなくなったが……。

「秀斗……！」

さながら主人を見つけた子犬のように秀斗に駆け寄り寄る勇輝。

「お、勇輝、来てたのか。相変わらず可愛い顔してんなあ」

秀斗は挨拶がわりに勇輝の頭を撫でた。それほど勇輝は身長が低い。

勇輝は秀斗を見上げニコリと微笑み、みぞおちに拳を叩込んだ。

「次言ったらそのヘアバンドむしり取って海に捨てるから」

「……ごめんなさい」

うっかり勇輝のタブーを犯してしまった。可愛い、子ども扱いとダブルパンチ。

秀斗は勇輝の後ろに猛犬注意の看板を見た。

「てか秀斗、なんか声おかしくない？」

「ああ、ちよつと喉がやられちゃって……あれだな、乾燥してたからな」

何があつても風邪とは認めない。男は意地っ張りな生き物である。

「じゃあこれ舐める？喉イガにはよく効くよ」

と勇輝はポケットの飴を秀斗にあげた。

「へー、ありがとな」

そして二人は口の中で飴玉を転がしながらホールへと向かう。

「これ何の味？ 苦甘いつつーかんじだな」

「カフェオレだよ。最近ハマってるんだ」

「ふーん。なんかあれだな。カフェオレってのは体温を上げんのか？」

「いや、目を覚まさせるだけだと……え？」

ふと秀斗の顔を見上げると顔が紅く染まっていた。

「秀斗大丈夫？ 熱出て来たんじゃない？」

「ば、ばかやろう……俺が風邪ごときにやられると思ってんのかあ？」

「でもなんかふらついてるし」



「き、きのよせいら」

「呂律も回らなくなってるよ！ 重症だって、早く寝ないと！」

勇輝はふらつく秀斗を支えながらホールのドアを開けた。

「おはよ〜」

「あ、おはよ〜勇輝君……と秀斗君？」

癒し系コスプレ少女の癒慰が優雅にお茶を飲みながら迎えてくれた。ちなみに今日の衣装は院長と不倫関係にあるナーズらしい。

勇輝は近くにあったソファーに秀斗を寝かせて、側の一人掛け用ソファーに座った。

癒慰は急須に茶葉を入れてお湯を注いでしばし蒸す。勇輝専用の湯呑みが注がれるのを待っていた。

「秀斗君どうしたの？」

こぼこぼとお茶を注いで、癒慰は訊く。秀斗はううと唸っていた。

「風邪だと思うよ」

勇輝はずっとお茶を飲む。

「風邪ですか……馬鹿でも引くものなのですね」

品行方正、才色兼備なお姉様の零華が氷の言葉を秀斗の胸に突き刺した。

「錬魔くん。ちょっと秀斗くんを見てあげてよ」

ソファで読書をしていた錬魔は面倒くさそうに片眉をあげ、立ち上がった。勇輝と並ぶと大人と子供ほどに見える長身に目付きを悪く見せる切れ長の目。平気で人を殺しそうな顔をしていても根は優しい医者である。

「く、薬なんていらねえぞ」

「安心しろ。馬鹿につける薬はない。多少体がほてっていて、喉も少しはれているな」

「頭がグワングワンするぜ……」

（以前にも似たような事があったな……あれは何があった時だっただろうか）

錬魔はしばらく記憶を探ってみたが諦め、

「黙って寝てろ」

それだけいうと再び読書に戻った。

勇輝は暇なのでゲームをしながら秀斗の看病をすることにした。

また喉がいたくなってきたので飴を舐める。

あともう一押しで魔王を倒せるところまで進んだ時、荒々しい足音とともに弥生が入ってきた。

「あ、弥生おはよ〜」

朝から美しく、銀色の長い髪を揺らして颯爽と歩いている。弥生は綺麗に勇輝を無視して秀斗に詰め寄りその胸倉を掴んで起き上がらせた。

「ちよつと弥生！ 秀斗今病人なんだけど！？」

「おい秀、お前この前持っていった本、どこにやった？」

「ほへえ？」

半浮遊状態の秀斗は完全に茹で揚がっている。潤んだ目で弥生を見上げていた。

「貴様ふざけるのも大概に」

「抱き枕みつけ」

弥生の不満を総無視して秀斗は弥生を抱き締めた。弥生はバランスを崩して秀斗の上に倒れこむ。

あまりの出来事に勇輝はソファーからずり落ちそうになった。

その上秀斗は枕ぐ、と弥生に頬擦りをしている。

空気が一気に冷ややかになり、怒髪天をこえた弥生がその手に剣を召喚しようとした。

「覚悟しろ。月け……」

「お前は俺のもの」

が、秀斗が愛の瞬殺レベル五のセリフを口にしたとたん、弥生は体の自由が利かなくなつた。

(な、なんだこれは。術をかけられたというのか！)

身動きが取れず、弥生はうろたえた。

(まさかこれは！)

「あ……思い出した」

騒動を傍観していた錬魔がポツリと呟いた。

「わたくしも思い出しました」

「私も……」

彼等の記憶が浮上した間に秀斗は次の行動に移った。体を起こすと、弥生をお姫様だっこをして連れさってしまったのである。

「秀！ 離せ！ 降ろせ！ 術をとけええ！」

「やだ〜。俺枕ないと寝れねえもん」

先ほどまで千鳥足だったのが信じられないほど軽い足取りで秀斗は去って行った。

嵐のような出来事に勇輝はポカンと口を開けている。正気に戻ったのは秀斗が消えた数十秒後。

「え……秀斗何した？」

「空間支配の力だ。ああやって相手の自由を奪うことが出来る。ま

あ、呪文は目茶苦茶だったが……ところで勇輝、秀斗に何か飲ませたか？」

「ううん。あ、飴あげた」

「飴？」

勇輝はズボンのポケットから飴を取り出して鍊魔に見せる。

「カフェオレ……原因はこれか」

鍊魔の表情がみるみる陰っていく。

「あの……なんか悪いことした？」

「ん〜。私たちがお酒で酔わないのは知ってるよね」

「うん。秀斗がお茶だって言ってた」

「そう。それね、比喻とかじゃなくて事実なの」

「……といえますと？」

「わたくしたちは少し人間と作りが違います」

癒慰の言葉を零華が引き継ぐ。

「人間はアルコールで酔いますが、わたくしたちはカフェインで酔います」

「コーヒー……」

「ええ、それが代表的ですね」

勇輝は血の気が引いていくのが分かった。秀斗なら酔った勢いで何をするかわからない。弥生が色々な意味で危機を迎えている！

「安心しろ。秀斗は酔ったらすぐに寝る。今頃はもう夢の中だ」

「けど……」

「経験者が言うのですから間違いありませんよ」

零華の微笑みは勇輝の不安を少し和らげた。

「経験者？」

「ええ、錬魔君も癒慰ちゃんも一度酔った秀斗君に抱き枕にされたことがあるのです」

「そうなの？」

勇輝が二人に視線を向けると

「あれは不覚だった」

「思い出したくもないわ」

各々渋い顔をして呟いたのである。

「あれ？ でも錬魔ってよくコーヒー飲んでたよな」

今も本の横にあるカップの中身はコーヒーだ。

「仕方ないのよ。錬魔君カフェ中だから」

「アル中みたいなの？」

「あれと一緒にするな」

「禁断症状がないだけでしょ。カフェインに強いのも大概にした方がよろしいですよ」

錬魔は何か言いたげな顔をしたが不承不承の体で頷いた。

「じゃあ紅茶は？」

癒慰がいつも飲んでいるものは紅茶のはずだ。

「私のは日本酒よ？」

そう言っただけで中身を見せてくれると、透明だった。

「まさかの熱燗」

チヨイスがしぶい。

「そんなことより。早く荷物をまとめて出るわよ」

「え、なんで？」

「嵐が来るの」

「……秀斗って酒乱？」

申し訳ないが、容易に秀斗が酒瓶片手に暴れ回る姿が目には浮かんだ。

（酒は人を変え……あ、コーヒー？）

「違う。荒れるのは今枕になっている弥生だ」

「あ……なるほど」

あっさり納得できる。あの様子では相当こ立腹だろう……。

「では私は実験室などを空間転移させておきます」

「私も手伝うわ」

二人は慌ただしくホールを後にし、鍊魔は残っていたコーヒーを飲み干すと勇輝に向き直った。

「で、お前はどつする。家に帰るか？」

ここにいと命が危ないのは明白な事実だ。

「鍊魔たちはどつするの？」

「俺たちは本部に行く。一応如月の部屋もあるからな」



通常はそこで生活し、本部との連絡が速やかに出来るようにするのだ。

如月は異空間に引きこもっているが……。

「あゝ、あそこ。俺も行こうかな」

「ならばいい」

「じゃあ荷物をまとめて来る」

そして簡単に荷物をまとめた勇輝が再びホールへ戻るとすでに荷造りを終えた錬魔がいた。

「錬魔はやっ」

「多少は向こうに置いてあるからな」

「へ〜。でもなんで3日も避難しなきゃいけないんだ？」

勇輝は荷物を降ろし、錬魔を見上げる。錬魔は遠い目をして、記憶を辿りながら答えた。

「ああ。ずいぶん昔、任務でアメリカ軍の特種部隊を訓練していた時に同じことがあってな。あの時は基地の外に逃げ出したんだが……」

そこで錬魔は一度言葉を切った。その表情は固く、思い出したくも、語りたくもなさそうだ。

「閃光が飛び交い、基地が壊れて行く。あれは……」

「見物だったよね」

と、突然声が割り込んで来た。荷物がまとめられたらしく、二人が戸口に立っている。

「ええ、弥生ちゃんも滅多に使わない高等魔術を披露してくださいました」

「なにより、基地が崩壊するにつれて蒼白になっていく兵士達が面白かったわ」

勇輝はその時の兵士の気持ち分かる気がした。まだ幼い子どもが破壊の限りを尽くす。想像を絶する恐怖だろう。

「それが3日間続いたんだ」

「その後グダグダだった軍がよくまとまるようになって、おおいに助かりました」

「……へえ」

昔から彼らは他人に迷惑と畏怖を振りまいていたことが判明した。悪名が高くなるわけだ。

「そういうわけだ。巻き込まれる前にでるぞ」

鍊魔がドアノブを引いてから回すと、ドアの向こうは本部の廊下

であった。

前は弥生と挨拶をするためにくぐったドアだ。また来ることになるとは思わなかった。

そして相変わらず薄暗く、空気が澱んでいる。まるで主がいないのを恨んでいるようだ。

「暗いわね。電気は確かこちらへんに……」

癒慰は壺付近の壁を叩き始め、程なく一部分がパカッと開いた。

その奥にブレカーがあり、それを上げると瞬く間に明かりが灯る。

光を受けた本部如月は、なかなか立派なものだった。赤い絨毯に、廊下に等間隔に並ぶ蔽めしいオブジェ。ぐるりと辺りを見回した勇輝は、西洋建築にそぐわない物を見つけた。

ドアの隣りに現代生活用品のインターホンが申し訳なさそうにあったのだ。

「なぜにインターホン？」

「勇輝君が無いと不便って言ったでしょ？ だからこっちにもつけておいたの」

こんなところにも勇輝の影響が及んでいた。

「じゃあ、3日間ゆっくり羽をのばそっか」

そして3日間の避難生活は各自部屋の掃除から始まった……。

そして3日後。

彼等が屋敷に恐る恐る帰ってみると、そこには力を使い果たし、ソファで不愉快そうな顔で寝ている弥生と、瓦礫の上でボロボロになって倒れている秀斗を発見した。

秀斗のやられようは錬魔がすぐに駆け寄って脈をはかってしまったほどであった……。

「今回は屋敷崩壊とまではいかなかったようだな」

屋敷をざっと点検した後、ホールに集まった彼らは被害状況を確認した。

「内装が崩れているだけで、骨格には問題ありませんね。本部つきの大工を呼んで直してもらいましょう。もちろん費用は秀斗君持ちで」

彼等の徹底個人主義はいくら仲間がボロボロになっていようとも関係はない。

「……秀斗、よく生き残れたね」

勇輝だけが惨状をみて秀斗に同情した。

「そうだね。でも、今回はここ一番のやられっぷりだったわ」  
クスクスと笑いながら話す癒慰に、ますます勇輝は同情の念を強くするのだった……。

そして秀斗は目覚めるやいなや彼らに、

「薄情者！」

と詰め寄ったが、  
錬魔に

「自業自得だ」

と突き放され、

零華に

「修復よろしくお願いしますね」

とやんわりかわされ、

癒慰には

「もうちょっとであの世に行けたのにね」

と真正面から刺された。そして勇輝は哀愁を漂わせている秀斗の肩に優しく手を置いたのだった。

元はと言えば勇輝がカフェオレ味の飴をあげたのがいけなかったのだが、そんなことは三日の間にきれいさっぱり忘れていた。

そして向こう三日間、弥生の機嫌が悪かったのは言うまでもない。

### 第3章の2 カフェイン騒動（後書き）

もとは短編として数年前に書いてあったものをリメイクしました。

ではまた次回。

### 第3章の3 試験って疲れる

二月に入り、土曜日。勇輝は朝から如月にいた。自宅で寝ていたところを、抜け道からやってきた秀斗に起こされたのだ。

そして連れて行かれた場所はホール。そこでは零華が勇輝を待っていた。秀斗は零華と視線を交わすと、手を軽く振って出ていった……。

「おはようございます」

「おはよ〜」

勇輝は零華の向かいにあるソファーに座り、朝食用に掴んできたパンを食べ始めた。何やら話があるようだが、朝食も大事。一日の始まりの食事はきちんと取らねばならないのだ。

たとえそれがあと二時間で昼になろうとしても……。

「勇輝君。貴方が如月に入ってから二カ月になろうとしていますね」

勇輝は咀嚼をしながら頷く。気づけばもう二カ月、早いものだ。

「実はですね。龍牙隊において、牙軍に入るには試験があるのです。ですが勇輝君はこれをすつとばして如月に入っています」

勇輝は出された緑茶を飲み、

「そーなんだ」

と相槌を打った。レギュラー争いみたいだなと心の中で思う。

「ですから、これから勇輝君にその試験を受けてもらいます」

「なんですと？」

「大丈夫です。形だけですから。改めて、私たちに認められる必要があるだけです」

形だけとにこやかに言われても、試験に落ちたら如月にいられなくなるのでは？ と不安になる。

瞳に不安の色を覗かせる勇輝に、零華は説明を続けた。

「今から如月の全員を回って試験を受けてください。合格すればこの紡命珠ほうめいじゆがもらえます」

そう言って零華が手のうちに藍色の珠を出現させた。空間から生まれたように出現したそれは小さく、親指の爪ぐらいの大きさしかなかった。

髪と血を媒体にして、己の力を押しとどめた珠だ。

気になることは二つある。勇輝は空間から珠を出したことは魔術師だからと割り切って、もう一つの疑問を口にした。

「前に見たのはもう少し大きかったと思うんだけど」

以前mukashi鷺が来た時に見せてもらったものは、五百円玉程の大きさがあった。

「凝縮版です。では、試験を始めましょうか」

散歩に行きましようか、とでも誘つかのような軽さで、彼女は試



験の開始を告げた。

「え、ちょっと」

「私からの試験は口頭質問です。いいですね？」

勇輝がおどおどと挙動不審になるのも気にせず、零華は試験を始めた。

「では、まず……」

勇輝は背筋を伸ばして、面接のいろはを頭の中で再生する。手は軽く握って膝の上、足はほどよく開いて、目線はしっかり相手を見る。

その真剣な表情に、零華は口元を綻ばせ、問題を口にした。

「一たす一は？」

勇輝は反射的に答えを口にしようになったが、寸前で喉奥に引っ込めた。

(二なんて簡単なわけないよな)

零華はうつすらと笑っていて、それが質問自体に怪しさを感じさせる。何か裏があるのではないかと、疑ってしまうのだ。

(昔流行った中に、田んぼ田ったのがあったな。もしかして、そっちか?)

勇輝は零華の表情から意図を読み取るうとするが、そこには真意

を見せない微笑があるだけだった。

(計算能力を試験したって仕方無いし……)

「残念、時間切れです。しかし、疑うということ自体は正解です」

思考をブツツリと切った零華の声に、勇輝は肝が冷えたが、失格ではないらしい。

そして心を読まれたのかとひやりとする。

「次。一引く一は？」

勇輝は再び考える。今度は時間切れにならないように気をつけながら(制限時間は零華の思いのままであるが……)。

勇輝は、零華の瞳に挑むような光があるのに気付くと、思考をまとめていった。

(素直にゼロといくか、それとも捻って日と答えるか。そういや、さっきの答えを言わなかったな……ためすか)

敵との駆け引き、スパイものの映画や、探偵ものの映画でもよく見られる展開だ。

不良とは力にものを言わせる駆け引きだが、勇輝は頭を使った駆け引きも好きだった。使用用途は主に父親への小遣いねだりだったが……。

勇輝は望むところだ、と口を開いた。

「ゼロ」

最初は直球で勝負してみる。まずは答えが何かを知らなくてはい

けない。

「けっこうです。では、百引く一は？」

尚も計算問題が続く。勇輝は答えを得ても、意図が掴めない。

(答えは計算のほうか……。次も同じか?)

全く同じ色の問題が連続するというのは、一種のタブーだ。おもしろみに欠けて、飽きが来るからだ。

(何が正解なんだ？ よし、もう一つの答えも言ってみよう)

勇輝は零華の表情の些細な変化も見逃すまいと、その顔を注視しつつ選んだ答えを口にした。

「白」

「けっこうです。では次、八足す八は？」

勇輝は表情の変化を見つけられることは出来なかったが、その答えにひっかかりを覚えた。

胸に広がるのはかすかな戸惑い。

(間違いではない？ けっこうです?)

先ほどと同じ答え方だった。そしてけっこうですとは、丸だが二重丸ではない。

(じゃあ、正解はなんだ?)

そして勇輝は八足す八を真剣に考え始めた。十六という答えはすぐに出てくる。おそらく法則性を見ても、この問題も二つ目の答えがあるはずなのだが、それが思い浮かばなかった。

小学生のころの記憶を引っ張りだし、八足す八を漢字に直して脳内に並べる。

(イコールどーすんだ?)

初めの二問はイコールも使うが、三問目は使わなかった。規則があるようでない。

(八足す八……)

零華はちらりと壁にかかっている時計に目をやった。それが勇輝をますます焦らせる。

(漢字のはずなんだ……八+八……そうか!)

勇輝は得られた二つの答えを頭の中に並べた。どちらが、今回に相応しいのか選び始め、けっこうですという声を思い出した。

(丸でもバツでもない。他に答えがあるのか……?)

零華はもう一度時計を見やった。制限時間はもう終わろうとしているようだ。

(賭けてみるか)

外れても死ぬもんじゃなし、と勇輝は腹を決めて膝の上の拳に力

を込めた。

「答えは二つ。十六と米」

零華は何も言わずに黙っていた。その間も笑みが絶えることはない。そして今はその笑みが怖かった。

「……正解です。意外と頭も使えるんですね」

勇輝は長い溜息をついて、肩の力を抜いた。さらりと失礼なことを言われたが、この際水に流す。

続いて二問三問と質問が重ねられた。どれもこういう状態になったらあなたはどうしますか？ という質問で、回答は二択になっていた。

「けっこうです。では、最後の質問です」

零華は、この二択問題に関しても正解という言葉を使わなかった。勇輝は問題の意図や裏を読もうと必死に頭を働かせる。

「貴方には同じ地下組織に所属している親友が一人います。その彼が組織の仲間を殺して逃げてしまいました。上から貴方に親友の抹殺命令が出ています。貴方なら、どうしますか？ 殺しますか？ 見逃しますか？」

勇輝はその関係図を脳裏に描いた。親友には歩の顔を入れて、殺された仲間に秀斗の顔を入れた。

（歩が秀斗を殺して逃げて、俺が歩を殺さないといけない……そんなの嫌だな）

それが正直な気持ちだった。

(歩は親友だし、見逃してあげたい。でも、そうしたら俺の立場が危なくなる)

勇輝は質問の裏を読もうと、もう一度質問を反復させ、分析を試みる。

(形式は同じ、シチュエーションの二択。そしてまだ正解はもらっていない)

勇輝は頭に手をやった。かきむしりたいが、試験中なので我慢する。

苦悩している勇輝を見て、零華は再び質問を繰り返した。

「貴方なら、どうしますか？」

最後の言葉が耳に飛び込んできた瞬間、脳内に電撃が走った。

(貴方なら、どうしますか？ 貴方なら？ 俺なら？)

その言葉はそれまでの質問には付いていなかった。そして、もう一つ気になるところがある。

(どうしますか？ どちらですか？ とかじゃなくて？)

答えは二択だが、訊き方は縛っていない。

勇輝は矛盾をつなぎ合わせていった。少しずつ零華の意図が見えてくる。確信に近い答えが出たところで、勇輝はニツと笑った。

「俺なら、まず親友に仲間を殺させない。必ず気づいて止めてやる」

その答えは第三の選択肢。零華が求めるのは、道を自分で作り出す力だと、勇輝は気づいたのだ。

「……正解です。見直しました。使う時は使うんですね、その頭」

「……さつきから何気にひどくない？」

正解の嬉しさに心を躍らせるよりも、自分へのマイナス評価に心が折れそうになる勇輝だ。

「では、これを渡しますね。私の紡命珠です。それは微弱ながら結界を張っていますので、持っていれば小石ぐらいは弾けます」

役に立つのか微妙な強度だが、勇輝は満面の笑みでそれを受け取った。それは勇輝が彼らに認められた証なのだ。大玉の真珠のようなそれを、勇輝は大切そうにズボンのポケットに入れた。

「次は鍊魔君の部屋に行ってください」

「はい」

勇輝はソファーについた手で、体をひょいっと押し出して立ち上がった。

「いつてきまーす」

「健闘を祈っています」

零華に手を振って送り出され、勇輝は次の試験官、鍊魔の部屋へと歩いていった。

勇輝は鍊魔の部屋の前で深呼吸をしていた。

気持を落ち着かせて、ドアノブに手を伸ばす。そして引っ込めた。それを先ほどから数度繰り返している。

(鍊魔からの試験ってなんだろう……い、医学とかなら俺無理だな。というか、あの無表情のままです試験官されると怖い)

あの切れ長の目で睨まれると、カンニングも全てばれてしまいそうだ。

嫌われていた自覚がある勇輝は、試験前からビビりまくっていた。

う( ……でも、鍊魔にも認めてもらわないといけないし。が、頑張ろう)

ノックをし、返事を待ってからそつと入る。

鍊魔は部屋の隅にある机に向かっていた。また研究をしているようだ。

「えっと、試験を受けに来ただけだ」

鍊魔は回転椅子を回して、勇輝に体を向けた。すっと目が細められ、勇輝は身を固くする。

「ここまで来い」



勇輝は手まねきされるまま、鍊魔の数歩前に立った。試験内容が全くわからない勇輝は、不安で身長が縮みそうだ。

勇輝は鍊魔の瞳を見て、はっと息を飲んだ。その眼が赤く縁取られていたからだ。

神秘的な瞳に勇輝は魅入られていた。

鍊魔は勇輝を上から下までゆっくりと視線を移動させる。次に目が合った時にはその瞳は灰色に戻っていた。

「以上はない。健康そのものだ」

鍊魔は大きく頷くと、立ち上がった。鍊魔の顔が高い位置に移動し、勇輝は見上げる。

「俺からはこれで終わりだ。ん、これをやる。これで石つぶての軌道を逸らすことができるな」

鍊魔は机の上に置かれていた赤い珠を指で抓むと、勇輝の掌に乗せた。どうやら珠が増えると結界強度も増すようだ。

「……え、俺何もしてないけど」

勇輝は鍊魔の髪と同じ色をした珠を見つめ、困惑を顔に浮かべる。

「健康診断だ。俺は医者だからな」

「へえ。鍊魔の眼って便利だね」

鍊魔の眼は治癒能力を与えるだけでなく、症状をその眼に映すことも出来た。不具合がある箇所は青い印が浮かび上がるのだ。

「聴診器も要らないし、女の子も安心だね」

毎年の健康診断で、女子の“内科の先生よぼよぼのおじいさんだったあ。最悪”という会話を聞いている勇輝は、安心安心、と繰り返していた。

「……一度、脳波でも測っておくか」

「俺そんなに頭悪そうに見える？」

「あ、いや……」

錬魔の眼について、気味悪がられたり、逆に羨望の眼差しを送られたりすることはあったが、便利だと言われたことはなかった。人とは違う感性に興味湧き、調べてみようかと思ったただけだったが、いけない場所を踏んだらしい。

勇輝は鼻息荒く抗議する。

「俺は確かに不良だけど、不良イコール頭悪いってのは間違ってると思う」

勇輝の期末テストがかなりギリギリと聞いていた錬魔は、それを指摘するか迷ったが、止めた。

「そうだな」

ひとまず同意して、落ち着かせた方がいいと踏んだのだ。

「確かに俺のテスト点はぱっとしないよ」

(自覚はあるんだな)

「でも、テストの点でそいつの知能が計れるなんて誰が決めたんだよ」

「……いや、誰も」

誰も決めてはいないが、世間では両者はニアリイコールで結ばれている。

「だろ？ 俺はいたって正常です」

「分かったから、次へいけ。秀斗は学校のグラウンドで待っているぞうだ。ジャージ着用とも言っていた」

「……分かった」

勇輝はグラウンド？ ジャージ？ と疑問に思いながら、錬魔の部屋を後にしたのだった。

集合場所グラウンド。そこではジャージ姿の秀斗が勇輝を待っていた。秀斗からの試験は学校でおなじみ、新体力テストだった。春やるのと冬やるのではこつも違うのかと、かじかむ手で握力計を握る。

秀斗も退屈だからと、一緒にやっていた。

昼を挟んで全種目を一日でやるという無茶を強行突破した二人は、

シャトルランを終えぐったりと地面に座っていた。二人とも百五十を超え、足はガタガタだ。

「さすが、体力はあるな。意外と握力もあったし」

秀斗は勇輝の成績表を見て、その得点をざっと計算した。余裕でAランクだ。

「でもさすがに全種目はきつい」

明日は確実に筋肉痛だ。目覚めた時には体の節々が悲鳴をあげるだろう。

「はは……じゃ、これ。俺の紡命珠」

秀斗はジャージのポケットから金色の珠を取り出して勇輝に渡した。

「ありがとう」

「そいつで石つぶてを弾けるぐらいにはなる」

「……地味なレベルアップ」

勇輝はそれをポケットに入れて、秀斗とともに如月に帰った。

「次は癒慰のところな」

勇輝の部屋の前で二人は別れ、勇輝はシャワーを浴びて服を着替えた。

(癒慰か……どうか普通の試験でありますように)

癒慰からの条件が隊員服で来るように、だったので、勇輝はそれを身に纏う。勇輝はその姿を鏡で確認し、顔を引き締めて癒慰の部屋へと向かった。

勇輝は、小さな部屋の中にいた。部屋とはいっても、区切りは力ーテンのみ。前方の壁は鏡張りになっている。大きさは半畳くらいだ。

それは服屋にある試着室そっくりで、それは部屋のだ真ん中にあった。勇輝がいる部屋にはどんだん服が投げ込まれてくる。

癒慰が出した試験。それは早着替えだった。

「なんで、こんなのしないといけないのさ！」

部屋に入るなりいきなりその試着室に押し込まれた勇輝は、上着を脱ぎながら外にいる癒慰へと叫ぶ。

「任務によっては潜入捜査もあるからよ。時間が命だからね」

癒慰は一人掛けのソファーに座り、サイドテーブルに茶器を置いてゆったりとティータイムを楽しんでいた。本日の衣装は婦警さんで、ティーポットの中身はウイスキーだった。

「後一分よ〜」

「あああ、よつと、出来た！」

勢いよくカーテンが開けられ、スーツ姿の勇輝が出てきた。サン  
グラスをして、SPのはずなのだが……。

「あはははっ、似合わない！」

身体が華奢なせいもあり、サングラスが顔に比べて大きいせいも  
あり、子どもがお父さんのまねをしたようなおかしさがある。

「うるさいっ」

勇輝は怒ってカーテンを閉めた。そこに次の服が投げ込まれる、  
次はカウボーイだった。

「よーい、スタート！」

こんな服を着る任務なんてない、と思いながらスーツを脱ぎ棄て、  
その衣装を着る。

最後にカウボーイハットをかぶり、腰に拳銃を下げれば西部劇で  
お馴染みの姿となった。

「どつだ！」

姿を鏡で確認してから、勇輝はカーテンを開けた。

「意外と似合うわね。次」

そうして、警察官、コンビニの店員、大工、うさぎの着ぐるみ、  
王子様と様々なコスプレをこなしていった。

「最後はこれね」

投げ込まれた服を見た瞬間、勇輝の体は小刻みに震えだした。全体的に黒い服。レースがふんだんに使われ、ふんわりと腰のあたりから広がっている。そして布の間から覗く、ふわふわの耳、猫の耳。忘れもしない、あの、衣装だ。

「癒慰！」

「残り二分。合格できないわよ？」

勇輝は溢れる怒りを拳にこめ、鏡を割ることで発散させると、半ば自棄で王子の服を脱ぎ捨てた……。

「きゃああ！ 可愛いいいいい！」

カーテンを引きちぎらんばかりに開けた次の瞬間、癒慰の嬌声が部屋に響き渡った。

「合格」

癒慰は盛大に拍手をしている。勇輝は合格の言葉を聞くとすぐにカーテンをしめ、忌々しい服を脱ぎ捨てた。早着替えで隊員服に戻る。

「メイド服でいて欲しかったのに……」

癒慰は頬を膨らませて、勇輝の手に茶色の珠を置いた。

「やだね」

「まあいいわ。これで四つ、瓦礫に埋もれても死なないぐらいにはなっただわね」

「そいつは助かるよ」

勇輝は嫌味つぼくそう言い残して、癒慰の部屋を後にした。胸は屈辱感で一杯だ。

勇輝は足音荒くホールに入ると、適当なソファーに腰を下ろした。ホールは無人で、勇輝は背もたれに体を預けてほっと息を吐いた。心身ともにもうボロボロだった。

(疲れたし、眠いし……)

勇輝はうつらうつらと、夢との境界を漂い始めた。

どれほどの時間が経過したかは分からないが、勇輝は人の気配を感じて目を覚ました。

眠い目をこすって辺りを見回すと、弥生が入って来たところだった。そしてまだ弥生からの試験を受けていないことに気が付く。

「そうだ、弥生の試験は何？ 剣での模擬戦とかなら勘弁して欲しいんだけど」

「試験？」

勇輝へと近づく弥生はそう訊き返した。

「弥生からも試験があるんだろ？ 合格したら珠をくれるやつ」



「珠……ああ、これか？ そついや癒慰にお前に渡せと言われていたな」

そう言つて弥生が上着のポケットから取り出したのはペンダントだった。飾りの色は鈍色で、掌に収まるぐらいの丸いプレートだ。蔓が絡み合っているような模様の細工がされている。そこには一つだけ銀色の珠がはまっていた。

「試験は？」

「そんなものは知らん。私はこれをお前に渡せと言われたただけだからな。大方あいつらの暇つぶしだろう」

「え……」

思い返せばそのような気もしてきた。せめてもの救いは、鍊魔の試験に目的がちゃんとあったことぐらいか……。

「全員に紡命珠を貰つたのだろ？ 渡せ」

勇輝は差し出された掌に、ポケットから取り出した四つの珠を置いた。藍、赤、金、茶とそれぞれ美しい色をしている。

「穴もないのにどうやってはめるんだ？」

その問いに、弥生は行動で答えた。藍色の珠をプレートの上に置き、押しこんだ。すると粘土に埋め込むようにぴったりと藍色の珠がはまったのだ。

「すごい。これも魔術？」

「ああ。力を流して埋め込めるようになっていたらしい。これを作ったのは匠だから、ろくな素材ではないだろうがな」

弥生は言っている間に赤、茶、金と等間隔に埋めていく。五つの珠は五角形を描いていた。

「これを常に身につけている。弾丸の軌道を逸らすことができる」

勇輝はそのペンダントを受け取ると、さっそく首から下げた。金属かと思っただが意外と軽い。重さは木のペンダントと同じくらいだ。

「喩が飛んでくるものばかり……打撃はどれくらい防げる？」

「打撃は素通りする。あくまで飛来物にのみ結界は作動するからな。あと、私たち以外の異能者に対して結界を張れる。まあ、すぐに破られるが」

「使えそうで使えないな……」

打撃に効力を発揮しないのであれば喧嘩しても相手の拳は当たり、弾丸の軌道をそらせても、そもそもそんな危険な状況になりたくない。

「それに、それがあればお前の場所がわかるからな」

「ふん。やっぱりなんか感じ取れるんだ」

「まあ、私は苦手だが、癒慰や零華はかなり得意だ」

「そっか、ありがとう。大事にするよ」

勇輝は再びペンダントを見つめ、口元を緩めた。

皆の力が少しずつ詰まったそれは、確かに重みも持っていた。

### 第3章の3 試験って疲れる(後書き)

ひさびさに、手間取った。原因はひとつ。

紡命珠。こいつの名前がないことを、零華が渡す直前に気がついた。うだうだ考え、つついゲームをしていたら、日にちが過ぎてました……。

とうとう四月です。新生活もスタートしますね。

神名は再び週一ペースに戻ると思います。たぶん、土日のどちらかに更新すると……いいな。

未来は未定。まさしくそのような感じ。

ここまでで前フリは終了。次回からはプロローグからつながるメイソへと話が進みます。

では、また次回。

### 第3章の4 邂逅

寒い夜。それでも街は動いている。ネオンでぼやける藍色の空に白い吐息を吐きながら、彼らは歩いていた。

巡回と称する行いをする彼らは、似たデザインのコートを羽織っていた。焦げ茶色の生地に、女物はふわふわのファーが付いており、男物は細みのデザインで、後ろにはスリットが入っている。それぞれの左胸には如月の紋章が入っていた。

時は深夜を過ぎたころ。街を練り歩いているのは見た目も身分も高校生である。

ともすれば、

「ちょっと、その君たち。こんな時間に何をしているんだい？」

警察官にそう声をかけられるのも当然であろう。

「ほら……やっぱり補導された」

あくびを噛み殺している勇輝は呆れ顔だ。何度も経験していることなのだ。

「俺たちはパトロールしてるだけだっつーの」

牙軍の仕事の一つに担当区域の治安維持も含まれている。さぼりまくっていた如月は、とうとう隊長からの通告が来たのだ。

曰く、真面目に仕事をやれ、と。

そこには暁美の名もあり、弥生の同行も促されていた。

よって只今如月はパトロールを実施中なのだ。

「私たちは死堅牢の如月です。巡回しているだけです。ご心配なく」

零華がやんわりといなした。

「えっ、如月ですか？ あ、それは、すみません。その、御勤め御苦労さまです！」

龍牙隊は特殊能力を持つ特性ゆえ、警察に捜査協力をする場合がある。警察内部においても、如月の悪行（ヤクザ殲滅）は轟いていたのだ。

直角の礼を見せた警察官を横目に、彼らは歩みを進めた。目的地もない。徘徊と取られても文句は言えないのだ。

「なんか可哀想なくらい動揺してただけだ」

「俺たちが街に出ることはめったにないからな」

鍊魔も同情の色を見せる。

「でも、さっきからたくさん警察の姿を見るよね」

そればかりではなく、パトカーの赤いランプもよく見る。勇輝はついその赤いランプにひやりとしてしまうのだった。

「何かあったのかもね」

「ややこしいこと大歓迎」

秀斗は頭の後ろで手を組んで、鼻歌交じりに歩いていた。

「なんでそんなに機嫌がいいわけ？」

隣を歩く勇輝は薄気味が悪くて仕方がない。

「ん？ こうやって全員で外に出かけるなんてねえし、それに弥生とデー……ット！」

勇輝と秀斗の間を、短剣が擦りぬけた。

風を切って、短剣は空に吸い込まれていく。地面に落下した音も聞こえず、さて、短剣はどこへ消えたのか……。

「秀、すまない手元が狂った。本当ならばお前の後頭部を狙ったのだが……勇輝に気を取られた」

さらに言葉で秀斗を精神的に追い詰める。無表情で言葉を短剣のように突き刺す弥生の背後で、癒慰が意地の悪い笑みを浮かべていた。最後の言葉は癒慰の入れ知恵だろう。

そして癒慰の思惑通り、秀斗は悶絶しかけていた。

そんな秀斗を彼らは置いて先へ進む。秀斗は誰にも気にかけてもらえないことに気付くと、ぶつぶつと文句を言いながら彼らの後を追った。

「ん？ あそこやたら警官多くない？」

真面目に見回りをしていた勇輝が、スーツを着た人間と警官が溜まっている場所を指さした。

彼らの向こうには大きな屋敷が聳えるように立っている。そこに住む老人は、街でも一二を争うお金持ちとして有名だった。

「あ、あの人……」

癒慰はその中の一人の男性に目を留めると、彼に近づいていった。

「峰山さん。お久しぶりです」

峰山と呼ばれた男が振り向いた。スーツを着用し、歳の頃は三代ほどだ。彼は癒慰の姿を認めると、相手を崩した。

「癒慰さん、お久しぶりです。珍しいですね、お散歩ですか？」

つくづく彼らはサボリ魔と思われるようだった。

「失礼ね。如月総出でパトロールよ！」

彼は驚きを隠しめせず、後ろに控えていたら5人をまじまじと見た。顔にははつきりと、如月が仕事をするなんて、と書かれている。

「峰山、俺たちだってやる時はやるぜ？」

秀斗も顔見知りなのか、親しげに彼に肩を回し絡む。少々八当たりの気配がする。

「……つい最近街の元気な奴らと喧嘩をしたのはどなたでしたっけ。いやあ、あの事後処理はなかなか……」

語尾を濁した彼は、負けじと反論する。

「ははは、仕事の後の酒はうまかっただろ」



何の問題を起こしたのか、秀斗は全く悪いとも思わずにカラカラと笑っていた。

「それで、この騒ぎは何なのですか？」

零華の問いに彼は顔を引き締め、秀斗の腕を振り払った。

「窃盗です。といつても、予告状が来ただけなんですけど」

「予告状？ 古い奴、顔を見てえな」

秀斗が喉の奥で笑った。

「私たちも見たいからこうやって張り込んでいるんですよ」

「こんなバレバレで？」

「威嚇ですよ。予告状を送ってくるあたり、相当自信があるのでしようから。それに万が一中に入られても、ネズミー匹出しはしません」

その言葉どおり、外に張り付いている警察官は見えるだけでも二十人前後。これに屋敷内まで含めると百人は超えるだろう。

「後は、ここのご老人がうるさくてね」

「へえ、まっ日本警察頑張れよ」

秀斗は泥棒には興味はない、と踵を返した。

協力する気はさらさら無いらしい。それは如月全体に言えることではあるが……。

「……子どもは早く寝るように」

彼は、期待はしてなかったけど、と軽く手を振った。たかが泥棒に能力者の力を借りる必要はないのだ。

彼らが足を前へと進め、巡回を再開する。だがその時、ガシャンと耳にガラスが割れる音が耳に飛び込んできた。それも一つではない。彼らが振り返ると、屋敷の全てのガラスが割れていた。

異常に気がついた彼らの内、二人がすぐに屋敷に向けて走り出した。

「なんか楽しそうだから行ってくる！」

野次馬根性丸出しの勇輝と、

「あ、弥生待つて！ 早いつて！」

勇輝の前を無言で走る弥生だ。

それに遅れて峰山も無線で連絡を取りながら屋敷へと向かった。

「元気だね」

傍観者組は、走り去った三人を暖かい眼差しで見送った。行きたいなら行けばいい、各々好きにする。止めても無駄。それは長い付き合いで互いに分かっていることだった。

「秀斗君は行かなくていいの？」

癒慰が珍しく残っている秀斗にそう訊いた。顔には意地悪そうな笑みが潜んでいる。

「はんつ、俺は子供じゃねえし、ここで待ってんだよ」

「くすくす、出遅れてタイミングを見失ったのですね」

「うっせえー！」

どうやら凶星のようだ。機嫌を損ねた秀斗が、先に帰ると足を踏み出した時、彼らの体を幽かな覇動が貫いた。超能力や異能者の気配ではない。明らかな魔術師の覇動。

幽かでありながら鋭く、針のような覇動。彼らのものとは違う、異質なものだった。

「何かいるぞ」

錬魔がすばやく辺りに目を配り、気配を探る。

「うそ………だろ？」

秀斗が小さく呻いた次の瞬間、彼らを押し潰すような膨大な量の覇動が辺りに立ち込めた。それは屋敷を取り巻くように広がり、その気に当てられた警察官が次々に倒れていく。

「何………これ!？」

癒慰は胸を抑えて前かがみになった。肺が圧迫され、息が出来ない。力を持つ彼らは意識を失えず、体内で力が抵抗し、苦しみに繋がるのだ。

しかし、その覇動はすぐに消えた。辺りに充満していた覇動は一点に集中し、凝縮され収められる。人物の存在を知らせる覇動は、彼らの頭上から感じられた。

圧迫する覇動が消え、呼吸が正常に戻った四人は、一斉に上を見上げた。まだ肩が上下している。

あえて覇動を消そうともせず、その居場所を教えた人物を、彼らは見た。

電信柱の上に、闇に紛れた人影。暗くて顔は見えないが、長身の男のようだ。

「阿修羅<sup>あしゅら</sup>」

呆然と、秀斗が呟く。知りあいなのか、と三人は目で秀斗に問うた。

「秀斗、もうあの頃のようにには呼んでくれないのだな」

阿修羅と呼ばれた男の声は低く、寂しそうな色合いを含んでいる。

「……なんで、ここに？」

秀斗は三人の問いには答えずに、阿修羅に再度問う。

「指令に決まっているだろ」

「……予告状はてめえか」

「こいつはずいぶん口が悪くなったな。しつげをし直すべき、か？」

顔の見えない男と秀斗とのやりとりを、三人は固唾を呑んで見守

った。闘いとなれば、攻撃に移れるように敵に照準は合わせてある。

「誰……が」

秀斗は言葉を切り、その顔を青くした。目を大きく見開き、手足の先から血が抜けていくような感覚に襲われる。

「お前がいる……ってことは、まさか……あの人も？」

「もちろん。俺たちはペアだからな」

見えないが、男が笑った気がした。

秀斗は弾かれたように走りだす。

（まずい！ 弥生が危ねえ！）

阿修羅に背を向け、全力で屋敷へと走る。だが、前方に黒が現れた。

「なっ」

一瞬で視界を奪うほど至近距離に、阿修羅が出現したのだ。

「二人の感動的な再会だ。邪魔をするな」

黒髪が着地の振動でさらりと揺れ、切れ長の目に灰色の瞳がはまっている。目鼻立ちを整い、その顔は怪しげな笑みを浮かべていた。

衣服は全て黒で統一され、一見スーツに見えるが、スーツよりも光沢があり、生地も柔らかい。黒い上着の胸元からは、白い素肌が

覗いていた。右胸にある紋章には、剣に巻きつく二匹の蛇が描かれている。

「秀斗君！」

「秀斗！」

三人が秀斗に駆け寄ろうとするが、秀斗はそれを手で制した。

「来るんじゃないよ。これは俺たちの問題だ」

「そう。俺たちの問題だ。部外者は黙っている」

三人は阿修羅の言葉に怒りを覚えて鋭い眼差しを向けるが、その眼を見た瞬間金縛りにあった。阿修羅の目は白目部分が黒く染まり、瞳は金色に輝いていた。何も無いはずなのに、己の体に鎖が巻きついているはつきりとした感覚がある。

「秀斗、俺はここにお前と闘いに来たのではない」

「弥生に……手え、出したら……殺すぞ」

身体の自由が利かない秀斗は、固い口を懸命に動かした。秀斗は敵の技が発動する瞬間に目を逸らしたので、完全な金縛りにはかからなかったのだ。

秀斗は鉛のような手を、少しずつ阿修羅の首へと伸ばす。

「さあな。俺の知ったことではない」

阿修羅は秀斗の顎に手をかけ、上を向かせた。目と目が合い、視

線を逸らそうとも叶わない。

「お前はただここで、待っている。時が来るのを……墮ちろ」

秀斗は体の支配権を失くし、伸ばされた腕は阿修羅に届くことなく虚しく宙に固定されている。

(くっそ……弥生……逃げろ)

阿修羅は手を秀斗から離すと、視線を屋敷へと向けた。

弥生は突入態勢を固める警官たちを飛び越え、月契で屋敷の扉を斬り破った。勇輝は警察官を掻き分けて弥生を追いかける。弥生の表情は何時に増して固く、握る月契が小刻みに震えていた。

「弥生！ 待てって！」

勇輝は弥生を追って螺旋階段を上る。その間に一階のフロアを見回すが、不自然なほどそこには人の姿が無かった。不気味なことに物音一つしない。

だが、その静かな風景は階段が途切れた途端一変した。赤いカーペットには、赤黒い染みが付き、壁に、天井に、鮮血が飛び散っている。

勇輝はその紅を見た瞬間、体が凍てついた。鼓動が早まり、意志とは関係なしにそれらの血の持ち主を探してしまう。

床に転がるのは、紅い点を描いている人間。青い警察官の服は赤に塗れて斑模様になり、己の血が床に点を描く。点はその間にも大

きく広がっていく。数分前までは呼吸をしていた彼らは、全員頸動脈を切断されており、すでに物と化していた。

勇輝はむせ返るような血の匂いと、恐怖に目を見開いたままの死体に、胃から酸っぱいものがせり上がって来た。

(ただの泥棒じゃ……ない)

口を抑えて我慢し、廊下の先に目を向けた。

弥生はすでに死体の山を越えて、廊下を曲がってその先に行った。

(……早く、行かないと)

勇輝は、己を奮い立たせて一步を踏み出した。

(何か、起こってるんだ。恐ろしい何か)

視界はチカチカし、赤色と緑色が交錯する。

この先にあるものへの恐怖が心を蝕んでいく。

(弥生を残して俺だけ戻れるかよ！)

勇輝は護身用にコートのポケットに入れていた麻醉銃を取り出した。安全バーを解除し、引き金に指をかける。

廊下を少しずつ歩いていく。曲がった先の気配を探りながら、足音を立てずに進んだ。

「つつ……」

曲がり角に来た時、何かを押し寄せた。足もとから這い上がり、頭上から滴り落ち、全身が絡めとられたような感覚。



以前弥生に覇動を放たれた時とは違い、息は出来る。だが、体の感覚がどんどん遠くなっていった。

(……体が重い。体が先に進むのを拒否してるようだ)

勇輝はなんとか角から顔を出した。これ以上は近づけない。意識が飛びそうだった。

廊下の先にあるドアは蝶番を残して消えさり、そこから弥生の姿が見えた。そして、もう一人の姿も……。

弥生は死体が転がる廊下を走りぬけていった。見なれた紅、嗅ぎ慣れた血の香り。全てが脳髓を刺激し記憶を蘇らせる。そして、覚えのある覇動は近づくにつれて強くなる。

(いる……奴がいる)

廊下の角を曲がると重厚な造りのドアがあつた。弥生は剣に力を込め、剣圧でドアを吹き飛ばし、中も伺わずに部屋に踏み込む。

さらに血の香りが強くなる。だが死体はない。死体すら残っていなかった。

ただ一つあるのは老人の首のみ。その顔は目が飛び出し、開いている口からは涎が流れ出て、死の間際の苦しみを語っていた。

押し寄せる濃く重い覇動。その主は、窓際で佇んでいた。まるで待ち人をしていたように。

腰まで届く長い黒髪はよく手入れがされており、つややかな光沢を持っている。長い前髪は中央で二つに分け、まとめて垂らしてあった。釣り上がった目は見る者にきつい印象を与える。彼女は妖艶

な笑みを浮かべていた。

阿修羅と同じ紋章が胸にある黒づくめの衣装。全体的に体に密着する服で、彼女の体格を明確にしていた。上着の袖は分離し、片口を覗かせている。開かれた胸元には豊かな胸の谷間が覗き、タイトのミニスカートからは網タイツを履いた足が覗き、ロングブーツを履いていた。

弥生は足を止め、彼女は手の内へ注いでいた視線を弥生に向けた。手に握っていた玉を机に置き、弥生と向き合う。互いの覇動と殺気が入り混じり、両者の間でせめぎ合った。互いに無言で相手を見ている。

妖艶な笑みも、男を魅了する体も、全て紅に染まっていた。指先からは血が滴り落ちている。全て、他人の血だった。

「鎖、羅たらい」

弥生の瞳はもはや憎悪しか映していなかった。瞳孔は開き、銀色の髪は普段の輝きを失いくすんでいた。月契を握る手は力を入れすぎて真っ白になっている。

「弥生、待っていたぞ」

弥生は口を引き結び、月契をカタカタと震わせていた。瞳にだけ押し込められていた憎悪は顔じゅうに広がっていく。その顔は修羅だった。

「いい顔だ。我が憎いか」

「……憎い」

弥生が答えを聞くと、鎖羅は覇動を弥生に叩きつけた。人の恐怖を駆り立てるのが闇の本質。

弥生が身を固くした瞬間、その喉元には銀色に光る刃が添えられ、目の前に憎い相手が迫っていた。先ほどまでは存在しなかった、弥生と同じ召喚型の剣だ。細みの刀身には血と人の脂が付着している。

「我もお前が憎い」

弥生は反応できず、指一本動かすことすら叶わない。

「弥生……弱くなったな。これぐらいの覇動に竦められるとは」

弥生は嘔みつかんばかりに鎖羅を睨む。鎖羅が刃を弥生の喉元に食いこませた。皮が裂け、赤い線が浮き出て血が滲み出す。

「お前を……殺す」

弥生が低く呻く、剣が彼女の喉を割こうと動くが、腕を上げることが出来ない。

「この状態でか？ 我がお前を殺す。……だが、生憎今回はボスからの指令だ。お前と遊んでいる暇はない。また改めてその命は奪わせてもらう。その傷が消えないうちにな」

鎖羅はすつと弥生から離れ、机の上に置いておいた玉を手にとった。野球ボールほどの大きさで、乳白色の玉。おそらくこれが盗まれたものだ。

「時が来る。我らの決着の時が」

鎖羅は壮絶な笑みを見せた。その瞳には弥生の死が映っているのだろう。己の刃に貫かれて死にゆく弥生の姿が。

鎖羅は闇夜を背に、窓枠に手をかける。闇が窓からあふれ出し、鎖羅の体を取り巻いた。

闇に属する魔術師。闇は優しく彼女を包み、霧散するとともに彼女の姿も消えた。

部屋に残るのは首のみ。その首は、その殺し方は彼女からの挑発だ。

弥生はぎりつと唇を噛んだ。唇が紅く染まる。

「弥生！」

心配顔の勇輝が弥生へと駆け寄る。鎖羅がいなくなったことで、霸動の呪縛が解けたのだ。

弥生は駆け寄って来た勇輝に気付く素振りも見せず、空を睨んでいた。その髪は灰色よりもさらに黒に近づいている。

「や、弥生？」

勇輝は弥生の変化に驚きの表情を浮かべ、その肩へと手を伸ばした。

が、その手が届くよりも先に弥生は身を翻し勇輝から離れる。一度も勇輝へ視線を向けようとはしなかった。

「……殺す」

弥生は呟くと同時に剣を横に薙ぎ払った。剣圧が放たれ、壁が抉

られる。

「……弥生」

勇輝は空をかいた手をゆっくりと下ろした。

顔つきも、雰囲気もまるで別人のようだった。

人間を蔑んでいた冷酷さとはまた別。触れればこちらが裂けてしまふような憎悪。

勇輝は純粹に怖ろしいと思った。霸動で絡めとられた恐怖とは違う、心の底が冷える恐怖。

勇輝は何の言葉も見いだせず、弥生の後姿を見送った。

部屋から出ていく弥生の髪は、濁った銀色だった……。

### 第3章の4 邂逅（後書き）

鎖羅に阿修羅。今までの力だけの敵ではなく、過去がからむ精神的な敵。

この二人はメインキャラ6人とともに最初のキャラづくりの時からいたキャラです。思い入れも深い二人。

シリアスモード満載ですが、三章は短いはずなので嵐のように過ぎていくでしょう。

さて、神名も週一ペースに戻りましたね。

書いても書いても終わらない地獄。話が重めなので打つスピードも落ちる。なのにそれほどページが埋まらない。

悪循環です。

さて、次回は少し一息いれて、説明会と行きましょう。

### 第3章の5 語るは闇に葬りしひと

場所は如月のホール。五人がテーブルを囲んでソファアに座っていた。二人掛けのソファアには勇輝と鍊魔、その向かいに癒慰と零華。

一人掛けには秀斗が座っていた。

朝だというのにいつもの和やかな雰囲気は無い。みな表情は硬く、秀斗へと視線を投げかけていた。

昨晚。阿修羅は秀斗たち四人を金縛りにあわせた後、ずっと屋敷を見ていた。彼らに注意を向けることもなく、彼は屋敷を透視するかのようにじつと見ていた。

そして数分が経ち、阿修羅が視線を屋敷から外すと、次の瞬間には闇に包まれた血まみれの女が彼の隣に現れたのだ。

「鎖羅。例のものは？」

阿修羅は現れるのを知っていたかのように、自然にその女、鎖羅に問うた。

鎖羅は硬直した四人を一瞥すると、阿修羅へ視線を向け、手のうちにあるものを渡した。

「指令はクリアした」

「ならばいい」

阿修羅はその玉を受け取り、自分のポケットに入れた。鎖羅はその視線を秀斗へ向ける。

「秀斗。あれは修羅に墮ちた。覚悟をしておけ」

冷たい声色でそれだけ言うと、鎖羅は現れた時と同様に闇とともにかき消えた。

阿修羅は性急だなと呟き、彼らの金縛りを解いた。瞳は元の灰色に戻り、彼の周りに闇が立ち込める。

「阿修羅！」

秀斗が大きく一步を踏み出したが、次の足は出なかった。それは後ろで攻撃態勢に移った三人も同じ。

「動くな。お前たちを殺してしまう」

面倒くさそうな口ぶりだが、それが嘘ではないことが彼を取り巻く闇から分かる。

その闇では何かが蠢いていた。金色に光る目がいくつも浮かび、闇がざわざわと動く。

すぐに闇が完全に阿修羅を隠し、彼は姿を消した。残ったのは倒れ伏す警察官と、静寂だけ。

そして屋敷へと乗り込んだ四人は、廊下を歩いている勇輝と合流した。彼自身は鎖羅と接触しなかったと聞いて安堵し、如月へと帰ったのである。

秀斗が弥生の部屋へと突撃を試みたが、殺気を放たれ脱兎のごとく逃げかえった。

そして謎の男女との遭遇から一夜が経ち、彼らは誰が呼びかけることもなくホールに集まった。ただ一人、弥生を除いて……。



四人は秀斗へと視線を注ぐ。現時点で事情を知っているのは彼だけだ。だが、秀斗は先ほどから一言も発さず、空を見つめていた。

時々視線が揺らぎ、瞳は複雑な色合いを見せる。しばらく沈黙が続き、しびれを切らした錬魔が苦い顔で訊いた。

「あの黒づくめは、黒騎だな？」

語尾は疑問形だが、響きは確信を持っていた。

錬魔にとつて黒騎は冷戦の折りの敵であり、戦場でその黒づくめの服をよく見たのだ。

「ああ……」

秀斗の肯定に、女の子二人が驚いた表情を浮かべる。

「彼らが、あの黒騎なのですか？」

「私初めて見た」

二人は今までに出会ったことが無いらしい。

勇輝は、少し疎外感を覚えながら、錬魔の話の中で黒騎について聞いたことを思い出していた。

勇輝が知っていることは、龍牙隊の敵だったということだけだ。そして秀斗は突然頭を下げた。

「……昨日は巻き込んで悪かった。それと、今まで言わなくて、悪い」

秀斗の行動に、場の緊張が少しほぐれる。

勇輝は突然の謝罪に面を喰らい、他の三人はやつとかと呆れ顔だ。

「あの、俺出ようか？ その、ずっと前から仲間みんなも知らなかったようなことを、俺も聞くなんてのは」

「いいんだ。話を聞いてくれ。勇輝も如月の仲間だからな」

秀斗は太ももの上で指をからませ合った。声がいつものより固く、低い。

「……あいつらのことを言わなかったのは、弥生が望んでいなかったから。それと誤解を恐れずに言えば、黒騎を売りたくなかったからだ」

三人の眉がぴくりと動いた。その言葉は旧敵であった龍牙隊にすれば、二心を抱いていると取られかねない。

「それってどういう意味？」

勇輝の問いに、秀斗は悲しそうに笑った。記憶の蓋を、少しずつ開けていく。

「……勇輝。俺と弥生は最初からこの龍牙隊にいたわけじゃねえ。俺たちは、黒騎にいた……」

「黒騎って、冷戦の時の？」

秀斗が軽く目を見張り、鍊魔と視線を交わして納得した。

「知ってたんだな……俺たちはこっちの世界に来て……あの二人に

拾われたんだ」

勇輝は、彼らはこちらの世界に来た時から一緒にいるのだと思っていた。秀斗の表情を見ながら、黙って続きを待つ。

「二人というのは、阿修羅に鎖羅のことですね」

零華は圧倒的な覇動を持った二人を脳裏に描く。力の強さではなく、本質的な強さを感じた。自分の中の血が恐れていたのだ、彼らの血を……。

「ああ。俺たちはあの二人に連れられて、黒騎に入った」

弥生と秀斗はまだ十歳にもなっていない子ども姿だった。人間より長い年月を生きていても、力も知恵も子ども並みだった。そんな二人を彼らが保護したのである。

「それで二人と一緒に暮らし始めた。本部からは離れた異空間で、黒騎の仲間数名が同じ屋敷にいた……」

秀斗の顔に時々優しい表情が紛れる。楽しい日々もあったのだ。

「阿修羅はどういった人なの？」

癒慰が秀斗を気遣いながらも尋ねる。あの会話から、秀斗と阿修羅はずいぶん親しかったように見えた。

「いい人だった」

短い秀斗の答えに、癒慰は再度尋ねようとして押しとどまった。

秀斗の顔から表情が抜け落ちていたからだ。秀斗が無表情になることは少ない。そうなる時は、何かを決意した時だった。

(言えないんだ……)

十年以上ともにいる仲間にも言えないこと。彼らに対する気遣いもあるのかもしれないが、秀斗は彼について話すつもりはないという意志だ。

「鎖羅は？」

癒慰はもう一人の黒騎について尋ねた。

「……鎖羅は、弥生の剣の師で、姉と慕っていた人だ」

鎖羅と弥生の関係に、四人は息を飲んだ。

「でも弥生は、師匠はいないって……」

勇輝は真剣稽古を頼んだ時のことを思い出して言った。あの時の弥生も、冷たさと憎しみをうつすら纏っていた。

「それも正しい、今弥生は鎖羅に教わった剣術は使ってねえしな。弥生は出会ったところから剣を使っていた。そこに鎖羅が自分の剣術を教えたんだ」

「彼女は強いのですか？」

零華の問いに秀斗は静かに頷く。

「鎖羅の殺しは、生きるための殺しじゃねえ。暗殺すりゃ死体は残らず、残るのはたった一つの首。その一つが敵を恐怖に陥れる。そしてサシで弥生は勝ったことがない」

勇輝は鎖羅が弥生の命に迫った瞬間を見ていた。本当に、殺されたと思ったのだ。体が自由ならば、跳び出していた。叫び声も上がらなかったのだ。

勇輝は唇を強く噛みしめる。彼はあの覇動に竦められて動くことが出来なかった。ただ見ていることしか出来なかった……。

「なぜ、弥生はあんなに鎖羅を憎んでいる」

鍊魔がずっと閉じていた口を開いた。弥生は部屋に閉じこもり、誰とも会っていない。

だが、鍊魔には弥生の覇動が何時になく濁っていることに気づいていた。眼を開けば視える銀色の覇動。そこに黒色が墨で線を引いたように薄く滲んでいる。

よくない兆候だった。

「……それは、俺もよく知らねえんだ。俺が着いた時には、全て終わった後だった」

秀斗は一度区切り、一息ついてから終わりの日のことを話し始めた。

「俺が見たのは、転がる黒騎の人たちと赤く染まった床。そして返り血を浴び、傷を受けた弥生が剣を鎖羅に向けている。そして鎖羅は薄く笑っていた」

人々が争う声、剣戟の音。それに胸騒ぎを覚えて広間に行った秀斗が見たのは、慕い合う二人が対峙している姿だった。

剣を向ける弥生は満身創痍。鎖羅は剣も持たずに悠然と弥生を見下ろしていた。

秀斗が聞き取れたのは最後の一言。

「去れ……って言われた。今まで、あんな冷たい鎖羅は見たことがなかった……それで、俺たちは黒騎を出たんだ」

誰にも別れを告げられずに、二人は異空間の道を開いた。そして、満月の度に空間を渡ることを繰り返したのだ。

「そんでずいぶん経って、この空間に辿りついて龍牙隊に入ったんだ。ま、ざっとこんなもんだ」

そう締めくくると秀斗はにっと笑った。

四人はかけるべき言葉を見つけられなかった。弥生の憎しみの深さ、そして秀斗の辛さが繋がりはじめた。

「秀斗くんは、黒騎が好きだったの？」

癒慰は優しくそう訊いた。龍牙隊の秀斗が答えやすいように、そつと。

「……黒騎がってより、あの二人が好きだった」

「闇……なのにな？」

癒慰の表情は、気づかわし気で優しい笑みを浮かべていたが、瞳にはかすかに恐怖が潜んでいる。

「ああ」

「秀斗君。申し訳ありませんが、二人の戦闘データを教えてくれませんか？」

感情抑えた声で零華が問う。二人の強さを訊くということは、二人を敵と見なすということになる。実際、闘う可能性もある。秀斗はしばしためらったが、大きく頷いた。

「もう分かっているだろうけど、二人は闇の魔術師だ。阿修羅……は、魔獣を操る。あの目で魔獣と契約し、人に対しては精神を支配できる」

「だから金縛りにあったのですね」

零華はくやしそうに眉をひそめる。

錬魔も苦渋の色を濃くした。

（黒騎の、それもかなりの使い手だった。もしかするとあいつらもあの戦争に……）

かつての旧敵、黒騎には仲間を多く殺された。恨みを持っていたこともあり、二人がこの屋敷へと来た当時はよく衝突をしていた。黒騎を恨む気持ちが薄くなった今でも、複雑な思いになる。

「鎖羅……は、召喚型の剣を使う。魔術はあまり使わねえな」

「二人とも、黒騎の方では強い方なの？」

「いや……本人たちは左遷されたって言った。実際、指令……任務は少なかったし、あの戦争も後方支援だった。本部ともあまりつながりが無くて、そんなもんだから俺はボスにあったことすらねえ」

黒騎の全貌が明らかにされたことはない。組織の編成も、その統率者も謎に包まれていた。だが左遷の屋敷にも届く話があった。

「ただ、黒騎には一つ有名な話があったな」

秀斗は表情から悲しみを拭いとして、懐かしさに目を細めた。悲しい話では無い、ただの昔話。

「細けえところは忘れたけど、黒騎には幹部が四人いる。アフラン、レガーシア、ロビナシア、サクリス。四人が揃う時、覇が世界を支配するってな」

最後に秀斗はおどけてみせるが、彼らはその意味を真剣な顔で考えていた。

「その四人が、黒騎の実質的な戦力なのですね」

「外人？」

勇輝はボスやらキラキラした名前にイメージは海外マフィアである。

「支配するということも気になるな」

ちよつとしたなぞなぞを出した気分で、秀斗は考える彼らの顔を見ていた。



「それで、今何人いるの？」

癒慰がはたと気付いたように訊いた。

「……さあ？」

秀斗は両手を顔の高さまで上げて、知らねとおどけた。ただすとぼけたのでなく、事実知らないのだ。

「その存在含めて伝説なんだよ」

秀斗はいつもの声の調子に戻っていた。表情もいつもの明るさが見え始めた。

過去話は終わりということなのだろう。

「話してくれてありがとうございます」

零華は美しいお辞儀をして、秀斗に礼を述べる。彼女自身は黒騎と繋がりを持つことはなかった。だが、闇を目の前にして、己の血は敵だと訴えた。それが例え仲間の知人であっても……。

（私は、おそらく彼らと闘うことになってもためらわないでしょう。しかし、それをなるべく回避するのが、二人にしてあげられることです）

零華は今日初めて微笑を浮かべた。

「……弥生は、鎖羅と闘おうとするのかな」

勇輝は、弥生の憎しみを直に見た。激しい感情が迸り、重くのしかかる霸動に割り込んだ、胸の内に鉛を流し込むような弥生の霸動。

灰色の髪も、震える剣も、全て憎しみに支配されていた。

「……いつかは、こうなると分かってたのによ」

「止められるよな」

勇輝は真正面から秀斗の目を見た。

(いくら憎くても、因縁があっても……殺しあいなんてごめんだ)

だが秀斗は、勇輝の問いに曖昧に笑っただけだった……。

### 第3章の5 語るは闇に葬りしこと（後書き）

二人の過去その一暴露。

秀斗が話したくないとだだをこねて大変でした。全く話が進まない。かつての仲間とそれを憎む愛しい弥生の間にいる秀斗。彼もけっこう苦勞人ですね。

次回は、回想です。

量がスリムになるかもしれません。がんばってストックをためていきたいです……。

では、次回！

### 第3章の6 俺たちの始まり

ホールで昔話を終えた日の夕方。秀斗は自室に戻って、窓の外へと視線を注いでいた。

出窓に腰を掛け、窓ガラスに頭を預ける。

昼ごろから雨が降り、細かい雫が窓を叩いている。

彼らが己の過去を話すことはほとんど無い。他人の過去は己の過去。同じ苦しみを持つ者にとって、他人の過去は己の過去を呼び起してしまう。何重にも、鍵をかけて守っている過去を……。

だから誰も話さず、そして知りたがらなかった。

秀斗はぼうつとその滴を見ていた。弥生の自室は、ここから数部屋向こう。神経を集中させれば、覇動を感じることもできる。

銀色の、月の覇動に混じる、黒い闇の覇動。

注意しなければ気付かない、おそらく普通の魔術師では分からない、微量の闇の覇動。

だが、闇に敏感な彼らはその闇の覇動が増幅していることに気づいていた。

「阿修羅……鎖羅……」

昨日会った二人は、記憶の中と同じ姿だった。家族にも近い存在。弱かった自分たちを守ってくれた存在。それが、今では敵となった。

（そっぴや、あの時も雨だったよな……）

今から数十年も昔。彼らが、こちらへと来た頃の話だ。

「……どこだよ」

秀斗は、呆然とそう呟いた。

眼下に広がるのは草原。風が頭の上を通り過ぎ、草の香りを運ぶ。秀斗は先ほどまで家にいた。家に、帰ったところだった。

頭がズキリと痛む。脳裏に母親の最後の姿が甦った。胸を短剣で刺され、ベッドに横たわっていた母親。片手が何かを求めるように戸口へと伸ばされていた。その表情は悲痛に歪み、病床に苦しんでいた母の最期を象徴していた。

(母さん……)

秀斗は強く奥歯を噛みしめる。

真っ赤に濡れたシーツ。

秀斗が駆け寄ると、その血は秀斗を求めるようにベッドを下りていった。血は黒くその色を変え、母親にすがって泣く秀斗の足元にまで達する。

異変に気づいて逃げようとするが、血は秀斗の足に絡まり動きを封じた。じたばたともがいてもそれは秀斗を離そうとしなかった。

漆黒が秀斗を包み、次の瞬間浮遊感に襲われる。母親の姿は遠くなり、体は下に引かれ、右に引かれ、落ちていく。

そして気づけば、この場所にいたのだ。

(どこらへんだ……ここ)

秀斗の国は国土の八割を草原が占め、遊牧民が放牧をして暮らしていた。運よく遊牧民に出逢えれば、街の方角を教えてもらえるはずだ。

だが、見渡してもそれらしき集団は無く、秀斗は覇動を探ることにした。

遊牧民は固まって移動しているので、覇動の反応も大きくなる。いつもならすぐに見つかるはずだった。

（おかしいな。なんもかすらねえ）

相当国の果てに来たのかと秀斗はいぶかしむ。ならばと、技を使うことにした。

秀斗は覇動を察知する能力は低い。よって探す対象が広範囲となれば、技を使った方が早いのだ。

「我が力と呼応する者の居場所を教えよ」

だが、何も感じ取れない。

「おいおいマジかよ……」

それが意味するのは、この付近に覇動を持つ者がいない。魔術師がいないということだ。

途方に暮れた秀斗に幽かな音が聞こえた。その音に気付くと同時に、足元に影が落ちる。

耳障りな音とともに、空を何かが横切った。

秀斗はそれを見上げて大口を開けた。雲でも騎獣でもない。黒い何かは、すぐに秀斗の視界から消え、空の彼方へと飛んで行った。

「マジ……？　ここ、どこ？」

秀斗の祖国にあのような生物はいない。

秀斗は腹を決めてその物体が飛んで行った方向へと歩きだした。

幸い、腰につけた鞆には家出中に買った食料が入っていた。  
風が秀斗の髪を翻し、白い額を露わにする。

（何が起こったのかはわからねえ。分かっていることは、母さんが殺されたことと、ここが他国だったこと……そして、俺が死ぬわけにはいかねえってことだ）

秀斗は悔しさを胸に滲ませながら歩く。その胸に決意を秘めて……。

秀斗は全力で走っていた。

草原を歩くこと三日。秀斗はやっと街らしきところについた。だがそこに住む人々は秀斗が知る人ではなかった。

秀斗の祖国であるなら、彼らの髪は金髪のはずだ。しかし追ってくる大人は皆黒眼黒髪。魔術界では闇の一族しか持たない色だ。

彼らは秀斗を指さして鬼のような形相で何かを喚き、石を投げってきたのである。

「ぐわっ」

肩口に石が当たる。足もとにも石がたくさん落ちてきた。

追いかけてくる人々。その言葉は聞き取れない。多くの言語が入り混じっているようで、知っている言語ではない。

たまに、何かのはずみで届く言葉は“失せる”

秀斗は小汚い街の路地を逃げていた。

（なんだこの国は！ あいつら闇の奴らか？）

闇は歴史上敵国で、大昔の戦乱で滅んだ国だった。その末裔かと思っただが、その割には攻撃が物理的だった。そして何より言葉が理解できない。自分が知っている言語が混じっている気がするの、それが他の言語にかき消される。

秀斗はなんとか人々をまいて、座りこんだ。

(意味わかんねえ……一体どーなってやがんだ！)

秀斗は先ほど、目くらましに技を使おうとした。強烈な光の球を彼らに放とうと思ったのである。だが、星の元素は秀斗の呼びかけに応じなかった。

(技が使えねえ……)

秀斗は辺りに人の気配がしないことを確認してから、神経を集中させる。右手を突き出し、そこに星の元素を集め形にしていた。

「元素がねえってわけじゃねえみたいだな」

力自体は使える。だが、言葉に反応しない。

「星は巡りて、人の行く道を決める。己の進むべき道を示せ」

この技は一種の占いのようなものだ。最適の道を示すといわれる術。発動すれば地面に刻印が現れるのだが、そこにはただ茶色い砂があるだけだ。

(これは本格的にまずいんじゃないかね？)



魔術を教わった時に聞いたことがあった。技を発動させるには元素が必要となる。そしてその元素を操るには、その世界の言語でなくてはならない、と。

つまり、今秀斗がいる世界は自分たちの言語が通じない国、異世界ということとなる。

(つーことは、ここはどれだ?)

魔術界で知られている異世界には、霊界、魔界、そして人間界があった。

自分と同じ人の姿をし、言語が似ているところもある。ひとつ引かかる場所は、

「人間界……」

それだけだ。かつて迫害され、その世界と決別した。自分たちと同じ姿で、力を持たない人びとが住む世界。魔術界の文化も言語も今となつては人間のそれとは違いがあるが、根源は人間界にある。

「くそつ、面倒なことになつたぜ」

秀斗はひとまず移動することにした。食料はもうすぐ尽きる。それまでに、この状況を打開しなければいけない……。

秀斗は走っていた。だが、今回は理由もなく追われているのではない。その手には戦利品があった。

「待ちやがれえええ！」

棒を振り回しながら中年の男が秀斗を追いかける。それに続いて青年やら、他の商店の男が金髪の子どもを追いかけ始めた。

「鬼が！ 自分の国に帰りやがれ！」

「殺せ殺せ！ 俺の父親は米兵に殺されたんだ！」

「バーカ！ 誰が待つかよ。盗られるほうが悪いんだ」

秀斗は細い路地に入り、入り組んだ道を走っていく。

この町に来て一週間もすれば言語は聞き取れるようになった。雑音が消え、少しずつ理解できるようになったのだ。それと同時にこちらの言葉も人間に伝わるようになっていた。

大人の話を盗み聞く限り、ここは中国という国らしかった。様々な国に占領され、日本と戦い敗れた国。日本が負け、独立を果たした今でも外国に対する怨恨は強く残っていた。

秀斗は戸が開いていた民家に入ると、戦利品を口に入れる。

万頭というものらしい。何で出来ているのかも知らないが、祖国のパンと同じ扱いのようだった。

「あんまり旨くはねえけど、何も無いよりはマシだな」

ぼろい民家が立ち並ぶ町。夜となれば盗賊まがいが横行する、治安は最悪の町だ。

秀斗は壁に背を預けて一息つく、なぜ自分が人間界に飛ばされたかは分からない。帰る方法など尚更だ。

（帰る……か。帰る場所なんてねえのにな）

だが、ここにも居場所は無い。

秀斗ははあと溜息をついて民家の戸口から出た。日差しが強い。遮るものが何もない日差しが秀斗に照りつける。

季節は夏なのだろうか。祖国との季節の違いに体が順応するのに少し時間がかかりそうだ。祖国は夏こそあれ、もう少し涼しい。草原には常に風が吹いていた。

（そろそろここを出るか）

この町では存在が知れ渡り、盗みもしにくくなった。聞いた話ではすぐ近くにもう一つ町があるらしい。

そのために水と日持ちする食糧を手に入れたのだ。

（職業盗賊つてのもいいかもな）

秀斗はニヤツと笑って、町の外れへと歩いた。

秀斗はまた走っていた。隣町に着いたところには夜となり、町に足を踏み入れた瞬間石投げの歓迎を受けたのだ。

（またかよ）

しかもこの町では人々は銃や槍を持っていた。銃は節約のためあまり撃たないが、それでも威嚇には十分だ。住人の目も血走り、下手な盗賊よりも恐ろしい。

「ガキを捕まえる！ あの金髪、あいつの仲間には違いない！」

「銀髪のカキには今日も仲間をやられたんだ！」

秀斗は後ろを振り向きながら大路地を走る。

警笛が鳴り響き、治安部隊まで出てきていた。

（完全に殺気立ってんじゃないか！ 誰だよ銀髪って！ 俺関係ねえええ！）

細い路地に入るにも、行き止まりになる可能性もある。不慣れな土地では不向きだろう。

（ちっ、まけねえ！）

秀斗の前に川が見え、橋が掛っていた。だがその向こうから集団が走ってくる。警笛は仲間に居場所を知らせるためだったのだ。

橋を渡るのを断念し、道を右に曲がる。だが所詮は子どももの体力、しだいに足は重くなり速度は落ちた。石も当たり始め、銃声も轟く。

（くそ！ こんなところで技使うわけにもいかねえしな……っ！）

とうとう秀斗は足をもつれさせて転んだ。

大人たちは武器を握り締めて、秀斗を取り囲んだ。武器が降り上げられる。

「俺を守れ、星鎧！」

一か八か守護を発動させる。だが、焦りもあってか口にしたのは魔術界の言葉だった。

(しくつたああ！)

秀斗は言語を人間界のものに直してもう一度口にするが、槍はもう目の前に来ていた。

秀斗は眼を瞑って顔を背けた。その耳を高い金属音が貫く。そして感じるはずのない霸動が全身の毛を逆立たせた。

「出やがったな！」

男たちが騒ぎ始め、とたんに悲鳴が上がる。

秀斗の頬に、何かが伝った。

「殺せ！ そのガキを殺せ！ ぎゃあああ！」

秀斗の目に映ったのは、銀色の髪。月の光を反射させてきらめく刃。囲んでいた大人たちはその子どもに標的を変え、次々に襲いかかっては斬り伏せられていく。

舞う血しぶき。その中で一心に剣を振るう少女。手を斬り、背を斬りつけ、薄く笑っていた。

(綺麗だ……)

月の化身のような姿に、秀斗はぼうつと魅入った。集団で男たちはかかるが、彼女はそれを全て避けた。身軽で、スピードもある。

「ひ、退け！ 退けえええ！」

男の一人が銃を撃ちながら後退を始めた。それに続いて我先にと人々が逃げていく。道に人はいなくなり、子ども二人が残った。

少女は剣の血と脂を払うと、鞘に収める。  
彼女は旅芸人のような身軽な服装をし、腰に布で鞘を無理やり留めていた。

「あ、ありがとう」

秀斗は立ち上がって、少女と向かい合った。  
身長は秀斗ほうが少し高い。

目が合って息を飲む。その灰色の目は今まで見た誰よりも、無色だった。ガラス玉のようになんの感情も映さず、感じるのは虚無。

「ステラグニユールか？」

秀斗は彼女から発せられた言葉が信じられなかった。それは魔術界の言語で、自分の祖国の名だった。

「まさか、お前ルナクレア……」

幽かに感じる覇動。そして銀の髪。それは彼女が魔術師という証。

「……こんなところで魔術師に出会うとはな」

少女はくいつと手招きをして歩きだした。

歳と性別に似あわない尊大な口調。そして冷たさを印象付ける無表情な顔。

秀斗は彼女をまじまじと見ながら後を追った。

少女が秀斗を連れて行ったのは、錆びれた橋の下にあるぼろ屋だった。彼女はそこを住み家としているらしい。明かりは小さな蝋燭

のみで、闇の中にぼんやり姿が浮かぶ。  
彼女は適当に座れと指示し、水を桶から杓子で汲んで秀斗に突き出した。

「ありがとう……」

秀斗はありがたく水を飲み、正面に座る彼女と目が合っつてすつと逸らした。

ほのかに香る血の香り。彼女が浴びた返り血はあれだけの人数がいながら微々たるものだった。

彼女は壁に背を預け、腰の剣を外して抱き寄せた。

「えっと、名前は？」

杓子を返し、間が持たなくなった秀斗はそう質問した。

「……私は、弥生。お前……は？」

途切れ途切れの声を不思議に思いながらも秀斗は答えた。

「俺は、秀……っておい」

秀斗は弥生の顔を見て、はあと溜息をついた。彼女は眼を瞑り、肩が規則正しく上下している。お休みのようだった。

「ま……いつか」

秀斗は頭を搔いて、ごろりと横になった。

まともに寝るのは久しぶりだ。弥生が一体何なのかはわからないが、彼女といえるのも悪くないと思った。

なにより同じ境遇の者がいるとただで楽になる。  
秀斗はふわぁとあくびをして眼を瞑った。

久し振りにいい夢が見られそうなのがした……。



### 第3章の6 俺たちの始まり（後書き）

秀斗と弥生の過去、出会い編です。

前がやや暗いので、今回はちよつと楽しく……できたかな？  
ほら、語り手秀斗だし、軽いノリになれば……ね？

まあよしとしよう。主人公はしばらくお休みいただいて、秀斗くん  
に頑張ってもらいましょう。

そして、ひさびさにストックができました。一話分だけど。来週は  
ゴールデン週間もあるし、もっとたまるといいな。

では、次回の過去編続きで〜。

### 第3章の7 俺たちは星と月、共に闇夜に輝くもの

二人が出会ってから一週間が過ぎ。二人は順当に悪党の道を進んでいた。弥生は人間など殺す価値もないと命までは奪わなかったが、物は容赦なく盗んでいた。二人で組む時は、秀斗が盗みを専門にし、弥生がその護衛をする。そうやって日々を過ごしていた。

この日も二人は走っていた。弥生が数メートル先をいき、秀斗がそれを追う。その二人をさらに数十名の治安部隊が追っていた。

早朝に叩き起こされ、敵の来襲が告げられた。窓を覗くと制服を着た、いかついお兄さん方がぼろ屋を取り囲んでいる。

それを突破し、道すがら商店の食べ物と水を拝借して逃走中なのだ。

「弥生……お前早い！」

「秀が遅いんだ」

秀斗はむっとして足を懸命に出す。秀斗の速度が上がったのか弥生が速度を落としたのか、二人は並走状態になった。

(……なんか秀で定着したな)

弥生はあの晩以来、秀斗のことを秀と呼んでいた。秀斗は訂正するのも面倒でほっておいたのである。

「もう少しこの町にいても良かったが、出るぞ」

そう言っている内に町の門が見え始めた。

「次どこ行くんだよ」

「知らん。砂漠を抜ければ何かがあると聞いた」

秀斗はそのいい加減さに呆れつつも、弥生が盗んだ普段よりも多い水に納得した。その他食料とともに布袋の中に入れて肩から提げている。秀斗も多めの水と食料を袋に詰めていた。

二人は武器を向ける門番を手刀で気絶させ門を走りぬけた。すぐ先は砂が見え、砂漠が続いている。

一度足を止め、振り返る。治安部隊は門のところでこちらを睨んでいた。町の外まで追ってくるつもりはないらしい。むしろ追い出せて良かった、といったところだろう。

「新たなねぐらを探して旅と行きますか」

秀斗は袋を担ぎなおして歩き出した。まっすぐ南へと下っていく。砂漠の風は砂を交えて二人の背中を押す。

二人は乾いた空気を吸いながら、次の町を目指した……。

砂漠の夜は寒い。それを初日で知り、砂よけにも暖を取るにも羽織るものが必要だと、二人は偶然見つけた行商部隊からフードつきのロープを拝借した。

ついでに食料も分けてもらい、さらに歩く。

三日歩いてもまだ町の光は見えなかった。

砂漠で四度目の夜を迎え、二人は寝転び夜空を見る。星空はどこか祖国と似て、物悲しい気分させた。

「月と星は……」

突然弥生がそう呟いた。ぽつん、ぽつんと弦を弾くように続きを紡いでいく。

「詩か……そういやそんなものもあつたな」

古くから伝わる詩。皆小さい頃に子守唄として聞かされる詩の一篇。

秀斗はしばらく目を閉じてその言葉に耳を澄ませていた。故郷にある草原が瞼の裏に広がり、草の香りが鼻孔をくすぐった気がした。

「……なあ、ルナクレアってどんなところだったんだ？」

詩が終わり、その余韻の中秀斗は目を開けてそう訊いた。

秀斗は、詩は知っていても実際の国は知らなかった。

「ああ……月は……寒い国だったかな」

弥生は記憶を探りながらそう答え、あまり覚えていない、知らないと付け加えた。

「ただ……山賊は多かった」

秀斗は弥生らしい答えにくすりと笑った。

「そっか、星はさ、国のほとんどが草原なんだ。俺はずっとそこを馬とか騎獣に乗って移動してた」

言葉にすると、とたんに懐かしさで胸がいつぱいになる。もう戻れない日常。

「……家が、帰る家があるのか？」

弥生がその言葉に宿る懐かしさと郷愁に気付いたのか、そう訊いた。

「いや、もう無い。俺は一人だ」

その言葉に弥生はしばらく黙って空を見上げていた。

「……そうか、私も一人だ。帰る場所はない」

二人は顔を見合わせ、クスクスと笑った。帰れない現実が妙におかしかった。事実なのに、どこか信じられない。それが二人の間で共有される。

「なんだ、お前笑えるじゃねえか」

秀斗は声を潜めて笑う弥生に目を見張った。すぐにそれは安堵の表情に変わる。

「普段も笑ってるよ。そっちのほうがずっといい」

「……お前のようにヘラヘラと笑うつもりはない」

弥生は頬に手を当てて、空に視線を移した。

(……笑えるのか、まだ)

故郷にいた時も笑うことは少なかった。もう、笑うことはない

思っていたのだ。両親が死んだあの日から……。

弥生は頬の手を額へと上げ、ぐっと握った。

再び二人は黙って空を見上げた。空には星と共に月も浮かんでいて、その二つが二人の心に染みだ。

「こつやって空を見ると、ここが人間界だなんて信じられねえよな」

「そう……だな。だが、ここは祖国ではない。死ぬべき場所ではない」

弥生の声はいつも以上に強かった。強い意志を持った声だ。それに秀斗も共感する。

「そーだよな。死ぬなら、自分の国に眠りてえよな」

弥生の場合、軽蔑する人間の世界になど眠りたくないという気持ちのほうが強いのだろうが……。

「なあ秀」

「あ？」

「……私が死ぬときは、お前が殺してくれないか？」

「は？」

秀斗は跳ね起きて、弥生の顔を見下ろした。

弥生の目は秀斗を映し、その秀斗は困惑の色を顔に浮かべている。

「この地で死ぬのならば、同胞の手にかかって死にたい」

弥生の声には一欠片の迷いもなかった。むしろそれを望んでいる。この地で生き延びるよりも、同胞によって殺されることを。

秀斗は弥生の真剣な眼差しに、すぐに返す言葉が見つからなかった。

「……わかった。その代わりに、俺がやばくなったら、お前が殺せよ」

秀斗はそれ以外の答えを導けなかった。

互いに約を交わす。互いに鎖で縛り合う。

それ以外に、彼女をここに留めておく方法が思いつかなかった。

「……ああ。まあ、お前を殺そうとする奴は、全て私が殺すがな」

弥生は脇に置いた剣を体に引き寄せた。出会ってから一度も身から離さない愛剣、月契。

今は鞘に包まれているが、その刀身がきらめけば血の雨が降る。

「俺も、お前を守る。誰にも指一本触れさせねえ」

秀斗は勝気な笑みを見せ、弥生の剣を掴む手に自分の手を重ねた。

「くくつ……それではなかなか互いに殺せないな」

弥生は喉の奥で笑い、握られた手を見つめていた。わずかに不思議そうな顔をしている。

「嫌か？」

「……いや、人の手は暖かいのだな、と思ったのだ」

「……そっか」

秀斗はくしゃりと笑った。少し悲しみが混じった笑み。

(誰にも、触れてもらえなかったのか)

秀斗はぐつと力を込めて弥生の手を握った。

「なあ、弥生……」

「ん？」

「……いや、やっぱりなんでもねえ」

秀斗は名残惜しそうにそつと手を離す。手を引くついでに頭を撫でたら、その手を鞘で払われた。

「痛え」

「……つい」

弥生はふいと秀斗から視線を逸らし、剣を抱きよせ丸くなる。

「寝るのか」

「ああ」

弥生は数日に一度ぐらいしか眠らなかった。



通常は短い仮眠を取るが、一日中起きている。そしてぜんまいが切れたように眠るのだ。

「……おやすみ、弥生」

「ああ」

秀斗もごろりと横になる。弥生との間に十分な間を取って自分も目を瞑った。眠っている弥生は警戒心が常より強くなる。うっかり触れでもしたら、目の前に刃が迫っているのだ。

秀斗は目を開け、弥生の寝顔を盗み見る。

可愛らしい顔立ち。そうして寝ていれば、歳相応の女の子と何一つ変わらない。

秀斗は目を閉じて神経を集中させた。覇動を探ると、月の覇動の中に幽かに別のものが潜んでいる。

素人には分からないほど、微量な異質な覇動。それは同胞だから分かるものだ。

(弥生……俺はお前を守るぜ。空っぽの心を埋めてやる)

秀斗は悲しみと虚無を抱く少女を想いながら、眠りへと落ちた。

二人は街の大きさに目を見張りながら、大通りを歩いていた。フードを目深に被り、もくもくと歩いていく。

ここは中国の首都、北京という所らしい。

賑やかさは今までの町と比べものにならない。人と物が行き交い、表通りが活気に溢れる一方で、裏の闇は濃くなっている。

早々から石を投げられることは無かったが、こちらに投げられる

視線はけして友好的なものではない。

「どこの店がいいっかな」

もちろんどこで食べようかという品定めではなく、どこで盗もうかという品定めである。

「もう少し外れまで行こう。人通りは少ない方がいい」

「オツケ」

二人は赤一色の街を見物しながら、街の外れへと歩く。途中に使われていない民家を発見し寢床にすることを決めた。

今日は体を休めることにし、二人は旅用の食料を食べると、早々と睡眠を取った。

だがこの日、弥生は眠らずただ空を見ていた。隣では秀斗がすやすやと寝息を立てている。

(秀……)

神経を集中させて覇動を探る。何度やっても、幽かに感じる事が出来た。星の覇動一筋入った黒い線。

(同胞)

初めて会った、同じ運命を背負う者。だが、それを言うてはいけない気がした。訊くべきでもない。

この血を嫌っているのなら尚更……。

「秀……私を殺せ。私もお前を殺すから」

その言葉は、不思議と安心を与える。誰もいない、敵だらけの世界で唯一望みがある場所。

(全てを終わらせたい。だが、この血は死ぬことを許さない)

弥生は月契を鞘から抜いた。刀身が己を映す。無感動な瞳。それは故郷にいた時と何一つ変わっていない。

(何が、足りないと言っただろう)

ある人が、ある時、この瞳を見て足りなかったのだと言った。たくさん、貰わなくてはいけないとも言った。

弥生はそれを何一つ理解できないでいる。

(この瞳は、いけないのだろうか)

目が合えば、大抵のひとがぎよっとした顔をした。なるべく隠そうとはするが、それでも幽かに顔の筋肉が動く。

(こいつは、どうなのだろう)

秀斗の瞳はどうだったか思い出そうとするが、思い出せない。いつも見ているようで、見ていなかったのだ。

弥生はまだ天高くかかっている月を見上げた。

(早く、沈めばいい)

そうすれば、秀斗の瞳を見ることができるのだ。

秀斗は朝から狼狽していた。目を覚まして体を起こすと、すぐ目の前に弥生の顔があったのだ。とっさに両手を上げて無抵抗を示す。だがその喉元に剣は無く、弥生の瞳に秀斗が映っている。

「秀……お前の瞳に私が映っている。私がいる」

「お、おう。お前の瞳にも俺がいるぞ？」

秀斗はずりずりと後退する。朝から心臓に悪い。眠気も一気に飛んで行った。

「……いるの、だな」

弥生はそう呟くと、剣を腰に佩いて朝食を盗ってくる外に出て行った。

「なんだ……？」

謎の行動にどきまぎしつつ、その背中を見送った。

そして先程の弥生の表情を思い出して、クスリと笑う。あまり表情は動いていなかったが、それでもわかる子どもっぽい表情。

新しいものを発見した時の、嬉しい顔が覗いていた。

秀斗は頭を搔いて、あくびをした。

(可愛いとこあんじゃん)

秀斗は顔を洗うために、水を求めて外に出て行った。

北京に滞在して数週間が過ぎた。弥生はふらりと出て行っては、血を浴びて帰ってくる。

秀斗もふらりと出て行って、戦利品を持って帰ってくる。弥生は始終無表情で何もしゃべらず、思い出したように秀斗に触れた。攻撃と取られかねない強さだったが……。

秀斗が弥生の頭を小突くと、弥生は満足したように離れていく。おもむろに瞳を覗いてくることもあった。訳のわからないやりとりにもずいぶん慣れたものだ。

秀斗は本日の戦利品を床に置いて、弥生へと近づく。弥生は秀斗に背を向けて丸くなっており、まだ夢の中らしい。

今日は寝る日なのだろう。

秀斗は額に星鎧を出現させ、深呼吸をして気を落ち着かせた。ゆっくりと屈み、手を弥生の肩に伸ばす。

「弥生、おはよ……っ！」

その手が肩に触れるやいなや、弥生は跳ね起きて月契を鞘から抜き払った。刀身は守護障壁によって跳ね返される。

「……おはよう」

相手が秀斗だと分かったと、弥生は剣を鞘に収め窓の外を眺めた。

晴天、時刻はお昼前。

「弥生、これ今日の頂き物。じゃ、俺は外で待ってるから着替えて来いよ」

秀斗は床に置いてある服を指さして、笑みを見せる。弥生が着ている服は返り血がついて黒ずんでいた。もう一着も同じだった。

「……ああ」

秀斗が出て行った後、弥生は置かれた服を手を取った。

「……これ」

弥生は、その衣装を身にまとって外に出た。

その姿を見て秀斗が破顔する。

「やっぱりその服が似合うよな」

秀斗が弥生へと持ってきた服は、弥生が最初に来ていた旅芸人のような服だった。弥生は北京に入ってから、ずっと中国の一般の服を着ていたのだ。

「これ以上血を浴びるなよ」

「……善処する」

弥生はすっと視線をそらして、そう呟いたのだった。

「さ、行くうぜ。街に遊びによー！」

秀斗が先頭をきって歩いて行った。

「街？」

弥生が追い付き、二人は隣だつて歩く。

「そ、南ってまだ行ってねえだろ？」

「南には何かあるのか？」

「さあね」

秀斗は着いてからのお楽しみ、と鼻歌交じりで先へと進んで行った。

南はもっと人が多かった。商店が立ち並び、等間隔に赤い旗が立っている。人民服を着た人々が、ひっきりなしに移動し、お酒を飲んで騒いでいた。

昼ごはんを食べ、観光をする。歴史のある建築物を見て、広場で人々の会話に耳をすませた。情報収集は大事だ。

そして気の向くままに歩いていくと、いつのまにか夕暮れとなった。

「ぼちぼち帰るか」

「そうだな」

二人はボロ屋へと向かって歩き出す。少し大通りからずれると、人通りはめっきり減る。

危険と呼ばれる道も、腕に覚えのある二人は平気で進んだ。  
遠くで犬の遠吠えが聞こえ、闇夜が訪れる。  
秀斗と弥生は月明かりの中を歩いていく。

「夜もまたいいよな。昼とは違う顔が見られる」

秀斗はゆっくり辺りに首を巡らす。行きしなに通った道ではあるが、夜となるとまた違う表情を見せる。

「……夜は嫌いだ」

夜の静けさを切り裂くような鋭い声で、弥生がそう言った。

「なんで？」

「……消えてしまいそうになるから」

秀斗はしばらく豆鉄砲を食らったような顔をしていたが、やがてその表情を徐々に苦いものにしていった。

「そう……だよな」

秀斗は空に浮かぶ月を見上げる。今宵は満月。後は欠けていくだけだ。

（月の宿命……）

月の満欠けによってその力が左右される。満ちれば魔力が強くなり、欠ければ身体能力が向上する。



「だからあんまり寝ないのか？」

「……さあな。ただ苦手なだけかもしれない」

二人はしばらく無言で歩いた。ざわざわと木々が揺れる音だけがそこにある。

同じ歩幅、同じ速度で二人は歩く。

「……弥生」

「秀……」

二人は同時に立ち止まる。ザワザワと何かが感覚神経に働きかけている。今まで感じたことのない気配。それは覇動のようで、覇動ではない。どこか異質さを含んでいた。

二人が警戒をした直後、それは急に強くなり、二人にのしかかった。

「なんだ、これ！」

「強い！」

二人はその気配が集中した方角にはつと顔を向けた。民家の屋根の上に人影が二つ。

その二つの影が揺れたかと思うと、それはすぐ眼の前に現れた。全身黒衣の男女。二対の目が二人を見下ろしている。

「本当に魔術師の子どもだ」

と女が驚いたように言う。

「だからそう言っただろ」

と男がむっとした表情で答えた。

二人は初めて出会う覇動に身をすくませていた。心臓が高鳴り、音が遠くなる。己の血が、その覇動に恐怖している。

だが、血の深く、潜み眠った血はその純粋な覇動に対して、美しさを感じていた。

何物も混ざっていない純粋な闇。血の奥に潜むものが、共鳴していた。これが、求めるものだ。

「気に入った。月に星、来い」

女は口角を上げて、手を弥生へと差し伸べた。

「鎖羅、もう少し言い方を……」

男は呆れ口調でそう言い、そして意を決したように手を秀斗へと差し伸べた。

「よければ来い。同胞を見つけたんだ、ほうっておくわけにもいかん」

弥生と秀斗は互いに顔を見ることすらしなかった。答えは決まっている。

二人は闇夜の中でさらに深く、濃く存在するその手を掴んだ……。

「月、名は？」と鎖羅が弥生に問う。

「弥生だ」

「お前は？」と阿修羅が秀斗へ問いかけた。

「秀斗」

「……え？」

秀斗はこの時の、きよとんとした弥生の顔を未だに忘れることができない……。

「……っんあ？」

秀斗はハッと目を開けた。窓の向こうはもう真っ暗だ。昔のことを思い出していて、いつの間にか寝てしまったらしい。どこからか夢だったかもわからない。

(ん〜、懐かしい夢)

秀斗はぐつと伸びをして、神経を弥生の部屋へと集中させた。月の覇動と幽かな闇の覇動。

「弥生……お前も、覚えてるんだろ？」

懐かしく、楽しかった記憶だからこそ、今がより辛くなる。

秀斗は己の手を見つめた。この手の奥に流れる血も、弥生と同じ……同胞。

(弥生は強い……だけど、弱い)

かつて、鎖羅が秀斗に向けて言った言葉。

そして弥生を強くするために剣を教えると言った。弥生が修羅に堕ちれば自分が斬ると、師としての言葉を秀斗に預けて。

秀斗は、ぎりつと奥歯を噛んだ。

大雨の中、弥生と共に黒騎を後にした。雨に打たれ、振り返り見たあの屋敷は、冷たい色をしていた。

(俺は、どうすりゃいい……俺は……?)

夜の闇にぼつかりと浮かぶ満月。その周りを星が取り囲むが、その光には敵わない。

太陽の光を受け輝く光に、星の光が敵うことはない……。

「月と星は、天から生まれその運命を共にする……」

秀斗は祖国に伝わる詩を口ずさむ。朗々とした声が、薄暗い部屋に響いた。

(弥生……俺は、お前を守る。そして、俺がお前を殺すんだ)

相反する行為。だがそれは、両方弥生を守るために。

秀斗は悲しみに顔を歪め、窓枠に拳を打ちつけた。

### 第3章の7 俺たちは星と月、共に闇夜に輝くもの（後書き）

第三章、七話目で週一ペースを崩した。

言い訳、違うんです。前の終りが気持ち悪かったんです。一話完結を目指してるんです！ それと、ストックができて気持ちに余裕ができたからです。土日家にいるかわからないってこともありすが……。

そして早く主人公ではと楽しみたい……。作者の欲望が出てきてしまってますね。

さて、アクセス履歴を見ていて、たまに一話から最新話までいき読んで思われる人がいます。頭が下がります。

ありがとうございます。稚拙な文章ですが、途中で飽きない話を目指している自分にとっては嬉しい限りです。

では、次回『そういや俺ってバイトだっけ』でお会いしましょう。

### 第3章の8 そついや俺ってバイトだったけ

翌日、勇輝は学校にいた。だらだらと授業を受け、体育で体を動かす。本日の種目はサッカーだ。

カラリと晴れた天気気分を軽くする。

体を動かせば、暗い淀んだ気持ちも軽くなった。そこには秀斗と錬魔も混ざっていた。

女子は体育館でバレーボール。零華と癒慰が参加している。あの日から弥生は一度も部屋から出ていない。秀斗でさえも、中に入らなかった。

(心配だよな……)

勇輝は敵をマークしながら、如月にいる弥生のことを考えていた。他のみんなもいつもより表情が堅い。

敵が運ぶボールを秀斗が取った。それを巧みに蹴って進み、勇輝と目があつた。

「受け取れ勇輝！」

そつ言うつや秀斗は勇輝にパスを送る。

「任せろ！」

勇輝は飛び出して、そのボールを受け取るとゴールを目がけて突き進む。ボールを操りドリブルを繰り返して敵を交わす。

「させるかよっ！」

歩がカットしに来るが、勇輝はボールを空中に避難させてそれをかわし、前へと進んだ。

眼前にゴールが迫り、キーパーとの一騎打ちになる。ゴールを守るのは面倒臭そうな赤髪、鍊魔だった。

長身の彼はそこに立っているだけで威圧感がある。勇輝はゴールの隙をしっかりと見極め、足を振り上げる。

「いつけえええ！」

勇輝渾身のシュート。そのボールは高速の回転がかかり、鍊魔めがけて襲い来る。

バスツ、その音と現実には、勇輝は目を点にした。

「あ………」

ボールは鍊魔の手の中。鍊魔は一步もそこから動いてはいない。

ボールは綺麗に鍊魔に向かって飛んでいき、その手で受け止められたのだ。無造作に、軽々と……。

「ど真ん中だな」

野球ならストライクが取れたかもしれないが……。

「しくつたああ！」

叫ぶ勇輝を無視し、鍊魔はボールを空中に放つとそれを蹴り飛ばした。ボールは大きく弧を描いて飛んでいく。

「上がれ」

チームの声を聞き、秀斗と勇輝は急いでボールを追う。息を切らせ、頭をからっぽにして、彼らは午後の五六限ぶちぬきの体育を楽しんだのだった。

授業が全て終わり、彼らは如月のホールにいた。

日が落ち始め、薄暗くなると同時にまた雨が降り出して来た。細かい粒が窓を叩き、樹木を濡らす。

彼らは談笑をしていたが、話しているのは癒慰と勇輝だけで、鍊魔は読書、秀斗はソファアで横になっていた。

現在彼らは零華が帰ってくるのを待っているのだ。今回の件を隊長へ報告しに行った彼女を……。

「なあ、弥生が罰せられたりすることはないよなあ」

勇輝は先ほどからソワソワと落ち着きがなく、声も頼りない。

「……大丈夫だと思うわ。隊長は一人が元黒騎だったことも知っているし、それに零華ちゃんが行ったから」

癒慰も自信なさげではあるが、最後の零華の名は強調していた。

「零華って強いのか？」

「強いつて言うか、怖いつて言うか……」

癒慰は「ごにょごにょ」と言葉を濁らせる。

如月は零華無しには機能しない。事務関係、本来ならばリーダー



である弥生がするべき仕事を一手に引き受けているからだ。

故に、彼女に逆らえば色々と生活に支障が出る。

それは隊に枠を広げても同様で、隊内の事務仕事もこなす零華は、隊長に物を言える数少ない人間だったのだ。

「……やっぱりこの裏番は零華か」

勇輝がぼつそとこぼした核心を突いた言葉に、癒慰は苦笑いを浮かべていた。

そしてその時、待ちわびていたドアが開いたのだった……。

「只今戻りました」

「おかえり〜」

隊員服を着た零華を二人が手招きした。秀斗もむくりと起き上がって軽く手を振る。

彼女の隊員服は清楚で大人っぽい。淡い水色のワンピースは太ももまでスリットが入り、袖はザックリと斬りこみが入れられ余った袖が手元を優雅に見せる。

牙軍の証である上着を羽織り、右胸にはブローチが光っていた。個性をよく現したデザインである。

ふうと手に持っていた荷物を机に置き、零華はやれやれと言った顔で全員がいることを確認する。

当の本人がいないことは百も承知だ。

「隊長にこのことを報告した結果、好きにしるとの言葉を頂いてきました」

しばし沈黙が降り、いち早くその意味を理解した鍊魔が驚きの表

情を浮かべた。

「よくそれを言わせたな」

「へ？ 好きにしるって？」

ぽかんとする勇輝に、零華が微笑んだ。

「私たちが好きに動いていいということです。本部が手を出すことはありません。弥生ちゃんを生かすも殺すも私たちの自由ということですよ」

噛み砕いた言葉に、勇輝の顔が輝いた。

逆に錬魔は渋い顔をしている。

「あら、どうしました？ 錬魔君」

「……いや、つくづく恐ろしいと思ったただけだ」

錬魔は以前隊長に何か不穏な動きがあれば始末しろと言われていた。隊長は弥生の始末に肯定的でさえあったのだ。それを本部隊員の派遣もなく、自分達に任せた。

(どんな交渉をしたんだか……)

つくづく、零華が味方で良かったと思う錬魔だった。

「あら……心外ですね。その言い方ではまるで私が何かしたようではありませんか」

零華はにつこりと笑い、かつ強大なプレッシャーを放っていた。それがますます恐ろしい。

「……すまん、何でもない」

鍊魔は素直に引き下がり、彼女が持ってきた荷物に目を留めた。銀色のアタッシュケース。この間はこれに匠製の麻醉銃が入っていたが。

「なあ、これ何？」

鍊魔が訊こうと思った矢先、勇輝がそれを指さして尋ねる。いかにも興味津津といった様子だ。

「それは報酬金です。誰も取りに行かないから、私がこの重い荷物を、わざわざ貰って来たんです」

あくまで物腰は柔らかだが、わざわざの部分がかかなり強調されていた。

「あつ、そーいやそんなもんもあつたな」

秀斗が忘れてた、と頭を搔いた。

「大きな仕事したの久しぶりだったしね」

「というか、これもお前の管轄だろ」

鍊魔はサイドテーブルに置いてあったカップを手に取り、口をつける。中身はコーヒ、彼らにとっては酒である。

零華はそれを目聡く発見したが、今回は見逃すことにした。彼の言う通りこれから零華の仕事が始まるのだ。

「報酬金……？」

「そうです。隊長からバイトの勇輝君にも、ちゃんと分けるようにと言われていきますので、安心して下さいね」

「そっぴゃ俺バイトだったけ」

バイト料など出ないと思っていた勇輝は、またそわそわし始めた。

「時給いくらかな、八百円くらい？ ていうか、俺いつ働いてんの？」

勇輝の感覚は遊びに行っている感覚である。半分住み込みであり、やっていることもほぼ遊びに入っている。

「これは昴乱の時の報酬ですので、時給は関係ありません」

と零華がケースの留め具を外し始めた。龍牙隊の給料は歩合制で、任務ごとに報酬金が支払われるのだ。

「今回はどれくらい？」

零華は蓋を開けると同時に答えた。

「五千万です」

アタッシュケースの中にはぎっしり札束が並んでおり、それを見

た勇輝はクラリとめまいがした。たくさんの諭吉が勇輝を見ている。

「ご、五千万？」

一般高校生が目にする額ではない。勇輝はごくりと唾を飲み込んだ。

「けっこう多いね」

「上の二人が失敗しているからな。その分引き上げられていたんだろっ」

「では配分していきますね。いつもどおり、半分は屋敷の修理費や食費に置いておいて、残りの半분을均等に分けます」

零華はケースから半分お金を出し、均等に分けていく。勇輝は現実とは思えない光景をただぼうと見ていた。

「一人当たり、四百万ちよつとですね。各自カードに入れるなり金庫に入れるなり、管理してください」

と零華は札束四つと十数枚を勇輝の目の前に置いた。それを見て勇輝は盛大に顔をひきつらせた。

「い、いらない！ こんな額、俺何もしてないのに！」

自給八百円ならば、せいぜい一か月三万ちよつとかせげばいい方である。それが、一度に四百万ももらつては、現実が崩壊する。

「しかし、勇輝君も如月に入っていますし、昂乱の折は協力もして

くれました」

「危険な目にもあったしね」

癒慰は自分の分を取り分けて、「ご機嫌だ。

「いや、でも、俺バイトだし……」

お金は欲しいがこんなにはいけない。百円が道に落ちていたら喜々として拾うが、百万円が落ちていたらびびって警察に届けてしまう。それと同じだ。

何よりまじめに働いているアルバイトの人々に申し訳ない。

「……では、ひとまず如月が預かって、毎月社会の給料と同じ額を渡していきますね」

零華は勇輝君らしいですね、と苦笑しながら札束から二十五万円を抜き取った。

それでも勇輝は首を横に振り、バイトバイトと連呼する。結局、勇輝の給料は四万円に下がったのだった……。

「全部もらっとけばいいのに」

「だめ、俺貰ったら全部使っちゃうから。というかみんなは何に使うのさ」

「もちろん服に決まってるじゃない」

癒慰は自身のスカートをひらひらとつまんでみせる。本日の衣装は鏡の国のアリスだそうだ。

勇輝はこのお金が全てこの可愛く迷惑な衣装に費やされているのかと思うと、頭が痛くなった。

「錬魔は？」

「ん……研究費用だな」

勇輝はまともな答えにほっとして二度三度と頷く。やはり錬魔はこうでなくてはいけない。

「秀斗は？」

「俺？ なんだろ……飲み代とか、酒代かな」

「どこのサラリーマンだよそれ」

だが事実、秀斗は隊員をつれて飲みに行くことも多いし、珍しい酒を買ってくることもある。酒は彼らにとってお茶なので、酔うことはない。

「零華は？」

「あら、お聞きになります？ 色々ありますが……」

にこやかにそう言われては、訊けるはずもない。いらぬ地雷を踏みたくない勇輝は、別にいいとにっこり笑みを返してその場を凌いだ。

「そついえば、弥生は？ 弥生は何に使ってんの？」

彼らはその間に、顔を見合わせた。

「さあ、あんまり弥生が金を使うところ見たことねえな。つうか、欲しいものは負かして奪うタイプだし」

「実際、私が彼女の金庫に入れていきますから、この存在も知らないかもしれませんね。さすがに物を買つという事は教えました」

「そういえばカード、持ってたよね」

「ああ、さすがにあれは持たせた。後で代金を要求されるとかなわんからな」

弥生の金への執着心と常識のなさ、そして彼ら苦勞が垣間見える会話だ。

「じゃあ今度弥生を買い物に連れてってみよ。おもしろいかもしいし。誘ってみよっかな」

勇輝は四枚の諭吉財布に入れ、ズボンのポケットにねじ込んだ。

「そうだな、ひとまず弥生をあそこから出すべきだ」

「もう俺はいかねえ、てかいけねえよ。次いったら死ぬ」

そもそも秀斗に絶対守護の能力がなければとつくに死んでいただろう。

「じゃあ、俺行ってみよ」



勇輝のちよっとコンビニ行ってくるわ、ぐらいの軽い発言に、彼らはぎょっとした。

「止めて、勇輝君が死んじゃう」

「そうです。こういうのは秀斗君に任せておけばいいのです」

「おい、なんかそれ、俺は死んでもいいみたいに聞こえんだけど」

秀斗が半眼で訴えるが、女の子二人はさらりと聞き流す。

「だが、弥生も勇輝相手なら多少手加減をするのでは？」

「……どうでしょうか」

「ま、やってみてダメだったら錬魔助けてね」

勇輝は頑張る、と親指を立てた。無駄に決めポーズである。

「これでだめだったら、次は錬魔君ね」

癒慰のその言葉が承諾となった。

弥生を引っ張りだすぞ作戦の決行である。

### 第3章の8 そついや俺ってバイトだったけ（後書き）

五月に入りましたね。滑り込みアウト。

#### 神名の裏話

主人公の名前、最初のネタ帳によりますと春日雄輝でございました。

勇輝だと勇気と混ざるからなあ、と思ってた気がする。

しかし、パソコンでカタカタ打っていて気づく。

あれ？ なんかこいつの名前、勇輝になってんだけど。

それも初登場シーンからすべて勇輝。どれだけ適当に打ったんだろつ。

そこそこ打ってしまったので、もういや勇輝で……となりまして。

勇輝 「マジで？ 俺そんな由来があったの？」

私もびっくりだよ。

さて、いまさらだが、この話前に書いてませんよね。

もし見たよ、って方がいたら教えてください。裏話もそこそこやってるので覚えていない。

では、次回『雲がくれにし夜半の月かな』で。

### 第3章の9 雲隠れにし夜半の月かな

しとしとと雨が降る。薄暗い部屋、静かな空間。空には厚い雲がかかり、灰色の空は太陽の姿さえ隠してしまった。すぐに夜になるだろう。

窓に白い吐息がかかる。銀の髪がさらりと肩から零れ落ちた。髪の間から赤い筋が覗く。

それはつい先ほどつけられたかのように生々しかった。

月契が肩に立てかけられ、弥生は壁に身をもたれさせて固く目を瞑っていた……。

（ああ……またか）

ぼんやりとした視界がはつきりし始め、意識も現実を捉えていく。

（また、この夢か）

辺りの景色と記憶が一致し始めたところで、弥生はこれが夢だと知っていた。黒騎を出てから何度となく見た夢。始まりから終わりの日常。覚めたいと願っても、意識は夢から逃れられない。見たくないと願っても、視点はそこから動かない。

目の前に広がるのは始まり、あの夜。二人との出会いからだつた。弥生と秀斗に差し出された手、弥生は二人の力を恐れ、そして惹かれてその手を取った。

それからの黒騎での日々が、弥生の視界に映し出されていった……。

「ここがお前らの家だ」

と連れてこられたのは、異空間にある屋敷だった。こじんまりとした屋敷で、中に入ると黒衣の人々、五六人が迎えてくれた。

二人は彼らに簡単に預かることになったと弥生と秀斗を紹介し、屋敷の奥へと進んで行った。

弥生と秀斗はきよきよとせわしなく首を動かしている。

秀斗はもの珍しさに、弥生は脱出経路の確認と違いはあったが、子どもらしい仕草であった。

阿修羅と鎖羅の部屋は、屋敷内でも奥にあった。廊下を行くと手前に阿修羅の部屋があり、その数部屋奥が鎖羅の部屋となっていた。二人の部屋の間にはホールもあり、団欒が出来るようになっていた。

四人はひとまずそのホールに入り、近くのソファーに座った。秀斗は興味深げに辺りを見回し、弥生は剣を身に引き寄せて警戒を怠らない。

「さてと、改めて自己紹介と行こうか」

阿修羅は成り行きで連れてきた子ども二人に目を向けた。その顔には二人を気遣ってか、やんわりと笑みが浮かんでいる。

「俺は阿修羅、闇の魔術師だ。歳は十八」

「我は鎖羅。阿修羅と同じく闇に属している。歳は同じ十八。向うの年と言えば一年違うがな」

二人は簡潔に自己紹介を終わらし、それでだ、と阿修羅が話し出した。

「同じ魔術師として、お前たちを保護させてもらった。あの国を子どもだけで生きるのは大変だから……秀斗は俺、弥生は鎖羅と個室でいいな？」

その問いに二人はこくりと頷いた。

「……ああ、ここは黒騎という組織だ。まあとくにする事はないから、気にする必要はない」

二人は黙っていた。何をどう話せば分からなかったのだ。互いに顔を見合わせ、そして阿修羅と鎖羅へと視線を戻す。

「つまらん。来い弥生、阿修羅としては息が詰まるだろう。我ととも寝よう」

沈黙の多さに嫌気がさした鎖羅は、弥生の手を掴み強引に立たせると、引きずるように部屋を出て行った。

「や、弥生？」

戸惑う弥生と目が合って、秀斗は思わず立ち上がる。だがその眼の前で、扉は無情にも閉められた。

（だ、大丈夫か？ つーか、俺らここにいて本当に大丈夫か？）

秀斗は阿修羅と二人きりにさせられて、急に不安が込み上げてきた。唐突すぎて信頼をどこに置けばいいのかわからない。

「しかしすることもないからな……寝るか」

阿修羅はすくつと立ち上がり、秀斗を抱えて歩きだす。

「え、あの、はい？」

ひょいっとなつみあげられ、肩に担がれた。

そのまま荷物のように運ばれる。二人の容姿は八歳の子どもで、対する彼らは大人と同等の身長があった。

「今は夜だからな。子どもは寝る時間だ」

この日、彼らが全く何なのか分からないまま二人は眠ることとなったのだ。

そして数日を過ごしてみると、確かに彼らにすることがないことがよく分かった。阿修羅も鎖羅も一日中どこにも出かけること無く、部屋でのんびり過ごしていた。暇つぶしは書庫での読書。

鎖羅はよく剣術の稽古もしていた。中庭の一角が潰され、鍛錬場になっていたので。

そこで鎖羅は剣を振り、腕を磨く。鍛錬場の片隅に弥生もいた。ただじつと鎖羅を見ている。

「はあっ！」

鎖羅が気合いと共に剣を薙ぎ払うと、剣圧で立てられた丸太が全て両断された。それだけでなく、丸太の向こうに植えてある木まで倒れてしまった。弥生が感嘆の声を上げる。

目をきらきらさせる弥生に笑いかけたが、内心冷や汗を流した。倒してしまった木は隣の花々を下敷きにしている。

(少々やりすぎたな。後で阿修羅にどやされる……)

この鍛錬場だって、阿修羅に頼み込んで中庭を潰させてもらったのだ。中庭の木々を傷めないことを前提に……。

(奴は顔に似合わず繊細なところがあるからな……)

ふと鎖羅は弥生に目をやり、目を瞬かせた。

弥生が近づいている。ここ数日は十数メートル先から見ていたのだが、五メートルほどの距離まで近づいてきていた。

そしてその視線が鎖羅の剣に注がれていることに気がついた。

「……見るか？」

弥生が大きく頷いた。

鎖羅の剣は西洋の剣で、細身の長剣だった。

黒光りする刀身に、見事な修飾がなされた柄と鞘。

弥生はそつとそれに手を伸ばしたが、すつと剣は引っ込められ鞘に収められる。

「触らぬ方がいい。これは召喚型の剣でな、闇に属する者以外は触ることはできぬ」

「……召喚。同じ」

弥生はぼつりと自分の腰にある剣を示して呟いた。

「そうなのか。お前の剣も……名は何と言つ？」

鎖羅は同じ武器を持つ者に会えたことと、弥生が言葉を発したことが嬉しくて、顔を輝かせた。

「月契」

「そうか、我のは闇宵あんしやうという」

そして鎖羅は月契へと手を伸ばした。弥生が反射的に身を引くよりも早く、手はその剣へと及んだ。

その瞬間火花が散り、ばちつと大きな音がした。

「な？ 弾かれるだろ」

鎖羅は弾かれた手を振って苦笑いを浮かべた。

弥生は驚き、そして手を気遣うようなそぶりを見せる。

「心配するな。さほど痛くはない」

「秀は、平気なのか？」

「ああ。星は月と同じく天の圏族だからな。後……光もいけるか」

弥生はこくりと頷く。その昔天が滅び、そこから光と星、そして月が生まれたと伝わっていた。

「大切にしろ。その剣はお前そのものだからな」

弥生はこくりと頷いて、月契の鞘にそっと触れた。



「私は、何かしなくてもいいのか？」

「何かと言われてもな、何もすることがない。私たちは左遷組だからな」

「……させん？」

弥生は少し首をかしげた。鎖羅は喉の奥でくつくつと笑う。

「まあ組織のはみ出し者だ。戦力外ということだな」

鎖羅はカラカラと笑う。たいして気にしていないらしい。

じつと鎖羅の目を見つめた。ぐいつと顔を上げて、見つめ合う。

「鎖羅……どうして私たちを拾った？」

弥生はずつと気にかかっていたことを口にした。

「拾った？ そんな物のように言うな。連れて来たと言え」

鎖羅は眉を吊り上げた。弥生はびくつと肩を震わせ、再び口を動かす。

「何故、連れてきた？」

「……ふむ。その銀色に惹かれたからかな」

鎖羅はふわりと笑って弥生の頭を鷲掴みにした。そのままワシヤワシヤとかき回す。

「きれいな銀色、月の光そのものだ」

鎖羅の手がすつと離れ、弥生は自分の頭を押さえつけた。鎖羅を見上げる目は白黒し、表情に戸惑いと幽かな脅えが潜んでいる。

「きれい……？」

「ああ。弥生、そう固くなるな。お前はここで好きに生きればいい。黒騎に属すものは皆大切な仲間だ。私はそう思う」

弥生は髪をくしゃりと掴んだ。俯いて、固く唇を引き結ぶ。

「仲間、家族。生きる……ここで、生きる」

自分に言い聞かせるように、何度もその言葉を繰り返した。

「ああ。では、生きるために食べるか」

ぐいっと弥生の手を引いて鎖羅は屋敷の中へと戻っていった。時は昼、体を動かした鎖羅のお腹は空腹を訴えていた。

「いや、私は……」

ずりずりと引っ張っていかれる弥生。この後弥生は、ご飯を全て食べるまで席を立たせてもらえないという苦行を強いられることになったのだ……。

満月の夜。二人が黒騎左遷組屋敷ですごすようになってから、一か月が過ぎた。二人は徐々に打ち解けていき、他の同居人とも言葉を交わすようになった。彼らは全員が能力者で、鍛錬したり、個別に指令を受けたりと各々好きに過ごしていた。

弥生はほとんどを鎖羅の部屋か書庫で過ごし、気が向けば鍛錬場で体を動かした。たまに森の広場で鎖羅に稽古をつけてもらうこともあった。

秀斗は気の向くままに屋敷を歩き、弥生を見つければその後はともに行動していた。

弥生はこの夜、ふらりと屋敷を出ていき、深夜を少し過ぎたころに帰って来た。中庭に空間の切れ目が現れ、そこから弥生が姿を見せる。足取りは重く、白い肌には所々に赤い雫が伝っている。そしてその黒い服には、黒に紛れて見えないが、べったりと返り血が付着していた。

弥生は空を見上げ、瞳に満月を映す。満月の日は魔力が最大に達し、空間を渡ることが出来るのだ。

「また遊びに行っていたのか、弥生」

急に声をかけられ、弥生は弾かれたように声がした方に体を向ける。木の幹にもたれかかって鎖羅が弥生を見ていた。責めているのではなく、呆れたような口調。

「満月の度に人間を殺しに行くのか？」

「殺してはいない。殺す価値もない」

弥生の殺していないとは、直接心臓を貫いて息を止めていないという意味だ。生きるか死ぬかは、斬られたものの生命力にかかっている。

鎖羅はそうか、と肩をすくめた。

「闘いが好きか？」

「……分からない。私にはこれしか出来ないから」

鎖羅はつつかたと弥生に歩より、その銀の髪にも血が付着していることに気付くとわずかに眉をひそめた。

「美しい髪が台無しだな。赤髪は火だぞ……」

「……私はこの色が嫌いだ。月の力が嫌いだ」

鎖羅は弥生の瞳を見つめた。透明で、虚無を湛えた悲しげな瞳を。

「何故？」

「……月は不安定だから。闇に侵される、弱い力だから」

鎖羅は何も返さずに空を見上げた。今日は満月、明日から魔力は削がれていき使える技も少なくなる。月の光が闇へと化していくように、月の力は闇に蝕まれる。月は一番闇の影響を受けやすい属性なのだ。

鎖羅は弥生の髪を撫で、その瞳を覗き込んだ。弥生は少し身を固くする。

「お前が闇を恐れるのは仕方がない。だがな、月は闇があつてこそ映えるのだ。昼間の月は目に留まらない。だが、夜は闇があるからこそ光輝ける。そう考えると、闇も悪くないだろ？」

弥生は無表情のまま、鎖羅を見つめている。だがその瞳には、ほんの少し温かみがあった。

「それに、闇を嫌われると我は悲しい。弥生は我を嫌うか？」

弥生は激しく首を横に振った。共に過ごす時間が増えるにつれ、惹かれていく。闇に対する恐怖は敬愛に変わっていった。

「鎖羅……私は生きていてもいいのか？ 私を、必要としてくれるのか？」

鎖羅は憐憫の表情を浮かべ、弥生を抱き寄せた。弥生はしばらく身じろいでいたが、やがて体の力を抜いて鎖羅に寄りかかっていた。

「無論だ。ここにいろ、弥生」

鎖羅は弥生を抱きしめる腕に力を入れた。

「……人は、温かいのだな」

温かい水の中を浮遊する感覚。しだいに朧になる意識の中で、そう呟いた。そして弥生は四日ぶりの眠りへと誘われたのだった。

視界を横切っていく過去はくるくると入れ替わる。鎖羅が姉となると言い出した時のこと。鎖羅に剣術を教わった時のこと。戦争の中で鷲に出会った時のこと。さまざまな記憶が入れ替わり立ち替わり通り過ぎていく。

どれも、楽しさを含んだ記憶。あの小さな屋敷で、四人で気楽に

過ぎ去っていた記憶。

それらは全て、あの日に繋がる。

### 第3章の9 雲隠れにし夜半の月かな（後書き）

悪人は、最初から悪人ってわけではないと思うんです。彼らにも理由があつて悪となった。むしろ、彼らの正義を貫いているところもある。それが主人公たちにとって悪となるだけで……。

昔から、主人公よりも悪役に肩を入れてしまう私。少し甘くしすぎたでしょうか。まあ……次から悪役へと転がるのでよしとしますか。

では、次回「もれいづる月の影のさやけさ」で。

### 第3章の10 もれいづる月の影のさやけさ

二人が黒騎に来てから二十五年が経ち、鎖羅と阿修羅は突然ふらりと指令を受けていなくなる以外、ずっと屋敷にいた。丁度魔術師にとつては五年。外見年齢が五歳分成長したように見える。

二人とも身長が伸びて、黒騎の制服が小さくなっていった。それを見て、大人二人は新しいのを貰ってこようと、笑って二人の頭を撫でた。家族のような暖かさ。それは、弥生と秀斗が感じたことの無いものだった。

たまに秀斗と弥生をつれ、人間界を見て回ることもあった。弥生の表情は少し優しくなり、笑うことも多くなった。瞳も光と強さを持つようになったのだ。

秀斗は弥生の笑顔を見る度に、ここに来て良かったと感じた。二人はずっとここで過ごすと思っていて疑わなかった……。

黒い雲が空を支配しているある日の午後。

弥生は少し丈の短い制服に目を落とし、ふと笑みを浮かべた。鎖羅がくれた制服。自分がここにいたことの証明。

弥生はホールへと続く扉を押した。鎖羅にここに来るように言われたのだ。

「……鎖羅？」

弥生は無人の部屋を見回す。まだ鎖羅は来ていないらしい。

弥生はふと暖炉の上にあるオブジェに目を留めた。何時もは視界を横切るだけのそれに、何故か引きこまれる。

それは蛇の置物だった。頭が四つあるが、動体は絡みあい、尾は一つになっていて奇妙な蛇。四つの頭が口を開け、牙を剥いている。蛇なのに龍のようだと、最初に見た時に思った。



(こんな色の石、あつたか?)

弥生が気になったのは、蛇の額にあつた石だ。四体の内、二体には前から黒い、ガーネットが嵌っていた。だが今は、三体目に真珠がはまっている。

「第三の蛇、ロビナシア様が光臨なさつたのです」

突然現れた声に、弥生はハッと振り向く。そこには知らない女性  
がいた。一切気配を感じさせずに出現した女に弥生は警戒心を抱く。

「……誰だ」

女はにこりと笑った。彼女は全身を黒衣で纏っている。おそらく  
黒騎の者。

「掃除をしに来ました」

女はすつと片足をひいた。弥生は手を下に伸ばし、すぐにでも月  
契を呼ぶ態勢になる。

「君をね」

突如女は強く床を踏みきり、弥生へと飛び込んできた。人並み外  
れた跳躍力で突っ込んでくる彼女を、弥生は横に転がって避けその  
手に月契を握る。

「さすがは、鎖羅様が育てただけはありますね」

女の輪郭がぶれ、次の瞬間には弥生の真横に姿を見せる。視界の上部で何かが光った。

耳をつんざく金属音。女のナイフを弥生は月契で受ける。

「あらあ？ 簡単には死んでくれないのね」

ざくつと、一斉に足音がした。弥生は一気に増えた気配に息をのむ。柱の後ろから、壁から、人が出てくる。その数は三十以上、誰もが黒衣に身を包んでいる。その中には、共にこの屋敷で過ごしていた者もいた。

「何故私を殺そうとする」

弥生はすばやく敵の数を把握し、間合いを取りながら女に問う。

「……教えない」

女は目をぎらつかせ、弥生に躍りかかる。

弥生はくつと奥歯を噛んで、敵をその目に映す。弥生は身を低くして、女が突きだしたナイフを避けると、斬り上げた。刃が人体に食い込むと同時に覇動を流し込み、敵の体を内側から破壊する。

鎖羅に教わった剣術、その力を刃に象る召喚型の剣を持つ故の技だ。

女は血しぶきと化す。そしてそれが合図だったかのように、見物をしてきた敵たちが動き出した。

一斉に弥生へと刃を向け、攻撃へと移る。ある者は斬りかかり、ある者はその手から光を放つ。

「ちっ……こいつら異能者が」

弥生は間合いに入って来たものを一人ずつ肉片に変えていくが、多勢に無勢、どうも劣勢だった。

「くっ……」

視界を閃光が掠め、腕に焼けたような痛みが走った。すぐにその方向に光の球を投げ込む。足にも無数の裂傷が刻まれている。

（何が起こっているんだ……秀、阿修羅、鎖羅　　）

同時に襲ってきた三人を霸動で弾き飛ばし、血の雨を降らせていく。

だが、着実に弥生も傷を負っていく。黒い制服の下には白い素肌が見え、血が滲んでいた。

襲撃者達は何もしゃべらず、ただ機械的に攻撃を繰り返した。石の床には血が這うように流れ、足場を悪くする。弥生は服にも、肌にも、髪にも返り血を浴びていた。

やっと敵の数が半分まで減った時、慣れ親しんだ霸動を感じて、弥生は顔に希望をよぎらせた。

暖炉の前に現れた、新たな人影。

「鎖羅　　」

だが弥生は鎖羅を見た瞬間、背筋が凍った。その瞳があまりにも冷たくて、腕を組んでこちらを見つめるその姿が、あまりにも楽しそうだったから。

「そんな奴らに、手こずっているのか？」

「……え？」

「やはり月は月か」

弥生の顔は少しずつ強張っていく。その答えに辿り着きたくない  
と、首を無意識に横に振っていた。弥生はうわ言のように鎖羅の  
名を呼ぶ。姉と慕った彼女の名を。

「私が、お前のような奴を妹にすると考えたのか？ 私がお前を必  
要とするか？」

しかし彼女は非情にも刃の言葉を吐いた。愉悦に顔を崩しながら。  
弥生は何か口にしようとしたが、声がかすれて言葉にならない。  
視界が徐々に、黒く蝕まれていく。

彼女ではないと否定しようとしても、その覇動が鎖羅であること  
を告げる。

「な……ん、で？」

やっと言葉に出来ても、それが鎖羅の心に届くことはなかった。

「飽きた。姉妹ごっこも楽しかったが、月は闇にはなれぬ。お前は  
もういらぬ」

初めて他人に憧れた。初めて家族の温かさを知った。初めて、生  
きていることを認めてもらえた。

その人が、否定した。全てを……。

視界が、真つ暗に染まった。

「鎖羅あああ！」

信じていたのに、裏切られた。その思いが、その悲しみが憎しみとなって、弥生の闇を目覚めさせた。

髪は瞬時に黒くなり、纏う覇動は闇のそれに成り変わる。

弥生は震える月契を握り直すと、自身を取り囲んでいた敵に突っ込んだ。

片っ端から首筋を斬りつけ、心臓を突き刺す。鎖羅の剣術ではない、自身の剣術。斬りつけた勢いを殺すことなく次の敵に刃を突き出す。大勢の敵と相對することに特化した剣術。

それは、弥生が生きてきた中で自然に身についたものだった。

もう、何も考えられなかった。体の奥底から湧きあがる激情を抑えることができずに、手当たりしだいに斬りつけ、解き放つ。

弥生の視界は、ずっと鎖羅を捉えていた。彼女は仲間が殺されても眉一つ動かさず、冷笑を浮かべている。

そしてついに弥生は最後の一人を葬り、鎖羅と対峙した。両者の間で覇動がせめぎ合う。

邪悪な闇を持つ姉と、闇に染まった妹。

「無様だな。憎しみに闇と化したか。不安定な月などいらぬ」

弥生はぎりつと唇を噛んで剣を持つ腕を、ゆっくりと上げていった。そしてその耳に、緊迫した声が届く。

「弥生！」

それはいつも傍にいてくれた人の声。共に闘い、守りあった同胞。秀斗はホルルの惨状と弥生の姿を見て言葉を無くした。しばし果然と辺りを見回していたが、我に返ると弥生へと駆け寄る。

「弥生、お前……」

だが弥生は秀斗には目もくれず、鎖羅を睨んでいた。

「……去れ」

冷たい言葉が二人の足もとに刺さる。弥生は切っ先を鎖羅へと向けた。悲しい、虚無を湛えた瞳をしながら。

本能で危険を感じ取った秀斗は、弥生が行動に移る前に鳩尾に拳を入れた。普段なら避けられる。だが、今の弥生に秀斗は見えていなかった。

弥生は短く呻いて気を失い、髪の色が銀へと戻る。主が意識を喪失したと同時に月契はその姿を粒子に変え消失した。

「……鎖羅」

秀斗は弥生を追い詰めた本人へと視線を移す。視線が絡みあった瞬間、ぞつと寒気がした。闇よりなお深い闇の覇動。純粹な闇に混ざる邪悪な気配。

秀斗は心底恐ろしいと思った。そして言葉を選んで答をだす。彼女の冷たい要求に対する答えを。

「俺たちは共にここに来ました。だから一緒に出ていきます。……今まで、ありがとうございました」

秀斗は気を失った弥生を抱きかかえ、鎖羅に背を向けた。闇まで堕ちた弥生は全身に傷を負い、服に付く血は己のものかどうかの判断すらできない。

秀斗は弥生を抱えて廊下を歩く。鎖羅は追ってこない。

秀斗はずいぶん身長が伸び、簡単に弥生を抱えることができるようになっていた。二人が氷騎で過ごした時は、それほどの時間だった。

た。

(阿修羅さんに挨拶してえけど、そうも言ってもらえねえしな)

秀斗は戸を蹴り開けて外に出る。外は大雨だった。その雨が弥生に付いた血を落としていき、秀斗は臃な足取りで進む。少し行つて振り返ると、屋敷は雨の中で冷たい色をしていた。

秀斗は、はあと息を吐いた。唐突に訪れた終わり。今分かるのは、腕の中にいる弥生の深い絶望。秀斗はぎゅっと弥生を強く抱きしめた。その傷ついた心を守るように。

そして空間の果てを指して歩き続けた。

それから二人は、満月の度に異空間を渡ることを繰り返した……。

弥生は扉が叩かれる音で目を覚ました。虚ろな目で外を見ると、まだ雨は降っている。

夢の内容ははっきり覚えていた。

(楽しかった……だからこそ、憎い)

忘れたくとも、この夢がそれを許さない。

弥生はぐつと月契を抱き寄せた。

扉を叩く音は続いている。間隔が短くなり、来訪者は声を出した。

「弥生、起きてる？ 俺、勇輝だけど」

弥生は月契を腰にさし、扉の前まで歩く。

なんだか勇輝の声を聞くのがひどく久しぶりのような気がした。

「帰れ」

刃のような言葉に、勇輝はうつと呻いた。

「弥生、買い物行こうよ。天の岩戸なんてやってないで外で遊ばない？」

「買い物など興味ないし、岩など無い」

ばっさり断られ、古事記は知らないか、と勇輝は言葉を変える。

「ひつきーは良くないって」

扉越してもわかる、勇輝の表情。彼は心配顔で、扉を叩いている。時々、その心配を隠すようにおどけた顔をしながら。

「今日の夕食は弥生が好きなりんごだよ。食べられてもいいの？」

それに対する弥生の返事はない。代わりに廊下の少し離れたところで成り行きを見守っている他四名が心の中でつつこんだ。

食べ物ではつるのは無理、と。

勇輝は一つ息を吐いて、扉に手を当てた。

「弥生。俺、お前に昔何があったかなんて知らない。でもさ、憎しみは良くないよ」

勇輝は弥生を引きずり出すことが不可能と判断すると、扉越しに本題に入る。勇輝は二人の憎しみ合う姿を見た。だからこそ、強く思う。

「帰れ」



突き落とすような口調。何時、この扉から剣が突き出るか分からない。それでも勇輝はその場から離れなかった。実際、弥生はこの間ずっと柄に手をかけていた。

「弥生、聞いて。憎しみは良くないんだって、憎しみは憎しみを呼ぶだけだ」

「きれい事をぬかすな！」

怒気を含んだ弥生の声。怒りとともに放たれた霸動で、扉が震える。

弥生は叫んだ自分に驚いていた。無視すればいいはずなのに、言葉が勝手に出ていた。

「きれい事だけど事実なんだ！」

勇輝も語気を強めて、言いかえす。聞け、と一度だけ強く扉を叩く。勇輝は弥生の憎しみも辛さもわからない。だが、言っておきたかった。

「俺はたくさんマンガとかアニメとか映画で憎しみを見た。復讐もたくさんあった。でもな、俺は一度だってそれらがハッピーエンドで終わったところを見てないんだ！ 復讐したって、幸せにはなれない！」

弥生は扉に背を預け、苛立った声で返した。

「だから何だ。私は幸せなど求めない」

「あああ、この分からず屋！ 殺しあいなんて大っきらいなんだよ

！」

勇輝は頭を掻き毟って、もう一度扉を強く叩いた。

「うるさい、去れ！ 殺すぞ！」

声と共に硬質な音で扉が叩き返された。月契の鞘の音だ。

「弥生は俺を殺せない！ 弥生は仲間を殺さない！」

それは、勇輝がこの三か月で得た確信。弥生の仲間に対する強い情。

「黙れ！」

「弥生！」

勇輝が扉を叩こうと拳を振り上げた時、扉は開き視界に閃光が走る。そして首を圧迫されたと思うや、背中に衝撃が走り鼻先にきつ先が突きつけられていた。

廊下の陰から飛び出してきた四人を、勇輝は手で制し、弥生を正面から見返す。

ひさしぶりに見る弥生の顔。切っ先の向こうにある瞳は澱み、光を感じる事が出来なかった。

「これでもまだそんな甘ったれたことを言うのか」

「言うよ。弥生は俺を殺さない、絶対に」

弥生は鋭く舌打ちをし、乱暴に勇輝を離れた。

「弥生！」

秀斗の呼び声に、弥生はゆっくり彼らの方向に首を巡らせた。彼らと目があつた瞬間、彼らの表情に失望に似た色がよぎる。

弥生はそれを見て可笑しそうに喉の奥で笑つた。

「弥生、その傷……」

錬魔が大股で歩み寄り、首の傷に手を伸ばした。それは線を引き  
たようにまっすぐ赤い傷だ。

「いい」

だが弥生は錬魔の手を半歩退いて避け、口角を上げた。

「これは楔だ。手あたりしだいに殺さないためのな」

弥生は傷を愛しそうに撫で、踵を返して歩きだした。

「ちよつと弥生ちゃん？」

癒慰が慌てて止めようとす。また引きこもられては困るのだ。

「部屋にこもられては困るんだろ？ なに、外に出るだけだ。剣を  
振らないと腕が錆びるからな。安心しろ、ここから出ることはない」

弥生は皮肉っぽく言い残すと、廊下を先へと進んで行った。雨の  
降る、暗い夜へと。

その背を見送る彼らは、何とも言えない顔をしていた。

「昔の弥生に、戻っちまったな」

閑散とした廊下に、秀斗の寂しそうな声が響いた……。

### 第3章の10 もれいづる月の影のさやけさ（後書き）

#### 神の名の裏話

鎖羅の武器は、最初剣ではありませんでした。

水晶で、名を闇無晶と言いました。詳しい能力は不明ですが、ネタ帳には水晶の絵が描かれていました……。

剣になったのは、突然弥生と戦うのに剣要るくね？ と気づいたから。

やはり剣の勝負なら弥生と同じ召喚型の剣で！ ということでの闇宵となりました。この名前もぎりぎりまで考えてなかった。投稿するとき空白にしていたことを思い出したので、けっこうあせりました。

では次回「その如月の暁のころ」でお会いしましょう。

### 第3章の11 その如月の、暁のころ

彼らはホールに戻り、定位置となりつつあるソファアームに座って反省会を始めた。彼らの表情は落胆の色が濃い。重い空気の中、突っ込んで行った勇輝が口火を切った。

「……それでさ、結果としてはあれでよかったんだよな」

まだ首を掴まれた感触が残っている。自分の言葉とは裏腹に、ちらりと死の訪れが見えてしまった。

「ええ。しかし部屋からは引きずりだしましたが」

「なんか色々と悪化してて」

「もつと心配だぜ」

三人が言葉を繋いで、それに錬魔が眉間にしわを寄せて頷いた。弥生の精神状態は彼らの予想以上に荒んでいたのだ。

「なんか、怖かった」

勇輝も弥生の瞳を思い出して、思わず身震いをする。勇輝の不良人生において色々な奴と喧嘩をしてきた。中には目が血走りイカレた奴もいたが、それでも彼女ほど恐れを感じさせなかった。

「完全にここに来た時の顔だったな、あれ」

秀斗は頭を搔いて背もたれに身を預ける。そのまま手を頭の裏で

組んで天井を見上げた。

「せっかく、いい顔するようになってたのによ」

「そっか、二人は後からここに来たんだっけ……もしかして、他のみんなもバラバラだったりする？」

ふと勇輝は気づいて、思ったことをそのまま口にした。彼らは勇輝を引きこんだとき、組織全体の説明はしたが、如月自体の説明はあまりにも少なかつたのだ。

「あ、そういやなんも言ってないっけ」

勇輝の視線は秀斗に移る。少し抗議を含んだ色で。

「……いやつい、俺ら自分らのこと話すのって苦手だから」

あははと笑ってごまかす秀斗に零華が助け船を出した。

「ごめんなさい勇輝君。私たちが失念していました。もう誰かが言っている……」

静かな口調で頭を下げられれば、慌てるのは勇輝の方である。

「いや、違っつて責めてるんじゃない、だから謝らないで！」

零華は勇輝の慌てように顔を上げ、クスリと笑みを見せた。

「この話は複雑なので、かいつまんでお話しいたしますね」

そう前置きしてから零華は話し出した。

それは彼らがそれぞれの道からここに辿り着く話。誰も詳しく語らない、個人のストーリーだった。

「まず、ここに最初に来たのは私でした。私は以前夜一星の海龍に所属していたんです。その関係で美月さんとは色々あったのですが……」

美月の名が口から出ると、彼女の表情が険しくなってきた。しかしそれはすぐに振り払われ、話を戻す。

「それはどうでもよくて、そうですね。今から三十年ほど前に私はそこを出てここに移ったのです」

戦乱の激しい頃。この小さな異空間への異動は先代の美月の配慮だった。

「私が来た当時は庭も中も荒れ放題でひどいものでしたね」

しみじみとそう言った零華の脳裏には、昔の如月が蘇っているのだろう。

「そして数年が経った頃に癒慰ちゃんが来ました」

零華は語り手をバトンタッチし、癒慰がはい、と手を上げて引き継いだ。

「えっと私はね、龍牙隊にいたわけでもなくて、こっちに来てからふらふらと異世界を渡って、偶然ここにたどり着いた感じ」



気の向くままに異空間を旅し、たまに人間界へと戻る。そんな旅が二十年は続いた。

「それで、ここの庭とか荒れ放題だったから、住ませてもらうかわりに私が手入れしたの」

癒慰は今の庭つてきれいでしょ？ と自信たっぷりの笑みを見せた。彼女の属性は土であり、庭に花を咲かせるなど朝飯前なのだ。

「それで女の子二人の生活に割り込んできたのが錬魔君だったよね」

癒慰は手でどうぞ、と錬魔に話を振った。

「人間きが悪いな……俺は、龍牙隊の医療チームにいて、戦争が終わったところにここに来たんだ」

「錬魔君ストーカーだったもんね、私たちを追いかけてここに来たんでしょ？」

癒慰がにんまりと笑って錬魔をからかう。

錬魔は慥然と頬杖をついて、

「違う。俺はただここに魔術師がいると聞いたから興味を持っただけだ。ついでに言うと癒慰、お前の情報は何一つ知らなかったからな」

と言い返した。

「そうしてしばらく……一三年ぐらいは三人で暮らして」

「そこへ華麗に俺たちが参上したってわけ」

零華の言葉尻を攫って、秀斗が語りの中に躍り出た。

「どこが華麗だ。かなりぼろぼろだっただろうが」

錬魔は呆れ顔で、女の子二人も苦笑している。

「まあそれで二人が転がり込んで来て、一緒に暮らし始めたんだけど……」

「最初は錬魔君と秀斗君が喧嘩ばかりしていましたよね」

女の子二人は当時の大変だった日々を思い出したのか、同時に溜息をついた。それを受け当事者二人は苦い顔をする。

「あん時は若かったよな」

「……ああ」

黒騎に所属していた秀斗と、戦争で黒騎に多くの仲間を殺された錬魔は顔を突き合わす度に喧嘩をしていたのだ。弥生は部屋にこもって関与せず、残る二人も最初は止めようとしたが、無駄だと知って好きにさせることにした。

「まあ、この喧嘩がきっかけで弥生がこのリーダーになったんだけどな」

秀斗は懐かしそうに目を細め、小さく笑う。

それはいつものようにホールで喧嘩が起きていた時だった。互いに掴みあい、大声を出して言い争いをしていた。女の子二人は壁際で事態が治まるのを静観している。止めに入って怪我をしたくないからだ。

早く終わらないかと、二人がため息をついた時、二階のドアが荒々しく開いた。

“うるさい！”

その声と同時に四本の剣が掴みあっている二人の足もとに突き刺さる。ホールは一瞬で静かになった。

全員が吹き抜けを見上げ、その二階の廊下に弥生の姿を発見する。彼女は彼らを見下ろし、こう言い放った。

“いい加減にしろ餓鬼共が。それで一番強い奴を決める。そいつの命令を聞け。私が勝てば、次喧嘩した奴を殺す”

そして闘った結果、弥生がリーダーになったのだ。なんだかんだで現在リーダーとしての仕事は全て零華がこなしているのだが……。

「まさか引きこもりに啖呵切られるとは思わなかったな」

「おう。あん時の弥生は怖かった」

その表情から弥生に負けて以後すぐに喧嘩を止めたことが伺えた。喧嘩の仲裁で殺されてはかなわない。

「それからは弥生ちゃんもそれなりに部屋から出るようにはなった

んだけど……」

「満月の度に外に出て行って、血を浴びて帰って来やがるし」

「食事も全く摂らず」

「生気が感じられない顔で……本当にこの子大丈夫でしょうか、と思います」

問題児もここまで来ると天然記念物ものである。

「最初は如月も大変だったんだ……。あ、でもまだ如月じゃないの？」

「ええ。如月になるのはそれから五年後。急に隊長と暁美さんが来られたのです」

「え、母さんが？」

突然訪れた二人は、彼らを四剣琅として龍牙隊に迎えることを明言したのだ。詳しく言うなら暁美が龍牙をバツクに強引に引き入れた。

「そうです。暁美さんが私達の後見役を買って下さいました」

「そういえば、暁美さんと会ってから弥生ちゃんも落ち着いたよね」

「何したのかはわかんねえけど、以来暁美さんの言葉は素直に聞くようになったしな」

「へえ……ってことは、母さん連れてきたらいいってこと？」

勇輝の顔に希望の色が見え始めた。自分達で何とか出来ないのなら、強い人に来てもらえばいいのだ。

「あ、その手があるか」

「ちょっとお茶もしたいし、勇輝君お願いね」

「了解！ 俺は何がなんでも弥生を止めてやる」

勇輝は敬礼ポーズを決め、にっと笑った。

そして翌日。弥生は屋敷内を歩いていた。

部屋に長く居すぎるとまた文句を言われるので仕方なくの散歩である。ホールの方へは足を運ぶ気分にはなれなかったので、逆方向をうろついていた。

腰には月契を佩き、瞳は冷たく澄んでいた。纏うは虚無、絶望、そして憎しみ。

弥生はふと行く先に人がいるのに気づいて足を止めた。彼女と目が合い、再び歩き出す。

過去、人間でありながら弥生にその存在を認めさせた人。そして、弥生の闇に光を注いだ人だった。

弥生は黙って暁美の横を通り過ぎる。

暁美は予想通りの反応に呆れ顔で振り向き、その背に声をかけた。

「弥生ちゃん。久しぶりね」

その声に弥生は動きを止め、振り返る。二人の視線が絡み合った。

「なんて目をしているの。また、昔に戻るつもり？」

暁美は最初から厳しい口調で弥生に問いかける。

それに対し弥生は、自嘲的な笑みを浮かべて答えた。

「いけませんか？　これが私だったんです」

淡々とした声。そこには一切の感情を感じることができなかった。

「私が教えたこと、忘れたの？」

「いえ、覚えていますよ。貴女がくれたものも、貴女の息子も」

弥生は淡々と話した。その瞳はただ虚無だけを映し、憎しみはその奥深くに眠っている。

「なら、憎しみに身を委ねるのは止めなさい。今度失うのは、あなたの命かもしれないのよ」

「かまいません。私はずっと憎しみを抱いて生きてきました。憎しみが私の力なのです」

暁美は弥生の奥に広がっていく闇に表情を険しくした。その闇は、出あった頃よりもさらに深くなっている。

「……弥生。　いい加減に目を覚ましなさい。貴女の居場所はここなのよ？」

「それは違います。私の居場所は、もうどこにもありません」

弥生の言葉は暁美の胸を締め付けた。

(この子は、命を知った上で、命を賭けるのね)

暁美は本当ならば今すぐに弥生をどこかに閉じ込めておきたかった。彼女に闇が届かないところで、ゆっくり彼女を癒してあげたかった。だが、暁美にその力は無い。

それが一番悔やまれた。

「……そんな不安定な状態で何ができるっていうの？」

「暁美さん、これは私の願いです。心配しないでください。私が不安定なのは、完全な月ではないから。紛い物の月だけです」

弥生は最後にそう言い残すと、一礼をして踵を返した。

「違う、貴女は月よ。闇ではないの……」

暁美は願いを込めて、弥生の背中に言葉をかけた。少しずつ遠ざかっていく、小さな背中に……。

「いいえ、私は……闇の子です」

背を向けて呟いた言葉。諦めや悲しさを含んだその言葉が、暁美に届くことはなかった……。

### 第3章の11 その如月の、暁のころ（後書き）

題名和歌シリーズは三つで終わりです。

最初の二つは有名なもので、百人一首にも選ばれています。

今回は、少し下の句をいじってあるので分かりにくかったかと……元は「願わくば花の下にて春死なん その如月の望月の頃」

という桜の花の下で死にたいなあ、できれば如月（旧暦）の満月の日に…… という意味の西行さんの歌です。

作中では春ではないし、満月でもないので変えさせていただきました。

さて、最近投稿数が増えたのか、アクセス解析がなかなか見られない。時間が悪いのでしょうか……。たまに見ると楽しいので、けっこう好きなのですが。

そう言えば、最近PV〇〇いきました。という報告もしてませんね。最初はやっていた気がします。

そしてもうひとつ、評価感想云々も書かなくなりましたね（作者の性格が見えてしまいます） うむ、ここは真面目さをアピールせねば。

では改めて

いつも読んでいただきありがとうございます。数字は嬉しい感じになっております。

評価感想、キャラに関する消息、質問、要望など、ありましたら気軽にどうぞ。

これであと半年はこの文句を書かないね……。

では、次回「誘い（仮）」です。



### 第3章の12 誘い（いざない）

弥生が引きこもりを止めて、三日が経った。

だが弥生は一度もホールには姿を見せず、廊下ですれ違っても影のように通り過ぎるだけだった……。

秀斗は自室でカレンダーを睨んでいた。今は午前中のため、勇輝、零華、癒慰は学校に行っている。弥生は外で剣を振っていて、窓から顔をだせばその姿を確認できた。

「明日は、新月か」

カレンダーには月の暦も書いてあり、今日は細い月が見えるくらいだ。

秀斗はベッドに腰を下ろし、指をからませた。耳を澄ませば、弥生が丸太を薙ぎ倒す音が聞こえる。

（俺は……どうすりゃいいんだらな）

弥生は鎖羅を憎んでいる。秀斗は彼女に恩がある。だが弥生の願いは……。

秀斗の脳裏に屋敷を出ていった後の記憶が蘇っていく。

“私は、いらぬものだったのだ……私は月である自分を呪う”

あの時、弥生は絶望の中にいた。秀斗を見ることもせず、ただ虚空を見つめていた。

そして空間を渡っていく内に、弥生の心は変化し始めた。

“憎い……鎖羅が憎い。この空虚を埋めてくれるのなら、憎しみで

もかまわない”

髪は灰色にくすみ、憎いと何度も繰り返す。

秀斗にはただ傍についているだけしか出来なかった。愛しい思いを言葉に乗せて、弥生の心を慰めた。

「好きだ……弥生」

何度口にしたか分からない言葉を呟く。

人間界に来た時、剣で守ってくれた弥生は抱きかかえられるくらい小さくなった。体は大きくなって、心は……。

“弥生は強い。だけど弱い”

その弱さを、秀斗は愛情で埋めようとした。支えて強くしようとした。

鎖羅はその弱さを鍛えることで強くしようとした。弱さを受け入れられるほど強くしようとした。

弥生を大切に思う思いは同じだったはずなのに、どこで変わってしまったのか。

（俺は、止めるべきなのか？ それとも、一緒に戦うべきなのか？）

敵だとは単純に割り切れない。だが……。

秀斗はもう一度カレンダーに目線を向けた。

（明日が、新月……）

秀斗ははあと重い溜息をついて、窓の外に視線を飛ばした。空は皮肉なほどに青く澄んでいる。太陽はちょうど南の空を渡り切った

ところだ。

「……光」

光があれば、弥生の闇をなくすことができるかもしれない。そう思ったが、すぐに首を横に振った。

（光は存在しねえ。たとえあっても、俺たちには届かっ……！）

秀斗は急に顔を歪めて胸を押さえた。低いうめき声が漏れ、苦しそうに胸を掴む手が、服にしわを作っている。胸の奥が熱く、暴れまわっていた。息が荒くなり、肩が上下する。

（……やっぱ、新月が近づくと、つれえな）

秀斗は発作が治まるとベッドに倒れ込んだ。

新月が近いと訪れる発作。誰も知らない、秘密。悟られてはいけない秘密。

秀斗はそつと目を閉じた……。

太陽が西に傾き始めたころ、弥生は出窓に腰をかけ本を読んでいた。視線は本に注がれていても、内容はろくに頭に入っていない。思考は、ただ一つのことに関わっていた。

（憎い……どれだけ敬愛していても、この真つ黒な感情が塗りつぶす）

優しさも、愛情も、全て偽りだった。裏切られた事実は変わらない。

(鎖羅が私を憎んでいるなら好都合だ……私の望みは果たされる)

開け放たれた窓から風が吹きこみ、優しく弥生の髪を撫でていく。

「憎しみこそ、私の力」

幼いころ、心にあつたのは虚無だけだった。

一人だという事実に耐えるには、ただ心を閉ざすことしかできず、何も与えられなかった心は虚無を掴んだ。

その虚無が、憎しみに喰らわれようとしている。

弥生がめくろうと指を次のページにかけた時、扉がゆっくりノックされた。その音に、弥生は苛立ちを覚える。すぐにしつこく訪れる二人の顔が浮上した。が、その覇動は彼らのものではなかった。

弥生はパタンと本を閉じて、扉へと近づく。

彼がここに来ることはめったにない。それだけ、重要な要件なのだろう。

弥生はそつと扉を開け、彼を見上げた。赤い髪から覗く瞳が弥生を見降ろしている。

「髪を下ろしたままにしているのは珍しいな」

錬魔の白衣には長い赤髪がかかっている。彼は寝るとき以外は髪を下ろすことはなかったのだが……。

「弥生……もう、決めただな」

錬魔は何の前置きもなく話し始めた。抑揚に欠けるいつもの口調。そして、弥生を映す瞳には受け止める強さがあつた。

「ああ。私は、いく」

弥生は何も隠さずそう言った。

「俺は止めない。俺も憎しみを抱いたことがある。それは今でも胸の奥にある……だから、俺にはお前を止められない」

鍊魔はすつと視線を逸らし、自分の髪に手を当てた。己も、闇に堕ちてもおかしくなかったのだ。

一瞬、鍊魔の瞳に苦しみがよぎったが、すぐにそれは消え医者顔になる。

「弥生……俺は止めない。だが、これ以上闇に堕ちれば戻れなくなるぞ。もって、あと二回……それを越えれば月であるお前は死ぬ」

重たい宣告。だが弥生はたいして気にした様子もなく、ただそうか、と頷いた。

自身も自覚していたことではあった。闇の力の増幅。それに押されかけている月の自分。

あの夜から、髪の色は完全な銀色には戻らず、少しくすみが残ってしまった。

弥生は自身の髪を見て、少し口角を上げる。その笑みは自嘲に近かった。

「……弥生。お前にこれを貸す」

鍊魔は反応の薄い弥生の手を取って、無理やり握りこませた。弥生は怪訝そうな顔をし、ゆっくりと掌を開けてそれを見た。

「……これ、お前の髪留めではないのか？」

だからこの髪型かと合点がいったが、何故渡されたのかが分からない。

「それは指輪だ。お守りとして持っている。そして必ず返しに来い……怪我なら、喜んで治す」

弥生は無言のままそれを上着の胸ポケットに入れた。彼の思いの分、ポケットが重くなつた気がした。

「ありがとう」

「弥生、必ず帰ってこい。お前にもしものがあつたら、心を病む者がいるからな。俺はあいつの看病などしたくない」

「あいつは面倒な奴だからな」

二人は幽かに笑い声を上げた。徐徐に小さくなり、沈黙が降りる。二人はしばらく、何も言わずに互いを見ていた。

思いを語るには、言葉は軽すぎる。そして自らの背負うものを語るには、互いに分かりすぎていた。それは共有できるものではなく、互いの苦しみをより濃くするものだということ。

自分たちの過去、背負うもの、背負わされたもの、心の闇、流れる血。それは他人事ではない。他者は合わせ鏡なのだ。

弥生は彼の内に自分が見えた気がして、視線を下げた。

「……鍊魔。わざわざすまなかつたな。これは、壊さないように持つておく」

「ああ。頼んだぞ」

鍊魔は弥生の頭を二度軽く叩いた。頑張れと言うように。

「あゝ」

鍊魔は弥生からゆっくり手を離し、体の向きを変えて歩きだした。さらりと歩いたたびに髪が揺れる。

弥生は彼の姿が角を曲がって見えなくなるまで見ていた。指輪がさらに重みをました気がする。

鍊魔の足音が遠ざかると弥生は扉を閉め、再び窓辺に戻った。夜は遙か彼方まで続き、そこから風がそよそよと流れてくる。弥生はしばらくその風を肌で感じていた。

胸を抑えると、布越しに指輪の輪郭を感じる。彼の思いの形。弥生を繋ぎとめようと、帰ってこれるようにと。弥生は瞳を閉じ、しばらく胸に吹くしっとりとした風を感じていた。だが、ぶわりと一際強い風を肌に感じ、目を開けた瞬間下から上に何か黒いものが飛んで行った。

(なんだ?)

弥生はとっさに腕で顔を覆い、すぐに目で追う。

それは大きく旋回して窓枠に留まった。

黒い鳥。カラスのように見えるが、尾が長く嘴が細い。そして目が金色だった。

鎖羅が使役する唯一の魔獣だ。

弥生は見覚えのある鳥の足についていた紙を取り、広げた。胸は予感と期待で高鳴っている。

細長い紙に書かれた数行。

“屋敷のある空間で待つ。九つの鐘がなる時に来い”

弥生は無意識に首筋の傷にそっと手を触れ、爪を立てた。そのまま傷をなぞる。

(この借りは必ず返す。この憎しみも……)

弥生が紙を握りつぶすと、鳥は仕事は終わったと窓から飛び立っていった。

弥生は窓から空を見上げた。鳥が飛んで行った空には細い線のような三日月が浮かんでいる。

(……明日は新月か)

弥生は月契をその手に呼び出し、その刀身に月を映した。

「月契……明日は共に」

“御意”

弥生の頭に響いた男の声。それは思念を持った剣、月契のものだった。

弥生はヒュンと剣で空を斬って、光の粒子に帰した。弥生は出窓に腰をかけ、ゆっくりと目を瞑った……。

時を同じくして、ホールでは勇輝が女の子二人を相手に口泡を飛ばしていた。

「なんか俺間違ってる？ 何で弥生はあんなにへそ曲がりなんだよ」



怒りの原因はもちろん弥生。一時間ほど前に部屋へ訪ねてみたが、冷たくあしらわれご立腹なのだ。

「あぁんの自己中。人がごんだけ心配してると思ってたんだ！」

昨日剣を突き付けられたことも相まって、怒りは最高潮だ。

「弥生ちゃん頑固だからね」

「本当に勇輝君には気を使わせてすいません」

ソファーにどかっとな腰をかけている勇輝の正面に座っている二人は苦笑いを浮かべていた。

「そんなに憎しみつて強いもんなの？ 正直俺、彩が消えた時は弥生を憎んだし、腹立たしかったけど、今は仲間だと思ってる。それはダメ？ 俺が甘いわけ？」

勇輝は腕を組み、右手ひとさし指の上下運動が彼の苛立ちを際立たせていた。この時ばかりはさすがの癒慰も、勇輝を怖いと思った。背後に猛犬が牙を出して唸っている姿が見えた気がする。

「勇輝君は強いから、たとえ憎しみがあっても弥生ちゃんを受け入れられたのよ」

「憎しみというものは、なかなか消えないと思います」

勇輝は弥生を弁護する二人にぶーたれて、唇を尖らせた。

「弥生は、憎しみが辛くないのかよ」

「……来た当初、彼女は憎しみを糧に生きているようでしたから」

「逆に、憎まないと生きてられなかったんだと思う」

しばしの間の後、三人は同時に溜息をついた。全く出口が見えない迷宮に迷い込んだ気分だ。何をすれば弥生の状態が良くなるのか分からない。

「手詰まりって感じだよな」

暁美の忠告もあまり効果は得られなかった。

その後勇輝と秀斗が代わる代わる弥生の様子を見に行っただが、その度に弥生の機嫌は悪化した。

「そうですね。もういつ向こうが仕掛けてくるか分からない以上、最悪の状態も想定した方がいいでしょう」

零華は物憂げな表情で最後の問題を水面上に引き上げた。

「闘いが起った場合のこと？」

勇輝が確認するように訊いた。否定してくれるのを望んでいるように。

「はい。その時、私たちは」

「もちろん止めるさー!」

勇輝は零華の言葉をさえぎって強い口調で言い放った。

「……残念ですが、それは無理だと思います」

だが零華は、勇輝に冷や水を浴びせるように、そう言った。

「なんで」

「止めていい闘いと、止めてはいけない闘いがあるってことよ」

力なく呟いた癒慰に、勇輝は顔を向けた。

「……なんでだよ。なんで二人はそんなに落ち着いてるんだよ。弥生は負けるかもしれないんだろ？　じゃあなんで止めないんだ！」

勇輝の言葉に二人は表情を硬くする。

「これは、弥生ちゃんの闘いです。私たちが止めに入るのは、無粋でしょう」

零華の瞳は、もう勇輝を見ていなかった。ただ真っ直ぐ虚空を見つめている。

「二人は冷たい！　俺は誰が何と言おうが弥生を止めるからな！」

勇輝は立ち上がり、そう宣言すると踵を返してホールから出て行った。

荒々しくドアが閉められ、静寂が際立つ。

「止められるものなら、止めたいわよ」

「ですが、もし自分だったらと思うと……私も同じことをしたと思います」

「……だよね」

今回の闘いはただの命のやりとりではない。弥生の過去と心がかかった闘い。

二人は静寂の中で自らの闇を見つめた。  
まだ出ない、答えを求めて。

### 第3章の12 誘い（いざない）（後書き）

前話のあとがきで次回に（仮）とつけておきながらそのままで投稿。

#### 作者の独り言

たまに、作者がびっくりするカミングアウトをしだすキャラがいま  
す。

今回は鍊魔くん。あ、それここで言うんだって、打ちながら思った。  
髪留めが指輪だって話は、二章で勇輝がテストの日にみんなを起こ  
すところで明かそうと思ってました。最初は秀斗とともに鍊魔を起  
こすことにしており、そこで秀斗が教えてくれるはずだったので  
が。秀斗も起こされる側に回りました。

彼らかなり自分のことを隠すので、作者はやりにくい……。  
彼の指輪が誰のものかはもっと後で明らかにできるかと。

えっと、次回は「月は闇夜に紛れる一つの道を照らす」です。

### 第3章の13 月は闇夜に紛れる一つの道を照らす

朝、穏やかな陽射しが如月に降り注ぐ。耳を澄ませば小鳥のさえずりが聞こえ、窓を開ければ中庭に花が咲き誇っている。

早起組が支度を始める頃、弥生は自分の姿を鏡に映していた。龍牙隊の隊員服を着、月契を腰に佩いている。上着は邪魔になるので置いていくことにした。

鏡に映る自分の背後で、黒騎の制服を着た己の影が揺れる。純粹に彼女を姉と慕っていたころの自分……。

弥生は月契の鞘に手を触れた。物心ついた時から共にいる愛剣。言語を解し操ることもできるが、無口な性格ゆえに滅多に言葉を発しなかった。

「月契……いこう。願いを叶えるために」

“貴の思いのままに”

弥生は鏡の自分の冷たい視線を送り、踵を返した。扉を開け、部屋を出る。

弥生は歩き出そうとしたが、出来なかった。まだ半数の人が眠っている時間にも関わらず、廊下には人がいたからだ。壁に背中を預けて腕を組んでいる。隊員服を着た彼は、出てきた弥生に気が付くと軽く手を挙げた。

「おはよ」

いつもよりも硬い表情。覚悟を決めた目だった。

「ここで何をしている」

弥生は苛立たしげに問う。舌打ちもしたかもしれない。

「寝ずに待ってたんだ。もっと労れよ」

秀斗は壁から背中を離し、弥生と向かい合った。その瞳が弥生を捉える。

「行くんだろ」

「ああ」

「俺も行く……別に止めはしねえよ。ただ、お前を守るのは俺の役目だからな。お前を支えたいんだ、弥生」

さんざん迷って出した答え。闘って、勝てるかどうかは分からない。だが、弥生を憎しみの中に取り残すよりも、昔の思いを取り戻して欲しくて、この闘いを選んだ。

「秀……」

二人の視線が交わった。その瞬間、秀斗は何とも言えない思いがわき上がった。

弥生の瞳に宿る力が、余りに強かったから。

憎しみは澱みとなって浮かんでいるのではなく、結晶となって奥深くに眠っている。

その瞳に映る覚悟が、秀斗の心を掻き立てた。

「弥生、お前……」

弥生が秀斗へと歩み寄り、その肩に頭を寄せる。秀斗は目を見開いた。今まで弥生が秀斗に近づくことは無かった。彼らが再会してからは一度も。なのに……。

弥生の表情は見えない。何を考えているのかも分からない。秀斗は彼女が分からなかった。

(……弥生？ ……うつ)

急に鳩尾に衝撃が走り、視界が白く染まる。弥生が月契の柄で秀斗の鳩尾を強く突いたのだ。

「秀……」

その声が秀斗の薄れゆく意識の中で響く。悲しそうな色をした声。

「や……よ、い」

秀斗は最後まで弥生の顔を見ようとし、気を失った。彼の体重が弥生にのしかかり、弥生はそれを抱きとめる。

「これは私の鬨いだ。私がけりをつける」

そして秀斗をゆっくりと床に座らせ、壁に寄り掛からせる。弥生は寂しそうな表情で、秀斗の顔を見つめた。

(ずっと隣にいてくれた星。かけがえのない仲間。何度も助けられ、守られた)

「秀、すまない……約束を違える」

弥生は立ち上がり、名残惜しそうに秀斗を見た後、断ち切るよう



に足を前へと踏み出した。

(秀、ありがとう。また私は、お前の優しさに報いることが出来なかったな)

弥生は如月の出口、玄関で足を止めた。この大きな扉が自分たちを迎え入れてくれた。

そして今その扉には人が一人通れるくらいの穴が、弥生を誘うように開いている。

鎖羅が唯一得意とする魔術は空間に関するものだった。この穴は彼女からの招待。異空間へと続く道だ。

弥生は先の見えない暗い道に迷わず足を踏み入れた。その先にいる相手を思い浮かべ、自然に手は剣に伸びる。弥生は周りを警戒しながら先へと進んで行った。しだいに弥生の姿は闇に紛れていく。

穴は弥生が完全に入ると同時に消滅した。

そこはいつもと同じ玄関。扉は何も無かったように空間を見つめている。

閑散とした玄関はただ、主が帰ってくるのを待つことしか出来なかった……。

浮遊する意識の中で、秀斗は揺れを感じていた。自分が揺れているのか、世界が揺れているのかは分からない。ただ、体の感覚が揺れを教えてくれる。

かすかに、自分を呼ぶ声を聞いた気がした。

(うつ……るせえな。俺は、眠いんだ……?)

秀斗は一気に覚醒し、飛び起きた。それと同時に頭に痛みが走る。

「痛っ！」

「痛ってえ！」

目の前には頭を押さえてうずくまる勇輝の姿があった。その周りに他のみんなもいる。

秀斗は瞬時に何が起きたのかを理解し、勇輝の胸倉を掴んだ。

「おい！ 今何時だ！ 弥生は？」

「うわっと、えっと、八時ちょっと過ぎた頃」

勇輝は掴まれながら、自分の腕時計を見た。

秀斗は呆然とその時を呟き、勇輝を解放する。秀斗は三十分ほどここで気絶していたことになる。

「弥生はもう行ったのか」

錬魔が苦い顔でそう尋ねる。

「……ああ。ご丁寧に俺を置いていきやがって」

秀斗は舌打ちをして立ち上がった。まだ少し鳩尾に痛みが残っている。

「秀斗君、弥生ちゃんの行先はわかりますか？」

「ああ……おそらく、住んでいた屋敷がある空間だ」

「今すぐ行きましょう」

「零華？」

零華の発言に、一番驚いたのは勇輝だった。彼女は昨日この闘いを止めることはできないと言っていたのだ。

零華は勇輝に向って微笑む。

「止めることはできません。しかし、助けることはできます」

それが零華なりの答えだった。彼女の願いは叶えたい。だが、その命を失わせるのとは話が違う。

強い意志を持った言葉。

勇輝はその言葉に顔に力を漲らせた。拳を強く握って、決意を固める。

「行こう。弥生を助けに」

「よっしゃ、全員闘いの準備だ。五分後、玄関に集合……弥生を一発殴らねえと気がすまねえ」

秀斗がそう号令をかけ、全員それぞれの部屋へと散った。

そして五分後、彼らは隊員服に着替え、麻醉銃を腰に付けて玄関に集まった。

なんとも言えない緊張感の中、勇輝は鍊魔の隊員服を見てこう思った。普段着と変わらないな、と。

彼は首元が広く開いた長袖のインナーを着、除く胸元にペンダントがかかっている。ズボンにはシンプルな綿で腰にポーチを付けており、街を歩いても違和感のない格好だった。

まじまじ見過ぎて錬魔と目が合い、気まずくなつて勇輝は目を逸らす。

「行くぜ」

秀斗が右手を扉にかざした。両隣にいる零華と癒慰も同じく手をかざす。空間魔術は負担が大きい、だから通常は二三人の補助者が必要なのだ。

(これを一人でやる鎖羅は化け物だよな)

秀斗は気を落ち着かせ、空間を繋げる呪文を紡ぎ始めた。

「全ての世界は五つの元素で成り立つ。天より分かれし星の力をもつてここに空間を繋ぐ」

詠唱が始まると、補助の二人は力を扉に注ぎ始めた。

「全ての空間よ、その存在を示せ。我が求めるのは氷騎」

氷騎は、あの空間につけられていた名だった。彼らのいる空間ならば如月と言ったように、それぞれ名を持ち、それを知らなければ目的の空間に渡ることはできない。

三人は、呪文の最後の一節を唱える。

「氷騎へと繋ぐ道をここに開け！」

彼らが唱え終わると同時に、扉に黒い穴が出現した。人が一人入れるくらいの大きさだ。

勇輝はおおと小さく感嘆の声を上げていた。

「弥生を連れ戻そうぜ」

秀斗は表情を固く引き締めてその穴へと足を踏み入れた。

四人は秀斗の言葉に強く頷き、彼の後に続く。暗い空間の先に光が見え、あちらが出口だと分かった。その先に弥生がいる。

最後に勇輝が穴に足を踏み入れた。彼の目的もその先にある。勇輝は腰にある麻醉銃を確認し、首から下げてあるお守りを握り締めた。

「この渡しは長くは持たねえ、走れ！」

秀斗がその声をかけ、走り出した。それと同時に如月に繋がる穴が消え、強烈な光が迸る。

「きゃあ！」

「うわあ！」

彼らの視界は一瞬で奪われ、奇妙な浮遊感に襲われる。浮いた体は何かに引っ張られるように、光へと向かう。

体を取り巻く空気が変わり、体が反応する。

光が治まった渡りの空間に、もはや彼らの姿はなかった……。

### 第3章の13 月は闇夜に紛れる一つの道を照らす（後書き）

作者は上機嫌。

理由。ストックの方でゴールが見え始めたから。

最終的に話数としては二十いくかいかないかで終りそうです。

やはり短かった。内容量が多いのですけど……。6月中には終わるかな、というか次行こうぜ。うん。

弥生の剣の言語能力。なかなか表に出なかった設定です。だってしやべってくれないんだもん。

みんなが持っている武器もしゃべるのですが、なかなかそういう機会がありません。

あ、火煉はちよつと話してたか。うん、ぼちぼち武器についても触れていけたらいいなと思います。

では次回「衝突」で！

### 第3章の14 衝突

“ 来い、そして憎め。そしてわしの色に染まれ”

纏わりつくような闇の気。それはこの空間全てに満ちている。昔はほのかに感じられるぐらいの象徴だったそれは、体を蝕むほど強いものになっていった。気を抜けば、すぐに体を持っていかれる。月の力を失いそうだった。

(……やはり一人で来て正解だった。こんなところ、あいつらならすぐに闇に吞まれる)

闇を多く体を持っている弥生だからこそ耐えられるのだ。少し懐かしい気分になりながら闇が凝縮している場所へと向かう。

闇の気以外は何も変わっていない空間、氷騎。昔、阿修羅が率いていた小隊の名だと聞いた。弥生も秀斗も、二人の正体を知らない。彼らが何故こちらにいるのかも、闇の国、グランオスクリタ帝国がどうなったのかも訊こうともしなかった。必要とも思わなかったからだ。

「鎖羅……」

体の奥では嬉しそうに触手を伸ばす闇を月の力が押しとどめていた。

森を、ここを出る時に秀斗と抜けた森を歩く。この先に開けた場所があり、そこで鎖羅から剣を教わったこともあった。

(憎い……憎い、この願いが果たせる)

空には真つ黒な雲が渦巻いている。生ぬるい風が弥生を撫でる。彼女を歓迎するように優しく、しつこく。

徐々に木々が減り、霸動が強くなる。弥生は逸る気持ちを抑え、ゆっくりと草をかき分けて進んだ。

開けていく視界、人影が見えた。

弥生は草むらを抜け、広場へ足を踏み入れる。彼女は妖艶な笑みを浮かべて、弥生を歓迎した。

「弥生、抜け。始めようではないか、命のやりとりを」

挨拶も無しに、鎖羅は彼女の剣、闇宵を鞘から抜いた。細身の長剣。リーチでは鎖羅が有利だ。

「鎖羅……この憎しみを、終わらせる」

弥生も月契を抜き、鎖羅へと構えた。両者目を離さず、間合いを取る。張りつめた糸のような緊張がその場を支配した。

「仲間の敵は、討たせてもらうぞ」

鎖羅はそう言い置き、霸動を放つと同時に弥生に踏み込んだ。右下方から切り上げる。

それを弥生が受け、弾き返した。二撃、三撃と鎖羅は攻撃の手を緩めず、弥生は一手ずつ見極めて防いでいく。

鎖羅の姿がふっとかき消え、弥生の背後に出現する。弥生はそれを感じ取り、迫る刃を月契で受け止めた。

弥生も新月による俊足を生かし、鎖羅の背後を取って斬りかかった。

言葉は交わさない。言葉よりも目が語っていた。異様な光を灯した瞳は、互いに告げていた。ただ憎いと。



闇が支配する空間に、斬撃の音が響く。空気を震わせ、心を震わせるその音は遠く、屋敷にも届くかのようだった……。

強い光、続いて体が引つ張られる感覚。何かが起った。そして、それが終わったことを伝えたのは、足に感じる確かな着地感。

「……マジかよ」

秀斗の眩きで彼らは目を開け、その視線を巡らせた。見たことのない部屋、おそらくすでに空間の中。

人気はなく、調度品だけが存在している。造りからして、広間のようだった。

「秀斗君、ここって……」

ある可能性に気づいた癒慰が秀斗へと問いかける。それに秀斗は苦汁に満ちた顔で言葉を返した。

「ああ、俺たちがいた屋敷だ……あいつは、俺たちを弥生に近づけたくねえらしい」

「早くここを出しましょう。弥生ちゃんを見つけませんと」

「それは無理です」

零華が一つの扉へと顔を向けた時、突然人影が現れた。彼らは瞬時に反応し攻撃態勢にとつて様子を見る。音もなく出現した彼女は、無表情で言葉を紡ぎ始めた。

「あなた方にはここで決する時を待つてもらいます」

淡々と、人形のように話す彼女に秀斗はくっつかかった。

「んなもん知るかよ。俺は行くぜ」

「鎖羅様の邪魔をすることは私たちが許しません」

私たち、と言葉が発せられた途端、柱や壁から人が現れる。その数は三十ほど。全員黒い服で身を固め、手には武器を持っている。

「ちっ……鎖羅が様づけたあ、幹部にでもなったのか？」

秀斗は会話を続行し、相手に気づかれぬように錬魔に目配せをした。後ろに下げた指で、窓を示す。

「いいえ。鎖羅様も阿修羅様もまだここで暮らしておられます。私たちにとって魔術師は拝するもの。まして、闇の力を持たれる二人は……」

「へえ。あんた敵にしてはえらく饒舌じゃねえか」

秀斗は自分たちを囲みつつある敵にも注意を払いながら、会話を長引かせようと試みる。

（攻撃の意志は薄い。足止めが目的か……他の奴らはあの女の命令がない限り動かねえみたいだな）

「鎖羅様から、きっちりともてなすように言われていますので」

「そいつは……お茶でも出るともつといいけどな」

秀斗の言葉が終わるか終わらないかの内に、鍊魔が窓へと向かって走り出した。止めようと動きを見せる敵の意識を落とし、窓に手かけ押しあけた。

「なっ！」

開けた瞬間に闇の気が鍊魔を襲い、火の力が震えあがる。鍊魔はすぐに窓を閉め、その場を離れた。

「鍊魔！」

外に何があるのか、彼らはすぐに分かった。

己の中の力が怯えたのが分かる。それほど禍々しい闇の気。

「これは迂闊に出れば闇に吞まれる」

鍊魔は苦々しげに舌打ちをして、女を睨んだ。強く気をもって、やっと動けるぐらいだろう。この中で全力を出すことは到底無理だ。

「弥生ちゃんはこの中を闘ってるの？」

心配そうな声を癒慰が上げ、再び秀斗が舌打ちをした。

「弥生は俺たちに比べれば耐性が強い……だが長くは持たねえ」

秀斗が強行突破を狙おうか考えていると、突然零華が顔を引きつけて悲痛な声を上げた。

「みなさん！ 勇輝君がいません！」

え？ と彼らの顔に動揺が走る。彼らはすぐに部屋を見回すが、少年の姿は無かった。

「てめえ、勇輝をどこにやりやがった！」

すぐに秀斗が女に詰問する。

「ゆうき？ 誰ですか、それは」

だが、女の反応は彼らが予想したものとは大きく違った。また別の動揺が彼らに走る。

「誰って……俺らと一緒にここに来た仲間だ」

動揺を隠しながら、秀斗はそれが演技かどうか見極めようとする。

「仲間？ 私たちが聞いた仲間は、魔術師四名ですが」

彼らの中に徐々に嫌なものが広がっていく。

「勇輝は新しく入った人間だ……」

「人間？ 私たちは魔術師四名をここに呼ぶように仰せつかったので、人間など知りません。おそらく、この空間のどこかに落ちたのでしょうか」

女は天気予報でも告げているような単調さで見解を述べる。

彼らは一斉に窓の外を見た。闇の気が強い外、人間がそこにいれ

ばどうなるのか。

「勇輝君は無事なの？」

「さあ。これまで人間がここに来たことはありませんから。平気か  
もしれませんし、命に危険が及ぶかもしません」

「どうしよう！ 早く探さなきゃ！」

癒慰は顔を青くして、窓の外を懸命に見る。そこに勇輝がいない  
かと願いながら。

「癒慰落ち着け。お前の力はなんのためにある」

取り乱す癒慰を錬魔が諫める。癒慰がはっと気付いた顔に変わった。

「そうね、出ていけないならここで探せばいいのよ。土炯どちゆう！」

癒慰は右手を突き出し、掌を下に向けて己の武器を呼んだ。すぐに床から浮き出るように鏡が出てくる。抱えられるほどの大きさで見事な装飾が施されていた。

「主よ、命を」

広間に蔽かな声が響いた。

この鏡は癒慰自身の力が具現化したもの。癒慰の力は攻撃という形を取らずに、探索へと特化したのだ。この鏡は知っている対象を映すことができる。

彼女は空中に浮かぶそれに手をかざして、求めている者の名を告

げる。

「勇輝君を見つけて、彼は五つの元素を持っているわ」

人を探すのに手がかりとなるのは覇動。人間の場合は気配を追うことになるが、気配は薄く容易に紛れる。だから彼らはもしものために勇輝にお守りを持たせたのだ。

「五つの元素」

鏡は与えられた手掛かりをたよりに空間を探す。鏡には不明瞭な景色が映り、人の姿はなかなか捉えられない。

「主、外の闇が強すぎて他の覇動が消されている。追跡が出来ない」

お守りが放つ覇動は微量すぎて、闇の気が強いこの空間では上手く作用しないらしい。

「……嘘。気配は？ 何か感じるものはある？」

鏡はしばらく黙って辺りを探り続けた。不明瞭な景色が、時折鮮やかになり、また暗くなることもあった。

「気配はある。少し弱いが、死ぬほどではなさそうだ」

鏡のその言葉に彼らの内に安堵が広がる。

「近くに月の覇動を感じるが？」

「弥生か！」

「映して！」

「仰せのままに」

ほどなく映像は鮮明になり、弥生の姿が映し出された。同時に鏡が拡大していき、見やすい大きさに安定する。

「もう闘いが始まってるわ」

鏡の中の弥生は、鎖羅へと上段から斬りかかった。それをあつさり交わされ、避けざまに一撃が放たれる。弥生はそれを寸前で避け、再び斬りかかった。

「さすが鎖羅様、お強い」

「……苦戦してるようね」

彼らはその闘いに見入った。今すぐにも駆けつきたい。だが、彼らを囲む敵と空間に立ち込める闇の気が彼らを屋敷に押しとどめる。もし誰か一人でも闇と化すれば、元に戻せる保証はない。彼らは互いに強く、闇と化した仲間を殺さずに気絶させるのは至難の業だからだ。

「弥生……」

秀斗が悲痛な表情で鏡の中の弥生を見つめた。弥生は突きだされた刃を、寸前のところで避けた。首筋に細い傷が入る。

罅迫り合いにもつれ込み、離れては斬りかかる。

鎖羅の刃が完全に弥生を捉えることはない。傷はどれも浅く、赤く線が滲むくらいだ。

弥生が突きだした刃を鎖羅はいなし、引き際に切り上げる。その刃はあと少して喉元に食い込みそうになった。

「あの弥生が押されるとは」

鍊魔は唇を強く噛む。弥生の髪はだいぶ灰色に近く、確実に闇に蝕まれている。

「あの、秀斗君。鎖羅は弥生ちゃんの血のことを知っているのですか？」

零華は鏡から目を離さずに秀斗に尋ねた。

「いや……たぶんあの人は知らねえ。覇動を探るのは全くダメな人だったから……でも、阿修羅、は知ってるかもしれないねえ」

秀斗は常に飄々としていた彼を思い出した。阿修羅の行動は不可解なところも多く、何を考えているのかわからない男だった。

そのうちに鎖羅の刃が弥生の目前に迫って、彼らは息を飲む。弥生は紙一重でそれをかわし、突きを繰り出した。

秀斗は二人の闘いを見て、ぎりつと奥歯を噛む。

「……俺はまた見てるだけだ。親しい奴らが殺しあってるのに、俺は何にもできやしねえ！」

秀斗はきつく拳を握って吐き捨てた。守ると誓っておきながら、結局自分は安全なところにいる。それが悔しかった。



（阿修羅、愛しい奴を守り抜けて言ったのはお前じゃねえか。今てめえは何してやがんだ……阿修羅！）

秀斗の掌には爪が食い込み、痛々しい痕をつけていた。だがそれにも気付かずに、秀斗はさらに力をこめた……。

強い光、体が引きつけられたかと思えば、弾き飛ばされたように急速に地面に落下した。

勇輝はチカチカする目を瞬かせて、周囲に首を巡らせた。見渡すかぎり木。どうやら森の中のようなようだ。

勇輝はひとまず立ち上がり、人影がないか探した。

「みんな……は、いなさそう」

だが四方全てが森。人どころか動物すら見えない。

勇輝は頭を掻いて、ひとまず歩き始めた。森を抜ければ誰かと出会えるかもしれない。

そう思いながら歩いていると、ふと違和感を覚えた。胸の辺りがどンドン重く、熱くなっていく。息も苦しくなってきた。

（少し歩いてこれ？ いつものまに体力落ちたんだろ）

心臓は走ってもいないのに早鐘を打ち、視界はチカチカと光がチラついて、頭痛まで起こり始めた。

（何だ？ もしかしてここの空気に毒……が？）

数歩歩いて、勇輝は前のめりに倒れた。

突然足が動かなくなったのだ。横になって少し楽になるが、それ

は意識が遠のいているせいだった。視界が朧になり、痛覚が麻痺する。

（やべえ、これ死ぬ？ 弥生助けに来て俺が死ぬとかとんだマヌケじゃん……あ、これダメ……かも）

すぐに勇輝の視界は暗転した。意識を手放し、一切の苦しみから解放される。小さく肩が上下し、それがかるうじて彼が生きていることを示した。

時が少し流れ、獣もない森にじやりっと土を踏む音が聞こえる。

「……人間の子ども？」

その声の主は、高い視点から勇輝を見下ろしていた……。

### 第3章の14 衝突（後書き）

やっと出てきた、癒慰の武器。土炯です。

人がいなくなつた時は便利ですが、悪用するといろいろ覗き放題でプライバシーの侵害そのものです。こわいこわい。

スツクのほう、エピソードまでできたので週に一か二で投稿します。

今通算で90話目です。100いたら何か記念イベントをするべきでしょうか。

50はすつとばしましたが……。

まあ、ゆっくり考えておきましょう。

では次回「月はその光をなくす」で……タイトル不吉だあ。

### 第3章の15 月はその光をなくす

“憎め、殺し合え。憎しみこそがわしの力。その力をわしに捧げよ”

勇輝はゆっくり目を開けた。焦点が合わない瞳はあてもなくさまよひ、突然目的を思い出した勇輝は跳ね起きる。

「弥生！」

とたんにクラリとめまいが襲って体を縮こめた。

「無理をするな」

横から聞こえた声に勇輝は驚いて顔を素早くそちらに向ける。彼は石の上に腰を下ろし、呆れた顔で勇輝を見ていた。全身を黒で覆った男。

周りを見渡すと、ここはどうやら洞窟の中らしい。

「やはり弥生の仲間か……人間がいるとは聞いていなかったぞ」

彼はゆったりとした歩調で勇輝へと歩み寄り、横に腰を下ろした。灰色の目に見つめられて、無意識に背筋が伸びる。

「……あなたは、誰ですか？」

黒い衣装には見覚えがある。あの女の人も黒い服を着ていた。

「俺は阿修羅だ」

勇輝はその名を聞いたとたん身構え、警戒心を露わにする。

（この人が、秀斗が言ってた阿修羅）

想像していたよりも線が細く、整った顔をしている。勇輝は阿修羅像のような強面をイメージしていたのだ。

「……俺をどうする気ですか」

きつと睨む勇輝に対し、阿修羅は面倒臭そうに返した。

「助けた奴の命なんていらん。こんなところに一人でやってくる人間の命などもっといらん」

歯に物を着せぬ言い方に勇輝が少し傷ついていると、阿修羅はおもむろに勇輝の胸元に手を伸ばした。

指先がペンダントに触れそうになった瞬間、バチツと火花が散り阿修羅は手を引っ込める。

「なるほど、闇は敵認識か。おい人間の子ども、これを外せ」

「……勇輝です」

勇輝は子ども呼ばわりされたことに腹をたたせながら、首にぶら下げていたお守りを取った。弾丸の軌道をそらせるぐらいの力はあるらしいそれは、たしかに力を持つ人を弾いていた。

「そのまま、闇を許すと言え」

命令口調に勇輝はむっとしつつ、言うことを聞いておいた。なん

となく彼に敵意がないことが分かったからだ。

「……闇を許す」

阿修羅はその言葉を聞くと手を突き出した。渡せということらしい。

勇輝はしばらくためらったが、彼の手にお守りを置いた。今度は彼を拒絶することなく掌に収まる。

「こんなに偏った元素ばかり持っているから倒れるんだ」

阿修羅は呆れた声でそう言い、右の掌を仰向けた。黒い闇が手のひらに集まり凝縮していき、最後には小さな珠となって残る。

「え？ このせいだったの？」

「こいつらは光よりだ。闇の気が渦巻くここでは押し負ける。その影響が主人に現れるんだ」

阿修羅は小さな珠、紡命珠を掌で転がし、指でつまんだ。それをお守りに近づけると、それは吸い込まれるように収まった。全体を動かしてそれぞれの珠を微調整する。

「……増えた」

六つの小さな珠が増えたペンダントは、黒が全体を引き立て調和が取れていた。

「これで銃弾を弾けるくらいにはなったか。闇が入れば安定する。他の闇に付け入られることもない」

「あ、ありがとうございます」

勇輝はひとまず頭を下げておいた。流れが見えないが、感謝するところだろう。

「しかし、よくこれだけ集めたな。願い事を叶える気が？」

阿修羅は珠の一つ一つに目をやる。

「え？ 七つ集めれば願い事が叶うアレみたいなの？」

「ああ、七つ……光があれば全ての元素が揃う。昔話だが、全ての元素の珠を集めれば願い事が叶うらしい」

阿修羅は淡々と説明すると、御守りを勇輝へと突き返した。

勇輝は素敵な言い伝えに心を躍らせたが、ふと心に疑問が浮かぶ。

「……敵なのになんでこんなことするんですか？」

「勇輝はお守りをぎゅっと握ってそう訊いた。」

彼は最初から謎だった。敵のはずなのに、自分を助けてくれ、その上珠までくれた。

「俺はお前に対してなんの因縁もない。それにお前のような人間を誰が敵にする？ それとも秀斗が何か言ったか？」

灰色の切れ長の目に見据えられ、勇輝は慌てて否定する。

「え、いえ、なんにも言ってます！ほんと全然、むしろいい人

って言っていました！ その、なんか名前が怖そうだったから、敵だ  
って、あと鎖羅と一緒に……」

焦ったあまり、思いもよらぬことを口にしてしまった。慌てて口  
を塞ぐ。

（名前が怖いとか、めっちゃ失礼じゃん！）

だが口から出てしまったものはもう戻れない。勇輝は覚悟を決め  
て阿修羅の言葉を待った。

「……くっ、くくく。俺の名か……それに秀斗が俺をいい人だと？」

しかし阿修羅は怒るところがおかしそうに忍び笑いをもらす。よ  
ほどいい人がつぼにはまったのか、阿修羅はしばらく笑っていた。

「なるほどな。あいつらがお前と一緒にいる理由がわかった気がする  
」

阿修羅はぼかんとしている勇輝から離れ、岩の近くに置いてあっ  
た荷物の中から食べ物を取り出した。それを勇輝に投げ、自身は岩  
の上に腰をかける。

「食べるよ、腹減ってんだろ？」

勇輝は投げ渡されたパンを見て、よだれが出てきた。朝起きてす  
ぐに秀斗を見つけたため、朝食を食べていなかったのだ。

（……でもなんでわかったんだ？）



そんな思いが顔に出ていたのか、阿修羅は少し呆れた顔で、

「寝てる間、うわごとのように腹が減ったと言っていた。そんな奴、殺す気も失せる」

と答えた。

勇輝は急に恥ずかしくなり、勢いよくパンにかぶりつく。

「まあ、他には止めるだなんだと呟いていたか」

勇輝はその言葉で盛大にむせた。

「そうだよ！俺こんなことしてる場合じゃない！弥生を助けに  
いかなきゃ！」

ゲホゲホと胸を叩く勇輝に、阿修羅は面倒臭そうに水が入った容器を投げた。

「そう急ぐな。まだ終わってはいない」

阿修羅は鬨みの覇動が伝わる森へと視線を向ける。勇輝は水を飲み、ほっと息をついた。

「良かった……あれ、ということは阿修羅さんも止めにきたんですか？」

勇輝は残りのパンを口に入れる。

「いいや。俺にこの鬨みを止める義理はない。それにこれは鎖羅の願いでもあるしな」

聞いた覚えのある言葉に、勇輝は顔に影を落とす。ゆっくり噛んで、飲みこんだ。

(弥生と闘って、剣を交え、そして……)

阿修羅は森の向こうに意識を集中させた。彼の耳には覇動に乗って剣戟の音が聞こえている。

昔はこの音の合間に楽しげな声が混じっていた。それを秀斗と二人眺めていたのだ。

だが今は黒い感情が剣から迸る。

ざっと、物音がして阿修羅は洞窟内に視線を戻した。

「阿修羅さん、俺行きます」

勇輝がパンを全て食べ終え、首にお守りをかけて立ち上がった。た。

「俺は弥生を助けたいんです」

阿修羅はしばらく無言で勇輝の目を見つめた。彼を試すような目つきでじつと瞳を覗き込む。

(強い意志……弥生を純粋に助けようとしている……)

やがて阿修羅はすっと視線をそらすと、己の荷物を持ち、霧のように霧散させた。そして先にほら穴から外にでる。

「そうか、来い。俺も鎖羅に用がある」

勇輝は大きく頷いて外に出た。先ほどとは違つて息が苦しくなることもなく、体も軽かった。

外に出てみると、勇輝がいた場所はほら穴や洞窟というより、崖に出来た裂け目だったらしい。

首が痛くなるほど高い崖に呆気に取られていると、阿修羅はすでに先を歩いていった。

その後を慌てて勇輝が追う。その背中を見ながら、勇輝は何故秀斗が彼について多くを語らなかつたのか分かつた気がした。

(確かに、いい人だ。かつこいいし)

どこか人を恐れさせるところがある。だが、それを補う優しさがあつた。そして何よりも惹きつけられる。

勇輝は森の先、弥生と鎖羅がいる方角を見据えた。必ず助けると心に誓つて。

森の奥、開けたその場所で剣撃の、鋭い悲鳴のような音が響く。何十分が経過しても勝負がつかなくかつた。

斬り上げればその先に相手の剣があり、斬りかかれば受けて流される。刺突は空を穿ち、絶え間なく音が鳴り響く。

「憎い……鎖羅」

「ああ、憎いぞ。弥生」

狂気のみ。打ちあつほどにその思いは強くなる。裏切られた痛み

が、仲間を殺された痛みが、その思いを強くする。鼓膜を震わす音。指先から伝わる振動。それらが鎖羅の記憶を呼び戻す。過去へ、過去へと誘っていく……。

扉を開けた途端、血の臭気がした。

「なっ……」

鎖羅は二人の新しい制服を床に落とした。本部から帰れば、悲惨な現状が目の前に広がっていたのだ。頭がこの状況を理解するのに数秒を要した。

壁に、床に血が付着し、人だった物が転がっている。黒い服が血に塗れている。誰が敵で、誰が仲間だったのか……。

最初に頭に浮かんだことは賊の侵入。そして弥生の安否だった。

「何があった……？」

鎖羅は死体を一つずつ確認し、それが妹ではないことに胸を撫で下ろす。死体は全て喉をかき斬られており、即死であったと思われる。

（弥生は無事か……）

床に伏す物の中には共に暮らした仲間もいれば、見たことの無い顔もあった。

「誰が、こんなことを……」

鎖羅は拳をぐっと握った。己がいれば、撃退できたかもしれない。

そう思うとやり切れなくなる。身が切られるような苦しみ。仲間を失うことはあまりにも辛い。

「弥生だ」

ふいに声がして、鎖羅はそちらに顔を向ける。慣れ親しんだ声だった。

「……馬鹿を言つな」

鎖羅は怒りを含んだ視線を阿修羅に向けた。

阿修羅は暖炉にもたれて立ち、蛇の置物を手で遊ばせていた。

「弥生は仲間に手はかけない」

「だが、半数は死体もなく血の跡が残るだけ。これは、お前の剣術だ……これが出来るのはお前を除けば」

「嘘だ」

鎖羅は続く言葉を遮って、言葉を吐く。否定をしても、嫌なものが胸を取り巻いた。

「それは、お前が一番分かっているだろ」

阿修羅は蛇の置物に目を落とし、四つの頭を持つそれを愛しそうに撫でた。

「現に、弥生も秀斗も屋敷から姿を消した」

阿修羅は冷たい視線を鎖羅に向ける。その目は敵に向けるもの、彼は二人を敵だと言ったのだ。

鎖羅はじわじわと理解していく。

「……何故、何故だ。ここにるのが苦痛であつたのなら、言えば良かったのだ……何故仲間を殺した？」

鎖羅は震える声で、もう一度死体の山を見まわした。無残に死んでいった仲間、同じ黒騎に所属したものは家族に近い繋がりがある。その中で、弥生は特別な妹だったのだ。

その関係が、一瞬で壊れた。

「俺たちは闇。天の眷族であるあいつらとは相いれなかったのさ」

阿修羅は仲間の死もたいして気にしていない様子で、鎖羅に視線を注いでいた。口もにはうっすらと笑みまで浮かんでいる。

「阿修羅、我が間違っていたのか？ 我が弥生のためを思ってしまったことは、全て間違っていたのか？」

鎖羅は血の海に目を落とす。戸惑い、後悔、苛立ちが一気に押し寄せ一つの感情を形成していく。何にこの感情をぶつければいいのか。この感情を何と呼べばいいのか。

「何故……何故我が大切に思っているものを、殺した？ 弥生……我はお前を、本当の妹だと思っていたのに」

鎖羅が纏う空気が少しずつ禍々しいものに変わっていく。それを阿修羅は楽しそうに見守っていた。

純粹な闇は、負の感情を力に質を変えていく。

「憎い……何故殺した。何故仲間を裏切った……我はお前を憎むぞ、弥生！」

悲痛な叫び。胸が張り裂けるような痛みは、憎しみに変わった。

(いい顔だ。信じていた者に裏切られ、心を憎しみで満たした。闇はそれに反応し、濃く邪悪に変わる)

阿修羅は満足そうな笑みを見せる。

「鎖羅、行こう。ボスが呼びだ」

阿修羅は置物を暖炉の上に戻し、くいつと手招きをする。鎖羅は顔を上げたが、また屍と化した仲間に視線を戻した。

「彼らを置いてはいけない」

「かまわない。本部に連絡を入れておいた。すぐに処理に来る」

阿修羅は心配ないと、踵を返して歩きだした。鎖羅は後ろ髪を引かれながらも阿修羅の後を追う……。そこで記憶は途切れた。

刃同士がこすれあう研磨音。剣撃に霸動を込めれば、相克し風を巻き起こす。

二人が撃ちあう度に髪が靡き、触れるようですり抜けていく。黒髪に銀が重なることはない。

(ボスの要件は指令だった……その指令から帰れば仲間全員埋葬され、無になつていた……この感情を残して)

鎖羅は闇宵を握り直し、右斜めに斬り上げた。刀身はすぐに止められたが、手頸を返して逆に弥生の剣を封じ込める。

「弥生……お前の剣術は我には通用せぬ。分かっているだろ」

「貴様の剣術を使うよりはました」

鎖羅は不愉快そうに眉をひそめ、力任せに弥生を押し切つて距離を取つた。

弥生の姿に、幼い頃の弥生の姿が重なつた。姉と慕い、剣術を教えていた日々が蘇る。

(ずっと共にいて、互いを分かり合えたと思つて……だが弥生は裏切つた。我は、この湧きあがる感情を、憎しみを晴らす)

鎖羅は刃に覇動を纏わせ、刃が触れあうと同時に弥生へと放つた。弥生も刃を通して覇動を放ち、二つの覇動はせめぎ合う。一度でも覇動の侵入を許せば腕が吹き飛ぶ。下手すれば即死だ。

覇動を流し続ける闘い。こうなると魔力量が減少している弥生が不利になる。

覇動はせめぎ合いを続け、徐々に鎖羅が押していく。月の覇動はじりじりと後退していった。

「うっ！」

覇動で押し負け、弥生は吹き飛ばされた。背中を木にぶつけ、強い痛みを感じる。



「軟弱だな。月はこんなものか……」

冷酷な鎖羅の言葉に、弥生は立ち上がり睨みつける。感情の昂りに応じて髪の色が黒に近づいていく。

「月とは哀れな生き物だな！」

鎖羅は地面を強く踏み切り、体をしならせて上段に振りかざす。

「黙れ！」

弥生は激高し、さらに髪の色は黒に近くなる。鎖羅の重みのある剣を受け流し、間髪入れずに横に薙ぎ払った。

(あの日、裏切った女が目の前にいる……それだけで胸の奥が熱い……煮えたぎるようだ。憎い、憎い……もう何も考えられない。ただ、己の願いを)

弥生は月契に覇動を纏わせ、構え直した。月契がカタカタと震えている。

憎しみが強くなるほど、闇の力が増す。

弥生は渾身の力を込めて鎖羅に斬りかかる。覇動を纏った刃が金属音を立ててぶつかり、一拍遅れて爆風が起こった。衝撃が地面をえぐり、風が木々を揺らす。最大の覇動のぶつかり合った。

覇動の衝突が止み、覇動の壁が消失した瞬間、弥生は別の覇動を感じた。互いの覇動が消えた一瞬しか感じることでできないほど微量な覇動。

弥生の胸に一気にざわめきが起こった。鎖羅を剣で牽制しつつ、神経をそちらに向ける。

(あいつらが来たのか……？ いや、違う……幽かだが私の覇動も……まさか、勇輝？)

微弱で、かつ多様な覇動。それは全員の思いが入ったお守り。そしてその持ち主は、確実にこちらに近づいていた。もう一つの覇動と共に。

「どうした弥生。心配ごとか？」

少し表情が強張ったのを見逃さず、鎖羅は意地の悪い笑みを見せた。見透かしたような笑みは弥生に確信を抱かせる。

「お前、何かしたのか」

知らず知らずに声が震えていた。

もう一つの覇動は仲間のものでは無かった。

別の闇、阿修羅のもの。その上、勇輝が一人で来たとは考えられない。

「さあ。ただ我は、お前の仲間をきちんともてなせと言っただけだ。なあ弥生。仲間を殺された気持ちがあるものか、知っているか？」

鎖羅は喉の奥で笑い、挑発を含んだ視線を弥生に向けた。

「あいつらに……手を出したのか」

低い弥生の声。月契はそれに恐れをなすように震えている。

「知らぬ」

楽しそうに弾んだ鎖羅の声。それが弥生に強い衝動を与えた。憎しみが倍増し、覇動が足元から立ち上り髪を靡かせる。カチリと世界が切り替わった気がした。

「……殺す！ 貴様を許さない！」

弥生はかっと目を見開き、月契を痛いほど握る。その柄は黒く染まっていた。髪は完全に黒くなり、覇動は闇と化している。月が眠っていき、闇がその姿を見せる。

(なんだ……？ 弥生の覇動が弱まっていく)

徐々に弱まっていく弥生を見て、鎖羅は薄く笑った。

「相変わらず弱いな。これくらいで月の力が弱まるとは」

嘲る鎖羅の声も、もう弥生には届いていなかった。ただ、敵のみにその神経は注がれる。

震える月契を抑え込むように握り直し、弥生は地面を強く踏み切った。

鎖羅の間合い一歩手前で大きく右に飛び退き、着地すると同時に身をひねって鎖羅の後ろに回り込む。だがそれに合わせて鎖羅も身を翻して弥生を迎え討つ態勢に入った。

弥生は月契を振りかざす。

攻撃と破壊を、その血は求めている。

弥生は攻撃を止めようとはせず、月契を振り下ろした。

キーンと空気を切り裂く音が鼓膜をつんざく。衝撃を腕全体で受け止め、力を入れる。

「殺す！」

だが刃の激突とともに伝わる衝撃は、突然軽くなった。ピキッと不吉な音がイヤに鮮明に聞こえる。

「なっ！」

罅は広がり、両者が目を見開いたと同時に、月契が二つに折れた。弥生の目には黒に浸食された刀身が地面へと落下していく様子がゆっくりと映っていく。

召喚型の剣は己の力を剣に具現化したものであり、その刀身が折れることなどあるはずがない。

(……何故だ？ 私は負けたのか？)

呆然とする弥生の脳裏に、男の声が響く。

“貴よ”

月契の声はどこか辛そうで、深い悲しみを宿していた。

“貴よ。我はその女に負けたわけではない……貴の憎しみに負けたのだ”

淡々と、月契は言葉を紡ぐ。憎しみが引き起こした闇の力が、月である月契を蝕んだのだ。

“貴よ、己を憎しみから解放せよ。”

常に傍にいて見ていた。人間界に来た時も、黒騎を去った時も、

弥生は悲しみ絶望し、そして憎んだ。弥生は憎しみに囚われすぎていたのだ。

月契はそう言い残すと光の粒子となって霧散する。弥生は何も握っていない、虚 から になった手を驚愕の表情で見つめた。そしてゆっくり、口角を上げる。それは嘲笑ではなく、微笑だった。

ぞつと何か体が駆け抜ける。

月契が消える。それは月の力が消滅するということ……。

「うっ、うわああああ！」

月の抑えが無くなり、制御できない量の闇の力が体から迸る。眠りから覚めた闇の力は霸動という形にならず、ただ荒らぶる力として黒い手を四方に伸ばす。

「何だ？」

弥生の動きが止まった瞬間を狙った鎖羅は、きつ先を寸前で止め、自身をも包もつとしている闇の触手を振り払った。

「弥生！ これは何だ！」

「あああ……うっ」

弥生は頭を抱え、月が消える恐怖に固く目を瞑っていた。闇の増幅は止められない。

鎖羅と弥生の間に闇が入り込み、弥生の姿は闇に隠れる。

「ちっ」

闇は二人を包み、姿を消した。それ自身が意志を持つように力を

操る。

この地に残ったのは、地面をえぐる穴。そして月契の刃だった…。

### 第3章の15 月はその光をなくす（後書き）

三章文を見直ししていて誤字脱字がぼちぼち。改変しても文末表現が変わるくらいなので内容に影響はありません。

ちなみに、最近多い誤字が鎖羅のセリフ。

まだ下書き段階で見つけられますが、彼女の一人称は我なんです。しかしなかなか作者は慣れず、ついつい私と言わせてしまう。気づいたら報告お願いします。

では次回「月を失った人々は闇の道を惑う（仮）」で。

### 第3章の16 月を失った人々は闇の道を惑う

氷騎の屋敷、そのホールに悲痛な声が響いた。彼らの表情は蒼白となり、今見たものを信じられずにいた。

鏡には弥生の姿は無い。たった今、闇と化した弥生はその闇に包まれて鎖羅とともに姿を消したのだ。

そしてそれと共に彼らを取り囲んでいた人々と女が消えた。役目は終わったとしても言うように……。

「いやっ、そんな、弥生ちゃん！」

癒慰が鏡に近寄り、その面に触れる。叩いても返事はなく、そこには誰も立っていない。

“月の気配は途絶えた……追えない”

癒慰は嘘……と力なく呟いた。

「ちっ……恐れていたことが起こった」

鍊魔は苦虫を噛み潰したような表情で鏡を睨んでいる。

「早く弥生ちゃんを元に戻さないと手遅れになります！」

零華が切羽詰まった声を上げ、視線を秀斗に向ける。他の二人も秀斗へと視線を移した。

弥生との付き合いが長く、同じ黒騎に属していた者としての秀斗の言葉を待った。

だが秀斗は呆然と鏡を見ているだけで、何の反応も見せない。秀



斗の口はカラカラに乾き、足は小刻みに震えている。現実が信じられなかった。

「秀斗君！」

癒慰に名前を叫ばれて我に返った秀斗は、とたんに焦ったように周りを見渡し、一番近い窓に飛びかかった。

「待って！」

癒慰の制止も聞かず、窓ガラスを強引に開け、身を乗り出す。

「弥生を助けねえと！ あいつは、ダメなんだ！ 俺が行かねえと！ 俺は弥生を死なせねえ！」

「秀斗！ 外は闇の気が！」

鍊魔が引き戻そうと秀斗に手を伸ばすが、秀斗は一足早く窓から飛び出した。

女の子二人も窓に駆け寄り、あることに気付く。

「鍊魔君、闇の気が薄くなっています」

「これなら動けるわ」

三人は暗黙の了解で窓から外に出る。秀斗は先をがむしゃらに走っていた。

何か感じるものがあるのか、先ほどの映像に見覚えがあるのか、ただ一つの方角にまっすぐ走る。

三人もすぐに秀斗を追い、森へと入っていった。

(弥生……！ 死んだら許さねえからな！ お前を殺すのは俺だつて、約束したじゃねえか！)

秀斗の脳裏には闇に染まった弥生の表情がこびりついて離れなかった。弥生は最後に笑っていた。

秀斗の記憶から、弥生の言葉が蘇る。

それは弥生が憎しみを口にする前の、たった一度の言葉。小さく、弱く紡がれた独り言だった。

“なぜ、私を殺してくれなかったのだろうか……”

聞き間違いかと思った。驚いて顔を向けた時の弥生の瞳が、憎しみを宿していたから。

そしてその口が、憎いと呟いたから。

だが今は、その言葉が嫌なものを想像させる。あの時弥生の目に映っていた覚悟の意味を考えてしまう。

「弥生！ 約束破つたら、地獄の果てまで追いかけてやる！」

秀斗は森の中を突き進む。森の開けた場所を目指して。かつて、姉妹が剣の修業をしていた場所。そこで二人が剣で撃ちあうのを見るのが好きだった。

秀斗は奥歯をくつと噛みしめて、ひたすら走った……。

時は少し遡る。勇輝は阿修羅の後をついて森を歩いていた。

阿修羅は無言で足早に、それでいて優雅に足を進める。だがそれは足の長い阿修羅だから出来ることであって、付いていく勇輝は半

分小走りだ。

（反則だ！ 横暴だ！）

勇輝は懸命に黒い背中を追いかける。だが徐々に息は上がり、また頭痛がし始めた。耳なりまで起こってくる。

（くそっ……闇の珠入れたら大丈夫なんじゃなかったのかよ）

さすがに口には出せないので勇輝は心の中で悪態をつく。だが前のように体が動かないということはなかった。ただ気分が非常に悪い。

それは進むにつれて酷くなっていった。耳なりは大きくなり、やがて声へと変わっていく。不明瞭なそれも、進みにつれてしだいに聞き取れるようになった。

“憎め憎め。殺し合え殺し合え”

呪文のように聞こえた声は、まさに呪祖だった。勇輝はぐつと頭を押さえる。

変調をきたしている勇輝には気づかずに、阿修羅は先へと進む。どうやら彼は何も感じていないらしい。

“闘え。悲しみ、絶望、恨み、憎しみ、全てがわしの力となる”

低い男の声だった。悪意に満ちた声が延々と勇輝の頭の中に響く。

“憎め、憎め。その闇を解放しろ”

「あ、あの阿修羅さん」

勇輝はがんと頭に響く声に我慢できずに阿修羅を呼びとめた。彼は苛立たしげに勇輝を振り返る。そして勇輝の顔色の悪さにも一つ不機嫌そうな顔になった。

「あの、ここなんかおかしいです。すつごく気持ち悪いし、なんか声が聞こえるんです」

阿修羅は眉をひそめ、辺りを見渡す。普通に見る限りおかしなところは無い。

「それはどんな声だ？」

「低い男の声で、憎め、殺せって」

“闇を強くせよ。墮ちよ、墜ちよ。わしの下へ来い”

勇輝が離す間も、頭の中では声が響いている。

阿修羅はしばし視線を彷徨わせ、すつと進行方向に顔を向けた。広場の辺りの空を見上げ、そこが真っ黒な雲に覆われていることに気付く。

(まさか……)

阿修羅は一度瞼を閉じ、眼を開けた。白目部分が黒く染まり、瞳が金色に輝く。

彼の能力の名を闇誡あんかいと言い、鍊魔と同じく自身の力が具現化せず憑依したタイプだった。

彼の眼は真実を映す。覇動も全て色彩となって視野に現れた。

鍊魔の目と違うのは、鍊魔は治療の補助として物質を視るのに対

し、阿修羅の目は対象を知るために物質を視ること。

故に鍊魔よりも深く視え、用途も広い。

彼はその眼で空を見上げた。そしてはっと息を飲む。

広場と思われるところから、黒い覇動が雲に吸い込まれるように昇っているのが視えた。そしてその雲は他と違い色を持っている。辺りの空気もそうだ。

それは術がかけられていることを意味していた。

(何故だ……)

混沌とした色だった。普通術者は固有の一色しか持たない。それに固有の波長が混ざりあって個性となるのだ。だが阿修羅の眼に映る色は……。

(どれが本質だ……?)

阿修羅は術のさらに深いところを見ようとしたが、何かに弾かれた。くつと呻いて目を押さえる。

「子ども……まずいことになるかもしれない」

「勇輝です……うわっ！」

勇輝がぼそつと呟いた時、森の奥から覇動が押し寄せてきた。森の木を揺らすほどの衝撃波に、勇輝はなんとか踏ん張って耐える。

「ここまで覇動が押し寄せるとは……なんて闘いだ」

阿修羅は闇誠の発現を解くと、つれを振り返った。彼が飛ばされていないかと思ったのである。本当に飛ばされていたら洒落になら

ないが……。

「……ありえないって」

勇輝は無事だった。だいぶ押されたらしく、地面に線が残っていたが、飛ばされることは免れたらしい。

「弥生、まだ闘ってる……早く行かないと」

“最高だ。闇が、禍々しい闇が生まれた。ああ、力が漲る”

勇輝が割れるように痛い頭痛を堪えながら足を前へと出す。

それを見て阿修羅も足を踏み出した時、大きな霸動の変化を感じ取った。視なくても分かる。月が圧倒的な闇に呑まれたのだ。

それと同時に、ピキッと勇輝の胸の辺りから音が聞こえた。

「なんだこれ！ 珠に罅が！」

その音にひかれてお守りを見た勇輝が目にしたのは、罅割れた黒い紡命珠だった。黒は阿修羅の物。だが今お守りには二つの黒い珠がある。その位置にあったのは、弥生の物だった。

「闇に呑まれたか」

阿修羅が軽く舌打ちをし、そして続いて感じた変化に目を見開いた。表情が強張り、くっくと奥歯を噛みしめる。

闇の気が膨大に膨れ上がり、消滅したのだ。鎖羅の霸動もともに……。

「他のみんなのも黒が混じってるんだけど！」

“ 終わりだ……切断しろ、感付かれた ”

並々ならぬ事態だと感じた勇輝は、他の紡命珠の変化に気がついてさらに緊迫した声を上げる。そのせいで脳内に響く声を理解することが出来なかった。

「外に出て来たのか……無理をすると呑まれるぞ」

阿修羅はそう吐き捨て、ぶつぶつと呟く。最後に何か言った気がしたが、小さすぎて勇輝には聞こえなかった。

「どうしよう！ 弥生を早く助けないと！」

勇輝は逸る思いを抑えきれずに走りだす。

だが阿修羅が勇輝の前に立ちはだかり、行く手を阻む。

「何するんですか！」

「走るより速いものがある」

阿修羅はそう言うと、眼を発現させ闇を創り出す。ゆらゆらと揺れる闇は、煙のように阿修羅の周りに立ち込めた。

「らんせい  
蘭犀」

阿修羅がそう呼ぶと、闇の中から一匹の獣が姿を現した。勇輝はぽかんとその獣に見入る。

それが何かと問われれば、虎と答えるかもしれない。だが、それは体型がという意味だ。

毛はつややかな黒で、やや長めだった。

犬歯が発達し、鋭く突き出ている。そして勇輝を見据える一対の大きな目は、ランランと光っていた……。

（俺、食われたりしないよな）

しばし奇妙な睨みあいが続いたが、その獣、蘭犀は地面にゆつくりと伏せた。それに阿修羅がまたがり、勇輝に来いと手招きする。

（マジで？）

動物に乗るといふ経験は動物園の馬でしかない。しかも今回は虎のような獣で鞍もなければ手綱もない。

だが迷っている時間は無かった。勇輝は意を決して蘭犀に跨り、阿修羅の腰に手を回す。

バイクの二人乗りの要領だ。

阿修羅が蘭犀の毛を一撫ですると手綱が現れた。それをしっかりと握って阿修羅は蘭犀の脇腹を蹴る。

「落ちるなよ」

その言葉と同時に、蘭犀は飛翔した。

「空飛ぶなんて聞いてないしいい！」

勇輝は慌てて阿修羅にしがみつく。頬を風が撫でて、空が近づいていく。翼も無い獣が空を駆けていた。空に足場が有るかのよう空を走り抜けていく。

空から見渡せば、場所は一目瞭然だった。少し視線をやったところに森にぽっかりと穴が開いている場所がある。そして二人の背後



には屋敷が見えた。

あたりをきよるきよると見渡している間に広場はどんどん近付いていく。

蘭犀が降下し始めた。ずんずん地面が近づき、蘭犀はふわりと着地した。

(うおう、安全運転)

激しい衝撃を予想していた勇輝はほっと安心して、蘭犀から降りる。そして闘い跡を見て息を飲んだ。

二人の姿は無い。だが二人は生々しい爪痕を残して行った。

「弥生……どこ？」

勇輝は周りの森へと視線を移すが、人の姿はない。そして、地面に血が付いていないのを見て、少し安心した。

ふともう頭が痛くないことに気が付く。変な声も聞こえなくなっ

た。

「阿修羅さん……あの変な感じがなくなりました」

「……だろうな。逃げられた」

阿修羅は広場を歩き、大きなクレーターの中で足を止める。彼はそこに落ちていた刃を拾うと、目線の高さまで持ち上げた。

「こいつは、いよいよまずいな」

「それ、もしかして弥生の？」

勇輝は阿修羅に駆け寄り、その手にあるものを確認する。

「おそらくは。弥生は完全に闇に呑まれたらしい」

阿修羅は自身の眼で辺りを検分する。だが、覇動はここでぷつぷつと切れ、二人がどこへ行ったのか教えてくれるものは何もなかった。

「二人は、生きてますよね」

「死んではいない……だが、危ないぞ」

勇輝が顔を強張らせた時、しげみから大きな音がした。人が近づいているのが分かる。

(弥生……?)

勇輝は警戒をしつつ、期待した。

だがしげみから飛び込んできたのは、銀髪の美女ではなく、金髪の血走った眼をした秀斗だった。

「勇輝？」

秀斗が足を止め、その顔に安堵の表情を浮かべた。だがすぐに隣にいる人の存在に気づいて怒り、鋭い眼差しで阿修羅を射抜く。

「阿修羅！ お前勇輝に何かしたのか！」

喧嘩口調で阿修羅に詰め寄ろうと、一歩大きく踏み出した。だがその瞬間、心臓が大きく跳ねる。金の髪に黒色が混じった。

「違うって！ 阿修羅さんは倒れてた俺を助けてくれて、ご飯もくれたんだ！」

勇輝が必死に否定して、秀斗に駆け寄ろうとしたが腕を阿修羅に掴まれた。

「近づくな」

勇輝は驚いて阿修羅を振り向く。彼は真剣な目で秀斗を見据えていた。

「勇輝の手を放しやがれ！」

秀斗は激高し体が熱くなる。胸の奥が熱い。血管を何かが這っているような感覚。

その何かは、一気に頭から足の先まで駆け下りていった。プツリと何かが切れる。

「うわああああ！ うがああ！」

突然秀斗の髪が黒く染まり、足元から闇の触手が出現した。それは獲物を求めるように四方八方に手を伸ばす。

「ちっ、まともに感情の制御が出来ないまま出てくるからこうなるんだ」

阿修羅は苦しみに悶える秀斗に大股で歩み寄り、その頭を鷲掴みにした。闇の触手は阿修羅の闇に触れると、その強さに負け霧散していく。

阿修羅は秀斗の中に自身の覇動を送り込んだ。中で暴れる闇の力を、さらに上の力で相殺させ鎮める。

それが阿修羅の知る、闇化への対処法だった。

「秀斗君！」

「勇輝！」

三人がしげみから出てきたと同時に、秀斗は意識を失った。バランスを崩して倒れる秀斗を阿修羅が支え、蘭犀の背に預ける。

「勇輝君、無事だったのね！」

「本当に心配しました」

「うん、元気。阿修羅さんが助けてくれた」

二人は驚きを隠さずに阿修羅を見た。敵ではなかったのかと、その目が語っている。

「阿修羅、二人の居場所がわかるか」

鍊魔は鋭い眼差しを阿修羅に向けた。

「残念だが追えない。だが、まだ生きてはいる。両方な」

「あの様子では、どこかの異空間に飛んでしまったのかもしれないね」

「何にしろ、弥生は鎖羅がどうにかする」

阿修羅は月契の切っ先を持つ指に力を入れる。少しの力だったが、刃が消耗していたのかいとも簡単に砕け散ってしまった。

「それは、生かすも殺すもという意味か」

「ああそうだ」

阿修羅は纏う闇を濃くし、魔獣の名を呼ぶ。

「蘭漢、蘭慎」

その呼びかけに応じて、すぐに二匹の獣が姿を現した。蘭犀と同じ種類の魔獣だ。

「乗れ。ここにいても無駄だ。屋敷で二人の帰りを待つ」

言つが早いか阿修羅は蘭犀に跨り、秀斗を乗せて空へ駆け上がった。

残る四人は互いに顔を見合わせ、一つ頷いてそれぞれ二人ずつ魔獣に乗った。

鍊魔が手綱を持ち、その後ろに勇輝が乗る。

女の子の方は、零華が手綱を握っていた。

「弥生は、必ず帰ってくる」

空を駆けながら、勇輝は誰にでもなく呟いた。それは願いではない。確信だった。

第3章の16 月を失った人々は闇の道を惑う（後書き）

阿修羅、そんな便利なもんがあるなら最初から出しとけよ。

そう思ったあなた、正解です。なんで優雅に早歩きをしていたのでしようかね、彼は。性格でしようね……。

だいぶ大詰めです。では次回「月は闇の中で光り輝く」で。

### 第3章の17 終幕

何度も景色が変わった。黒い闇からふと見える景色は、二転三転し、そしてやっと落ち着いた。

眼前に広がるは岩と土。洞窟の類に飛ばされたようだ。

鎖羅が辺りの状況をさっと把握した時、ドサツと弥生は糸が切れたように倒れた。本来術者が気を失えば、闇化は止まる。だが、それは軽症の時だけだった。

今の弥生は気を失っても、その体からは絶えず闇が噴き出し。中では弥生を蝕んでいる。

「弥生！ どういうことか説明しろ！」

鎖羅は倒れた弥生を掴んで仰向けにする。

だが、その苦しげな表情を見て、表情を一変させた。

弥生は苦しそうに肩を上下させ、その顔は青を通り越して土色になっていた。単なる疲労とは全く異にする状態。

鎖羅は一瞬で命の危険を悟った。

鎖羅は剣を横に突き刺し、弥生を揺さぶる。

「おい弥生！ 目を覚ませ！ お前は我が殺すのだ！」

反応のない弥生に鎖羅は舌打ちをし、自分の手を這う黒い物質に目を落とす。それは間違いなく闇だ。

（何故月の弥生から、闇の気が漏れる……？）

鎖羅は弥生の上下する胸に手を置いて、瞼を閉じる。神経を深く集中させて覇動を探った。弥生から感じられるものは、全て黒い。

「なっ……月が、月の力が消えた？」

鎖羅はくつと奥歯を噛みしめ、さらに深くまで探る。

(くそっ……この手のことは苦手だというのに)

暗い覇動の中を鎖羅は奥深くへ進んでいく。そしてほんの一瞬、闇の中に銀色を見た気がした。

それに覆いかぶさる黒い闇。触手を伸ばして絡め取り、押しつぶそうとしている。

それを感じ取った鎖羅は、精気が感じられない弥生の顔をじつと見る。鎖羅の瞳には憎しみと戸惑い、そして恐れが混在していた。

(このままにしておけば、こいつは死ぬ。それで仲間の敵を討つたことになるのではないか……？ いや、この手で討たなくては意味がない。……いや、違う。そうではない！)

鎖羅は苛立たしげに髪をかき上げた。愛情をかけて育てた妹。裏切られ憎まれても、憎んでも、この死は望みではない。

今、自分がもっとも望んでいることは何か自分に問いかける。答えは、最初から決まっていたにも関わらず……。

「弥生、二度は無いぞ！」

鎖羅はそう叫ぶと、両手を重ね合わせて弥生の胸の上に置く。決めたならもう迷わない。

鎖羅は集中力を上げ、気を静める。

(弥生を殺そうとしているのは闇の力。ならば、私の覇動でそれを



消す)

鎖羅は掌に己の霸動を集め、それを弥生へと注ぐ。弥生に巢食う闇を目がけてそれを放った。

弥生の体が跳ねる。体内の闇が抵抗を示しているのだ。それにもかまわず鎖羅は霸動を注ぎ続ける。自身も先程の戦いで大部分を消費していた。それでも、額に汗が浮き出て息が乱れ始めても、注ぐことを止めなかった。

攻撃の手を緩めれば、闇が一気に弥生の体に乗っかってしまう気がしたのだ。

(弥生……もう一度我と闘え！)

鎖羅は銀色が戻り始めた弥生の髪を見た。まだ灰色だが、だいぶ闇の力は減少しだした。

鎖羅は少し安堵したが、まだ予断は許されない。鎖羅はさらに霸動を洗練して弥生に送っていく。

“鎖羅殿！ それ以上霸動を注げば貴女のほうに危うい！”

突然鎖羅の脳内に声が響いた。声の主は鎖羅の横に刺さっている闇宵<sup>あんしやう</sup>だった。

剣は焦ったように、そう忠告する。それほど鎖羅の顔が青くなりだしたからだ。

霸動は魔術師の生命力。それが尽きれば気を失う。そしてそれ以上の力を行使すれば命そのものを削ることになり、死の危険が近づくのだ。

「だ……まれ。あと、少しだ」

鎖羅は最後の力を振り絞って弥生へと注ぐ。

(こんな形で死なせるか……こんなものが願いではない！)

鎖羅は神経を集中させ、ぼんやり見える黒い力に狙いを定める。

銀色の光に押され、闇の力は小さくなっていた。

(あれが原因か！)

鎖羅は己の覇動を細く鋭い刃にして、そこに突き刺した。闇の力は防衛するように全身に棘を出し、暴れまわる。

“おのれ、おのれ。闇の一族でありながらわしに逆らうとは……”

闇の力が消滅する瞬間、鎖羅はふと声を聞いた気がした。どこか懐かしい声を……。

感じる覇動は銀色、澄んだ月のものに戻った。

鎖羅は弥生から手を放し、ふつと息を吐いた。弥生の髪は銀に戻り、顔色もだいたい良くなっている。

鎖羅は規則正しい寝息を立てる弥生の表情をただじっと見ていた。

(……寝顔は昔のままだ)

鎖羅は何故かおかしくなって、くすくすと忍び笑いを漏らした。

そして寂しそうな表情をよぎらせ、立ち上がると闇宵を鞘に収める。

鎖羅は疲れ切った体を壁まで引きずり、壁に背を預けて腰を下ろすと、ゆっくり目を閉じた……。

黒が支配する世界。全ての感覚は閉ざされ、朧な世界を弥生は漂っていた。

（また、闇に吞まれた……今度こそ、戻れないかもな）

身体の奥から闇が押しあがってくる感覚。そして自分がいなくなる実感。

斬られるのとはまた別の痛みが体を蝕んでいく。

（ああ……私は、願いを果たせなかったのか）

悔しさも、憤りも感じなかった。ただ心の中は穏やかで、ふわふわと漂っているのが気持ち良かった。それは今まで感じたことのないものだった。弥生はそれを死と理解した。

（死ぬのか……それも悪くない。あいつらには、申し訳ないが）

弥生はくすりと笑った気がした。自分の顔も感じられないので、気分の問題だったが。

（私の命は、あの時で終わったからな）

ゆっくりと、意識を閉じようとした弥生は強い光を感じて目を少し開けた。それは、銀色の光……。

（ここは……どこだ。私は……？）

弥生はぼうつと上を見ていた。なかなか焦点が合わなかったが、

見えてきたものは土の天井だった。

どうやら寝ているらしいと気がついて、弥生は体を起こした。とたんに眩暈に襲われ、少し蹲る。そして己の体が月の力で満たされていることに気づいた。身体から闇は消え、また奥深くで眠りについている。

(……何が起こった?)

死んだわけではないことは分かる。だが、何故か分からない。なぜ生きているのか。

「無理をするな」

横から聞こえた知った声に、弥生はすぐに反応してその手に月契を呼び出そうとした。

だが、その瞬間に思い出す。月契は折れた。

さらに今の弥生には新たに月契を具現化することができるだけの力が無い。

「お前に助けられるとは、な……」

弥生はすぐ横にあった壁に背をもたれさせ、自嘲の笑みを浮かべながら鎖羅と向き合う。だるい体が少し楽になった。

(私の、負けか)

弥生は自分の掌を見つめ、鎖羅へと視線を移した。鎖羅は岩の上に腰を下ろして、弥生を見ている。鎖羅には無数の斬り傷があり、服の切れ目から覗く肌には赤い傷が走っていた。

弥生は自分と同じく傷だらけの鎖羅をじっと見つめる。不思議な

ほど、鎖羅を見ても憎しみが湧かなかつた。妙に清々しい。闇ととも、憎しみまで消えてしまったようだった。

「鎖羅……お前の勝ちだ。殺せ」

弥生の意を決した言葉に、鎖羅は眉根を寄せる。

「……あれが勝ちだと？ あのような勝ち方をしても我は嬉しくない」

鎖羅はすつと立ち上がった。腰に佩いた剣が岩に擦れて鈍い音を立て、鞘が怪しく光る。

弥生は怒りが満ちた鎖羅の顔を黙って見上げた。

鎖羅は闇宵を抜き、弥生へと歩を詰めると弥生へと切っ先を突きつける。鋭い視線が弥生を射抜いた。

「答える。お前は闘いの途中、わざと斬られようとしたな」

唐突な鎖羅の問いに、弥生のわずかに眉を動かす。闇宵の切っ先が弥生の首筋へと下ろされた。

そこには三本の傷がある。一つを除いてこの闘いで負わせた傷だ。他にも腕や腰にも無数の斬り傷があった。

「さあな。だが仕留められなかったではないか」

挑発的な物言い。鎖羅は刃を弥生の首筋に押しあてた。あと少し力を入れれば肉に食い込み血が溢れだす。

「我が軌道を変えなければお前は死んでいた」

「甘いことだな」

「あのようなこと、我に対する侮辱だ！」

鎖羅は怒りを露わにし、弥生を見下ろす。弥生は彼女を無感動な目で見上げていた。

口では挑発しておきながら、目には何の感情も無い。

鎖羅はその瞳に心の中で舌打ちをする。鎖羅はこの瞳を知っていた。弥生と会った時の瞳だ。全てを諦め、悟ったような瞳。

弥生は喉の奥でしばらく笑っていたが、やがてすつと表情を消して鎖羅を見つめた。

「殺せ……負けは負けだ。お前は私を殺したいんだろ？」

「……ああ、お前は修羅に堕ちた。我が殺さなくてはいけない」

剣の師として弥生が修羅と堕ちれば自分が殺すと誓った。さらには仲間の敵でもある。

鎖羅が剣を引き、振りかざす。鎖羅の顔も能面のように表情が抜け落ちていた。ただ後は機械的にその腕を振り下ろすだけ。

「……あの時、殺してくればよかったのに」

弥生はぼつりと思いを口にした。ずっと閉じ籠めていた、心の底からの思い。振り降ろそうとしていた鎖羅が、その動きを止めた。

「どつという意味だ」

「お前に死ねと言われれば、喜んでこの喉を掻き切った……この命拾われた時からお前の物だからな」

鎖羅は弥生の言葉の意味が分からず、剣を振り上げたまま固まる。

「わざわざ、仲間など使わなくても……鎖羅が命じれば……」

「……何を言っている？」

鎖羅が苛立たしげに問う。頭の中には弥生の言葉がぐるぐると回っていた。頭の片隅がおかしいと告げている。

「お前が、私を殺しに仲間を仕向けたではないか……」

そして弥生は、あそこでやられておけばよかったな、と薄く笑った。

「……我がお前を殺そうとした？」

「お前が私をいらぬと言った……不安定な月などいらぬと」

鎖羅はひどく動揺した。それを巧みに隠しつつ、弥生の表情の細かいところまで観察する。その言葉が嘘でないか知るために。

だが、弥生からは嘘のカケラも見つけることができなかった。弥生は不思議そうに鎖羅を見ている。

(何だ。何が起こっている……弥生の中にいる我は……誰だ?)

鎖羅は一度剣を下ろした。それを弥生がいぶかしげな目で見る。

「お前は、仲間を殺して出て行ったのではないのか」

「……結果としては、そうなるな」

弥生は透明な眼差しを鎖羅に送る。ただ殺せとその瞳は言っていた。

闘いの中で見せた、憎しみに囚われた弥生とは別人のような顔。

鎖羅は一気に弥生への憎しみが分からなくなった。昔の弥生の影が纏わりつく。

（何故だ。何故食い違ふ……弥生の中の我は我ではない……ならば我の中にいる弥生は……？）

絡まり合った糸がほどけるように、冷たい氷塊が解けるように、胸のうちの黒いわだかまりが消えていく。それと同時に、ある焦燥が込み上げてきた。

自分は、とんでもない間違いを犯したのではないかと。

だが鎖羅は、その雑念を押しやる。

（考えるな、感じる……）

鎖羅は鋭く舌打ちをし、勢いよく剣を振り上げた。弥生がその表情を和らげる。嬉しそうにすら見えた。

間髪入れずに鎖羅が剣を振り下ろす。

グサツと気持ちの良い音がし、頬に風を感じた。待っても痛みは来ず、弥生は閉じていた瞼を開けた。困惑の色を持った瞳は黒い髪を映す。

目の前に鎖羅が肉薄していて、弥生は驚く。

刃は頬のすぐ隣にあり、土の壁に刺さっていた。

弥生の目が何故と問う。そして憤りの色を見せた。



「情けをかけるつもりか……！」

弥生が苦々しげに吐き捨てる。鎖羅はそれを視線で制した。弥生はぐっと言葉に詰まる。

「弥生。お前は修羅に堕ちた。我は師としてお前を裁く」

鎖羅は感情を押し殺した声で続ける。

脳裏に今までの闘いが、感情が走馬灯のように流れていく。記憶の断片が流れていき、最後に行き着いたのは、剣を握る幼い弥生だった。

「……そして、姉として……お前を許そう」

弥生の目が驚愕に見開かれた。くっ唇をかみしめる。

「……な、んで？」

鎖羅は弥生の問いには答えず、すっと口角をあげた。鎖羅は自分の目で弥生が仲間を殺すところを見たわけではない。そして当時、人に化けられる能力者は複数いた。

憎しみが消えてしまえば、そこに残っているのは妹に対する愛情。心の中には妹を守りたいという、暖かな気持ちしかない。憎しみは誰かに抜き取られたようにすっかり消えてしまった。

「何故殺してくれないんだ！」

弥生は懇願するように、切ない声で叫ぶ。

殺されることが唯一の助かる道であるかのように、それを望んだ。

「馬鹿……妹が殺せるか！」

鎖羅は泣きそうな顔になって、弥生を優しく抱きしめた。弥生は突然のことに身を固くする。

(……鎖、羅?)

「姉である私が許すと言っているのだ。黙って許される」

鎖羅は今まで封じられていたものが溢れだしたかのように、心の中がぐちゃぐちゃだった。愛しさか、悲しみか、寂しさか、罪悪感か……。名づけようのない感情が渦巻いている。

弥生は信じられないという表情を浮かべ、さらに問いを重ねた。

「だが、要らぬと……言ったではないか」

「誰が言うか。我は気にいった者は何があっても手放さぬ。信じるとは、言えぬが」

鎖羅の声が真剣なことが分かった弥生は体の力を抜いて、鎖羅の温度を感じた。

「また……私を必要としてくれるのか？」

弥生の声は震えていた。鎖羅は弥生から身を離し、その顔を覗き込む。肯定を望む問い。

それは生き続けるために。

「当たり前だ……私は月であるお前が好きなのだから」

弥生はじっと鎖羅を見つめていた。感情の乏しい表情が、喜びに柔らかくなっている。

鎖羅はそれをたまらなく愛しく感じた。

「ありがとう……鎖羅ひろ義姉様」

鎖羅がぴくんとその言葉に反応した。呆けたような顔は徐々に嬉しさに染まり、困ったような笑みを見せた。

「この……馬鹿妹が」

もう一度強く抱きしめ、鎖羅の頬に一筋の涙が伝った……。

### 第3章の17 終幕（後書き）

作者の都合により、予定を早めて三章をお送りします。

作者の都合？ 四章を書くための自分への追い込みですが、何か？

さて、こういう風に決着が付きましたが……。長かったですね。

というか、重かったですね。でもやりたいこと全て詰め込んで、三章はあと少し。

作者はただいまセンチメンタルな気分です。

話は変わりますが、大変な間違いをしていました！ 誰も覚えていないとは思いますが、11話で弥生と秀斗が黒騎で過ごしたのは五年となっていました。が、実は二十五年です。ということで見たい目は五歳大人になっています。この時で十三歳です。

焦りました。五年のままだと矛盾が半端無い。黒騎にいた間に会った鷺とか、何歳だっけとなりますからね。

ということ、訂正をしておきます。

次回「星と月は闇を鮮やかに彩る」です。

### 第3章の18 星と月は闇を鮮やかに彩る

大切な人は死んでも守り通せ。それは、秀斗が阿修羅に教わったことの一つだった。

若いはずなのに成熟しすぎていて、飄々と捉えどころのない彼に秀斗はよく遊ばれていた。だが彼はとくに秀斗にかまっていたわけでもなく、むしろ放置していた方だった。

そして思いだしたかのように構いにくる。

それでも、鎖羅と弥生の稽古を見に行く時は必ず付いてきていた。鎖羅がいれば彼は動く。阿修羅の基準はいつ鎖羅だった。

(それも懂れた理由の一つだったけどな)

秀斗は夢と現実の狭間で、先ほどまで見ていた懐かしい夢の余韻に浸っていた。真っ白な世界。現実が近かった。

(阿修羅……さん)

秀斗はパチリと目を開けた。目に飛び込んできたのは見知らぬ天井。いや、どこか見覚えがあった。ただ記憶が遠すぎる。

そして顔を横に向けると、先ほどまで夢で会っていた人が目の前にいて、心底驚いた。

「うええっ！ 阿修羅さん？」

驚きすぎて、変な声が出たのにも呼び方が昔に戻っていることにも気付かない。

慌てて身を起し、わたわたと何かを言おうと口を動かすが、肝心の言葉が出てこなかった。

「正気に戻ったか？」

阿修羅は感情のこもっていない眼差しで秀斗を見た。

「あ」

秀斗は気を失う前の自分を思い出して、間の抜けた顔になった。ついでに我を失っていた間に勇輝が叫んでいた言葉も思い出して急に恥ずかしくなった。

「早とちりしてすみませんでした」

潔く謝り、頭を下げる。

「その癖は昔と一緒だな」

阿修羅が呆れた声でそう言った。昔から秀斗は思い込んだら一直線のところがあったのだ。

「……あはは」

秀斗はすーっと視線を逸らし、半笑いを浮かべる。そして視線を少し落として、

「……阿修羅さんは、俺の血のこと知ってたんですね」

と呟いた。

知っていなければ、ああも簡単に対処はできないはずだ。

「まあ、視てしまったからな」

それが阿修羅の目のことを指しているということはすぐに分かった。

「ですよね」

だが彼はそれを他言しない。そこもまた、彼という人を分かりにくくしていた。

秀斗はしばらく視線を下に向けていたが、その視線はすぐに阿修羅に戻った。阿修羅出現で機能マヒを起こしていた脳がやっとここに来た理由を引つ張り出してきたからだ。

「弥生は！ 弥生はどうなった？」

阿修羅は遅い、と一言述べてから現状を説明し出した。

「まだ二人は帰ってきてない。だが生きてはいる。おそらくどこか別のところに飛ばされたのだろう。今お前の仲間の数人が探している」

「けど弥生は闇に！」

「鎖羅がいる。あいつなら闇化を止める方法を見つけられる」

秀斗はそう言われて言い知れぬ安心感に包まれた。すつと肩から力が抜ける。

「それに、弥生が死んでいないのはお前が一番よく分かっているはずだ」

阿修羅の言葉に秀斗は力強く頷いた。秀斗には弥生を感じる事が出来る。

二人の間に沈黙が流れた。秀斗は気まぎれなうしろ向きに俯いていたが、覚悟を決めたように阿修羅と目を合わせる。

「あの、阿修羅さん……あの時は、勝手に出て行ってすみませんでした！」

秀斗はぎゅっと目を瞑って阿修羅に頭を下げる。それは、秀斗が氷騎を出てからずっと気にしていたことだった。

恩を仇で返すようで、心苦しかったのだ。

阿修羅は表情を和らげて、秀斗の頭に手を置いた。驚いた秀斗が顔を上げる。

「お前が元気ならそれでいい」

秀斗はきょとんと阿修羅を見つめ、嬉しさを顔で弾けさせた。子が犬が主人に甘えるように嬉しそうに笑っている。

阿修羅はぐりぐりと頭を撫でまわして、にっと口角を上げた。自信たっぷりな、彼の笑い方。

「それに俺はお前に出て行かれたなど思っていない。散歩させているだけだ。その気になればさっさと連れ戻すからな」

咎めるような口調。だが、それは彼の心とは逆であることを秀斗は知っている。



「弥生を置いては帰れません」

だから安心して自分の思いを語れる。受け止めてくれると分かっているから。

「お前……まだ弥生のことを追いまわしているのか」

先程までの真剣な声とは打って変わり、呆れはてた声だ。

「守ってるんです。阿修羅さんだって、鎖羅が心配だから近くにいたくせに」

秀斗も負けじと言い返す。昔は何度もこのやりとりを繰り返していた。

「愛しいからな。それで、お前はまだフラれ続けているのか？」

秀斗の思いが届かないことは大前提のようだ。

「ほつといてください。阿修羅さんはどうなんですか」

秀斗は拗ねたように口を尖らせて、阿修羅に話をふる。

「現状維持だ」

「え、まだ告白してないんですか？」

「ほつとけ」

昔は日常的だったやりとり。二人の挨拶に似た物だった。二人は

しばらく昔に戻ったように感じていた。

「阿修羅さん……不器用ですもんね」

「生意気だぞ。あまり度が過ぎると閉じ込めるからな」

何処にという目的語を抜いたのはわざとだ。

秀斗は顔をひきつらせて、苦笑いをする。

蘇ってくるのは闇に彼曰く可愛い魔獣と共に閉じ込められ、反省させられた記憶だ。

「冗談です!」

阿修羅は必死な秀斗の顔を見て笑い、ポンポンと頭を軽く叩いて離れた。

「そのヘアバンド、なかなかいい趣味をしている」

「でしょ」

秀斗は嬉しそうにそれに触れた。

彼はこのことについて全て知っているのかもしれない。

彼の目は、過去は映さず、また感情を読むこともできない。だが、全てを色で把握することが出来、それを繋ぎ合わせることで理解するのだ。

これをつけることになった理由。それを知った上で気遣ってくれていると思うと、嬉しくなる。

阿修羅はすつと席を立った。

「俺はお前が起きたとあいつらに伝えに行く」

「どーもでーす」

秀斗が出ていく阿修羅に軽く手を振る。

阿修羅は扉の前で一度振り返った。

「秀斗、お前は弥生を守れよ。それと、弥生が望めばその鍵……返してやれ」

虚を突かれたような秀斗の顔を満足そうに見て、阿修羅は扉を開けて出て行った。

「マジ？　そこまでバレてんの？」

今さらながら、阿修羅を怖いと思った秀斗だった……。

森の中で土を踏む音が聞こえる。たまに人が話す声も混じっている。ザッザと足早に彼女は歩いていった。

「義姉様ちねいさま、一人でも歩ける」

「どの口が言う。さっき立てばふらふらだったではないか」

土を踏む音は一つだけ。鎖羅が大地を踏みしめ、弥生はその背に背負われていた。

弥生は拗ねたように顔を横に向ける。

「でも……」

「妹なら可愛く甘えている」

妹を出されれば弥生は何も言えなくなる。

「あの時見た義姉様は、何だったのだろうか」

弥生は記憶の中で冷たく笑う鎖羅を思い浮かべた。胸がとたんに締め付けられ、傷が痛む。

「さあな。少なくとも我ではない……」

「義姉様ではないなら、いい」

弥生は黙ってその肩口に頬を埋めた。

「……温かい」

久し振りに感じる人の体温。弥生はそれに酔うようにそっと目を閉じる。

「人の傍にいるのもいいものだろうか？」

「……ああ」

鎖羅は屋敷へと歩みを進める。そしてふと、屋敷いるだろう人たちを思い出した。

「そう言えば弥生、お前には仲間がいるのだな」

弥生ははつと目を開けて、鎖羅の横顔を覗いた。その表情は少し不安げに揺れている。

「あの、義姉様……」

その声を聞いて、鎖羅はくすりと笑みを零す。弥生はきよとんと鎖羅の笑い顔を見た。

「安心しろ。お前の仲間に手は出してない……我もさすがにそこまではせぬ」

弥生はほつとして、表情を和らげる。その表情を鎖羅が振り返って見た。鎖羅は口角を上げ、前に向きなおる。

「弥生。お前は強くなったな」

唐突にそう言われて、弥生は目を瞬かせたがすぐに伏せた。

「……義姉様には勝てない」

「技術ではない。お前は昔、自分のためにしか剣を振るえなかった。だが今は、仲間を守るために振るえるようになった」

弥生は仲間と言われて、わずかに照れた表情をする。無言の中で同じ苦しみを分かち、心配の中で弥生の思いを尊重してくれたかけがえない仲間。弥生は彼らの顔を思い浮かべ、無性に会いたくなくなった。さんざん怒られることは目に見えていたが、それさえ嬉しく思える。

「本当に、強くなったな」

鎖羅はしみじみとそう呟いた。

“ 弥生は強い。だが弱い ”

それは鎖羅が秀斗に言った言葉。あの時の弥生は何もかもに怯えて剣を振るっていた。心が置き去りにされ、弱さを隠すために強くなるうとしていた。

怯えしか映さない弥生の剣を心配して鎖羅は剣術を教えたのだ。だが今の弥生は仲間を守ることに對して迷いも怯えもなかった。

「私は、あいつらが好きなんだ……」

弥生は独りごちのようにそう呟き、鎖羅の肩口に頬を埋めた。まるでその表情を悟られまいとするように。

「いい仲間を持ったな」

「……ああ」

鎖羅の体温も、歩く振動も不思議なほど弥生を安心させた。弥生はそっと目をつむる。

(あいつらに、謝らないとな……)

弥生はぼつんとそう思うと同時に眠りへと誘われていった……。

「……寝てしまったか」

鎖羅は急に重くなった背中と、聞こえてくる規則正しい呼吸音が

ら弥生が眠りに落ちたのを感じた。

「まあ無理もないか」

鎖羅は弥生を背負い直すと、まっすぐ屋敷へと向かう。

(なぜ我は弥生をあれほど憎んでいたのだろうか)

あれほど憎んでいたはずなのに、今は微塵も残っていない。

(何か……ひっかかるな)

鳥のさえずりに耳を傾け、違和感を考えながら歩いていると、突然しげみから音がした。

鎖羅はそちらに体を向け警戒する。音はどんどん大きくなり、草が揺れる。続いて人影が見えた。

「やっと見つけたぞ」

背の高い草をかき分けて進んできたのは、鍊魔だった。鎖羅は彼が弥生の仲間だということに気づいて警戒を解く。

だが逆に鍊魔は警戒を強めた。火煉を発現し、弥生の容態を視る。問題がないと分かるやいなや、鎖羅に近づいて弥生を引き受けようとした。

「誰が男に弥生を触らせるか」

だが鎖羅に冷たくあしらわれ、鍊魔は不愉快さを隠さずに言い返す。

「俺としては敵の、まして闇に触れられているのは耐えられんな」

両者の間に火花が散り、一触即発の雰囲気を作られる。

「何を偉そうに」

「俺は医者だ。患者を保護する義務がある」

二人はしばらく睨みあい、やがて鎖羅が折れて弥生を鍊魔に渡した。弥生が好きだと言った仲間を信じてやることにしたのだ。

「大切に扱え」

鍊魔は鎖羅の言い方と弥生の闇化を止めたこと、さらにはここまですべて背負ってきたことに対して、何があったと聞きたかったが意地が邪魔をした。

二人は無言のまま並列になって歩く。弥生は何も知らずに鍊魔の背中で眠ったままだ。

しばらく歩くと、鎖羅が口を開いた。

「お前は医者と言ったな。今回弥生の月の覇動が消えたのは何かの病か？」

鎖羅は真剣な表情でそう訊いた。一方の鍊魔は信じられないものを見る表情で鎖羅の顔を食い入るように見る。

「何も、知らないのか？」

「あ？」



「だから、闇のくせに何も知らないのかと言っている」

鎖羅はふんと鼻を鳴らして嘲笑うかのように言葉を返した。

「それが魔術に関することならば我は全く知らぬ。我は魔術界のことと魔術のことも教わらなかったからな」

鎖羅は暗い部屋でひたすら視えない敵と闘っていた昔を思い出して、不快そうに眉をひそめた。

言葉の奥にある深さに気づいた鍊魔は、苛立たしげに舌打ちをした後、抑揚のない声で話した。

「闇の子という存在を知っているか」

鎖羅は唐突だな、と呟いて記憶を探る。

「あその他の種族でありながら闇の血を引く者のことか？」

「そうだ」

鎖羅はだからなんだと言いたげな表情だったが、すぐにハッと気づいたように目を見開いた。

「……まさか、弥生がそうだと言っのか？」

鍊魔がふつと自嘲気味に笑う。

「弥生だけじゃない……俺たち全員が、だ」

鎖羅ははっと息を飲んだ。つまりは、目の前にいる鍊魔も闇の血

を引いていることになる。その覇動には全く感じられないにも関わらず。

「普通の人には感じ取れないほど微弱な闇だ……だが、確実に俺たちを蝕む。その果てがあれだ」

その内容が何を意味するのか、鎖羅はすぐに理解した。

（だから、弥生はあれほど闇を恐れていたのか……）

鎖羅は口の中で信じられないと呟いた。

「そんなもの、噂話にすぎぬと思っていた……現実に、あったのか」

「ああ。俺たちは純血の家庭に生まれた異端児だ」

鍊魔の闇の子を語る声はどこまでも冷たく、自身さえも見下しているようだった。

「それは、闇が憎いだらう」

「ああ……」

おそらく彼ら全員がもし作為的に自分たちを闇の子にした人物がいれば、すぐにその怒りをぶつけに行っただらう。だが、闇の子は突然変異。怒りは自分たちへ向けるしかなかった。

「……すまぬ、我は何も言えぬ」

鎖羅は辛そうに顔を歪め、視線を落とした。

鍊魔がその表情を見て、わずかに戸惑いの色を見せる。

(これが本当に、あの鎖羅か?)

鍊魔が鎖羅を見たのは一度だけ。あの寒い夜だ。あの時の鎖羅は冷酷さを感じさせ、鍊魔は憎しみを抱いた。これが自分たちを苦しめる闇だと。

だが隣にいる鎖羅は彼の仲間と同じように話をし、同じように表情を変える。

(……ちっ、闇は敵だ。それでいいはずだ)

鍊魔は雑念を振り払おうと一度頭を振り、弥生を上にも背負い直して歩調を速めた。

仲間が待つ屋敷へと……。

暗い部屋に、笑い声が響いた。く、く、くと喉の奥で笑っている。部屋が暗すぎて、人の輪郭は闇に溶けて見えなかった。

(力が漲る。これで魔術が使えるぞ)

男は満足そうな笑みを浮かべて椅子に背を預けた。暗くて分からないが、その椅子は豪華な装飾が施され他より高い位置にあった。

それは玉座。だが装飾華美なそれもその男が座るとなんの不思議もなくその部屋に収まっていた。男の足もとからは絶えず闇が生まれ部屋を満たしていく。

「楽しそうですね」

突然別の声が気配とともにその部屋に降り立った。だいぶ若い男の声だ。

「サクリス、人間界で潜伏していると言ったはずだが？」

「少し暇が出来たので陛下の顔を見に来たのです」

男は彼の主人がいる方へと歩を進めた。視えているかのように階段を上がっていく。そして玉座の前まで近づくと、片膝をついた。

「陛下、いつになれば光を滅ぼせるのですか？ 幹部は俺で最後と聞きましたか」

王と崇められる男は頬杖をついて口角を上げる。

「ああ蛇の頭は揃った。そう焦るな……ロビナシアが目覚めぬことには、な」

「てか、アフランとレガーシアはともかく、影がないんですけど」

男はすぐに口調を砕けさせた。これが彼本来の話し方なのかもしれない。

「あと二人はじきに帰ってくる。影には仕事を任せてある。心配するな。決戦は近い、力を蓄えよ」

「はっ」

男はかしこまって、立ち上がると一礼して階段を下りていく。彼

が部屋から出ていくその瞬間、外からの光が彼の白い髪に反射した  
……。

第3章の18 星と月は闇を鮮やかに彩る（後書き）

なんか出てきたね、怪しい人影……。

次回ついに「エピソード」

第3章 エピローグ(前書き)

5

### 第3章 エピローグ

氷騎のホールで、勇輝はソワソワと行ったり来たりを繰り返していた。何度も腕時計に目を落とし、扉に視線をやる。そしてグルグルとソファアの周りを歩いていく。

「ちょっとは落ちつけ」

秀斗がいらつとした声を勇輝に投げた。

「秀斗だって貧乏ゆすり激しいじゃん」

「うつせえ」

二人はそこで会話を終了させ、勇輝は再び歩き出し、秀斗は膝を揺すった。それを少し呆れ顔で見ているのが零華と癒癒だった。

二人は秀斗の向かいのソファアに座って弥生の帰りを待っている。

「鍊魔の奴遅え……」

秀斗がコップに入った水をぐいっと飲んで扉に目をやった。あの茶色い扉を何度見たか分からない。

「鍊魔君から報告が入ったのはついさっきですよ？」

「私たちもさっき急いでここに戻ってきたんだから、もう少し待ったら？」

「あああ、弥生に会いてえ」



禁断症状のように秀斗が呻き、勢いよく立ちあがった。勇輝の後に続いてソファ―周遊を始める。

「うっとうしさ二倍ね」

「無事なのでですから大人しく待っていていればよろしいのに」

落ち着きなく弥生を待つ彼らを、阿修羅は部屋の端から見ていた。暖炉に背をもたれさせ、蛇の置物を手慰みにする。

四頭全ての蛇の頭に宝石が入り、蛇の眼光の鋭さが増した気がする。

（サクリス……）

阿修羅は乳白色の小さな珠を額に嵌めた蛇を撫でて、その置物を暖炉に戻した。その表情には少し憂いを含み、それは悦楽へと変わる。そして彼はその表情をすっかりとしまつと、視線を彼らに向けた。

「弥生いいい」

秀斗は我慢の限界も近いらしく、せかせかと忙しなく歩き回っている。勇輝は何回も抜かされていた。

そのいらいらは女の子にも伝染しているようで、二人とも顔が陰しくなってくる。

あと少しで爆発するということところで、やっと扉が開いた。開いていく隙間から見えるのは黒、赤、そして銀色。

「弥生いいい！」

秀斗が真つ先に飛び出し、その後を勇輝が追った。

「弥生好きだああ！ 殴らせろ！」

弥生に会えた嬉しさのあまりダイブした秀斗を弥生は避け、鎖羅がその額を闇宵の鞘で打った。

「ぐはっ」

弥生が顔をひきつらせて鎖羅へと顔を向ける。

秀斗は後ろへと飛ばされ、音を立てて床に体を打ちつけた。

「痛ってええ！」

が、すぐに起き上がって鎖羅に猛抗議した。

「鎖羅！ お前何すんだ！ 感動の再会をもっと味わわせろ！」

「うつつうしい。弥生は疲れているのだ、かまうな」

秀斗は誰が疲れさせたんだと言い返したかったが、どうやら二人が和解出来たらしいことに気づき押しとどめる。

「秀……すまなかった。ありがとう、嬉しかった」

弥生は小さな声でぽつぽつと気持ちを伝える。秀斗は嬉しさのあまりぼーっと意識を飛ばした。

「弥生、あまり優しくするとつけあがるぞ」

鎖羅が渋い顔で弥生に注意する。弥生は神妙な顔で頷いた。それを見て、秀斗の恋が成就しない原因は彼女にもある気がしてしまつた彼らだつた。

弥生はすつと視線を上げて彼女の仲間を見る。その表情はいささか硬い。

「おかえり弥生」

なかなか言葉が見つからない弥生に勇輝がにっこり笑いかける。弥生は肩の力を抜いて表情を崩した。空気が動き出す。

「ただいま」

弥生は優しい声でその言葉を口にした。声から表情から嬉しさが滲み出ている。

その言葉に女の子二人もしょうがないか、と笑みを見せる。

「無事でよかつたわ」

「ひやひやしました」

「ああ……すまなかつた」

弥生はゆっくり彼らへと歩いていく。

苦しみを分かち、時には衝突した仲間。弥生は胸の辺りが暖くなるのを感じた。

「みんな……ありがとう。心配かけてすまなかつた」

「かまわん。心配するのも仲間だからな」

錬魔が後ろから弥生の頭に手を置き、ぼんぼんと二度軽く叩いた。お疲れと言つように。

「錬魔……これ、返す」

弥生は錬魔へ体の向きを変え、胸ポケットから指輪の髪留めを取り出した。

「なるほど、だからゴムで留めていたのですか」

「珍しいと思つた」

「え、気付かなかつた」

弥生は錬魔の掌に指輪を乗せた。錬魔はぐつとそれを握り締める。

「やはり髪留はこれがいい」

錬魔はゴムを取り、結び直す。

「な、何だつて！ 錬魔お前抜けがけか？」

秀斗が恋人のような受け渡しを見て、悲鳴じみた声を上げた。

「医者のお務めだ」

「いや無理あるって……」

勇輝はついっつこんでしまい、あつと口に手を当てる。鋭い視線を二人に向けられた。

「錬魔てめえ！俺に喧嘩売ってんのか！」

「勇輝……話をややこしくしたな」

覚えてると言わんばかりに凄まれ、勇輝は一步後じさる。

鎖羅は弥生を取り巻いてわーわー騒ぐ彼らを見て微笑ましそつに目を細めた。

「願いは果たせたか」

満足そつな鎖羅へと阿修羅が歩み寄り声をかけた。鎖羅は阿修羅へと顔を向け、頷く。

「ああ。弥生と闘い、そして再び繋がり合った」

「ほう、それは良かった。……ところで俺は闘いが今日ということを知らなかったんだが、どういうことだ？」

急に阿修羅の声が硬くなり、鎖羅は気まずそつに顔を背ける。

阿修羅は目覚めて外の空気がおかしいことに気づき、不審に思つて外に出たのだ。

「別に、お前に言うほどのことでもないだろ」

阿修羅は無表情で鎖羅を見下ろした。一度視線を戻した鎖羅は再び逸らす。

「俺がどれほど心配し、苦勞したかわかっているのか」

「お前に迷惑をかけた覚えは……」

その言葉を口にした瞬間、隣から静かに怒気が流れだした気がして鎖羅はますますそちらに顔を向けられない。

「お前の情報不足のせいで人間が一人死にかかったぞ？」

そこで鎖羅はやつと合点がいく。先ほどから部屋にいる人間の男の子を疑問に思っていたのだ。

「仲間が増えていたとはな。あの子どもを拾ったのか……。だが悪い拾いものではなかったのだろ？」

鎖羅の含みをもった声に、阿修羅はすっと視線を勇輝に向けた。

「ああ……」

勇輝は嬉しそうに秀斗とじゃれて弥生に話しかけていた。魔術界の常識で言えば、人間と慣れ合うなど言語道断。だが勇輝にはその壁を取り払う力があつた。

（楽しみだ……こいつが如月に入ったことで、流れが変わるかもしれない）

鎖羅は阿修羅をちらつと盗み見て、彼が勇輝を見て少し表情を柔らかくしているのを知ると、彼にしか聞こえない大ききさで言葉を紡ぐ。

「阿修羅……今日目が覚めたら影がいた。ボスが足止めにと寄りこしたと……まさかとは思いが」

鎖羅が言い終わらないうちに、阿修羅が鎖羅の顔の前に手をやった。口にするなという意味だ。

「だが」

阿修羅は視線を空中に固定したまま、そつと口を動かす。

「この件は俺が調べる。お前は動くな、もちろん秀斗と弥生にも何も言つな」

断固とした口調に、鎖羅は押し黙る。一度阿修羅がこう言いだしたら決して引かないことを鎖羅はよく知っていた。

「わかった……」

しびしび鎖羅が引き下がった時、二人は弥生と秀斗がじつとこちらを見ていることに気がついた。その目は何か言いたげだ。

「帰るのか？」

瞳に浮かぶ思いを阿修羅は汲み、問いかける。

「ああ」

秀斗が答え、弥生はこくりと頷いた。二人はもう少しいたそうだったが、今二人は如月だ。目的を果たせば帰らなくていけないのは道理だった。

「道を開いてやる。来い」

鎖羅は彼らを手招きし、片方の手を扉へついた。

「空間よ、我が声に応えよ。我が求めるは如月」

詠唱が終わるとすぐ扉に異空間へ続く穴が出現した。そのあまりの速さに彼らは驚きを隠せない。鎖羅は基本的な詠唱のほとんどを省略した。それだけの力を持っているということだ。おそらく鎖羅ならば空間の名を知らずとも求める空間に渡ることが可能だろう。彼らは入口へと歩いていく。

「秀斗、また遊びに来い」

阿修羅は秀斗にそう声をかける。秀斗は照れたように笑って、頷いた。大切なことをたくさん教えてくれた人に、また会える。自分が望めばいくらでも。

「弥生、次は我が会いに行こう。それと、あまり仲間を困らすなよ……お前たち、二人を頼んだ」

鎖羅は弥生と、弥生の仲間を見てそう言った。魔術師三人が小さく頷き、渡りの空間に足を踏み入れた。

「阿修羅さん、助けてくれてありがとうございます！ 鎖羅さんも、弥生を助けてくれてありがとうございます！」

勇輝が二人に歩み寄って、一礼した。心のこもったその言葉に、二人は目を丸くして苦笑いをする。



「人間ということを忘れるなよ」と鎖羅、

「また会おう、人間の子ども」と阿修羅が返した。

勇輝です、と勇輝は最後にそう言い置いて空間の中に入っていった。そして振り返って二人を待つ。

「阿修羅さん、次は弥生を俺のものにしてますから」

楽しみにしててください、と秀斗は笑う。その頬に冷たい鎖羅の視線が刺さった。

「鎖羅、義姉様……また」

「ああ、また会おう」

弥生と秀斗はなごり惜しそうに、二人をじつと見て、体の向きを変えた。自分たちの居場所、如月へと帰る道に足を踏み入れる。

二人が完全にその空間に入った瞬間、氷騎との接続が切れ扉はただの扉に戻った。

「静かになつたな」

鎖羅がぼつんと呟く。阿修羅は鎖羅の頭に手を置いて、自分へと引き寄せた。

「寂しいなら泣くか？」

意地の悪い阿修羅の声に、鎖羅はむっとして阿修羅の足を踏みつ

けた。

「寂しくなどない。我は、幸せだ」

鎖羅が扉を開けて、自室へと帰る。それを阿修羅は微笑みを浮かべて見送ったのだった。

来た時と同じような空間を彼らは歩いた。光が射し込んでいる場所を目指して歩く。

勇輝は先ほどの弥生と秀斗の表情を思い出した。寂しそうでありながら、どこか強い前向きな気持ちが表れていた。

（また俺は足でまといだった）

勇輝は首からぶら下がっているお守りに目を落とす。そこには六つの紡命珠がきれいに並んでいた。

（俺はいつも助けてもらってばっかだ）

勇輝は前をいく三人を見ながら、後ろを歩く二人の存在に気をつける。

（みんな闘おうとしたのに、俺は何もできなかった）

勇輝は悔しくて拳をぐっと握る。勇輝は人間で、人外の敵と渡り合うことが難しいのはよく分かっていた。だが、それでも彼らと共に戦いたいと願ってしまう。

(強くなりたい……後ろで見ているなんて、嫌だ)

本気で仲間と思っているから、自分も役に立ちたいと願う。それがどんな些細なこととしても。

「出口よ」

癒慰がそう告げて、足を外に踏み出した。

勇輝も光の外へと出る。そこは行く時と同じく玄関だった。

全員が外に出ると、道は自動的に消滅する。

勇輝は深呼吸をして、如月を感じる。半日ほどしか経っていないのに、永い時間が流れた気がした。

「ただいま」

勇輝が如月に向けてそう呟く。他の五人も心の中で同じ言葉を呟いた。

帰って来たのだ。彼らの家に。

そして、ほっと気を緩めてそれぞれの部屋へと歩み出した彼らに向けて、零華が微笑とともにこう告げた。

「……みなさん、二週間後テストだということを、ご存知ですか？」

前を歩いていた五人が動きを止め、そして何も無かったかのように再び歩き出した。

「二週間前だろ？ よゆうだった」

勇輝は呑気に笑う。いつも一夜漬けで乗り切ってきた実績がある。

「赤点が何を言いますか」

ぱつさりと切り捨てられて勇輝はうつと呻いた。真面目にこの学期を思い返すとほとんど授業に出ていなかった気がする。

「正直テストなんて意味ねえって」

秀斗がぱたぱたと手を振ってテスト拒絶の意を表した。勇輝はそれに大賛成。

「そうですね、では秀斗君だけ留年してもらいましょう」

「リニューネンって何？」

「秀斗だけもう一回二年生をやるってこと」

きよとんと疑問符を浮かべる秀斗に、隣を歩く勇輝が教えた。一年の時に早くも留年が危ぶまれた留年候補だった。

「勇輝君、貴方もですよ？」

やんわりと零華に指摘され、勇輝は視線を明後日の方へと向ける。

「明日から特別に補修をしてあげますから、秀斗君、勇輝君、そして弥生ちゃんもは受けてくださいね」

「何故私もなんだ？」

「あら……三学期、ほとんど学校に来ていないのはどこのどなたでしようか」

この言葉を微笑のまま言うのだからことさら怖い。

弥生もその笑みにやられてしびしび頷く。

テストが終われば春休み。そして無事に新級できれば春からは三年である。

「さあ、頑張つて勉強しましょうか」

その言葉に、誰もおーと返さなかったのは言うまでもない……。

### 第3章 エピローグ（後書き）

いえい。

というわけで、三章はこれにて終了でございます。ここまで読んでくださった方がた、どうもありがとうございます。

一つの山場だった三章が終わって作者は肩の荷が下りた気分です。シリアスにここまで力を割いたのも初めてでした。至らぬところも多いですね……。精進精進。

さて、次は第四章となります。次はさまざまな時系列が混ざった章になりそうです。一言で申しますと、伏線の回収作業でございます。気楽なノリで、ネタばらしもしつつ、次章を進めたいと思います。

では次回「第四章 プロローグ」で。

第4章 プロローグ(前書き)

4

## 第4章 プロローグ

どうして私はこんなに不幸なんだろうって、ずっと考えてた。暗くて、狭い牢の中でずっと考えてた。

私が悪いことをして、捕まってしまったの？ 私は何もしてない、してないのに。

母親は、私を見ようとしなかった。近づくと叩かれた。何度も殺されかけた。母親の顔は恐怖と憎悪に満ちていて、ヒステリックに何かを叫んでいた。

私はそれを覚えていない。聞こえないふりをして、記憶から消したから。

どうして？ どうして？ ずっと自分にそう問いかけた。私が悪いの？ 全部、私のせい？

“君さえ生まれなかったら、誰も死ぬことはなかったのさ”

牢の前に立った男は短剣を投げ入れた。血のついた短剣。誰の血か、考えてはいけない。

だけど母親は、嬉しそうにその短剣にすり寄って、自分の喉を刺した。

“あーあ、死んじゃったよ。よっぽど闇の子を産んだのが辛かったんだ……”

母は恍惚とした顔で目を閉じた。私は何もできずにただ見ているだけで。



ただ、ただ自分を責めた。

私が闇の血をひいて生まれてしまったせいで、母はその命を絶った。そしてこの男は、私の家族を殺した。私のせい。私の……。

死んでしまおうと思った。母に死を与えたその短剣で、私も喉を貫こうと思った。

だけど、できなかつた。この、血のせいで。

私が死ねば、どうなるか、知っていたから。

この血を持って生まれてしまったせいで、私は死にたくても死ねない。私はこの国が好きだから。この、花が咲き誇るソートテイラデyna王国が大好きだから。

私を苦しめるのは何？ どうして私は何もかもを失うの？ 何がいけないの？

そうよ。全部悪いのはこの血じゃない。

この、闇の血じゃない！

そして気づいたら、私は知らない場所にいた。

私は闇が嫌い。闇が全てを奪ったから。

闇は……嫌い！

## 第4章 プロローグ（後書き）

また、なんか暗いかも……？

いえ、まさか。四章はコメディーで行きますよ！

一つの、スパイスです。

第4章の1 ニジウツのがいいんだよな(前書き)

3

## 第4章の1 二つうちのいいんだよな

テストが終わって春休みに入った。零華の鬼補修のおかげで全員赤点はなく、留年を免れた。それどころか全員十点以上アップというすばらしい特典つき。

零華は自分の勉強時間を削ったにも関わらず、全教科九割を取ったというのだから強者である。

そんな彼らは今、食堂にいた。食事時ではない。いつも以上に椅子を近くに寄せ、何やら真剣に話をしている。長机には各自一枚紙を置いており、何やら会議でも始まりそうだ。

真剣な表情でその紙を見ている彼らのうちの一人、零華が口火を切った。

「さて、どうしましょうか」

頭脳明晰で常に正しい選択をする彼女が珍しく悩んでいた。それは他のみんなも同じようである。

「進路って、どうすればいいのでしょうか……」

長机の上に置かれた紙。それは、二年になるにあたっての進路希望調査であった。

「俺、大学行く気ないしな」

ボールペンを片手に勇輝は背中を背もたれに預けて天井を見上げる。

「大学って？」

ボールペンの芯の出し入れを繰り返していた秀斗が尋ねる。異世界出身の彼に大学の知識はなかった。

「高校の上にある教育機関です。今の日本は大学を出ないと就職がありません」

博識な零華が答える。その言葉に勇輝はさらに頭を悩ませた。確かに高卒で就職といってもいい仕事なんてない。しかも不良とくれば鳶職人にもなるか……。

「なら私たち就職になるんじゃない？ 現に今働いてるわけだし」

「でも就職希望欄に龍牙隊とは、書けないしな」

しかも暗殺専門部隊なんて、ペンが勝手に走りだしても書けない。

「出さなければいいのでは？」

弥生が極論を述べる。彼女は面倒なのかペンすら持っていない。

「だが、進級するにあたって大切なことだと葉月は言ってたぞ？」

鍊魔はそう言って紙に視線を落とす。だが何を書けばいいのかさっぱり分からない。

「よし、まずは名前を書こう」

勇輝は一度現実逃避をするために名前の欄を埋め始めた。彼らもそれにならって書きだそうとするが、零華以外の手が止まった。

「ねえ、私の苗字ってなんだっけ」

「誰か俺の苗字知らね？」

弥生と錬魔は無言で視線を零華に送る。

零華はそんな彼らに溜息をついて、紙からペンを離す。自分の名前は記入済みだ。

「何で自分の苗字を忘れるんですか？」

「だって、本名じゃねえし。勝手につけた苗字なんて忘れるに決まってるだろ」

秀斗が唇を尖らせて反論する。それに零華はもう一度溜息をついた。

「しょうがないですね……。私から左回りに大宮秀斗、城崎弥生、堺癒慰、河野錬魔です」

次々に上げられる名前に、そういえばそうだったなと彼らは自分の紙に記入した。

「秀斗たちって苗字ないの？」

「ああ。俺らの世界では苗字なんてもんは貴族とかしか持ってねえ」

へえ、と勇輝は今さらながら彼らが異世界人だったことを強く感じる。普段はそんな違和感が全くないのだ。

なぜ彼らがこれほど馴染んでいるのか考えて、はたと勇輝は気づ

いた。

「もしかして、名前の方も偽名？」

「なんで？」

ペンを回しながら秀斗が訊き返す。

「だってさ、異世界ってカタカナの名前じゃん、フツー」

零華と癒慰はファンタジー小説の読みすぎよとつつこみたかったがあえて黙っておくことにした。当たらずとも遠からずだからだ。

「まあ、確かに私たちの名前は、異世界っぽくはありませんね」

「でも本名だよ？ 漢字も全部」

「え、意外」

勇輝は中世ヨーロッパの異世界を想像していたらしく、残念そうにペンを机の上に投げ出した。

「でも、俺のばあさんの名前はクリスティーナだったぜ？」

勇輝は秀斗の祖母クリスティーナを想像した。

（金髪で、クリスティーナっぽくて……秀斗のお祖母ちゃん）

勇輝はまず秀斗の頭に鬘を乗せ、目を大きくしてみた。そして口紅を引いて眼尻にしわをつける。

なかなか、おもしろいものができた。

勇輝は想像の秀斗のお婆さんバージョンに声を殺して笑う。身は震え、握りしめた拳で自分の太ももを叩く。

「つく、クリステイーナ」

そんな勇輝を見て、何を想像したのかすぐにわかった秀斗は勇輝の首に手を回して締め上げる。

「何笑ってやがんだ！」

「だっておもしろ……うっ、ぎ、ギブ！ く、苦しい……」

勇輝は首を絞めている秀斗の腕を叩いて降参を伝えるが、秀斗はいつこうに離さない。

「それは流行りです」

零華は目の前で行われている危険なじゃれあいを無視して話を続ける。勇輝はもがきながらも耳をそちらに向けた。

「私たちの世界ではおよそ二百年に一度の割合で名前の流行が変わるのです。人間界と人の行き来はありませんが、文化を吸収することは可能ですから様々な国の文化が混ざり合っています。その中で今は日本風の名前が流行り、私たちはその世代なのです」

勇輝は興味深々といった様子でへえと繰り返していた。

「いいな、俺みんなの国に行ってみたい。どんなところなの？」



勇輝はつきつきと椅子の上で体を左右に揺らした。その様子を見て彼らは互いに顔を見合わせる。

「えっと、話せてこと？」

癒慰の問いかけに、勇輝はうんと大きく頷いた。

「別に、みんなが嫌だって言うならいいけど……」

それに加えて少し顎を引き、上目づかいになってしおらしさも表現する。この可愛い顔の有効的な使い方である。

その顔に良心を刺激された彼らは視線を交錯させ、無言の内に順番を決めた。零華から右回りということになった。

「仕方ありませんね……」

最初の進路希望調査からものすごく脱線しているが、勇輝にうるうるようお願いされては逆らえなかった。勇輝は心の中でガッツポーズをする。

「ではまず私の国からお話ししましょうか。えっとですね、私の国はアクアディナ王国と言います。水の力を持つ人々が住んでいて、水の豊かな国ですね。あとは……魔術の研究が進んでいるかと、まあ過ごしやすい国でしたね」

簡単に零華がまとめると、視線を目の前にいる錬魔に注ぐ。バトンタッチだ。

錬魔はしばし考えた後、ゆっくりと話した。

「……俺の国は、ディオフィルメイト王国、火の国だ。国土は暑い。

砂漠と熱帯雨林がほとんどで、常夏だったな。特徴と言えば、医療に熱心な国だ」

勇輝はへえとずっと頷いている。そして話者は癒慰へと移った。

「えっと、私の国はソートティラディナ王国で、土の国。四季があつて、庭園とかがたくさんあるわ。どこかで花が咲いてる国よ。後ね……芸術が盛んで家具とかが有名だったと思う。はい、バトンタツチ」

と、癒慰は弥生の肩に手を置いた。その弥生は難しい顔をして宙を睨んでいる。

「私の国は、ルナクレア王国で月の国なのだが……。私はよくこの国を覚えていない。ただ、寒い時期はあったと思う。農業もあった。それと……山賊は多かったな」

弥生は記憶を探りながらポツリポツリと話す。勇輝は最後の一言で表情を硬くした。

(えっと、もしかして弥生は昔から誰かとやりあってたってこと?)

弥生らしいと言えば弥生らしいが……。

「えっと、治安が悪いんだね」

勇輝はそれだけ言うと、顔を横に向けた。残るは勇輝の隣にいる秀斗だ。

「俺の国は、ステラグニョール王国で星だな。国土はほとんど草原

で遊牧民が暮らしてる。街は一つだけだったな。特産ってわけじゃねえけど、獣の調教が一つの売りだった」

秀斗は懐かしそうに目を細める。草原で騎獣に乗って風に吹かれるのはたまらなく気持ちがよかった。

「全部違うんだ。おもしろ。いいな、行ってみたい。一体どんな食べ物があるんだろ」

勇輝は目をキラキラさせて、脳内旅行中だ。

それを見て彼らは複雑そうな表情を浮かべた。

「食べものかよ」

秀斗がつつこんで勇輝は脳内旅行から帰還する。

「他に何があんのさ」

彼らはクスクスと笑い、空気が和やかなものになる。

みんなに笑われてちよつと拗ねた勇輝は、弥生の表情を見てポカんと大口を開けた。失礼だが指を指してしまう。

「弥生が……笑った」

その言葉を言った勇輝の顔は、天変地異でも起こったようだ。

忍び笑いをしていた弥生はすつと無表情に戻って勇輝に視線を移した。

「失礼な奴だな。私だって笑うことぐらいある」

「弥生は笑うともっと可愛いよな」

反論する弥生を秀斗が茶化し、次の瞬間には秀斗の目の前に短剣の刃が迫っている。

実に和やかな風景だった。ちなみにこの短剣は月契が治るまでの臨時だ。

「うん可愛い。ずっと笑ってたほうがいいな」

勇輝は目の前で友人が命の危機に瀕していることは気にせず同意した。

弥生はしばし無表情で勇輝を見つめる。睨みに近いその眼差しに勇輝は切り札、無邪気な笑顔を繰り出した。もう一段階上になると、背後に人を和ませる幼稚園児が書いたお花が飛ぶ。

やがて弥生は舌打ちをして短剣を鞘に納めて上着の内ポケットにしまう。

そして話を聞けて大満足の勇輝はふと手元にある紙へと目を落とした。あっと、短く呟く。

「結局これどうしょっか」

やっと話が最初の路線に戻った。問題は何一つ解決していない。

「もう就職でよくね？ だって見るのあの葉月だろ？ じゃあ如月って書いていても問題ねえって」

考える気ゼロの秀斗がなげやりにそう提案する。確かにそれもよさそうだが……。

「でも葉月センサー三年でも俺らの担任が分かんないし」

彼が本当に教師として学校に来たのなら異動だってあるかもしれない。

「マジ？ 葉月じゃなくなんのか？」

秀斗はあからさまに嬉しそうな様子で勇輝に訊く。

「いや……断定はできないけど」

勇輝は実はよく知らない同じ隊の先輩兼担任を思い浮かべた。彼なら何だかんだで担任の椅子にとどまっていそうな気がするのは何故だろうか……。

「あ、そう言えばさあ、うちの隊って表で会社やってるよね。その名前書けば？」

癒慰がはたと思いだしたようにそう提案する。勇輝はそう言えばそんな気も……と臆げな記憶を探った。

「ええ、確か……龍ヶ崎商社だったと思います」

キャッチコピーは小さなことから大きなことまで何でもやります、龍牙峰商社である。

事実、落とし者探索から夫の浮気調査、果ては国家要人の用心棒から国家スパイまで何でもやっている。

「じゃあそれでオツケーってことで」

勇輝はさらさらと空欄にその会社名を書き込むとペンを置いた。  
残る彼らも進路を書き込む。

「よっしゃ、これで進路希望調査とやらは終わったと。後は、新学期まで遊ぶだけだぜ！」

秀斗はさっそく席から立ち上がり、飲みに行ってくるゝと部屋から飛び出して行った。

口ぶりから酒を飲みに行くらいしが今はお日さま元気な午前中。一体何所に飲みに行くつもりなのか……。

「どこ行つたの？」

「おそらく本部でしょう。適当に時間つぶして適当な人を連れて行って、適当に飲んで帰ってきますよ」

零華がさらりとの確な答えを勇輝に与えた。  
連れまわされる隊員は気の毒ではあるが……。

「カフェインさえ摂らなければいいけど」

「被害に遭うのは私たちじゃないから、別にベロンベロンに酔っぱらってもいいけどね」

癒慰はそう言う立ち上がりて歩きだした。向かう先は厨房。昼食の準備をしなくてはいけない。

「あ、俺も手伝う」

勇輝は本日の昼食当番である癒慰の後ろにくっついて行った。

二人の後姿を零華は微笑んで見送った。残る二人もじつとドアが閉まるまで後姿を眺めていた。

「こういう穏やかな時間は久しぶりですね」

三人になった食堂に、和やかな零華の声が響く。

「こういうのも悪くない」

弥生は表情を柔らかくしてそう呟いた。まだぎこちない表情だが、じきに自然な笑みに変わるだろう。

零華と鍊魔はそんな弥生の変化を驚きと嬉しさが混じった気持で見ている。弥生を変えたのは鎖羅。鎖羅という闇の魔術師。

二人はほぼ同時に闇という単語を心の中で呟いた。

自分の中には闇の血が流れている。この血が、彼らの運命を狂わせ続けた。

こんこんと、まだ闇の血は眠り続けている……。

#### 第4章の1 「つづいてのがいいんだよな（後書き）

四章のテーマは闇、とワイワイガヤガヤ。

会話文も多くなるでしょう。

では次回「姉は強し」で。



第4章の2 姉は強し(前書き)

2

## 第4章の2 姉は強し

弥生はベッドから起き上がり、深く息を吸い込んだ。三日ぶりにまともな睡眠を取り、体の調子もだいぶ戻って来た。

一度消えかけた月の力がゆっくりと、着実に戻っている。

弥生は寝ぐせ一つない髪を櫛で梳かす。服を着替え（と言っても同じ隊員服だが）、自分の姿を鏡で確認した。

銀の髪は艶やかで、月の光が零れたよう。彼女の義姉が好きだといった色だ。

弥生は鏡の自分に微笑むと、右手をすつと前に出した。顔を引き締め、自分の力を意識する。ゆらゆらと揺れる力は次第に自分の中で形を変えていく。

「我が声に応えよ。月契」

自分が愛する剣の形を思い浮かべたと同時に、その手に確かな感触が現れる。何十年もの歳月を共にし、手に馴染んだ愛剣。一度砕けたそれが、再びその姿を現した。

「月契。この間はすまなかった……お前に無理をさせていたのだから……もう一度、私と闘ってくれるか？」

弥生は光を反射する刀身に視線を注ぐ。

“貴は、よい顔をしている。今の貴ならば、我は喜んで刃となろう”

月契の厳かな声が弥生の脳裏に響き、弥生は自身が映る刀身をそっと撫でた。

「ありがとう……月契」

弥生は月契の具現化を解くと、ふと思い出したように机へと向かった。一番上の抽斗を開けて、鍵を取り出す。

（久しぶりに、やりたくなつたな）

弥生はその鍵をしっかりと掌に握ると、踵を返して部屋から出て行った。向かう先はしばらく放置していた弥生のもう一つの部屋だった……。

勇輝はホールでソファーにもたれてゲームをしていた。そのうちごろつと横になり、もぞもぞと色々な態勢でゲームをし始める。

勇輝はこれを、朝食を食べ終えてからずっと続けており、すでに二時間が経過していた。

「……よく飽きませんね」

呆れた声がやや離れた所から聞こえた。

「だって楽しいし」

勇輝はそちらに視線を向けずに答える。口を動かさず、その倍の速さで手を動かす。現在突如出現したミニゲーム中である。

「ゲームって子どもの発達にあまり良くないんじゃないの？」

癒慰の声もいつもより少し遠い。いつもなら勇輝のソファーの前に座っていたはずだ。そして優雅にティータイムを楽しんでいるこ

とだろう。

「迷信だってそんなん」

「しかし、確実に勉強時間は無くなっていますよね」

しかし今日は二人の声が少し遠い。

勇輝は不思議になってゲームを一度止めるとソファから顔を出した。そして、パカッと口を開ける。

「え……どーゆーこと？」

二人は少し離れた所にいた。勇輝は癒慰のフリル多様ロリータに目を見開いたのではない。そんなものはもう慣れた。

問題は彼女たちの場所。彼女達は椅子に座っている。このホールにはソファとそれとセットの高さバラバラの机がなく、椅子はなかった。しかも、そこそこの高さがある丸テーブルなど見たことがない。

丸テーブルと椅子のセットが計三つ突如ホールの一角に出来ていた。

「いいでしょ。ソファでお茶ってずっとやりたくいって思ってたのよね」

「なので、この間秀斗くんが屋敷を壊した罰として買ってもらいました。ついでに暖炉前には絨毯を引いたので寝転べるようになりましたよ」

勇輝は少し視線を右にやった。何かすっきりしていると思えばソファがなくなつて絨毯が出現している。これが出来たことでホー

ルは暖炉を中心に右がソファ、左が椅子とくつきり分かれた。

「ちなみに土足厳禁よ。ほんとに畳が欲しかったんだけど、ここには合わないしね」

裸足に憧れるわ、と言う癒慰は可愛いスリッパを履いていた。犬の顔がついたフワフワスリッパである。

「確かに、ここ基本靴だもんな」

純日本人の勇輝は慣れるまで時間がかかった。裸足の開放感を味わうためにサンダルにしようかと思案中だ。

「一回、裸足で畳を歩いてみたいですね」

「……いつそ買えば？ 日本家屋」

「あ、それいいかも」

言うてから勇輝はあつと思った。なんだか彼女たちなら本当にやりそうな気がしたのだ。

実際それだけの資産はあるのだが……。

「如月の別荘として考えておきましょう」

本気にされて、冗談半分だった勇輝は半笑いを浮かべた。

「じゃなくてだ」

勇輝は突然何も無い空間に手刀を入れ、会話を切る。女の子二人

が何？ という顔をする。

「俺が言いたかったのはさ、いつの間に模様替えがあったのかってことだよ」

普通に模様替えされていたら、ホールに入った時に気がつく。だが勇輝が一番に来た時はソファアばかりだった。それがゲームをしているうちに変わったのである。音もせずに。

「そんなの勇輝君がゲームしてる間に決まってるじゃん」

「熱中されていたので、物音をたてては悪いと少々術を使いました」

そう説明されればそうかと納得するしかない。魔術とはそういうものだ。これに関してあれこれ考えても無駄だということは、勇輝は十分思い知っていた。

「まあ、いいや」

勇輝が再びソファアに横になってゲームを始めた時、扉が開いて秀斗と錬魔が入って来た。

「おはよ、二人が一緒ってあんまりないよな」

勇輝はひょいっと顔をあげて珍しくと呟く。

「そこであつたんだ……って、どうしたんだそれ」

「模様替えをしたのか」

二人して驚き顔だ。鍊魔はともかくなぜ秀斗も？ と勇輝が思っている、

「欲しかったので買いました。後、代金は秀斗君の口座から落ちるようにはしましたので」

と零華がほほ笑みを添えて秀斗へ言葉の手榴弾を投げた。

「なんで俺？」

ドカーンとそれは秀斗の頭で爆発し、さらに目が見開かれる。

「この間屋敷を壊した罰です」

「修理費俺が払ったじゃねえか！」

「それとこれとは別」

癒慰が楽しげに笑い、カップの酒を一口飲む。本日の種類はワイン。彼女たちにとってはお茶と言うよりジュースらしいが……。

(てか、秀斗に無断で買ったんだ、あれ)

勇輝は同情の眼差しを秀斗に送り、それを受け取った秀斗は涙ぐむ演技をしつつ勇輝の向かいのソファに座る。鍊魔は勇輝の右手にある一人用のソファに座った。

「で、お前は何やってんだ？」

「ゲーム。スパイになって敵地に侵入すんの」

「へー」

秀斗は適当に返事をすると、ごろつと横になる。鍊魔は特に何を  
するでもなく頬杖をついて空を見つめていた。

そして時が過ぎ、勇輝があやつる主人公が最後の機密文書を手に  
入れた時、扉が開いて弥生が入って来た。

勇輝は弥生の反応が気になって、セーブをして電源を落とす。

「弥生おはよー」

「おはよ、弥生。今日も愛してるぜ！」

弥生は勇輝には視線を合わせて応え、秀斗は無視する。

だが秀斗はめげずに今日もいつもどおりだなと満足げだ。朝の告  
白は彼の習慣になっており、これに対する弥生の反応で彼女の機嫌  
が分かるらしい。

曰く、無視されたら普通。月契を突き立てられたり短剣を投げら  
れたりしたら不機嫌。そして視線を合わせてくれたら上機嫌。さら  
に言葉を返せば、秀斗は失神するそうだ。

弥生は鍊魔の前で止まると、その手に握っていた玉を突き出した。  
それは野球ボールほどの大きさで、淡い赤色をしている。

「これに力を補充してくれ」

「……ああ。魔術の開発を再開したのか」

鍊魔は少し驚きつつ、それを受け取った。

「ああ。なんだかやりたくなってるな」



「それ何？」

勇輝が身を起して、その玉に視線を注ぐ。

「これは紡命珠の一種だ。お前のものには力を守護として封じてあるが、これはただ留めているだけだ」

勇輝は大きくはてなマークを頭の上に浮かべた。違いは分かったが意図が分からない。

「勇輝君。魔術はそれぞれの元素が合わさって発動するということを覚えてますか？」

零華の問いかけに、勇輝は自身の記憶を探る。そう言われれば、昂乱との騒動でそういうことを言っていた気もする。

「一応」

「それは元素さえあれば新たに術を編み出すことも可能ということですよ。弥生ちゃんも魔術を新しく創ることが得意なのです」

勇輝はへえと視線を玉へ戻した。それは先ほどよりも赤くなっている。錬魔が力を込め直しているのだ。

「ねえ弥生。今どんな術創ってんの？」

勇輝が興味本位で訊いてみると、玉が赤みを帯びていく様子を見ていた弥生が振り返って答えた。

「人の体を小さくする魔術だ。幼児化とも言っな」

「……それ何に役立つの？」

弥生がそれを闘いの場で使うイメージがつかない。

「敵地侵入や要人誘拐に役立つと、癒慰が言っていた」

「それ、ずいぶん前の話だけどね」

それも十年単位の昔、まだ彼らの任務に物騒なものが多かった時代の話である。

「へー」

勇輝は少し彼らの小さくなった姿を思い浮かべて、口元を緩めた。美形な彼らだ。必ず可愛いに違いない。

「その術完成したら見せてよ」

「ああ。お前に一番にかけてやる」

しごく真面目な顔で弥生が答えたので、勇輝は墓穴を掘ったと冷や汗をかく。

「俺も見えてえな、勇輝のチビ姿」

寝転びながら、けたけた笑う秀斗に勇輝は護身用の麻醉銃を向ける。今日は朝に早撃ちの鍛錬をしたので腰につるしたままだったのだ。

秀斗は顔色を変えて慌てて手をあげる。

「お前！　そうやって何でも脅せばいいと思うなよ！」

勇輝はにっと笑って、銃をしまう。だいぶ如月らしい性格になった勇輝だった。

秀斗がぶすつとした顔で身を起こした時、扉が開いた。彼らは音につられてそちらに顔を向ける。このホールに如月全員がいる。さらに人が入ってこれは秀斗がその存在を察知できるはずだ。にも関わらず扉は開き、人影が見える。

その人物はホールへと足を踏み入れ、物珍しそうに辺りを見回した。

「鎖羅ねえ義姉様！」

嬉しそうに弾んだ声は弥生のもので、すぐに彼女に駆け寄った。

鎖羅は弥生の姿を認めると、相好を崩し姉の表情を見せる。

「弥生、だいぶ調子が戻ったようだな。銀の色が美しい」

そう言って鎖羅は弥生の頭を撫でた。

その様子にもも知らない四人は固まった。

「姉様って、何？」

と、癒慰が目をパチクリとさせ、

「あれ、弥生ちゃんですか？」

と、零華はこの世の終わりだとも言いたそうな顔をした。

勇輝はただただポカンとその光景に見入り、鍊魔は複雑そうな表情を浮かべている。

「言っただろ？ 弥生は鎖羅のことを姉と慕ってたって」

確かに言っただが、彼らはそれを比喻だと思っていたのだ。

「義姉様、来てくれたんだな」

「約束したではないか」

しかも一匹狼で問題児の弥生が、他人に甘えている。それもデレデレに。

「どうすればあの弥生をあそこまで手懐けられるんだ？」

鍊魔の言い方は少々酷いが、そう言いたくなるのも分からなくはない。

「てか、あの二人ってついこないだまで憎みあってたはずじゃ？」

勇輝も物珍しげにまじまじと可愛い弥生を見る。ここにきて新たな一面を知った。

「もともと仲良かったからなく、誤解が解ければ元に戻るのも早いって」

秀斗はよかったよかったと頷いている。その隣で魔術師三人はやや険しい顔をしていた。

「鎖羅義姉様、今日は何をするんだ？ 剣の稽古か？」

弥生の目が輝いている。鎖羅はそれを見てくすりと笑った。

「いや、今日はただ話しに来たのだ。なあ弥生、ところで義は余計だと言わなかったか？」

にっこりと鎖羅は笑っているが、その笑みは刃に似ている。弥生は表情を硬くし、あっと呟いた。その言葉は、弥生が鎖羅と義姉妹の契りを交わした時にしつこく言われたことだった。

「な、なんでそんなことが分かるんだ？ 鎖羅姉様」

今度は気持の中で義をつけずに呼んだ。鎖羅は満足そうに目を細める。

「ニューアンスだ」

鎖羅ははつきりと断言し、弥生の腕を掴んだ。

「お前たち、少々弥生を借りるぞ」

鎖羅は後ろで呆然と見ていた彼らに声をかけて、ずいずいと弥生を引っ張って扉から出て行った。

鍊魔はついつと自分の手の内にある玉に目を落とした。渡しそびれてしまったのだ。

「……何、なの？」

戸惑いと苛立ちを含んだ癒慰の音が、ホールに吸い込まれていっ

た……。

鎖羅は弥生の部屋を見て、しばし無言だった。弥生も部屋に招いた方がいいものの、それから先どうすればいいのか分からず黙ったままだ。

弥生の部屋には相変わらず物が無い。正面に出窓があり、その手前に机と椅子のセット。

机の上には本が積まれている。広い部屋の端に、肩身の狭そうなベツドが置いてある。

その他、本棚が複数あるだけの空間の広さを感じずにはいられない部屋だ。

鎖羅はこれが年頃の女の子の部屋だろうか、と思ったが口には出さなかった。自分を振り返れば、あまり可愛い部屋とは言えない。弥生よりは少し生活しやすいシンプルな部屋だ。

「弥生…… そうだな。ソファは一つくらいあった方がいいぞ」

「私もそう思った」

弥生は客に対する心遣いを覚えた。

ひとまず弥生は出窓に腰掛け、鎖羅が机に腰をかけた。そうすると視線が同じくらいになる。

どんなことを話そうかと二人が考えていると、壁の写真が鎖羅の目に留まった。

五人の少年少女が映った写真で、どれも顔に見覚えがある。

「これはお前たちか」

若干子どもっぽい顔をしており、中央に弥生がいる。相変わらずの無表情だ。それとは対照的に隣で秀斗が満面の笑みを見せてVサインをしている。

「ん？ ああ……それは如月を結成した時の写真で、無理やり撮らせられたんだ」

思えばこの頃はまだ互いのことをよく知らず、知ろうともしなかった。

(ずいぶん、昔になるのだな)

「弥生、この三人はどういう奴なのだ？」

鎖羅は秀斗と弥生の後ろに立っている三人を指さしながら尋ねる。鎖羅の問いに、弥生はしばらく答えを探していた。なかなか自分の仲間を言葉で表すのは難しい。

「……そうだな。零華は頭が切れる。物腰は柔らかいが、怒ると怖い」

鎖羅はほおと面白そうに相槌を打つ。物おじしない弥生に怖いと言わせる零華に興味がわく。

「あと、魔術が上手い。それと錬魔は無口で無愛想だが腕のいい医者だ」

鎖羅はくっつかかって来た赤髪の医者进行を思い出した。確かに彼は無愛想な弥生に言われるほど無愛想だった。

「癒慰はいつも変なかつこうをしているが、淹れるお茶は美味しい。あと、よくしゃべる」

「たしかに、先ほどもおもしろい格好をしていたな。しかし茶か…  
…しばらく飲んでいないな」

たまに人間界で調達した酒をグラスに入れて飲むが、面倒なのであまり凝ったものはない。ほとんどが水で済ませていた。

「なら、淹れよう。私も久しぶりに茶を飲みたい」

即断即決の弥生は、ひょいっと窓から下りて鎖羅の答えも聞かずにドアから出て行った。

「まったく……」

鎖羅はあきれ顔で視線を写真に戻す。

(まだあの人間のことを聞いていないではないか……ん?)

鎖羅はふとその写真が重なっていることに気がついた。ほんのわずかに白い淵が出ている。

鎖羅は罪悪感に駆られながらも、好奇心に勝てず小さな額をひっくり返して開けた。

「……誰だ？」

鎖羅はその写真を見るとすぐに直して額を元通りにつけ直した。

そこに写っていたのは二人。一人は紛れもなく弥生だったが、もう一人は推測すらできなかった。それほど小さな命。



(これは、そっとしておいたほうがよさそうだ)

わずかにうずく好奇心を殺して、鎖羅は静かに弥生を待つことにした。にわかには悔しさに似た感情が胸に湧きおこる。

自分が知らない弥生の時間があったという事実。そして成長する弥生を見られなかった歯がゆさ。

鎖羅は困ったような複雑な笑みを浮かべた。

「さて、妹はこれほど厄介なものだったか？」

その一方で、厨房では弥生がやや困った顔をしていた。厨房の一角は癒慰の占有スペースになっており、そこに様々な茶器や魔術師用のお茶が入っている。

それらを目の前に、弥生は迷っていた。

(さっぱりやり方がわからん)

いつもは気づけば癒慰が茶を選び、最適の飲みかたで出してくれた。

ひとまず弥生は手当たり次第にティーポットに入れてみた。手に取ったのはビール、泡盛、梅酒。これらがブレンドされ、火にかけられようとしていた。

「何やってんの？」

今まさに火をつけようとしたその時、顔面蒼白の癒慰にその手を

掴まれた。癒慰は昼食の準備をしに来たところ、この衝撃の場面に遭遇したのだ。

「あ、癒慰。お茶を淹れようと思ったのだ」

「バカ！ カクテルじゃないのに混ぜちゃダメ！ しかも組み合わせが最悪！ しかもしかも！ ティーポットを直に火にかけないでえええ！」

癒慰が持っているティーカップもティーポットも芸術品。間違っても火にかけるやかんではないのだ。

「……違ったか」

弥生はティーポットをコンロから下ろして、ためしに一口飲んでみた。

「……まずい」

「当たり前でしょ」

癒慰は弥生からティーポットを奪い取ると、中身を廃棄する。もつたないが、もう飲める代物ではない。

「……その、茶を淹れるのはどうするのだ？」

「なるほど、鎖羅さんに淹れようと思ったのね」

こくりと弥生は頷き、自分も飲みたいがと付け加える。

「……………わかったわよ。教えてあげるわ」

癒慰は溜息をついて数多ある茶に目をやった。おいしいお茶が負の飲み物になるところなどもう見たくない。

「で、鎖羅さんはどういったものが好みなの？」

「……………そうだな。向うで飲んだ茶は少し甘かった」

癒慰は甘めのお茶に検討をつけていく。

「かと思ったら、少し苦かったな」

癒慰はちよつと苦めの甘いお茶を探す。

「だが、鎖羅姉様は何でも飲むと思う」

癒慰は少しいらつとしたが、それを表情には出さずに純粹においしいお茶を選んだ。

それを徳利に入れ、先に沸かしておいたお湯の中に入れる。熱燗で、中身は薩摩の銘酒だ。とろりと甘いのが特徴で、後に少し苦味が残る美酒だった。

「ほう。そうやっていたのか」

「弥生ちゃんもお茶ぐらい淹れられないと困るわよ？」

いい感じに暖かくなったそれをティーポットに移し、癒慰は沸騰したお湯をカップに注いで器を温めた。せつかくお茶が暖かくても、カップが冷たくてはおいしいお茶はいただけない。

「鎖羅さんと、本当の姉妹みたいに仲がいいのね」

カップをタオルで拭きながら、癒慰がぽつりと零した。その表情には暗い影を落としている。

「ああ、姉様は大切な人だ」

弥生ももう一つのカップをタオルで拭いた。

癒慰が拭き終わったカップを受け皿の上にカチャリと置いた。

「……闇、なのに？」

消えてしまいそうな小さな声に、弥生はじつと癒慰を見つめた。

弥生がカップを置いた音が一際大きく聞こえた。

「そうか……癒慰は闇が嫌いだったな」

「あ、その……」

「かまわん。私も姉様に会うまでは闇が嫌いだったし、憎んですらいた」

癒慰は揺れる瞳を弥生に向け、申し訳なさそうな、それでいて許さないと言いたげな厳しい表情を浮かべている。

「だから癒慰、そんな表情かおをするな」

癒慰はそう言われて、初めて自分が表情を変えていることに気が

ついた。そして今自分がどんな顔をしているのか把握できない。

「別に、私は……」

癒慰はすつと顔を背け、あつとわざとらしい声を上げた。スタスタと戸棚へと歩き、そこからクッキーを取り出してお盆の上に置いて弥生に渡す。

「これ、お茶菓子」

「ありがとう、癒慰」

弥生はお盆を受け取ると、早足で厨房から出て行った。

(ごめん弥生ちゃん、私は闇が嫌いだよ)

癒慰は戸口に視線をやつて、小さく頭を振った。消えない感情。闇を心底憎んだあの時から、時間は止まったままだった。

鎖羅はかちやりとドアが開く音で我に返った。しばらくぼつとしてしまつたらしい。

「姉様、お茶を淹れてきた」

弥生はお盆を机の上に置いて、それぞれのカップにお茶を注いでいく。ふわりと芳醇な香りが辺りに漂い、心を解きほぐしてくれる。

「よい香りだ」

鎖羅はカップを手に取り、その香りを楽しんだ。弥生もカップを手に取り、背を壁に預けて楽な態勢を取る。

そして二人は同時にカップに口をつけた。

「ほう、美味しいな。これはなんという茶だ？」

鎖羅が軽く目を見張って、カップの中身を覗き込んだ。その色は艶のある焦げ茶色で、その甘さは黒糖のものに似ている。

「詳しいことは知らんが、よいものだそうだ。癒慰が選んでくれた」

弥生もその味わいを楽しんだ。ゆっくりお茶を味わうのも久しぶりだった。

「なるほどな、どつりで美味しいわけだ。壊滅的な料理下手のお前にこんなことできないと思った」

鎖羅はそう軽口を叩くが、実際そのとおりなので弥生は何も言い返せない。

「私も帰ったら阿修羅に茶を入れてやろう」

「きつと言ぶだろうな」

そして鎖羅はクッキーの袋を開け、指でつまんで出すと口に入れる。サクッと砕けて香ばしい香りが口いっぱいに広がった。

「うん、美味しい。弥生も食べる」

「あ、私はいい」

「弥生、お前はまだ偏食なのか？ 食べる」

「いや、だから」

「食、べ、ろ」

凄みのある声でそう言われれば、弥生はもう反論できない。今までさんざんこうやって、時には実力も行使されて食べさせられてきたのだ。

弥生は観念をして一つクッキーを貰うと口の中に放り込んだ。

「……………美味しい」

その答えに鎖羅は満足そうに微笑み、空のカップにお茶を注いだ。それから二人は気が済むまで、互いのことを話し合ったのだった……………。

## 第4章の2 姉は強し（後書き）

お姉さま登場です。しかし、登場するまでにけっこう主人公がしゃべりましたね。

そのうち阿修羅も出てくると思うので、お楽しみに。え、彼はいない？

コメディー要素というかほのぼの要素たっぷりなのだろうかっり長くなってますね。

では、次回「探検ってワクワクするよな」

2



第4章の3 探検ってワクワクするよな(前書き)

1

### 第4章の3 探検ってワクワクするよな

春日勇輝は探検をしていた。

どこをと問われれば如月の屋敷を、である。以前は道を見失い迷うという結果に終わったが、今回は帰れるようにと自分で地図を作りながらの探険だ。

小さなリュックにはペットボトルに入った水とパン、方位磁石が入っている。そして忘れてはいけない男の夢も。

(必ずこの屋敷を踏破して地図を完成させてやる！)

勇輝は勇んで前へ前へと進む。途中で部屋を覗いていくことも忘れない。等間隔で並ぶ部屋にはたまに違ったドアのものがある。

その一つを覗くと、

「ん？ どうした勇輝……危ないぞ？」

弥生がバチバチと発光している玉に囲まれて術を創っていたり、

「これと、ああこれが……よし、いい感じだ」

錬魔が怪しげな薬品に囲まれて、これまた毒々しい薬品を合成していたり、

「おっ、おお？」

騎士の甲冑が部屋に押し込められていたり、

「あ、ここ秀斗のとこだ」

所狭しと酒が並べられていたりした。

勇輝が秀斗の酒蔵に一步踏み入れたとたん、体の中をねっとりとしたものが通り抜けた気がした。

(あ……なんかやつちやいけないことやったかも)

背中に嫌な汗が流れた時、ジーツという機械音を耳にした。そつとそちらに顔を向けると天井から伸びているカメラが近づいていた。レンズの右端が赤くピコピコ光っている。

「これってまさかの」

勇輝が本能で危険を察知し、さっと飛びずさると先程までいた場所がジュツと焼けた。

「レーザービーム！」

また体を何かが通過したなと感じた時、目の前でジュツという音がした。見れば何もないはずの空間が赤く熱を持っている。まるでそこに壁が存在するかのよう。

「勝手に入ってすみませんでした！」

勇輝は戸口で体を九十度に追って謝罪すると素早くドアを閉めた。さらに進むと少し立派なドアを発見。

(開けるか開けないか、開けよう)

先程の失敗は次の成功に。それが勇輝だった。

(今度は迂闊に入らないようにしよう)

中を覗くだけと決めた勇輝はそっとドアを開ける。その瞬間キラリと光るものを見た気がして反射的にしゃがみこんだ。

ドスツと背後で音がする。

勇輝は潔く振り返らずに前を見た。部屋の中は剣が整然と陳列され、壁一面が剣で覆われている。どう見ても弥生の剣コレクションだ。

そして目の前にはボーガンを持った甲冑が、数体。またキラリと光った。

「うおっと、本当にすみませんでした！」

慌ててドアを閉め、そのドアの向こうでドスドスツという音を聞いて冷や汗をかく。

「入られたくないんだったら鍵かけるよ！」

心の底からの叫びは、ただ虚しく廊下に響くだけであった……。

(なんかどつと疲れた)

勇輝はドアを開けながら進んでいく。多数の普通のドアの向こうは、普通の部屋だったり、ちょっとしたサロンになっていたり、貴族の暮らしを彷彿とさせるものだった。

だいぶ地図を埋めた頃、勇輝は一際大きなドアをした部屋を見つけた。ホールのものよりは小さいが、それでもなかなか立派である。

(右よーし、左よーし、いざ進まん！)

勇輝は安全確認をして身を低くしてからドアを開けた。幸い何か  
が飛んでくる気配もなく、カメラがいる気配もない。

「うっわ」

勇輝が思わず声を上げてしまうほど、そこは物で溢れかえっていた。どうやらここは倉庫らしい。棚が無数に陳列され、そこにめい  
いっぱい物が置かれている。

少し入ってみると、棚がないスペースには家具が置かれ、ホール  
にあったソファアが並べられていた。完全に使わないもの置場のよ  
うだ。

「こっからいくつか俺の部屋にもらっていい」

勇輝の部屋には最低限の家具しかなく、もう少し家具で埋めな  
いと広すぎて落ち着かない。なんなら六畳分だけ洋ダンスで囲んでし  
まってもいい。

勇輝は暇つぶしだと、辺りを物色していく。欲しい家具に目星を  
つけて、棚に置いてある物を見ると、骨董品から絵画、人形や  
判別不能の何かまで様々なものが置いてあった。一種の博物館状態  
だ。

また箱に入っているものも多く、気になるものを一つずつ開けて  
いく。ほとんどがどう扱っているのか分からないものばかりだった  
が、そのうちの一つをどかすと、棚にスイッチが埋め込まれてあっ  
た。わざわざ隠してある謎のスイッチ。押してくださいと言わんば  
かりに出っ張っているスイッチ。

勇輝は迷わずにそれを押した。

(何が起るのかな)

ウキウキと心弾ませている勇輝の耳に、ガコツと何かがズレる音が聞こえた。これはお決まりのパターンであるから、当然それは壁がズレる音で、勇輝の背後に扉が出現していた。

そして扉には“開けるな危険”の文字が。

「開けるに決まってるじゃん」

勇輝は忠告も何のその、躊躇わずにドアノブをひねる。何かが発するわけでも、跳び出してくるわけでもなく扉は静かに開いた。

「げっ」

そして目に飛び込んできたのは、何か怪しい雰囲気を醸し出すものたち。

勇輝はその雰囲気に押され、ろくに見もせずに扉を閉めた。飲みこまれてしまいそんな空気がそこにはあった。

(なるほど、開けるな危険だ)

勇輝は何もなかったかのように爽やかに笑い、スイッチを押した。再びガコツという音がして扉が消える。状況は最初に戻った、勇輝が見たという事実を除いて。

勇輝はそれでもこりずに物色を続ける。神経が太くなければ如月で仲間としてやっていけないのだろう。勇輝は鼻歌交じりで使えそうなものを探していく。

そして棚の下段を覗いていた時、棚の奥に何かが落ちていることに気がついた。

(なんだろ)

勇輝は下から腕を突っ込んで何かを引っ張りだす。埃を払うと、それはパズルのようだった。木枠に複数の板がはめ込まれ、上下左右に動かして絵柄を揃えるタイプだ。

ただ一般に売っているものと違うのは、絵が図形の組み合わせという複雑なものであることだ。色わけもほとんどない。

(ひさしぶりにやるっかな)

勇輝は適当にピースをバラバラに入れ替え、パズルを始めた。小テストによって鍛えられた短期記憶に元の図形を覚えさせ、それに近づけていく。単純なパズルだが、これがなかなか難しく、楽しいのだ。

(ここをこうして)

だがパズルしか見ていない勇輝は、部屋の壁が変化していることに気がつかなかった。

ドアが現れ、窓が現れ、消えていく。

そんな怪奇現象が勇輝の知らない場所で起こっている。その現象を勇輝が認識するのは、行き詰ってやや飽きてきた頃だった。

「……どういうことだ？」

扉が開くと同時に聞こえた声は戸惑いを含んだ錬魔の声だった。勇輝はよつと軽く手を挙げて挨拶する。

「如月の倉庫ってすごいな、いろいろあって楽しい」

「え、ああ。しかし……」

鍊魔は釈然としない顔で辺りを見回している。そして鍊魔が勇輝の手の中にある物に目をやったと同時に勇輝がピースを移動させ、窓が開いた。

「これは何だ！ 秀斗か！」

何もなかった壁に窓が現れ、内側に開いたそこから弥生の顔が覗いた。

「あれ、壁に窓なんてあつたけ」

首をかしげながらピースを元に戻すと、弥生は消えた。

「うへええ？」

勇輝は口をあんぐり開けて、目を瞬かせた。そしてゆっくりまたピースを動かす。

「勇輝！ それを不用意に動かすな！」

不機嫌顔の弥生が再登場した。

「嘘！ 何これ！」

ここになって、勇輝は薄々何かまずいことをしたかもと冷や汗を感じてきた。横から鍊魔の痛い視線も感じる。



「勇輝……ちよつと貸せ」

弥生は窓からひらりと倉庫に入り、勇輝からパズルをもらい受けた。それをパチパチと動かしていく。

窓が消え、扉が現れ、また消え現れる。

それを幾度が繰り返し、弥生は現れたドアを開けた。

「おい秀斗、お前これをどうして……」

「弥生！ お前から会いにくるなんて珍しいじゃねえか！ うおつと……てかさ、空間滅茶苦茶んだけど、お前なんかしたか？」

扉の先は秀斗の部屋で、弥生を見るなり抱きつこうとした秀斗を弥生は光の玉で追い払う。だが華麗に避けた秀斗は、なかなかお前の部屋に辿りつかないんだけど、と緊張感も危機意識もゼロだ。

「これ、お前が作ったものだな。なぜ管理していなかった」

弥生はパズルを秀斗に突き出すと、秀斗はあつと罰が悪そうな顔になった。

「……なんかマズイものだった？」

「いや、まずいというか……それさ、簡単に言つと空間操作装置なんだよな」

あははと秀斗は乾いた笑みを浮かべ、弥生から装置を受け取った。

「つまり？」

「これ全体が屋敷の地図になってよ。板を動かせばその部屋が動くんだ。昔便利かなって作ったら苦情が殺到したから倉庫にぶち込んでおいたの忘れたぜ」

「秀斗、お前は責任を持ってそれを直せ」

ごまかし笑いが一瞬で固まった。

「マジ？ これけっこう滅茶苦茶だぜ？ しかもやった本人じゃない俺？」

それに弥生だけでなく錬魔も頷く。

「勇輝がやるとこれ以上に酷くなる」

横から流れ弾を食らった勇輝は心の傷口を押さえながら、

「お願いしまーす」

とぺこりと頭を下げた。

「ということだ。製作者として責任を取れ」

秀斗は原形から程遠い凶面になったパズルに目を落として、重い溜息をついたのだった。

その後秀斗がパズルを完成させるのに一時間がかかったことや、その間癒慰と零華が屋敷を迷い続けたことは、余談である。

### 第4章の3 探検ってワクワクするよな（後書き）

純粹に、如月のひと時を投稿。勇輝が懲りないのはいつものことです。

さてと、ついにカウントダウンが1となりました。地味なカウントダウン、それはなんのためですか？

勇輝 「記念すべき100話目！」

なんですよ。次回100話目を迎えます。やはりこれはお祝いか？  
ということ、100話を記念して特別編を投稿しまーす。

勇輝 「どこらへんが特別なの？」

趣向。重みの欠片もない作者の楽しみが詰まった作品。作者の願望も詰まっています。ちよっと違う神名をお届けできればと。

勇輝 「……内容は？」

秘密。一言で言うと災難です。

100話記念。凶鑑でも作ろうかと考えましたが、彼らのことではバラせるネタは少ないし、詳しいプロフィールは作者も知らないの  
でサヨナラ。身長とか体重とか、わからないし、教えてくれないし  
……。

というわけで、次回からちよっとした話が続きます。常より5パーセントばかりかきさが増えます。  
では！

第4章の4 100話記念 小さい〇〇見いつけた

ほかほかとした春の陽気に包まれながら、春日勇輝はベッドの上であくびをした。窓から零れる光は優しく、今日もいい天気らしい。時折冷たい風が吹く日もあるが、気分はもう春である。

勇輝がちらりと目覚まし時計を見ると、もう九時を過ぎていた。誰も起こしに来なかったのでゆっくり寝ていたようだ。

勇輝は服を着替えて階段を降りる。洗面所で簡単に顔を洗って鏡で寝癖を直す。今日も可愛い顔が鏡には写っていた。

黒髪黒眼の童顔不良はあくびをしながら、いい匂いのするリビンググへと入っていった。

「おはよー」

「おはよう、勇輝」

「今日も元気か〜不良少年」

母親は鍋に火をかけ、父親は椅子に座ってテレビを見ていた。勇輝は父親のからみを見無視して食卓につく。

すぐにご飯と目玉焼き、そして味噌汁が出てきた。

「いただきますーす」

勇輝はまず味噌汁を飲み、ほっと優しい味に息をつく。やはり味噌汁は日本の心だ。

「あ、俺今日からしばらく家に帰らないから」

目玉焼きに醤油をかけながら、勇輝は向いに座っている母親にそう言った。今日から勇輝は如月に泊まり込むつもりなのだ。ただ遊び目的で。

「みんなといるのね。いいわ、いつてらっしゃい」

「青春だな」

事情を知っている母親、龍牙隊の幹部である暁美と不良仲間とつるんでいると思っている元不良の父親は快く息子を送り出した。

勇輝は残さず朝食を食べると、食器を流しへ持っていく。食器洗いは、いいと言われたので、脇にある冷蔵庫の冷凍室を開けた。

そこには春日家に常備されているアイスクリームが二三種類入っている。その中の一つを勇輝は取り出してビニール袋に保冷剤とともに入れる。

「父さんのアイスをどうする気だ！」

突如父親が立ち上がり長い人指し指をビシッと勇輝に向けた。

「いや、これ昨日俺が買った奴だし。親父のはこっちだろ」

と勇輝は呆れ顔で特大アイスを冷凍庫から取り出した。春日家でアイス消費するのは主に父親と勇輝の二人。個々に好きなカップアイスを買ってくる時もあるが、母親が棒アイスを買ってきた時は争奪戦が始まる。

二人とも重度の甘党だった。

勇輝はさつさと二階に上がり、自室に入るとクローゼットを開ける。向うの部屋を思い浮かべて開ければあら不思議、如月につながるのだ。

勇輝はよいしょと如月の自室に入り、ホールへと向かう。すぐにこのアイスを冷凍庫に入れないと溶けてしまうからだ。

勇輝は鼻歌まじりで、ホールのドアを開けた。

「おはよ〜」

「あ、勇輝君だあ。おはよー」

ホールのソファーには癒慰が座っていた。手にはティーカップ、背後にはお花畑が広がっている。職業柄コスプレが好きな癒し系の女の子、ちなみに本日の衣装は事故で両親を亡くした不幸なお嬢様らしい。

「アイス持ってきたよ」

「わあ、アイスかあ。いいね」

癒慰が満面の笑みで勇輝に寄ってきて袋を覗き込んだ。勇輝の買ったアイスはひと箱に様々な種類の入っているもので、個人の好みがあはつきりしている彼らにはぴったりのものだった。

「私冷凍庫に入れてくるね」

と、癒慰は厨房へと姿を消した。

ひとまず勇輝はソファーに座りホールを見渡した。自分以外誰もいない、耳を澄ましても銃声の一つも聞こえない。静寂そのものであった。

(たまにはこんなのも悪くないよな……)

彼はもともと不良であり静かな生活を送ってはいなかったのだが、癒慰を含む五人に会ってからは以前とは比べ物にならないほど賑やかになったのだ。

彼らと街を歩けばヤクザは道をあける、かと思えば襲撃される。拳銃も見たし、扱えるようにもなった。人質にされたこともある。そんな勇輝がしばしの安息にホッと一息つくのもしかたのないことだろう。

しかし勇輝がうとうととまどろんでしまったのもつかの間、彼は非現実的な音で飛び起きたのだった……。

「な、何？ 今の音！」

それは勇輝の耳に間違いがなければ爆発音と呼ばれるものであった。化学の実験で水素に火をつけたような可愛いものではなくもつと本格的な映画で聞くような……。

「ん〜。ちよつとまずいかも」

癒慰がその音の方角を探り、眉を寄せた。弥生は如月の中で一番感覚が優れており、霸動の察知にも長けていた。

「弥生ちゃん、実験に失敗したかも」

「えっ、弥生の実験？」

弥生は剣技に優れ、暇さえあれば本を読んでいるか新たな魔術を創り出している如月のリーダーである。つい先日その実験現場を見た勇輝は、悲惨な現状を想像して真っ青になった。

「助けにいかない！ 瓦礫に埋もれて死んじゃう！」

あの爆発音だ、被害は相当なものだろう。それに巻き込まれたりしたら……。

勇輝は不吉な推測を彼方へ飛ばし、全速力で走ったのだった。

「ちょっと、勇輝君。弥生ちゃんはそんなことで死なないってば！」

駆け出した勇輝に気づいて癒慰もその後を追った。彼を一人にしたら何をしだすか分からない。

「弥生は大丈夫でも火が出てるかもしれないって！」

「そんなの零華ちゃんにまかせればいいでしょ！」

癒慰はすぐに勇輝に追いつき二人は並列となって走る。

二人して角を曲がるとそこは火の海ならぬ瓦礫の山だった。そこには既に人影があり、あたりが濡れていることからすでに消火活動が行われたことがわかった。

「うわっ、すごい状態」

と勇輝は眼を見開き瓦礫を飛び越えて実験室の中を覗き込んだ。

中は電球が破壊され薄暗かったが人がいるくらいはわかった。その人影に勇輝は声をかける。

「零華、弥生は生きてる？」

部屋の中央にいた女性は無言で頷いた。どこか呆然としているよ。うなのはこの事態に呆れているからであろうか。



「珍しいな。弥生が失敗するとは」

勇輝の背後で声がした。先ほどから悠然とこの事態を観察していた錬魔であった。

彼の態度を見る限り弥生はほぼ無傷なのだろう。けがを負っていたら彼が治療しているに違いないからだ。そう、彼の本業は医者だ。零華が瓦礫の中から人を抱きかかえた。その人は零華が軽々しく抱けるほど小さかった。

弥生は小柄とはいえ、一般女性と同じくらいはある。あれはどう見ても子どもぐらいしかない。

（まさか弥生……人体実験でもしてたんじゃ）

部屋の外で事態を見守っている三人が同じ疑問を抱いたとき、慌ただししい足音が近づいてきて風を感じた。

「弥生は無事か！」

まさに風のごとく駆けてきた少年は蒼白な顔で部屋の中をのぞいた。勇輝と並ぶとその背は頭一つ分以上高い。金髪に黒いヘアバンドという目立つ出で立ちの彼は名を秀斗といった。

「無事……なんですけど」

歯切れ悪く零華は言って、こちらに歩いてきた。廊下の明りで彼女に抱きかかえられた子どもが照らされる。その子供を見て、彼らはゆづに三秒は身動きができなかった。

長い銀髪の女の子、それは弥生の外見によく似ていた。

一番早く驚愕の淵から這い上がったのは弥生を愛してやまない秀

斗だった。

「アハハハハハハハハ！ ヤベエ！ アハハハハハハハ！」

彼の遠慮のない爆笑が廊下に響き渡る。廊下の壁を叩き笑い転げている。その笑い声に残る三人も現実には立ち戻った。

「や、弥生か」

錬魔がうめく。医者常識を超える現象に目を見張っている。だがその顔をすぐにいつもの涼しい無表情に変わった。医者常識は超えても彼らのもう一つの顔、魔術師の常識は超えなかったのである。

彼ら、勇輝を除く全員が魔術師であった。彼らは異世界で生まれこの国に渡ってきたという。一応同じ高校の同級生だが、彼らは勇輝の五倍は生きていた。彼らの奇抜な外見も人外のものであることを現わしているのだ。

「なんでちっちゃくなつたわけ？」

勇輝は眼の前にあるものが信じられないといった顔をしていた。さんざん非常識な中にも人は常識からは逃れられないものである。

「そーいえば、弥生ちゃんが創ろうとしてた魔術って人の強制幼児化だっけ……」

勇輝の間に癒慰が苦笑いを交えて答えた。彼女にとっては常、性格以外は完璧な弥生の失敗が微笑ましいのであった。

「え、毒薬じゃないの？」

(あれ、それは副作用だった?)

「いや、たしか特殊光線のはずだが……ひとまず、弥生をホールへ運ぼう」

「そうですね、すすまみれの顔を綺麗にしてあげましょう」

零華は微笑んで腕の中の少女を見た。普段は仏頂面の弥生だけにその寝顔は可愛さ倍増であった。

彼らはホールへと移動し、ソファーに弥生を寝かした。

そしてまじまじと可愛くなった弥生を眺めた。それと同時に弥生の服が小さな体に合っていることに気づく。

「ほう、伸縮性に優れた服だと言っていたがこれほどまでとはな」

簡潔に鍊魔が答えをだした。弥生が来ているのと似ている服を秀才も着ていた。入隊とともに裏技術研究所の所長、匠から隊員服として渡されたのであった。

一見制服ともとれるが、軍服と言った方が合っている気もする。このまま街を歩いたらなんのコスプレかと思われる格好なのは確かだ。

「そういう問題なの？」

「そういう問題だ」

「へへっ、弥生が目を覚ましたらどんな反応をするか楽しみだぜ」

勇輝と鍊魔の会話に割って入った秀斗は向いのソファ―に腰をおろした。さなぎが羽化する瞬間をみようとしている少年の顔だ。

「暴れないかな」

「大丈夫よ。子どもの弥生ちゃんが暴れたって止められるわ！」

やけに自信満々で癒慰が答えた。

「ひきこもりになるかもしれませんけど」

零華はハンカチで弥生の顔を拭いていた。白く柔らかい肌が現れる。ふにふにとマシユマロほっぺを触りながら零華は常日頃からこれくらい可愛さがあればよろしいのに、と残念に思うのであった。

「元に戻るの？ 弥生」

勇輝の問は疑問より確認に近かった。

「戻るだろう。弥生は何を創るにしてもその効力は三〜四日で切れるようにしている。長くても一週間もすればもとの体に戻る」

鍊魔はすっかりきれいになった弥生の顔を覗き込んだ。とその時、弥生が目を開けた。

「おっ」

秀斗が身を乗り出す。

弥生はうつろな目で錬魔を見返し、小さな口を開いた。

「パパ？」

これにはさすがに錬魔も意表をつかれた。言葉をつまらし、混乱する頭で分析を試みる。

（頭を打ったショックで記憶が錯乱しているのか、いや、記憶喪失ということも……それ以前に弥生の口から、パ、パパなどと、もしや悪質な嫌がらせ……）

「や、弥生？」

錬魔はようやくその言葉をしぼりだした。まず本人にこの状況を把握させなくてはならない。だが彼の努力を弥生は一瞬で蹴飛ばした。

弥生が錬魔に抱きついたのである。

「パパあ」

さながら木に抱きつくコアラのように弥生は錬魔を掴んで離さなかった。錬魔はぐらぐらする頭で必死に考えた。

（この重みは何だ、なぜ弥生が俺に抱きつく。そしてパパというのは父親に対する言葉で……）

「ずりい！俺にもやらせる！」

今にも倒れそうな錬魔に秀斗がつめよる。錬魔が倒れても弥生を

守れるよう両手がスタンバイされていた。

これはすりこぎという現象ではないか、と錬魔はようやく結論にたどり着く。

だが解決策がわかったわけでもなく、錬魔はそのままストンとソファーに座った。

そしてゆっくり顔を勇輝たちに向ける。衝撃のあまり放心状態である。

「な、なあ、あれ何？ どうなってるのさ」

四人は怪奇現象から少し距離を置き、小さな声で話あった。

「俺に聞くなつて」

「記憶喪失かなあ」

「それですりこみかよ」

「でもあれ、アヒルとかの習性じゃ」

勝手な憶測を飛ばす三人の傍らで弥生を見ていた零華がようやくその口を開いた。

「もしかしたら、光を浴びすぎたのかもしれない。効果が強く出たてしまい、完全に幼少時代に戻ってしまったのではないだろうか」

これも憶測の範囲にすぎないが前のどれよりも説得力があった。

「あ、なるほど」

三人が納得顔で頷いたところで、錬魔が苦渋に満ちた顔でうめいた。

「これからどうする」

「そうだな〜ひとまず、家族構成決めようぜ！」

鍊魔とは打って変わった明るい声で秀斗が提案した。

「家族ねえ……やっぱりお母さんは零華ちゃんかな」

「はい？ 私はそんなのごめんです。貴女がなってください」

「え、私がお母さん？ なんで？」

零華ちゃんの方がちゃんとしつけとかできそうだし、鍊魔くんともお似合いじゃん、と癒慰が続けようとしたが、零華が言葉をかぶせてきた。

「貴女ほど弥生ちゃんの母親にふさわしい人はいません。料理も洗濯も掃除もできますし、子どもの扱いには慣れているでしょう。たつぷりの愛で弥生ちゃんを育ててくださいね」

零華は一息でそれを言い切り、結果癒慰はそれに圧倒される形になった。

「……まあ、いつか。数日のことだし」

と癒慰は割り切って弥生の隣に屈んだ。気配を感じたのか弥生が癒慰を見る。

「弥生ちゃん。ママだよ。こっちにおいで」

やさしい聖母の笑みで癒慰は弥生に語りかけた。ひとまず鍊魔をこの状況から救わなければならぬ。

「ママ？」

だが弥生は顔をフイツと逆に向けて

「パパの方がいい」

とはつきり言い切ったのである。

間、五秒。

「何この子！ 全然可愛くない！」

早くも癒慰がブチ切れた。

「お、落ち着け癒慰！ 弥生が小さくなったんだ。性格はひねくれていて当然じゃねえか！」

「そつだよ。弥生はお父さんが好きなだけだよ」

「なによ。いろいろ頑張ってるのはお母さんの方なんだからね！」

負け惜しみの捨て台詞を吐いて、癒慰はホールから出て行った。

「悔しかったんだな」

「子どもにはよく好かれるタイプでしたから」

だが消えたのもつかのま、癒慰はすぐに手に袋を持って帰ってき



た。その顔は何かを企んでいる笑みを浮かべている。

「餌づけをするわ！」

意気込んで袋から出したものは先ほど勇輝が持ってきたアイスであった。箱を開け、一本取り出して弥生の目の前につりさげる。

「なあに、それ」

「アイスよ。欲しい？」

「……欲しい」

「じゃあこっちにおいで」

弥生はしばしためらったがアイスの誘惑には勝てなかったようで、鍊魔のひざから下りた。

「いい子ね。はい、あげる」

弥生はママの顔を正面から見つめて、

「ありがとう」

とお辞儀をした。

「きゃ〜。かわいいー」

さっきの怒りはどこへ行ったのやら、癒慰はアイスを舐める弥生の頭を愛おしげになでたのだった。

「それで、俺たちはどうするの?」

「私は弥生ちゃんの家家庭教師をします」

「零華らしいね」

「え、スパルタ教育は止めてよね」

「失礼ですね、ちゃんとしますよ」

「じゃあ、俺お兄ちゃんやる」

勇輝が元気よく挙手をした。

「いいね。勇輝君にぴったり」

そんな大きな子どもはいらん、と錬魔は思ったのだが考えてみる  
と勇輝との年の差は親子を超えておじいちゃんと孫だったことに気  
づく。深々とため息をついた錬魔であった。

「じゃあ秀斗が一番上のお兄ちゃん?」

「やだね。俺は弥生の許嫁になるぜ!」

秀斗は声高々に宣言した。

「ロリコン」と勇輝。

「少女趣味」と癒慰。

「最低ですね」「とどめに零華。」

そして鍊魔は無言で抗議の視線を送っている。

「何？　なんでそんなに反対すんだよ」

「この子にはそんなものに縛られずに自由に恋愛してほしいの！」

癒慰はわが子を抱き寄せた。騒動の張本人は素知らぬ顔でアイスを食べている。

「俺は汚れた男どもから弥生を守るだけだ！」

「一番薄汚れているのは貴方です」

「うるせえ！　おい勇輝、お前は俺が潔白だって信じてるよな！」

必死の形相で振り向かれた勇輝は曖昧な笑みを浮かべて

「信じてるけど、弥生が結婚できる年になったら秀斗はもうおじさんだよ？」

と現実を突きつけた。

「お、おじさん」

「そうだよ。先に死んで弥生ちゃんを悲しませたいの？」

「そうです。弥生ちゃんは若い男の子がいいかもしれません。貴方

は愛するといいながら弥生ちゃんを自由を奪うのですか？」

二人はここぞとばかりに追い討ちをかけた。弥生を魔の手に渡してはならない。

「でも弥生は年上好きがもしれねえし、愛があれば年の差なんて…  
…そうか、今俺がふられてんのは年が足りねえんだ！」

「そんなわけあるか！」

「違うでしょ！」

「そうじゃないでしょう！」

三人から一斉に反論されて秀斗はひるむ。

賑やかな輪を見ながら、何年この弥生といるつもりだろう、と不安になる錬魔だった。

「弥生」

溜息混じりに錬魔が弥生の名を呼ぶと、弥生は癒慰の腕をくぐりぬけ錬魔の膝の上によじ登った。どうやらそこが定位置らしい。そのうえキラキラとした目で錬魔を見ていた。

(完全に懐かれている。これは、どうすればいいのか……)

そこで錬魔は他人に押し付けるといふ手段に出た。

「弥生、暇なら勇輝と遊べばいい。お前のお兄さんだ」

「おにい？」

「そつだよ。お兄ちゃん。ゆう兄って呼んでくれたらいいよ」

勇輝は簡単に自己紹介をすると弥生を抱きかかえた。それと同時に秀斗の痛い視線を感じる。

「ほら、高い高い」

勇輝に兄弟はいないが近所の子どもの面倒を見たことがある、小さい子をあやすのもお手の物だ。弥生は嬉しそうに声をあげた。さらに秀斗の視線が突き刺さるのだった……。

第4章の4 100話記念 小さい〇〇見つけた（後書き）

この話は二年前に書いた話です。完全に短編のつもりだったので、キャラ説明が入ってます。キャラの違いは、ないはずですが、何か違和感があれば二年の差です。

というか、一章を放棄してこれをかいてたんですよ、私。

これは地味に長く、全部で五話編成です。

最後に、ここまで読み進めていただいた読者の方々、ありがとうございました。ざいます。

では、次回「小さくなっても!？」です。

第4章の5 100話記念 小さくなくても……

そして一時間が経過し、そこには嬉しそうにはしゃぎまわる弥生とそれをやさしく見守る両親、観察日記を書いている家庭教師、只今ふて寝中の自称許嫁、そして、体力を根こそぎ奪われて床にへばっているお兄さんがいた。

「ゆー兄。もつとあそぼーよ！」

「ごめん、弥生……俺、もう限界」

勇輝はすぐにでも砂になりそうな勢いだ。

しかし何故弥生はこんなにも元気なのか、並の子どもの体力でない。

(そもそもあの無口で愛想のない弥生はどこに行った！)

勇輝は助けて光線を零華に送る。零華は日記を閉じて椅子から立ち上がった。

「じゃあ、私が弥生ちゃんに勉強を教えます」

「何教えるの？」

「そうですね。まずは歴史あたりから」

「ママー。あそぼー」

弥生は勇輝が脱落したのがわかったのか、癒慰に目標を変えた。

「そうね。遊ぶのもいいけど勉強しよつかあ」

「勉強？ なにそれ」

「大切なことよ」

「パパもそう思うの？」

と弥生は熱烈な視線を錬魔に送った。

錬魔はそんな弥生に後ろめたさを感じながらも頷いた。

実際彼は、見た目年齢四歳、推定年齢二十歳の子どもに歴史を教えてどうするのかと思っていたのだが……。

「じゃあ、がんばる」

そう意気込む弥生を癒慰が抱きしめた。そんな光景を零華は微笑ましく見ていたのだった。

（自分は母から抱きしめてもらったことはありませんでしたが、嬉しいものようですね）

だがそんな幸せな光景を映していた零華の視界が突然ぐにやりとねじ曲がった。

なんとか踏みとどまり目頭を押さえる。

（おかしいですね、風邪でも引きましたか……？）

そして錬魔と癒慰が顔をあげるとそこに零華の姿は無く、だいぶ視線を下げたところに藍色の頭があった。



「いやあああ！」

誰よりも早く状況を把握した本人は悲鳴をあげた。その声に勇輝と秀斗が飛び起きる。

「な、何ですかこれは！ どうして私が、小さくならなくてはならないのです！」

その場にいる全員がしばし呆然とした。

これは、ひよっとすると最悪の事態になるのではないだろうか、という考えが全員の頭をよぎる。

「まさか……光線だから、効果が持続するの？」

「放射能のような感じなわけ？」

「……ああ、たぶん」

「これ、たぶんみんなもなりますよ」

小さな女の子が敬語を話すと違和感があるな、と何の脈絡のないことを思った大人たちは投げ込まれた爆弾にとっさに返すことができなかった。

「え、何で？」

打ち返したのは勇輝である。

「私はあの部屋に最初に来て長い間いたのですぐに効果がでたので

しよう。あなた達もあの部屋に近づいたのですから効果がでて当然です」

「うそだろ」

すでに秀斗の顔がひきつっている。

「そういえば零華ちゃんは完全な子どもにはなっていないのね」

「ええ……たぶん光線を直接浴びてないからでしょう」

そして子どもには重すぎるため息をついて続ける。

「こんなことなら何かも忘れて子どもになりたかったです」

自分たちもああなるのか、大人たちは自分たちの運命を知って憂鬱になるのだった。

だが逆に喜ぶ者がここに一人。

「わあ、女の子。だれ？ 名前は？」

弥生が目を輝かせて零華に駆け寄った。初めて見る自分以外の子どもに興味津津のようだ。

こうなったら彼女と友達になるしかない、と零華は覚悟を決め弥生に向きなおった。

「私は零華といます。あなたと勉強するために来ました」

どこまでも勉強にはこだわるらしい。

「そうなんだ……いつしよに勉強かあ」

弥生は遊び相手ではないことを知って少し残念そうだ。口の先がとがっている。

「さあ、いきましよう。歴史は楽しいですよ」

と零華は有無を言わず弥生の手を引っ張って部屋から出て行った。どうせ行先は書庫であろう。

子ども達が出て行ったホールに突如笑い声が巻き起こった。さすがに零華の前で笑うのは失礼だと我慢していたのである。

「あの姿であのしゃべり方はねえよな！」

「かわいいわ〜子どもが増えちゃったあ」

「あいつを弥生の妹にするつもりか……？」

「お姉さんがあってるって」

と各々好き勝手に盛り上がったのであった。

そして零華はというと、憤慨していた。

一つはホールで笑っているであろう四人に、そしてもう一つは自分の不甲斐なさにであった。

「……届きません」

今の零華の身長は元の半分以下だ。椅子を使っても本棚の上の方に手が届かなかった。

「れーか、何してるの?」

「本が取れないのです。この忌まわしい体のせいで」

「よじ登れば?」

と弥生は身軽に本棚をよじ登っていった。瞬く間に一番上まで登っている。

「どれが取りたいの?」

「や、弥生ちゃん! 降りて来なさい、危ないから!早く!」

「ねえ、どれ?」

零華がハラハラしながら見ていることなど気にせず、弥生は器用に棚を移動していた。

幼少時から運動能力は高かったらしい。

「その列にある創世記です! さあ、早く降りて!」

弥生はその本を取ると飛び降りた。着地もきれいに決まり、架空の拍手が鳴り響く。

「はい」

弥生は満面の笑みで本を零華に渡した。その表情に零華は卒倒しそうになった。弥生の見たこともない笑顔にもやられたが、それよりも時々みせる向こう見ずな性格がすでに現われていたからである。

(これは直さないといけません！)

「弥生ちゃん。本棚に登るなんて危ないです！ 女の子がこんなことをしてはしたくないですよ！」

弥生は突然の説教に目を白黒とさせた。弥生としては零華の何を思っただったのだ。なぜ怒られなくてはいけないのか、と目が訴えていた。

「はしたない？」

「そうです。もうしてはいけませんよ。こういうのは大人の手を借りるものなのです」

とその時存分に笑い終えた大人たちが書庫に入ってきた。

「ほら、あそこにいる人達は愚か者ですが多少の役には立ちます。いいですか弥生ちゃん、馬鹿とハサミは使いようです。覚えておいてください」

零華は愚か者達を睨みながらそう力説した。その愚か者たちは気まずそうな笑みを浮かべている。

「バカとハサミは使いよう」

「そうですね。さあ、秀斗君。この棚から残りの創世記を取ってください」

指名を受けた秀斗は笑いを噛み殺しながら棚から数冊の本を取り出した。

「こつちの世界に創世記あつたんだな」

「ええ、なんでも昔、鷺君が見つ付けてくれたそうですね」

「げえ、奴が？」

その名を聞いたとたん秀斗の顔が苦々しく歪んだ。そして本を机に乱暴に置き、手を払って

「あいつの触つたもんこれ以上触れてられつか！」

と捨て吐いた。

「そうですね。さ、弥生ちゃんこつちに座って」

秀斗の鷺嫌いは今に始まったことではない。零華は気にせず弥生を自分の正面に座らせた。大人たちは周りの椅子に座って授業参観をするらしい。

「まず、私たちの国ができた話からします」

本を開くとそこには勇輝が見たこともない文字が書かれていた。

「その昔、人間界には特殊な力を持った種族がいました。それを魔

術師といえます。彼らは部族で固まり、人間と共存していました」

「それが歴史？」

零華の言葉に弥生が割って入った。

「そうです」

「それ知ってる。その後いじめられて異空間に逃げるんでしょ？」

子どもらしい解釈だがそのとおりである。

「歴史ってお話のことだったんだね。過去の人の日記だと思ってた」

「……日記ではないです。それで、どなたから教わったのですか？」

「え……あれ、だれだろう」

「やはり記憶は混乱しているようだね」

「まあ、急に可愛くなったから、仕方ないかもね」

親はあまり気にしないらしくのんびりとその状況を見ていた。

「ということとは歴史のみならず、その他の学問も習得しているのでしょうかね」

「国語以外じゃねえ？」

秀斗の言葉に全員が納得した。

弥生は国語、特に慣用句やことわざといった類の一步踏み入った日本語が全く理解していないのだ。

「この機会に勉強させれば？」

と勇輝が提案すると

「そうですね。少しは会話が成立するようになるかもしれません」と零華が即決した。

「では弥生ちゃん、次は言葉の勉強をします」

「え〜。まだするの？」

「まだ十分もしてません」

「きゃ〜。スパルタよ、やっぱりスパルタなのね！」

癒慰が茶々を入れた。

「スパルター」

母の言葉を娘が受け継いだ。弥生の語彙が一つ増える。

「ちょっと癒慰ちゃん。変な言葉教えなくてください」

「弥生。俺が大人の付き合い方教えてやるうか？」

「そこ！ 秀斗君、弥生ちゃんをたぶらかさないてくださいー！」



「たぶらかす」

「スパイ映画なら教えるよ」

「結構です！」

早くも学級崩壊寸前の授業に錬魔は頭を悩ましたのだった。

そうこうするうちに日は暮れて、子どもは寝る時間になった。ホールには困っている大人一人とふくれっ面の子ども一人、それを面白そうにみている大人三人と子どもがいた。

「やだ。パパと寝る」

「い、いやそのだな。弥生、お前女の子だぞ」

「パパと寝ちゃだめなの？」

弥生は潤んだ瞳で錬魔も見上げた。錬魔の心にジャブが入る。

「ママ……と寝たらどうだ？」

錬魔は癒慰に助け舟を要請するが相手は漕ぎだすどころかこちらに大砲を向けて来て……。

「パパあ、寝てあげてよ。もしかしてパパ、ロリコンなの？ やばいの？ きちやうの？」

と、特大級の砲弾を撃ち込んできた。

「そんなわけあるか！」

「じゃあ問題ないじゃない」

撃破、取りつく島もない。鍊魔は海底に沈むしかなかった。

「お前……覚えてろ」

鍊魔は癒慰を一睨みすると弥生を抱きかかえてホールを出て行った。

「ほんと、素直じゃないんだから。可愛い物好きなんだから絶対弥生ちゃんストライクゾーンだと思うのに」

「それ、ちよつと危なくない？」

「大丈夫よ。秀斗君と違って鍊魔君は愛でて見てるだけだから。手なんて出さないよ」

「うらやましいぜ、弥生と添い寝。俺もしてえ」

「貴方がやったら犯罪で捕まりますよ」

零華の言葉はいつだって容赦がない。子どもに言われると効果は倍である。

「差別だ！」

「「「区別!」「」」

三方から反論をくらい、秀斗はすねて部屋に帰って行った。  
勇輝も自分の部屋に戻ろうとソファから立ちあがった時、零華に声をかけられた。

「明日から、隊員服を着てください。それが嫌なら癒慰が持ってる  
「コスプレでもいいですよ」

「なんで?」

「いつ小さくなるかわかりませんからね。備えあれば憂いなしです」

「うわ……俺急に憂鬱になってきた」

目の前の零華に自分を重ねて、沈む勇輝だった。

「子どもの姿も楽しいですよ?」

「……それ、厭味だよな」

「さあ」

零華は微笑を浮かべホールを後にした。その姿を見送って、子どもらしさが微塵もないよなあ、と勇輝はおもったのだった。  
そしてそれぞれ夜はゆるゆると明けて行く。

第4章の5 100話記念 小さくなくても……（後書き）

百話記念第二弾〜。

本日は、特に書くことはないのです。

では、次回「小さな弥生、姉さまと遊ぶ」です。

第4章の6 100話記念 小さな弥生、姉さまと遊ぶ

その翌朝、勇輝がちゃんと隊員服を着込み、ホールに入るとそこにはお人形のような弥生がいた。

「え……何これ」

フリフリのドレス、大きな髪飾りがついた二つくり、メルヘンの世界からそのまま抜け出したようなお姫様である。

「可愛いだろ。俺の許嫁！」

秀斗が興奮した様子で弥生を抱きかかえた。弥生は突然のことに驚いてもがいたがどうしようもできない。

「秀斗君！ 弥生ちゃんを離さない！ 弥生ちゃんが穢れます！」

零華が弥生を取り返そうとするが、如何せん身長が足りず空しく跳ねるだけである。

「弥生、ほら、こっちおいで」

と勇輝は手を伸ばす。すると弥生は秀斗の腕をすり抜けて勇輝に飛び込んだ。

「あっ……勇輝のヤロー」

秀斗はうらめしそうに勇輝をみるが本人は素知らぬ顔である。

「弥生はもうご飯食べた？」

「うん。パパとママと食べた」

どつやら小さくなったついでに偏食が治ったらしい。というより、両親に厳しくしつけられたのだろう。

「そっかあ。じゃあ兄ちゃんも食べてくるよ」

「うん、いつてらっしゃーい」

弥生は手を振って勇輝を送り出してくれた。その愛くるしさに勇輝は思わず抱きしめたくなつたがそれをなんとか押しとどめ、食堂へと向かう。こんなところで弥生を抱きしめたらそれこそ秀斗に殺される。

この屋敷の食堂は晩餐会が開けるほど広く。長い机に六つの椅子。今はその内の一つが子ども用の高い椅子に変わっていた。どこから持ってきたかは謎である。

基本起きた人から食べるので朝食を全員で食べる習慣はない。全員揃うのは夕食が主だ。

かぐわしい香りに引き寄せられて勇輝が重厚な扉を開けると、そこには弥生のご両親がいた。食後のティータイムらしい。

「おはよー」

「おはよー」

挨拶しても返してくれるのは癒慰だけで錬魔は一瞥しただけでにこりもしない。目の下に隈が見えるのは気のせいだろうか……。

和食御膳の前に座り、勇輝は先ほどの弥生の格好を思い出して癒慰に訊いてみた。よく見れば母も娘と同じ格好をしている。

「あの弥生の格好は癒慰がやったの？」

「そっだよ」

「子ども用の服持ってたんだ」

「違うよ。匠特製、伸縮機能付きドレスなの」

「え、隊員服の他にもあるんだ」

「私が持つてる服はほとんどそれだよ」

勇輝は箸を止めて癒慰が持っている服を思い浮かべてみた。看護服からつなぎまで、ありとあらゆるコスプレがつまったクローゼットを思い出して薄笑いを浮かべる。

勇輝はそこからメイド服とフリフリのドレスを着せられたことがあったのだ。

「へ」

どつりでサイズが合うわけだ。

「なんでそんなに持つてるの？ 別に匠特製にこだわらなくてもいいんじゃない……」

「潜入捜査の時にいろいろ便利なものよ。誘拐とかにも応用できるしね」

勇輝は味噌汁でむせた。

(今、あきらかに不穏な言葉がまじってた気が……)

「そつだ！ お兄ちゃんも弥生ちゃんとパールックにしよつか」

「えっ、それ絶対言葉の意味間違えてる……って、錬魔、なんか期待するような眼で見るの止めてくれる？」

ささやかな期待を指摘された錬魔は勇輝から顔を背けコーヒーをすすった。目の保養になると思っっているのは錬魔だけではない。

「まあ、女装は今度弱みを握ったときにするね。さあ、錬魔君、愛する娘の下に行くよ！」

「脅す気満々じゃん！」

「早く来てね」

そして二人が出て行った食堂で勇輝は一人黙々と箸を進めたのであった。

そして両親が戻ったホールでは……。

「しゅーと、しゅーと、これは何？」



「ん？ それは市松人形つーやつで、夜な夜な髪が伸びるって言われてる人形だぜ」

「じゃあこれは？」

「それはな。ミイラ。人間を中身空っぽにして乾燥させたやつ」

「昔は薬にも使われてたらしいですよ」

三人はがらくたの山の真ん中にいた。がらくたというと呪われてしまうほど歴史あるものもあるのだが、こつも無造作に積まれているとありがたみが無くなるというものだ。

秀斗は先ほどからそれらを弥生に見せ、無駄な知識を教えこんでいたのだ。時々零華の補足説明も入る。

「中には本物も混じっているんですから、丁寧に扱ってください」

「お、藁人形セットまであるぜ。あ、年代物のワイン見つけ」

「教育上よくないものが多すぎませんかこのがらくた群は……」

「知らねーよ。大半はこの屋敷にもともとあったものだしな」

秀斗の背後で派手な物音がした。二人が胡乱気に顔を向けると、弥生ががらくたの山を崩して遊んでいる。中世の騎士の兜や剣をほうつている所を見ると、将来が心配になる……。

離れたところで見ているご両親も心配そうに眺めている。

「ところで、なんでこんな物を弥生ちゃんに見せているのですか？」

「いや〜。そろそろ整理し始めねえとあの部屋埋まりそうだからよ」

「勝手に捨てて大丈夫なのですか？」

もちろん弥生の怒りは秀斗に向かうのだが、なるべくなら不穩を持ち込んで欲しくない。

「だから弥生に見せてんだよ。弥生が興味を示さねえもんはいらねえやつだ」

「それは……道理ですね」

「だろ」

そして弥生が第二の山を崩した時に勇輝が入ってきた。

「うわ……もう何から突っ込んでいいのかわからないんだけど」

「まずそのミイラからいっとけ」

勇輝はそれがらくたが発する不穩な空気に見覚えがあった。それは少し前の倉庫探索の折に見たあの怪しげな部屋にあったものである。

「って、ちょっと、弥生の頭が騎士になってるよ！ 弥生！ お前は女だから！ 第二の人生まで騎士道を歩まないでくれ！」

そんな様子を見て父親はどうすれば女の子らしく育つだろうかと頭を悩ますのであった。

「けど、こういうことになる、私たち異空間にひきこもってよかったですって思うよね」

「ああ、本部にいると勝手に人が来るからな」

「この屋敷の空間には嚴重に結界が張ってあり、ふつうの人間は侵入できないようになっているのである。」

「ほんと……」

「どうした」

「ん、気のせいかな……なんか覇動が……」

とその時、弥生たちに近いホールの扉が開いた。ぱつと全員が振り返り、そこにいる人物を見て、驚愕の表情を浮かべた。

「よう。茶を飲みに来たのだが」

「や、鎖羅！」

全身黒ずくめの女性がそこにいた。彼女もまた魔術師であり、年は彼らより上で二十代前半に見える。弥生が黒騎にいた時に共に暮らした、姉と慕われた女である。ついこの間までは弥生と憎しみ合っていたが、誤解が解けたとたんちよくちよくお茶をしにくるようになったのだった。

「珍しく全員がそろってるな。会議でも開いていたのか？ いや、掃除か？」

まず彼らの頭に浮かんだのは弥生を隠さねばということだった。だが秀斗が捕獲する前に弥生はがらくたの山から顔をのぞかせた。

「……なんだそいつは！」

当然見つかる。本人は危ない状態だとはみじんも思っておらず、愛らしい目で様子をうかがっている。

方針転換！　これが弥生とばれないようにしよう！

「あ、これはな……」

「まさか……弥生の隠し子か！」

秀斗の弁解をかき消した鎖羅の言葉は彼らの思考回路を数秒凍結させた。

「え？」

「貴様秀斗！　よくも弥生をたぶらかしたな！」

鎖羅は秀斗の胸倉を掴み勢いよく引き寄せた。鎖羅は長身なので凄まじいと迫力がある。

「え、その、どういうことでしょうか」

早くも押され気味の秀斗は、腰が引けて敬語になっている。

「しらばっくれるな。貴様が弥生に恋心を寄せていることなんぞ、とうの昔に知れてるわ！　我が妹を貶めたその罪、死をもって購うがいい！」

と、鎖羅は闇宵を鞘から抜き払った。

「ちょっと待って！ 早くも親なし子にするつもりかよ！」

秀斗は気が動転しすぎて反論すべき場所を間違えた。火に油である。

「安心ろ。弥生もその子も我が面倒をみてやる」

本気で実行しかねない鎖羅に、彼らは事情を話す決意をしたのであった……。

事の顛末を聞かされた鎖羅は弥生をまじまじと見てからほっと安堵の息をついた。

「なんだ、そうなら早く言えばよいものを。そうか……弥生の子ども時代をじかに見れるとは、良い時に来た」

ナイスバッドタイミングですよ、と勇輝は心の中で突っ込みを入れる。

そしてその思いは全員同じだ。

「おや……よく見れば零華も小さくなっているではないか」

鎖羅はがらくたの山に隠れていた零華を目聡く見つけた。

「ほっといてください」

「似合わないな。お前は人格を保っておるのか。つまらん」

「つまらなくてけっこうです」

「む、可愛げがないな」

鎖羅は零華をからかうだけからかってから弥生に向きなあった。弥生は鎖羅と目が合ったとたん鍊魔の後ろに隠れてしまう。

「弥生。我は鎖羅だ。共に語らおうぞ」

弥生はそつと顔を出してまた隠れた。

「なぜか弥生が恥ずかしがり屋になっているのだが」

隠れ蓑にされている鍊魔はため息交じりにそう言った。まったくもって子どもの行動は意味不明である。

弥生がもう一度顔を出そうとした刹那、その顔の隣を何かが勢いよく通り過ぎた。

弥生は驚いて顔を引っ込める。それは延長線上の壁に刺さった。全員の視線がそれに注がれる。

短剣だ。

「弥生。我と話したくないのか？」

冷やかな声で、あくまで笑顔のまま鎖羅は声をかける。弥生が黒騎にいたころの生活を垣間見た気がした彼らであった。

「や、弥生ちゃん？ どうしたの？」

癒慰が弥生のそばにしゃがんで話しかけた。

「虫……あくま」

「え？」

「こわい……虫もあくまも悪いものなんですよ？」

彼らの視線は再び、鎖羅に注がれた。厳密に言えばその前髪に。鎖羅の前髪は長く、二本にまとめて垂らしてある。それが触覚に見えるなくもない……。

「なんだ？」

「虫ばつくて怖いんだって〜」

「あと悪魔に見えるってよ」

癒慰と秀斗がスピーカーの役割を果たした。とたんに鎖羅の顔がひきつって

「ほう……小さくなくても弥生は弥生か。よかろう、相手になったやろう」

と再び剣を抜き払う。鎖羅も弥生に負けず劣らずけんかつ早い。

「ストップ、鎖羅さん落ち着いて！」

慌てて勇輝が止めに入る。その間に癒慰は弥生の説得にかかった。

「いい？ 弥生。あのお姉さん見た目は怖いけど。いい人だから！ 貴女けっこうお世話になってるからね！ 今朝話した厨房の害虫でも、魂を抜きとる悪魔でもないから！」

お前のせいか！ と数名が心の中で突っ込みを入れた。一体癒慰の教育はどうなっているのか。

「ほんと？」

「ええ」

癒慰は勢いよくうなずいた。ここで鎖羅に暴れられては屋敷が崩壊してしまふ。

「さらさん？」

「姉さまと呼べ。さて、話はついたようだな」

満足そうに鎖羅は微笑み、華麗に鞘に剣を収める。そして颯爽と弥生に近づき軽々しく持ち上げて連れ去ってしまった。

「いいの？ 攫われちゃったけど」

「まあ……大方弥生の部屋で話すのでしょ」

「てか今の弥生に何話すんだよ」

その問いに答える者は誰もいなかった。そして育児から解放された彼らは無残な状態になっているがらく



た群を片づけることにしたのであった。

がらくた、と一括りにされた物の中には実に様々なものが含まれていた。世界中の怪しげな人形、宝剣や王冠も出てきた。かと思えば人骨まで出てくる。

勇輝はそれらにいちいち反応しながら一生懸命整理をしていたのであった。

「ねえ、この藁人形はどうすればいい？」

「呪術系統は捨てるわけにもいかねえしな。そっちの箱にいれとけ」

「秀斗くん。こっちに樽があるんだけど」

「酒なら俺が飲むぜ。火薬なら火薬庫な」

錬魔は剣を集め、脇に積み上げていた。

一体なぜこの量になるまで貯め込んでいたのかと呆れつつ、使えそうな奴を選び出す。

剣は彼らにとって一番馴染みのある武器だ。

「なんでこの屋敷ってこんなばっかあるの？」

「さあな、前住んでたやつに興味じゃねえの？」

「どんな人なんだろ」

「どうせ碌な奴じゃねえよ」

「二人共、手を動かしてください」

そう注意した零華は怪しげな薬を集めていた。片端から机に並べられたそれらの存在感に二人は薄ら寒さを感じたのだった。

「頼むからそれ、弥生の目にだけはいれんなよ」

子どもの興味は恐ろしい。飲めと言われて断る自信が無い。

「これは私の実験材料ですからご安心ください。あ、錬魔君にもおすそわけすませてください……」

「なんか、それも危険な気がする……」

「ね、この人骨群はどうする？」

少し離れたところで癒慰が叫んでいる。彼女の足もとには無数の白骨死体が……

「捨てて！ 早く成仏させてあげて！」

勇輝は勢いよく顔を背け、手を合わせる。本当にこの屋敷は怖い。

「錬魔君とか実験に使わない？ 今ならカルシウムたっぷりのお骨一體に付きもう一つプレゼントキャンペーンやってるよ」

「そんなことしたら崇られるから！ 人間の尊厳を尊重してあげて  
！」

「いらん。骨なら間に合っている」

「うっん、ごみにするしかないかあ」

と、癒慰はごみ箱の中に次々と放り込んでいった。ごみ箱はブラックホールさながら溢れることがなかった……。

「錬魔、もしかして人を実験室に入れないのって中には白骨死体が山積みされてるから？」

「いや……あの中にあるのは……」

「いい！ 言わないで聞きたくない！」

どうしてここにはまともな思考回路を持つ人がいないのか、といまさるなことを思った勇輝である。

「それより、なんであんなに仏様がいるのさ。あれ弥生がやったの？」

「弥生は死体を隠すなんてことしねえよ。昔この屋敷に入った盗賊や、うっかり罠にかかった奴らじゃねえの」

「そっか〜よかった」

弥生が首謀者じゃなければいいのかよ、という突っ込みは置いていて。

「だいぶ片付いてきたぜ」

「そうね……なんか見るからに怪しい箱もあるので、それは

「？」

「呪グッズ」

と、秀斗がその箱を軽く叩いたとたん、その箱が音を立てて揺れた。

そばにいた勇輝が飛びあがる。

「秀斗……もしかしてこれ自体呪われた品なんじゃ」

「そう、旧パンドラの箱」

その箱を秀斗は宥めるように撫でた。

気のせいだろうか、その箱に目と牙があるように見えるのは……。勇輝はそれから眼をそらしてあさつての方を眺めた。

(だめだ、これ以上ここにいたら自分を保っていられなくなりそう……)

「こちらは終わりましたよ」

零華の声に反応してそちらを見ると、彼女の周りは本と毒物にきれいに分かれていた。

「こっちも終了した」

鍊魔の横には高々と剣が積みあがっている。一定量ずつまとめてあるらしい。

「私もお掃除終わったよ」

いつの間にか特大掃除機を持った癒慰が手を振っている。

「んじゃ、部屋に戻しますか」

そして秀斗は空間同士を繋げ、ホールの隣に物置部屋を持ってきた。後は力仕事である。

毒薬は零華の部屋の劇薬庫へ、酒は酒蔵へ、剣は武器庫へと大移動した。

がらくたで埋まっていた物置は綺麗に整頓され、結果あの箱だけが嫌に人目を引くようになってしまった。

「ここに入り込んだ盗賊は間違いなくあの箱を開けるだろうね」

「部屋の真ん中に置いてあるしな」

「それで食べられるんだ……」

「また白骨死体が増えるぜ、ちよくちよく掃除しねえとな」

なんとも不毛な話をしながら二人はその部屋から引き揚げたのだ。つた。

そして全員がホールに再び集まると鎖羅が眠った弥生と待っていた。

「あのがらくたが消えているな。なかなかの邪気を放っていたから後でじっくり見ようとも思ったのだが……」

「あゝ。それなら今度来たときにでも弥生に見せてもらってください。うかつに開けられないんで」

弥生ならあの箱に食われずに開けることができるだろう。

「そうするか」

「なんだあ？ 弥生の奴寝てやがるぜ」

「うむ、少し弥生と遊んだらすぐ寝てしまったのだ」

弥生を疲れさせるほどの遊びってなんだろう、と勇輝は疑問を感じたが怖くて訊けなかった。

「そのまま寝かせよっかあ」

「そうしてやるといい。それでは我はこれでお暇しよう。めったにない弥生と戯れることが出来て楽しかったぞ」

弥生にとっては実に不名誉なことに違いないが、誰も何も言わず鎖羅を見送った。

鎖羅は来たときと同様、勝手に空間の間に道を作って出て行った。

「嵐が去ったね」

という癒慰の言葉にそれぞれ頷いた。

「念のため、屋敷の結界を強化して、誰かが入ってきたらすぐに分かるようにしましょう」

「だな」

と秀斗はホールから出て行った。結界を張るのは秀斗の得意分野であり、この屋敷の結界は秀斗によって維持されている。

「それじゃあ、私たちはお昼にしようか」

いつの間にか時計の針は正午を軽く過ぎていた。

第4章の6 100話記念 小さな弥生、姉さまと遊ぶ（後書き）

あちゃ、もう日付変わったよ！

あ、PV5万突破です。ありがとうございます。

次回「小さな魔術師たちの冒険」



第4章の7 100話記念 小さな魔術師たちの冒険

そして彼らの昼からの行動はというと……。

「また俺の勝ち」

「てめ！ 勇輝ずりいぞ！」

「秀斗が弱いんじゃない」

「激弱」

「癒慰」。てめえにだけは勝つ！」

ホールの隅でテレビゲームをしている三人。その傍らで先ほど選  
び出した剣の手入れをしている錬魔。観察日記をつけている零華。  
各々好きな時間を過ごしていた。

「錬魔。お前もやろうぜ！ 俺お前になら勝てる気がする」

錬魔はそちらを一瞥するとすぐに作業に戻った。

「なあ、錬魔」

「……くだらん。お前らだけでやっている」

「のり悪」

「けっこうだ」

そしてリベンジを挑む秀斗であった。が、筋金入りのゲーマーに勝てるわけがなく、

「あゝ！ こうなったら拳で勝負だ！ 表に出る表に！」

すぐにブチぎれて現実の世界での勝負に切り替えようとした。

「やだよ。俺勝てない喧嘩はしたくないし」

「みつともないよゝあきらめなよゝ」

「うるせえ！ つーか癒慰、お前も初心者のくせになんでそんなに強えんだよ！」

秀斗の怒りの矛先が癒慰に変わる。

「え？ そりゃ、才能？」

癒慰はその矛先を力強く折った。

「こんなもんに才能もクソもあるか！」

錬魔はあまりの騒々しさにこめかみを押さえた。やはり自室で作業をするべきだったと早くも後悔する。

少し黙らせるかと顔を上げた時、その視界がぐにやり、と歪んだ。

(くそ……とうとう眩暈まで来たか)

「おい、お前ら……」

異変はすぐに感じられた、手に持っていた剣が自分の身の丈ほどになっていたのである。

「なっ……」

「うわっ、錬魔！ ちっちゃくなってるし！」

勇輝がコントローラーを放り投げて錬魔に駆け寄った。そして手を伸ばす。

彼としては頭を撫でてみたかったのだろう。いつもなら届くはずのない頭である。

刹那、錬魔は手の中にあつた剣を握り直して勇輝に向けた。

勇輝は急停止し、反射的に手をあげる。まず抵抗のない意志を見せる。それは勇輝がこの半年で無事に生き残るために得た方法であった。

「まずはその口を……」

「ちよつと錬魔！ なんか思い違いしてるって、俺何も思っていない……か、ら！」

突如、必死に弁解をしている勇輝の視界が突如歪んだ。

（やられた？ ガツンとザックリやられた？）

しかし、勇輝は前に倒れていくというよりは落下していくように感じた。どんどん目線が下がっていく、そしてそれはついに錬魔と同じになった……。

「え……まじ？」

錬魔の表情はもはや半笑いに近い。そして勇輝のすぐ後ろで悲鳴があがった。

「いやあああ！ やられたあ！」

皆が驚いて振り返ると、癒慰がさながらお人形となっていた。

「お。似合う似合う」

すぐ隣で秀斗が称賛している。

「ぐはっ」

その顎に小さな靴がえぐりこんだ。顎を押えてうずくまる。

靴が床に落ちた時の音からすると、どうも原材料には金属が含まれているらしい。

勇輝は自分の体をまじまじと見た。なんとふにふにした体だろうか……。

床が近い、天井が遠い。秀斗がいつもにましてでかい。どれも癢に障ることばかりだ。

「お前、チビになっても錬魔よりちっちえんだな」

秀斗が豪快に勇輝の頭を撫でてからかう。

「錬魔！ その剣貸して、こいつ斬る！」

「ん、まかせろ」

鍊魔は一足飛びで秀斗に迫りその剣を振り上げた。が、その剣は鍊魔ほどの大きさの中剣であった。よって剣は重力に従って床に引き寄せられ……。

それに鍊魔は巻き込まれ、後ろ向けにひっくり返った。秀斗がそれを見て爆笑する。あまつ涙さえ浮かべながら……。

「二人の敵！」

癒慰がもう片方の靴を飛ばした。不気味な音を立てて秀斗の後頭部に直撃した。

「うがつ、癒慰！ お前その靴底鉄だろ！」

「不審者対策よ！」

「てめえを襲うバカはいねえ！」

「ひどい！ もう一回お見舞いしてあげよつか！」

「ストープツ！ 秀斗、もう子ども相手にムキになってるようじしが見えないから！ 癒慰もこんなバカ相手にしない！」

見るに見かねた勇輝が仲裁に入った。

「同じ子どもに言われたくない！」

「てめえ、今バカついていったかあ？」

「なんでこつちに切れてんだよ！」

「あれ」

喧噪の中、やけにのんきな声が聞こえた。声の主は眼をこすりながらこちらを見ている。

「げっ、弥生が起きちゃった!」

「れいかのお友だち?」

「そ、そうです。二人だけでは寂しいので呼んでみたんです」

傍観者を決め込んでいた零華が慌てて答えた。弥生がそう思ってくれるのならそれを利用しない手はない。

「癒慰だよ、よろしくね!」

「錬魔だ」

「俺は……」

勇輝も名乗ろうとして思いとどまった。

(勇輝という名の人間が二人もいたらさすがにあやしいじゃん!)

「え」と、はるゆきです

苦し紛れ昔のあだな。こつこつ時の為に偽名の二つや二つ持つとくんだったと後悔する。

「お友だちいっぱい」

寝起き上機嫌の弥生はとても嬉しそうである。それを見て彼らは安堵の息を漏らしたのだった。

「よっしゃ弥生、みんなで遊ぼうぜ」

秀斗が弥生を抱きかかえる。弥生は嬉しそうにはしゃいだ。だいぶ秀斗にも懐いたようだ。

「うん！ 何するの？」

「そっだな」

と考えながらちびっこたちを見まわして、

「少年少女探検団ごっこすっか」

と提案した。

「わーい！たんけんごっこ」

その言葉を聞いてちびっこ達はげんなりする者が二名、目を輝かせる者が二名いた。

「楽しそーだ！」

「はるゆきもいっしょ」

「じゃあ、そうと決まったらお着替えするよ」

「え、着がえ？」

なにやら嫌な予感のする彼らが連れて行かれたのは癒慰の部屋だった。

全体がピンクで整えられフリル多様、乙女満開のその部屋には、ひととき目を引く巨大なクローゼットがあった。その面積は年々増え、もはや衣裳部屋と呼ぶに相応しい物になっている。

そしてその中から癒慰が取り出してきたのは薄茶のお馴染み探検ウェア。なぜかきつちり六着もある。

「これを、着るのか？」

実物を前にして子どもらしからぬ苦渋に満ちた顔をしている錬魔。その隣に言葉もない零華。

「そうだよ。よかつた〜いつか着ることがあるかもって思って人数分買っておいて〜」

物言いたげな顔をしつつ言葉はひとまず飲み込むらしい錬魔であった。

「なあ、これかなりでかいんだけど。着られるの？」

横で服を広げていた勇輝が問いかける。

「袖を通して見て」

自信たっぷりな癒慰が言うので勇輝は頭からすっぽり被って袖を通してみた。



すると不思議なことに袖がみるみる縮み、丈もちよつどよくなつた。

「すげ〜」

さすがメイドイン匠か〜と一人心弾ませる。隊員服の時も感じたが、今回は縮む大きさが違う。

「着られたよ〜」

一同が声のした方を向くとちびっこ探険家に変身した弥生がいた。

「かわい〜」

「みんなもはやく〜」

こうなると着ざるを得ない、あんな楽しそうな顔をされたら断れないではないか。

そして皆が探検服姿になり、屋敷探検の始まり始まり。

しかし、どこを探検するのか、この屋敷の広さは彼らだって把握しきれしていない。居住区域外は未開発地帯なのだ。

うっかりドアを開けたら未知の世界が……なんてことも十分考えられる。

さて、どうするかな、と先頭を歩く秀斗は考えをめぐらしていた。

「ひとまず、一階を探索すつか」

「そうですね。一番安全な所だと思います」

（ん〜安全つてのもちよつとスリルにかけるぜ……そうだ）

秀斗はにやりと笑っていた。そして不幸なことに誰もその笑みに気付けなかった。

「弥生、こつちになんかの像があるよ！」

秀斗の横で騒ぐ勇輝と弥生は身も心も探検家であった。

「わゝ。なんのぞうかなあ」

それはどう見ても悪魔だろう……と冷静な子ども達は心の中で呟いた。

そしてあんなに気味悪い像に平気で触れる弥生と勇輝はすごい、と勝手な感想すらを抱いていた。

「この部屋は何？」

弥生が開けた部屋に彼らは見覚えがあった。つい先ほど閉めたばかりの……。

「あ！ 弥生、そこは入んな！」

秀斗が慌てて止めようとするが弥生はすでに部屋の中にいた。

「あ……」

入ってから勇輝も気づく。ここは物置部屋ではないか。さつきと同様、部屋の中央には怪しい箱が居座っている。

「わゝおもしろそー」

となんの躊躇もなく弥生はその箱に近づいていった。それを勇輝が慌てて止める。

「弥生、これはダメ。危ないんだよ。食べられちゃうんだよ！」

「食べられるの？」

「そう！」

どうして弥生はこれほど嗅覚が鋭いのか。危険なものばかり見つける。

「ほら弥生。ここは子どもが入っちゃダメな場所だぜ」

秀斗が弥生をつまみあげて外にだす。

ここには鍵をかけないといけない、とその場にいる全員が思った。長い回廊を歩いていると、またもや見覚えのある扉が見えた。

「あの中探検しようか」

癒慰の提案はしばしの試案時間を経て採用された。

重厚な扉の向こうには立派な机があり、社長が座るような椅子が付いていた。四方の壁は資料が詰まった本棚で囲まれている。

この屋敷の中核、執務室兼司令室である。

通常その席には弥生が座るはずだが、零華が使用していることが多いだろう。なにせ事務仕事は全て零華が受け持っているのだから。

「うわ………空気悪」

勇輝は入るなりそう呟いて部屋中の窓を開けていった。

「ここ最近仕事もなかったので閉めっぱなしにしておいたのがまずかったらしい。」

「おゝ久し振りに入ったぜ」

「でしょうね。貴方達は一つも私の仕事を手伝ってはくれませんか」  
「ら」

零華のとげのある言葉を秀斗は笑って受け流した。

「ここは何の部屋？」

社長の椅子に座っていた弥生が訊いた。ちゃっかり隣に勇輝もいる。

「ここは俺たちが仕事する場所だぜ」

「私が、です」

「お仕事かゝパパとママもお仕事してるんだね」

その言葉にはつきりとうなずける者はいなかった。この二人の仕事は事件が起こらないかぎりないのだ。

「お前も、大きくなったら仕事しろよ」

この際自分のことは棚に上げた秀斗である。

そしてご両親は大きくなったら暗殺や実験ではなくもっと女の子らしい仕事をして欲しいと願った。

そして、ここからの探検は想像を絶するものとなった。

秀斗が“俺は裏方にまわるわゝあとはちびっこで楽しめや”と言  
って引ッ込んだはいが勝手に空間をいじり始めたのである。

行く先々にトラップがあり、それに勇輝がかかる。それも落とし  
穴とか可愛いものでなく、床が消えてその下に剣が待ち構えていた  
り、上から矢が飛んできたり、拳銃の果てにはゾンビまで出てきた。

「ぎゃあああ！ 止めて！ 助けて！」

という悲鳴が何度響いただろう。

半泣き状態の勇輝と打って変わって上機嫌な弥生。一緒に先頭を  
歩きながらも弥生は華麗にトラップを潜り抜けていたのである。

そして後ろに続く疲れ切った顔の心は大人の三人は

「元の体に戻ったら秀斗君をはずかしく姿にしてやるんだから！」

「切り開く」

「一週間監禁します」

と各々復讐の念を誓っていた。

もう弥生が楽しんでるからいいや、のレベルではない。

現に目の前で勇輝がレーザーで焼かれそうになっているのだ。

「ぎゃああああ、今度こそ死ぬってええ」

「わゝビームだあ」

弥生はよけつつレーザー達を剣で切り捨てていく。  
五歳の女の子が剣を振り回すんじゃない……と見守る子どもたちはため息をついた。

「弥生ちゃんの性格はどう頑張っても直りそうにないですね」

それに両親はゆっくりとうなずいたのであった。

屋敷内を一周してホールに戻ったところで探検はおしまいとなった。

一行が表情うつろに帰ると、元気な秀斗が出迎えた。  
すぐに小さな大人たちが詰め寄る。

「秀斗！ あれは何？ 俺死ぬとこだったんだけど！」

「あはは。はるゆきはほんっと全部の罠にひっかかるよな」

「あんな危険な罠を仕掛けて、弥生ちゃんが引っ掛かって怪我でもしたらどうするつもりだったんですか？」

「大丈夫だって、あれ全部偽物だし」

なぜ秀斗が言つとこんなにも嘘っぱく聞こえてしまうのか……。

「弥生も楽しんでたし、いいじゃん」

「よくない！」

四方からの同時口撃、いつもならかなりのダメージだが今回は違う。

敵は自分よりだいぶ小さいお子様であり、秀斗には子どもがすねて反発しているようにしか思えない。

「ひとまず俺はこの忌々しい服を着替えてくる」

錬魔はひととおり秀斗を睨みつけてから自室へ帰って行った。

それに癒慰と零華も続く。

三人の背に秀斗は

「もうすぐ飯だぞ〜」

と癪に障る声をかけたのだった……。

彼らはホールで食後の一時をゆるやかに過ごしていた。

子どもたちの合宿と、事情の知らないものが見たらそう思うだろう。

子どもたちの騒ぎ声の中、盛大にトランプパーティーが行われていた。

ちなみに今の競技はババ抜きである。

「あがり〜はるゆき君がビリだあ」

「ちえ〜次は絶対勝つ〜！」

本日五回目のババ抜きを開始しようとした時、時計が九時を告げた。

「あら、もうこんな時間ですね」

「お、子どもは寝る時間だぜ」

と秀斗は勇輝の頭をワシヤワシヤと撫でた。完全に子ども扱いである。

勇輝は秀斗にアッパーを決めてやりたいが、この体格差ではダメージはゼロだ。

「じゃあ、弥生俺たちと一緒に寝よっか」

勇輝は当てつけのように、秀斗の手をすり抜け弥生の手を取った。

「おいはるゆき！ おまえどさくさにまぎれて何やってやがる！」

「だって、弥生一人で寝るの寂しそうだから……それに二人つきりつてわけじゃあ……」

秀斗の剣幕に語尾のほうが消えかかっていく。

「ねえ……パパとママは？」

弥生が俯いて発した言葉はその場の空気を張りつかせた。

「ご両親は顔を見合わせる。ご両親は現在子どもの姿だ。」

「いや、その、お母さんたちはちょっと仕事で今日は帰ってこねえんだ」



「そ、そうなのです。だから今日はみんなで寝ましょう」

必至にごまかす彼らを弥生は潤んだ瞳で見上げた。

「パパとママ、弥生のこと嫌いになったの？」

両親を含む全員が首を激しく横に振った。

「そんなわけないよ！」

「無論だ」

「でも……パパって呼ぶと嫌そうな顔するんだもん」

非難の目が一齐に鍊魔に向けられる。鍊魔はそれから逃げるように顔を背けた。

「いや……あれは、嫌だったのではなく、その、気恥かしかったのだ」

鍊魔の言い訳の声は消え入りそうなほど小さい。

「それに、私、パパとママにちつとも似てないもん……髪も銀色だし、養子なんだ」

養子なんて言葉をどこで覚えたのか、弥生はますますしよげかえっている。

「髪色が違っくらい誰だってあるって！」

「そうです。それに貴方の口調はお母様にそっくりですよ！」

確かに弥生の口調はこの二日で癒慰のものに似てきたのだ。

「本当？」

「本当です！」

零華の言葉は説得力あるな〜とつくづく感心する勇輝であった。

「明日になったら帰って来てくれるだろうぜ」

もし明日体が戻らなかったら……その時はまた考えよう。

「……うん。わかった」

「じゃ、一緒に寝ようぜ」

「ちょっとお待ちなさい。貴方こそどさくさにまぎれて何を言っているのですか」

弥生を抱きかかえようとした秀斗を零華が引き止めた。

「いいじゃん、みんなで寝た方が楽しいぜ。弥生もそう思うよな？」

「え……でも、ママがパパ以外の大人の男の人と寝ちゃダメって言ったから……ダメ」

おいこら、なんつうこと教えてんだよ！ と内心毒づきながら癒

慰を見下ろした。

もちろん癒慰は得意満面である。

「そうだよね、大人の男は危険だからね。じゃ、寝よつかあ」

「うん」

そして子どもたちはぞろぞろとホールから出て行った。

「俺も子どもになりたい」

広いホールに響いた呟きは、誰が知っていよう……。

第4章の7 100話記念 小さな魔術師たちの冒険(後書き)

そして秀斗一人が大人として残るといふ展開。みんなちっちゃくなつて可愛くなつてます。

彼らが本当に子どもだったころの話も、そのうち出てくるでしょうね。

では次回「小さな魔術師弥生に笑われる」

第4章の8 100話記念 小さな魔術師、弥生に笑われる

勇輝が起きた時、広いベッドには自分しかいなかった。

みんな早起きだな」と思いつつ着替えを始める。

が、昨日服を置いたところを見て勇輝は固まった。

隊員服がない、どこか何故かメイド服が置いてある。「丁寧にメモまで添えて……」。

犯人が癒慰であることは言わずとも知れたことだ。

「誰がこんなの着るかよ」

自分の部屋に服を取りに行こうとした時、寝巻きがわりのTシャツが消えた。肌に空気が触れてひやりとする。

「え」

勇輝は慌ててメモに手を伸ばす。そしてそこに書いてある文字に目を通した。

“おはよ〜。いい目覚めだった?”

可愛い丸文字がハートが散りばめられたメモ用紙の上で踊っている。

(よくない!)

“今日の服はこれだよ。今着てる服は目覚めて一分ごとに消えていくから気をつけてね”

「なんつうことを!」

その瞬間、短パンが消えた。

「ぎゃあ!」

勇輝は悲痛な声をあげて泣く泣くメイド服に着替え始めた。

小さくなってからろくな目にあっていない。なぜこうなるのか。勇輝は自らの運命を呪ったのであった。

「くそ、後で着替えよう」

そしてぐしゃぐしゃにして捨てようとメモに手に取り、裏にも文字が書かれていることに気がついた。

“あ、言い忘れたけど。その服、着たら夜まで脱げないからね”

「絶対わざとじゃん!」

(なんてことだ……猫耳までつけちゃったし! あゝ嫌だゝこんな姿あいつらに見られたくない)

とは思いつつも、空腹には耐えられず食堂に向かった。食堂に行くにはホールを通らないといけないわけで……。

「おはよー」

暗い声で勇輝は重い扉を開けて入った。急いで詰め寄るべき相手を探すが、その前に目の前の光景に呆気にとられた。

「え〜と、なんか、みんなすごいね」

もうなんと言っておけばいいのか分からない。

そこには勇輝と同じ被害者達がいたのだ。皆それぞれコスプレをさせられている。

「あら……勇輝君。似合ってますよ、メイド服」

朝からご機嫌ななめで冷笑に磨きがかかっている零華は巫女装束である。

「ご丁寧に残る髪まで束ねられて手にはお被い棒まで持っている。

「はるゆき、女の子だったの？」

「ごもつともな質問をした弥生はシスターさんだった。一番弥生とは縁の遠いものを選んだものである。

「違う、断じて違うから！」

「いつそ女にしてやろうか」

いつもより一段と低い声が地面を這ってきた。苛立ちも三割増しだ。

「鍊魔まで何言って……」

その言葉が途中で終わつたのは鍊魔の格好があまりに意表を突いたものだったからだ。すぐに笑いが込み上げて来て、慌てて手で口を塞ぐ。

「……えくと、赤毛のアン？」

「言つな」

スカートを穿かされて、拳句にいつもは後ろで束ねて下ろしてある長い髪も今は二つくくりの三つ編みになっている。顔が以外と可愛いのでからこれがまた似合う。

「なかなかでしょ！ 錬魔君の小さい姿見た時にピンツと来たのよね」

大迷惑なコスプレ狂はその性格を無視して天使ときたものだ。

「お前は格好を悪魔か魔女にすべきだと思つぜ」

秀斗の方に目を向けて、勇輝はとうとう嘖き出した。

その格好はいたって普通のフリフリドレスであったがこれがまた背の高い秀斗には似合わない。かつらまで付けているがおかしい。これは明らかに失敗だ。

「笑つんじゃねえよ勇輝。お前も俺とおんなじで女装させられてんだぞ」

怒りを押し殺した低い声が勇輝をからめ取った。その眼力は今なら飛んでいるカラスを落とせそうだ。

「あ、あはは。いいんだよ俺たちは似合ってるから」

開き直りだが、似合うということは素晴らしいじゃないか。



「お前、今俺を入れたな」

後ろから怒気を含んだ言葉がささった。

「え？ 気のせいだって」

「しゅう、変」

弥生が秀斗のかつらをひっぱって遊んでいる。

「待て弥生！ 痛てえ！ これ取れねえから引つ張んな！」

どうやら鬘ではなく地毛らしい、超瞬間育毛剤でも使われたのだからか……。

「しゅう髪長 い」

「俺で遊ぶんじゃねえ！」

秀斗が捕まえようとするやとすると弥生はするりと抜け、逃げてしまふ。その俊敏さは鎖羅と遊んでからますます磨きがかかっていた。

「くそつ、弥生のやつ、もうちょっと簡単に捕まれや」

秀斗がソファーに悪態をついた時、視界がぐにやりと歪んだ。

（なんだ？ 朝食に毒でも入ってたのか？ でも弥生はこの姿だし

……あ、零華か錬魔のやろつが……）

昨日の今日なので、思い当たる節が多すぎる。

つまりどこを探してソファーに手をのばした。だが掴めたのは背もたれの部分ではなく、座る部分。

「げええええ」

「あゝあ。とうとう秀斗も小さくなった」

悲痛な秀斗の叫びとは真逆の呑気な勇輝の声。

「うわゝ。最悪だあ」

秀斗は小さくなった自分の手を見つめ天を仰いだ。

「あ、でもその格好、似合うようになったよ」

顔が可愛くなった分、女の子に見えるようになっていた。

「そんな慰めいらねえよ」

「わゝ縮んだ！ すごい」

弥生がいやに感心した様子で拍手を送っている。そして観察対象物に近づこうと歩きだしたとたん力が抜けたように座りこんだ。

「きゃ！ 弥生ちゃん、大丈夫？」

すぐに母親が近寄って様子を見る。

弥生はじつとつむいて、苦しげな表情を浮かべていた。

「……気持ち悪」

「え？」

少し声が硬いな、と思った刹那、弥生は元の姿に戻ってしまった。大きくなる時に服が破けるというお色気を少し期待したがシスター服はメイドイン匠。

よって服も一緒に伸びるわけで……。

「うわゝシスター服大きくなっても似合うじゃん」

という感想が生み出されたのである。

「あゝもう、普段も着てくれないかなあゝ」

「あ、それ最高」

「私は絶対嫌ですからね」

「……………」

と楽しい会話をしつつも彼らは一歩ずつ後ろに下がっていった。弥生は意識が朦朧としているのか焦点があっていない。

そしてゆっくりと自分の姿を確認したところで一気に覚醒した。

「な、なんだこれは！ 癒慰！ 貴様の仕業か！」

勢いよく立ちあがり、癒慰の姿を探す。だがその視界に癒慰はいなかった。

「なんだ？ あいつはどこに……………」

そのまま視線を下にずらしていくと色とりどりの頭が見え、顔も見えてきた。

そして彼らが苦い顔をすると同時に弥生の快活な笑い声が響いた。

「な、なんだその様は！ お前ら私の実験室に勝手に入ったのか！」

見事に自分が小さくなっていった時のことを忘れている。

「しかもそろいもそろって女になりよって……おもしろい奴らだな！」

普段無表情な弥生が笑いをかみ殺している様子は実に珍しいもので、彼らは反論する機会を失ってしまった。弥生は実に晴れやかな顔で笑っている。

「お前ら……似合いすぎるぞ」

笑い声を引きずりつつ、これ以上見てられないと弥生はホールを後にした。

弥生が去って、やっとショックから立ち直った彼らは各々呟いた。

「うそ……何あれ、虚しすぎない？」

「記憶のかけらもないな」

「ママ頑張ったのに」

「笑っただけ笑いやがったぜ」

「私たちの苦勞を返して欲しいです」

そして彼らはこの三日分の溜息をついたのであった。

第4章の8 100話記念 小さな魔術師、弥生に笑われる（後書き）

はい、これにて100話記念、ちっちゃくなつた編、もしくは幼稚園編はこれで終わりです。なんだかんだで一か月を費やしてしまつたよ……。

そしてこれを書いた二年前の自分は最後にメッセージを残してました。

「もう少し全体の流れを作る。複線を作ってみる。セリフ」  
ダメだし！ しかも伏線の字を間違えている！

書くだけ書いて推敲は未来の自分にやってもらおうとしたんですね。丸投げ。

ちゃんと見直しましたよ、はい。夏設定から春に変えましたよ。これでいいですか？ 二年前の自分……。

さてと、今回は少し真面目に行こうかな。

四章はいわゆる寄せ集めだから、一話ごとの落差が激しいです。

では次回「命、美しく輝くもの」です。夏休みになっても週一で更新します。

## 第4章の9 命、美しく輝くもの

夜の闇に悲鳴が響きわたる。美しい、女の助けを求めるそれではない。男の、それも複数の断末魔。その声を聞いてさらに人が集まる。だが、すぐにその声は消えてなくなる。その繰り返し。

そんな夜の闇を仄かに街灯が照らした。

光は銀の髪を煌めかせ、髪の間から鋭い光が反射する。次の瞬間には悲痛な叫びが夜の闇を貫き、土の上に横たわった。

立っているのは弥生一人。彼女を中心に人が倒れ、苦しみと痛みに蠢いている。

弥生は口元に笑みを浮かべ、月契に付着した血を払って鞘に収めた。服に、髪に、頬に、紅い血が模様のように広がるが、弥生はそれを気にすることもなく倒れ伏す体を踏みつけて前へと歩きだした。その表情には一点の曇りもなく、鼻歌を歌いそうなほど晴れやかだ。

踏まれた男は短く呻いて気を失う。土は彼らの血で紅く染まり、血だまりには手が、足が落ちていた。それでも彼らは生きていた。まだ死ぬことを許されなかった。

弥生は足音もなくその場を去り、新しい住み家へと帰る。

街灯に照らされた弥生は、少し幼さの残る女の子だった。

弥生はそつと目を開けた。彼女は椅子に座り、机に向かっていた。机の上には壁から外された小さな額が置かれ、傍に写真が置かれている。その内の一枚を手にとって、懐かしさに目を細めた。自然と柔らかな笑みが浮かぶ。

その写真に写っているのは、今から十八年前の弥生と赤子だった。

弥生はその赤子を硬い表情で抱き、視線はレンズを見ていない。

( 暁美さん……貴女は恐ろしい人だ )

弥生は記憶の中の暁美の姿を辿った。最初に会ったのは、彼女と龍牙がこの屋敷に訪れた時だった。その場で弥生たちは龍牙隊四剣浪となることが決まり、暁美は度々如月にやってくるようになった。最近のようすで、遠い日々。

( 必然……か )

弥生は写真を机に置き、椅子の背にもたれて深く息を吐く。耳を澄ませばかすかに銃声がしている。誰かが狙撃の練習をしているのだろう。

弥生は不規則に聞こえる銃声に耳を傾けながら、そつと目を閉じた。

満月が如月の庭を煌々と照らしている。風に花が揺れ、仄かに甘い香りを辺りに振りまく。だが、その心安らぐ香りも錆びた鉄の匂いに消され、弥生に届くことはなかった。

どれほど美しい花も、弥生がそれに気付くことはない。どれほど香りで誘っていても、その花の前で立ち止まることもなかった。彼女の世界に花はない。

弥生が好むのは血の香り。そして命を削るその刹那。

弥生は背後に人の気配を感じて、振り返った。そして抑揚の無い声で問う。

「何か用か？」



問われた秀斗は、すぐに言葉を返せなかった。弥生の姿を確認するようじ上から下まで眺め、厳しい顔をする。

「それはどうした？」

「私の血ではない」

「それは分かっている……なんでまたやりだしたんだ」

秀斗は弥生のこの姿を何度も見たことがあった。満月の度に人間界へ行き、多くの人を傷つけその血を浴びて帰ってくる。それは一時期黒騎にいた頃にも見られたものだった。鎖羅と打ち解けて以来はぱたりと止んでいたのだが。

「理由などない。ただやりたいからやったんだ。安心しろ、殺しはしていない」

そう言つと、秀斗の返事も待たずに弥生は屋敷の中へと入っていった。

秀斗は軽く舌打ちをする。彼にとって人間を殺したかどうかはそれほど問題ではない。むしろ、再び弥生が人間を襲ってしまう精神状態になっていることが問題だった。

「これは、俺の手には負えねえな」

秀斗はくるりと踵を返して自分の部屋の下まで歩く。壁にはロープが垂らされており、秀斗はこれをつたって降りてきたのだ。そして掛け声とともにロープを使って壁を登り始める。そんな泥棒みたいな様子を、満月だけが見ていた。

数日後、如月の屋敷を一人の女性が歩いていた。カツカツと皮靴の音が廊下に響く。

「やーよーいーちゃん。出てきなさいー！」

野球観戦用のメガホンを口に当て、先ほどから弥生の名を呼んでいた。手あたりしだいにドアを開けては閉める。

暁美ははあと溜息をついて後ろを振り返った。

「弥生ちゃんはおくれんぼが好きみたいね」

メガホンで掌を打ちながら、暁美は歩いてきた廊下を眺めた。二十分かけてやっと一つの廊下を見終わったのだ。

「どうも感付いたみたいですね。まあもともとあいつは人間嫌いですから……」

秀斗が呆れ口調でそう返した。本日暁美に弥生の問題行動を治す依頼をしたが弥生は行方をくらまし、目下捜索中である。

「ここまで嫌われると逆に燃えるわね……。弥生ちゃん！ 出ておいでー！」

「どっかしたんですか？」

だが暁美の呼びかけにドアを開けて顔を出したのは、癒慰だった。うさぎの着ぐるみを着ており、耳がかなり目立つ。

「ちょっと弥生ちゃんを探してるのよ」

「そつだ癒慰。ちょっと弥生の居場所映してくんね？」

癒慰は頷き一つで了解すると、土炯を呼び出して弥生の居場所を尋ねる。

「土炯、弥生ちゃんを映して」

「御意」

数秒後には画面が切り替わるように弥生の姿が映し出された。どうやら外にいるようで、噴水前のベンチに座っていた。

「これ中庭ね」

「ありがとう癒慰ちゃん。私一仕事してくるから。あと、今日も服似合ってるわよ」

暁美は癒慰を労うと、ツカツカと中庭へと進行方向を変えた。秀斗はその後を追う。

早足で歩きながら、暁美は胸ポケットからハンカチと小瓶を取り出した。小瓶の蓋を開けて中の液体をハンカチに染み込ませる。

「それ、なんですか？」

「ん？ 必殺技」

「……………」

純真無垢な笑みを浮かべた暁美に、秀斗はそれ以上の追及を止めたのだった。

すぐに二人は中庭に繋がる廊下に行きついた。暁美は一度止まり、外を伺って弥生がいることを確認する。そして秀斗に先に行くように合図した。彼を陽動として使うつもりなのだ。

「……よう、弥生。お前こんなところにいたのか」

弥生ははっと顔を上げて、素早く辺りに視線をやって警戒する。異常がないことを確認すると、秀斗に視線を戻した。

「何か用か？」

「用がなかったら来ちゃいけねえのかよ」

「……いや、どうでもいい」

さらりと言われた一言が秀斗の心を抉る。

（ど、どうでもいい？）

だがここでめげてはいけない。これまで何度弥生に殺されかけたか。それを乗り越えた秀斗はずいぶん神経が太くなっていた。

「弥生、お前疲れてんじゃないの？ちゃんと寝てんのか？」

秀斗は弥生の正面に立ち、膝を折って目線を合わす。そしてその

頬をひよいつと引つ張った。とたんに弥生は胸元から短剣を取り出して、瞬時にその鞘を払い秀斗の喉元に突き立てる。その間一秒。

「……ん、元気そうでなりよりです」

弥生は乾いた笑みを浮かべる秀斗の瞳をじっと見つめた。秀斗は笑いを引つ込めて、同じく弥生の瞳を覗き込む。

弥生が自分を見失いそうなときの癖だ。黒騎に入る前と同じ状況に、秀斗は不安に瞳を揺らした。

「弥生ちゃん」

弥生は秀斗の喉元から短剣を下ろした時、自分の名を呼ぶ声を聞いた。反射的に振り返ると、口に何かか押し当てられ、そこで意識は途切れた……。

「……暁美さん、それ誘拐です」

秀斗は顔をひきつらせている。

ぐったりとした弥生を背負った暁美は、全く気にせず胸を張った。

「任せておきなさい。絶対弥生ちゃんをいい子にしてあげるから」

弥生の夜の徘徊兼人間狩りを止めさせるという使命に燃える暁美は、鼻歌交じりでその場を後にした。彼女の行方は秀斗も知らない……。

弥生が目を覚ましたのは、病院の中だった。

弥生がすぐにそれと分かったのは、癒慰がするコスプレ、看護婦さんが目の前の部屋にたくさんいたからだ。そしてその見え方から弥生は自分が横たわっていることに気がついた。体を仰向けに直す、目の前に顔が現れて驚く。

「なっ！」

ガバツと、風を起こす勢いで弥生は体を起こした。それに合わせて暁美は頭をずらし、衝突を避ける。

弥生は自分が置かれていた状態を把握して、激高した。

「己！ 劣った存在でよくも私に触れたな！」

弥生の声の大きさに、看護婦や患者が一斉に二人を見た。

「黙ってここに連れてきたことは謝るわ。でも、おちびちゃんに蔑まれる覚えはないわね」

暁美が弥生に手を伸ばしたが、弥生はそれを振り払ってソファから飛び降りた。右手を左腰へと持っていく。剣こそ出してはいないが、何時でも飛びかかれる構えだ。

「黙れ、私に触れるな」

頑なな弥生の態度に、暁美は重い溜息をついた。立ち上がって手招きをする。

「弥生ちゃん、今日あなたをここに連れてきたのはね、任務が来たからよ」

どこかへと歩きだした暁美を追う弥生が、辺りを警戒しながら問う。

「任務？　ここでか？」

「そう。ある二人を、守ってもらいたいのだ」

「なぜ私でなくてはならない。守るくらいなら誰でも……」

「今回の敵は、剣でなければ倒せないの。如月で一番剣の腕が立つのは誰？」

わざとらしい暁美の問いに、弥生は答えない。

(何かを斬れるなら、この任務をする価値はあるか)

そう自己完結させて、それきり弥生は黙ってしまった。今はとにかく、剣を振っていたかった。願わくは戦場の中で。

少し歩き、暁美が弥生を連れて行ったのは一つの病室だった。プレートに名は無く、辺りの病室に人の気配は無い。病院の中でも、さらに奥まった場所にある病室だ。

暁美はその扉を開け、中に入る。それに続いた弥生は、その部屋の異様さに息を飲んだ。

部屋の壁には一面にお札が貼られ、破魔矢がベッドに括りつけられている。部屋の四隅には水晶まであった。

そして一際目立つ、サイドテーブルの上に置かれた護身刀。自然と弥生はそれに目を引かれた。

「あら……暁美、来たの？」

ベッドの上に、細見の女性が横たわり腹部が目立っていた。

「ええ。詩織、今日はあなたの護衛を連れて来たわ。私が面倒を見てる如月の弥生ちゃんよ」

詩織は首を傾けて弥生と目を合わせる。弥生は護衛、と口の中で呟き暁美を見上げる。

「私は二人の護衛ではないのか？ 一人しかないが」

「いるわよ、彼女のお腹の中に」

弥生は虚を突かれた顔をして、彼女の腹部に視線を注いだ。その意味を理解するまで、しばし時間がかかる。彼女の状態を、本の中で見た知識と結び合わせるまでの時間だ。

「子ども……か」

弥生は、妊娠した女性を見るのは初めてだった。

「ええ、お医者さまには今日か明日って言われてるの」

詩織は愛おしそうにお腹に手を添えた。ただその仕草はどこか辛そうで、体がだるいようだった。

「それにしても、ずいぶん小さな護衛さんね。可愛いわ」

「こつ見えても強いからね、噛まれると痛いよ？」



和やかに笑う二人の間で、弥生は不愉快そうにそっぽを向いていた。

「……で、私は何を斬ればいい」

暁美はせっつかちねえと呟くと、護身刀を手に取ると弥生に手渡した。

「私には月契がある」

弥生はムツとした表情で刀を突き返した。月契以外の剣を使うのは矜持が許さなかった。特に人間が打ったものなどごめんだ。

「今回の敵はね、魔性のものなの。その護身刀でしか倒せないわ」

「魔物が……」

魔術界でも魔物の出現はたまに報告された。魔界より来たと言われる獣たちだ。

「いいえ、呪術によって作られた霊よ」

「呪……」

それでこの部屋なのかと弥生は納得し、しぶしぶその護身刀を受け取った。月契は人と結界は斬れても霊は斬れないのだ。それに弥生は霊を視ることが出来ず、護身刀ならそこを補うことができる。

「じゃ、私は仕事があるから後はよろしくね」

暁美はにこつと笑うと、詩織に言葉をかけてから部屋を後にした。

「おい！ なぜ私が低俗な奴の護衛を……」

そして一人残された弥生は、三秒間じつと詩織を見たのち、壁際に腰を下ろした。刀を肩にかけると、そのとおり小さな護衛になったのだ。

詩織はそんな弥生を見てふつと笑うと、首を上に向け天井を眺める。

この部屋に来てもう一か月になろうとしていた。妊娠が発覚してから、自分の部屋もこの同様札に囲まれている。

うつらうつらとし始めた時、下腹部に鈍い痛みが走った。

「うつ……」

ぎゅっと目を瞑ってその痛みをこらえる。その間隔は少しずつ短くなり、子どもが出ようと必死になっているのが伝わってくる。

弥生はさつと立ちあがり、鯉口を切って柄を押し上げる。その瞬間、窓の向こうに何かが群がっているのが視えた。

窓が一面黒い。小さく、コウモリのような翼を持ち、目は一つ。細く伸びる手がキィキィと窓ガラスをひっ掻いている。それだけではない。黒毛の真つ赤な目をした狐や、三つの首を持った鳥。ドアの外にも何かがいるようで、ひっきりなしにドアを叩いていた。

気が狂いそうだ。

「お前、大丈夫か？」

お札などの結界によって霊はこの部屋には入ってこられないが、

彼らが発する気は十分人の体に影響を与えることができる。

「……ええ。ただの陣痛だから」

しばらくすると詩織は一つ息を吐き、穏やかな顔に戻った。

「苦しいのに、子どもを産むのか？」

弥生は刀を納め、訊く。

「当たり前よ。私たちの子どもですもの」

弥生はそうかと呟くと、壁にある札の一つに目を向けた。書いてある字はバラバラで、数種類の札が貼ってあるようだ。

「誰かに恨まれているのか？」

「というより妨害ね。笑うかもしれないけど、私は魔術師の家系に嫁いだの。というより駆け落ちね」

詩織は照れ笑いを浮かべ、柔らかな表情になる。

「でも、魔術師にとって普通の人間との結婚はタブーらしくて……子どもを作るなんて言語道断」

「……真血しんけつか」

弥生がぼつりと零した言葉に、詩織は目をまんまるにさせた。

「あなた、知ってるの？」

「私も魔術師だ」

短く、冷たい声音で弥生は言ったが、心は逸っていた。自分の他に、仲間の他に魔術師がいるという事実。

「そうだったの……そう、真血は危険だから、殺せつて。その上、彼が死んで……跡取り問題が出てきたてね。笑えるわ……親戚が、この子と私を殺そうとしているんだから」

「……死んだ？」

弥生の目の前で期待の扉が勢いよく閉まった。

「ええ。もともと体の弱い人だったから」

悲しそうに目を細める詩織に弥生は背を向けて、ドアノブに手をかけた。

「雑魚を片づけてくる」

弥生は一言そう告げ、刀を抜いてからドアを開けた。結界のため中には入れない霊を弥生は蹴り飛ばし、ドアを閉める。

「さて、遊ぼうか。ネズミども」

弥生は不敵に笑う。その笑みは黒く、悪という名にふさわしいものだった……。

## 第4章の10 命、その重みを抱いて

ついでに窓の外にいた霊たちも殲滅した弥生は、やや晴々とした顔で病室に戻った。暗く淀んでいた気分が、体を動かしたことで爽快感に変わっていた。

「……おい、また痛むのか？」

病室のドアを開けたとたん、うめき声をあげる詩織を見て弥生は眉を寄せた。

「ええ……もう、少しね」

苦しげに笑う詩織を一瞥して、弥生は壁際に腰を下ろした。少し刀身を押し上げてみると、もう数匹の霊が窓にへばりついている。弥生はある程度数が溜まってからにしようとして、体を休ませる。

病室には、時計の秒針が刻む音だけが響き、詩織がたまに痛みをこらえている声が聞こえた。

何度目かの痛みが詩織を通り過ぎた時、弥生がぼつりと呟いた。

「ぞくぞくと霊が送り込まれてくる……よほど、その子どもは生まれるのを望まれていないのだな」

一時間足らずで、もう窓は黒く染まり、ドアからも霊が体を打ちつける音がしている。どうやら、少し送られてきた霊が変わったらしい。

「望まずに生まれる子どもなんていないわ」

思いのほか強く否定されて、弥生は無感動な瞳を詩織に向ける。

「私が、望んでいるもの。誰にも邪魔させはしない」

「お前に、真血を止めることができるのか？ なぜ真血が疎まれるかぐらい、知っているのだから？」

弥生は口元に皮肉な笑みを浮かべる。真血は闇の子と同じ禁忌。どちらも恐れられ、蔑まれるものだ。同じ苦しみを味わう者。

だが一方で同じ禁忌なのに、真血を助けたくないと思う自分が可笑しかった。

「ええ……魔術師と人間の間生まれた子は、強大な力を持って生まれる。だから、子どもはその力を制御できずに暴走する……」

暴走すれば、町一つ滅びると言われるほどの力。それは闇の子が闇に吞まれた結果と同じ。

「でも……」

詩織は強い決意のこもった声で続けた。

「でも、真血は大人になれば暴走する危険はなくなつて、偉大な魔術師になれるのよ」

それが闇の子との大きな違い。常に闇に吞まれるリスクを負う闇の子と違い、真血は無事生き延びれば歴史に残る魔術師になれる。

リスクは大きいが見返りもある。だからこの方法は、血が薄まり魔術が衰えた一族にしか許されない、再興法だった。だがそれは万が一の時に殺せる人がいてこそその方法。

「この人間界に、暴走を止められる奴はそういない」

父親である魔術師の格にもよるが、如月が勢力をあげてやっとか  
もしれない。

「……それでも、私はこの子を産むわ。私は母親ですもの」

弥生は思わず笑っていた。クスリと落とすような笑い。

「母親か……お前がその子を恐れずに愛せるか、見ものだな」

弥生は立ち上がった。二度目の狩りに出かけるのだ。

「愛するわ、必ず」

弥生は詩織に背を向けてドアへと歩く。

(愛など……幻でしかないというのに)

弥生はふと頭をよぎった母の姿を、頭を振って掻き消した。自分  
と同じ髪の色をした線の細い女性。顔は臃でしかなく、ただ自分を  
見て怯えていたことだけは覚えていた。

弥生は刀を鞘から抜き放ってドアを開け、目の前で突進の構えを  
見せていた首のない猪に刀を突き立てた。黒い瘴気を発して崩れ落  
ちたそれから刀を抜き、次の獲物を斬り捨てる。

(愛されて、望まれて生まれたその子どもも、いつかは私たちと同  
じ運命を辿る……強大な力は、恐れしか生まない)

弥生は頭をからっぽにするために、ただただ剣を振るった。

返り血は無い。だが、痺気かそれとも術者の怨念か、何かが確実に体力を奪っていく。

胸の奥に鉛を抱えているような不快感は強くなり、苛立ちを抱えて弥生は部屋に帰る。そして数時間経てばまた狩りに出、戻る。

それを何度か繰り返し、夜が来た。

送り込まれる霊はどんどん大型化し、力も強大になっている。おそらく術者も霊が破られていることに気づいて人数を増やしたか、己の命を削っているのだろう。

弥生が鹿を倒し、鳥を斬り捨てて病室に帰ると数人の看護婦が詩織をキヤスターに乗せていた。

詩織は苦しげに眉を潜め、呼吸が荒い。

弥生はすばやくそのキヤスターに呪符が貼つてあることを確認すると、刀を抜き、鞘を彼女に持たせた。

外の敵は全て倒したが、すぐに新手がやって来る。

「走れ、一つでも結界を壊すと喰われるぞ」

事情を心得ている看護婦たちはこくりとう頷き、ドアを開け放つて全速力で走りだした。

弥生もそれに並走し、詩織に襲いかかる霊を斬り捨てる。

結界を施した分娩室に運びこみ、扉を閉める。だが霊はその扉をすり抜けて入って来た。

弥生は慌てて斬り捨て、部屋の結界を確認する。三重の決壊が分娩台の周りに張られ、部屋の壁に貼つてあるのは霊の動きを束縛する類の札だった。



「なるほど、ここで止めるといふことが」

結界は守る範囲が狭ければ狭いほど強力になる。現に雑魚が結界を壊そうと衝突したが、その強さに負けて消滅した。

結界の周りには雑魚が群がり、その中で詩織のりきむ声が聞こえる。彼女も闘っていた。

助産師が声をかけ、励ます。

弥生は群がる雑魚を手当たり次第に葬っていく。その数を半数に減らしたところで、刀が震えた。刀を通してまずいという警鐘が伝わってくる。何か大きなものが近づいていた。

弥生は力を感じる方へじっと視線を注いだ。

ドン、ドン。と地響きが聞こえる。壁から顔が、虎の顔が現れる。前足が現れ、体が姿を現す。

ちつと弥生は舌打ちをした。

だが、虎は不完全で、胴体の半分は腐り骨が見えていた。赤い瞳が弥生を捉え、雄たけびを上げた。

その声に札が燃え、下級の霊は吸い込まれるように虎の口に入っていく。

そして霊を喰い終わった虎は、完全な姿を弥生の前に現したのだ。った。

「ほう。これは、一匹の方がやりやすい」

弥生は刀を耳の横で水平に保ち、きつ先を虎に定めた。なんとかもこの虎を結界に触れさせてはいけない。

弥生の背後では、助産師たちがもう少しと詩織を励ましている。

虎は、猛然と襲いかかった。強い脚力で跳びあがると頭上から弥生を斬り裂こうと爪を出す。弥生はそれを避け、逆にその手を斬りはらった。

虎は咆哮を上げ、傷ついた手を薙ぎ払う。弥生は刀を盾にして身

を守ったが壁に弾き飛ばされた。

「や……弥生、ちゃん」

「お前は黙ってそこで闘ってる」

弥生は体を起こすと、刀を構え直した。

(奴を葬るには首を落とすか、心臓を突くしかないな)

弥生は虎へと駆けると、数歩手前で頭上に飛び上がった。虎は後ろ立ちになり、喰らいつこうと大口を開け牙を向ける。それを弾くと弥生はその背に刀を突き刺した。とたんに虎は暴れだし、弥生は刀を抜いて虎の背から離れた。空中にいるところを横から爪で襲われ、結界に叩きつけられる。どうやら、この結界は力を持つ者全てを弾くらしい。

弥生の目の前に爪が迫り、弥生は右に転がってそれをさけた。だがそれは結界に突き刺さり、結界の一つが破られる。

「ちっ」

背後では詩織が唸っており、助産師たちも必至に子どもを取り出すと頑張っている。

弥生は結界を背にして立ちあがると、刀を両手で持ち中段に構えた。日本の剣術が書かれた本にあった構え方。

弥生は虎と睨みあい、そして虎が動いた。

少し距離を置いて、助走をつけて上へ跳び上がった。結界ごと弥生を切り裂くつもりらしい。

弥生は切っ先を上に向け、距離が縮まるのを待つ。その首元に突き立てる瞬間を見極める。

虎が前足を振りかざしたその瞬間、赤子の泣き声が病室に響き渡った。耳をつんざくような泣き声に虎は一瞬動きを止める。

弥生はその機を見逃すはずもなく、虎の喉に刀を突き刺した。自然と口下に笑みが浮かぶ。

「やっと、生まれたか」

虎は大気が震えるほどの咆哮を上げ、外に飛び出して行った。まるで今生まれた命が、追いついたようだ。

弥生は詩織を振り返った。そしてその子どもを見て、わずかに眉根を上げる。だがそれはすぐに元に戻り、ほっとしたそれでいて心残りのある笑みを見せた。

「よかったな……詩織」

弥生は嬉しそうに微笑む詩織を一瞥して、部屋から出て行った。体が非常に重い。刀を引きずりながら歩き、廊下のソファアに横になった。

（もう、狙われることはない）

あの虎は術者の下に帰った。獲物を狩ることができなかった霊は怒りで術者の元に帰り、術者に代償を求める。今頃術者は虎の餌食になっているだろう。

（呪術などに……頼るからだ）

魔術の中でも底辺に存在する、下法とも言われる魔術。

弥生は長い息を吐き、ゆっくりと目を閉じた。

弥生が目を覚ますと、そこは病室だった。目の前に暁美の顔がある。

「……………任務は終了した」

ゆっくり体を起こし、また膝枕されていたことに気づいたが怒鳴るほどの元気がなかった。まだ、胸の奥に鉛が残っている。

部屋を見回すが、詩織はおらず、検査中だと暁美はいった。

「……………あの子どもは、真血ではなかった」

弥生はソファーに身をもたれさせて、呟いた。あの赤子からはなんの力も感じられず、ただの人間だったのだ。

「ええ。どうやら彼はとつくに魔力を無くしてたのね」

「……………魔力はなくなるのか？」

「魔術師の中にはあちらに行かず、こちらに残った人たちもいるの……………その人たちは一族で婚姻を繰り返すうちにどんどん魔力は弱まっていた」

今からずいぶん昔の話だった。魔術師たちは人間に迫害され、異界へと渡ったのだ。

「お前は、魔術界を知っているのか？」

「そりゃあ、これでも幹部ですから」

弥生は、そうかと短く呟き、口角を上げた。

「だが厄介な真血が生まれなくてよかった。本当に、よかった」

生まれなければいいと思っていた。苦しい人生を送らなくてはいけない子どもを作りたくなかった。だが、一方で生まれて欲しいとも願っていた。必ず大人にして、苦しみを過去のものにしたいたい。自分たちには叶わない、夢を追わせてみたかった。

「……弥生ちゃん。優しいわね」

予想外の言葉に、弥生は暁美へと顔を向ける。

「優しいから、全てを背負おうとするのね。弥生ちゃん、全部置いてしまいなさい。ここは人間界。あなたの血も、運命も、責任も、足枷も、何も無いわ」

言葉が進むにつれて、弥生の表情が硬くなっていく。

「何が、言いたい」

警戒心を露わにし、獣のような目になった弥生を見て暁美は切羽つまった秀斗の顔を思い出した。

“弥生を助けてくれ”と彼は言った。暁美もここ最近、弥生が人を斬りに出ていく頻度が増したことを聞いていた。

“弥生は、命をやりとりしてねえと、自分を実感できねえんだ”

だからなんとかしてくれと、秀斗は頭を下げたのだった。自分では、何を言っても嘘になるからと付け加えて。

そこで暁美は弥生をこの任務に連れてきたのだ。

「自分がわからないなら、愛されることを覚えなさい。愛されることが分からないなら、私があなただを愛すわ」

「何を、何も知らぬお前が、私を愛すだと？」

「ええ、あなたの母親に代わってね」

そう言うと、暁美は弥生の耳元で何かを囁いた。弥生の目が驚愕に見開かれる。

「なぜ、その、名を？」

暁美はその顔を見て、いたずらっぽい笑みを浮かべて人指し指を自分の唇に添えた。

「ある人から教えてもらったのよ」

誰？ と問う前に、ドアが開いて看護婦たちが入って来た。詩織はベッドに横たわり、その傍に赤子が置かれる。そしてもう一人の看護婦が持っていた赤子が、暁美に手渡された。

「異常ありません、元気そのものです」

暁美が受け取った子どもは詩織の隣にいる子に比べると一回りほど大きい。

「……そいつは、なんだ？」

弥生は疑心に満ちた顔で暁美と腕の中にいる子どもを交互に見る。

「失礼ね、私の子どもよ」

「はっ?」

「早いわね、もう三か月だもんね」

詩織が体を起して、抱かせてと両手を広げる。

「うちの子もこれくらい大きく育つかしら」

「あ、その」

暁美の子どもを抱く詩織に、弥生はそつと声をかける。

「ああ、大丈夫よ弥生ちゃん。この子が人間だってことは聞いたわ……これで、良かったのよ」

弥生は詩織の傍によって、小さな命を見下ろした。まだ目も開かないその命は、すやすやと眠りについている。

それと対照的に、目をぱちくりとさせた大きな赤子が弥生を見ていた。

「弥生ちゃん、だっこして欲しいって」

詩織がそつと弥生に暁美の子どもを渡す。

弥生はぎこちない動作でそれを受け取ると、そつと抱きかかえた。確かな重み、暖かいそれはしっかり弥生を見つめている。

「お、おいこれ、どうすれば」

視線をどうすればいいのか、手をどうすればいいのかわからない  
弥生に暁美はカメラのレンズを向けた。おどおどとする弥生を微笑  
ましく思いながらシャッターを切る。

弥生はその音に反応すると、そっと暁美に近づき赤子を突き出し  
た。もう限界のようだ。

「うちの子、可愛かったでしょ」

「別に……ただ重いだけだ」

「それが分かったなら、十分よ。寂しくなったら私がいるから、み  
んなのお母さんのこの暁美がね」

暁美は子どもを抱き、弥生の頭をぐりぐりと撫でた。

「あなたは、一体何？」

その間に暁美は意地悪そうな笑みを浮かべる。

「暁美さんよ。人間で幹部のね」

弥生ははぐらかされたと、ふいっと視線をそらした。

「ついでに言うと、彼女は同じ幹部仲間よ。ちなみに能力者」

「は？」



ぱつと詩織を振り返ると、詩織はのほほんとした笑みを浮かべて手を振った。

「もう引退したけどね〜寿退職よ」

「弥生ちゃんはもうちょっと察知能力を上げないとだめね。敵に気付けないわよ?」

さらに暁美にダメ出しをされて、弥生ははあと溜息をついた。

暁美はにこにここと笑っている。その笑みは、全てを知り、その上で許してくれる気がした。

(敵わない)

弥生はふつと笑って暁美を人間のカテゴリーから外した。無能力であっても、彼女には勝てない。何かがそう思わせた。

「わかりましたよ、暁美さん」

そして暁美はこの子と家に帰ると行って部屋を出、弥生も如月に帰ることにした。

その日から弥生は暁美に逆らわなくなり、満月の人斬りも無くなつたという……。

第4章の10 命、その重みを抱いて（後書き）

更生、ひとつ完了。

次回「人は誰だって風邪をひく」

完全コメディーのノリですね。

## 第4章の11 人は誰だって風邪をひく

ゴホゴホ、コンコン、クシユン。

これは、勇輝がホールに入った時に聞いた音である。

「おはよ……っつて、風邪？」

「ごほごほと言わせながら、癒慰がこくりと頷いた。本日の衣装はそんな体調もあつてか、猫耳にうさぎのしっぽをつけたナーズ服というアンバランスなものになっている。

「なんか、朝起きたら……ね」

「ひどい声、寝てなよ。熱あるんじゃない？」

癒慰の声はかすれ、頬も赤い。勇輝は癒慰の額に手を当てて、

「あゝ、これは熱あるよ」

とそのまま頭をくしくしと撫でる。癒慰はぼけーとされるがままたに撫でられていた。

「こゝ、こんな熱に負けていちゃ、勇輝君ハンターはやって、られな  
いわ」

熱にうかされているのか、言葉の内容が理解できない。

「ひとまず、部屋に戻って寝て。後で鍊魔連れていくから」

癒慰は弱弱しく頷いて、ゆっくり動きだした。多少よたついているが、たぶん大丈夫……と、癒慰はテーブルに足を引っかけた。

「うわっと」

転ぶ寸前で勇輝がその手を掴み、そのまま部屋へと送り届けることとなった。

始終ぼーとしていて、ずいぶんと熱は高そうだ。

（魔術師でも風邪って引くんだな）

勇輝は癒慰をベッドで寝かせ、そう思った。

彼らは異世界人なのだから人間界のウイルスなど効きそうにないのだが……。

勇輝が癒慰の部屋を出ると、キュルっとお腹が鳴ったので欲望に忠実に朝ご飯を食べることにする。

厨房に入ると零華が料理をしていた。何やら臭いが漂ってくる。

「零華おは……ってなんか焦げ臭い！」

勇輝は慌てて駆け寄り、鍋の中を覗き込んだ。鍋の中は可哀想なにんじんとじゃがいもの地獄絵図。

すぐに火を消して、鍋を流しに置いて水を入れた。

「零華、いったい何を作ろうと……」

応急措置をし終えた勇輝は、零華を見て異常に気がついた。目がうつろで息が荒い。

「えっと、肉じゃがを……あら、お味噌汁でした?」

すかさず勇輝は零華の額に手を当て、熱があるのを確認する。

「零華、熱あるよ。風邪ひいてる」

「風邪? まさか、あれはバカしかかからないものでしょう?」

「逆だって、ひとまず寝よう。これ以上何かが起こる前に寝てください」

あの鍋は一步間違えれば火事なるところだった。零華にはありえない失敗に、勇輝の肝は冷える。

「今日はやる必要があります」

「だめ! いいから大人しくする!」

零華は仕方ありませんね、と厨房を出て行った。足取りは確かだが、いつもより思考回路が断然鈍くなっている。

「如月に風邪蔓延してんじゃないの?」

そして勇輝は鍋を洗い、新しく自分のお味噌汁を作ることにしたのだった。

朝食を食べ終えた勇輝は、急ぎ錬魔の部屋へと向かった。病人が

二人、至急医者に診てもらわなくてはいけない。  
勇輝はきちんとノックをしてから入る。

「鍊魔く、癒慰と零華が熱だしたんだけど」

机に向って何かの資料を見ていた鍊魔は、回転椅子をくるりと回した。

「……二人が熱？」

ぴんとこない鍊魔だったが、ひとまず資料を閉じて立ち上がった。

「風邪だとは思っけど、一応診てあげてよ」

「わかった」

鍊魔は机の脇に立てかけられていたカバンを持って勇輝の後に続いた。いつでも診察用の道具は準備してある。

「でもさ、魔術師でも風邪って引くんだな」

癒慰の部屋に向かう途中で、勇輝がそう呟く。

「まあ、魔術師といえども基本、作りは人間と同じだからな」

「秀斗は風邪ひきそうにないけどね」

「ああ、引かんだろう」

そして癒慰の部屋についた勇輝は、医者助手気分で鍊魔の後に

続いたのだった。

「あ、鍊魔くん……おはよ」

癒慰は言われたとおり、大人しくベッドで寝ていた。時々、ふやあゝと不思議な音を発している。

鍊魔は近くにあった椅子をベッド脇に置き、それに腰掛けると、鞆の中から体温計を取り出した。

待つこと一分。デジタルな音が響き、体温計が鍊魔の手に戻ってくる。

「三十九度、完全な病人だな」

「体が重い……熱い」

「栄養剤を打っておくから、寝ている」

鍊魔は鞆の中から注射器を取り出し、針を装着する。数種類ある薬品の中から、緑色の液体が入った瓶から液体を吸い上げた。流れるような作業に勇輝は心の中で拍手を送る。

だが、その瓶に張られたタグを見て固まった。

“仮死剤”としっかり書かれたそれを、鍊魔は癒慰に打とうとしている。針が癒慰の腕に刺さる寸前で、勇輝は鍊魔の腕を掴んだ。そしてその腕の熱さに目を見開く。

「れ、鍊魔……それは栄養剤じゃない、よ？」

ゆっくりと勇輝の方を見た鍊魔の目は潤んでいた。頬に赤みがさし、ゆらゆらと体が揺れている。

「ま、まさか錬魔も風邪とか言わないよね」

「……実は朝から目眩がしたのだが、やはり風邪か」

老老介護ならぬ病病看護だ。

勇輝は意識が遠ざかるのを感じた。病人がいる上に医者まで熱を出したとなれば誰が看病をするのか。

「……ちよつと待て、この三人がやられてるならもしかして」

勇輝は錬魔から注射器を取り上げ、部屋で寝ているように言う部屋から飛び出した。

胸の中は嫌な予感しか詰まっていない。

秀斗はともかく、普段から食生活に不安がある弥生はすぐにウイルスに負けてしまいそうだ。

全力で弥生の部屋まで走り、ノックもせずにドアを開けた。

「弥生！ 無事？」

勇輝の声にかぶさるように、ドスツという音が横でした。壁に短剣が刺さっている。

「げ、元気……」

短剣から目を離し、正面を向き直った勇輝は言葉をつづけることが出来なかった。正面の机では弥生が突っ伏し、その足元にはなぜか秀斗が転がっている。すでに何かが起ったらしい。

ひとまず勇輝は転がる秀斗を無視し、弥生に近づいた。気配に気づいた弥生はゆっくりと顔をあげる。



「勇輝……体が言うことを聞かない」

弱弱しい声に、勇輝は額に手を添えながら重症だなと感じた。いつもの威勢が一欠片も感じられない。

「風邪だよ、熱があるんだ」

「熱、か。それでいつもより短剣の位置がずれたのか」

勇輝は錬魔から借りてきた体温計を弥生に渡すと、壁に目を向けた。確かにいつもなら短剣は勇輝の頭上を通り過ぎるか、顔のすぐ横に刺さる。今回はずいぶん遠い場所に刺さっていた。そして視界の右の方に見てはならないものを見た気がしてすつと視線を逸らす。ちらりと見えたのは無数の剣。それが樽に刺さった剣のごとく壁に刺さっていた。そして床にも剣やら槍が落ちている。誰に向けて放たれたものかは、言うまでもない。

勇輝はしゃがみ込むと、床にうつぶせに転がっている秀斗の頭を小突いた。

「秀斗、生きてる？」

「……おう、勇輝か。まさに生き地獄だな」

地獄と言うわりには秀斗は無傷であるが。

「自業自得だと思っよ」

「だってよ、なんか無性に寂しくて、弥生に会いたくてさあ」

半泣きの秀斗に勇輝は、ん？ と首をかしげその額に手をやる。秀斗が弱気になるなど異常以外のなにものでもない。

「そしたらさあ、近づいても弥生起きないから、つい……後ろからぎゅっと」

「今度から熊のぬいぐるみでもだけよ……そんでとつと部屋に帰って寝て」

額が熱い、目も潤んでいるし、声も鼻声だ。

勇輝は電子音を耳にして立ち上がり、弥生から体温計を受け取ってその数字を読んだ。

「……三十九度五分。これやばくね？」

如月の魔術師は全滅。その高熱と感染力はインフルエンザ並みだ。弥生をベッドに追い込み寝かせ、秀斗を立たせて、支えながら歩きます。自分よりも身長の高い人を支えるというのはかなり大変だ。少し劣等感も刺激される。

（つーか、なんで俺だけ元気なわけ？）

殺しても死なない秀斗までもがふらふらになっているのを見ると、元気な自分が不審に思えてくる。同じものを食べたのに自分だけ食あたりにならなかった時のような一種の疎外感を感じる。

（俺、五人の看病しないとイケないのか）

勇輝はくるりと進行方向を変えた。半分秀斗を引きずって移動す

る。

「おい、俺の部屋はあっち……」

「病人は黙ってて」

勇輝は覚悟を決めて、時に優しく時に厳しく看病することに決めたのだった。

病人五人が集まると、その部屋は病室に早変わりした。勇輝が探険中に見つけた団体客向けの部屋に全員を移したのだ。彼らの部屋は互いに離れており、一人ひとりを看病するのは面倒なのが理由である。

部屋にはコンコン、ハクシユン！ゴホゴホと病人の主張が激しく響いている。

「ひとまずこの薬飲んで寝てて」

勇輝は家から持ってきた解熱剤を水とともに彼らに与え、自分は厨房へと向かう。

病人に何かが必要かと言われると、まずご飯だ。胃に優しく、それでいて体力のつくものを食べさせなくてはいけない。

厨房の隣にある貯蔵庫で食材を探す。米を発見し、冷蔵庫から卵を取り出す。鰹節を削って昆布を軽く拭いた。出汁から取る本格的なお粥だ。

コトコトと煮ること二十分。いい感じにとろりとしたら溶いた卵を回しいれて、出来上がりだ。

「よし、ちよつどご飯だ！」

勇輝はワゴンに人数分の小皿とスプーン、そして鍋を置いてコロコロと押す。その様子はさながらメイド。メイド服を着ていないのが残念だ。

「はい、みんな。ご飯だよ」

勇輝は五人が寝ているドアを開けて満面の笑みを投げかける。彼らはもぞもぞと起きて、ぼうつとした顔を勇輝に向けた。部屋全体がしんどい雰囲気だ。

給仕係の勇輝は、小皿にお粥を取り分けて全員に配っていく。

「……いない」

一人ごねる人がいた。食事拒否の常習犯、弥生だ。

「食欲が無い」

普段食欲あつたんだ、というツッコミは置いて、勇輝は問答無用で弥生の手に持たせる。

「だからいらないと」

「じゃあ俺が食べさせてあげようか？ あーんって」

「それは……いやだ」

「じゃあ食べて」

弥生は短く呻き、ゆっくりとスプーンを口に運んだ。小さく、勇輝が怖いと呟いたのは聞かなかったことにする。

「それ食べれたらゼリーあげるから」

頑張った子にはご褒美を。勇輝は看護師というより、保育士になった気分だった。

「勇輝君、あ〜ん、して？」

弥生の隣のベッドに寝ていた癒慰が勇輝の服をついついと引っ張った。甘えモード全開だ。

「癒慰……その口利けるなら自分で食べれるって」

勇輝はにこつと笑って癒慰をかわすと、黙々と食べている鍊魔のベッドに座った。

「でさ、これ何風邪？ 魔術師風邪？」

新種のウイルスを疑う勇輝に、鍊魔は視線をやり、スプーンを置いた。

「それも有り得る。お前だけ無事というのも不思議な話だからな」

「勇輝、おかわり」

向かいのベッドに寝る秀斗がスプーンを上げてクルクル回している。

「はいはい、そんだけ元気ならすぐ直りそうだね」

勇輝は秀斗から小皿を受け取ると、お粥をよそう。ついでに自分の分も取り、秀斗の隣で食べることにした。

「勇輝……ゼリー」

今度は弥生が呼んだ。

「私も欲しいです」

零華もねだりをみせる。

どうも彼らは熱のせいで甘えん坊になっているらしい。

「わかったから、そういう目で俺を見ないで」

零華に加え、癒慰も加わってうるうるすると勇輝を見ている。

勇輝はりんごゼリーを出して、彼女たちを笑顔にさせると食器を片づけ始めた。

昼食の片付けも終わり、買い出しを済ませた勇輝は彼らの様子を見に行った。ついでに熱を測って、状態を見る。

「……四十度」

最高記録を出したのは、ベッドにへばりついている秀斗だった。他の四人も三十九度と高いが……。

「さっきまで元気だったよね。何があったのこの数時間で」

しかも全く解熱剤は効かなかったようだ。魔術師に人間の薬は効果が無いのだろうか。

「ぐるぐる回る」

彼らの額に買ってきた氷枕を置き、固いと文句を言う数名を笑顔かつ笑っていない目で黙らせた。

「あ、水少なくなってる。俺取ってくるわ」

熱が出た時は水分補給が大切である。

勇輝は厨房で水を汲みながら夕食のメニューを考えていた。

（また粥つてのものな。でもそれが一番胃に優しいし……トッピングを変えるか？）

勇輝が二三のメニューを頭に浮かべた時、ピーンポーンとインターホンが鳴った。勇輝は空耳かと首を傾げる。

またピーンポーンと音がした。

（この屋敷にインターホンって……あつた！）

勇輝は最近つけられたインターホンの存在を思い出すと、ダッシュでホールへと向かう。

音は館内に響くようだが、受話器はあそこしかない。

(癒慰)、つけるならもつと受話器を増やしてくれ)

勇輝はホールに滑り込み、受話器を取った。

「はい、如月です」

受話器の向こうで相手が息をのむのが聞こえた。

「わ、わたくしは龍牙隊直属の鈴木と言います！」

声だけで彼がガチガチに緊張しているのが分かる。

勇輝が敬礼でもしていそうだなと思いつつ、ドアを開けると、本当に敬礼をしていて目を丸くする。

「春日、勇輝殿ですね！ お噂はかねてより拝聴しております！

本日はお会いできて光栄であります！」

本人は必死のようだが、正直看病疲れが出始めている勇輝にこのテンションはきつい。

「あの、さ。もっと普通にしゃべってください。むしろ俺より先輩なんですから」

彼はどう見ても二十は過ぎている大人だ。それがなぜ高校生に頑張れば見てもらえるような子どもに緊張しているのか。

「そそ、そんな、如月の方と口を利くなど」

「さっさと直して」



声に苛立ちを含ませると、彼は顔を青くして直立不動になった。ぱくぱくと口を動かして何か言おうと頑張っている。

(あちゃ……ついきつい口調に)

ひとまずお茶でも出そうかと訊くと、彼は首をもげる勢いで横に振った。断固として屋敷に入ろうとしない彼を見て、そういえば歩も如月に踏み入れるのを拒否していたことを思い出した。

(よほどごっこ嫌われてんの?)

勇輝は拳動不審になっている彼を落ち着かせようと、精一杯の笑顔を作った。優しさを総動員して癒しオーラも出す。

勇輝の笑顔に、彼はほっと肩の力を抜きぼうつとその顔に魅入った。

「で、なんの用ですか？」

彼ははっと我に返ると、固い表情で用件を切り出した。

「その、牙軍の皆さんはお元気でしょうか」

「はい？」

「具体的に言いますと、風邪で寝込んだりしていませんか？」

「……まさしく今寝てるけど」

なぜ分かるのだと勇輝は不審な眼差しを彼に向ける。それに敏感

にも気づいた彼は、慌てて言葉を付け足した。

「じ、実はですね、本部の方でも隊長を始め牙軍の方が一斉に寝込んでおられるのです」

「え？」

勇輝は以前本部で会った牙軍の人たちを思い出す。皆個性的で強く、とても寝込んでいる様子が想像できない。

「そこで死堅牢の様子見と、可能であるならば錬魔殿にご助力頂きたくわたくしが参ったのです」

「なるほど……じゃあやっぱり能力者だけがかかる風邪なんだ」

「おそらくは。今、科学班が懸命に原因と特效薬を作っていますので、なんとかなるとは思いますが……」

彼の表情は深刻で、今回の風邪は隊にとってはただの風邪では済まされないということが分かった。今何か事件が起こっても闘える者はいないのだ。

「そっか、わざわざありがとうございます。薬が出来たら届けに来てください」

「はい、必ず」

彼はしっかりと頷き、一礼すると早足で帰って行った。ドアの外は本部に繋がっており、薄暗い廊下が続いている。普段この道は閉ざされているのだが、結界を管理する秀斗の不調により弱まってし

まったようだ。

「さてと、水を持っていくか」

勇輝は彼が無事四剣琅の扉から出て行ったのを見届けると、ドアを閉めて彼らの部屋へと向かった。病人となって甘えとわがまま度がアップした彼らがお待ちかねである。

第4章の11 人は誰だって風邪をひく(後書き)

思いのほか長くなってしまいました。

次回「薬を嫌がっているのは風邪は治らない」です。

## 第4章の12 薬を嫌がっているのは風邪は治らない

勇輝が彼らの病室に入ると、一斉に文句を言われた。遅い、と。彼らに水を渡しつつ、先程の客人の話をする。

「じゃあ鷺の野郎もくたばってんのか……一発殴りてえ」

水を飲んで秀斗は恨めしそうに言った。

「そのベッドから出られる元気があんの？」

勇輝は呆れ顔で弥生の顔色を見る。ぶつぶつとうるさい秀斗に対して弥生は先程から何もしゃべっていない。なんとなく心配になって体温を計ると、四十度に到達していた。

口を動かす元気もないということか。

皆一向に熱は下がらず、勇輝は椅子に座ってこめかみを押さえる。

「俺が熱でた時って、何してたっけ……」

ここ何年も熱を出した記憶が無く、小学校まで遡るはめになった。その時もこれほど高熱は出ていなかったなので、布団の中でゲームをしていた記憶がある。もしくはぼーっとテレビを見ていた。

（そういや、小一の時にインフルエンザにかかったけ。あの時は母さんもいたよな……）

あの時はさすがにしんどくて、ぐったりとしていた気がする。食欲も無く、薬も嫌でぐずっていた。

(あん時、母さんがなんか作ってたよな)

スプーンを持ち上げるのも億劫で、何かを飲まされた。甘くて、それでちよつと変な味もした。どろつとしていて、少し黄色い……。

「……………あ、卵酒だ」

勇輝の頭上に電球が光り、すつと立ち上がった。思い出せばすぐに実行だ。

「俺、卵酒作ってくるよ。あれ、栄養もあつて風邪に効くんのだ」

確かあれを飲んでだいぶ楽になったような記憶もある。そしてふわふわしてすぐに眠れたのだ。

「じゃ、寝ててよ？」

勇輝は軽く手を振って部屋を出て行った。

そして十五分後、小さな鍋を持った勇輝がやって来た。

勇輝が鍋の蓋を開けると部屋に酒の香りが満ち、彼らは興味深そうにその鍋を見ている。

「卵酒つて、酒の種類か？」

最初に酒にうるさい秀斗にコップを渡す。秀斗はくんくんと匂いを嗅ぐと、一口飲んでみた。酒の香りに甘み、そして仄かな生姜。

「へえ、なかなか美味しい」

「だろ？」

勇輝は他の四人にもコップを渡し、自分も疲れを労わる意味で飲み始めた。仕事の後の酒は最高だ。

「これ飲んだら、夕食まで寝てね。風邪は寝て治すしかないんだから」

「はい、じゃあ勇輝君、もう一杯」

癒慰はコップを前に突き出し、勇輝はそれを受け取って注ぎ入れる。

「ん？」

勇輝の背後で秀斗が首をかしげた。コップを勇輝が座っていた椅子に置き、腕を伸ばす。

「どうか、した？」

とうとう脳に異常か？ と勇輝は不安になる。確か人間は四十二度で危なくなるのではなかったか？

指をグーパーしていた秀斗が、コキコキと首を鳴らした。

「なんか治ったかも」

「いやいや、そんなわけないって」

これで治れば医者はいらない。今頃卵酒は神として崇められているだろう。

「あれ、なんか身体が軽くなってる」

癒慰も伸びたり縮んだり、そしてひょいっとベッドから降りた。声が何時ものものに戻っている。

「なんとも不思議な感覚だな。先程までの胸のむかつきがさっぱり無くなっている」

「本当。むしろ具合がいくらいです」

「またまた」

信じられない勇輝は、先程までぐったりとしていた弥生に体温計を渡した。弥生は口を閉じたままだ。少し目に鋭さが戻った気もするが……。数字が出ない限り信じない勇輝だ。

「卵酒つまっ」

秀斗は勝手にコップに移して飲み始め、鍊魔は癒慰と零華の額に手を当てて医者仕事を始めた。

「……三十五度二分」

弥生の体温計を見た勇輝は、呆然と呟いた。熱が下がったところか少し低めの体温だ。



「ありがとう勇輝。卵酒はすばらしい薬だな」

弥生はするりとベッドから降り、腕を回す。そして鍛錬をすると言って出て行ってしまった。

「ええええ、卵酒って何もの？」

彼らの魔術も常識の範囲外ならば、彼らの風邪も常識の範囲外。勇輝は疲れが倍増した顔で天井を仰いだのだった……。

それと時を同じくして、龍牙隊の隊長室ではマスクをつけた龍牙が部下の報告を聞いていた。彼自身も風邪をひいたが、熱も低くまだ動けるほうだった。

「それで、牙軍はどうだった？」

龍牙は目の前に立つ直属の部下に報告を促す。

「はい。牙軍は死堅牢も含め全員が熱を出して寝込んでいました」

「やはりそうか……如月まで」

「ええ。人間である春日勇輝は可愛く元気であったと報告が上がっています」

彼は部下が報告した言葉をそのまま報告する。まだ経験の浅い部下を度胸付けのためにと如月に行かせたところ、やたらと興奮して帰って来た。そして如月の全滅と春日勇輝の可愛さについて熱く報

告したのだった……。

「そう、かい。しかし、これが長く続くと問題だな」

「ええ、誰も依頼をこなす者がおりません」

彼は眼鏡をくいつと上げて、手元の資料に目を落とす。彼は龍牙の秘書の役割も果たしていた。

「今のところ早急に片づけなければいけない任務はありませんが……」

「隊長！」

渋い顔で状況を述べる声をかき消して、白衣姿の女性が駆け込んできた。話を遮られた彼はあからさまに不愉快な顔をして、彼女を睨む。

「何ですか？ ノックくらいしてください」

「隊長！ 特效薬が出来ました！」

眼鏡の言うことをさらりと無視して、女性は二つのカプセルを龍牙に差し出す。

「ずいぶん早かったね」

「美月さんが全面協力してくださいましたから。うふふ、普段は調べることのできない美月さんの体でいろんな成分を試すことができました」

うふふ〜と身体をくねらせて喜びを表現する彼女を見て、掌の薬がとても尊いものに見えてきた龍牙だった。

（美月……君の犠牲は忘れない）

ちなみに研究をしたのは美月直属の科学班であり、いわゆる美月は飼い犬に手を噛まれたことになるのだが、上司に対する恐れなど研究の前では塵と等しくなるのが科学者だ。

「えっと、ちなみにこれは何で出来ているんだい？」

美月に試された成分となるとやや不安になる。

「人間に必要な栄養素全てとアルコール分、さらに糖分も数種類とジンゲロール・ショウガオール・ジンゲロン、シネオール、レチリンとか、シアル酸とか、です」

胸を張って呪文のように成分を上げ連ねる彼女を、龍牙は腕を上げて止めた。

「その、もう少し具体的な品目などで頼む」

「あ、はい。えっと、この成分たちは……卵と、酒、生姜は絶対で、あと隠し味に砂糖か蜂蜜です」

急に馴染みのある品名になり、龍牙はふとその食品を頭の中で組み合わせた。なにやら懐かしい響きが……。

「……卵酒かい？」

昔から民間療法として生姜湯と並ぶ飲み物だ。

「はい、平たく言えばそうなります」

「わかった、ありがとう。早急に各病人に配ってくれ」

「了解しました！」

白衣の女性が出て行ったあと、龍牙は眼鏡が持ってきた水で薬を飲んだ。どうせなら卵酒が飲みたかったと思いつながら……。

おまけ

人間界とは隔絶した異空間、氷騎。

「阿修羅、弥生が手紙で薬を送って来たんだが……しかもかなり心配されている」

「さあな。向こうで何かあったんだろっ」

難しい顔で手紙を読む鎖羅と、興味なさそうにソファーに寝転がる阿修羅。

「それは大変だ。見に行かなくては！」

「じゃあついでに秀斗に顔を見せるように言っておいてくれ」

手紙を暖炉の上において踵を返した鎖羅を、阿修羅はひらひらと手を振って送り出す。

「自分で会いに行け」

鎖羅はそう言い残すとぱたりとドアを閉めた。風邪ウイルスもない辺境の異空間で今日ものんびりと過ごす二人であった。

さらにおまけ

ある日の如月。

勇輝は鍊魔の部屋を訪ねていた。鍊魔は研究中だったのか、白衣を着てコーヒーを飲んでいる。鍊魔の部屋は自室と診療室を兼ねているので隅の方には身体測定セットがあり、机のそばには診療室にある丸椅子も置いてある。

そこに勇輝はちょこんと座った。

鍊魔はマグカップを机に置き、具合でも悪いのかと聴診器を取り出す。それを勇輝は手で制した。

「相談があるんだ」

固い口調、表情にもいつもの明るさがなくずいぶん深刻な悩みのようだ。

「なんだ？」

医者は心身のケアが勤め。カウンセリングも仕事のうちだ。

勇輝は鍊魔をじっと見つめ、言うか言うまいか迷った挙句、もごもごと話し始めた。

「その、さ……身長が伸びる薬ってある？」

表情に対する内容の軽さに鍊魔は吹き出しそうになったが、医者プライドと良心で堪える。他人から見れば小さな悩みも、本人にすれば重大なのだ。

勇輝は余命宣告を受ける患者のように鍊魔の答えを待っている。鍊魔はそれにさらに笑いのツボを刺激され、すっと視線を逸らした。それを悪い意味に取った勇輝はガーンとショックを受ける。

（無理、なの？）

「ちよつと待て、今探すから」

勇輝の勘違いに気づいた鍊魔はすっと立ち上がり、戸棚へと歩いた。その肩が小刻みに揺れている。鍊魔はそれを堪え、薬品がさまざま置かれているそれを開けると、さらに冷蔵保存庫の鍵を開けてやや重い扉を開く。冷気の後に見えてきた瓶には、常に変色を繰り返す液体や、何かの目玉と思えるものや何かのひれが入っていた。勇輝はその光景にゴクリと唾を飲む。その中からとんでもない秘薬が出てくる気がした。

鍊魔は瓶をより分け、一つの瓶を取り出した。日の光に照らされたそれは、乳白色で透明度はゼロだ。

鍊魔はコトリと机にそれを置き、すつと勇輝に差し出す。ゆらゆらと揺れる液体は勇輝を誘っているようだ。

「これを飲め」

勇輝は恐る恐るそれに手を伸ばし、蓋を開けた。

(これを飲めば俺も錬魔みたいに背が高くなれる)

高鳴る鼓動。いけないことをしている気がして、もう一度錬魔を見た。錬魔はそんな不安そうな勇輝を勇気づけるべくコクリと力強く頷く。信頼する医者からの太鼓判を受け取った勇輝は心を決めた。勇輝はぎゅっと目を閉じ、一気に液体を胃に流し込んだ。その液体が舌に触れた途端カツと目を見開き、半分ほど飲んだ時点で口を離した。

「錬魔……これ牛乳じゃん」

そう口にした勇輝のこの世の終わりを見たような表情は、翌日錬魔の腹筋を筋肉痛にさせるに至った。

その日の午後、厨房でぶつぶつと何かを唱えながらミルクスープを作る勇輝の姿が目撃されたらしい……。

第4章の12 薬を嫌がっているのは風邪は治らない（後書き）

おまけのほづが長い気がする。

勇輝は小さいからこそ勇輝なんです。それでいいじゃありませんか。

次回 「時には昔の話を」

久しぶりに美月さんが出てきます。



#### 第4章の13 時には昔の話を

これはとある一時。流れる時の中で語られた、断片である。

その部屋を一言で表すならば、重厚という言葉がふさわしい。白を基調とした壁にはうっすらと模様が入り、床は見事に磨きあげられた大理石だ。天井には古いながらも見事なシャンデリアがぶらさがり、昼間の今は沈黙を守っている。家具はほとんどなく、部屋の中央に長机とソファがあるだけだ。

一人掛けのソファに、一人の男がいた。初老の男は、この部屋の主であり、この屋敷の主でもある龍牙だった。彼はひじ掛けにひじを乗せ、頬杖をついて何やら物思いに耽っていた。視線は壁一面に飾られた写真に向けられ、時折ため息が聞こえる。

龍牙が何かを思い出すように瞳を閉じた時、ボタンと扉が開いた。ノックも無い、遠慮の一欠けらもない開け方に彼はその主がすぐに分かった。彼がその主を確認するよりも早く、乱入者が口を開く。

「隊長。またこんなとこに籠って、ヒッキーですかあ？」

わざとらしく間延びした声で入って来たのは龍牙隊夜一星、美月だった。青い髪と目を持った優男は不敵な笑みを浮かべて、龍牙に近づく。それを苦い顔で龍牙は一瞥した。

「ここには勝手に入ってくるなと言ったはずだが？」

「いいじゃないですか、一人で感傷に浸るなんてじじくさいですよ？」

満面の笑みでズケズケと言いたいことをいう美月は、龍牙の向か

いにあるソファアに腰を下ろした。そして龍牙が先程まで見ていた壁の写真を見上げる。

その写真に写っているのは羽織を着た牙軍だった。小隊の長となつた人物は一部を除いて全員ここに飾られているのだ。

「あ、まだ弥生は写真撮るのを拒否してるんですね」

美月は一つだけ空の額縁に目を留めた。そこには今代の四剣琅の写真が入るはずなのだ。

だが弥生は就任してから一度も写真撮影について首を縦に振らずに今に至る。

「ほんとに四剣琅は頑固だよ」

「ああ、そついや初代の時も苦労しましたっけ」

美月の視線が隣にかかつてある白髪の女性に移された。彼女は無表情で無感動な目をこちらに向けている。微笑めばさぞ美しいだろう顔は、少し不愉快そうにも見える。美月はその顔を見てくすりと笑った。

「今弥生が無茶苦茶しても何も言われないのは、初代のおかげですよね」

「幹部もあの四剣琅だからと諦めているからね。それほど、彼女の伝説は大きい」

線の細いよわよわしい印象を与える彼女は多くの伝説を残してきた。隊員間には絶世の美女で、口を開くことは少ないが夜毎に引く豎琴の音が聴く者の涙を誘うほどのものだとか、その美貌に酔った

男が彼女に近づけばたちまち光に焼かれてしまつとか、数え上げればきりが無い。

そして必ず人々が口にするのは、彼女は未来が見えているということだった。

だがこれが幹部クラスになると話は変わってくる。会話をしない、もちろん発言もしない。それどころか定例会議にも来ず、任務も自分の主義と反すれば放棄し、命令も曲げる。文字通り好き勝手にした人だったのだ。

しかも彼女は部下も仲間も作らず一人で四剣琅、明星を名乗っていた変わり者だ。その二代目である弥生が多少奇怪な行動を取っても、幹部は伝わる初代と比べてこつ思うのだ。

初代に比べればまだましだ、と。

「ほんと、惜しい人をなくしましたね」

「ああ、彼女は君でさえ視えない未来を視ていたからね」

「でもそれを告げることはしない」

「彼女の枷だったそうさ。まあ、最後に二三の予言は残していったが」

美月はへえと初代四剣琅の写真を眺めた。

「例えば、初代の面子が一番良かったですね。何だかんだで、初代以降全階級がそろったことはありませんし」

「まあ、そうだな。今では吟三錠が空くほどに衰退してしまった」

「ま、それだけ平和ってことですけど」

そして右に視線を滑らせ、自分の写真を眺める。写真の中の美月は不敵な笑みを浮かべ、力強い眼差しを向けている。それを見て、美月はいい男だと自画自賛していた。

「こつやって写真をみるとけっこつ月日が流れましたね。うちなんてもう五代目ですし」

壁には右から階級ごとに並んでおり、夜一星は五枚の写真があった。そのどれもが青い髪と青い目をしている。

「そうだね、美月は牙軍の核。歴代女性がその名を襲名していたというのに、なぜ今代は男なのか」

「何が不満なんですか？ 僕、歴代で一番強い自信がありますよ？」

龍牙は重々しく溜息をついた。事実、彼は歴代の美月最強と謳われ、多くの隊員に尊敬されている。そしてそれに引き換えほとんど牙軍に倦厭されている……。

「初代は君と違って思いやりにあふれ、細かいことにも気がついてくれたものだ」

「えええ、隊長は彼女が好みなんですか？ エロじじいと呼びますよ」

「……全く、どこをどう間違えたらこんな口の悪い美月になったのか」

龍牙はこめかみを軽く揉んで、眉間にしわ寄せた。今までもところどころずれた美月もいたが、概ねまともな性格だったのだ。

それを見た美月は人をからかうような笑みを引っ込めて、慈愛に満ちた笑みを浮かべた。

「隊長、そんなに私が好みだったならおっしゃってくれたらよかったですのに。次代の美月にはおしとやか系を押しときますね」

先程までの飄々とした口調とは打って変わった優しい語りかける口調。声色も男のものから女へと変わった。

「美月……いくら二人きりだからと言って、不用意に昔の美月を出すものではないよ」

「せっかく隊長のリクエストに応えてあげたのに、僕拗ねちゃう。なによ、何十年も同じ人間じゃ不審がられるからって顔を変えるように言ったのは隊長じゃない。隊長はずっと変わらないのに。なんで僕だけ」

男の声かと思えばすぐに女の声となり、精悍な顔つきかと思えばしおらしげな少女の風貌を見せる。元が中性的な顔立ちの上に、口調まで変わるとまるで別人のようだ。

美月の隠された能力の一つ、身体形成。変装ではない、身体を最初から作り直すことができる能力だ。それを知っている人物はごく限られている。

「だが私は性別まで変えろと言った覚えはない」

「それは愛嬌です。これでもけっこう考えてるんですよ？ 初代か

らどついうキャラだったらおもしろく活動できるかとか、先代が姉御肌だったから、次は兄貴で行こうかとか……。僕だっけと女は飽きますからね」

「まあ、それで君の秘密が守られるなら構わないが……」

「あ、もうばれてます」

テヘツと可愛く笑う美月の言葉に、龍牙はあんぐりと口を開けた。悪いとも思っていない美月の顔に手持ちの資料をぶつけたくなる。

「誰にばれたんだ」

「錬魔と零華です」

龍牙は頭を痛める一方で、その二人ならありえると思った。それにその二人なら広まる心配もないだろう。

「そうか……錬魔の能力」

「いやあ、さすがに姿と性別は変えられても、力の本質までは変えられませんから。彼に言わせると同じ色だそうです」

「それで、零華には何故ばれたんだ？」

美月はくもった顔のままの龍牙からすいっと視線を逸らした。わかりやすいその反応に、龍牙ははあと大きく溜息をついた。

「自分でばらしたんだね」

「だって！ 零華は僕に対して冷たいんですよ？ 先代の時は僕の片腕として一緒にいたのに……さみしいじゃないかあ！」

龍牙の私室に美月の叫び声が響く。なぜかエコーがかかり、美月は胸に手を当てて悲劇のヒロインだ。

「どうせばらしたところで態度は変わらなかっただろう……」

「いいえ。暴露する前よりさらに冷たくなりました！」

美月はぐつと拳を握り、龍牙へとその胸を引き裂かれるような辛さを力説する。

「せつかく男になったのだから零華といろいろとやりたいのに」

「零華からの抗議がよく来る。セクハラだと言っていたよ」

美月は唇を尖らせて、鼻をふんと鳴らした。

「零華は綺麗だし、愛でなくなるのもあたり前じゃないか。あふれんばかりの美貌を持つ僕に愛されるなんて幸せ以外の何ものでもないはずなのに……」

いたって真剣な表情の美月に、龍牙は零華の不憫さを感じるのだった。次に会った時は気にせず殺すつもりで撃退するようにと言うことに決めた。

「あああ、零華に会いたくなってきた。今から行っちゃおうかな。あの柔らかな藍色の髪に頬を埋めたい」

恍惚とした顔で自分の肩を抱く美月に、隊長である龍牙も引き気味だ。本当にどこで間違えたらこのような性格になるのか。礼儀正しかった初代とは雲泥の差である。

「美月……そのうち零華に殺されるよ」

「零華に愛されつつ死ぬ。それもまたいいですね。彼女の膝の上で死ぬ僕、いい絵になるよ」

冗談か本気が分からない口調で美月は話す。そんな美月に頭痛を感じた龍牙はそっと額に手をやった。

「なぜ今代の牙軍はこんなに問題児がそろっているのか」

消え入りそうな小さな声で龍牙は呟く。

「隊長……。じゃ、僕は零華と愛を育んで来ますね」

そう言つたり美月は立ち上がり颯爽とドアの向こうへ消えていった。

「嫌悪感を増幅させる、の間違いだろう」

当然、龍牙の呟きが美月の耳に届くことはなかった。龍牙はこの先の零華の運命を思って、重い溜息をつくのだった……。



#### 第4章の13 時には昔の話を（後書き）

三章を手直ししました。特に内容は変わっていません。誤字を直して、あいまいな文章を直して、矛盾をただす。

ただ書くよりも疲れますね。あゝ、まだ二章と一章が残ってますね。そのうちやりましょう。

そして、ストックが切れました。完全に手直しに時間を取られていたせい。

よって、次回予告がありません。ではまた次回〜。

## 第4章の14 全ては我が王のために

遡ること約二十年。まだ弥生と秀斗が氷騎に身を寄せていたころの話である。

左遷されたものが集まる屋敷では、個々人が好きに時間を過ごしている。弥生は鎖羅とともに実践と言って裏山に入って行き、阿修羅は書庫で読書をしていた。秀斗も最初は本を読んでいたのだが、じっとしていることが苦手な彼はすぐに飽きた。ぶらぶらと足を遊ばせて机につつぶしていた秀斗は、顔を上げて阿修羅を見た。

「阿修羅さん。俺、外で遊んできます」

「……ああ」

阿修羅は本から目を話さずに生返事をする。行ってきまーすと秀斗は窓から飛び降りた。ちなみ書庫は二階である。

「俺を守れ、星鎧！」

額に輪がはまり、その障壁によって地面落下のダメージを消す。本人は無事だが土が円形にえぐれてしまった。

「あ……やべ。この中庭荒らしたら阿修羅さんに怒られる」

阿修羅は面倒くさがりなところも多いくせに、ことこの中庭だけはこまめに世話をしていた。彼の働きで美しい花が咲き、憩いの場を形成している。と言っても彼自身が園芸に勤しむ姿は一切なく、氷騎七不思議に数えられているのだが。

秀斗は以前弥生から逃げてこの花たちを踏んでしまい、半日阿修羅の間に閉じ込められた。彼が言う可愛いペット（一般的に見れば怪物）とともに……。

秀斗は身震いしてえぐれた土を元に戻す。そしてだれも見えていないのを確認して周辺を散歩しはじめた。

（弥生早く帰ってこねえかな）

秀斗は弥生がいるであろう裏山にぐつと神経を集中させた。仄かに弥生の覇動が感じられる。そのそばには鎖羅の覇動もあり、元気に山を駆け回っている姿が想像できた。彼女たちの働き次第で今晚の夕食が決まる。鎖羅は行く前に熊を取ると宣言していた。

（俺、熊なんて食ったことねえな。うまいのかな）

ここでの食事は基本当番制だ。食材は常に食糧庫に入っており、日替わりで誰かが食事を作る。だが秀斗は阿修羅と鎖羅が厨房に入るところを見たことがなく、二人の料理は下手なのかと他の住人に聞いたところ、腕はいいが食材と見た目が斬新なので遠慮してもらっているそうだ。

彼らの魔のレシピ、魚と豚の目玉スープ（味付けは豚の血とコンソメ）。見た目はグロテスクだが味は普通のコンソメスープだ。

（いい料理だと思うんだけどな。俺の国でも血のスープとかあったし、目玉にも栄養あるのに）

もし鎖羅が熊を仕留めてきたら、二人に調理をお願いしようと決める。二人ならおいしく作ってくれるにちがいない。どんな見た目であろうとも……。

秀斗は鼻歌まじりで屋敷の周りを歩く。氷騎には四季があり、現在は秋。冷える時もあるが、過ごしやすい気候だ。なにより食べ物が美味しくなる。

「しっかし暇だな」

独り言を呟いて空を見上げる。雲が無い秋晴れ。このまま裏山に行ってキノコ狩りでもしようかと思っていると、ふいに声をかけられた。

「そこの子ども」

聞き覚えのない低い男の声だ。来訪者などいるはずのない氷騎、自然と警戒心がわく。

「おっさん……誰？」

秀斗の後ろに立っていたのは、中年の男だ。髪は黒く、眉がきつと上がり、眉間のしわが怖い印象を与える。灰色の目は見た相手を氷づかせるような威圧感を持ち、軽く上げられた口元が貫録を感じさせる。秀斗は本能的に近づきたくないと感じた。さらに彼から感じる気配が、人間ではないと告げる。だが、気配は複雑すぎて彼が何なのかがわからない。

「わしか……。わしは闇だ」

ばちつと目があった瞬間、秀斗は金縛りにあったように動けなくなった。男はゆっくりと近づいてくる。

(こいつ……あぶねえ)

鼓動が速くなり、背中を嫌な汗が伝う。

「お前は、星だな」

男は三白眼で秀斗を見降ろし、頭に手を置いて上を向かせる。

「そうだけど？」

声が震えそうになるのを必死で堪えた。押されているのを見せたら負けてしまっ気がしたのだ。

「星……お前、渴いているな？ 退屈な日常に飽いている」

「いきなりなんだよ」

「わしには分かる。お前は強さを求めている。違うか」

「確かに強くはなりてえけど」

弥生を守るぐらい強く。それは常に秀斗が思っていることだ。

「ならば、わしが力を与えよう」

「は？」

「わしのもとに來い。わしはお前の力を欲する。お前もわしの力を欲せよ」

突然の誘いに秀斗は目を瞬かせた。この人物が意味不明なら、話

も意味不明だ。だが危険な匂いだけはわかった。

「な、なんで俺なわけ？ 他にも強いやついるぜ？」

秀斗は返答を先延ばしにするために会話を続けることにした。誰かが気づいて助けてくれることを願いながら。

「お前の力が欲しいと言っているだろう」

「いやいや、おっさん。俺役にたたねえって、だから違つやつを……」

秀斗は男の表情の変化を目にした瞬間、言葉を失った。夜叉、狂気に光る目に、残虐な笑みを浮かべる口元。

「そつか……ならば」

殺される。秀斗がそう思った時、やや離れたところにある木が倒れた。木に遅れること数秒後に黒い何かが中庭に転がる。それは熊の生首だった。

男はそれに気を取られ、秀斗から視線を外した。金縛りが解けた秀斗は一目散にその生首へと走っていく。途中でぴたりと止まり、視線を合わせないように気をつけて振り向いた。

「俺、弥生のそばにいないといけねえんだ。だからおっさんとは行かない。ここの奴らみんな暇だからそいつらを誘ってやれよ」

秀斗はそう言い残し、熊の首へと全力で走る。近づくとかなり大きくバスケットボールほどの大きさだ。

「おい弥生、少しやりすぎだ。首も料理に使ったぞ?」

秀斗が山へと目を向けると、ちょうど二人が降りてくるところだった。いや、二人と黒い物体が……。

「姉様だつて胴体半分にしただろ。おまけに中庭の木まで吹っ飛ばした」

鎖羅が熊の上半身を引きずり、弥生が熊の下半身を引きずっている。なかなか怖い絵である。

「おかえり」

狩り方はどうであれ、夕食の食材が手に入ったのだ。秀斗はいつもの調子で二人に声をかける。

「秀斗。今晚は熊だぞ」

どうだと言わんばかりに鎖羅が熊の上半身を投げた。それは秀斗の頭上を通り越えて花壇に着地する。可憐な花を下敷きにして……。

「あーあ。阿修羅に怒られんな」

「しゅ、秀斗が受け取らんからこうなったのだ。お前にも責任があるぞ!」

「ええええ」

慌てて秀斗に言いがかりをつける鎖羅を見て、秀斗と弥生は笑った。

( やっぱ、俺はここにいてえ )

ちらりと男がいたところを見ると、すでに男は消えていた。変な男だったな、と思った瞬間、秀斗は彼の顔を覚えていないことに気がついた。はつきり見たはずなのに、思い出せない。ただ圧倒的な威圧感だけが鮮明に記憶され、それが顔の造形を消し去ってしまったかのようだ。

( ちっ……一体何だったんだ？ )

「おい秀斗。お前も手伝ってくれ。さすがにこれは重い」

弥生が中庭の隅をじつと見ている秀斗に声をかけた。秀斗は弾かれたように弥生を見るとニツと笑顔を浮かべる。

「いいぜ、任せとけ。俺の力見せてやるよ」

この日の夕食は熊肉のステーキ、脳みそソース添えと熊肉入りスープ、熊の血をアクセントに入れたリゾットにデザートに熊の頭蓋骨を器に使ったゼリーというメニューとなった。おいしそうに食べる魔術師四人と、やや顔の青い人間の住居人たち。熊肉の独特な臭さは不思議と感じられなかったが、それをどうやって消したのか。そして彼らのさせるべからず集に一つ項目が増えた。

曰く、魔術師に狩りをさせるべからず。

この狩りの後、能力者たちが積極的に二人の剣の相手をしてくれた理由を、彼らは知らない。

そして翌日、中庭を荒らしたことが阿修羅にばれ、やってしまった二人と巻き添え一人は阿修羅の部屋で正座にて反省させられたのだった……。



男はふつと忍び笑いを漏らした。上げた口角が表す笑みは変わる  
ことなく残虐なものだったが、眉間のしわは深く、表情はさらに  
厳しいものとなり過ぎ去った年月をうかがわせた。

広い玉座の間。男の背後には大きな四つの頭を持った蛇の像がそ  
びえている。その頭一つ一つに美しい石がはまっていた。

彼は玉座に座り、ひじ掛けに肘をおき頬杖をついて正面を見てい  
た。以前部屋に立ち込めていた闇は彼の内に収められたが、この部  
屋に光はささず、ところどころにある燭台がぼんやりと人の輪郭を  
教える。玉座の両横に明りが置かれ、王の顔はよく見えるようにな  
っていた。  
傍に控えていた男がその顔を伺う。彼は仮面をつけ、その表情は分  
からない。

「陛下、どうかなさいましたか？」

この王が笑うことなど滅多にない。先程のものは相手を威圧する  
笑みではない自然の笑みだった。

「そつえばお前はあの時一緒に来ていたな」

「あの時……ですか？」

「ああ、サクリスを求めて氷騎に行った時だ」

「ああ。星の少年に会った時ですか」

従者の男は仮面の下から懐かしげな声を発した。彼は王が少年と接触している間、周囲に人がいないか見張っていたのだ。

「ふと思いついたのだ。今思えば、あの時殺さずにいてよかった」

王は喉の奥で笑い、言葉を続けた。

「あの星はあの後も、これからも苦しみ続ける……殺すよりも愉快な復讐だ」

残虐でかつ冷酷な笑みを浮かべる王に、恐れを抱きながら従者は口を開いた。

「私はあの能力を逃したのは惜しい気がしますが」

星の少年が持つ守護の力は彼の王を守るのに適していた。そして併せ持つ支配の能力も手に入れたかったのだ。

「かまわん。わたしにはお前たち影がいる。それにしょせんサクリスは捨て駒……わたしはアフランがいればそれでいい」

王の言葉に、彼は片膝をついて礼を取る。

「私は影騎士団長として生涯陛下をお守りいたします」

「ああ」

王が満足げにうなずいた時、扉の護衛が来訪者を告げた。

「アフラン様がおこしです」

王は従者を一瞥すると、彼は通すようにと護衛に声をかけた。すぐに扉が開けられ、光の中に長身の影が現れる。そして扉が閉まるとともに彼の姿は一瞬間に消えた。

「我が王、ご無沙汰しておりました。そして先日闇と月の計略の成功お慶び申し上げます」

男は玉座へと続く階段の手前で膝をつき、かしこまった。彼の姿はぼんやりとしていて闇に溶けそつだ。

「アフラン、顔を上げる」

アフランはすつと顔を上げ、蝋燭の火に照らされる王の顔を見上げた。

「それで、何か用か」

「はい。恐れながらお訊きいたします」

「なんだ」

アフランは一呼吸置き、王を真正面から見つめ返し、尋ねた。

「月と闇の衝突の際。陛下は術をお使いになったのですか？」

その問いに王の眉が少し上がる。そして愉快そうに唇が弧を描いた。

「ああ使った。奴らの憎しみを倍增させる術だ。お前も見ていたの  
だろう？ 闇と月が憎しみ合い殺しあう様を」

王は愉快そうに肩を震わせている。

「滑稽なものよ。奴らのおかげでわしは力を得た」

「しかし、あの術は禁術……陛下の身体が」

「お前はわしを心配したのか。くくく、アフラン。わしは天つ人あまつびとに  
復讐するまで滅びはせぬ」

王が天つ人と口にした瞬間、彼の瞳に激しい憎悪が宿った。目的  
を果たすためならば手段は選ばない。たとえ禁術であろうとも、そ  
の代償が何であつてもためらわない。

王は玉座から立ち上がり、闇に消えたと思うとアフランの目の前  
に立った。

「お前は一の頭かしらアフラン、終焉を刻む、選ばれた者だ。わしに勝利  
を捧げよ」

王は愛しそうにアフランの頭を撫でた。アフランは四人の幹部の  
中でも一番古株で、信頼も厚い。

「必ず天つ人を亡き者に」

「ああ。奴らを墮とす時が楽しみだ」

王は低く笑つて闇へと消え、玉座に座った。王の闇がアフランの  
頬に触れ、彼はその禍々しさと強大さに目を見張った。すっと口角

を上げて一礼すると玉座の間を後にする。

「闇を愛せ」

王の言葉を背に受け、アフランは扉の向こうへと消える。

扉を開けた一瞬、外の光に照らされた横顔は、阿修羅だった……。

#### 第4章の14 全ては我が王のために（後書き）

のちに修正するかもしれないね。もう少し流れをよくしたい……。え、この人が！？を裏テーマにしている4章ですが、阿修羅に関してはやっぱりという感じでしょうか。美月はこの人が？ という感じはあったかなあと。

さてと、アクセス解析に変化が……！

最初はパソコンとケータイが3：2の割合だったんですけど、10話をこえたあたりから9.5：0.5……。そりゃ一話が長くて100話も越えてたらケータイで読むのしんどいですよね。納得。でもケータイ向けに細切れにしてたら今頃恐ろしい話数になってそうですね。思えば一章ごとに完結させてシリーズでつなぐか考えていた時期もありましたっけ。

長々とやっている私の話を読んでくれている皆さま、ありがとうございます。ざいます。

お気に入りに入れてくださっている皆さまも、ありがとうございます。す。

では、次回「鳥が紡ぐ詩」です。誰が出るか、わかりますよね？

## 第4章の15 鳥が紡ぐ詩

春休みも半分が過ぎ、早いところでは桜の蕾が膨らみ始めていた。世の中は新学期の準備で忙しく、多くの人が新生活に胸をときめかせている。三月ももうすぐ終わるそんなころ、勇輝は如月でだらりと過ごしていた。

「暇だな〜」

ホールのソファーに寝そべり、勇輝は天井を見上げている。手には携帯型ゲーム機が握られ、つい十数分前に感動のフィナーレとなった。よって今、勇輝はやることはない。暇すぎて歩にメールを試してみたが、全く返事が来なかった。ここ最近無視されているので少しへこむ。

「暇だな〜」

「暇なら少しは勉強してください」

勇輝の声に被さるように零華の冷やかな声が飛んできた。零華は絨毯を挟んだ向こう側で、椅子に座り本を読んでいる。向かいにはティータイムの癒慰がにこやかにほほ笑んでいた。本日は地味に修道女だそうだ。

「それは嫌〜。勉強嫌い〜」

「じゃあ、私と遊ぼっか」

癒慰の遊び。言わずもがな着せ替えである。

「嫌！ 絶対嫌！」

勇輝は飛び起きてぶんぶんと首を横に振った。悲鳴に似た声で拒絶され、癒慰は頬を膨らます。

「勇輝君のケーチ」

「次やられたら俺グれる」

「すでに不良なのに？」

「さらにグれる！」

零華は二人のやりとりを見て、子犬と小熊がじゃれている様子を連想した。少し口元が綻ぶ。

「グレたら私の愛情で更生してあげる。きっといい女の子に戻れるわ」

「俺は男の中の男になるんだ！」

勇輝がソファアールから立ちあがってそう宣言した時、その勢いをくじくようにピンポンと間延びした音が響いた。誰かが来たらしい。女の子二人は珍しいとやや首をかしげている。

一番インターホンに近かった勇輝がはいと応対に出、しばし固まった。

「どつぞ……」



弱々しい勇輝の声に遅れること一拍。扉が開き来訪者の姿が見えた。灰色の髪に切れ長の目。

「あら、鷺君<sup>ok</sup>」

再び嵐の種がやって来た。勇輝は以前彼が来たときのごたごた、主に秀斗の嫉妬を思い出してつかない顔をした。確かに暇だったが、かといって面倒事が来て欲しかったわけではない。

「癒慰……それでどこに潜入する気だ？」

鷺はまず癒慰に目を留めて呆れ顔でそう尋ねた。鷺の分野は潜入捜査であり、彼が率いる隼は龍牙隊の隠密部隊だ。癒慰が来ている服は元々彼ら諜報員のために匠が作ったものだった。癒慰は趣味で着ているが……。

「愛しいダーリンの腕の中？」

癒慰はふんわりと笑みを浮かべて切り返す。

「結婚式にはお前に爆弾（情報）を贈ってやるよ」

「嬉しいわ、今お茶を淹れるからそこで座ってて〜」

癒慰は怖いくらい完璧な笑顔を保ったままホールから出て行った。

「意外と癒慰と鷺さんって仲良し？」

勇輝は傍に近づいてきた零華にそう尋ねる。

「ええまあ。二人ともよく裏技術研究所に顔を出すので、そこで知り合ったのでしょうか」

勇輝はそろつと鷺に視線をやって観察する。最初に会った時はドタバタして彼とろくに話すこともできなかった。唯一分かったのは弥生に対して並々ならぬ思い入れがあることぐらいだ。

「春日勇輝」

「はいっ」

突然名前を呼ばれ、勇輝は直立不動になる。彼はくいくいと勇輝を手招きし、向かいのソファに座るように指示した。勇輝の脳裏に初対面で殴られたあの記憶がフラッシュバックし、落ち着きなくそこに座る。ぎゅつと身体を小さくして鷺の言葉を待った。

頭の中では今までの弥生と関連する行動を洗い出し、鷺の逆鱗に触れたものがないか探す。

「この生活にも慣れたか？」

「え、あ……はい」

彼の行動が顔面パンチでも非難でもなかったことに勇輝は困惑した。

（普通の会話が始まったんだけど。一体何？）

かなり失礼な反応だが、出会いが最悪だったことを考えると致し方ない。

「能力者と一緒になると大変だろう」

「いや、そうでもないです。楽しいですよ」

「なるほど、お前は非現実を素直に受け止められるタイプか」

零華は二人の会話を少し離れたソファーで見守りながら、鷺の性格は牙軍で一番まともだったことを思い出した。弥生が絡むと容赦が無くなるが。

「鷺さんのお仕事って潜入ですよね」

緊張が解け始めたのか勇輝が話し始める。

「ああ」

「俺、スパイ大好きなんです」

熱のこもったその言い方に、鷺はやや目元を和ませた。自分の職種を好きだと言われて悪い気はしないようだ。

勇輝は彼の表情をそわそわと伺う。彼の目もとにくまを発見。少しお疲れなのだろうか。

「お前、スパイ映画にハマる前はアニメで、その前は戦隊ものだったか？ それで今はゲームと」

やや呆れた声で鷺は勇輝の趣味遍歴を暴露する。それに勇輝は目をまん丸くした。

「すごい……さすがスパイ」

「勝手に私生活を調べられたことに対してはどうでもいいんですね」  
零華の冷静なつつこみに勇輝はあつと呟いて、顔面を蒼白にする。  
それを見て鷺は人の悪い笑みを浮かべた。

「お、俺のこととんだけ知ってるんですか？」

「ん？ そうだな……せいぜい癒慰に寝込みも含めて何度襲われた  
(着せ替え) かくらひは知っている」

それを聞いた勇輝はこの世の終わりだと言わんばかりに頭を抱えた。

「うわああ……スパイ怖ええ」

「鷺君は優秀だからね」

そこに癒慰がお茶を淹れたカップを持って現れた。今の情報源は彼女だ。

「どうぞ鷺君。長期の任務だったんでしょ？」

「ああ……昨日帰って来た」

「それで今日弥生ちゃんに会いに来たと」

「わかっているならさっさと会わせる」

鷺は紅茶を口に運び、視線を癒慰に合わせた。視線が鋭いので睨

んでいるようにしか見えない。

「うーん、でも今日はまだ寝てると思う」

今日はまだ弥生を見ていない。超早起きの（眠らない）弥生は、いつもならホールにいるか、いなくても誰かは見かけていた。まあ、さすがに十年単位で共に暮らせば弥生の睡眠のタイミングは自ずと分かってくるのだが……。

「では、私が起こしてきますね」

距離を置いて三人を見ていた零華はこれ幸いとホールを抜け出した。これ以上いたら災厄に巻き込まれると経験で知っていたのだ。

「で、零華が起こしにいったけど大丈夫なの？」

弥生を無理に起こすとどうなるかは秀斗が身を持って教えてくれている。起こさぬ弥生に危害無しだ。

「大丈夫よ。零華ちゃん、ああ見えて強いから」

癒慰のあっさりとした言い方に、裏番だもんな、と勇輝は勝手に納得する。

「……数日に一度の睡眠とその寝起きの悪さは今も変わってないな  
ふつと鷺は懐かしさに笑みをこぼした。その表情に勇輝は怪訝な顔をする。

「鷺さんって弥生とのつきあいが長いんですか？」

「……まあ、最初にあったのはもう二十年ほど前になるからな」

「二十年？」

勇輝はまだ生まれていないころの話だ。

そのころの弥生がどんなのだったか訊こうとした時、怒声とともに扉が開いた。

「驚いいいー！」

ホールに突撃してきた秀斗はぎらつく目を鷺に向けた。彼のくつろぎ具合を見て顔をひきつらせる。

「何呑気に茶あしばいてんだああ！」

ここにちゃぶ台があれば、彼はちゃぶ台返しを披露していたに違いない。

秀斗の怒りようを見て、鷺はおもしろそうに口角をあげる。受けて立つという表情だ。

「なんだ？ 弥生を守れなかった負け犬が、ずいぶん吠えるじゃないか」

両者歩みより、伸ばせば手が届く距離で止まる。二人の身長はほぼ同じ。両者の間に火花が散った。

それを勇輝はハラハラと不安そうに癒慰はウキウキとおもしろそうに見ている。

「てめえは弥生の傍にすらいねえのにえらそうな口叩くんじゃねえ

「よ」

「俺はお前とは違う方法で弥生を守ってた」

主に情報操作という手段で。

鷲はにんまりと人の悪い笑みを浮かべる。秀斗はその表情に歯ぎしりをして睨み返した。

一触即発。いつ喧嘩になってもおかしくない。

「あああ？ やんのかあ？」

「上等だ。また負けても知らないからな」

すわ殴り合いかと思った時、扉が開く音に二人は首をそちらに向ける。

「鷲さん、弥生ちゃんが起きたのでどうぞこちらに」

零華は微笑みのまま手招きをした。鷲はあっさりと拳を引っ込め、扉へと歩く。

「おい鷲！」

「決着はまた今度だ、負け犬」

「うるせえ！ このストーカー鳥野郎おお！」

怒鳴る秀斗の目の前で扉は閉められた。やり場のない怒りを持ってあまし、うがあと呻いている。

「秀斗、落ち着いて」

「……勇輝、殴っていいか？」

「八つ当たりすんな！」

鬼の形相の秀斗はソファーに拳を入れる。マットが少し凹んだ。

「くそっ、むしゃくしゃする！」

秀斗はソファーに荒々しく腰をかけ、ごろりと横になった。腸が煮えくり返っているらしく、ゲシゲシとソファーのひじ掛けを蹴っている。

(なんか地団太踏んでるようにはか見えないよな)

勇輝は秀斗の荒れ模様を遠巻きにしつつ、一種の憐みを感じるのだった……。

零華に案内され弥生の部屋に入った鷺は、まずこう思った。ソファーが増えていると。

入って右側に応接セットが置かれ、そのソファーに弥生が座っていた。寝起きのはずなのに寝癖の一つもなく、凜とした雰囲気漂わせている。

「弥生、おはよ」

鷺は軽く手を上げて弥生の向かいに座った。弥生はああと返して



鷲を正面から見据える。

「それで、何の用だ？」

「たいしたことじゃない。先の任務で面白いものを見つけたから持って来ただけだ」

面白いもの？ と弥生が反復し、鷲が腰につけていたポーチを開いた。ポーチの割にはそこそこ容量があるそれは不自然に四角く変形していた。無理に押し込んだであろうそれを上手に取りだし、机の上に置く。

「本……か？」

弥生は差し出されたものに目をやった。形状は本のようだが、表題が無くただ装丁されただけのものだ。

「見た感じ人間界のものではないから、お前らの世界の本かと思つてな」

弥生はやや目を見開き、その本を手にとつた。弥生が触れた瞬間、本が淡く緑色の光を発する。

「本自体が力を持っているらしい」

弥生は表紙を開き、内容に目を通す。それは懐かしい魔術界の文字だった。

「これは……創世記だな」

「創世記っていうと、俺が昔持って来た奴と一緒にか……たしか歴史書だったよな」

鷺の声には落胆の色が混じっていた。

「ああ……これはどこで見つけたんだ？」

「ロシア中枢の資料庫で埃をかぶってた」

なるほどと弥生は納得する。ロシアはソ連だったところに黒騎とながりがあった。黒騎に所属していた魔術師の誰かが渡したのかもしれない。偶然あちらの世界から流れ着いたということも考えられたが……。

前の本と同じと聞いて、無駄だったかと鷺が独りごちていると、最後のページにたどり着いた弥生がはっと息を飲んだ。

「違う……これは」

言葉を詰まらせた弥生の表情を見て、鷺は目を見開いた。弥生の表情は青ざめ、唇は硬く引き結ばれている。これほど表情を露わにしたことはめったにない。

鷺がかかるべき言葉を探していると、その表情はすっと消えいつもの無表情に戻った。

「これは、原本の一つだ」

「原本？」

「前にお前がくれたものは、創世記だが各国の歴史が詳しく書かれた、いわゆる解説書。これは本自体が魔力を持ち、あちらの、大本

の原本に書きくわえられたことが更新される。あちらでも数少ない歴史書だ」

弥生は少し口角を上げてその本を撫でた。その笑みが含むのは複雑さ。

(皮肉だな……帰れないのに、繋がりを断つこともできない)

鷺は弥生の表情の変化にふと笑みをこぼした。それに気付いた弥生が不審な眼差しを向ける。

「いや……いい表情かおをするようになったと思ってな」

「意味がわからん」

無然とする弥生に鷺は苦笑いを浮かべ、ぐつと身を前に倒した。その表情が真剣なものに変わる。

「さて、ここからは交渉だ」

「ああ、これは価値がある。その交渉に乗ろう」

借りは返すのが主義の弥生と、等価交換を原則に情報を売買する鷺。鷺が魔術師に縁のあるものを持って来、弥生がそれに見合う情報を出す。弥生の持つ情報は魔術界のものを含め通常では入手困難なものばかりなので、鷺にとっても貴重な情報源だった。

「それで、何の情報が欲しい？」

昔から何度か繰り返したやりとり、だが鷺はしばし考えるそぶり

を見せるとおもむろに立ち上がった。

「今回は大きな情報が欲しいわけじゃない。今日俺は仕事で来ているんじゃないからな」

鷲は弥生の目の前に立って、背もたれに手をついた。前かがみになり、弥生との距離が近くなる。

「ならばなんだ？ 秀斗か？」

「いや、お前の故郷の話が聞きたい」

「……そういえばそんなことも言っていたな」

弥生は近くにある鷲の目をじっと覗き込む。心なしかきつい目つきが柔らかくなっている気がする。さらに彼が常に周りに張っている気が緩んでいた。どことなく怪しげな笑みを浮かべている。

(任務で疲れているのか?)

あまり見せない隙に、今なら簡単に背後を取られるなど弥生はとりとめもないことを考えていた。

「弥生……聞かせてくれ。できれば俺の傍で」

鷲の声は低く甘かった……。

そのころホールでは、怒りが収まってイジケモードに入った秀斗が勇輝に慰められていた。ふて寝のようにソファードに転がっている。

「けっ、どうせ俺は弥生に嫌われてんだ……」

秀斗の周りだけ負のオーラが立ち込めている。勇輝に背を向けて丸くなっている秀斗を、なんとか励まそうと勇輝は奮闘していた。

「嫌われてないって、鷺さんより弥生とのつきあい長いんだろ？」

ほら、ここで勝ってるよ」

「つきあいが長いのに、なんで俺は邪険にされんだよ」

「いや……それは遠慮してないってことで、それだけ気心しれた仲間なんじゃ」

「気心？ 部屋に入ったただけで剣を突き立てるのが気心？」

秀斗はとうとう涙声になり始めた。今回鷺に言われたことで色々たまっていたものが噴き出してきたらしい。

「あゝ、それは秀斗がノックしないとか……それに、弥生なりの愛情表現……では？」

勇輝もフォローしながら何を言っているか分からなくなった。正直、秀斗は弥生に嫌われているとは思っていないが、好かれているとも思えないのだ。

「そんな愛情あるかよ！ あああ、こうしている間に鷺が、鷺が……弥生に何かしたらぶっ殺す」

後半のドスの利いた声に、勇輝の心は冷えた。顔が見えないのがせめてもの救い。おそらく般若のような顔になっているだろう。

「女々しいな」

錬魔の苛立ちを含んだ声に、秀斗はガバツと起き上がる。錬魔は鷺と入れ替わりにやって来て、捕まった。秀斗のいじけっぷりに帰るに帰れなくなったのだ。彼は秀斗の向かいのソファでコーヒを飲んでいる。

「うるせえ！ お前は弥生が心配じゃねえのかよ！」

「……あんな」

「心配はいらないわ！ 私が手を打っておいたから」

錬魔の反論を遮って癒慰が声高らかに割り込む。その言葉に秀斗の顔に希望の色が現れた。

「それ、どういうことだよ」

「ん？ うふふ、鷺君がさっき飲んだお茶にね〜睡眠薬入れたいの」

今頃寝てるかしらと笑う癒慰に、ガッツポーズをする秀斗。癒慰の意地の悪い笑みに勇輝はそろそろと錬魔の隣まで後退した。

「女って怖い……」

それに錬魔は黙って頷いたのだった……。

秀斗の元気が復活したころ、弥生は自分の状況を振り返り、どうするかを考えていた。

天井を睨んでも答えは出ず、先ほど眠りを起こされたせいで、常時睡眠不足の身体は眠りを提案している。少し瞼が重くなってきた。それ以上に思い身体をどうしたものかと考える。動こうと思えば動けるが、動いていいものか。  
現在弥生は眠る鷺の下敷きになっていた。

時は少し遡り、弥生に故郷の話を要求した鷺は弥生の隣に座った。傍で言うだけあって肩が触れるか触れないかの距離だ。

「あまり詳しくは話せないが、いいか？」

「かまわない。お前が話せる範囲で聞かせてくれ」

鷺は故郷と呟いて黙り込んだ弥生の横顔を見る。ややあって弥生が口を開いた。

「私の祖国の名はルナクレア王国という。四季はあるが、冬の寒さが厳しかった」

「王国ということは、王制なのか？」

「ああ、建国以来ずっとだ。風土は緑が豊かで農業が主だった。基本鎖国状態だから貿易はあまりしていない。後……たくさん山賊がいたから治安は悪かったな」

弥生はぼつりぼつりと祖国を思い出しながら話していく。その間も鷺はじつと弥生を見ていた。その目が徐々に細くなっていく。

「お前は、どういう暮らしをしていたんだ？」

「私は……家出して、山賊と闘って、放浪して……家に戻れば勉強して……また家出して……その繰り返しだ」

鷺は肩を震わして小刻みに笑った。

「お前らしいな。向こうでは……何を食べるんだ？　こちらと、違うのか？」

「そうだな……私は物を食べなかったからよく知らないが、こちらにはない果物は多数あったな。後は、パンなどは似ている。それと……緑豆のスープをよく飲んだ」

懐かしさに表情を柔らかくする弥生につられて鷺も微笑んだ。

「町は、どういっ……感じた？」

「この国に比べれば古いな。こちらでいう中世の街並みだと聞いた後、話すことと言えば……武術に力を入れたく……」

弥生は横から重圧を受けて言葉を切った。ん？　と思った時にはすでに遅く、弥生は押し倒されていた。意識の無い鷺に……。



鷺は癒慰の睡眠薬によってとうとう限界を迎えたらしく、弥生の上で健やかな寝息を立てている。

「鷺……？」

横に倒れた弥生は鷺の顔を見ようと体勢を仰向けに直した。その動作で鷺の身体は背もたれ側にずれたが、それでも半身が乗っており重い。

（これは、どうすればいいのだろう）

鷺が寝たということは分かった。問題なのは動いてもよいかということだ。

（傍に……と言われたしな）

いつまでかは聞かなかった。今もあの言葉は有効なのだろうかと考える。傍にいるということはどれくらいの距離かとも考えてみたが、あいにく弥生はその答えを知らない。

（これ、どうしようかな……）

## 第4章の15 鳥が紡ぐ詩（後書き）

やってしまった。夏が過ぎてしまった（今頃？）。夏と言えば海、水着……着せたかったなあ。でも作中、春なんですよね。残念。

そして鷺。どれだけ文章割かせるんだ？ プロットじゃ一話で終わるはずが三話に増えてしまった。まあ、一話で現れて過去バナしてさっくり帰るなんて無理な話ですね。この回もけっこう長くなり、なぜ鷺がこんなに出張るのか。まあ、それは置いておきましょう。

さてと、長い夏休みも四分の三が終わり、追い込みでも始めようかと思えます。新学期とともに新章に入りたい。ということ、書いたら投稿する不定期モードに入ります。目指せ、週に一、二回の投稿……。

鷺の話は間隔をあけるほどのものではないので、明日にでも続きを……。

では次回「戦場に舞い降りた鳥」です。

## 第4章の16 戦場に舞い降りた鳥

物心ついた時から、俺はいなかった。

何時も他人の皮を被り、他人を演じて人を欺く。

それが俺の生活で、俺がないことに何の疑問も感じなかった。

感じることを知らなかった。自分の姿に戻っても、どこかそれに違和感を覚え、自分の名前さえも時に分からなくなる。

鷺

俺はこの名を、これをつけた人を、何度憎んだか分からない……。

時はまだ冷戦が続いていたころ。冷たい、凜とした空気がその空間には満ちていた。朝の寒空に白い吐息がかかる。

小高い丘の上に一人の少年が立っていた。まだ十歳に満たないだろうにその髪は灰色で、鋭い視線が実年齢よりも上に見せている。

二十年前、八歳の鷺だ。

龍牙隊に拾われた彼はその能力を買われて隠密部隊に配属された。そして今、彼には一つの任務が与えられている。

鷺は子どもには相応しくない険しい顔で敵陣営の前に広がる森へと歩き出した。

(まずは化ける相手を見つけないとな)

鷺はすでに入手した黒騎の制服に身を包んでいた。彼の灰色の髪と黒の衣装がよく合って、自分の居場所はこちらかもしれないと鏡

を見た時に錯覚してしまった。

森を切り開いたところに敵の陣営、黒騎の部隊がいる。そこにはテントが大中様々なテントが並び、野営をしていた。

多くの異空間で戦争が起きている中、この空間は睨み合いが続いている。戦争の中心からだいぶ遠い空間ということもあり、闘いという意味がだいぶ低い。鷲を含む隠密小隊がこの空間に来て一週間になったが、敵は一向に姿を見せなかった。夜襲や奇襲のそぶりもまったくない。

それに痺れを切らした隠密の小隊長が鷲を敵地へ送り込んだのだ。鷲は敵陣まで二百メートルまで近づき、近くの木に登って辺りを見渡す。朝日が昇り、活動を始めているのかざわめきが聞こえた。

まんべんなく辺りを見張っていると、森に似つかわしくない色に目を奪われる。金色が茂みの影に見えたと思ったら、ガサガサという音と共に金髪の少年が茂みから出てきた。

最初は西洋系の少年兵かと思った。戦場に子どもがいるのはそれほど珍しくなく、戦況が苦しくなったり、戦場が辺鄙になったりするにつれて少年が戦場に駆り出される。隠密に子どもは重宝されるし、現に超大国が作り出した異能者はまだ子どもだ。

だがその顔立ちを見るとどうも東洋系に見える。鷲は年の頃十二、三に見える少年をじっくり観察した。

「おっ、これ食えるな〜」

その少年は鷲が潜む木の根元にしゃがみ、そこに生えていた茸を取った。どうやら食糧の調達に来たらしい。

「あ、これもつまそ〜」

鷲は素早く辺りを見回し、人がいないのを確認すると木から飛び

降りると同時に少年の無防備な首筋へ手刀を叩きこんだ。がくりと気を失ってその場に倒れた彼を木にロープでくくりつけ彼の顔をまじまじと見る。

(意外といい顔してんな。もつとばかっばいかと思った)

鷲は彼の身体を全て見極めると右手で自分顔を覆った。彼がその手を下した時には、金髪の少年が二人いた……。

黒騎の陣営では朝食の準備が進められていた。朝ご飯はテントごとにより作り、昼食と夕食は当番制だった。

「姉様、お湯が沸いた」

テント前の薪で鍋を見ていた弥生が鎖羅に声をかけた。黒騎の服を着た弥生は十三歳。身長も伸びてよい剣の使い手に成長していた。鎖羅は沸騰したお湯の中に野菜とベーコンを入れ、煮ていく。

「後は秀斗の茸だが……あのバカ、遅いな」

鎖羅は秀斗がかけて行った森の方に視線を飛ばす。何に手間取っているのか。

「見てくる」

弥生はすつと立ち上がって森へと歩き出す。その背中に鎖羅は気をつける声をかけた。

「しかし……平和だな」

鎖羅は少し曇った空を見上げた。この寒さでは時期に雪が降るかもしれない。戦争中とは思えない、穏やかな朝だった……。

弥生が森へと入ると、すぐに葎を両手いっぱいを持った秀斗と会った。秀斗はさっと弥生の顔と服装を見、にっと笑った。

「おはよ」

「秀。姉様が待ってる」

弥生はくるりと秀斗に背を向けて歩きだす。彼の荷物を持つようなどとは欠片も思わない。

（へえ……こいつの名前秀っていいのか。こいつは仲間ってところか？）

秀斗に化けた鷲は注意深く弥生を観察しながらついていく。すぐに黒騎の陣営が見えてきた。

（しかし、銀髪って珍しいな。顔は東洋っぽいし、西洋人ってわけじゃないよな。ソ連人は銀髪だったか？）

「秀」

考え事をしていた鷲ははっとして立ち止まって振り返っている弥生を見る。

「お前……黙っていると気味が悪いな」

「は？ それどーゆうことだよ」

鷺は反論してみたが、内心冷や汗をかいていた。

（こいつ、よくしゃべるタイプか）

今回は化ける対象をよく観察したわけではない。口調や癖を知らないぶん、下手に話すとボロが出ると自重していたのが裏目にでた。

「自分で考える」

弥生は再び歩き出し、多数のテントの中を突き進む。後に続く鷺はさりげなく辺りに目をやり位置を把握する。

「秀斗、やっと帰って来たか。さっさと鍋に茸を入れる」

薪の前に座っていた鎖羅が秀斗に鍋を指差して言う。

鷺はその鍋に茸を入れようとしたが、手が止まった。

「……すっげえ緑色」

鍋はぐつぐつと煮え、緑色の液体からたまにベーコンと思わしき物体が見え隠れしている。深緑ならばハウレンソウでも入れたのかと納得できるが、何故か鍋の中身は原色の緑。

「早くしろ秀斗。それと弥生、テントから食器を持ってきてくれ」

料理に引いていた鷺ははっと我に返って茸の中に入れる。緑色の液体に飲みこまれる茸が少し可哀そうになった。

(あの女の名前は弥生か……んで、こいつは秀斗かよ)

鷺は薪を囲むようにして置かれている丸太に座って鎖羅を盗み見る。年は二十代前半と見え、なかなかいいスタイルをしている。

(名前わかんないしな、弥生の姉らしいけど……似てないな。髪色違うし)

「姉様、食器」

そうこうしているうちに弥生が戻り、鎖羅は煮え加減を見て塩胡椒で味を調える。

「ん、いい感じだ」

味見をした鎖羅は頷き、それぞれの食器によそり始めた。

(確かに香りは悪くないけどなあ……スープのわりにはどろっとしてないか?)

食べても大丈夫だろうかと鷺は顔には出さずに悩んでいると、テントが開いた。少し身をかがめて出て来た男は鎖羅の隣に座る。

「阿修羅、やっと起きたのか」

鎖羅は呆れ顔で阿修羅にスープを渡した。

(阿修羅……? それ本名か?)

自分の名前は棚に上げて、鷺はそう思ってしまった。彼はその名



に似合わず美青年で、まだ眠いのか目が細い。

「ああ……少し眠れなかった」

阿修羅は低い声で答え、スープを口に運ぶ。鎖羅と弥生が食べるのを見て鷺も口に入れる。

（ためらったら怪しまれる……なんだ、そんなまずいもんじゃないな）

見た目が少し風変わりだが味はよい。スプーン片手に周りを見てみると、薪の周りで同じ光景が多く広がっている。なんともものんびりした朝食風景である。

（龍牙隊も和やかではあるけど、ここまでだらけてはないな）

視線を前に戻すと阿修羅と目があった。鷺は一瞬彼の目が金色に光った気がしたが、彼の瞳は灰色だった。

「弥生、食べ終わったら剣の稽古をしよう」

「本当か？」

鎖羅の提案に弥生は嬉しそうに答える。そのやりとりを聞いた鷺は脳内のメモ帳に二人は剣の使い手と記入した。

「なら山にでも行って猪でも狩ってこい。そろそろ肉が切れる」

「そうだな。また燻製にしてベーコンにするか」

そんな会話を聞きながら鷺は食べ終えた食器を足元に置いて、鎖羅と弥生に顔を向ける。

「楽しみにしてるぜ」

「任せておけ」

鎖羅がそう答え、弥生はこくりと頷いた。

「秀は今日何をするんだ？」

「俺？ そうだな……ここらへんをふらふらすっかな」

「よく飽きないな」

やることねえし、と鷺は付け足す。だいぶ秀斗という人間が分かり始め、会話のテンポもつかめてきた。

和やかに三人で談笑していると、阿修羅がカチャリとスプーンを皿に置く音がし、皿を丸太の端に置いた。

「食べ終えたところで秀斗、お前誰だ」

唐突にそう問う阿修羅に三人は固まった。

二人はキョトンと、一人はドキッと。

(こいつ、能力者か！)

「阿修羅、寝ぼけているのか？」

鎖羅は阿修羅の顔を覗き込んではっとした。彼の白目は黒く染ま

り、瞳は金色に光っていた。阿修羅は闇誡あんかいを発現している。彼の目には鷲が持つ、秀斗ではない魂の色が見えていた。

「よく感じ取れ、覇動が違うだろう」

二人は集中して鷲の気配を探る。鷲は身の危険を感じて即座にその場から逃げようとしたが、二人の行動の方が早かった。

鷲の首筋には両隣から闇宵あんしょうと月契げっけいが添えられた。

(どっから剣出て来た?)

「本当だ、なんとなく違う気がする」

「秀の覇動ではない。お前、異能者だな」

鷲はぐっと唇を噛んで正面に座っている阿修羅を睨んだ。

(どっする。これじゃあ確実に捕まって拷問だ。いつそこで舌を噛み切るか……)

阿修羅はすっと立ち上がって鷲の目の前に立つと彼の首根っこを掴んで持ちあげた。

「うわっ」

二人は剣の具現を解き、阿修羅に任せることにした。阿修羅は鷲を猫のように持ちあげてテントの中に入る。

「は、離せ!」

じたばたと鷺はもがくが子どもの力ではどうにもならない。

「だが、秀斗そっくりだな」

続いてテントに入った鎖羅は思わずそう呟く。秀斗は何かしでかす度にああやって阿修羅に引っ掴まれてその後反省させられていた。

「ああ」

弥生も同意を示す。

阿修羅はばいっと鷺を下ろし、威圧感たっぷりに見下ろした。

「スパイか」

鷺はちっと舌打ちをし、服の下に隠し持っていたナイフを取り出して阿修羅に切りかかった。

傍観者二人が動くよりも早く阿修羅は自身の闇から大きな爪を出して胸元に突き立て、鷺が怯んだところを滑りよって腕をひねり上げた。

「ぐああっ」

鷺は痛みにナイフを落とし、また空中に浮いた。

首根っこを掴まれ、もう抵抗する意味がないことを知った鷺は脱力したまま吊られている。

「で、お前は龍牙隊のスパイか？」

「……そうだ」

「お前の本当の姿を見せる」

阿修羅は普通に鷲を下ろし、鷲は出口付近に女二人がいるのを見ると観念したのか左手をさっと顔の前を通過させた。すると金髪は灰色に戻り、身長が縮んだ。彼の本来の姿が現れる。

「なっ……こんな小さい子どもが？」

阿修羅は化ける能力だとは思っていたが能力者が秀斗よりも幼いとは思っていなかった。だから元の身長を考慮して地面に下ろしたのだ。

「すごい。それがお前の本当の姿なのか？」

弥生が興味深げに鷲に歩み寄った。鷲の身長は弥生の目の高さだ。

「敵に褒められても嬉しくないな」

ふいつと鷲は横を向き弥生を視線から外す。

そして阿修羅に向き直り、真正面から彼を睨み返した。

「殺すなら殺せ、見せしめにでもすればいいさ。拷問されたって俺は何も話さないからな」

なかなか肝の据わった子どもに大人二人は互いの顔を見て、どうするかと目線で問う。

鎖羅が軽く手を振り、お前に任せると伝えた。

半ばその答えを予想していた阿修羅はじっと敵を見る。

やがて面倒くさそうな表情をしたかと思うと、しゃがんで鷲の首

筋に触れた。

すると少し顔を強張らせた鷲の首に阿修羅の闇がかかり、それが消えると黒い首輪が現れた。

「ここから逃げようとするればそれが作用してお前の首を飛ばす」

鷲は悔しそうに俯いた。

「わかった。お前らの言うことを聞く」

(どうせ潜伏するつもりだったんだ。こうなりや居座ればいい)

鷲は覚悟を決めて、むしろ開き直ってその場に腰を下ろした。

「この偉いやつに突き出すなり交渉の材料にするなり好きにすりゃあいい」

「残念ながらこの責任者は一応俺なんぞでな。俺の決定には誰も逆らえない」

目の前の青年がここのリーダーと聞いて、鷲は目を見開く。

「鎖羅。こいつの面倒はお前に任せた」

阿修羅は自分の役目は終わりと隅に置いてあつた椅子に腰をかけた。

「……弥生。そいつを好きにしていぞ。その代わり、向こうの陣営に帰らないように見張れ」

鎖羅は弥生に丸投げした。大人二人は正直、子ども二人の面倒を見るだけで手一杯なのだ。

「私がか？」

弥生はじつと鷺を見た。鷺も見返すが、耐えられなくなって視線を逸らす。なんとなくその無感動な目が怖かった。

「子どもどうし仲良く遊べ」

「わかった」

子どもどうしと言ってもこの時点ですでに八十歳ほどの差があったが……。

「で、お前の名前はなんだ？」

弥生は鷺の目の前に座りそう尋ねる。

「……鷺」

「鳥の鷺か？」

そう訊いたのはいつの間にか別の椅子に座っていた鎖羅だ。

「……ああ」

鷺は心底嫌そうに答える。鷺の名は彼を拾った小隊長が付けたものだった。彼は龍牙隊に拾われた子どもに隠密の訓練を施し、その子どもにはそれぞれ鳥の名前を付けていた。

「変わった名だな」

そう言った阿修羅に、お前に言われたくないと返しそうになって鷺は寸前で口を閉じる。

「鷺は何にでも化けられるのか？」

弥生は質問を重ねる。彼女は黒騎に入って初めて自分よりも小さな子どもを見た。さらに他人に化けられる能力など見たことが無い。

「まあ。見たものなら」

「見せる」

弾んだ声で期待の眼差しを向ける弥生に鷺はしゅしゅ左手を顔へと持って行った。彼の身長が伸びて髪が黒くなる。

「こんな感じ」

「姉様……」

鷺の声は鎖羅のもの。もちろん姿形も鎖羅だ。髪が腰まで伸び、服の胸のボタンがはじけ飛びそうでなかなか悩ましい姿である。

「目の前で自分を見るというのは不思議な気分だな」

鷺はすぐに姿を自分に戻した。

「お前、おもしろいな。すごい能力だ」



弥生の言葉に鷺は不愉快そうにふいつと外を向く。照れ隠しが見え見えで、大人二人は苦笑いを浮かべる。まだ所詮八歳なのだ。

「そつだ鷺。もう一度秀斗に化けてくれんか？」

鎖羅は思いついたようにそう言った。

「……別にいいけど」

鷺はもう一度秀斗の姿を取り、あぐらをかいている膝の上に肘をつけて顎をのせた。もう構ってくれるなど言いたいらしい。

「本当に秀そつくりだ」

「しばらく解くなよ？」

鎖羅はいたずらっぽくニタリと笑った。鎖羅の考えが分かった阿修羅は呆れ顔で溜息をつく。

弥生は秀斗に化した鷺の髪を引っ張ったり瞳を覗き込んだりと、新しいおもちゃを貰った子どものようなふうだ。

そしてしばらくして慌ただしい足音が聞こえたかと思うと勢いよくテントが開けられた。

「阿修羅さん、すいません！ 森に行ったらいつの間にか寝てて、その上茸を取られました！」

転がるように入って来たのは秀斗だった。全力で走って来たらし

く肩が上下し、額には汗が浮かんでいる。茸を取ってくるように頼んだのは鎖羅のだが、真っ先に阿修羅に謝るところにどれだけ阿修羅にしつけられたかがよくわかる。

「は？ 何を言っている。茸ならちゃんとお前が持って来たではないか」

鎖羅が不思議そうにそう返した。

秀斗は、へ？ と呟いてテントの中央にいる二人に目を留めた。弥生と、金髪の少年。

「え、へ？ お、俺えええええ？」

テントを突き破るような絶叫の後、思惑通り驚愕に呆然とする秀斗を見た鎖羅の笑い声が響き渡った……。

#### 第4章の16 戦場に舞い降りた鳥（後書き）

錬魔は最前線、苛烈な戦場にいましたが、彼らは隅っこの小さな戦場です。

ほのぼのとしております。完全にキャンプ気分ですね子ども二人。少し考えていた出会いと変わってしまいましたが、これはこれでもしろいからいいかな、と。さてと、あと一話で終わりたいな、鳥シリーズ。

では次回「鳥籠は壊された」です。

## 第4章の17 鳥は己の名を知らない

黒騎陣営の朝は各自食糧調達から始まる。

「鷺、これ食べれるか？」

弥生が数種類の野草を鷺に見せる。鷺はそれらに目を滑らせると、一つの野草を指差した。

「これは痺れるからやめたほうがいい」

「分かった」

とは言うものの、弥生はそれを捨てるわけでもなく他のものとは少し離して籠に入れる。

鷺はそれを疑問に思わなかったが、あえてつつこみもしなかった。鷺は現在捕虜として黒騎で生活し、最初の方こそ脱走を試みたが、全て弥生に発見されて諦めた。

「薪はどれくらいいるんだ？」

野草を集める弥生に対して鷺は枝を集めている。鎖羅からの頼まれごとだ。

「たくさんある方がいい。朝食が終わったら燻製を始めるから」

「ああ、昨日の猪か」

鷺の正体がばれた後鷺の身柄は一時秀斗に預けられ、鎖羅と弥生

は剣の鍛錬だと猪狩りに行き、見事二頭の猪を仕留めて帰って来た。一頭は持ち切れず、後で秀斗と阿修羅が取りに行っていた。

「ほんと、色々ありえない」

「何がだ？」

「別に……」

口を動かしながらも二人は着々と手を動かし、弥生の籠には様々な野草が、鷺の腕にはたくさんさんの枝が抱えられている。

「驚いいい！ 何楽しそうに弥生としゃべってんだよ！」

そろそろ帰るか二人が立ち止まった時、秀斗が目を吊り上げて割り込んで来た。籠に茸や木の実を入れている。

「目の錯覚だろ」

鷺がふんと鼻で笑う。

「はあ？ それ以上弥生に近づくんじゃねえよ」

秀斗は自分の姿で動き回られたこともあり、鷺に対して穏やかではいられない。その上鷺の見張りとして弥生が常に傍にいるものだから、イラつぽを刺激されまくっていた。

「度量の狭い奴」

「ああ？ つうかてめえは馴染むのが早すぎんだよ！」

秀斗の言うとおり、鷺は捕虜だからと言って萎縮するわけでもなく、堂々と普通の仲間のように溶け込んでいた。それがまた秀斗の癢に障る。

「隠密の才能だ」

どこにも違和感を与えずに入り込み馴染む。それは隠密の必須条件だ。取り分け鷺はその才能があった。

「くっそお、この餓鬼可愛くねえ」

「同じ餓鬼に言われたくない」

「あ？ こう見えて俺らは人間の五倍生きてんだよ」

勝ち誇ったように胸を張る秀斗。鷺は、え、と二人をまじまじと見る。

「今年で私たちは八五になる」

さらりと告げる弥生をじっと見ても、八十年生きているようには見えない。弥生は少し大人びているとは思ったが、秀斗などは普通に子どもだと鷺は心の中で呟く。

「お前ら、人間じゃないのか？」

「俺らは魔術師だ。そんじょそこらの人間と一緒にすんな」

「魔術師……」

鷲は頭の中の情報を一瞬で検索し、魔術師というワードを探した。

(そついや、龍牙隊にもこれくらいの年の魔術師がいたような)

龍牙隊に所属している者のプロフィールを見た時に魔術師という単語を見た気がする。確か医療部隊と夜一星に属し、二人の欄が異様に穴あきだったので記憶に残りやすかった。

「つうか弥生もこいつと親しくすんな。こいつは敵なんだぜ?」

今度は怒りの矛先が弥生に向けられた。弥生はいささかムツとした表情で秀斗を見る。

「私は見張りだ。一緒にいて何が悪い。それにこいつに戦う意思はないから敵ではない」

弥生に正面からばっさり斬られて秀斗は少しショックを受ける。ぐっと拳を握り、唇を噛みしめた。

「……そつかよ」

秀斗はぼそつと吐き捨てる。とテントの方へ歩いて行った。その背中に嫉妬や憤りや寂しさを漂わせながら……。

二人もテントへと向かうと、鍋をかき回しながら待っていた鎖羅に遅いと文句を言われた。本日の朝ご飯はお粥らしいが、黒い。匂いからして焦げたわけではないらしいが……。

鷲はその原因を考えるのを止めて丸太に腰をかけた。

そこにはすでに阿修羅と鎖羅もいて、出来上がりを待っている。

「なあ、お前たち二人も魔術師か？」

お前たちと呼ばれた大人二人が鷺へと顔を向けた。

「仕事熱心だな。諜報か？」と阿修羅が、

「そうだが、それがどうした？」と鎖羅が答えた。

「てことはここには四人の能力者が……けっこう多いな」

鷺は陣営をぐるっと見回した。鷺は多少なら人間ではないものの気配を感じることが出来る。神経を張り詰めさせれば四人からは人間とは違う雰囲気を感じられた。

「ということとは、そっちはそんなにいないわけか」

鷺はしまったという表情を浮かべた。

阿修羅は人の悪い笑みを浮かべており、鷺は自分がもらした情報に舌打ちする。今ので阿修羅には要注意人物のタグが貼られた。

「そろそろいいだろう」

味見を終えた鎖羅が深めの器にお粥を入れ、香りの強い野草を刻んで上に散らして配る。

全員に器が渡され食べようとした時、こちらに近づいてくる人影に気づいて四人は手を止めた。

「お食事中すいません。これ、おすそわけです」



と女が木の実を五つ鎖羅に渡した。彼女が持つ籠にはそれがたくさん入っており、たくさん見つけたので配っているらしい。

「ほう、すまないな」

鎖羅はデザートだな、と空いている器に木の実を置いておく。

「では私はこれで」

女は用を済ますとしっかりと礼を取って次の食事場へと歩き去った。

二人の会話をじっと聞いていた鷺はぽつりと漏らす。

「やっぱり変だ」

「どうした？」

女が歩き去るのを見ていた鎖羅が顔を鷺に向ける。鷺は謎の生物を見る目で鎖羅を見ていた。

「昨日から思ってたんだけど、お前らは何語を話してんだ？俺には日本語に聞こえるし、さっきの女はロシア語で会話してた」

鷺は潜入のためにロシア語をマスターしており、その他に英語と母国語の日本語を操った。この仕事を続ける以上、これからも話す言語は増えていくだろう。

「ああ、それが」

四人の視線が一斉に阿修羅に注がれる。阿修羅は内容を頭で纏めながら説明を始めた。

「俺たち魔術師は言葉自体に力を持っている。だからその力でこちらの言葉を相手の母国語に、相手の言葉を俺らの言葉に変換できるんだ。まあ、魔術師の語彙力にも左右されるし、その国特有の言い回しなどは理解しにくいかな」

「……羨ましいな」

言語習得が宿命の鷺は本音を漏らした。

「へえ、弥生知ってた？」

「いや」

子ども二人もそうだったのかとちょっとした疑問が解決する。

「なるほど。だからどの国へ行っても数日で言葉が分かったのか」

ふむふむと鎖羅も納得顔だ。

「おい鎖羅。その二人は分かるがお前……知らなかったのか」

脱力気味の阿修羅の問いに、鎖羅は悪びれもせず、うむと頷いた。魔術師の特性が一つ説明されたところで彼らは少し覚めたお粥を口に運び始めた。

「てか、なんでこの人たちはこんなにやる気がないんだ？」

鷺はお粥を食べながら訊いてみる。

昨日一日、鷺は黒騎の人たちを観察していた。阿修羅が彼らに捕虜だと説明し、彼らは子どもだ、灰色の髪だと各々感想を漏らした後はとくに接触してこなかった。彼らは鍛錬をするわけでもなく、のんびり自然を満喫していた。偵察に行つてくると出て行つた者は、ついでなのか魚を釣つて帰つて来るし、夜も不寝番がいるわけでもなく、勝手に寝ていた。

一方の龍牙隊は黒騎の襲来を警戒し、日々鍛錬を欠かしていない。仲間の諜報員も高台や木に登つてここを見張っているはずだ。

黒騎のこの状態を見ると、自分たちの行動が虚しくなつてくるのだ。

「俺たちは別に闘いに来たわけじゃないからな。まあ、攻められたらやり返すが」

「ボスの指令にも攻めるとはないし、個人で指令を受けているのである。一応阿修羅がまとめ役だが各々好きに動いている」

粥を口に運びつつ大人二人が答える。二人に同じ指令が来るのは珍しく、戦争が絡んだものはこれが初めてだった。さすがに屋敷に子ども二人はまずかろうとこの異空間まで二人を連れて来た。

「……そんな情報、話してもいいのか？」

さらつと答える二人に鷺は疑念を抱く。偽の情報を与えるのは敵を錯乱させる常套手段だ。

「疑い深いな。将来禿げるぞ」

鎖羅が呆れた口調でそう返した。鷺はわずかに眉を上げ、怒りを

押し殺す。

「ここにいる俺たちが持つ情報など取るに足りないものばかりだ。たとえ知られても黒騎に取っては痛くも痒くもない」

阿修羅は粥を食べ終わり、自分でおかわりをよそつ。

「ふうん。じゃあこの奴らは黒騎でも下の奴らってことか」

強いものは優先的に最前線で戦っている。となればこういう小さな戦場には残ったそんなに強くない者が送られてくるのだ。

「姉様はサセンだが強いぞ」

下という言葉にぴくりと反応した弥生が会話に入ってきた。

「お前、左遷の意味よくわかってないだろ」

隣に座る秀斗にそつつこまれて弥生は横目で秀斗を見た。秀斗はすうつと視線をあらぬ方向へ飛ばす。親しさを感じさせるやりとり。

(こつこつ会話もあるんだ)

情報交換でも、自分の利益のための会話でもない、触れ合いの会話。それは鷺の生活には無いもので、新鮮に思えた。

「そつちも似たようなものだろう?」

「……ああ」

阿修羅の言葉に少し違うことを考えていた鷺はつい頷いてしまった。後悔するがもう遅い。

(どんだけ失態してんだよ。これが小隊長に知られたら殴られるな……)

鷺の育て親でもある小隊長はがさつで乱暴だった。何度殴られたか分からないほどだ。

鷺は最後の一口を食べるとスプーンを静かに器の中に置いた。

(情けないよな。すぐにばれて、殺されもせず、自由まで与えられた。……すぐにでも、向こうに戻らないといけないのに)

鷺は器をじっと見つめている。その耳には人々の笑い声。誰かが肉を焼いているのかいい匂いもする。

(……なのに、ここが心地いって、思ってしまうなんて……情けねえ)

「鷺、何しけた顔してんだよ」

その声にはつと顔を上げると、不機嫌そうな秀斗と目があった。

「……地顔だ」

「それはずいぶんな地顔で」

秀斗はけつと悪態について立ち上がった。自分の食器をさっさと片付けてテントに戻る。

「秀斗。後で燻製の手伝いをしろよ？」

鎖羅はそう声をかけ、阿修羅と目を合わすとクスクスと笑った。阿修羅も笑いを堪えているのか口元が緩んでいる。

（素直になればよいものを）

そんな二人を弥生は不思議そうに見つめるのだった……。

鷲が黒騎で生活を始めて三日が経った。この日、阿修羅と秀斗は魔獣に乗って偵察兼散策に行き、鎖羅はそろそろ魚が食べたいと森の中へと入って行った。

そして弥生と鷲はお留守番だった。

「暇だな」

テントの中で寝転がって、鷲はぼつりと呟いた。その呟きに隅の方で剣の手入れをしていた弥生が顔を上げる。

「山にでも行くか？」

山は天然のアスレチックで、たまに血の気の多い獣が襲ってくるというイベントも発生する。弥生にとってはいい退屈しのぎになるし、食料も手に入るのだ。

「いい。俺にはあの山は登れない」

鷲は乾いた笑みを浮かべて首を横に振った  
岩肌がのぞく山道に人間界よりも何倍も凶暴な獣。人間で子ども  
の鷲には不可能な道のりだ。

「そうか」

弥生は月契の刀身をまんべんなく見、満足そうに頷くと具現を解いた。することがなくなつた弥生はテントの布にもたれて空中を見る。

しばらくして、おもむろに鷲が口を開いた。

「弥生。黒騎はいいところか？」

「……そうだな。私は本部に行ったことがないからなんとも言えないが、暮らしている屋敷は良いところだ」

へえと鷲は適当に相槌を打って、頭の中で龍牙隊を思い浮かべる。鷲も本部に行ったことはなく、隊長の顔も写真で見ただけだった。隠密の訓練施設で育ち、隠密以外の龍牙隊と顔を合わせたのはこの任務が初めてだ。

「リーダーの顔も知らないのか？」

「リーダー？ ……ああ、姉様たちはボスと呼んでた人か。ああ、知らない。姉様たちもあまり会わないらしい」

その答えに左遷されていれば当然かと鷲は内心納得する。会話が尋問のようになっていくことに気づき、鷲は普通の会話を試みた。

「えっと、お前はいつも何をしてるんだ？」

いざ会話を始めると、普通が何か分からなくなる。会話と詮索の違いがよくわからない。

「屋敷では剣の鍛錬をして、本を読んで、秀斗と遊んでいたな。たまに姉様と阿修羅が人間界へ連れて行ってくれた」

弥生の遊びには普通の探索から、一歩間違えれば秀斗があの世界の遊びを含んでいるが……。

「へえ。楽しそうだな」

「鷲。お前は龍牙隊が楽しくないのか？」

鷲の表情が陰ったのを見て、弥生はそう訊いた。

「ずっと、訓練が任務だったからな。楽しいなんて思ったことはない」

鷲は自嘲気味に笑った。楽しかったどころか訓練で失敗すれば部隊長に殴られ、訓練所の仲間と共に助け合うどころか他人を蹴落として真っ先にその訓練所を出ようとしていた。

「では、何か楽しいことをするか？ 何がしたい？」

そう訊かれて、鷲はしばらく考えた。そしてある答えに気づく。

「……ない。何もなし」



心の底が冷えていく。気づいてしまった。知ってしまった。

(俺、空っぽだ……俺は、自分の楽しみさえ知らない)

他人を演じ、自分の中の他人を育て続けた。その中で自分の中の自分は忘れ去られていた。自分でいることは許されなかったのだ。

「ないのか。だが姉様たちが帰ってくるまでまだ時間はあるぞ」

「……昼寝」

「まだ午前中だが」

鷲は顔を天井から弥生へと動かした。

「でもお前、ここ数日寝てないだろ？」

鷲はテントの広さの都合上弥生と鎖羅がいるテントで寝ていた。ちなみに阿修羅と秀斗のテントはそのすぐ隣である。

「私はもともと三日に一度程度しか眠らない。今晚はちゃんと寝る」

「……それでよく動けるな」

鷲はむくりと起き上がって伸びをする。

「暇だから薪集めにでも行くか」

結局は雑用だがそれでも暇つぶしにはなる。

「そうだな。ついでに二三本切ってこよう」

弥生も剣が使えるのでいい暇つぶしだ。

二人は立ち上がってテントの布をめくりあげた……。

トントン、とノックの音がし続いて扉が開けられた。その音に眠りに入りかけた弥生は目を覚まして視線をドアへと向ける。

「弥生ちゃん……きゃあ！ お、おじやましましたあ！」

ぱちりと目があった瞬間、癒慰は顔を真っ赤にして扉をしめた。

（わわわわっ、や、弥生ちゃんの上にさ、鷺くんが！ わ、私なんてところに……）

ぐるぐると思考は回り、あれやこれやと妄想してしまっ。

（とうとう鷺君、物にしたのね！）

秀斗には悪いがそのカップルもありだと癒慰は興奮する。娯楽が少ない如月に置いて、恋愛イベントは極上の楽しみだ。

「おーい、癒慰」

（はあ……灰色の鷺君に銀色の弥生ちゃん。なんていいカップルなのかしら）

「癒慰。助けてくれ」

ほうっと溜息をつく癒慰の耳にやっと弥生の声が届いた。助けての言葉に癒慰は甘い妄想を振り払い青ざめた。

(ま、まさか襲われてるの?)

癒慰は扉を勢いよく開けて中に突入する。

「弥生ちゃん今助け……」

ソファーに走り寄った癒慰はすやすやと眠る鷺の顔を見て言葉を失った。

「癒慰。傍にいるってどれくらい距離のことを言うんだ?」

癒慰は弥生の質問に頭を抱えた。なんとなくこの状況の意味が分かりだしたのだ。そしてその原因が自分だということも。

(もう少し弥生ちゃんに恋愛とは何かを教えないと!)

癒慰はひとまず自分を落ち着かせて、未だ鷺の下で答えを待っている弥生に答えた。

「ひとまず、そこから降りなさい」

#### 第4章の17 鳥は己の名を知らない（後書き）

やってしまった。これで終わらなかった。なんで鷺はこんなに手間取るんだろう。こんなに書いては消しを繰り返した話は今までないです。なぜ鷺が!?

本当は弥生との会話をざっくりカットしようかとも思ったんですけどねえ、あそこは鷺にとって大事なポイントなんですよ。今後の話に無利益無害のくせに、なぜ掘り下げてしまうのか……。疑問。そして次の話とつなげてしまうと、かなり長くなりそうでした。

なので、前話で予告を「鳥籠は壊された」と書きましたが、壊されてません。むしろ鳥は羽を休めてしまいました。

では次回、今度こそ「鳥籠は壊された」です。

## 第4章の18 鳥籠は壊された

鷺が黒騎で過ごすようになってから十日が過ぎた。少しずつ秀斗といがみ合うことも少なくなり、戦争の意識が遠ざかって行く。

朝。今日も子ども三人はスーブの具を採りに森にいた。

「なあ秀斗」

もくもくと座って草の選定をしている秀斗の後ろに鷺が近づく。

「何だ？」

秀斗は作業を止めずに言葉だけ返す。

「お前、弥生のことが好きなんだよな」

秀斗はその言葉にバツと鷺を振り返ると、素早く弥生の姿を探した。幸い、彼女はだいぶ離れたところで薪を集めていた。

「うるせえな。だつたらなんだよ」

「いや？ 観察しようと思って。恋をすると人は愚かになると聞いたからな」

「お前……馬鹿にしてんのか？」

秀斗の拳がプルプルと震えている。うんと年下の子どもに恋愛に

ついて話されると何だか腹立たしい。

「で、弥生のどこがいいわけ？」

秀斗は気恥ずかしくなつて鷺に背を向けて作業を続けながら答えた。

「かわいいから」

ぶつきらぼうな言い方に鷺はおもしろいと思つた。常にふざけて笑っている秀斗を照れさせたり、嫉妬で怒らせたりする。恋は強い力を持っているのだらう。

「俺には無愛想に見えるけど……」

「お前にはわかんねえよ。そうだな、後……すっげえ綺麗なんだ」

秀斗の顔が蕩けたように緩みまくっていた。そろつと秀斗の表情を伺つた鷺が目をぱちくりとさせる。

（幸せつて顔だな。……けど不思議だ、なんかこの顔見るとムカムカする）

秀斗は形のよい茸を籠に入れて立ち上がった。

「ま、お子様にはまだ恋愛なんて早えよ」

にっつと笑つと、秀斗は向こうで薪集めをしている弥生に声をかけた。弥生はひよこつと顔を上げて、すぐに近づいてくる。

「な、俺お前のこと好きだもんな」

その言葉に鷺は目を丸くした。

(こいつ告白した?)

以前潜入先で読んだ恋愛小説では告白は最大の山場だった。それがこんな簡単に目の前で行われてしまったことに動揺する。鷺はゆつくりと告白された側を見た。

「……………だから何だ?」

淡泊かつ冷淡な返答に鷺は急いで秀斗へと視線を移す。シヨックを受けたのでは思ったが、秀斗はにかつと笑ったままだった。

「別に?」

二人は並んでテントへと歩き出した。ぽかんとしていた鷺は慌てて二人の後を追う。

(確信した。これ、絶対脈ない……………片想いだ)

鷺は一抹の憐みを感じながらテントへと帰ったのだった。

そしてこの日の午後。楽しかった生活は急変した。テントの中で食休みを取っていた五人は、天空から聞こえる音に気付いて外へと出た。仲間の多くが空を見上げている。

「なんだあれ」

秀斗が空を見上げて呟いた。

「ヘリコプターだ。何かが吊るされてるけど……」

現代を生きる鷲はそれが何かすぐに分かった。人間界にしかないそれにはアメリカの国旗が描かれ、まっすぐ丘の向こうへと飛んでいく。

「増援か？」

掌で傘を作りながら空を見ていた鎖羅が呟く。

「わからんが、警戒した方がよさそうだ」

阿修羅が眉間に皺を寄せて空から視線を戻した時、森の方から二人の仲間が慌ただしく戻って来た。

「阿修羅さん！　トラックもたくさん走ってます。あいつら何か持って来ました！」

一気に陣内の空気が張り詰め、皆の視線がまとめ役である阿修羅に注がれた。彼はぐるりと全員を見回すと、すっと顔つきを変える。傍観者の顔から、リーダーの顔へと。

「全員武器を持って警戒に当たれ。もし攻めてきたら徹底的に追い返せ！」

覇気を込めて阿修羅がそう言い放つと、彼らは雄叫びをあげてそ



それぞれの持ち場に散って行った。

「秀斗は結界を、鎖羅と弥生は好きに動け」

秀斗は一つ頷いて額に星鎧を出し、鎖羅と弥生は剣を具現化して帯刀する。

阿修羅はもう一度空を見上げた。プロペラの音は鳴りやまず、今は荷を下ろしたヘリコプターが空の切れ目から人間界へと帰っていた。

（あの大きさの穴を維持できるとは……向こうには高度な空間術を使える奴がいるのか）

阿修羅は陣の中央へと歩き、そこで森を向いてたった。四人もその傍で待機する。

鷲は硬い表情をした阿修羅を見上げながら、荷物のことを考えていた。

（あれは何だったんだ？ アメリカから何かくるなんて聞いたことないしな……）

そして森へと目を向け、自分がするべきことを考える。鷲は諜報員、隠密がその仕事であり戦闘能力は武術を少しできるぐらい。隠密の戦闘は化かし合いであり、戦場でも敵に化けて逃げれば終わりだった。

（今から来るのは味方。そして戦うのは……敵である黒騎）

龍牙隊の戦力はそんなに高くはない。能力者は二人で、そのうちの一人は鷲だ。もう一人は治癒能力を持ち、戦闘は出来ない。

「鷲」

ふいに阿修羅に名前を呼ばれて、鷲は弾かれたように阿修羅を見上げる。

「お前は……」

「来たぞ！」

前衛の仲間が声を張り上げた。森がガサガサと動き、それは飛び出してきた。

「なっ、なんだこれは！」

「ば、化けものだ！」

ざわめきと動揺が黒騎陣営に広がる。森から飛び出してきたのは、獣だった。だがその形は歪。虎でありながら、翼を持ち、巨大な牙を持っている。ゴリラの身体でありながら、その表皮は鱗で覆われている。狼は角を持ち、狒々は二足で立ち身体に対して長すぎる手をしている。その獣、全て大きさが常を逸し、狂気に駆られた目をしていた。

次々に異形の獣は突進し、秀斗の結界によって跳ね返される。

「ぐっ……なんて力だよ。これじゃあ長くは持たねえ。あれは魔獣か？」

秀斗は苦しそうに顔を歪ませ、陣営の周りに張った結界へさらに力を注いだ。

阿修羅は闇誡あんかいを発現させ、その獣を視ると目を見開いた。

「なんだあれは……」

絶句する阿修羅に女二人が視線で問う。

「あれは魔獣なんかじゃない……あれは人工的に作られた獣だ」

「……あれは実験体だ。人間兵器の実験体だ」

呆然と鷲はうわ言のように呟いた。

戦争に関するアメリカの資料の中に人間兵器に関することも載っていた。アメリカ、ソ連は遺伝子操作技術を応用して人工的に能力者を作ろうとした。どんな実験も人体実験に入る前には動物実験を行う。これに関しても例外はなく、多くの動物が遺伝子を操作され本来持つはずのない特性を持つにいった。

だが動物の知能では完全に命令に従わせることはできず、さらに凶暴化した彼らを止めるすべを持たない人間は実験室の地下へと封じ込めたのだ。人間なら教育することで従わせることが可能であるという結果だけを残して……。

「人間兵器？ あの人工的に異能を作るというあれか」

鎖羅が苦々しく吐き捨てる。最初聞いた時、これだから人間は浅ましいと憤りを覚えた。

「ああ……そうだ」

彼らが話をしている間にも獣たちの突進は続き、獣の数は増えて

いく。そして新たにやって来た黒色の豹に似た獣は口から炎を吐いた。

「くっ……もう、持たねえ」

「かまわん……お前ら！ 獣ごときに怯えるな！ 来るぞ、構えろ！」

阿修羅が声を張り上げて仲間を奮起させると同時に秀斗の結界が弾け飛んだ。とたんに雪崩のように獣が押し寄せ、その後ろから龍牙隊が大声を出して突撃してきた。前衛が銃や剣で応戦し、後衛が砲弾を浴びせる。すぐに混戦となりあちらこちらで血しぶきが舞う。

「鷲、お前は龍牙隊へ帰れ」

「はっ？」

「秀斗、弥生。お前らは鷲を送ってこい」

二人はこくりと力強く頷いた。

「阿修羅、なんで！」

鷲が阿修羅の服のすそを掴むと、阿修羅はその手を右手で払う。それと同時に阿修羅の周囲に闇が立ち込めた。

「俺と契約せし者どもよ、俺の求めに応じ敵を喰い殺せ！」

阿修羅がその右手で前を指すと、闇の中から魔獣の群れが飛び出した。地をかけるもの、空を飛ぶもの。形も様々でそれぞれ敵へと

駆けて行く。そして最後に闇から出て来た一匹の虎の体軀をした獣は鷺の前で身を伏せた。

意図を理解した弥生と秀斗がその背に飛び乗り、秀斗が鷺を引っ張り上げる。

「お、おい！」

鷺が阿修羅の姿を見ようとした時にはもう獣は上昇を始めていた。そして阿修羅と鎖羅の向こう側に彼らへと走ってくる熊の姿が見えた。

「鎖羅、久々の狩りだ」

「左遷されたとはいえ、獣如きに劣る我らではないわ！」

阿修羅は己の闇を操り、鋭利な刃と化したそれで熊の脳天を貫いた。その熊を踏み越えて闇宵あんしやうを手にした鎖羅が獣の群れへと突っ込んでいく。

大人二人が戦い始めた様子は空の上から見るとれた。黒騎の陣営が足元に見え、煙と炎で陰っている。

「鷺、しっかりと掴まれ」

弥生は手綱を握ると魔獣の速度を上げた。

「うわっ」

鷺は風の抵抗を感じて弥生の服を握りしめる。秀斗はそんな鷺を後ろから支えていた。

「なんて数だよ」

上空から戦況を眺めた秀斗が舌打ち混じりに呟いた。鷲はそつと目を開け、顔を強張らせる。森は獣によって薙ぎ倒され、多くの獣が蠢いていた。至る所で炎が上がり、烈風が吹き荒れている。

魔獣の足は速く、すぐに龍牙隊の陣営が見え始めた。龍牙隊の陣営もテントを張り、大きさも黒騎のものと大差なかった。高度を下げて着陸態勢にはいる。

「これはっ……」

近づくにつれてはつきり見えて来た龍牙隊の状況に三人は息を飲んだ。テントは崩れ落ち、所々火が燻っている。だんだん強くなってくる臭気。木々が焼ける臭いと、肉が焼ける臭い。

鷲は震えていた。

「な、なんで……？」

着地して見れば、その状況は燦々たるものだった。龍牙隊の人たちは腹を食いちぎられ、首を噛みちぎられて転がっていた。

鷲は呆然と仲間たちの死を眺めている。

「これは獣の仕業か」

弥生は剣の柄に手をかけながら辺りを注意深く観察する。

「鷲……お前、鷲か？」

ふと名を呼ぶ声に顔をそちらに向けると、よろよろと森から歩いてくる仲間の姿があった。同じ隠密部隊の者だ。

「よかった。生きてたんだな……」

「何があつた！　これはなんだ！」

鷲は彼に駆け寄り問い詰める。彼は怒りに満ちた顔できつと唇を噛みしめた。

「アメリカのごみさ。奴ら、実験動物を実践に投入して来たんだ。獣とともに黒騎に奇襲をかけるって……それがこの有様さ。部隊長も、仲間もみなやられた」

彼は怒りに目をぎらつかせそう吐き捨てた。

「あの人……？」

自分を育ててくれた人が死んだと聞かされたのに、思ったよりも動揺がなかった。彼は続ける。

「制御できない獣は敵味方関係なく人間の喰い始めた。奴らは俺たちにごみ掃除をさせようとしたのさ……しょせん捨て駒の俺らに！」

あちらこちらで獣の咆哮が響き、それは怒りの声のようだった。

己の本来の姿を失ってしまった獣たちの怒り。

「鷲、ここはだめだ、逃げるぞ」

彼は鷲に手を伸ばし、鷲は彼の後ろに影を見た。手を動かそうとした瞬間、視界は赤に染まる。

「……え？」

何が起こったか分からなかった。気づけば仲間はおらず、血の雨が降っている。そして目の前には大きな足があった。のろのろと足の先を見上げて、それが象のものだと知る。だがその象は、棍棒のように棘がついた鼻を持ち、全身に角を生やしていた。

鷲はどさつとその場に座り込み、その血にまみれた鼻が鷲に向かって振り下ろされた。

「鷲！」

ガチンと物と物がぶつかる音がし、鷲は目の目に秀斗の背中を見た。秀斗は己に張っている結界で象の攻撃をしのぎ、その間に弥生が空中から象の脳天を月契で串刺しにした。

鮮血が迸り象は断末魔の叫びを上げてその場に倒れ伏した。

「しっかりしやがれ！」

秀斗はがつんと鷲の頭を殴って正気を取り戻させる。弥生も鷲の傍に立ち、周囲に気を張り巡らせた。

「ほうら、敵さんのお出ましだ」

秀斗がひゅうと口笛を吹いた。彼らの周りには生きている人の匂いを嗅ぎつけたのか十数頭の獣が集まっている。そのどれもが食べたくてたまらないとでも言うように舌を出し、涎を垂らしていた。

「弥生、どっちが多く倒せたか勝負しようぜ」

「望むところだ」



弥生は月契を鞘から抜き、獣へと突っ込んでいった。

「弥生！」

鷲がひっ迫した声をあげた。

「心配すんな。魔術師舐めんじゃねえよ」

秀斗はにっこりと笑うと掌から光の珠を発射して攻撃を始めた。

鈍重な獣はそれを浴びて地に倒れるが俊敏な獣はそれをよけ二人に襲いかかる。

「星の光、矢となりて敵を払え。流星！」

秀斗が右手で水平に空を切ると光の矢が迫りくる獣に降り注いだ。

「秀斗、右！」

鷲の声に急いで右を向くと、狒々が拳を振り上げていた。秀斗が舌打ちをすると同時に狒々は呻き声をあげ、大地にどっつと倒れる。その背には弥生が乗っており、胸に突き刺した月契を引き抜いた。

「世話がかかる奴らだな」

「助かった」

秀斗は引き続き魔術で敵を倒し、弥生は三人に襲いかかってくる獣を切り刻んでいく。

鷲はただ弥生の剣に見惚れていた。弥生は舞うように闘い、銀の

髪を赤く染めている。

(あいつ……笑ってる)

動くたびに髪がなびき、獣に刃をかけるその姿は美しかった。そして弥生の顔には楽しそうな笑みが浮かんでいた。

血しぶきがあたり、鷲の目の前にいた虎の首が落とされる。弥生はその体を飛び越えて次の獣に躍りかかる。獣は次々に増え、一向に減らない。

(なんて、綺麗なんだ)

鷲の心臓がドクンと跳ねた。絶望的な状況にいるのに、悲嘆にくれるどころか心は浮きたっている。鷲の目には弥生しか映っていなかった。

(欲しい)

心の底が渴望している。

(あいつの全てが欲しい)

彼女を取り巻くもの。彼女を作ったもの。彼女が思うもの。彼女が生きる道。

(全てを知りたい)

情報こそが全ての価値基準。彼女に対する全ての情報が欲しいと思った。表面の彼女ではなく、過去、今、未来、全てを持った彼女を知りたい。

(そっか、これが俺か)

鷲の中に眠っていた自分が、初めて欲したものの。想いが育ち、身体を認識する。自分の存在を鷲は知った。

(欲しい。知りたい。弥生の全てを、俺を目覚めさせてくれる彼女を)

鷲は金属がぶつかりあった音ではっと我に返った。鱗を持った巨大蜘蛛がその牙を結界に突き立て、自身の重みで壊そうとしている。

「にゃろっ」

秀斗は鷲の手を引いて立たせ、自分の傍に引き寄せると星鎧の守護を解いた。足場を無くした蜘蛛は地面に落ちて秀斗たちに向き直る。

「星の光、悪しきものを貫け。星呀波！」せいかは

蜘蛛がいる地面が淡く光ったかと思うと、光の柱が上がった。蜘蛛は光に焼かれ塵となって消える。

鷲は周囲を見回し、銃剣が落ちているのを見つけるとそれ目がけて走った。

「おい鷲！」

結界を張り直した秀斗が慌ててその背を追う。銃を拾い上げた鷲は決意をこめた目で秀斗を振り返った。

「俺も戦う。援護ぐらいはできるさ」

鷲が受けた戦闘訓練の中で一番出来がよかったのが射撃だった。

「そいつは頼もしいぜ」

秀斗は自分の半径二メートル以内にいると告げると、自分も攻撃を再開した。鷲は的確に獣の眉間を打ち抜き、弾が切れたら近くの死体から貰い撃ち続ける。秀斗は光の弾丸を発射するほか、術を織り交ぜて戦う。弥生は二人の近くで刃を獣の身体に沈めていた。

増えていく屍。それを踏み越えて襲い来る獣。疲れていく身体……限界が近かった。

「弥生！ いったん戻れ！」

秀斗は迫って来た一体を倒すと、熊の眉間に剣を突き立てて葬った弥生に声をかけた。

「なんだ？」

さっと秀斗の結界に入って来た弥生は掌から光を放ち、獣を威嚇しながら問う。

「これじゃあ埒があかねえ。魔術を使う体力は残ってっか？」

二人が会話をしている間、鷲はじりじり近づいてくる獣を撃ち殺していた。

「無論だ」

口では強気に言うものの、弥生がかなり疲れているのは秀斗にも分かった。

「星鎧。我が壁は鋼のごとく、全てを拒絶し絶対不可侵の領域となせ」

秀斗は自身の結界を強化し、弥生と視線を絡ませた。二人は同時に頷き、敵と向かい合う。

「星は礫となり敵の頭上に降り注ぎ、静寂に帰す」

秀斗の詠唱に弥生も合わせた。

「月は邪を払う光をもって敵を滅ぼし、浄化せよ」

そして二人の声が一つになる。

「星月夜ほくじつ！」

二人が言い放った瞬間、空から無数の光が落ちて来た。それは流星のように尾を引きながら獣たちに降り注ぎ、血の雨を降らし、屍を大地に増やす。

それは秀斗の結界の上にも落ち、その度に結界がきしんだ。

鷺はその圧倒的な光景に息を飲む。美しい光。地面に落ち、弾け飛ぶ。土煙りの間からも光は漏れた。

それが止むと、もうそこには何も無い。半径一キロを中心にテントも森も粉碎され、屑と化していた。

鷺が呆然と周りを眺めていると二人が地面に倒れた。結界が消え、月契も消える。

「疲れた〜」

「さすがにきつい……」

魔力をぎりぎりまで使った二人はぐったりと身を休めた。鷲は二人の傍に座る。

「弥生、秀斗……ありがとな」

二人は一瞬虚を突かれたような顔をしたが、秀斗が、

「いいってことよ」と照れ笑いを浮かべながら答え、弥生が、

「気にするな」

と無表情だが柔らかい光をもった目をして答えた。

鷲は跡かたも無くなった龍牙隊の陣営を見まわす。

（ここは全滅……後は黒騎と森にいる仲間がどれだけ生きてるかかってところか）

黒騎は無事だろうかと考えて、鷲は自嘲の笑みを浮かべた。

（敵の心配？ 何やってんだよ俺は）

三人が身を休めて一時間もしたころ、魔獣に乗って阿修羅と鎖羅がやって来た。二人は立ちあがって手を振る。鷲も立ちあがってその黒い魔獣を見上げた。阿修羅と鎖羅は大きな怪我はしていなかったが疲労の色が濃い。

「弥生、秀斗！ 鷲！ 無事か！」

魔獣から飛び降りた鎖羅が三人の下に駆け寄ってきた。鎖羅からは血の臭いがし、戦場の激しさをあらわしていた。

「俺たちは無事だ。そっちはどうなった？」

秀斗が緊迫した声で問う。

「獣は全員殺したが、被害が甚大だ。まともに動けるのは我らぐら  
いだ」

鎖羅の表情に悔しさが滲んだ。鎖羅が守れるのは剣が届く範囲、  
その外にいる仲間は今々に倒れていった。

「……やはりこちらにも獣がいたか」

獣の残骸を見て阿修羅が苦々しげに呟いた。

戦場で獣の加勢を受けて突入してきたかに見えた龍牙隊の隊員は、  
混戦となると次々に獣に喰われていった。そうなればもう陣営同士  
の闘いではなくなり、獣退治に全てを費やしたのだ。

「鷲……迎えが来たぞ」

鎖羅にそう言われて、鷲は鎖羅の視線の先に目をやる。そこには  
龍牙隊の服を着た人々が立っていた。陣の状態を呆然と見ている。

「俺……」

向こうにいるのは仲間だ。おそらく戦闘を聞いて本部から派遣さ

れたのだろう。同じ隊の仲間。では今隣にいる彼らは何なのか。

「黒騎にいる時、お前はよく丘の方を見ていた。あっちがお前のいる場所だ」

阿修羅が顎をしゃくって鷺の仲間を指した。行け、そう言っているように見える。

「鷺、何しけた面つらしてんだよ」

秀斗は鷺の頭を軽く小突き、にっと笑う。

「またどこかの戦場で会える」

弥生は敵同士だが、と付け足して薄く笑った。

「そう、だな。また黒騎に潜入することもあるだろうし、こっそり見に行つてやるよ」

鷺はにっと無理やり笑おうとした。少しひきつって不自然なものとなる。

龍牙隊の人たちはゆっくりこちらに歩いて来ていた。黒騎の人間と言つのは一目で分かるので警戒しているのだろう。

「次はもっとうまく化けてみせろ」

阿修羅の言葉に鷺は強く頷いた。

「じゃあな」



鷺は踵を返して仲間の下へと歩き出した。

(あいつらは敵じゃない……ただの、友達なんだ。……そして弥生は)

鷺はあつと呟いて立ち止まり振り返る。

「秀斗、一つ言い忘れてた」

鷺はくいくいと秀斗を手招きする。秀斗は？ を頭に浮かべて鷺へと歩み寄った。

「秀斗、俺確信したんだ。お前は一生、弥生を自分のものにすることはできない」

「は？」

秀斗は予想もしなかった言葉に目を見開いた。

「俺が弥生の全てを手に入れるからだ。俺は部分的な弥生じゃなく、全体の弥生を手に入れる。お前なんかには負けねえよ」

止めとばかりに人の悪い笑みを浮かべて鷺は去って行った。秀斗は、はい？ と固まっている。

「このクソ餓鬼があああ！」

鷺が仲間と合流したころ、思考機能を再開させた秀斗の絶叫がまだ煙がかかる空に響き渡った……。

鷺はぱちりと目を開け、視界が捕らえたものが見知らぬ天井であることに首をかしげた。

ぼつとする頭で身体を起こし、次に視界に入ったものに目を見開く。

「鷺、起きたか？」

弥生は向いのソファで剣の手入れをしていた。一瞬昔に戻ったのかと錯覚しそうな光景だ。

「俺、寝てたのか」

「ああ」

鷺は部屋が薄暗いことに気づき、窓の外に視線を投げた。空がほんのり赤い。ずいぶん時間が経ったようだ。

「いい気分だ。帰るとするか」

「なら、少しホールを覗いてくれ」

「わかった」

鷺は一度弥生に視線を投げかける。目があった弥生は小さく首をかしげた。

「また会おう」

鷺は軽く手を振って扉へと歩いて行った。

（また、弥生を知ることができた）

鷺はくすぐったいような気持ちを噛みしめながら部屋を後にしたのだった。

#### 第4章の18 鳥籠は壊された（後書き）

ぐったり。この話がこれほど長くなることを誰が予想しただろうか、いや誰もしていない。

でも、充実した話になりましたね。自分にとってですが。

はあ、これ今月中に終わるかな……。ファイト、自分。

次回はほっとするものを「ウソつきは泥棒は始めないが殺人未遂を起す」。ん？ なんか長い？

前話に入れ忘れていたシーンを付け足しました。興味のある方は17話の最後をお読みください。弥生が鷺の下から抜け出すまでのやりとりです。

## 第4章の19 ウソつきは殺人未遂を犯す

四月に入った、最初の日。本日は四月一日である。

勇輝はカレンダーをめくってニタリと笑った。三月分のカレンダーを細く丸めてごみ箱に捨て、鼻歌まじりに部屋を出る。

(四月一日はエイプリルフール)

いつ誰が決めたのかは定かではないが、今日この日は嘘についてもいい日なのである。人間常日頃から嘘をついているが……。

そして勇輝はまず厨房で適当に朝食を食べてから、最初の標的の下へと向かったのであった。

彼は大抵そこにいる。

勇輝は扉を開けた時にその金髪の後姿を見つけると嬉しさに頬を緩めた。如月のホールに入った勇輝は、おはよと挨拶してきた秀斗に近づく。後ろ手に何かを隠しながら。

「秀斗、これあげる」

「何？」

ソファーにだらつと横になっていた秀斗は身を起して座りなおした。

勇輝は無邪気な笑顔を振りまきながら持っていた瓶の中からチョコレートをつまみだした。それを掌で受けた秀斗はパツと顔を輝かせる。

「うまそう、ありがとな勇輝」

そして彼はなんの疑いもなくそれを口に入れた。すっと溶ける口どけ、ほどよい苦さ。なかなか絶品だ。

幸せそうに食べている秀斗に勇輝は心底申し訳なさそうな顔を見せた。

「それ……実はお詫びのしるしなんだ」

「え……何したんだよ」

秀斗は深刻そうな勇輝の様子に、嫌な予感を覚えながら秀斗は恐る恐る尋ねてみる。

「ごめん……弥生とキスした」

「勇輝はくつと唇を噛む。もちろん笑いを堪えるために。」

「え……」

そしてその告白を聞いた秀斗は、石になった。茫然自失の秀斗に勇輝はさらに畳みかける。

「秀斗が弥生を好きだったことは分かった。分かったんだけど、止められなかったんだ……ごめん」

少々オーバーな口調も吹けば飛びそうな今の秀斗では何もひっかかりを覚えない。秀斗の脳内では弥生と勇輝のキスシーンがモザイク付きで流れている。悲しい失恋のBGM付きで……。

「勇輝……」

やがて秀斗は地の底を這うような声で眩き、すっと立ち上がった。反射的に勇輝は一步後ずさる。

「歯あ食いしばれ……」

秀斗はおぞましいほどの殺気とともにゆっくりと拳を振り上げた。身の危険を察知した勇輝はバツと両手をあげて降参のポーズをとる。

「嘘！ 嘘だから！ 殴るの止め！」

焦ってばらした勇輝の目の前で拳が止まり、秀斗はきよとんと勇輝を見た。

「へ？ 嘘？」

拳を下ろし、もう一度その手をあげて今度は勇輝の首を掴んだ。殺気ではなく怒気が秀斗から放たれる。

「おいこら勇輝、てめえ嘘ってどういうことだあ？ 俺のショックをどーしてくれんだよ」

じわじわと絞められ、勇輝は掴んでいる秀斗の腕を叩いてギブと呻くが目をぎらつかせた秀斗は容易には離さない。

「え、エイプリル、フル、なんだ……よ」

秀斗はキューと呻く勇輝を解放し、胡乱な顔で反復した。

「えいぷりるぷーる？」

「そう。四月一日はエイプリルフールで嘘をついてもいい日なんだ」

「へえ、人間って面白いことするよな」

秀斗はソファーに座り、なにやら考え始めた。勇輝もその隣に腰をかけて話を続ける。

「嘘はなんでもいいんだ。弥生は実は男の子、とか癒慰は幽霊だったとか零華はアンドロイドとかさ」

「あら、それはおもしろいですね」

勇輝はびくつと肩を震わせた。扉の開く音もさせずに零華がそこにいた。

「あ……いやあ、嘘だよ？」

「あたり前です」

零華はつかつかと違うドアへと向かう。

「どっか行くの？」

零華が開けようとしたドアはホールから玄関へと続くドアだった。ホールは如月の真ん中にあり、ホールから東西南北様々な部屋へと廊下が伸びている。

「ええ、街で本を買ってこようかと」



「あ、癒慰も街に行ってるぜ。春ものを見てくるって言った」

「え、癒慰って普通の服も着るの?」

コスプレ少女の癒慰が普通の服を着ているのを見たことがあった  
だろうかと言輝は自問自答する。

(うーん、記憶にない)

「たまにはまともな服を着てますよ?」

本当にごく稀にだが……。

「へえ、いつてらっしゃーい」

勇輝はひらひらと手を振って零華を送りだした。それに零華はふ  
んわりと微笑んで返す。

パタンとドアが閉まった。

「あ……いいこと思いついた」

ドアが閉まると同時に秀斗が眩きニタアッと笑う。

(絶対いいことじゃない……)

勇輝は嫌な予感をひしひしと感じつつも何も言わない。内心何を  
するか楽しみになってしまったのだ。

「勇輝い……ちょっと耳かせや」

秀斗はいたずらを思いついた子どものようにつきつきしながら勇輝にコソコソと思いついたことを話すのだった……。

二人はコンコンとドアをノックした。今立っているのは錬魔の部屋の前である。

「入っていいぞ」

「おじゃましまーす」

勇輝がドアを開けると、錬魔は壁際の診察兼実験スペースで何かの薬品を作っていた。コポコポとプラスチック内で沸騰している液体は赤い。

「また実験かあ？ 今度は何作ってた？」

秀斗がひょいっと覗き込んですぐに顔を離して目を押さえる。

「痛え！ なんか目に来た！」

勇輝もそつと近づいて匂いを嗅ぐ。その香りに舌がぴりりとした辛さを思い出した。

「唐辛子？」

普段食べるキムチ鍋とは濃度が違うがその赤色と香りは唐辛子を思い浮かばせた。

「そっだ」

「そんなのどーすんだよ」

どう見ても料理には見えないが、唐辛子は薬になったただろうかと二人は疑問に思う。

「最終的にはこれを球状にして衝撃で気化するようにする。春になると浮つくからな、勇輝の護身用だ」

「え、俺の?」

どうやら催涙爆弾でも作っているらしい。勇輝は心の中で痴漢撃退じゃん? とつつこんでいた。

「ああ……春になると色々危ねえからな」

うんうんと秀斗が頷きだしたのを見て、勇輝はへ? と不思議そうに鍊魔を見た。

「まあ、簡単に言うと襲われやすくなるから気をつけろってことだ」

裏社会の管理機関龍牙隊、その死堅牢如月において一番弱そうに見える勇輝。春には牙軍の担当地区が変わることもあり、一発逆転を目論む一家が出てくることがある。となれば真っ先に狙われるのは、言わずもがなだ。

「そっか、新学期だもんな」

違う方面でも襲われる心当たりがある勇輝は遠い眼差しで明後日

を見ていた。

「あ、そうだ。俺錬魔にこれをあげに来たんだ」

勇輝は手に持っていた瓶からチョコを錬魔に渡した。錬魔はしばし何故？ と不思議そうな顔をしていたが、勇輝にじっと見つめられてそれを口に入れる。

「……………うまい」

「それ、実は毒入りなんだ」

勇輝が意地悪そうな笑みを浮かべながらそう言っていると、錬魔は眉間にしわを寄せて舌で口の中を探る。

「特に毒物の味はしなかったが……………勇輝、俺の薬を使ったのか？」

驚きもせず、怒りもせずに錬魔は冷静に勇輝に問う。予想外の切り返しに勇輝が言葉をつまらせていると錬魔が再び口を開いた。

「まあ、俺はそれぐらいの悪戯範囲の毒では死なん。医者として毒には耐性をつけてあるからな」

「ごめんなさい。全部嘘です」

勇輝は早々と兜を脱いだ。嘘をつく相手を間違えた。錬魔に毒物、医療関係はNGだった。

「嘘？」

怪訝な顔で眉をひそめる錬魔に先程から少し離れたところで興味深げに様子を見守っていた秀斗が事情を話した。

「エイプリールフルって日だから嘘をつくんだってよ」

「酔狂だな。騙されるべきだったのか……すまん。で、お前は騙されたのか？」

錬魔はフラスコを揺らしながら秀斗に訊いた。秀斗はあははと苦笑いを浮かべ、勇輝が鼻高々に頷く。

「もつきれいに引っかけた」

「だろうな」

錬魔は狼狽する秀斗が目には浮かんでくすりと笑った。

「うるせえな。……てことだからよ、錬魔、ちょっと協力してほしいんだけど」

にっと笑ってから、秀斗は錬魔にあるものが欲しいと頼んだのだ。った。

弥生はホールへと足を運んでいた。部屋で外を眺めていたところ、秀斗が五分後にホールに来るようにと言いに来た。弥生の部屋に時計はないので三百秒を数えた後部屋を出たのである。

( 奴が呼びに来るなど……何を考えている？ )

秀斗がまともな用事を持って彼女の部屋を尋ねることは滅多にない。そして用事があれば、その用事はろくなものではなかった。

弥生は考えるのはそこまでにしてドアを開けた。

「秀、来たぞ」

だが広間に秀斗の姿はなかった。

「秀？」

訝しげにホールを見まわした弥生は、一つのソファから足が出ているのを見つけた。

「秀、人が来たのに寝ているとはいいい度胸だな」

弥生は秀斗が寝ているソファへと近づき、見下ろした。だが秀斗は硬く目をつむり一向に気づく気配が無い。

「おい秀斗、目を覚ませ」

弥生はソファをドンッと蹴った。秀斗の身体が少し揺れたが目覚まさない。

「秀……」

弥生の声に苛立ちが含まれ、出現させた月契の鞘で頭を小突いた。二度三度と突いても起きない。

「……秀？」

おかしいと感じた弥生は身をかがめて秀斗の顔を覗き込む。彼の顔は白く、精気が感じられない。弥生はその頬に触れ、その冷たさに目を見張った。

「秀！」

弥生は秀斗の胸に耳を当て、驚愕に目を見開いた。

(音が、しない)

弥生はゆっくりと身体を起こし、膝をついた。壊れものに触るよ  
うにそっと秀斗の頬に手を添える。

「嘘……だよな」

思わず声が漏れる。指先から伝わる温度は非常なほどに冷たく、まるで現実だと伝えているようだった。

「目を開ける、秀！」

悲痛な弥生の叫びがホールの静けさに吞まれる。

その時、一つのドアが開いた。

「秀斗はいるか？」

白衣を着た錬魔を、弥生は表情のない顔で見上げた。瞳は不安げに揺れており、いつもの覇気がない。

「れ、錬魔……」

弥生はそつと秀斗の頬から手を離す。

「なんだ、秀斗は寝ているのか？」

錬魔は先程秀斗が持っていた薬品について使用目的を問い正そうと思ったのだ。彼はストーカーで困ってる奴を助けるためと言い、深く考えずにその薬品を貸した。だが勇輝のエイプリルフルという言葉を思い出すと、どうにもそれが嘘のように思えたのだ。

「目を覚ませ秀斗。毒入りのチョコを食ったわけじゃないだろ？」

呆れ顔で錬魔はソファアを二度蹴った。だが秀斗は起きない。

「錬魔、毒って何だ！」

もつと強く蹴るかと思いを引いた錬魔に、弥生は詰め寄る。鬼気迫る弥生の表情に錬魔は目を瞬かせた。

「いや、さつき勇輝が毒入りだといってチョコを持って来たんだ。まだお前のところには行ってないのか？」

あつけなく嘘だと白状してつまらないと拗ねた勇輝を思い出して錬魔は少し頬を緩めた。

「勇輝が……毒を？」

弥生の声は震え、握りしめた拳の爪が肉に刺さっていた。

「ああ、まあそれは……」



「弥生！ どうしよう！」

弥生の目に殺意が宿り、鍊魔が事の結末を言おうとしたその時、運悪く、そしてタイミングよく勇輝が駆け込んで来た。

弥生が部屋に入ってから三分後。それが秀斗から言われた突入の時刻である。

「弥生、俺！」

「勇輝、殺す」

スツと弥生が消えたかと思うと勇輝の重心が後ろへと傾いた。背中に痛みを感じ、顔をしかめて目を開けるとそこには冷酷な笑みを浮かべた弥生がいた。弥生は勇輝の上に乗る勇輝を床に縫い付けている。そしてその笑顔のすぐ下には銀色に光る長いもの。

「や、弥生？」

月契を首元に突き付けられて、勇輝は本日三度目の降参ポーズを取った。

「秀の、敵」

抑揚のない声。いつの間にか笑みは消え、全ての感情が抜け落ちた顔で弥生は勇輝を見下ろしていた。

「ままま待って！ 違う、これは違うよ、断じて違う！ 弥生、弥生、目を覚まして落ち着いて！」

「おい弥生、勇輝相手に何をやっている」

やるなら秀斗にしろとぼやきながら錬魔が近づいてくる。だが弥生は錬魔の言葉には一切耳を貸さずにただ勇輝を見下ろしていた。

(秀が死ぬ時は私が死ぬ時。だが、その前に勇輝を殺す)

仲間を傷つけたものには死を。弥生がただ一つ彼らと誓ったものだ。

「秀はお前が殺した。だから私はお前を殺す」

もう正常な判断などできなかつた。秀斗が死んだ。それ以外は何も理解できない。ただ自分の誓い、信じるものに従うのみ。

「わわわ、秀斗！ 助けてよ！ ん、錬魔も見えてないで助けてええ！」

勇輝は涙目で懇願するが弥生の表情は一切揺るがない。

(あ、これ殺される)

秀斗がいつも剣突き立てられているのを黙って見ていてごめん、と勇輝が懺悔をしたその時、爆笑がホールに響き渡った。

弥生の表情に柔らかさが戻って、目がぱちぱちと動いた。

「あはははっ、ひっ、やばい、腹痛え。ははははっ、あははははっ！」

ソファの上には二人を指差し、腹を抱えて笑う秀斗の姿があった。うずくまってソファをがんがん叩く。

「……秀？」

弥生は勇輝の上から降り、のろのろと秀斗へと近づいた。その手からカランと月契が滑り落ちる。

「くくくつ、最高！ 嘘だよ嘘！ やーい、弥生ひっかかってやんの」

秀斗は最初の方の記憶はないが、鍊魔が入って来たところからの記憶はある。最初はちゃんと死んでいたのだ。鍊魔から貰った仮死剤によって。

「秀斗。あの薬を自分で使ったのか」

鍊魔はストーカーを追い払うには彼を一度死んだように見せかける必要があると言われたので仮死剤を注射器に入れた。打ってから五分で効き、二、三分で切れるように調合した薬だ。五分以上の効用を求めると蘇生にも薬が必要と言つと、秀斗は短い効用でいいと答えた。

「今日、エイプリルフルって言って嘘をついてもいい日なんだ」

ほっと生きた心地を取り戻した勇輝がそうネタばらしをする。

弥生はそれを聞いてすつと目を細めた。治まっていた殺気が瞬時に立ち上る。

「嘘を、ついてもいい。そうか……」

弥生はゆっくりと笑い転げている秀斗に近づき、にっこりと笑った。それを見た瞬間、勇輝と錬魔は秀斗の命日を悟った。

「秀斗、私はお前が好きだよ。大好きだ……つい殺してしまいたくなるほど」

冷え冷えとした声で告白され、さすがに秀斗も事態のまずさに気がついた。さっと血の気が引いて口をパクパクとさせている。

「あ、や、弥生……許すのがエイプリっ!」

秀斗が横に跳ねると同時にソファァーに短剣が刺さった。場所はちょうど秀斗が座っていたところだ。

秀斗は星鎧を出現させて一目散に逃げ出す。それを追う途中で、弥生は愛剣、月契を拾った。

「嘘をついてもいいなら、うっかり殺していいよな？」

連続して弥生の掌から光の弾が放たれ、それは全て秀斗の結界によって受け止められる。

勇輝と錬魔はその様子を黙って見ているしかなかった。心に思うことは同じ。“自業自得”である。

弥生の集中攻撃を浴びた秀斗の結界は多くの波紋を描き、その部分が他よりも薄くなる。破壊のスピードに修復が追いつかないのだ。結界が弱まった隙を見つけて弥生は剣をそこに突き刺し、一気に破る。星鎧の結界は破られると次を出すのに少々時間がかかるのだ。

「秀、遊ぼうか」

弥生は笑みを浮かべながら秀斗を追い詰める。秀斗はじりじりと後退していき、壁に突き当たってしまった。

(やべええ、逃げ場無くなった！)

ホールの隅に追いやられた秀斗は間近にある弥生の顔にアハッと笑い返した。弥生との距離は一步。この距離は守護圏内であり、どれだけ結界を狭めても弥生を弾くことはできない。

(あ、俺今日が命日だわあ)

いつもは何だかんだで手加減されていた。ちょっとした挨拶程度である。だが今は……。

「弥生……お前が動揺してくれて嬉しかったぜ」

最後にと秀斗がキラリとそう弥生に言い、弥生が剣を振り上げた時、ドアが勢いよく開いた。

「大変よ！ 零華ちゃんが！」

駆けこんで来たのは癒慰。おろおろと動揺している癒慰の背中には零華がいた。

全員が動きを止め、二人を見る。

「零華ちゃん怪我してるの！ 早く治療して！」

「ソファーに寝かせろ！」

怪我という言葉に鍊魔が即座に反応し、指示を飛ばした。勇輝も

おろおろと鍊魔の後について行く。弥生は不満そうに秀斗を一瞥して零華へと身を翻した。解放された秀斗はへなへなとその場に座り込む。

(マジで死ぬかと思ったあ)

「零華に何があったのさ！」

ソファーに寝かされた零華の顔は青く、左腕から出血していた。細い一筋の傷から流れ出る血は服の袖を赤黒く変色させている。

「癒慰、包帯を持ってきてくれ」

鍊魔は火煉を発現させ、傷の状態を視る。赤く縁取られた瞳には、傷口の上に青い花のような印が浮き上がって視えている。

「命にかかわるようなものではない」

鍊魔の言葉に皆がほっと息を吐いた。鍊魔はその印に触れ、自分の魔力を注ぎこむ。するとみるみるうちに傷口が塞がり始めた。

「すごい」

癒慰が持つて来たタオルで血を拭くと傷口は跡だけになっていた。それに包帯を巻き、後は自然治癒でその傷口が消えるのを待つだけだ。

「すぐに傷口も消える」

鮮やかな治療に勇輝はおおっと見惚れていた。

「それで、何故こうなった」

月契の鞘を握りしめて治療を見守っていた弥生がそう尋ねる。癒慰は近くのソファーに座り、彼らも話を聞くために手近なソファーに座った。

「買い物をしてたら、路地の方から零華ちゃんの声が聞こえて、駆けつけてみたら刃物を持った男に囲まれてたの」

零華一人に対し、敵は五人だった。ナイフで左腕を斬られた直後だったらしく、零華は腕を押さえて痛みを堪えていた。

「男はどうした」

鍊魔が苦々しい顔でそう尋ねる。

「あいつらは蔓でぐるぐるにして、きつい幻覚を見せて放置してきたわ」

ふんつと癒慰は鼻を鳴らす。

だが運悪く抵抗してきた男が持つスタンガンに当たり、零華は気を失ってしまった。

「それで気を失った零華ちゃんを、こうやってここに運んできたわけ」

ざっくりとした説明に秀斗が舌打ちをした。

「その男たちってのは……」

「おそらく以前私たちが潰した組の残党ね」

薄汚れていたが、雰囲気は以前にましてとげとげしく、飢えていた。

「残党が集まり始めているのか？」

予想はしていたが、と鍊魔は呟く。こういう事態に備えて勇輝の対ヤクザ武器を作っていたのだ。

「まだ旗揚げはしてないはずだけど……かなりヤバい雰囲気だったわ」

近いうちに一戦交えるかもとため息交じりに呟く癒慰を見て、勇輝も物憂げな溜息をついたのだった。

「まあそれは今はどうでもいい。そいつらを転がしてある場所を教えろ。アジトを吐かせて抹殺してくる」

弥生の低い声が並々ならぬ怒りようを表している。隣に座る勇輝はぞぞつと寒気を感じた。

「今回は俺が行く。今お前が行けば街が無くなるからな」

そう名乗りを上げた鍊魔の判断は正しい。秀斗による怒りの上にさらに零華を傷つけられた怒りが乗り、今弥生が制裁に行けば街が廃墟となる可能性が高い。

「そうだよ。どうせまたやりあうんだし、その時おもいきりやれ



ばいって」

勇輝も街が死ぬさまがありありと見えてしまい、なんとか弥生を押しとどめようとする。

「……わかった。今回はお前に譲る」

弥生は舌打ちをして月契の具現を解き、ソファーに深く座りなおした。一同ほっと胸を撫で下ろす。その時零華が呻き声を漏らした。

「零華？」

鍊魔がその様子に気づいて視線をやると、零華はうつすらと目を開けた。

「おっ、気がついたか」

しばらく視線を彷徨させた零華は突然がばつと跳ね起きた。とたんに眩暈に襲われて前のめりになったところを鍊魔に支えられる。

「血を失っているんだ。無理をするな」

支えられた手をまじまじと見、零華は視線を鍊魔の顔に移した。そしてその背後で心配そうな顔をする四人に、部屋全体にと移動させる。

「あの……ここはどこですか？」

怯えたような細かい声。全員が目を丸くした。

「あなた方はどなたですか？」

不安に瞳を揺らして零華は辺りを伺う。

「零華……？」

鍊魔はやっと仲間の名を呼ぶことができた。だがその声はかすれ、全身の血が抜けていくような感覚に陥る。

「れい……か？」

彼女は眉をひそめ、少し顔を歪ませた。

「もしかして記憶喪失？」

勇輝はおろおろと零華の様子を伺う。なんだか零華にいつもの凜とした雰囲気がない。

「倒れた時に頭打ったのかも」

癒慰がどうしようと思者である鍊魔を見上げた時、ドアが開いた。

「ただいま戻りました」

戸口に立っていたのは微笑を浮かべた零華。

彼らはソファーに身を起こしている零華と、帰って来た零華を交互に見た。全く同じ顔をしている。

「やっぱりアンドロイド？」

頭を抱えた勇輝の叫びが、波乱の幕開けとなった。

#### 第4章の19 ウソつきは殺人未遂を犯す（後書き）

何が問題かといいますが、時間がない。私の時間ではなく、作中…  
：春休みは短すぎますね。二週間少ししかない。プロットからいく  
つか小話が消え、五章に回されました。四月は多くて一週間くらい  
しか春休みないと思いますからごたごたは二つで終わりです。  
この話も詰め込みすぎたかなとも思いますが、ひさびさに続く感を  
出してみました。

タイトルは長かったので短くしました。

次回「華は一輪ざし（仮）」です。さて、どこまで続くかしら。

## 第4章の20 両手に華

右を向いても零華、前を向いても零華。この状況を表すにはそれに尽きる。

戸口に立つ零華は紙袋をドサツと落とした。

「百華………?」

「やっぱり零華なのね!」

ソファーに座っていた、百華と呼ばれた彼女は嬉しそうに立ち上がった。

「えっと。あっちが零華で、こっちは百華?」

勇輝は戸口の零華を指差し、目の前の百華を指差して確認する。

「双子ってこと?」

双子ということは魔術師であり、彼女も魔術界から渡って来たということになる。

「え、ええ」

零華にしては珍しく歯切れが悪い。双子は互いに一步も動こうとしなかった。

「零華って姉妹いたんだな」

知らなかったぜと秀斗は百華をまじまじと見る。やはりどれだけ見ても零華にしか見えなかった。

「はい……私の妹です」

零華の声は力が無く、顔色もよくない。怯えを瞳に映す零華を見て、百華は悪意に満ちた笑みを浮かべた。

「どうしたの？ 零華」

同じ零華の声なのに、ひどく濁って聞こえる。零華の様子がおかしいことに気がついた癒慰が零華のもとに駆け寄った。

「零華ちゃん？」

そつと小声で声をかけると、零華は大丈夫と小さく返す。

「もしかして、怖いのか？ 知られるのが。ここの人たち、仲間なんでしょ？ いい人たちね、私を貴女と思って助けてくれた。零華はそんな人たちを騙しているのにな」

百華の傍にいた四人は目を見張って百華に視線を注いだ。百華の笑顔の底にある黒い感情に気づいた彼らは、零華と百華の間に壁をなすように並んで立つ。ホールに緊張の糸が張り詰めた。

「零華に、守る価値があるのか？」

百華は不思議そうに首をかしげる。その言葉に彼らはますます警戒を強めた。

零華はくつと唇を噛んで百華から目を逸らさずにいた。

「零華は仲間だ」

弥生が毅然と言い放つ。右手を下に垂らし、いつでもその手に月契を握る心づもりをしていた。

「仲間？ 可哀そうに、その子の正体を知らないからそう言えるのよ。その子の血、知らないの？」

くすくすと百華は笑い、その顔は醜く歪んだ。零華を見つめる眼差しは、汚れたものを見ているように鋭利で冷たい。零華と、決定的に違う顔だ。

零華を守る全員の顔が険しくなる。

「その子、闇の子よ？ あの禁忌の闇の子なのよ？」

その言葉に前衛四人は目を見開いた。それを驚きととった百華はさもおかしそうに笑う。

「やっぱり隠してたのね。ねえ貴方達、闇の子に関わると死ぬよ？ 私の一族みたいに」

男三人がひとまず黙らせようと取り押さえるために一歩踏み出し、弥生がその手に月契を出現させた時、凜とした声が彼らの鼓膜を震わせた。

「黙りなさい！」

零華はつかつかと百華へと歩み寄り、四人は零華に道を譲った。

零華は百華をキツと見据え、距離を縮めていく。零華の瞳にははつきりと怒りが映っていた。

「闇の子は存在が許されない。だって皆を不幸にするんだもの。汚れたいらぬ存在よ。ねえ、みんなもそう思うでしょ？」

けらけらと百華は笑い、口角をあげた。優越感が見せる笑み。その瞳には侮蔑と憐みが映っていた。

彼らは百華を殴り飛ばしたい衝動を必死に堪えた。零華が堪えている。零華が動くまではと彼らは零華の背を見つめた。

「百華……用があるのは私でしょうか？　ならば、二人で話しましょう」

一瞬誰がしゃべったのか分からなかった。それほど零華の声は冷え冷えとし、一切の感情が読み取れない凍った声だった。

零華は口の中で詠唱すると、百華の手を掴んだ。その瞬間二人は消え、ホールに静けさが戻る。空間転移によってどこかへ移動したらしい。

「……ごめん。もう無理」

ホールの緊張がふつと途絶えた時、離れたところで一人立っていた癒慰が肩を震わせてドアから飛び出していった。

「癒慰！」

秀斗が追おうと一歩踏み出したが、それより前に練魔が走り出す。

「癒慰には俺がつく。お前は万が一のために待機しろ！」



荒々しく扉が閉められ練魔はホールから出ていった。残った三人は顔を見合わせ、胸に重たいものを抱えてソファーに座りこむ。双子の再会。それは、感動などとは程遠く百華が落とした爆弾は各々に少なからず傷を与えた。

「癒慰に零華、大丈夫かな」

勇輝が心配そうに呟く。自分が泣きそうな顔をしていた。闇の子が何かは分からなくても、二人が辛いことは分かった。特に妹に苛烈な言葉をぶつけられた零華のことを考えると勇輝の胸は痛む。

「大丈夫じゃねえなら支えてやるさ」

秀斗は隣に座る弥生を見て、その頭をぼんぼんと叩いた。はっと我に返った弥生は月契の具現を解いて秀斗の顔を見る。柄を強く握りしめていたのか弥生の手は白くなっていた。

「秀……さすがにああもはっきり言われると堪えるな」

ふつと弥生は自嘲気味に笑い、秀斗もああ、と頷くと弥生の髪を撫でて手を離れた。

「秀斗」

二人の向かいに座る勇輝は決意を固めた表情で顔をあげた。秀斗の視線と絡み合い、秀斗は目で続きを促す。

「闇の子について教えてほしい」

闇の子という言葉聞いた時の彼らの動揺は激しかった。それだけで、彼らにとつてその言葉が重大な意味を持っているのは察するに難しくなかった。

だが、勇輝はたとえ彼らの傷口をえぐることになっても、それを知りたいと思つた。そして知つた上で、それを受け入れたい、と。

（俺は、人間だから。できることもあると思うんだ）

勇輝は黙つて秀斗の返答を待つ。秀斗がちらりと弥生の顔を伺つと、弥生は静かに頷いた。

「本当は、知つてほしくなかった。けど、お前は勇輝だからな。俺はお前を信じるよ」

秀斗はそう言つて悲しそうに笑つたのだ。

癒慰を追つていった鍊魔は癒慰に続いて彼女の部屋に入った。癒慰は部屋の中央でぴたりと止まり、鍊魔を振り返つた。その瞳にはすでに涙が溢れている。ぎりぎりまで我慢していたのだろう。彼女の前では泣くまいと、皆の前では泣くまいと。だが今の癒慰は小さく震えていた。

「癒慰」

鍊魔は彼女に歩み寄り、癒慰は鍊魔の胸にわつと飛び込んだ。そのまま嗚咽を漏らして泣く癒慰の頭を鍊魔は優しく撫でる。

鍊魔の胸も重く沈み、チクリと棘が刺さつたような痛みがある。

だが、癒慰にはえぐられるほどの痛みだったのだろう。

百華の言葉が、癒慰の記憶の鍵を開ける。ずっと閉じ込めていた箱が開かれ、記憶がとめどなくあふれ出る。

“闇の子だと？ そんなものがこの一族に生まれていいものか！”

そう喚いて母と子を牢獄へと捨てた父親。

“あなたさえ生まれなければ、こんな化け物さえ産まなければ！”

毎日呪詛の言葉を吐き、殺そうとした母親。

親戚は彼女に流れる血を恐れ、蔑み、排除した。誰も信じられず、誰も信じさせてくれなかった。

誰も彼女の名前を呼ばなかった。存在することが許されなかった。暗い牢獄での暮らしが何年続いたのか正確には分からない。そこに時という概念は無かったから。だが、それが終わった日。家族が殺された日のことはよく覚えている。

牢の前に立った男の顔も、短剣を喉に突き刺した母親も、全て鮮明に記憶していた。

しばらく泣きじゃくって、すすり泣きにまで落ち着いた癒慰はぼつりぼつりと言葉を紡ぎ始める。

「私……みんなという間は、自分は闇の子だつてこと、忘れられたの」

人間界に飛ばされて、ずいぶん放浪した果てにたどり着いた仲間とは自分と同じ闇の子だった。それは癒慰に安心感を与え、傷を癒した。

「でも、闇の二人に出会って、私は闇の子だつてことを思い出した。とても、怖かった……その闇に惹かれる自分が嫌だつた」

あの夜。闇の二人と対峙して自分の中の血が震えた。土の血は闇が増幅する恐怖に震え、闇の血が純粹な闇に対する感動で震えた。そんな自分に気付いた時、癒慰は愕然としたのだ。

癒慰の心は話を聞いてもらっただけで少しずつ落ち着きを取り戻していく。

鍊魔は癒慰の頭を撫でながらじつとその話を聞いていた。

「鎖羅さんと弥生ちゃんが親しげに話しているのを見て、腹が立つた」

闇は彼女たちを苦しめる敵であり、癒慰にとって敵でなくてはならなかった。苦しみの根源である闇と、仲間の闇の子が親しむことへの複雑な思い。

そして百華の言葉はナイフのように胸に刺さつた。傷口が開き、血が流れ出る。百華と同じことを母親も口にした。

「あの子の言うとおりよ。私たちは存在してはいけない……消えてしまえばいいのに」

力なく呟く癒慰の体を、鍊魔は強く抱きしめた。大丈夫だとそつと囁く。

「何のために俺たちがいる？ 全員で生きるためだ。辛いなら、今は休めばいい」

癒慰はゆっくりと顔をあげ、鍊魔の顔を見た。鍊魔は優しく笑い

かけ、それが癒慰の心を軽くする。

「だから一人で苦しむな。同胞を頼ってくれ」

「あり、がとう」

癒慰は淡く微笑んで、再び鍊魔の胸に顔を埋めた。心の中で、こめんと呟きながら。

そしてホールでは、秀斗が闇の子の説明を勇輝にしていた。所々弥生が補足し、話は進んでいく。

「魔術界にはいくつか禁忌と呼ばれるものがある。その中の一つが闇の子……何年かに一人、闇の血が混ざった子どもが生まれる。両親が闇ではなくてもな」

秀斗は伏せ目がちで説明を続ける。

「闇の子が禁忌とされるのは暴走の可能性があるからなんだ」

「暴走？」

「ああ。闇に吞まれ、自我を失う。闇に吞まれば、死ぬまで破壊を続けるしかない」

勇輝は氷騎で弥生の紡命珠が黒く染まっていたことを思い出した。それを見た阿修羅は闇に吞まれたと言っていたのだ。勇輝は闇に吞まれて弥生が命を落としかけたことも聞いている。

そして秀斗の髪が黒く染まるところも見た。彼らの謎がまた一つ解ける。

「だから闇の子は災厄を運ぶと言われ、嫌われるんだ」

淡々と述べられる事実。だがその言葉の端々に闇の子の、彼らの苦しみが垣間見えた。

闇の子に生まれたということだけで、彼らの人生は狂った。孤独を強いられ、拳句その家族は死に、国には帰れない。

「闇の子が持つ闇はごくわずか。よほど感知能力が長けた奴しかわからねえ。まあ、闇の子どうしはわかるけどな」

「現に、あの妹は私たちが闇の子だとは気付いていなかった。闇の子への差別は地域や個人によって差があるが、あれはかなり極端な例だな」

弥生がうんざりした様子でそう言いたす。零華の声が無ければ手が足を斬り飛ばしていたかもしれない。それほどあの時は頭に血が上っていた。

「家族だからってのもあるんだろーな」

秀斗は天井を見上げて悲しい表情を見せた。

「せつかく会えた妹なのに……」

勇輝は沈んだ胸を抱えてぽつりと呟いた。

## 第4章の20 両手に華（後書き）

爆弾が落ちました。

零の華と百の華。名付けた親は何を思ったんでしょうね。名付け親、私ですけど。

さて次回予告の題名があてにならない四章です。次回は「華は一輪挿し（仮）」

## 第4章の21 綺麗な華には棘がある

零華<sup>れいか</sup>が百華<sup>ももか</sup>を連れて移動した場所は自室だった。最低限の家具が置かれたシンプルな部屋が彼女の人の成りを伺わせる。

百華は突然のことに目を白黒とさせていたが、ぱつと零華の手を振りほどくと彼女と向き合った。二人の瞳に映るのは同じ顔。

「闇の子とあって魔術が上手ですわね、お姉様」

「あら、取り繕うのは止めたのですか？」

百華は幼い時と同じ口調で話し始めた。わざとらしく零華を姉と呼ぶ。その瞳に侮蔑と優越感を浮かばせて。

「なんのこと？」

「いいえ、捨て置いてください。それで、貴女は何をしにここへ？まさか私に会いに来たわけではないでしょう？」

魔術界にいた時でも、姉妹が顔をあわすことは少なかった。顔を合わせれば今のように険悪な空気になるからだ。

「まさか、お姉様に会ったのは偶然よ。人間界にいることさえ知らなかったんだから」

零華も妹が人間界にいることを知らなかった。いや、二人とも互いに生きていることすら知らなかったのだ。

「私は今、霊界にいるの。ここで埋もれている貴女と違って、私は



霊界の総統府で官吏をやっているのよ」

零華は驚きを隠せなかった。百華は勝ち誇った笑みを浮かべる。魔術界にいるなら話はわかる。人間界へ飛ばされたのなら零華と同じだ。だが霊界という世界は魔術師にとつてとんと馴染みのない世界だった。

「何故霊界に？」

霊界は四つの大界の一つ。全ての生物の霊がたどり着く場所であり、全ての界の均衡を保つ役割を果たす。

霊界が死んだ魔術師の魂ならともかく、生きた魔術師を官吏にするなど聞いたことが無い。

「お母様たちが逃がしてくれたの。貴女はすでにどこかに行つてたけど」

零華の脳裏にその日のことが蘇る。お墓参りをすませて帰れば、家族は全員死んでいた。突然のことに動揺し、妹がいないことには気づけなかった。そして黒い穴が現れ、零華は人間界にいた。

苦い記憶が蘇って、零華はくつと奥歯を噛みしめる。

「私は人間界に総統からの命令で来たの。この街に来たのも偶然」

百華は言葉を失っている零華を見て、面白そうにクスクスと笑う。

「でもお姉様はここでも嫌われてるのね。街歩いてたら殺されかけるんですもの」

零華はゆっくりと思考の淵から浮上した。

「……そうね。助けがなければ死んでいたでしょう。彼らに感謝しなさい」

零華は助けたのが癒慰だと見当がついていた。そして包帯を見るに錬魔が手当てをしたことも容易に想像がつく。その事実が無性に零華を不愉快にさせた。

（この子は、何もわかっていないこの子は大切な仲間を傷つけた）

あの時零華が彼女を連れださなければ、彼女はさらにひどい言葉を吐いただろう。

「くすつ、お姉さまの仲間には？ ああ、もう仲間じゃないかもしれないね。だってお姉様の秘密ばれてしまったもの」

「貴女は彼らのことを何も知らない。いえ、分かるはずがありません。貴女は魔術の才が無いのですから」

だから百華は気づかない。彼らもまた魔術師で、闇の子であることを。

身長、体つき、顔、声、外見は全てそっくりな二人の差。闇の子か否かの次に違うのは魔力の高さだった。闇の子がその闇を抑えるために元来魔力が高く魔術に秀でるのを抜きにしても、百華は魔術を使えなかった。

並みの魔術師以下。

「貴女が化け物じみているだけじゃない！」

「努力が足りないのです」

零華は何もせずに強い力を得たわけではない。自分の間に対抗するために多くの魔導書や魔術書を読み、実践を繰り返した。最大限に水の力を使えるまで鍛錬した。今の零華の実力はその成果だ。

「模範的な解答ね。優等生のお姉様らしいわ」

百華も努力をしなかったわけではなかった。先生に師事し魔術を教わったが、その先生はとうとう首を横に振った。

“零華はこれほどの魔術なら詠唱無しでもできるのに。双子とは不思議なものよ”

屈辱的な言葉が百華の脳内蘇った。胸にじわりと不愉快なものが広がる。

「でも、最後に笑うのはこの私よ。姉様は人間界で、一生独りで暮らせばいいわ」

「確かに、私は帰れません。しかしそれは貴女も同じでしょう」

百華のこめかみがぴくりと動いた。零華を睨む目つきがさらに鋭くなる。

「私は帰るわ。そのために総統府で官吏をしているのよ」

「霊界は他界に干渉せず、魂を受け入れる。それが霊界です。貴女を送ることまではしてくれないのではありませんか？」

霊界は他界からの働きかけには応えるが、自分から動くことはな

い。それが何千年と続いている。

百華は凶星だったのか、くつと小さく呻いた。

「今回貴女が人間界に来たのも、霊界の者が他界に行くことをよく思わないせいでしょう。よそ者の貴女なら、どこで果てようが関係ありませんから」

「うるさい！ 知ったような口を利かないで！」

甲高い声に零華は眉をひそめた。

「私は必ず帰って今まで私を馬鹿にした奴らを見返してやるわ！  
私は二人もいららないの」

零華は激昂する百華を見て、逆に冷静さを取り戻した。自分も怒ればあなるのかと内心自嘲する。

零華はすでに見抜いていた。百華の自分に対する侮蔑や優越は、劣等感の裏返しだと。

双子故に比べられた、可哀そうな妹の歪みだと。

「百華、もう帰りなさい。服をあげるから、総統からの仕事をしなさい」

「……嫌よ」

洋服ダンスへと身体の向きを変えかけた零華はひたりと止まり、妹を見た。

「こんなのおかしい。私は百で、零華はゼロなのに。私はまだ行かない。ここにいます」

「また意味のわからないことを。ここにいるのは私だけではないのですよ？ 彼女たちに迷惑をかけるつもりですか？」

もし百華が彼らに危害を加えることがあるなら、零華はその時自分を抑えきれない自信が無い。怒りで容易に闇に吞まれてしまっただろう。

「ちゃんと許可は貰うわ。それなら文句はないでしょ」

零華は無理矢理でも放り出したい衝動を抑え、首を縦に動かすのに数十秒の時間を要した……。

闇の子の説明が終わった後、三人はぽつぽつと百華について話していた。彼女にどう接するかについてだ。

警戒しつつも普通にするべきではという結論に落ち着きだした時、一つのドアが開いた。

「お、錬魔。ありがとな」

険しい顔で入って来た錬魔に秀斗は軽く手をあげて労う。

「二人はまだ話しているのか？」

錬魔は三人が座るソファに近づいてきた。

「みたいだな。屋敷から出ていった気配はねえし、魔術の打ち合い

「ならなきゃいいけど」

最悪魔術師の喧嘩というのは殴り合いではなく術を用いた闘いになる。さすがに命を落とすことは少ないが、それでも重傷を負うだろう。

「とんだ災害だな」

鍊魔があきらかに不愉快そうに吐き捨てるのを見て、勇輝は目を丸くした。

（鍊魔が怒ってる……）

「全くだ。で、癒慰は落ち着いたか？」

鍊魔はソファアの傍で苛立ちを隠さずに立ち、弥生が瞳に心配を浮かべて尋ねる。

「一応な。だがかなり不安定だ」

泣きつかれた癒慰は少し休む、とベッドに潜り込んだ。癒慰が眠りに落ちたのを見計らって鍊魔は部屋を出て来たのである。

「後は零華か……」

秀斗は零華の部屋へと続くドアに視線をやった。癒慰が食らったのは余波だが、零華は直撃だ。

「癒慰は落ち込むけど、零華は荒れるんだよなあ」

さすがにつきあいが長いと、それぞれのショックへの対処がわかる。零華は滅多なことでは心の均衡を崩すことはないが、一度傾けば微笑みを浮かべながらも怒りが進るといふ大変恐ろしい状態になるのだ。

「え、荒れるって?」

普段物静かでおしとやかな零華からは想像できない言葉を聞いて、興味半分怖さ半分で勇輝は訊いてみる。

「マイナス思考になって言葉に毒が大量に入る。静かに怒るタイプだ」

「よし、ここは俺がポジティブに慰めてくるぜ」

秀斗がそう意気込むが、鍊魔は首を横に振ってやめると告げる。

「お前が行くと逆に神経を逆なでするだけだ。俺が行くから大人しくしていてくれ」

「ちえ、わかったよ。医者《お前》に任せるぜ」

秀斗は少しむくれるが、すぐに真顔に戻った。

「なあ、俺は何をすればいい?」

三対の目が勇輝に向けられた。勇輝は真剣な表情で、鍊魔を見上げている。

「お前は、いつもどおりにしていてくれればいい」

「そーそ。楽しそうにはしゃげばいいんだよ」

「そう難しく考えるな」

弥生はそう言うと、すつと視線を一つのドアへ向けた。零華の部屋に続くドアが静かに開けられる。弥生の視線に気づいた彼らもそのドアに注目した。弥生がいち早く気づいたのは、そこに注意をはらっていたからだろつ。

「あ、みなさん」

すつと開いたドアから零華の顔が現れた。彼らはじつと彼女を見、誰ひとり声を出さなかった。

「先程はすいませんでした。改めましてごあいさつします。百華です」

流れるような所作で腰を折った百華に、彼らはどう言葉をかけか迷った。

「よろしく。こっちに座りなよ」

微妙な空気を勇輝の明るい声が振り払う。いつも通り、彼が初対面の人にするであろう行動。彼らはすつと肩の力を抜いてよろしくと答えた。

「俺は部屋に戻る」

鍊魔はそう彼らに言うと、百華の横を通り過ぎて彼女が入って来



たドアから出ていった。

（はっきりしてんな〜）

百華が現れるなり後の面倒事は任せてさっさと出ていった錬魔に、秀斗は呆れつつも内心拍手だ。もういつそ清々しい。

（それに、あっち錬魔の部屋じゃねえし）

さっそく零華に会いに行った錬魔へ秀斗は心の中でエールを贈った。

百華は静かに勇輝の隣に座り、にこにここと彼らを見回した。

「俺、勇輝って言うんだ。向かいにいるのが秀斗と弥生で、さっき出ていったのが錬魔。後癒慰が部屋にいる」

勇輝はさくつと彼らを紹介し、二人は視線だけ合わせた。

「そうですか、癒慰さんには後でお礼を言わないといけませんね」

（礼よか謝罪しろ）

秀斗は心の中で悪態をつくが表には出さず、事態を見守ることにした。下手に会話に加われば何を言ってしまうかわからない。もうすでに本人を目の前にしただけでじわじわと怒りがこみ上げているのだ。

「うん、また後でね」

できれば会ってほしくないと思いながら、笑顔で勇輝は言った。

少しは会話に加われと二人に目で訴えるが、二人はすつと視線を逸らした。

(薄情者！)

「あの、この屋敷の主はどなたでしょうか」

主、と訊かれて勇輝は返答に困った。如月のリーダーは弥生だが、如月を含めこの屋敷の管理をしているのは零華だ。当然様々な決定権も多く彼女が持っている。

「私だ」

説明が面倒だと勇輝が思っていると、弥生が名乗り出てくれた。

「あの弥生さん、私を二三日ここに泊めてください」

「え……」

思わず漏らした声は勇輝のもので、秀斗ははあ？ と心の中で盛大に聞き返す。

どうする？ と勇輝と秀斗は弥生に目で問いかけた。相手は零華の妹で、精神的に害を振りまく災害。だが、零華の妹である以上突き放すのも難しい。

「かまわん。だが、次何かあればつまみ出す」

「ありがとうございます」

弥生の目が本気なのを見て、勇輝はつうつと視線を百華に移した。

弥生の瞳の色に気づかない百華はにこにことお礼を言う。

「お前、普通にしゃべれば？ 俺らタメだぜ？」

秀斗の声から苛立ちは感じられないが、表情はまだ硬かった。

「ああ、すみません。官吏をやっていると抜けなくなっただんです」

百華は苦笑を浮かべ、職場では常に敬語ですからと付け足す。

「官吏？ 城で働いてんのか？」

「ええまあ。城と言うより役場です。霊界ってご存知ですか？ 私  
はそこから人間界に来たんです」

三人は驚きを隠しきれず、まじまじと百華を見る。

「霊界？ それって死後の世界のこと？ すげえ、あるとは聞いた  
けど本当だったんだ」

勇輝は目をキラキラさせて百華の話に食い付いた。実に死後の世  
界はどのようなものか気になる。

「やっぱり閻魔様とかいて罪が裁かれんの？」

「あ、いえ。閻魔様というか、霊界のトップは総統です。罪は、書  
類審査の時にその魂の経歴を参考にして次の命やそれまでの滞在場  
所を決めます。確かに、ひどい罪を犯しているといい部屋はもらえ  
ないかもしれませんがね」

けっこうさつぱりしてるんだな、と勇輝はおどろおどろしい地獄のイメージとふわふわな天国のイメージを破り捨てた。

「それで、その霊界から何をしに来たんだ？」

興味を持ったのか、弥生がそう質問する。

百華は少しためらったが、やがてスカートのポケットから一枚の写真を取り出した。

「私は人を探して人間界に来たんです」

三人は机に置かれた写真をじっくり見た。青髪青目の端麗な顔をした女だ。髪は腰まであり、優しい微笑みを浮かべている。第一印象はよいとこのお嬢様という感じだ。

「へえ、綺麗な人。家出でもしたの？」

こういう美しくお金持ちのお嬢様は政略結婚を押しつけられた末、かつてより愛し合っていた人と駆け落ちするのだ。勇輝の脳内で恋愛ドラマが展開されていく。

「いえ、彼女は地下牢獄の最下層から脱獄したんです」

「え……」

パリンと泣きながら抱き合う男女の映像が砕け散った。

「脱獄犯かよ。こんな大人しそうに見えて、わかんねえな」

「詳しいことは知りませんが、百年以上前に脱獄し、それから総統

府が霊界中を探しましたが見つからず、とうとう人間界まで搜索の範囲を広げたんです」

百華は人間界の世界各国を周り、時には国の要人とも面会して情報を求めたが青髪青目の人物は見つからなかった。

「大陸はほとんど見て回りましたし、色々な方に情報を求めましたが見つからず。最後は小さな島々を回っているんです」

島国、日本。そこを北から南下している途中で彼らに会ったのだ。

(青目青髪なら美月さんだけど、あの人男だしなあ)

勇輝は牙軍トップの男を思い出し、ぞっと寒気を感じた。あの言い寄られた日のことは時々夢に見てうなされる。

「……でも、百年前ならもう死んでるんじゃない？」

「いえ、霊界の方は不老不死ですから必ず生きています。もし魂が消滅したのなら、霊界に帰ってくるのでわかりますし」

へえと勇輝は相槌を打つ。

「名前は？」

写真から目を離して秀斗が訊いた。

「ミリシア。まあ名前なんて、当てになりません」

「じゃあどつやって探してたんだ？ 顔変えてるかもしれないし、

なんか感じ取れんのか？」

百華は胸元を手繰って服の下からネックレスを取り出した。

「彼女に近づくと光るそうです」

彼女の手にあるネックレスの先には石がついており、薄い青色をしていた。

「そりゃ大変だ」

「人間界がだめとなれば、魔界かそれとも小さな亜空間か……どちらにしる相当な人員がいらいます」

「その犯人は何したのさ」

ただの脱獄犯相手に百年以上追いまわすとは考えられない。勇輝は不謹慎だがドラマの匂いにわくわくする。

「話を聞いた感じでは、府の重要機密を知ってしまったらしいです」

（もしかしてスパイ？）

勇輝が何を考えているか容易に予想がついた二人は、楽しそうな勇輝の横顔を見て口元を緩めた。

「その女、見つかるといいな」

秀斗は小さく笑みをこぼし、百華は微笑んでこくりと頷いた。話に一段落がつき、勇輝は弥生に視線を送った。

「勇輝、彼女と部屋を見てきてくれ」

そう言つて弥生が視線をやったドアは、弥生、秀斗、そして勇輝の部屋へと続くドアだ。

意味をよく理解した勇輝は頷いて立ち上がり、百華に行こうと促した。

「あの、ありがとうございます」

再度百華はお礼を言つと、勇輝と共にホールから出ていった。

パタリとドアが閉まると、秀斗ははくと長く息を吐いた。弥生の表情も柔らかくなり、ほっとした空気が流れる。

しばらく互いにその静寂を堪能していたが、思い出したように弥生が口を開いた。

「そういえば、美月は青目青髪だったな」

ぼつりと呟かれたその言葉に、だらんとソファーにもたれていた秀斗が視線を弥生にやる。

「でもあいつ男だぜ？」

「だが美月なら……」

秀斗は首をゆっくり横に振る。

「考えてみるよ。あいつ十年ちよい前に継いだばっかじゃん。それにあの美月があんな風におしとやかに笑うか？ ありえねえよ」

二人の頭の上に自信家で人の迷惑を考えない美月が浮かぶ。傍若無人が彼の代名詞だ。

「無理だな」

弥生はきっぱり否定した。

「だろ」

百華という災害は、遠く離れた牙軍のトップを貶すところまで飛び火していた……。



## 第4章の21 綺麗な華には棘がある（後書き）

### 神名の裏話

双子編。誰が双子であつてもなりたつ話なんですね。まあ初めから女性陣だと決めていましたが。

鍊魔は兄弟いましたが双子は使いづらく、ほら、仏頂面二人はきついです。

秀斗は一人っ子が決定してましたし、秀斗なら仲良くしてしまえばよかった。

癒慰は……双子がいると矛盾が生じるのでやめました。

最終的に残つたのが零華と弥生で、昔の自分は弥生に双子を作つてましたね。なんとなくその話だけを書いたものがいまだ残ってますが。でもろくに会話が成立していません。

その頃はまだ黒騎も固まってなかったですし、彼女に妹がいても不都合はなかったのですが……今はだめです。ごめんね、消えた弥生の妹。途中まで書いた原稿もばいばいです。もう弥生を苦しめるなって話です。

作者的に零華がしっくりきたのもありまして、双子編は零華にスポットが当たっております。零華ならさくさくと会話が進みます。ありがとうございます。

双子編、次回でかたがつくといいな。

では次回、もう潔く「未定」です。華はつきますよ？

## 第4章の22 綺麗な華には毒がある

“お姉さま、お姉さま”

記憶にある一番古い姉妹の姿は、家族で花畑に遊びにいった時のものだ。百華と一緒にお花畑を転がり、花の名前を教えた。

“お姉さま、お花をあげる”

ひよこひよここと零華の後をついてくる百華。

零華は時々後ろを振り向きながら、きれいな花を探して歩き回る。美しい湖のほとりでの幸せな一時。

零華と百華は常に一緒だった。零華が闇の子であると発覚するまでは。

闇の血を持たないものが闇の子であることを感知するのは難しい。特に魔力の感知に秀でたものでなければ気づけないほどの弱い力。

だが、そんな弱い力も感情と結ばれることで爆発する。闇の子が認知されるのは、ほとんどがその子どもが怒り、髪を変色させた時である。

零華が闇の子として自分を自覚したのは人間で言う六歳の時だった。やや卑屈になった百華と喧嘩し、いつもなら適当に折れるのだがこの日は聞き流せなかった。結果怒りが頂点を超え、本人すら知らなかった闇の血が目覚めたのだ。

“闇の子、お姉さまは闇の子”

少し大きくなった百華は髪を黒に近い青に変えた零華を見て怯え

た。大きくなった百華は、そして零華も、闇の子が何を意味するか知っていた。

“ 災いだわ！”

そう叫んで走り去った百華。

“ なぜ零華なんだ。零華は長女だぞ！ いつそ、百華ならばよかったものを”

苦々しげに拳で机を叩いた父。彼はその後一切零華に対して口を利かなくなつた。

“ 零華、貴女は離れて暮らすのよ。百華は普通の子どもなんだから、近寄らないで。お願いわかつて、零華と百華のためなの”

涙を浮かべて謝り、許しを請うた母。それが誰のための涙なのか、零華は幼いながら疑問に思った。

泣き、慈しみと憐みの言葉を口にしながらも決して触れようとしない母親に向かって、零華は微笑んだ。

“ わかつてます。私は一人で大丈夫ですから”

親が他人になった瞬間だった。

父親の憤怒も母親の憐みも百華の侮蔑も、もう零華の心には届かなかった。

自分が闇の子だと知った時、自分を守るために心の一番奥に蓋をした。何重にも鍵をかけて、自分が壊れないように、感情に流されないように。

零華は薄暗く小さな離れで暮らし、世話をしてくれるのは二三人。

だが誰も零華と口を利こうとはしなかった。図書館に行ったり、辺りを散歩したり。

百華とはたまにすれ違ったが、彼女はもう零華が知る百華ではなかった。彼女の零華に対する蔑みは年を追うごとに増していった。今になっても、このころと何一つ変わっていない。二人は溝を深めていくだけだ。

零華は窓の外を眺めながら、自嘲気味に笑みをこぼす。百華が出ていき、気を宥めるために窓の外を見たら中庭の花が目に入った。そこからずるずると過去の記憶が掘り起こされたのである。

(私はゼロ、百華は百……)

物憂げな溜息をこぼした時、ドアがノックされた。ゆっくり二回。零華は誰が来たのか察しがつき、困ったような笑みを浮かべた。

「どうぞ、鍊魔君」

そつとドアが開けられ、長身の鍊魔が部屋へと入ってきた。表情はいささか硬く、二三歩進んで立ち止まり零華の顔を見る。

零華はいつも通り微笑を浮かべている。

(思ったより、大丈夫……か?)

だが今はいつもどおりなのが逆に怖い。

「どうしました鍊魔君。私が泣いていると思いませんか?」

「あ、いや」

すうっと漂ってくる冷気に、鍊魔は先程思ったことを取り消した。

(これは怒ってるな)

「私があの子に負けると、思ったのですか？ どうせどこかの弥生ちゃん中毒者がいららない心配でもしたのでしょうか」

零華の言葉には棘があり、その一つ一つが毒を持っている。

(ああ……これはかなり怒ってる)

錬魔はやはり自分が来て正解だったと零華を見つめながら思った。ひたすら耐える役は秀斗には向かない。

「俺はお前が負けるとは思っていない」

あまりの言いように一体秀斗は零華に何をしたのかと錬魔は憐みを感じてしまう。今の零華は異常だが、常は微笑の下にしまいこんでいる想いを五割増しにして言っているだけなのだ。

「あたり前です。あら、錬魔君の方こそ少し顔色が悪くありませんか？」

顔色が悪く見えるのは、明りのついていない、はや夕暮れになるうかというこの部屋と、癒慰を慰めた気疲れと今零華から発せられている静かな怒気のせいだった。

「いや、問題ない」

「そうですか。錬魔君が倒れては医者がいなくなりますからね。健康には気をつけてください。ついでにコーヒーを止めてはどうです

か？ カフェ中さん」

にこにこと澱みなく零華は言葉を返していく。錬魔が一言しゃべれば、零華はそれを二言三言にして返した。

「その鋭い言葉、さすがだな」

カフェ中は少し錬魔の心をえぐった。彼女の話の話を聞くはずが、自分が責められ錬魔の方が慰めて欲しかった。

「くすくす、わかってます。八つ当たりです。でも、許してくれま  
すよね」

怒っていても頭に血が上っているわけではない。むしろ冴え冴え  
としているだろう。

「ああ、それが医者《俺》の務めだ」

「医者の鏡ですね。そういえば、癒慰ちゃんは大丈夫ですか？  
だ  
いぶ取り乱していたと思いますが」

最初は零華の心配をしていた癒慰だったが、百華の言葉がだんだ  
ん辛辣になるにつれて顔を強張らせていった。

「今は落ち着いて寝ている」

「優しく介抱してあげたのですね。ふふ、本当にあの子は迷惑以外  
の何ものでもありません」

零華は窓枠に手をかけて錬魔と向かい合っている。錬魔はその手

に震えるほどの力が入っていることに気が付いていた。

「何を言われようが気にすることはない。俺たちは俺たちだ」

「ええ、いかに蔑まれようとも、差別されようとも、私たちは死ぬわけにはいかないのです。そうでしょう？ 彼女たちの言いなりになつて死ぬなんて愚の骨頂ですから」

一度も崩れることのない微笑。それは仮面かと思わせるほどぴくりとも動かない。

「零華、俺たちは同胞であり、仲間だ」

「はい。同じ咎を持ち、苦を共にする仲間です」

鍊魔は後ろ向きな思考を元に戻せと言いたかったがひとまず気にしないことにした。ここで零華の感情を刺激すると何倍にもなつて返ってくる。

「だから、頼ればいい。無理をするな」

「誰に言っているのです？」

「お前はわーわと泣くタイプではないからな。ため込みすぎるなよ」

「可愛げがなくて申し訳ありません」

全く改善されない会話。鍊魔は頭を痛めたが、時間をかけるしかないと割り切つて撤退の準備を始める。

「……また様子を見に来る。何かあればすぐに言え。あと、勇輝を怖がらせるなよ」

最後は切なる鍊魔の願いである。これ以上落ち込み患者を増やしてほしくない。

「可愛い勇輝君にそんなことはしません。ああそうですね、勇輝君の可愛いドレス姿でも見ればこの心も晴れるかもしれないけど」

鍊魔は絶対に勇輝を近づけないでおこうと心に誓った。だが零華と癒慰の精神安定がなかなか図れないとなれば、彼にその役を頼むことも視野にいれつつ。

「無理やり着させるのだけはやめてくれ」

結局誰が慰めるかといえば、鍊魔しかいない。秀斗も慰めるが結局傷口に塩を塗るだけだ。

「安心してください。ちゃんと自発的にしてもらいますから」

「そう願う」

そこで話を切り、鍊魔がドアノブに手をかけた時ああと思い出したかのように零華が声をあげた。

「私、夕食は癒慰ちゃんと別室で食べますので、皆さんは私の妹を可愛がってあげてください」

鍊魔はこくりと頷いた。



「感謝します」

最後に零華は憂いを含んだ複雑そうな笑みを浮かべたのだった。

錬魔が零華の部屋から出ると、視界の端に人の姿を捕らえて少し驚いた。相手も人が出て来たのに驚いて固まっている。

「あ、あの」

「百華か」

つつい剣呑な目で見てしまいすぐにそれを無表情で隠した。百華は何か言いたげな目で錬魔を見ている。

「その」

「あゝ！ いた！ ごめん」

百華の声を消し去って勇輝の声が廊下に響く。百華はほっとした顔で走ってくる勇輝を見た。

二人は勇輝の方へと歩き、勇輝は「ごめん」と駆けよる。勇輝は百華と部屋を決めた後案内も兼ねて屋敷を歩いていたので。

「ここらへん複雑だよ……」

勇輝は無表情の錬魔をすぎる目で見上げるとえへっと笑った。

「鍊魔あ、弥生の部屋がある廊下ってどこだっけ」

「客共々迷ったのか」

「違うよ、探険してただけ」

客の手前強がって見せるが、勇輝が帰れなくなっているのは明白だった。

如月の屋敷は把握できないほど広いというわけではない。だが廊下が碁盤の目を通り、思いもよらぬところに階段があったりするので一度道を見失うとるつぼにはまるのだ。

それを解消するためにホールがあり、主要な部屋はホールから伸びる廊下に割り振っていたのだが……。

「ここは弥生の部屋からだいぶ離れたところだぞ……」

鍊魔は溜息をついて二人に手招きをして歩きだした。

（今日は厄日だな）

ばかばかしいエイプリルフルにつきあった時間が遠い過去のように思える。

「あの鍊魔さん、勇輝君から聞きました。鍊魔さんは火の魔術師なんですよね」

「ああ」

鍊魔は廊下を右にまがって直進する。

「こんなにたくさん、の魔術師が人間界にはいるのですね」

その声はどこか感慨深げで、そのせいで二人は百華の表情が異様に強張っているのに気付けなかった。

「びつくりだよね」

百華に一步遅れて歩く勇輝はうんうんと頷いた。

いくつか角を曲がると突き当たりにドアが見えた。分かる場所に出て勇輝はほっとする。

「ここまでくれば大丈夫」

ドアを開けるとホールで、後は目的の部屋へ続く廊下のドアをくぐるだけだ。

「あのドアが弥生の部屋に近い。二階に上がるにはその階段か、廊下にある階段を使い」

「はい。ありがとな錬魔」

錬魔はやれやれと二人と別れ自室へ続くドアへと歩く。彼の部屋は二階で、同じ区画の一階に癒慰がいる。

勇輝は馴染みのドアを開け、自室への廊下を歩く。

百華が選んだ部屋は一階で、勇輝の隣だった。二階には弥生と秀斗の部屋がある。

「これは、勝手に歩くと迷子になりますね」

「なるよ。俺何回も迷ってあいつらに助けてもらったもん」

地図を作ろうとしたが廊下を曲がるうちにそこがどこなのか分からなくなって途中で止めてしまった。本気で道しるべでも作るうかと思案中だ。

「じゃあ俺ここだから」

勇輝は自分の部屋の前で止まり、また後でと手を振った。

百華は、はいと会釈して隣の部屋に入る。

(錬魔さんはお姉様の部屋から出て来た……)

百華は後ろ手でドアを閉めると、くつと唇を噛みしめた。

(なんで零華ばかり……！)

百華の胸に醜い感情が渦巻いた。妬みや屈辱感、劣等感が塊になって押し寄せてくる。

(許せない……壊してやる)

表情を凶悪なものに変えた百華の耳に、隣の部屋のドアが開く音がした。隣に聞こえるほど音で、バンつと慌ただしく閉められる。

「晩飯があああー！」

そう叫んで遠ざかって行く足音に、思考が途切れた百華は首を傾げたのだった。

夕食は、カレーだった。今日の夕食当番は癒慰だったがあの状態ではその事実さえ忘れていた。そして零華も部屋から出ない。

そのことにベッドに寝転がって晩ご飯予想をした時に勇輝は気づいたのだ。

如月の夕食は必ず八時。勇輝が腕時計を見ると六時。手の込んだものを作るのは無理だった。

勇輝は小さなパーティーを開きたかったなあと思いながら鍋をかき回したのだった。

そしてカレーとサラダにデザートゼリーのゼリーを食べて満腹になった彼らはそれぞれ自室で夜の時間を過ごす。ホールで二三人が集まることもあるが、今日は皆疲れたので早めに休んでいるのだ。

錬魔はあとため息をついて本から顔をあげた。彼はすでにシャワーを浴びた後で、寝間着代わりの浴衣に身を包んでいた。下ろされた髪が腰へと流れ、はらりと頬にかかる横髪が色つぼさを出している。

寝るにも早いので勇輝の武器に使う物質を吟味していたが、すぐに集中力が切れて別のことを考えてしまう。ページを二三四回めくったところで諦めて本を閉じた。

(明日にしよう)

錬魔は頬杖をついて物思いにふける。肩にかかっていた髪がはらりと落ちた。

(百華……)

食事の席で百華は霊界での出来事を話していた。勇輝が楽しそうに相槌を打ち、秀斗と弥生はたまに会話に加わる。

錬魔が感じたのは、彼女もまた故郷に帰れないという虚しさであった。彼女が魔術界から来たのであれば、そしてまた彼女が帰る術を持っていたのであれば、羨望や嫉妬、絶望に変わったかもしれない。

だが百華の置かれた状況は自分たちと変わらない。

（ああだが、彼女は闇の子ではないか）

彼女自身に帰る障害はない。だが、彼ら闇の子は帰らない方がいい。

（帰ったところで、待つものは誰もいない）

錬魔は静かに目を閉じた。今でも、故郷を離れて五十年ほどが経った今でも、故郷の風景を鮮明に思い浮かべることができる。暑い気候に袖の無い服、兄弟で水浴びをした水の冷たさや、兄と共にいた医療所。そして、家族が殺された時のことも……。

（俺は何を……俺まで過去に引きずられてどうするんだ）

錬魔が自嘲の笑みを浮かべた時、コンコンとドアがノックされた。

「……入っていいぞ」

すぐにドアが開かれ、零華の顔が見える。お風呂に入ったのか髪が湿り気を帯び、光を反射して美しい光沢を出していた。夜着なのかゆったりとしたワンピースを着ている。

彼女はじつと錬魔を見ると、口を開いた。

「あの、鍊魔君……今大丈夫ですか？」

「……零華、どうかしたのか？」

「少し、眠るにも早いですし、眠れそうにもなくて……」

「そうか、そこに座れ」

鍊魔は窓際にある対のルームチェアを指して立ち上がった。薪のない暖炉に三脚に乗せられて置いてあるやかんに視線をやり、手をそちらに払うとやかんに火がついた。やかんを燃やす勢いで炎が出ている。

零華はその光景にあえて何も言わなかった。

「気分はどうだ？」

鍊魔は戸棚からコーヒの瓶を出し、保冷庫から牛乳を取り出した。一度火を弱めてやかんの蓋をとり牛乳瓶を中に入れる。その光景はとつくりを入れたよう……。

（やかんはそうやって使えますか）

零華は一連の作業をぼうつと見ているしかなかった。

鍊魔は二つのカップにインスタントコーヒを入れ、沸騰するお湯で良い感じに温まった牛乳を注ぎ砂糖も入れた。牛乳を入れたのは片方だけで、もう一方のカップにはビーカーで沸かしていたお湯を入れる。

「飲め」

鍊魔は椅子の間にある机にカップを置いて零華に向ける。自分は零華の向かいに座って一口飲んだ。

零華はカップを取って息を吹きかけて冷ます。

「飲めば少し神経がほぐれるだろう」

人間が飲めば逆に眠れないが、魔術師にとってカフェインはアルコールとして作用する。

「ありがとうございます」

零華のカフェオレはごく薄いものだった。

「おいしい」

零華は顔を綻ばせる。

「零華」

「……はい？」

「いや、火傷するなよ」

鍊魔は自分のコーヒーを少し薄かったかと思いながら一口飲んだ。零華は全て飲むと静かにカップを置いて、鍊魔と視線を合わせる。

「仲間……でいてくれますか？」

「あたり前だ」



即答する錬魔に零華はやや目を開き、ふつと笑った。  
錬魔はカップを片手にじつと零華を見ている。

「あの、錬魔君。ずっと一緒にいてくれませんか？」

零華は胸元をきゅっと掴んで、錬魔の言葉を待つ。彼女の手は小刻みに震えていた。

錬魔はすつと目を細め、残りのコーヒーを飲み干すとトンツとカップを机に置いた。

「俺を誘惑しているのか？ 百華」

ひじ掛けで頬杖をついて、錬魔は口角をあげた。彼女の目が驚愕に見開かれる。

「何を、言ってるの？ 錬魔君」

困惑に満ちた顔で彼女は目を潤ませる。

錬魔はそれを鼻で笑った。

「医者を舐めるな。一度二人を見ればすぐに見分けがつく」

それに錬魔には火煉がある。最初は怪我だけを見たので気付けなかったが、じっくり見ると魂の輝きが違った。

「……あら、そう。それは残念だわ、うまくいくと思ったのに」

百華はくるりと表情を苦々しいものに豹変させた。

「零華が闇の子だと知ってもまだ仲間であげてあげるなんて、いい人なのね。さっきの言葉で零華を慰めたの？」

皮肉めいた笑みを浮かべて百華は立ち上がる。そして鍊魔を見下ろし、凄絶な笑みを見せた。

「零華に慰めは不要だ」

鍊魔は三白眼で百華を睨んでいた。だが彼女は怯むことなく鍊魔にすつと近づぐ。

「零華のことをよく知っているような口ぶりね。クスクス、お姉様は恋人に手を出されたと知ったら、どんな顔をするかしら」

鍊魔は眉を吊り上げた。

（はあ？）

身に覚えが無さ過ぎる見当はずれな思い込みはもはや言いがかりである。

百華は右手を鍊魔の椅子の背もたれに置き、すつと顔を近づける。吐息がかかる距離。

「お前の歪んだ心で見る物は全て偽りだと気づかんのか？」

百華は鍊魔の肩へと伸ばそうとしていた左手を宙で止めた。

「なんですって？」

「お前は何も分かっていない」

百華はギリつと唇を噛んだ。その言葉は零華にも言われたものだ。

「何も分ならず何も知ろうとしない、虚しい人形だ」

鍊魔は固まっている百華の手首を掴んで立ち上がった。鍊魔は百華を見下ろす。その瞳は見たものを思わずぞつとさせるほど冷たい。

「見せてやるよ。俺の闇を」

「何を……」

鍊魔は感情の制御を止め、怒りを闇の血に注ぐ。嬉しそうに闇の血は体の奥底から体を駆け巡り、鍊魔の髪が黒く染まっていく。

「や、闇の子？」

鍊魔の髪はほぼ黒と言ってよい色になっていた。光にかざせば透けて赤色が見えるほどで、遠目に見れば黒と認識されるだろう。長い黒髪は夜の闇に溶け込みそうだ。

これ以上黒に染まれば心が闇に吞まれるぎりぎりのライン。

百華は動転し、鍊魔から離れようと彼の手を振りほどくと三歩後ずさった。

「そんな……」

百華はうわずった声で呆然と呟く。鍊魔は鼻を鳴らすと闇へと注いでいた怒りを遮断した。すぐに髪が赤に戻り、血のざわめきも治まる。

「気分はどうだ？」

鍊魔の意地悪めいた問いに、百華は答えない。その顔は青ざめていた。

「貴方も、零華と同類だったのね。だから、零華と一緒にいる」

「それだけで一緒にいるわけではない。俺たちは」

「もういい！」

百華は鍊魔の言葉を遮り、黒い笑みを浮かべた。それを見た鍊魔はわずかに眉をひそめる。

「こんなの、壊すまでもないわ。互いに傷を舐め合ってるだけじゃない」

「……出ていけ、話は終わりだ」

「零華は私たちの人生を狂わせた。必ず貴方の人生も狂わされるわ」  
「！」

百華はそう吐き捨てると、踵を返してドアを開けた。一度振り返り、蔑んだ瞳を鍊魔に向ける。

「いつか思い知るでしょうね」

パタンとドアが閉められた。

鍊魔は肺全体を使って息を吐き、髪をかきあげた。

「俺たちの人生は、闇の子に生まれた時点で狂っている」

煉魔は皮肉な笑みを浮かべて、そう呟いた……。

## 第4章の22 綺麗な華には毒がある（後書き）

「俺を誘惑しているのか？」

……はう。言わせてよかった。ちょっと迷ったけど言わせてよかった。浴衣に髪を下ろした錬魔、それにその台詞。自然とにやけてしまいますね。

零華の双子編、もしくは錬魔の厄日編は彼らの新たな顔がたくさん。癒慰ちゃんは泣いたし、零華は毒を吐くし、錬魔はキレましたね。ぷちんと。書いていて楽しいです。

やはり簡単には終わらない。後一話のはずですが、ここで明らかに今月中に四章終了が不可能になりましたね。また四話くらいの大きな山がありますし。

もう少しお付き合いください。

タイトルが迷走する双子編ですが、次回は「花は見る人がいて華となる」です。

## 第4章の23 花は心が満ちて華となる

これはどこか遠い国のおはなし。

むかしむかし、ある世界に花がたくさん咲くきれいな国がありました。お城への道には五十の花畑があり、それぞれ違う種類の花が咲いています。お花に囲まれたお城には、とても美しいお姫様がいきました。たくさんの王子や貴族がプロポーズをしましたが、お姫様はうんと言いません。

たくさんの求婚者につんざりしたお姫様はある日こう言いました。

「美しい百本の華で作られた花束を持って来た人と結婚するわ」

そこで三人の王子がお姫様がいる城へと花束を持ってやってきました。

一人目の王子は、彼の国にしかない花を百本花束にしてお姫様に差し出しました。

「この花束をお受け取りください。私の国で一番美しい花です」

淡い黄色をし、月のしずくを集めたような花束ですが、お姫様は首を横にふりました。

「お帰りください。あなたは私をおもっていません」

王子は悲しそうに帰っていきました。

二人目の王子は、お姫様の国の五十の花畑で花束を作りました。一つの花畑から二本ずつ摘み、色とりどりの花束になりました。

「お姫様、どうかこの花束をお受け取りください。あなたの国の美しい花を集めました」

ぜんぶお姫様が大好きな花で、あさつゆでキラキラ輝いています。しかしお姫様は首を横にふりました。

「お帰りください。あなたは自分のことをわかっていません」

二人目の王子もしょんぼりして帰りました。

三人目の王子は、自国の花で好きなものを五十本用意しました。残りの五十本はお姫様の国のお花畑から一本ずつもらいました。

「愛しい姫様。どうかこの花束をお受け取りください」

王子が選んだ白い太陽のような花は、お姫様が好きな五十本の花といっしょに輝いています。

お姫様はにこりと笑いました。

「美しい花束です。あなたはあなたの国も私の国も愛してくれるのですね」

お姫様は王子の花束を受け取りました。

こうして三人目の王子はお姫様と結婚し、幸せに暮らしました。

おしまい。

それは、一度だけ聞いた物語だった。零華が闇の子と発覚するほんの少し前。



“ねえお母様、どうして私は零で百華は百なの？”

そう零華が訊いた時に母親が話してくれたものだ。

母親は微笑んで、手招きをした。椅子に座る母の傍によって、微笑む母を見上げる。

そして母親は唐突に物語を語り始めた。話が終わると、座ってお話を聞いていた零華は首を傾げた。

「だから、どうして？」

その物語と自分の名前がどう関係しているか分からなかった。

「私は二番目の王子で、百華は一番目の王子なの？」

母親はゆっくり首を振って、零華の頭を撫でた。優しく撫でられる感覚が嬉しくて、零華は子どもらしい笑顔を浮かべた。

「零華は零、百華は百の花を持っている。でも、美しい花束にするには五十本じゃないといけないの。どうする？」

母親は手を頭から離して、零華の顔をじつと見る。零華はしばらく考えて、にこりと笑った。

「百華の花を五十本持ってあげるわ」

「いい子。零華はしっかりしたお姉ちゃんだけど、百華は弱虫で泣き虫だから、お花をたくさん持たせておいて欲しいの」

零華は真剣な表情で母親の顔を見上げて頷いた。

「そして、百華にその花が必要無くなったら、零華が半分持つてあげて」

零華は得意げにこくりと頷いた。

「私はお姉様だから」

ひよこひよこ後ろをついてくる可愛い妹。早熟な零華とは対照的に、百華は何かにつつまずくことが多かった。先程も上手に字が書けなくて落ち込んでいたのだ。

「零華、百華を頼むわよ」

頼りにされていると思うと嬉しくて、零華は満面の笑みで力強く頷いた。立ち上がるうとしたところにパタパタと廊下を走る音が聞こえる。百華がお昼寝から目覚めたようだ。

「お姉さまお姉さま！ お花畑にいこー！」

百華は立ち上がった零華の腕を掴んで引っ張る。零華がちらりと母親を見ると、彼女は微笑んで頷いた。

「いってらっしゃい」

そう言って母親はおしとやかに手を振って二人を送り出す。

「いってきまーす」

「いってきます」

うずうずとしていた百華が零華の腕を掴んだまま走り出した。

「百華、走っちゃだめ」

「ええ」

百華は頬を膨らませたが、すぐにしゅんとして歩き始める。零華は危ないでしょ、と窘めてから並んで歩いた。

きれいな花で妹に冠を作ってあげようと思いつながら……。

零華はぱちりと目を開けた。起き上がってベッドから降りるとカーテンを開けて太陽の光を浴びる。窓を開けて新鮮な空気を肺に送り込んだ。

百華が来てから二日が経った。昨日百華は一日中出かけていたらしく、夕方に帰って来ていた。

零華は身支度を整えながらふと先程の夢を思い出して眉根を寄せた。

（よりによって見た夢があれなんて……）

鮮明に覚えている夢の内容は、記憶のものとは何一つ変わらない。

過去をそのまま切りぬいたような夢だった。

零華と百華の名前の由来。母親の願いが託されたもの。

（……姉としての仕事を、しないといけませんね。みなさんも心配していることですよ）

癒慰は食事に誘いに来、昨晚には勇輝と秀斗が二人で部屋を尋ねて来た。戸口で零華と二三言交わしただけでさっと逃げるように出て行ったが……。二人の表情が強張ったのに、零華は気づかないふりをした。

そして弥生も様子を見に来た。窓が叩かれ、振り返ると外に弥生がいたのだ。本人は鍛錬の帰りと言ったが、彼女の部屋は零華の部屋とは逆方向だ。

弥生も多少心配だったのだろう。いくらかける言葉がいつでも殺してやるという物騒なものであったとしても……。

（頑張りますか）

零華は目をつむって心を鎮めると、ドアへと歩き出した。開け放たれた窓からは爽やかな風が吹き込み、零華の横を通り過ぎて行った……。

零華は早起きをしていた勇輝と癒慰と一緒に朝食を食べ、その後部屋で休んでいた。窓際に置かれた椅子に座り、時間つぶしに街で買った本を読む。本を切りのいいところまで読んだら百華と話をしようと思っていたが、読み終わるよりも先に百華は仕事に行った。人間界へと向かったようだ。

それを霸動で察知した零華はつい溜息をつき、ページをめくった……。

扉が開く音で目が覚めた。零華はいつものまにか眠っていた。さつと顔をあげてドアを見ると、そこには同じ顔がある。

「お姉様」

時刻は正午を過ぎたころ、百華は探索を打ち切って如月に帰って来ていた。ホールを通ると昼食に誘われ、食べた後姉の部屋を訪れたのだ。

「おかえり、百華」

すると途端に百華の顔が険しくなる。

「今更お姉様ぶろつってつもり？」

百華は零華が座る椅子から二メートルほど離れたところに立った。

「別に、これが私の自然です。騒ぎたければ騒ぎなさい」

零華は膝の上に置いていた本を閉じてサイドテーブルに置いた。夢の中で母の声を聞いて、願いを聞いて、荒れていた心が鎮まった。零華には今仲間もいる。もう一人ではない。環境が変わって、自分が変わっても、変わらない心があったのだ。

（百華と、向き合わなくてはいいけません）

それが姉としての役目。

百華はその言葉にキッと零華を睨み、しばらく無言だった。やがて少し視線を落としぼつりと呟く。

「私、今日ここを出るわ」

「今日？」

突然の言いだしについて訊き返す。

「そう。ここら辺は全部調べた。もう次のエリアに行かないと」

零華は百華の仕事の内容は知らないが、査察のようなものだろうと見当をつけていた。

「……そう」

零華の表情に一抹の寂しさが紛れたのに気付いた百華は、気難しい顔をしてふいつと横を向く。

「残るエリアが終われば、私は霊界に帰る。そして必ず国に帰って見せるから」

「それで、いいと思いますよ。私は人間界にいます。帰る家はありませんから」

姉のどこか諦めたような言葉に、百華は顔を零華に向け、視線を合わせた。

「そうね。お姉様には恋人がいるもの。さぞ幸せでしょう」

嫌みのこもったその言葉に、零華は素できよんとした。驚きを乗り越えて言葉がでない。

「恋人？」

半ば自分に問うようにして呟かれた言葉に百華が噛みつく。

「そつよ。お姉様と同じ闇の子の錬魔さん。同じ嫌われ者どうし気が合うんでしょ？」

零華の頬がひくつき、すっと立ち上がった。

「百華。貴女の目、防腐剤は入っています？」

にこやかに、しかし禍々しい空気を纏う姉に、百華は一步後ずさる。

「な、なによ。だって錬魔さん真っ先にお姉様のところに慰めにいったじゃない」

「ええ来ましたね。でも秀斗君も勇輝君も昨日来ましたよ？」

「そんなの知らないわよ。それに彼だって否定しなかったわ！」

零華はぴきりとこめかみに青筋を浮かべる。無性に彼の背中に細く垂れる赤い髪を引つ張りたくなった。

「その件は後で錬魔君に私が訊いておきます。これで話は終わりですか？」

百華はくつと唇を噛んで零華から視線を外さない。一步も動こうとしなかった。

「……だから」

「何？」

「だから嫌いなものよ！　そうやって笑って、澄ました顔して、簡単に私ができないことをやって……」

零華を睨む百華の目には涙が浮かんでいた。その奥に怒り、羨望、そして嫉妬が燃えている。

「でもどうせ全ては幻だわ！　愛したって裏切られる。闇の子の仲間だもの、あの仲間だつてろくでもない奴らに決まってる！」

無表情の零華がつかつかと百華に歩み寄る。

「零華は零、私は百！　私は零華の分まで幸せでなくてはいけなのよー！」

百華がそう吐き捨てた瞬間、零華は妹の頬を叩いた。悲しく張り詰めた音が部屋に響く。百華はしばし呆然としたが、何をされたか理解すると零華を噛みつく勢いで睨んだ。だが彼女の瞳に映る自分よりも激しい怒りを見て、百華は息を飲む。

「謝りなさい。私の仲間を侮辱したことを。そして、私をさも不幸であるかのように言ったことを」

百華の顔の前には零華の顔がある。百華は姉に威圧されながらも、言葉を返した。

「……だって、おかしいわ。なんで零華は恋人も仲間もいるのに、私には何も無いの？　零華は、零なのに……」

涙声でしゃくりをあげる百華に、零華は握っていた拳を解いた。



「なぜ、そこまで零と百にこだわるのですか？」

「……お母様が言ったから。お姉様は零で百華は百だから、だからお姉様の分も幸せになりなさいって」

「何時？」

「……お姉様が離れに移ってしばらくしたころ」

零華ははーと長い息を吐いた。

「そう、お母様がそう言ったのならそれでいいでしょう。百華は、百華の場所で幸せになりなさい」

せめて百華だけでも、それが母の願いとなったのだ。名前に込められた意味が変わったように、家族は変わった。

「なんでそんなことを言われなさいいけないのよ」

「自分で考えなさい。ほら、みんなに挨拶して来なさい。お世話になったでしょ」

百華は悔しそくに奥歯をぎりつと噛みしめ、零華に背を向けた。何も言わずにドアまで歩き、開いて立ち止まる。

「邪魔者がいなくなってせいせいするでしょうね」

嫌みっぽいひねくれた妹の背に、零華は呆れ声顔で小さく溜息をついた。

「何時、私が貴女を邪魔者扱いしましたか？ たしかに貴女はひねくれて昔の可愛げは無く、私の仲間は傷つけますし、言うことは嫌みか皮肉です。貴女も私も変わりましたが、それでも変えようのない事実もあります。……………百華あなたが私の妹だということです」

百華の目が大きく見開かれた。ドアノブを握る手に力が入る。百華はしばらく俯いて口を閉ざしていた。空いている左手は強く握りしめられ、蒼白になっている。

「ごめん……………なさい」

百華はやっとそれだけ言うと、ぱたりとドアを閉めた。

零華の部屋にいつもの静けさが戻る。零華はしずしずと椅子へと戻り、本を取って開く。

そして零華ははあと重役を終えたような溜息を漏らしたのだった……………。

百華は勇輝が腕を奮った晚餐の後、如月を後にした。見送りには全員が玄関に立ち、百華はじつと零華を見つめている。

零華は最後に百華に歩み寄り、ふわりと微笑んだ。

「元気で、百華」

複雑な思いもある。だが、それよりも先に心にわき起こるのは、妹を想う姉としての情。妹を守ってほしい。それが零華の母の最後の願いだった。

「お姉様。私、まだ闇の子は怖い。お姉様は嫌い」

百華が硬い顔で紡ぐ言葉を、零華は黙って聞く。

「でも、でも……私にとつては、たった一人のお姉様だから。たった一人残った家族だから」

どれだけすれ違っても、いがみ合っても、互いに姉妹と思っている。

「まだ気持ちはぐちゃぐちゃしてる……それでも、私たちの家で、もう一度……おかえりって言って」

零華は困ったように曖昧に笑う。だが百華の強い光を宿した目を見て、表情を引き締めた。

「ええ、この喧嘩の続きは、家でしましょう」

果たせるか分からない約束。だが、それは互いの心に希望として残る。たとえその希望が絶望に変わり果てたとしても。

百華は零華の後ろで並ぶ彼女の仲間へ視線を移した。

「迷惑をかけてごめんなさい。そしてありがとう。今度は、魔術界で会おうね」

にこりと笑って百華は彼らに手を振った。彼らもそれぞれ笑みを浮かべて手を振り返す。

「俺もお前の国に遊びに行くな。人探し頑張れよ！」

そう言って親指を立てた勇輝に、百華は大きく頷いて応えた。

「じゃあ、またね」

さよならではない。必ず会う。その気持ちを込めて、百華は玄関の扉を開ける。重そうに見えるその扉は、触れただけで自ら開きだした。

「ええ、また」

零華は笑って見送る。

「今度、お茶をしようね」

癒慰も小さく手を振った。その隣で弥生は無言で百華を見ている。そして、男三人の声が揃った。

「またな」

百華は、彼らの声を背に受けて如月を後にした。

#### 第4章の23 花は心が満ちて華となる（後書き）

うう……てまどった。童話風に書くって難しいですね。この話は後で手を加えそうです。さて、次はほっと一息入れます。最後の山に向けて……。

次回、（けっきょくこの話もタイトル変わりましたね）「野に咲く花を愛でる」でいきましようかね。

## 第4章の24 野に咲く花を愛でましょう

百華が帰った翌日、如月は何時も通りの朝を迎えた。清々しい風が吹き抜ける。

勇輝は目を覚ますとぐつと伸びをし、あくびを堪えながらカレンダーに目をやった。

(四月四日か……なんか嫌な数字だよな)

死のイメージが湧く四。二つ続くと縁起が悪い。

勇輝は髪を櫛でとかし、服に着替えると厨房へと向かった。お味噌汁に入れる具を考えながら……。

勇輝が厨房に入るとすでにスープのいい香りがしており、隅に置かれたテーブルで零華が朝食を取っていた。癒慰が目玉焼きを焼いている。

「おはよ〜」

「おはようございます」

微笑とともに挨拶を返した零華はジャムをつけたパンを齧った。

「勇輝君も目玉焼き食べる？」

「食べる」

「おっけ〜」

癒慰は蒸し焼きにした目玉焼きを二つそれぞれ皿に移してテーブルに持っていく。

「二人はパンか〜。なんか誘惑されるな……俺、朝はご飯派なのに。うう、パンがいい匂い……」

勇輝が己の朝食を悩み始めた時、チンという音とともにトースターからパンが飛び出した。食べてくださいとでも言っているようだ。

「迷うな〜」

「ぐずぐずと優柔不断で女々しいですよ？ スポンを止めてスカートにしたらどうですか？」

脳内のパンとご飯の図が一瞬で吹き飛んだ。爆弾を落とした謀報人は素知らぬ顔でスープを飲んでいる。

（あ、あれ？）

勇輝が目を白黒させていると、よつと秀斗が厨房に入って来る。

「あ、秀斗おはよ」

秀斗はトースターから飛び出しているパンを取って啜えた。おはよと返したようだ。がももごと不明瞭で聞こえない。そのまま食器棚からスープ皿を取って勝手にスープをよそり始めた。

「秀斗、皿くらいだしなよ」

勇輝は呆れながらトースターにパンをセットした。今日はパンでいくことにしたようだ。

「細けえこと言つなよ」

右手にトースト、左手にスープ皿。そして口をもごもごさせながら秀斗は零華の正面に座った。

「そこに座らないでくれますか？ 野蛮な方がそこにいるとテーブルが穢れます」

秀斗の手からトーストが落ちて上手いことスープ皿の上に着水する。スープをすって柔らかく、おいしくなるだろう。

「あの、零華サン？」

微笑の零華に冷ややかな眼差しを向けられ、秀斗は及び腰になる。

「食事の作法ぐらいあの教育者に教わりませんでしたか？ 今からしつけ直してもらいましょうか？」

「もうしませんから許してください！」

秀斗はテーブルの上に両手をつき、ぱっと頭を下げた。頭を下げている間もつむじの辺りに零華の視線を感じる。

「あら、やればできるんですね。普段からそれくらい素直ならよろしいのに」



ふふふと上品に笑う零華に、秀斗と勇輝は身の毛がよだった。先日零華の部屋を訪れた折の毒が再び傷口にしみ込んで来る。

勇輝はそろっと我関せずと目玉焼きを作っている癒慰に近づいた。

「なあ、零華まだ機嫌悪いの？」

「うん……昨日百華ちゃんを見送った時は普通だったんだけど。今日はずっとあれ」

二人は小声でひそひそと話しあう。

「災厄は過ぎたのに？」

「なんか、相当頭にきてるみたいでなかなか機嫌が直らないの……」

二人はそろっと食事をする零華を伺った。二人から零華の顔は見えないが、その前に座る秀斗が怯えた顔でスプーンを使いパンスープを食べていることから、そろっと背筋が凍る顔をしているのだろう。零華を取り巻く雰囲気は氷柱のように感じる。

「うう……気が休まらない」

「こればかりは時間の問題ね……よし、お皿取って」

早くも毒のダメージで瀕死になりそうな勇輝が皿を持ってくると、その上に目玉焼きが乗せられる。その数秒後にチンと可愛い音を立ててトーストが出来上がった。

トーストも皿に乗せ、スープと一緒にテーブルへと運ぶ。座る場所は零華の右側。三人でコの字となった。

勇輝は零華の視線を気にしながら落ち着かない朝食を取ったのだ

った……。

零華の機嫌がまだ悪い。

錬魔は遅めに起き、厨房にいくためにホールへと入るなり、むくれた秀斗にそう言われた。勇輝は秀斗の向かいのソファで屍のようにぐったりしている。癒慰が苦笑いを浮かべてお茶を飲んでいた。錬魔は小さく溜息をつき、わかったと言葉を返す。

ゆえに、出勤命令が出た錬魔は軽く朝食を食べ、今零華の部屋を訪れているのだった。

そして錬魔は戦々恐々していた。

錬魔は長椅子に座り、目の前のテーブルにはコーヒーが置かれている。零華が淹れてくれたものだ。

(これは何かの前触れか……?)

錬魔をカフェ中と呼ぶ零華が午前中からコーヒーを錬魔に勧める。異常事態だ。

錬魔は一瞬毒でも入っているのかと疑ったが、すぐに自分は恨まれるようなことはしていないとその考えを打ち消す。

零華の表情を伺うが、いつもの完璧な微笑で全く真意がわからない。

錬魔は覚悟を決めてカップを手を取った。

「お前のコーヒーは薄いから好きではないのだが……」

錬魔は一応香りを嗅いでから一口、口に含んだ。

(? ……俺好みの濃さだ)

錬魔は常に濃いめのストレートを飲んでいる。零華はそれに対して目尻を吊り上げて非難していた。

(一体何を考えているんだ?)

錬魔は二口三口と飲みながら、零華の出方を伺う。ここまで来ると怖すぎる。微笑の下に何かがあると疑うのも無理はない。

「錬魔君。私たちがいつからつきあい始めましたっけ？ 私どうも忘れてしまったようです」

最後の一口を飲んでいた錬魔がむせた。それを見て、おもしろそうに零華はクスクス笑う。

「ねえ錬魔君。教えてくれませんか？」

「零華……ボケていないのらそれが嘘だっけことくらいわかるよな」  
錬魔はカップをテーブルに戻して零華の視線を正面で受け止める。目つきが険しいのは百華の的外れな言動を思い出して不愉快になったからだ。

「そうですね。ばかばかしくて笑う気力さえも湧きません」

「全くだ」

「でも、貴方が否定すればここまでややこしくなりませんでした。わざわざ私が処理するはめになりましたし。おかげで無駄な労力を

使ってしまいました」

「それは……驚いたのと、お前の妹がまくし立ててきて、反論する隙間がなかったからで……」

ぼそぼそと弁解をするが、零華は聞く耳を持たない。何時にも無く感情が昂ぶっていた。

昨日、百華を見送る時には心は落ち着き、妹が去ることが少し寂しくもあつた。だが彼女は本当の最後に行く時、零華の耳元で囁いたのだ。

“私、鍊魔さんのこと反対しないよ”

その瞬間、プツンと零華の中で何か切れたと同時に諸々を抑え込んでいた蓋が弾け飛んだ。そして決めたのだ。これだけはケリをつけないといけないと。

零華は百華の言葉を思い出して微笑を黒い笑みに変えた。

「驚く？ 冷静を心がける医者の方か？ うふふ、笑わせないでください」

「……すまない」

何を言っても無駄だと理解した鍊魔は潔く謝罪した。もう謝るでもなんでもして彼女の機嫌を直さないとどんどん毒の犠牲者が増える。

「医者なら切除するところをちゃんと見極めてください。貴方が百華に切り込まなかったせいで癌が転移してしまいましたからね」

錬魔は胃が痛くなってきた。零華の機嫌が直るころには自分が倒れているのではないかと心配になる。

「でもまあ、済んだことを言っても仕方ありませんし、私はそこまですで馬鹿ではありません。今回はもういいです」

急に零華の口調から毒気が抜けて、にこりと笑った。錬魔はこれで終わりかとほっと肩の力を抜く。

「けど、一つだけ心残りなことがあるんです」

「……なんだ？」

「お願いがあるんです」

そう言っただけに見せた無邪気な笑みが、この日で一番寒気がした笑顔だった……。

一方ホールでは弥生も加わってトランプをしていた。ババ抜き、神経衰弱とやり、現在七並べ中である。

「勇輝……お前、ハートの6をさっさと出しやがれ！ あとキングも持ってたんだろ」

「やはりお前のせいか」

「秘密」

「卑怯よ！」

「そういうルールじゃん」

そうわいわいと盛り上がっているところに、表情の硬い錬魔が入って来た。足取りも重く、うかない顔だ。

「あ、錬魔君。零華ちゃんどうだった？」

その表情からまた何かあったのかと心配顔で癒慰が尋ねる。

「……いや。だいぶストレスも発散できただろうし、機嫌も直ると思う」

ゆっくりとした足取りで錬魔は彼らに近づき、勇輝の目の前に立った。勇輝はカードを出そうとした体勢で彼を見上げる。

錬魔は小首を傾げる勇輝をじっと見つめながら、ぼそぼそと用件を切り出した。

「勇輝。お前に零華の機嫌を直すためにできることがあると言ったら、やってくれるか？」

「もちろん」

即答する勇輝に、錬魔は申し訳なく思いつつも彼女の願いを口にする。

「……俺の恋人になつてくれないか」

その申し出に、言われた本人は固まり、周りはざわついた。勇輝

はばかんと口を開けている。

二三度口を開閉して、声を喉から絞り出した。

「わ、わけを教えてクダサイ」

思いつめた顔をしていた錬魔は、実は……と彼方へ視線を飛ばして事の顛末を話し始めたのだ。

零華からのお願い。それはエイプリルフルをしたいということだった。

「四月一日はエイプリルフルで、聞けば勇輝君たちと楽しく嘘をついたそうですね」

「ああ……まあ」

錬魔は百華に比べればまだましだったドタバタを思い出して、曖昧に頷く。楽しかったかと訊かれると、首を横にふりたくなるが。

「私も参加したかったです。嘘をつかれて騙されたかったですよ？」

（それが嘘だ）

錬魔は即座に心の中で全否定した。零華は策略を張り巡らせて相手を陥れる側だ。ころりと騙されるほど零華は純粹でもお人よしもない。

「だから、錬魔君が私を騙してくれませんか？」

「……は？」

「そうですね。実は錬魔君には恋人がいて、それがなんと勇輝君っていう嘘がいいです」

エイプリルフルは何も知らない人を騙すのであって、騙される人が嘘を要求しその内容を決めるなんてことはありえない。

なんの冗談だと錬魔は零華の顔を見るが微笑を浮かべていても、目が本気だった。有無を言わさない重圧がある。

「いや待て、勇輝は男だぞ。そこはせめて癒慰か弥生を……」

言い返してから錬魔は気づいた。この言い方は自分がその嘘を実行することが前提になっていることを。

がつくりと錬魔は頂垂れて頭を抱える。

「大丈夫です。勇輝君は実は女の子だったことにすればいいのですから」

「い、いや。だが……」

それは勇輝にも多大なダメージが発生する。錬魔はさすがに可哀そうだと反対しようとするが、

「では秀斗君を恋人にしますか？」

と返されて口をつぐんだ。

(勇輝……すまない)



勇輝ならともかく秀斗を恋人役にすれば錬魔のストレスダムが決壊するのは間違いないかった。似合わない女装など見たくないしその恋人役などやりたくない。

「錬魔君。私のお願い、聞いてくれますか？」

断れるはずがなかった。

全て説明した錬魔は、もう一度勇輝を見てすまないと謝った。

「くくくく……錬魔と勇輝がカップル。勇輝の女装……くくっ」

秀斗がソファアの背もたれを叩いて笑いを噛みしめる。勇輝がそれを睨むと同時に錬魔が秀斗の鼻先に炎を飛ばした。じゅつと髪が焦げる。

「ぎゃー！」

秀斗は慌ててのけぞり、降参のポーズをとった。

「いい、いいわ。絵に描いたような美男美女よ！ カメラ用意しないよ」

「癒慰やめて！ これ以上俺の傷をえぐらないで！」

「よかったな。お前のその顔が役に立つ時が来たではないか」

弥生にまでそう言われれば、もう勇輝はあがく気も失せる。本当は最初からわかっていたのだ。逃げられないと。

「勇輝……本当にすまない」

「もういいよ……」

何度も謝る錬魔を勇輝は押しとどめて、ゆっくり立ち上がった。

「この顔で零華が喜ぶのなら、俺頑張る」

顔は俯き目は虚ろ。

それでも引き受けてくれた勇輝に、錬魔はしっかりアフターケアをすることを誓った。

「私感動した！腕によりをかけて勇輝君を女の子するわ！今日はお化粧もするわよ」

癒慰は立ち上がって勇輝の両手をつしりと掴む。癒慰にスイツチが入ってしまった。

勇輝は血の気をひく。

「今この瞬間から俺は春日勇輝じゃない。俺は今死んだ。この俺は俺じゃない、俺ジャナイ、オレジャナイ」

「さあ行くよ」

ぶつぶつと自己暗示をかける勇輝を張りきる癒慰が引つ張っていった……。

そして一時間後。零華の部屋の前に一組のカップルが誕生していた。背の高い彼氏は、自分の胸ほどの小柄な彼女を見下ろす。

「勇輝……残念ながら可愛い」

唇をぎゅっと引き結び、羞恥心に顔を赤らめてスカートの裾を握っている勇輝。赤いフリフリのドレスを着せられ、頭には赤いリボン。彼氏の赤髪とよく調和している。三十分かけて化粧をされ、まつ毛はカールされてお目めパッチリ、紅がひかれて唇はうるうる。

「俺、これくらい可愛い彼女が欲しいよ」

勇輝は現実逃避中だ。もうこの姿は自分とは思っていない。

三回深呼吸をし、閉じていた目をゆっくり開いた。

「私は春日ゆうき。鍊魔の……恋人」

（俺は役者俺は役者）

「勇輝。覚悟はいいか」

「……うん」

鍊魔はゆっくりと二回ドアをノックした。

すぐに返事が返ってきた、中に入るように促された。

鍊魔がまず部屋に入り、勇輝は半開きのドアの陰で待機する。

零華は窓際に置かれた椅子に座って本を読んでいた。鍊魔へと視線を向けると微笑を浮かべて本を閉じる。

「あら錬魔君。どうかしましたか？」

「……あー、その。お前に話がある」

零華は話？ と小首を傾げた。本をサイドテーブルに置いて錬魔の言葉を待つ。

「こういうのはもっと早く言うべきだったんだが……つきあってい  
る奴がいるんだ」

零華はえっと目を見開いて、その言葉の真偽を確かめるかのように錬魔の顔をじっと見る。そして顔を綻ばせた。

「それは、おめでとうございます。お赤飯を炊かないといけません  
ね。そのお付き合いは何時からですか？」

零華は嬉しそうに目を細めている。まるで今知ったかと言わんばかりの表情に錬魔は内心舌を巻く。

( 役者だな…… )

勇輝は二人のやりとりを聞きながら錬魔に呼ばれるのを待つ。

「何時……きよ、いや一カ月ぐらい前だ」

「お相手は人間ですか？」

「まあ、そうだな」

錬魔は答えながら勇輝を出すタイミングを計る。だが零華は質問

を止めなかった。

「どういう人なんです？」

「あー、可愛らしい顔をしている。度胸があって……そこそこ強い」

勇輝は前半で凹み、後半で急上昇した。

「どこでお知り合いに？」

「……学校だな」

生徒なんですかと零華は驚いて口に手を当てた。

「錬魔君の心を射止めるなんて、ぜひその人にお会いしたいですね」

「そう言うと思ったから連れてきている……入ってくれ」

その言葉に零華が戸口へと視線を移すのと、勇輝の姿がドアの裏から見えたのは同時だった。勇輝は錬魔の隣に立つと、ゆっくりと零華にお辞儀をする。

「初めまして、春日ゆうきです」

顔をあげて零華と目を合わせると顔が真っ赤に紅潮する。零華は勇輝の顔を見て目を瞬かせていた。

「え……勇輝君？」

零華はバツと隣に立つ錬魔の顔に視線を向けた。

「もしかして錬魔君……そういう趣味が？」

零華の心がすーっと遠ざかっていくのが手に取るように二人はわかった。

「違う」

錬魔はバツサリと切り捨て、勇輝の背を押した。

「零華……俺実は、女の子だったんだ。今までずっと言えなくて……ごめん！」

勇輝は固く目をつむって頭を下げた。正直これ以上は恥ずかしくて零華の顔を見てられない。

「そんな……勇輝君。謝らないで、辛かったでしょう？」

零華は悲しげな表情で勇輝に歩み寄り、彼の頭を撫でた。それにつられて勇輝は顔をあげ、視線が合うと慌てて逸らす。

「勇輝君、ううん勇輝ちゃん、これからは隠さなくてもいいんです。同じ女子どうし、仲良くしましょうね」

にこりと零華は笑い。勇輝の心臓に杭が刺さった。なんだか目頭が熱くなってきた。

「あ、ありがとう。零華」

声が震えて半泣きの状態を、零華は安心して気が緩んだのだと解

釈した。

「いつでも頼ってくださいね。勇輝ちゃん、私たちは女の子。ずっと仲良くしましょう」

零華はぎゅっと勇輝を抱きしめ、耳元でそっと囁く。

「今日一日そのままでもいいくださいね」

勇輝は精神がガラガラと崩壊していく音を聞いた。

「……う、うん」

「零華、人の彼女にあまりべたべたするな」

凝固している勇輝に気づいた鍊魔は機転を利かせて零華の腕の中から勇輝を奪い返す。

「あら、女の子にまで嫉妬ですか？」

「黙れ。勇輝、帰るぞ」

勇輝は硬い動きで鍊魔を見上げ、ロボットのようにはしゃいだ。鍊魔は勇輝の腕を掴んで歩きだす。

「ホールにいてください。すぐに行きますから」

鍊魔に引かれる勇輝がよろめいた。鍊魔は勇輝の体を支えてドアを開ける。

「茶を三杯飲んでから来い」

鍊魔はボタンとドアを閉めた。それと同時に勇輝が崩れ落ちる。

「俺……今なら羞恥心で死ぬる。もう、殺して……」

床に伏すその姿はまさに悲劇のヒロイン。鍊魔は勇輝の隣にしゃがみ、勇輝の肩に手を置いた。

「勇輝……歩けないのなら、俺がお姫様だつこでホールまで連れて行くことになるのだが……」

「自分で歩きます！」

勇輝はバネ人形のようにピョンっと立ち上がり、スタスタとホールへと歩き出す。それを、微笑を浮かべながら鍊魔が追った。

「勇輝、似合っているのだから特技にすればいい」

「やだよ！ こんな情けない特技があるか！」

羞恥は怒りとなり、勇輝はさつさと先へ進む。足の長さゆえ二人の距離はさほど開かない。

「勇輝、怒るな。いい加減認めろ」

「俺は男俺は男俺は男」

そして勢いに任せてホールへの扉を開けた勇輝はげつと呻いた。ホールには彼らがいることを忘れていたのだ。零華の部屋には癒慰



の部屋から直接行った。つまりこの姿は癒慰以外には見られていなかったのだが……。

「あははは！　なんだお前、完璧女の子じゃねえか！　可愛すぎるだろ」

「ほう。いつもに増して可愛いな」

「でしょ。私のメイクのおかげね」

勇輝は肩を震わせて俯き、怒りは頂点に達しようとしていた。

「おう錬魔！　お前の彼女最高じゃん！」

勇輝の後ろに錬魔の姿が現れ、秀斗が親指を立てる。錬魔はそれにげんなりとした表情を返した。

勇輝はしずしずと秀斗の下へと歩み寄る。その顔からは表情が抜け落ちていた。

「勇輝？」

勇輝はソファーに座る秀斗の前でぴたりと止まった。笑いすぎて涙を浮かべている秀斗が、勇輝の顔を見てまた嘔き出す。

「秀斗……」

勇輝は秀斗の膝片足を乗せ、その首を締めあげた。

「死にやがれ。今ここであの世に旅立て」

「うがつ、絞まってる絞まってる」

「あたり前。絞めてるんだから」

勇輝は怖いほど綺麗な笑顔を見せた。秀斗にはその笑顔が天使に見える、意識が遠ざかる。

（天使って弥生みたいに綺麗だなあ）

「勇輝……そろそろ秀斗が死ぬぞ」

弥生が秀斗の頬をペチペチと叩くが全く反応がない。

「大丈夫。秀斗はこれくらいじゃ死なない」

「なんだか彼女に浮気がばれた図って感じね」

「秀斗君の浮気相手は弥生ちゃんですか？」

突如割り込んで来た声に全員が動きを止めて声のした方を向いた。零華がいつもの微笑を浮かべて錬魔の数歩隣に立っていた。

「零華」

勇輝は秀斗の首から手を外し、恐る恐る零華の表情を見る。先程の冷たい空気がなくなり、いつもの柔らかい空気に変わっていた。

「エイプリルフル、とても楽しかったです。勇輝君、ありがとうございます」

「あ、うん。よろこんでくれならいいよ」

零華がそう礼を述べると、勇輝は気恥ずかしそうに視線をずらした。

「そしてみなさん、今回はたくさん心配をかけてしまいすみませんでした。それとありがとうございます」

零華は優雅にお辞儀をし、彼らの顔を見回す。全員ほっとした顔をしていた。

「いいってことよ」

「終わりよければ全てよしだもんね」

秀斗と癒慰が笑ってそう返す。癒慰はすっかり元の明るさが戻っていた。

「かまわん。仲間だからな」

弥生は口角をあげ、こくりと頷く。その笑みは優しく温かい。

「めったに言わないわがママを聞いてやったただけだ」

二度とやらんと鍊魔は疲れた表情でソファアに座った。

「いつも助けてくれてるお返しだから」

(零華の気分が楽になったならそれでいい)

勇輝は心底ほっとして、不思議と達成感を感じていた。零華の、仲間のために頑張れたというのがとても嬉しい。

「勇輝君。そのまま街へ買い物に行きませんか？」

小さな幸福感に包まれていた勇輝はピキツと音を立てて固まった。目に映るのは意地悪そうな零華の笑顔。

勇輝の厄日は始まったばかりだ。

#### 第4章の24 野に咲く花を愛でましょう（後書き）

ふう。やっと双子編、もしくは錬魔と勇輝の厄日編は終了です。ちよつと一息入れてみました。作者も勇輝の女装に癒されました。いやはや、可愛いね。

さて、これからはまた週一、土日のどちらかに更新となります。あと一山。それで四章はおしまいです。あともうひと頑張り行きま

すか。  
次回「（未定）」です。すいません。

## 第4章の25 幸せは闇の中で見出す

桜の蕾がほころび始め、日差しは人々を包み込むように暖かい。年中春の陽気の如月だが、桜はない。

そのことに勇輝は今気がついたのだ。

朝食を食べ終え、少し体を動かそうと屋敷の周りを散歩していた。癒慰自慢の中庭には様々な種類の花が咲き誇り、木々も葉を風に揺らしている。それらを見て、昨日見た桜が頭に浮かんだのだった。

そしてそれと共に引きずり出された抹消したい過去。

昨日勇輝は街に行った。零華と癒慰に引きずられ買い物に行ったのだ。もちろん女装で。

さすがにドレスではいけないのでワンピースに着替えさせられた。泣きそうなシヨッピングとぅとぅしいナンパ。勇輝はストレス発散に絡んで来た男たちを全員殴り飛ばした。

そのおかげか今日の目覚めはスッキリしている。

(絶対零華を怒らせないようにしよう)

勇輝は怒ったときの零華の怖さを思い知った。その場でさっくりと剣を突き立てて終わる弥生のほうが何倍もましだ。零華のは最後まで尾をひく。

中庭を抜け、鍛錬場に出たので昔齧ったシャドーボクシングをする。たまにやりたくなる小さな趣味。勇輝はその場の勢いで丸太にストレートを繰り出した。がこつと拳がいやな音を立てビリリと痺れが肩口まで登る。

「……………痛い」

勇輝は丸太に拳を当てたまま反省した。春の陽気にほわほわしていた頭が少し冷える。

(俺の馬鹿……)

勇輝は赤くなった拳を撫で、鍛錬場を後にした。

如月の周囲には庭園が数か所あり、それぞれ違う雰囲気を持ち、花の色合いも違う。

庭園と庭園の間は草むらで、細い道がある。そこを通るのが勇輝の散歩コースだ。

そして庭園の先はそのまま森である。

勇輝が小さな噴水のある庭園に足を踏み入れた時、視界の端に黒が掠めて気を引かれた。自然満載の庭園で黒色はほほえない。

勇輝が森の方へ目をやるのと、木立が揺れて人が姿を見せたのは同時だった。

「……え？ 阿修羅さん？」

「ん、人間の子どもか。ちょうどよかった。秀斗はいるか？」

庭園へと足を踏み入れた阿修羅は服についた葉や埃を払う。片腕に布で包まれた荷物を抱えていた。

「勇輝ですってば。秀斗はいますけど……なんでこんなところに？」

この間やって来た鎖羅は普通に屋敷に入って来ていた。なのになぜ彼は外をうろついていたのか……。

「鎖羅が屋敷の外に空間をつなげた。おかげで俺はここまで歩く羽

目に……」

鎖羅と何かあったのかと気になるが訊かないほうがよいと判断し、勇輝はにこりと無邪気スマイルを浮かべる。

「あ〜じゃあ、中に入りましょう。ホールに案内するんで」

「頼む」

勇輝は彼が抱える布をちらり見ただけで、さほど気にせず歩きだした。阿修羅はその後に物珍しそうに辺りを見回しながら続く。

(何も起こらないといいんだけど……)

如月に客が来ると一騒動起こることが多い。特に今は一騒動が収まって落ち着いたところなのだ。スリルもハプニングも大好きな勇輝だが、もう勘弁していただきたい。

そんな淡い願いを胸に抱きながら、勇輝はホールへと歩くのだった。

ホールでは癒慰と秀斗がのんびりと食休みを取りながらおしゃべりをしていた。話題は昨日の街歩きだ。主に動いていたのは女の子二人と勇輝で、その後ろで他の三人は女の子たちが買い物をするのを眺めていたのだ。邪魔にならないようにこっそりと。秀斗は完全に荷物持ちだったが……。

美男二人に美女と可愛い女の子計四人。もちろん街行く人々の視線は釘づけである。



「しかし勇輝は強かったな。言いよってくる男ども全員一発でのし  
てたぜ？」

「せっかく顔は可愛いのに、中身は猛獣なんだから」

「ほんと、なんで男に生まれたんだろーな」

「ねえ、魔術の中に性別変える奴なかったけ？」

「ん〜。あつたとしても禁術だろ」

そんな勇輝が聞いたら確実に秀斗がぼこぼこにされる会話をして  
いるところに勇輝が入って来た。

二人は慌てて会話を止める。幸い勇輝には聞こえていない。

そして二人はにこやかに勇輝に笑いかけたが、その笑顔は中途半  
端なところで止まった。

「秀斗、元気にしてるか？」

勇輝に続いて入って来た阿修羅によって。

「あ、阿修羅さん！　なんでここに？」

顔をぱつと輝かせて秀斗は阿修羅に駆け寄る。それを見た勇輝は  
心の中で可愛いと思った。なんだか子犬のようだ。

阿修羅は自分より少し低い秀斗の顔をじつと見つめる。そして硬  
い口調で切り出した。

「頼みごとがあつてな」

「頼み？ 俺に？」

阿修羅は真面目な顔でゆっくり頷き、片手で抱いていた布包みを秀斗に差し出す。

それを疑問に思いつつ受け取った秀斗はその布から温かみを感じた。そしてそれは見かけによらずやや重い。

「……あの、これ開けてもいいですか？」

嫌な予感をひしひしと感じる秀斗は恐る恐るそつ尋ねる。

「ああ」

勇輝は布の中身が気になって秀斗の隣に寄って来た。秀斗はそつと布の端を持ち上げ、開いていく。そして包まれていたものを見て目を剥いた。

「これどこで拾ったんですか？」

布に大切そうに包まれていたもの。それは赤ん坊だった。黒い髪をした生まれてほんの少ししか経っていない赤ん坊。

「わあ、可愛い」

勇輝は呑気に思ったことを呟いた。赤ん坊はすやすやと眠り、手をぎゅっと握っている。

「俺の子とかは思わんのか」

「鎖羅とのですか？」

この世の終わりだという表情で秀斗が叫んだ。その声に赤ん坊は目を覚まし泣きだす。

わんわんと大音量で泣かれ、秀斗を筆頭に男三人はうるたえるしかなかった。

「冗談だ。それよりこれをどうにかしてくれ」

「俺無理！ 勇輝パス！」

突如押しつけられた赤ん坊を勇輝はあたふたとあやし、優しく体を叩いてやる。

「大丈夫だから、泣きやんで」

よしよしと笑いかけながら声をかけてあげればいいと聞いたことがあった。

やがて赤ん坊は泣きやみ、黒い色のくりりとした瞳で勇輝を見つめた。三人はほっと息をつく。

「ひとまず、向こうに座りませんか？」

秀斗はくいつと癒慰がいるソファを指差して歩きだした。

癒慰は一人ソファで硬い表情でテーブルを見ており、彼らが近づいてきたのに気づくと慌てて顔をあげる。

「あ、あの、初めまして。癒慰です」

「ああ。阿修羅だ」

勇輝と阿修羅は癒慰の向かいのソファーに座り、秀斗は癒慰の顔を横切つてその隣に座つた。横切る瞬間に、癒慰の顔を優しく叩いてから。

そして赤ん坊はまだ勇輝の腕の中にいた。

「それで、これどこで拾つて来たんですか？」

秀斗が話を仕切り直す。その声は呆れがまじり、じつと赤ん坊を見ていた。

「この間お前に会つた街だ。指令の帰りに見つけた」

阿修羅の話によると、指令をこなした帰り道、ビル伝いに上の道を歩いていると下から赤ん坊の泣き声が聞こえたいらしい。それはどうも路地から聞こえるらしく、興味に駆られて降りたところごみ袋に紛れて置いてあつたそうだ。

「完璧捨て子じゃん」

勇輝は思わず呟く。この時代にまだそういう現象があるとは驚きだ。

「ああ。俺の頼みはそいつの母親を探すことと、それが叶わない時はそいつの面倒を見ることだ」

彼らは阿修羅の頼みを全て理解するのに数秒を要した。

「ちょっと待つてください。なんで俺たち何ですか？ 本部に持つていけば母親探しはともかく面倒は見てくれるでしょう？」

顔をひきつらせて秀斗はそう問い返す。母親探しはともかく赤ん坊の面倒を見るとは無茶もいいところだ。

「俺もまず本部に行った。だが戦力にならんものはいらんと言われ、氷騎に連れ帰ったら鎖羅に怒られた」

阿修羅は腕を組んで、納得がいかない顔をした。鎖羅に怒られたことが釈然としないのだ。その様子に秀斗は額に手をやる。

「まさかこいつを俺たちみたく放置したんじゃないですよね」

阿修羅は二人を拾ったのち、主に食事面の世話をほとんどしなかった。食べたければ自分でやれという態度で、最初はかなり戸惑ったのを秀斗は覚えている。鎖羅がフォローしてくれなければ何食べ損ねたか分からない。

「俺に赤ん坊の育て方がわかると思うか？」

だが阿修羅はそれを反省しているどころかむしろ開き直ったように無然と言い返した。

「ですよね」

「お前ならこいつと年も近いからわかるだろ」

「んなわけないでしょ！」

確かに阿修羅に比べれば赤ん坊に年は近いがそんなもの何の役にも立たない。大声を出してから、はっと秀斗は赤ん坊が泣きださないかと赤ん坊の顔を見る。赤ん坊は再び勇輝の腕の中で眠っていた。

「育てる方はあまり期待していない。だが、龍牙隊なら表の社会に根を張っているからその母親も見つかるかと思ってな。それに、まだ龍牙隊は孤児院をやっているのだから？」

「まあ、たしかに」

龍牙隊は表社会で警察や政治団体とも関わりがあり、戦時中から続けている孤児院も数は減ったがまだ存在していた。

「ということだ」

阿修羅は話を一区切りつけると、また秀斗に視線をやった。秀斗がなんですか？ と目で答える。

「それと……ここにしばらくいてもいいか？」

「え？」

秀斗と勇輝が同時に訊き返した。癒慰も怪訝そうに阿修羅の言葉を待つ。

阿修羅は不満げな表情で口を開いた。

「鎖羅にその赤子の引き取り手を見つけるまで帰ってくるなど追いだされた」

「何やってんですか……」

呆れ果てる秀斗。勇輝はなぜ阿修羅が森を歩いてきたのか分かった気がした。

(鎖羅さん、ここに直接繋げなかったんだ…)

「俺は何もしていない」

何もしなかったのが鎖羅の怒りに触れたのだが……。

「俺は阿修羅さんがここにいってもいいですけど……ちょっと他の奴らに訊いてみます。癒慰、行こうぜ」

「あ、うん」

急に名前を呼ばれた癒慰は、うわずった声で返事した。秀斗に遅れて立ち上がる。

「すまんな秀斗」

「悪いと思うんでしたら拾い癖を直してください」

秀斗は手をひらひらと振って癒慰とともにホールを後にした。そしてホールには阿修羅と勇輝、それと眠る赤ん坊が残されるのだった。

秀斗は癒慰をホールから連れ出し、少し歩くと立ち止まって癒慰を振りかえった。その表情は硬く、泣き顔に近い。

「癒慰、本当はすぐにお前を出してやりたかったんだけど……」

秀斗は心配そうに癒慰の顔を覗き込む。

「大丈夫……ちょっと、ぼうつとしてただけだから」

癒慰は何でもないと笑った。だがその笑顔は無理をしているようで痛々しい。

「無理すんな。お前が闇を苦手としてるのは知ってる。それに、あの後だしな」

先日百華が来て闇の子に対する嫌悪を彼らにぶつけた。そこに闇本体が来てしまった。

癒慰にとっては傷口に塩を塗られるようなものだ。

「でも……」

「嫌なら、赤ん坊だけ預かって弥生と鎖羅に取りなしにいくからさ」

真剣に自分のことを考えてくれているのがわかり、癒慰は苦しみの中で笑顔を見せた。

そしてゆっくり首を横に振る。

「いい。だって、阿修羅さんが悪いわけじゃないもの。だから、その必要はない」

「いいのか？」

「大丈夫」

秀斗はそれでも心配そうな表情を崩さずにありがとうと言った。



「じゃあ、お前はもう部屋に戻れ。俺は他の奴らに訊いとくから」

「うん……ありがとう」

癒慰はひらひらと小さく手を振って自分の部屋へと向かった。秀斗はその背を見送ってはあと息をつく。

秀斗の中には闇に対する嫌悪も恐怖も今はもう無い。彼らに会った時に消えてしまった。だが未だに残る自らの血に起因するその感情が癒慰を苦しめている。

秀斗は物悲しい想いに駆られながら、歩き始めた。

その頃ホールでは緊張した空気の中、阿修羅と勇輝が赤ん坊の名前を考えていた。

ふと性別が気になったのと、もしかしたら身くるみのどこかに名前がないかとそつと布を開いてみた。性別が女の子だということは判明したが名前はどこにも見当たらない。

そこで先程からそれぞれが思いつく名前を言いあっていたのだ。

「美咲」

「ラルミール」

「由美」

「シルベリア」

「彩葉……って阿修羅さん、さっきからカタカナばっかなんですけ

ど。この子どう見ても日本人ですよ?」

これが続けても一生名前は決まらないだろう。

「……ならもうお前が決める」

阿修羅に投げ出され、勇輝は一人考え始めた。

「幸せに育ってほしいからな。幸さいちとかどうですか?」

「いいんじゃないか?」

なげやりな言葉でも勇輝は満足し、赤ん坊に笑いかける。

「幸、お前は幸って名前だよ」

すやすやと眠る赤ん坊の寝顔を見ていると自然と心が優しくなる。

「あ……この子育てるならミルクとか哺乳瓶とか色々買わないと」

思いついたように勇輝はそう呟いた。

「あと育児本もいるなあ……」

なんとも積極的な勇輝に、基本面倒くさがりな阿修羅は素直に感心した。

(ここにきて正解だな)

まさか人間の子どもが育児をしてくれるとは思っていなかったが、

肩の荷が下りた気分だ。

緊張の空気がほくほくと温まって来た時、一つのドアが開いた。秀斗かと二人はそのドアに視線をやったが、入って来たのは鍊魔だった。二人の存在に気づき、軽く瞠目する。

「なぜ阿修羅がここにいる？」

「鎖羅さんに追いだされたってさ」

鍊魔はやや呆れ顔になって二人に歩み寄って来た。そして勇輝の腕に抱かれているものを見てさらに目を見開いた。

「あ、これ阿修羅さんが拾って来た。しばらくここで面倒見るからよろしく。幸って名付けたんだ」

勇輝は可愛いだろと幸の頬をふにふにと触った。少しむずがりがすぐに穏やかな眠りに戻る。

鍊魔はじつと幸を見た。瞳が赤く縁取られている。

(…………一応健康なようだな)

医者としての役目を果たすと、火煉の発現を解いて阿修羅に向き直った。

「どれくらいいるつもりだ？」

「さあ。今秀斗が交渉中」

問いには勇輝が代わりに答える。鍊魔の頭に零華と癒慰の顔が浮かんだ。

(二人が大きく動揺しなければいいが……)

錬魔もソファーに座り、しばらく話していると秀斗が帰って来た。

「あ、錬魔ここにいやがった。お前、別に阿修羅さんがいてもいいよな」

「かまわん」

だと思ったと秀斗は頷いて、彼らに近づいてきた。

「てことで、オッケーです。部屋は俺の隣にしますね」

秀斗は錬魔の隣に腰掛け、親指をびしっと立てた。

「事情を零華に話したらこいつに必要なものを買に行ったのでこつちも大丈夫です。本部にも訊いてみますから」

ちよいつと幸を指差す秀斗に、勇輝は目くじらを立てた。

「秀斗、これじゃないよ。幸って名前をつけたんだ」

「行動早っ。で、その幸はお前が面倒みんのか？」

「ん」。さすがに一人は無理だから癒慰や零華に手伝ってもらおう

勇輝はただ抱いていることならできるが、他は全く知らない。零華は育児書を買ってきてくれるかと少し不安になった。

「まあ、そうなるわな」

「いろいろすまん」

「かまいませんよ。俺たちだって色々世話になっただんですから」

照れ笑いを浮かべて秀斗は手をひらひらと振る。それを見て阿修羅はふっと笑った。

それはどこか成長した子どもを見るような優しい笑み。

「では、言葉に甘えてしばらく厄介になるか。鎖羅の機嫌が直るまで」

そう言っただけでどこか意地悪めいた笑みを浮かべる阿修羅に秀斗は彼の目的を理解した。

「阿修羅さん……鎖羅がしびれを切らして迎えにくるのを待つつもりですね」

それに阿修羅は何も答えず、ただ笑みを浮かべていた……。

第4章の25 幸せは闇の中で見出す（後書き）

体育の日なので、あげておきました。因果関係ありませんね。

これが最後の山。山頂からの景色はどのようなものでしょうか。

では次回「己の中にあるものは」です。

## 第4章の26 己の中にあるもの

零華が赤ん坊のための買い物から帰り、ホールはたちまち育児セツトの山ができた。机の上には育児書とおむつにミルクが置かれている。

如月の物置にあったという赤ちゃん用のベッドが運び込まれ、ベッドの上にはたくさんぬいぐるみが置いてあった。

そしてベッドの上に寝転がり興味深そうに目をパチパチさせる幸を、零華、鍊魔、勇輝が見つめていた。

「ほんと幸は可愛いな〜」

顔をにやけさせて勇輝は幸のほっぺを人差し指で撫でる。

「癒されますね」

聖母のような笑みを浮かべて零華は哺乳瓶でミルクを作っていた。粉ミルクの缶を見ながら書かれている通りに粉をお湯で溶かす。

「……………このまま育てる気か？」

「だめ？」

勇輝は拾って来た子犬を見せる子どものように訴える目で鍊魔を見上げる。

「いや……………その」

勇輝の必勝説得法うるうる目をくらった鍊魔は言葉に詰まる。

「さすがにずつとは無理ですね。私たちでは十分な世話を教育もできませんから。やはり母親が見つからない場合は孤児院に預けましょう」

勇輝はしゅんとしおれて幸の顔に視線を落とした。

「幸……お前の母さんを見つけてやるからな」

じつと幸を見つめると、幸と目があった。そのまま見つめ合う。

「……うっ、だめだ！ 清らか過ぎる！ なんか色々贖罪したくなる！」

だが勇輝はすぐに視線を離し、ベッド脇にしゃがみ込んだ。

「赤ん坊の目は純粹ですからね」

「悪行の数々を謝りたくなる……」

「不良が子育てなんておもしろい絵ですね」

くすくすと笑いながら零華は幸を腕に抱きミルクを飲ませる。幸はお腹が空いていたのかごくごくと飲んでいった。

「別にいいじゃん」

「ええ。可愛らしくていいと思います」

ちくりと勇輝の心に棘がささった。ついこの間味わった痛みに、



勇輝はそろつと視線を幸から零華の顔へと移した。だが零華の表情はいたって普通。刺々しいオーラも出ていない。

「どうかしましたか？」

「……い、いや。なんでもない」

気のせいかなと勇輝は小首を傾げた。その間に幸はミルクを飲み終わり、零華はげつぷをさせるとまた幸を寝かせる。なかなか手なれた動作に勇輝は拍手をおくった。

「零華って何でもできるよね」

「勇輝君も早く覚えて立派なお母さんになってくださいね」

にこりと笑いつつ、零華は五寸釘を勇輝の胸に打ちつける。勇輝は驚きと痛みで心臓が止まるかと思った。心臓が掴まれているように痛い。

「零華……まだ機嫌を直していないのか？」

呆れ半分の錬魔。勇輝は顔面を蒼白にして自殺でもしそうな形相で零華を見ている。

「零華はそんなこと言わないって信じていたのに……」

「からかっただけです。つつい楽しくて……許してください」

聖母の微笑みを向けられ、その神々しさに気押されて勇輝はこくりと頷いた。そしてすぐに我に返って頭を抱える。

「やられたあ！」

悲嘆にくれる勇輝を見て、零華はくすくすと笑っていた。その様子に溜息をつく錬魔。

「化けの皮が剥がれたな」

ぼろりとこぼした錬魔に零華は笑顔を向ける。だが目が笑っていなかった。

錬魔はしまったとスーッと視線を零華からそらす。

「一度に爆発するよりは小出しにした方がいいことに気がついたんです。そう思いませんか？」

「……全くその通りだな」

「理解を示してくれてありがとうございます」

錬魔は溜息を喉もとで飲みこみ、わざと笑みを見せた。口角をあげた、挑発とも取られかねない笑み。二人が笑みを浮かべてあう様子を、勇輝はうすら寒い思いをしながら見守る。

如月にピリ辛零華が誕生した……。

昼が過ぎ、零華は母親の手掛かりをさがすために幸をつれて龍牙隊に行き、秀斗は顔なじみのいる警察へ情報を訊きに行った。

残った人たちは二人が帰るまでの時間を潰す。

癒慰は窓辺に置かれた椅子に座り、開け放たれた窓から外を眺めていた。癒慰の部屋は庭に面し、花が太陽の光を浴びて心地よそうにしているのが見える。

だが外の明るい景色とは裏腹に、癒慰の気持ちは沈んでいた。

(阿修羅さんは、悪くない……)

胸にこびりついたように取れない、阿修羅を見た時の感情。それは怯えであり、嫌悪であり、憎悪であった。

いくら頭で否定しようとも、重くなる胸の内が自らの思いを吐露する。

(やっぱり闇は許せない)

闇の子に生まれたことで人生は狂った。幸せだった時間は壊れ、地獄が始まった。

それを、闇を見るたびに思い出す。彼らが癒慰の人生を狂わしたのではない。だが彼らに流れる血が、そして自らに流れる血が許せないのだ。

(どうして、どうして私は闇の子なの……?)

何度そうやって自分の身を恨んだか分からない。

(消えてしまえばいいのに……)

夜の闇の中で、度々短剣を喉元に向けたこともある。母の最後の姿に引き寄せられるように、静かな空間で自分の終わりを願っていた。

だがその刃が血で染まることはなく、いつも自分の故郷と仲間が

足枷になった。

( 苦しい…… )

終わりの見えない苦しみ。楽になるには命を絶つほかないのに、それは許されない。

癒慰は窓枠に両腕を乗せ、顔を腕に埋めた。

視界は黒に染まり、耳と肌以外の明るさと暖かさが伝わる。

そしてしばらくそうしていると、サクツと土を踏む音が聞こえて顔をあげた。

「癒慰」

声が聞こえた方に顔を向けると、そこには無表情の弥生がいた。

癒慰は急に現実に取り戻され、やや虚ろな目で弥生の姿を確認すると微笑を浮かべる。

「散歩？」

「鍛錬を終えて自分の部屋に帰るところだ」

癒慰はくすりと笑った。鍛錬場から帰るのであれば、癒慰の部屋の前を通るよりも建物の中に入った方が近い。

( 弥生ちゃんに心配させるなんて、情けないわね )

弥生はゆつくりと歩いて来、窓のすぐ横の壁にもたれかかった。

部屋に帰る気はないらしい。

癒慰はそんな不器用な心配が胸の内を軽くした。爽やかな空気が淀んだ心に吹きこむ。

癒慰はしばらく弥生の横顔を見つめ、観念したように溜息をついた。

「……ねえ弥生ちゃん」

癒慰が言葉を投げ、水のように鎮まっていた静けさに石が投じられる。弥生は虚空を見つめたまま黙って続きを待った。

「弥生ちゃんは、どうして……あの二人と一緒にいられるの？」

癒慰がやつとの思いで紡ぎだした言葉は、闇の二人に会った時からずっと胸の内にあつた言葉だった。

弥生は困ったように首をかしげ、しばらく考えてから答えを口にする。

「なぜと言われてもな……私はあの二人に生かされた。いわば家族のようなものだ」

癒慰は口の中で家族と呟いた。なぜか胸が苦しくなる。

「怖くないの？」

「怖いのは自分の闇だけだ。二人の闇は心地よい」

弥生はそう言って微笑を浮かべた。それを見て癒慰は複雑な思いになる。

「弥生ちゃんは、闇を許せるのね」

皮肉めいた声が出て、自分でも驚く。

「癒慰。私は闇の子に生まれたことを疎ましくは思わない。むしろ義姉様と同じ血を持つことを誇りに思う」

「誇り……か」

癒慰はそう呟くと悲しそうな笑みをこぼした。

（この闇の血を誇りに思うことなんて、できるの？）

自分に問いかけても、答えはNOだった。この血さえなければと、その思いが先に立つ。

「癒慰が闇を嫌うことを誰も責めはしない。だからそんな顔をするな」

癒慰はその言葉にはっとして、自分の表情に意識を向けた。明確には分からないが、おそらく悲しい顔をしていたのだろう。癒慰を見る弥生の表情も、どこか悲しみを漂わせている。

「そつよね、私らしくないよね」

癒慰はあははと笑うが、弥生は静かに首を振った。

「無理はするな。我慢する癒慰など、癒慰ではない」

その言葉に癒慰は大きく瞳を揺らした。胸が締め付けられて、視界が滲む。

「ずるい……弥生ちゃんが優しいこと言うなんて反則よ」

目をごしごしこすっても、次から次へと涙はあふれてくる。弥生は涙を流す癒慰の傍で、ただ黙って立っていた。己の中にも眠る間を感じながら……。

秀斗は自分の部屋の扉を開けて半目になった。無言のまま中に入り、ベッドの傍に立って彼を見下ろす。

「なんで俺の部屋で寛いでるんですか？ 阿修羅さん」

阿修羅は秀斗のベッドに仰向けに寝転がり本を読んでいた。秀斗を一瞥し、すぐに本へと視線を戻す。

「もしもし。ここは俺の部屋ですよー」

阿修羅は迷惑そうな視線を秀斗にやり、本を枕元に置いた。

「昔は同じ部屋だっただろ。気にするな」

「いやいや、俺はどこで寝たらいいんですか」

阿修羅はわざとらしく鼻をならし、ベッドを二度叩いた。

「何を今さら。昔は怖いからと俺のベッドに入って来たくせに」

「何言ってるんですか！ 勝手に人の過去をねつ造しないでください！ 俺はもう一つのベッドで寝てました！」

「照れるな」

「照れてません！」

ぎゃーぎゃーと反論する秀斗に、阿修羅は変わっていないなと笑みをこぼす。

(本当にからかいがいのある奴だ)

秀斗はつむじを曲げてドスンとベッドに腰を下ろした。

阿修羅は拗ねた子どものような背中を見ておかしそうにまだくすくすと笑っている。

秀斗はしばらくむすっとしていたが、やがてその表情をひっこめ真面目な顔をして阿修羅を振りかえった。

秀斗の表情の変化に阿修羅も笑いを納める。

「警察に行ってみました、今のところ赤ん坊の捜索願は出されていないそうです」

「……そうか」

阿修羅も難しい顔をした。そう簡単に見つかるとは思っていないかったが、予想以上に難しそうだ。

秀斗は阿修羅の顔をじつと見て、しばらくためらった後に再び口を開いた。

「阿修羅さん……一つ、訊いてもいいですか？」

「何だ？」

「この間の闘い、阿修羅さんはどう思ってますか？ 俺は……屋敷



を出た日の鎖羅さんが本物だとは思えないんです」

阿修羅は秀斗の考えを聞いて胡乱気な顔をする。

「あの闘いの後に弥生から聞いたんですけど、鎖羅さんも否定したって……」

阿修羅はゆっくり身を起こして、秀斗と向かい合う。

「この件、俺には何ものかが後ろで動いてたようにしか……」

阿修羅がその手を秀斗の口の前に持っていった。口にするなと目が告げている。

「それについては俺が調べている。それ以上嗅ぎまわるな」

強い口調。射抜くような視線にも怯まずに秀斗は言い返した。

「でも、俺はもう蚊帳の外なんて嫌なんです。俺も闘いたい」

「お前の役目は闘うことではない。守ることだ」

「でも……」

秀斗は悔しそうに歯ぎしりをする。

(守ろうとしても、いつも肝心なところで俺は……！)

秀斗の体内に激しい痛みを感じ、身体を丸める。胸の奥が猛り狂

って暴れている。

「秀斗、そう難しく考え……おい、秀斗！」

苦しそつに顔を歪ませ、胸を抑えつける秀斗を見て阿修羅は舌打ちをした。

「秀斗、気をしっかり持て！」

秀斗は肩で荒い息をしながら、阿修羅の声を遠くで聞いていた。

（もう新月か……最近ばたばたしてたから油断してたぜ）

常に新月が近づくと極力部屋から出ないようにしていた。この発作を誰にも見せないためだ。

全身から汗が吹き出し、鼓動はその痛みを訴えるかのように早い。

（耐える……耐える、俺）

徐々に痛みは治まり、発作は収束する。

秀斗は強張らせていた体の力を抜き、長く息を吐いた。力を抜いたところを、阿修羅に肩を掴まれ後ろに引かれた。

「うわっ」

不意打ちに為すすべなく秀斗はベッドに倒れこむ。その視界に天井について阿修羅の顔が映った。

「鍵のせいだな……少し身を休めろ」

荒々しいが心配してくれていることが分かって、秀斗は自然と笑顔になる。

「大丈夫です、慣れてますから」

身を起こそうとすると、頭を押さえつけられた。何が何でも寝ていると言いたいらしい。

秀斗は諦めて全身の力を抜く。

「まあ、見られたのが阿修羅さんで良かったって感じですね」

「早く返せばいいものを……」

呆れたように呟く阿修羅を、秀斗はじっと見上げた。

「てか、なんで阿修羅さんは俺が鍵を持ってるってわかったんですか？ その眼つてそこまで便利でしたっけ」

当人しか知らない秘密をあっさりと暴かれたのはつい一カ月前。秀斗は阿修羅の能力について全てを知っているわけではないが、それほど万能ではないはずだった。

阿修羅は闇誡を発現させると、右手を秀斗の胸へと置いた。そこは発作の度に痛む場所だ。

「ここに、わずかだが銀色が視える」

「それだけで分かるってすごいですね……これけっこうマイナーな禁術ですよ？」

阿修羅は秀斗から手を離し、視線を宙にやった。その表情はどこ

か憂いを帯びている。

「俺も、鍵を持っているからだ」

「えっ……」

秀斗は目を見開いて阿修羅の顔をまじまじと見た。

「鎖羅さん……ですか？」

秀斗が行った禁術は、術者の身に負担がかかるものだ。阿修羅がそれを行うとすれば、その相手は一人しか思い浮かばなかった。

「あたり前だろ」

阿修羅は憮然と言い放つ。

「鎖羅さんもそのことを……？」

「いや、あいつは知らない。寝込みを襲ったからな」

硬い雰囲気なのに秀斗は吹き出して、くすくす笑った。

「なんて言い方をするんですか……」

「事実だ」

そう言つと阿修羅はにやりと笑って阿修羅の髪をわしゃわしゃと撫でた。

「飼い犬は飼い主に似ると言うが、ここまで似るとはな」

「それはきつと飼い主が悪いせいですね」

「ほう……しつけ直すか」

意地悪めいた言葉に秀斗はひつと顔をひきつらせる。その顔を見て阿修羅はおかしそうにくすくす笑った。

「冗談だ」

「冗談に聞こえませんか……」

「……秀斗。大切な人を守り通せよ」

真剣な阿修羅の目に、秀斗は強く頷き返す。

「はい。阿修羅さんも早く鎖羅に告白してくださいね」

最後は意地悪っぽく付け足した。阿修羅は仏頂面になって拳骨を落とす。

秀斗は肩を震わせ、阿修羅も笑みを浮かべた。二人の間に流れる空気は昔と同じ。

そして話は両者の大切な人自慢に入っていくのだった……。

## 第4章の27 癒しのお茶を飲みましょう

泣いた上に弥生に慰められるという、このさき二度とないような体験をした翌日。

癒慰はホールで幸を預かりながら、もくもくとお茶を淹れていた。今日の服装は客も来ているので大人しくロリータだ。

如月で屋敷に残っているのは弥生と癒慰のみ。他は人間界へ幸の母親の捜索に行った。ある者はその筋に強い一家の下へ、あるものは幸が発見された現場へと。

癒慰はティーポットにお湯を注ぎ、茶葉が開くのを待つ。テーブルに置かれた小さな時計がカチカチと時を刻んでいた。

(なんで普通にしてくれないの……これ以上心配させたくないのに)

癒慰はさきほどミルクを買ってご機嫌の幸へと視線を向けると、籠からはみ出しているタオルを中に入れ込む。幸は籠に入ってソファの上、癒慰のすぐ隣に置かれていた。

(幸ちゃんほど純真ならよかったのに……)

つい頬が緩みかけたところで時間に気づいて慌ててポットの蓋を開ける。しぶみが出ないうちにボールを出しておかないといけない。

(でも、いつまでも避けてるわけにはいかないし……でも、でも……)

癒慰は温めておいたカップに紅茶を注ぎ始めたところで、その香

りにはっと我に返った。

注ぐ手を途中で止めて呆然と咳く。

「……私、何してんの？」

癒慰が淹れたのはまぎれもない紅茶、アールグレイ。魔術師にとつての酒である。

(いくらぼつっとしてたからって、なんでお酒を作っちゃうのよ……日本酒温めようとしてたのに……)

自己嫌悪が強まり重い溜息が洩れる。せつかく作ったが朝から飲む気にはなれない。

(まあ、飲まないとやってらんない気分なのは認めるけどね……)

そしてもう一度重い溜息をついた時、ドアの開く音がした。癒慰の思考が数秒停止する。

「……なんだ、一人か？」

ドアを開けて入って来たのは阿修羅だった。顔がひきつったのを慌ててもとに戻す。

(逃げちゃだめとは思ってたけど、こんなにも早く会うなんて……)

心の準備も何もない。癒慰は固まったまま視線だけで阿修羅を追う。彼はゆっくりと癒慰に近づいてきた。

「……おはようございます」

やっと頭が回転を始め、挨拶を絞り出す。心臓はバクバクと早鐘を打ち、掌には汗が滲んでいる。

それに阿修羅はああ、と生返事を返すと癒慰のソファア、幸側に立った。じつと幸を見下ろしている。

幸は阿修羅が視界に入ると嬉しそうに手を伸ばした。短く声を発している。

始めてみる反応に、癒慰は目を瞬かせた。慎重に言葉を選んで口を開く。

「父親だと思ってるみたいですね」

「どうだかな」

対して興味のなさそうに阿修羅は返し、一人がけのソファアに座るとテーブルの上に置かれたティーセットに目をやった。

癒慰は威圧感を受けつつもそつと阿修羅の表情を見る。だが彼の表情から読み取れるものは何もなかった。

「ところで、この香りはアールグレイか？」

「あ……はい。間違えて作ってしまいました」

「飲まんのか？」

「はい」

「ならば俺がもらおう」

癒慰はえっ、としばし戸惑ったが、阿修羅に目で早くしろと促さ



れ、カップに再び注ぎ入れる。カタカタと小刻みに手が震えていた。それを悟られないように必死に我慢する。

「……どうぞ」

受け皿に乗せて、癒慰は紅茶を阿修羅へと出した。香りが花開き、色もよく澄んでいる。

阿修羅はそれを受け取ると、香りを楽しんだ。カップを口元に運ぶ一瞬の表情はどこか懐かしく楽しげだった。

「うまい」

その一言は、おもわず零したような飾ったものない素直な言葉。阿修羅は一気に飲み干し、カップをテーブルに置いて癒慰へと滑らせる。その意図を理解した癒慰は黙って二杯目を注いだ。

(これ、けっこう濃いわよ?)

人間で言うワインと同じくらいの度数だ。

「……そういえば、秀斗はどこにいる?」

「えっと、他の人と一緒に人間界へ……」

阿修羅は二杯目の紅茶を飲みほした。

「そうか。起こしてくれば俺も行っただが……」

「今、起きたんですか?」

もう朝というよりは午前中といった時間である。そうは言っても、  
弥生も本日は寝る日ということで先程起きたところだったが……。

「あぁ」

黙って差し出されたカップに癒慰は残りのお茶を全て注いだ。  
沈黙が落ち、癒慰の肩にのしかかる。

「あの、朝食を作りましょうか？」

「いや、俺はこれで十分」

阿修羅は空になったカップを受け皿に戻すと立ち上がった。

「久しぶりに上手い酒を飲んだ」

そして酒を飲んだとは思えない足取りでドアへと向かう。彼はそ  
うとう強いらしい。

「あの、幸ちゃんは……」

「その人間の赤子に俺は不要だ。天つ人に任せる」

振りかえりもせずそれだけ言うと、阿修羅はドアから出て行った。  
何しに来たのか全くわからない。

癒慰は悲しさを湛えた表情で幸に視線を落とし、ふっと笑った。

（天つ人……か）

それは闇以外の、天から派生したと言われる種族の総称。癒慰が

属する土も、もちろん天つ人の一つだ。

(でも、私は完全な天つ人じゃない……)

癒慰は沈痛な面持ちでぎゅっと拳を握る。

己の中の闇が、ざわりと主張をした気がした。

お昼前には全員が屋敷に戻り、昼食後、ホールに全員が集まった。幸はベッドに寝かせられ、各々は顔が見える範囲で好きに座って、午前中の成果を述べる。

硬い表情で零華が話を進めていった。

「ひとまず、現在の状況をまとめると、龍牙隊にも警察にも搜索願は出されていません」

「現場にも手掛かりになりそうなものはなかったよ」

勇輝が残念そうにそう言い、鍊魔も頷く。

「いろんな組にいったけど、ヤクザ連中は知らねえってさ」

秀斗は役にたたねえとごちる。

急に現れて赤ん坊のことや行方不明の母親を訊いても答えてくれるはずもなく、しかたなく実力行使で吐かせてみても何も出てこなかった。徒労に終わったのである。

「この日のことが、極道世界で後の世まで伝わる金鬼襲来の日と呼ばれることを彼らは知らない……。」

「一応、孤児院は何時でも受け入れが可能とは聞いています」

「やっぱり孤児院に預けるしかねえか」

秀斗がひょいっとソファから立ち上がり、ベッドに歩み寄り、幸の顔をのぞく。

幸はくりりとした目で秀斗を見上げた。その顔にほっと癒される。

「ほんとに母親、いないのかな」

勇輝も立ち上がって幸へと歩み寄ると、そっと抱きあげた。よしよしとあやして微笑みかける。

正直、この赤ん坊を施設に預けるのは心苦しかった。

「分からん……後は警察と裏の者に任せるしかない」

錬魔は長い脚を組み、ため息交じりでそう言った。片手にはコーヒーの入ったカップがある。仕事の後の酒はうまいのか、すでに二杯目だ。

それを零華は横目で見つつも気にしないことにして話を続ける。

「二三日は様子を見るしかありませんね」

「もし母親が見つからなくても、阿修羅さんが帰るまでは預かってもいい？」

勇輝はじいっと零華に目で訴える。そこに癒慰も応戦した。癒慰も幸を気にいつたらしい。

二人の眼差しに零華は仕方ないと言った表情で頷いた。

「ちゃんと面倒は見てくださいね……では、今日はこの辺で終わらせましょう。また何かあれば知らせてください」

零華がそう締めくくってこの場は解散となった。各々休むために部屋に帰り、ホールには幸を抱いてソファーに座る勇輝、弥生に秀斗、そして阿修羅だけとなった。

「……面倒事もちこんですまなかつたな」

先程から口を閉ざしていた阿修羅がぽつりとそう呟いた。

勇輝はガラガラと音のなるおもちゃで幸と遊びながら、ちらりと阿修羅を見る。一人用のソファーに座り、ひじかけに頬杖をついて話す彼は気だるそうに見えた。

「別にかまいませんよ、俺たち暇ですし」

秀斗は笑みを浮かべながらひらひらと手を振った。

「見つからないのなら、最終鷺を頼るといつ手もある」

「そっか、鷺さんスパイだもんな」

「ぜってえやだ。あんな奴の手なんか借りるかよ!」

いい考えだと頷く勇輝に苦虫を噛み潰したような顔で首を横に振る秀斗。

阿修羅は驚、と口の中で呟いてあつと声を漏らした。

「昔面倒を見たあの子どもか……」

驚きの表情とどこか懐かしそうな声。それを見て勇輝の方が驚いた。

「え、知ってるんですか？」

こくりと阿修羅は頷き、勇輝の前に座る二人が真逆の表情を見せる。

「奴は黒騎に潜入していたからな」

「今思い出して腹が立つ」

「なかなか楽しかった」

昔から続く秀斗と驚の因縁を垣間見た気がした勇輝だった。

「……そうだ、人間」

はたと思いだしたように阿修羅が勇輝へと視線を移した。

「勇輝ですけど何か？」

このやりとりが恒例になった気がしてくる。

「お前を見込んで頼みがある」

唐突な言葉に勇輝はきよんとする。

(名前を呼んでもくれないのに見こまれてんの!?)

勇輝は内心つつこんだが、阿修羅の真剣な眼差しに言葉にはならない。

「これを一日持っていてほしい」

阿修羅の足元から闇が触手のように伸び勇輝へと近づいていった。勇輝が幸をソファーに起き、そろっと両手を合わせて伸ばすとその手を闇が包みこむ。掌に重みが加わった。

すつと闇が霧散すると、勇輝の手に残ったのは白く丸い、つるつとした……。

「たまご?」

朝食の目玉焼きに使用する、あのたまごである。

「ああ、俺の手では孵化できなくてな。お前が、一番適性がある」

「……孵化? 料理にするんじゃない?」

勇輝は白く可愛いたまごをじっと見つめ、そこからふわふわのひよこが孵る未来を想像した。

(あ、なんかいいかも。ひよこ可愛い)

そしてそれを育てて雌鶏となれば毎日新鮮なたまごが……。とそこまで勇輝は考える。

幸せな未来を頭に描いた勇輝は、きらりと目を輝かせて阿修羅を見た。

「わかりました！ 全力でこいつを育てます！ そしておいしい料理を作ります！」

「いや……その肉はあまりおいしくないが……」

「肉は使いません！」

目を輝かせる勇輝を見て、阿修羅は託す人間を間違えたと一瞬思っただがすぐに打ち消した。

「それで、これはどうすれば孵るんですか？」

勇輝のイメージはズバリ温めるだが、保温機もなく電子レンジで温めるわけにもいかない。

「掌で温めるか、日の光に当てておけばいい。後はたくさん話しかけてくれ」

（なんかサボテンみたい）

勇輝は言われたとおりたまごを掌で包み込んだ。落としたら即終了と思うと緊張が走る。

「……あ、夜はどうしたらいいんですか？」

ベッドに入れば、翌朝には黄色いしみになっているだろう。かといって温めるのを止めてしまえば孵らないかもしれない。



勇輝はそんな悲劇を想像して不安になる。

「ベッドの近くに置いておけ。それぐらい放置しても死なん」

「よかつた」

「明日の朝、日の光に当てれば十分だ」

「了解です！」

勇輝はにこにこそのたまごを見つめ、さっそく名前を考え始める。

(ピヨちゃん……あ、でも大きくなったらひよこじゃないし。オムレツ作りたいな)

考えていたらよだれが出そうだ。

勇輝が自分の世界に入り込んでいった時、幸がわんわん泣き始めた。勇輝ははつと我に帰り幸の存在を思い出す。

「ごめん幸！ 泣くな、って俺手が離せない！」

勇輝はたまごを手放すわけにもいかずわたたしている、弥生が幸をすくい上げて阿修羅の膝の上に乗せた。父親の顔を認識した幸はとたんに泣きやむ。

弥生は満足そうに頷いたが、あやし道具にされた阿修羅は嫌そうな顔をした。だが幸をどけるわけにもいかずその体勢のまま固まっている。

「阿修羅さん……ひとまず俺、癒慰を呼んで来ます」

事態の解決策をいち早く思いついた秀斗がさっとソファァーから腰を浮かせた。

「早くしろ」

苛立つ阿修羅、慌てる秀斗、無関心を決め込む弥生。

そして勇輝は早くも自分とたまごの世界に入っており、懸命に話しかけていた。

「オム、早く生まれるよ。うんと可愛がってやるからな」

如月に小さな命が一つ増えた。

第4章の27 癒しのお茶を飲みましょう（後書き）

たまごの話、けずるか非常に迷いました……。しかし、ワンクッシ  
ヨンが欲しかった。ごめんよ主人公、ほのぼの話につきあわせて。  
さてさて、今回は「慰めは花咲く庭で」でしょうか？

## 第4章の28 慰めは花咲く庭で

丈夫な雌鶏として生まれてこいよ、と言いながらたまごを一撫でして眠りについた翌日。

勇輝は目覚めるとすぐにサイドテーブルに置いたたまごに目をやった。

「オムおはよ、今日もずっと温めてやるからな」

勇輝は着替えるとたまごを掌で包んでそっと持ち上げる。

「今日は何の話をしようかな」

勇輝は昨日、寝るまでずっとたまごに話しかけていた。夕食も共に取り、数名に奇妙でいて憐れみも含んだ目で見られてもたまごに語りかけることを止めなかった。

時々、勇輝の話に相槌をつつようにたまごは動く。それがとても嬉しかった。

「さあ朝の光を浴びよう」

勇輝は慎重に片手でたまごを持つと、カーテンを開けた。まず自分自身が光を浴び、そして両手で包むように持ったまごに浴びせる。

「気持ちいい？ あったかいよな」

たまごは元気よくカタカタと頷いた。内側から強い力が伝わり、ピキッとたまごに罫が入る。

「ん？」

コンコンと罅は大きくなり嘴が覗いた。

「おお！」

今まさにたまごを突き破って出ようとしている生命に、勇輝は目を輝かせてたまごを凝視する。コツコツと罅は広がり、体毛がちらりと見えた。

うつすらとした黄色に勇輝の胸は高鳴る。

「オム、頑張れもうちよつとだ！」

勇輝はがんばれ〜と念を送る。手助けをしたくなるが、これはオムの問題だとエールを送り続けた。気持ちはすっかり父親だ。

「来た！」

そしてついにたまごの上が砕かれ、雛鳥が姿を現した。  
が。

(……………ん?)

薄黄色の体毛に薄茶の嘴。目は緑でお腹は白い。たまごを倒して転がり出てくれば、その尻尾は赤色だった。

「ひよこじゃねえええ！」

つばらな緑の瞳をきよろきよろさせて勇輝の掌を歩く雛鳥は、勇

輝の知っているひよことは似ても似つかない。

「クルア！」

元氣よく一声鳴き、ひよこひよこ方向転換をして窓ガラスの方を向いた。ぐいっと顔をあげて太陽を見る。

「クルツクルツ！ ルアア！」

掌で鳴く奇妙な生き物を勇輝は途方に暮れた顔で見つめていた。ひよこではない以上、新鮮なたまごゲットの夢は断たれたのだ。

「よく考えたら阿修羅さんから渡されたものがまともなものはずがないじゃん！」

なんと言っても彼は多数の魔獣を従えている魔術師だ。それなのになぜ普通のニワトリだと思ってしまったのか。

「どー見ても普通のたまごだったのに！」

朝から声を張り上げる勇輝に賛同するかのようにオムはひときわ高く鳴き、強い光を発した。

「まぶしっ！」

「クルアアアア！」

思わずぎゅっと目を閉じた次の瞬間、掌の重みが増す。強い光は数秒続き、勇輝がそっと目を開けると目を疑う光景がそこにあった。

じつと勇輝を見るきりつとした緑の目、羽は白く、身体の所々に模様が入っている。大きさはカラスぐらいで、尾は長く赤と黄色が混ざり、ばさつと広げた羽の内側は金色だった。

勇輝の掌を強く踏み切って部屋を旋回するオム。一瞬で立派な成鳥に成長した。雛鳥の時間、わずか二分。

「うっそおおお！」

朝から如月には勇輝の絶叫が轟いた。

勇輝はその後十数分オムと格闘し捕まえることに成功すると、小脇に抱えてホールに駆け込んだ。

目的の人物を見つけて一目散に駆け寄る。

「……ん、うまい」

たまごを預けたご本人阿修羅は、ゆったりとお茶を飲んでいた。魔術師にとつてのお茶なので中身はウイスキーである。

阿修羅と丸テーブルをはさんで正面の椅子には幸を抱いたゴスロリの癒慰が、その間に秀斗が座っている。

勇輝はその優雅な雰囲気呑まれそうになったが気を立て直して詰め寄った。

「阿修羅さん！ これは一体何ですか！」

阿修羅は興奮して鼻息の荒い勇輝を一瞥し、抱えられているオムに目を留めると、

「ああ、孵ったか」

と呑気な言葉を返した。

「珍しい鳥だな」

と秀斗はまじまじとオムを観察し、癒慰も物珍しそうに見ている。勇輝は目尻を吊り上げてさらに阿修羅に詰め寄り、オムを両手で持ち阿修羅に突き出した。

「これのどこがニワトリなんですか!？」

「……俺は一度もそれニワトリだとは言っていない」

勇輝はうつと言葉に詰まった。

「じゃあこれは何ですか!？」

見たことのない雛だったうえに一瞬で成長した。どう考えても人間界にいる生物ではない。

「さあな。拾いものだからよく分からんが、おそらく魔鳥だろう」

「それも拾ったんですか……」

呆れ顔で秀斗が呟く。

気に入れば深く考えずにすぐに拾う阿修羅の性格。だがむしろそれだけの数の落し物にめぐり合うことは一種の才能である。

「ああ、なかなかいい輝きをしていたからな」



「あゝオムきれいですよね〜って、そうじゃなくて！　なんでこいつを俺に預けたんですか？」

オムは大人しく勇輝に掴まれたままで、首をくるくると動かしている。阿修羅はオムの喉元に手をやり、指で撫でた。オムは嬉しそうにクルクルと鳴く。

「こいつは魔鳥だが光の性質らしくてな、闇の俺が持つていても孵化しなかったんだ」

阿修羅が従えている魔獣はほとんど闇を性質に持つものであり、光もいるが数は少なくなたまごを得たことはなかった。

「たとえわずかな闇でも影響を与えるから、人間のお前にしか預けられなかった」

「あゝなるほど」

秀斗がふむふむと頷く。秀斗を含め如月の魔術師は闇の子であり、わずかながらも闇の血を体内に宿している。

「それに、純粹な心がいるとも聞いたのでな」

「それどーゆう意味ですか。阿修羅さんはともかく俺はちょー純粹ですよ？」

唇を尖らせて反論する秀斗の頭を阿修羅は軽く小突いた。

「誰が、純粹じゃないって？」

阿修羅は笑みを貼りつけて秀斗に向け、問う。その瞬間秀斗の表情が凍りついた。

「もう何も言いません」

二人のやりとりが面白くて勇輝はつい笑ってしまった。肩を小刻みに揺らし、震動に驚いたオムが勇輝の手から飛び立つ。

「人間。ひとまずこいつを預かってくれたこと感謝する」

いつの間にか阿修羅は勇輝に視線を戻しており、そう言うと立ち上がった。飛び回るオムを目で追いながら近づいてく。

オムはしばらく旋回するとソファアの背に降りてきよるきよると辺りを見回した。

ゆっくりと近づく阿修羅の瞳が金色に変わり、白目が全て黒く染まる。

それはまるで闇の中で爛々と輝く獣の目だった。

オムは近づく阿修羅に気づき警戒を込めて見返す。阿修羅は逃げられるギリギリの距離を見極めてそこで足を止めた。

じつと睨み合う両者を三人は興味深げに見守る。

一分という短いようで長い時間が経ち、オムは突然バサツと羽を広げた。

「クルウウア！」

猛々しく一鳴きすると阿修羅へと飛んでいき彼の肩に止まった。小さな頭を阿修羅の黒髪にすりよせる。

「口説き落としだな」

「えっ？ 何も話してなかったけど？」

「俺たちに聞こえねえだけ」

阿修羅は三人を振りかえると、すつと右手を水平にあげた。彼の指は勇輝を指している。

オムは了解とでも言うつようにクルツと鳴くとまっすぐ勇輝目がけて飛んできた。

「…………え？」

迫りくる、自分が孵した魔鳥。足をぐわつと開き、標的はしつかり勇輝に合わせられている。

（食われる！）

勇輝が身をのけぞらせるよりも早く、ずしつと頭の上に重圧がかかった。わしつと頭を掴まれている。

「…………オム、重い」

「オム、存分に遊んでもらえ」

（なるほど、俺は遊ばれたのか）

「クル」

嬉しそうにオムは跳ね、肩に降りて来て頭をすり寄せてくる。

「オム……」

その様子はなんだかんだで可愛いものだ。

「ご飯、食べるにいいっか」

勇輝は朝食をまだ食べていない。それなのに大声を出したり走ったりしたのでかなり腹ペコ状態だった。

「いつてらっしゃーい」

癒慰が手を振った。阿修羅はオムのことはもういいのかさっさと椅子に座ってお茶を飲んでいる。

勇輝は朝食のメニューを考えながらドアを開けた。

「目玉焼きかな」

「クルア！？」

そしてその後、勇輝は厨房でフライパンにたまごを割り入れようとしたところオムに羽で邪魔されるのだった……。

勇輝は癒慰が作ってくれたであろうスープとパンを食べ、オムはトウモロコシをつついた。目玉焼きづくりを邪魔された勇輝は食糧庫から首と足が落とされただけの鶏肉を取り出してオムに見せたところ、ギロツと緑色の目を光らせたので平謝りしてからかうのをやめた。鳥は鳥でも魔鳥。どんな技を繰り出すか分かったものではな

い。

当分鳥料理は食べられないかもしれないと思いながら勇輝は皿を洗い、満腹となってご機嫌のオムを肩に乗せてホールへと戻った。

ホールには阿修羅と秀斗があり、ソファで何かを話していた。幸の姿は見当たらないのでどうやら癒慰が連れていったのだろう。

オムが勇輝の肩から飛び立ち阿修羅の膝に止まった。

「オム。服を破くなよ」

オムはクルツと鳴いて、テーブルへと飛び降りた。

「オムって人語が分かるんですか？」

勇輝は秀斗の隣に座り、先程の目玉焼き阻止で気になったことを訊いてみる。

「もともと魔獣でも力の強いものは人語を理解できる。それにオムは俺と契約を交わしているからな、知能も高くなっている」

「……さようですか」

オムの前では料理の話は禁止。厨房に立ち入れることは厳禁。この二つが勇輝の脳内に掲げられた。

その時ドアが開く音がし、いち早くオムがそちらへ首を向け遅れて三人もそちらを向く。

「弥生おはよ〜」

「ん……たまごが孵ったのか？」

勇輝の声に顔を向けた弥生は、その肩に止まるオムに目を留めた。

「オムって名前」

たまご料理のオムレツから取ったとは口が裂けても言えない名前である。ばれた日には嘴でつつかれるだろう。

「そうか」

そして突如、三人に近づく弥生の背後から黒いものが飛んできた。

「クルクルツ!？」

短剣でも光の弾でもないそれは、黒い鳥だった。すーっと急降下してオムの隣に舞い降りた鳥は、カラスのように見えるが、尾が長く嘴が細い。そして目が金色だった。

「鎖羅の……」

阿修羅の呟きに弥生は頷いて阿修羅の隣に座った。

「姉様からの手紙だ」

よく見れば鳥の足には紙がくりつけられ、紙の端に阿修羅と書かれている。

阿修羅はその紙を取り、広げて読んだ。運び役を終えた黒い鳥はオムを見てせわしなく首を動かしている。一方のオムもクルクルと何かを話すように鳴いていた。

阿修羅はざっと手紙に目を通すと畳んで上着の内ポケットにしま  
う。

「……元気そうだ」

「でしよっね」

満足そうに頷く阿修羅に呆れ気味で秀斗が適当に相槌をうった。  
そして阿修羅は表情を改め、硬い声で言葉を続ける。

「あの赤子のことだが、本部の許可が下りたらしい。本部に連れて  
くるようにと要請があったそうだ」

「へえ、よかったじゃないですか。親子一緒に黒騎にいられて」

軽口を入れるのを忘れない。

だが阿修羅に一睨みされて秀斗は明後日の方へ視線を飛ばした。

「じゃあ母親はどうなるんですか？」

勇輝が一番気がかりなことを訊いた。引き取り手が決まったこと  
は嬉しいが、母親が不明なのに変わりはない。

「……もう見つからないだろう。あるいは、すでにこの世を去って  
いるかもしれん」

「そんな……」

絶句する勇輝に、秀斗はその頭をぼんぼんと優しく叩いた。

(母さんがいないって、すっごく寂しいのに……)

「父親もわかんねえしな」

「それは阿修羅がなればいいのでは？」

しみったれた声で呟いた秀斗に、当然のごとく弥生が返した。阿修羅の眉がひそめられる。

「遠慮させてもらおう。……そういつわけだから、明日にでも鎖羅が迎えに来るらしい」

阿修羅はばさりと弥生の言葉を斬って話を続ける。

「よかったですね、鎖羅に見捨てられなくて」

思わず竦みそうな眼光を向けられ、直に受けた秀斗よりも隣にいた勇輝のほうが寿命の縮む思いをした。

「俺はお前とは違うからな」

「いやいや俺も見捨てられたりなんてしませんよ。なあ弥生」

秀斗は同意を求めるように弥生に視線を送ったが、弥生はそれに冷たい眼差しで答える。

その目は確かにこう言っていた。もう見限っているのがわからないのか、と。

「もう遅いみただよ」



それを的確に読み取った勇輝が同情の眼差しを秀斗に向ける。

「まじで!?!」

秀斗の素っ頓狂な声の後、二羽の鳥がクルクル、ガーガーと鳴いた。まるで秀斗を笑うかのように……。

日は天高く、暖かい光を庭に降り注いでいる。昼食を境に育児を勇輝にバトンタッチした癒慰は、気分転換に庭を歩いて巡っていた。庭で元気よく顔を太陽に向けている花々は癒慰が通ると嬉しそうに揺れる。癒慰は花と花の間を歩きながら自分の力を分け与えていた。

庭の中でも一番大きな庭は癒慰の部屋の前にあるものだ。そこには特に癒慰が気にいた花が植えてある。

(やっぱりこの庭はいいわね)

ここが癒慰に一番安らぎを与えてくれる。

癒慰はしゃがみこんで好きな花を眺める。

淡いピンク色の花。小ぶりの五つの花びらがとても可愛い花だ。

故郷にも同じ花があり、昔これを摘んで遊んでいた。

楽しかった日々が思い出されてふと表情が和む。優しい記憶のかげら。

「いい顔をするじゃないか」

突如かけられた声に癒慰の肩がびくと跳ねた。驚いて振りかえ  
ると四阿あひまやに半身を起した阿修羅がいた。どうもそこで寝ていたらし  
い。

「……驚かさないでください」

阿修羅は四阿から出て、太陽の眩しさに目を細めた。癒慰は立ち  
あがり彼の動きを目で追う。

阿修羅は四阿の柱に背を預けて癒慰に視線を投げかけた。癒慰の  
表情は知らず知らずのうちに強張っている。

「癒、慰……か」

唐突に彼は癒慰の名を口にした。

「何ですか？」

「癒し慰める者。だが皮肉なものだな」

阿修羅はふつと意味ありげに笑う。

癒慰はむっとしてやや目尻をあげて阿修羅を見返した。

「どつという意味ですか？」

「お前の方が、癒し慰めて欲しそうだ」

遠慮の一欠けらもない言葉が癒慰の心を凍りつかせる。顔から表  
情が抜け落ちた。

「……勝手なことを言わないでください」

感情は一気に負に傾く。

普通に接しようと思っていたことすら忘れていた。どうしようもなく、目の前の闇に対して敵対心が湧くのだ。

「だがお前はずっとそういう顔をしていた」

「そんなことはありません」

「否定は無意味だ」

「何の根拠があるんですか！」

とつとつ癒慰は叫んでいた。感情が昂ぶって茶色の髪が焦げ茶に染まる。

「今もそういう顔をしているからだ」

癒慰はぎゅっと唇を噛みしめた。

(何なのこの人！ 人の心に土足でずかずか入って来て！)

阿修羅は怒りをあらわにする癒慰を見ても涼しい顔をしていた。何を考えているか分からない。以前秀斗が言った言葉の意味を理解する。

「凶星か？」

「黙って！ やっぱり私は闇が嫌い！」

つい反発して心の奥底の声が漏れた。はっと口を押さえたがもう遅い。

だが、それでも阿修羅の表情が変わることはなかった。

「闇が嫌いか……お前の血にも闇が入っているのか？」

嘲笑を浮かべた阿修羅に、癒慰はさらに反発を強めた。

「だからよ！ 私が闇の子だから闇が嫌いなの！」

もう感情は抑えない。仲間には見せることのできない醜い自分を、嫌いな彼になら見せることができた。同じ闇の子の彼らには言えない言葉が心の奥からこみ上げてくる。闇を否定し自らを否定する言葉は、彼らを傷つけてしまう。

悲しみも怒りも全てまとめて阿修羅にぶつけ、髪の色はどんどん黒に近づいていく。

「なぜ闇の子であるだけで闇を嫌う」

「私は闇の子に生まれたせいで人生を狂わされた。大切なものを全て奪われた……闇のせいで！」

何事もなかった日常が、たった一つの事実によってひっくり返った。癒慰が閉じ込められたのも、母が狂ったのも、家族が死んだのも、全ては……。

そこに行きついた瞬間、癒慰の心は冷えた。いつもたどり着く答えは同じ。

「私のせいで、みんな死んだのよ……」

独りごとに近い言葉。阿修羅に聞かせるつもりなどなく、ただ力なく呟いた。

「お前がその手で殺したのか？」

聞き様によっては傷口を抉るような残酷な問い。癒慰はきっと阿修羅を睨んだ。

「違うわ……でも結局は同じことよ」

阿修羅は口角をあげ、意地の悪い笑みを浮かべる。

「お前、本当にそう思っているのか？」

喧嘩を売っているようなその言い方に、癒慰はさらに目つきを鋭くする。

「……闇の子は災いを呼ぶのよ」

何度も父親がそう言った。母親もそれを、そんな闇の子を産んだことを嘆いた。

「本当に闇の子にそんな力があると？ 何もせずに人が殺せるものか」

阿修羅は鼻で笑う。

「考えを改めろ、土の闇の子」

「なんで貴方にそんなこと言われなといけないの？」

「不愉快だからだ。闇の子だというだけで闇を嫌われてはいい迷惑だ。俺たちは何もしていないというのに」

語気は荒くないが互いに言葉に棘を含んでいる。

癒慰の目にじわりと涙が浮かんだ。だが彼の前では泣くまいと必死に我慢する。

「……しょうがないじゃない」

「何？」

「しょうがないじゃない。誰かのせいにしないと生きていけなかったんだから！」

この不幸を何かのせいにしなければ、絶望から這いあがれなかった。闇を恨むことでどうしようもない悲しみと絶望を和らげることができたのだ。

闇を否定し、自分を否定した。そして自分の土の部分だけを見ようとした。だがそれは父親や母親と同じ……。

「弱いな。そして未熟だ。闇を悪にしてお前は満足か？」

「……そんなことわかってるわよ。自分勝手な話だっただけわかってるわ！ 私は弱い。私は弱くて、どうしようもない闇の子の私が一番嫌いなよ！」

感情の爆発。それと同時に体の奥底から闇の血が騒ぎ始め髪の色はほぼ黒に変わる。

(しまった！ 暴走しちゃう！)

自分で抑え込めるぎりぎりの状態。今癒慰が闇に吞まれば、この庭園はもちろん如月の屋敷も無事ではいられないだろう。

阿修羅はおもむろに柱から身を離すと癒慰へと早足で歩み寄りその頭を掴んだ。

「何を……！」

外に出ようと暴れる闇の力に癒慰は苦しそうに顔を歪める。

「落ち着け」

阿修羅は癒慰に自分の闇を送り込んだ。秀斗にも使用した闇化を鎮める方法。

癒慰の身体に阿修羅の闇の力が流れ込んだとたん、暴れまわっていた闇の力は潮が引くように身体の奥底へと沈んでいった。

癒慰の目が驚きに見開かれる。

「俺の闇は怖いか？」

そう問われて、癒慰はゆっくりと首を横に振った。残ったのは包まれるような暖かい感覚。癒慰はしばらくその暖かさに身を委ねていた。

「泣いて……いるのか」

困惑したようなその声に、癒慰は初めて自分が涙を流していることに気がつく。

「な、泣いてなんかないわ！」

癒慰は乱暴に目をこすり阿修羅の手を払いのける。

「貴方に心配される義理なんかない！」

癒慰はそう言い捨てるとくるりと阿修羅に背を向けて逃走した。

（もう意味がわかんない！）

何よりも戸惑ったのは彼の闇を優しい心地の良いものだと思った自分自身。癒慰はぎりつと奥歯を噛んだ……。

阿修羅は一息つくと、屋敷の中に戻るために踵を返した。一人しかいない庭園は先程よりもよけい静かに思える。ゆったりと景色を見ながら前に進む。

少し小路を行くとすぐに正面玄関が見え、人影を見つけた。

「阿修羅さん……」

秀斗は玄関の前で彼を待っていた。彼と視線が合うと、深々と頭を下げる。

「無理な頼みを聞いてくれてありがとうございます」

秀斗は阿修羅に癒慰の体の奥底で活発になりかけている闇の血を鎮めて欲しいと頼んだのだ。

「気にするな。うまい茶をもらった礼だ」



阿修羅は事もなげにそう返すと、秀斗の前で立ち止まる。

「それに闇の子がその血のせいで苦しんでいるのを見逃すわけには  
いかん。俺は闇を愛し、闇の血を愛しているからな」

秀斗は顔を上げ破顔する。この阿修羅の絶対的な闇への愛と誇りがあつたからこそ、秀斗は自身の闇を受け入れることができた。それは弥生も同じだ。

「知ってます。だからこそ俺はこの血を誇りに思えるんです」

無邪気な笑顔で言った秀斗の言葉を聞いて、阿修羅は彼の頭をわしゃわしゃと撫でた。

「まだ餓鬼のくせに……生意気だぞ」

言葉とは裏腹にその表情は嬉しそうで、それはまるで子どもを褒める親のような表情だった……。

## 第4章の28 慰めは花咲く庭で（後書き）

ぐはっ……。長い。

やっぱりオムさんかつたらよかった……と後悔しました。これでもカットしたんですけどね、主に黒騎組の戯れを。だがオムがないと勇輝の出番が……。

### 神名の解説

癒慰は彼らの中で純粹に闇の子であること自体に苦しんだキャラです。他の方は闇の子から派生した問題に苦しみますし、スルーしてる人もいます。彼ら一人ひとりの苦しみについてはまたどこかでまとめて解説を……。いらんか。

うう、一応、いちおう次がエピソードです。

4章が終わりましたら、見直し期間を設けようと思います。幕間にキャラ図鑑やプチ設定を公開する予定です。

では次回「エピソード」で。

## 第4章 エピローグ(表)

阿修羅が来て四日目の昼、ホールでは優雅なティータイムが催されていた。各々昼食を食べて食休み中だ。

足を組んで大人な雰囲気醸しながら飲むのは阿修羅。その右手に秀斗がおり、左手には幸にミルクをあげている勇輝がいる。そして残る椅子、阿修羅の目の前にはメイド服の癒慰がちょこんと座っていた。

「お味はいかがですか？」

「うまい」

「やっぱり癒慰のお茶はうめえな」

「俺にとっては酒だけだね」

魔術師のカップにはブランデー、勇輝の湯のみにはほうじ茶が入っている。

「もう一杯くれ。こんどはラム酒で」

阿修羅はすいっとカップを癒慰の方へと滑らせた。悠然と待つその姿は主人のそれだ。

「阿修羅さん……何様ですか」

そう言いつつ秀斗も癒慰の前にカップを置いた。

「彼女が好きでメイドをやっているのだからいいだろ」

「もっと丁寧な頼み方がありますって」

「ほう……丁寧さをお前に言われるとは思わなかったな」

口元に笑みは浮かんでいるが目が笑っていない。

「いや、何でもないです」

身の危険を感じた秀斗はいち早く会話から離脱する。そして新たに出されたラム酒を何事もなかった顔で口に運んだ。

阿修羅も香りを味わってから口に含む。

「うまい」

「うめえ」

二人の声が重なった。称賛された癒慰は嬉しそうに微笑んでいる。勇輝も幸のミルクを飲み終わらせると、幸を片手で抱いてほうじ茶を飲んだ。

「落ち着く」

勇輝がほっと一息をついた時、コツコツと何かを叩いた音が聞こえた。

またコツコツと音が聞こえ、その方向を見ると窓の外に動くものがある。

「あ、オム」

勇輝は立ち上がり、癒慰に幸を預けると窓へと歩み寄った。オムは近づく勇輝に気づくと、さっと窓枠から飛び立ち空中で待機する。勇輝が窓を開けると同時にオムはホールへと入りまっすぐ三人がいるテーブルへと飛んでいった。

「ほんと頭いいよな」

感心しつつ勇輝が席に戻る。

テーブルの上ではちょこちょこオムが跳びはね、嘴に加えていたものを置いた。

淡いピンク色の花。それが癒慰の前にある。

「この花……」

「昨日お前が見ていた花だ。好きなのだろう？」

その言葉に答えたのは阿修羅で、オムは役目を果たすと彼の肩に飛び乗った。

「昨日？」

話が見えない勇輝が小首を傾げて癒慰へと視線を向ける。

「うん、昨日庭園で阿修羅さんに会ったの」

言うと同時に昨日の複雑な感情が蘇って来た。なんとなくほろ苦い気分になって癒慰は内心苦笑する。

「それは茶の礼だ」

阿修羅はそう言ってオムの頭を数度指で撫で、オムの背後に闇を広げた。オムはクルクルと鳴くとその中に飛び込む。オムはすっかり阿修羅に懐いていた

「……ありがとうございます」

癒慰はガラス細工を持つようにそつとその花を持ち、柔らかい笑みを見せた。

（人からもらうと、また違って見えるのね）

どこかいつもより綺麗に見える花を癒慰はそつと自分の手元に置いた。

「そういえばなぜ昨日はあの庭園にいたのですか？」

癒慰はふと思い出したようにその疑問を口にした。  
腹の中に一計があった秀斗は内心ひやりとする。

「散歩だ。庭を見るのは好きだからな」

「へえ、なんか意外ですね」

勇輝の阿修羅像は淡々と仕事をこなす殺し屋であり、もの拾いのプロである。庭で優雅に花に囲まれている絵は思い浮かばない。

「だよな。けど氷騎の庭は阿修羅さんが手入れしてんだぜ？」

勇輝と癒慰は同時にえつと声をあげてまじまじと阿修羅を見てしまった。失礼だが阿修羅が庭を手入れする姿が想像できない。剣を持てばさぞ映えるだろう男がスコップを持つとなんと滑稽に見えることか。

勇輝は自分の想像に危うく吹き出しそうになり、こみ上げてくる笑いかみ殺していた。

「でも誰も阿修羅さんが手入れをしている姿を見たことがねえんだ」  
なのに庭は雑草一つなく、季節ごとに美しい花を咲かせていた。

「へへ、どうやってしてるんですか？」

好奇心に勝てずに勇輝は目を輝かせてそう尋ねる。

「どうやってって、普通に……」

（やっぱりスコップで？）

「闇を操ってやっているが？」

それと同時に阿修羅の足元から闇が立ち上り、その先は手の形と なってひらひらと手を振った。

（これがスコップを持つんだ……）

スコップや鎌を掴んで庭の手入れをする闇の手たちと、何もせず座っている阿修羅という図が容易に想像できた。なかなか怖い絵ではある……。

「便利そうですね」

操れば何でもできるのだから、本人がものぐさになるのも頷ける。阿修羅は闇を霧散させ、残りのラム酒を飲みほした。

「闇の魔術師の特性だな」

阿修羅は癒慰にカップを滑らせ、視線でもう一杯と頼む。

「そういえば、俺癒慰が庭の手入れしてるとこ見たことないや」

「まあ……私も自分の手でやってるんじゃないかと、力を地面に流すことで花に元気をあげたり雑草を枯らしたりしてるからね」

「ええ……それあり？」

阿修羅といい癒慰といい、本職の庭師が聞けば呆れを超えて怒りを覚えるような手入れ方法である。汗の結晶の庭園美はどこに行ったのか……。

「別にいいじゃ……あ」

「魔術師だからな……うっ」

二人の声は重なり、同時に消えた。

「阿修羅……なかなか帰ってこぬと思えばこんなところでメイドと茶を飲んでいるとは……呑気なものだな」

突如空間を裂いて現れた鎖羅にいち早く気づいたのは癒慰で、背



後に現れた覇動に阿修羅も短く呻く。

「あ、鎖羅……」

「鎖羅さん……」

二人も気づいたが、彼女の表情に言葉が続かない。鎖羅は笑っていた。それは恐ろしいほど綺麗な笑顔で……。

阿修羅は急いで立ち上がるつもりだったがその前に鎖羅の腕が首に絡んで来た。後ろから首に絡みつかれ立ちあがれない。

まるでハートが無数乱舞するカップル図だ。鎖羅の腕が阿修羅の首を締めあげ、阿修羅が顔を青くしてさえいなければ……。

「そのメイド。この馬鹿が何か迷惑をかけなかったか？」

鎖羅は数分締め上げた後阿修羅を解放し、癒慰へと視線をやった。

「あ、いえ何も」

「ならばよい」

鎖羅が一つ頷くと同時にドアが開き、弥生が入って来た。

「姉様！」

ホールに入るなり弥生は鎖羅の下に早足で近づき、鎖羅は弥生の頭を撫でる。

「弥生、阿修羅を預かってくれてありがとう。迷惑をかけただろう」

「いや、全く問題はない」

阿修羅はこの隙にホールから出たかったが、鎖羅に片手を肩に置かれ動くに動けない。

「今日はいいつを預かってくれた礼として二三、酒を持って来た。一緒に飲まんか？」

鎖羅はそう言う指先で空を撫で、亀裂を生みだすとそこから瓶を一つ取り出した。

「アールグレイだ。なかなか美味だぞ？」

「それはいいな。秀、お前のコレクションからいいやつをだしてくれ。癒慰もいい茶葉を頼む」

弥生は嬉しそうに二人に指示を出す。二人はこくりと頷いた。

「宴会だ〜」

酒が飲めるとわかって勇輝のテンションもあがる。

「錬魔に言っているいいコーヒード豆だしてもらおうぜ」

秀斗もうきうきと楽しそうだ。

「あ、秀斗は飲んじゃだめじゃん」

ふと勇輝は秀斗の酒乱を思い出した。

「誰も飲ませたりはしない」

阿修羅が苦々しげにそう呟いた。どうやら彼も秀斗の酒乱っぷりを目の当たりにしたことがあるらしい。

「あ、てことは夕食は豪華にしないとね。阿修羅さんを送る意味もこめて」

「私も手伝うわ」

勇輝と癒慰は視線をかわして頷き合った。おいしいお酒にはおいしい料理を。二人の料理人に火がついた。

「そいつは楽しみだ。我らも何か手伝おう」

「そつだな俺も……」

「鎖羅と阿修羅さんはゲストなんで休んでてください」

鎖羅と阿修羅に料理をさせると味はよいが見た目は……の料理になることを知っている秀斗がさりと断った。

「……しかたない、弥生と剣で遊ぶか」

「その後、この間見つけた剣を見てくれないか？」

「コレクションが増えたのか」

剣の話を嬉々としてする義姉妹の隣で、阿修羅はあくびを一つした。

「俺は庭で寝てる」

皆それぞれ好きなことを。それぞれ午後の活動を始めるのだった。

夜。一つの部屋に机とソファが運ばれ、勇輝と癒慰と零華が腕によりをかけた料理が並べられた。鍊魔はよい豆をブレンドし、数種類のコーヒーを抽出してくれた。癒慰も世界各国のお茶を淹れ、秀斗も酒蔵から年代物のワインを出した。

幸は部屋の真中にベッドごと運ばれていた。天井にあるシャンデリアが気になるのか何度も手を伸ばしている。

立食形式のパーティーとなり、皆それぞれ好きな酒をグラスに注ぐ。飲み物は一つの長いテーブルに置かれていた。

「俺シャンパンがいいな」

と勇輝はコルクを抜き、

「俺泡盛が飲みてえ」

と酒が飲めない秀斗は酒瓶を粹におちよこに注いだ。

「キリマンジャロのブラックがうまそうだな」

「我も同じのを頼む。阿修羅、飲み比べをするか？」

闇の二人はグラスにコーヒーを並々注いでいる。

「私はローズティーかな、零華ちゃんは？」

「ゆず茶をください」

「はい」

癒慰と零華もティーカップを持ち、鍊魔もコーヒー片手に準備オツケーだ。

秀斗は全員を見まわし飲みものが回ったことを確認すると、こぼんとせきをした。

「では、みんなの健康と幸の未来を祝して、乾杯！」

秀斗が乾杯の音頭をとり、それぞれ好きに食事をとって座る。

「幸、黒騎で元気にやれよ」

勇輝はシャンパン片手に幸にからむ。

「きれいな女の子なるといいですね」

零華もゆず茶を飲みながら名残惜しそうに幸の頬を撫でた。

「……そっか、こいつも結婚する日が来るのかあ」

「勇輝君、ちょっと早すぎます……」

幸の話に花が咲くところもあれば、早々に飲み比べが始まっているところもあった。

「阿修羅、二杯目は緑茶だ」

と鎖羅が二人の前に湯呑を置いた。自身は料理と一緒にコーヒを色々飲んでいる。

「負けるなよ錬魔」

鎖羅の隣に座る弥生も料理をつまみながら片っ端から飲んでいった。義姉妹のピッチは速い。

阿修羅と鎖羅の対決のはずが、いつの間にか阿修羅と錬魔の飲み比べになっていた。

両者同時に緑茶を飲み干す。二人とも一切顔色が変わっておらず、まだまだ余裕そうだ。

「ならば次は……ローズティーにするか」

鎖羅が次の品を選び、弥生は二人の対決を楽しそうに見ていた。

秀斗は料理を堪能し、勇輝に酒を飲ませてからんだ。

そして夜も更けていき、料理もあとわずかになったころ。

「えっと……二十九杯目は……カフェオレだ」

阿修羅と錬魔の決着はまだつかず、二人とも頬がほんのり赤いがまだ音をあげていない。

進行役の鎖羅の方が酔っており、ふらふらしていて手元がおぼつかなかった。

「姉様……次は抹茶がいい。くすくす、そう思わないか？」

弥生もそうとう酔いが回っているのか始終何だか楽しそうだ。

勇輝と秀斗は観客となつて応援している。

「錬魔く、がんばれく。いけいけく!!」

秀斗は素面だが勇輝はハイテンションで声援を飛ばしている。そこに二人が飲みほしてグラスを置く音が混じる。

そんな喧騒から少し離れたところで女の子二人が話をしていた。癒慰は幸を抱きながら二人の飲み比べを見ている。

「阿修羅さんもお酒が強いのね……あの錬魔君と張れるなんて」

呆れ顔で呟き、癒慰の正面に座る零華は同感と頷く。

「そろそろ引き上げますか?」

「なんで? 飲み比べの勝敗見ていかないの?」

何気なく返したその言葉に、零華は目を瞬かせた。しばし間があったうち、零華が微笑を浮かべて口を開く。

「あ、いえ……癒慰ちゃんがここにいるのが辛くないならいいのです」

「あ……そっか、ごめんね気を使わせて……」

零華は闇が苦手な癒慰を心配してくれたのだ。

「意外と大丈夫なんだよね。あの飲み比べも純粹に面白いし」

なんでだろうと癒慰は照れたように笑った。

癒慰は二人から視線を外し、しばらく宙を見つめていた。そして零華へと視線を移し、はにかむ。

「私、ずっと自分は不幸だと思ってたの。そしてそれを闇の子のせいにしてた……」

お酒が入っているせいもあって、思っていることが素直に口から出て来た。零華はただ黙って頷き、次の言葉を待つ。

「だから闇の子である自分が嫌いだったし、闇も嫌いだった」

それは零華も抱いたことのある感情。いや、闇の子である彼ら全員が一度は自分を否定した。

「だから、闇の血を受け入れている弥生ちゃんや秀斗君が少し恨めしかった時もある」

それは二人がこの屋敷に来た当初。闇の魔術師に裏切られたと聞いて、闇への嫌悪を強くした。だが弥生は闇を恨みはせず、秀斗は己の闇を受け入れていた。疎外感を感じたこともあった。

「でも阿修羅さんと鎖羅さんに会って、話をしても……怖くないの」

最初に二人に会った時に感じた恐怖は、彼らの闇自体ではなく、自身の土の覇動が闇の覇動に押されたことに対する恐怖。

「ええ。優しさをもった方たちですからね」

「うん、ずっと思いを違えてた。闇は悪くて、冷酷で要らないものだった。だから、その血を持つ自分から逃げてた」



零華はグラスに入ったワインを飲み、ぼつぼつと語る癒慰をじつと見ている。

「でも、そろそろこの血と向き合わないといけないよね……」

癒慰は一度幸に目を落とし、その寝顔を見て淡く笑うと強い眼差しで零華を見た。

「私、闇の血を、闇の子である自分を誇れるような私になりたい」

実際に闇の血を誇りに思う弥生を見、そして闇に触れて得た思い。

「なれますよ。苦しくなったら何時でも言いなさい。私たちがいますから」

零華はそう微笑み、阿修羅へと視線を向けた。

（癒慰ちゃんが意識を変えた……あの人が……）

阿修羅と錬魔はまだ飲み比べを続けており、もう三十四杯目となっている。

（いい変化と取るべきですね）

仲間として少し複雑な気分になる。できるなら、自分たちで癒慰を楽にしてやりたかった。痛みを伴うと知っていても。

「零華ちゃん」

「なんですか？」

呼ばれて零華は視線を癒慰に戻した。癒慰は新しく二つのグラスにコーヒーを入れて戻って来たところだ。

グラスの一つを零華に渡す。

「今日はたくさん飲も！」

そしてとびつきりの笑顔で笑った。

「そうですね」

二人はグラスを打ち鳴らし、喉を降下させた。かなり濃かったらしく胃がかつと熱くなる。

零華は二人の飲み比べをみながら飲んでいる癒慰の横顔を見てくすりと笑った。

（不思議なものです。弥生ちゃんだけでなく、癒慰ちゃんにも変化が訪れるなんて……）

零華はふと視線をグラスの中に落としました。

（変化……ですか）

グラスの中に自分が映った気がして、零華はすぐにそれを飲みほした。

「すげー、四十杯目！ いけいけコーコー！」

勇輝の大声が部屋に響く。

今宵の宴はまだまだ終わりそうになかった……。

#### 第4章 エピソード(表)(後書き)

申し訳ありません。エピソード(裏)が間に合いませんでした。

## 第4章 エピローグ（裏）

つかつかと阿修羅は幸を片手に抱いて廊下を歩いていった。大理石で作られた廊下を、極力足音をたてないように歩く。廊下に行く人はまばらで彼に気づいたものは立ち止まって礼をした。

（……少し頭が痛いな）

軽い二日酔いになったようで、少し飲みすぎたと反省する。昨晩から明け方にかけて行われた阿修羅対鍊魔の飲み比べは結局勝敗がつかず、両者とも動作に異常をきたし始めたので秀斗が強制終了したのだ。

二人がソファに倒れこんだ時には、秀斗以外全員が死んだように寝ていた。そして数時間睡眠をとり日が高く昇ってから鎖羅と如月を後にしたのだ。

阿修羅はちらりと幸に目を落とした。幸は大人しく阿修羅の腕に収まり、阿修羅と目が合うと嬉しそうに手を伸ばす。

阿修羅はすつと口角をあげると視線を前に戻した。もう目的の扉は見えている。

この屋敷の中で唯一門番がいる部屋。黒騎の長がいる部屋だ。黒騎内ではボス、一部では陛下と呼ばれる男がそこにいる。

阿修羅はすつと息を吸い、心を鎮めた。

阿修羅がアフランに切り替わる。

「アフラン様、どうぞ中へ」

彼に気づいた門番が中に取り次ぎ、阿修羅を通した。暗い部屋が扉の奥に広がっている。

縦に長い部屋の奥、階段を少し昇ったところに王はいる。その傍には仮面の従者も控えていた。

アフランは玉座に座る王を一瞥し、燭台の明りを頼りに歩みを進めると階段の手前で跪く。

「陛下、望みのものを持参いたしました」

「来い」

王は表情を変えずに抑揚のない声でそう命じた。

アフランは黙って立ち上がり玉座へと続く階段を上る。そして階段を登りきったところでもう一度跪いた。

王は横に控える男を一瞥すると、男は音もなく闇に紛れて消えていく。

彼の存在が消えたことを確認すると、王は闇の触手を伸ばして幸をくるみ取った。

アフランの腕から温かみが消え、幸はきよろきよると頭を動かして阿修羅を探す。

「……すばらしい」

王は口角をあげ、幸を自身の目の前で浮遊させる。幸は王が視界に入った瞬間、火がついたように泣き始めた。

王は不愉快そうに眉をひそめ、アフランも泣き声が頭に響いて煩わしそうな表情を浮かべる。

「器風情が……失せろ」

王はそう言い捨てると、硬質化させた闇で幸を貫いた。ぴたりと泣き声が止み、次の瞬間には赤子は弾けてその姿を消す。

残ったのは丸く小さな黒い塊。流動的でありながら霧でもなく、闇でもないもつと複雑にからみあった何か。それに闇の触手が巻き付き、隙間なく埋め尽くす。

「くくく……やはりあの戦場は他のどこよりも憎しみや恨みを吸っている。これほど上質な負のエネルギーは他にない」

「噂以上の惨状でした。空間を境にしてあの大地には草一つ生えず、俺も闇を纏っていないければ三十分で死に至るでしょう」

王は目を閉じて戦場跡にしみ込んだ憎しみを味わいつくすと自身の闇を収縮させた。

自分の力が回復したのが分かる。

「それが奴らと同じ空間にあるとはな……天つ人と接触をしたのか？」

王はひじ掛けに肘をかけて頬杖をついた。その眼は愉快気に細められている。

「はい。なかなか愉快的な奴らです」

「ほう……いずれ奴らは狩る。それまで何度か接触を図れ……くれぐれも感づかれるな」

「御意」

アフランは頭を垂れて慇懃に返答する。

「それと、レガーシアが完成した」

低くどこか楽しげな声で告げられた内容にアフランは弾かれたように頭をあげて王の顔を見た。蝋燭の火に照らされた顔は愉悦の表情を浮かべている。

「レガーシアが……」

四人いる幹部のうち二番目に記された名前。何年か前に幹部入りしてから、姿を見せたことは一度もなかった。

「陽動はレガーシアに任せる。お前は今まで通り憎しみを集める。器は適当に影に持たせる」

「御意」

アフランは再度深く礼をすると立ち上がり、踵を返して階段を下りていく。

「阿修羅」

アフランが階段を下りきった時、そう王が声をかけた。アフランはぴたりと止まり、阿修羅として振りかえった。

「何ですか？ ボス」

「今度のレガーシアはお前の好みの女だ。そのうち会えるだろう……楽しみにしておけ」

王は含みのある笑みを浮かべて顎をしゃくって扉を指す。



「わかりました。覚えておきます」

阿修羅は王に向き直って礼をすると、足早に部屋から出て行った。外の光に触れ、目を瞬かせながら歩きだす。

（なぜボスは俺の名を呼んだんだ……？）

今まで本名を呼ばれたことは一度もなかった。彼がアフランとして幹部に入ってから一度も……。

「レガーシア……」

阿修羅は口の中でその名を反復し、廊下を歩いて行った。鎖羅が待つ氷騎へと続く廊下を……。

## 第4章 エピローグ（裏）（後書き）

うん、短い。こっちサイドは無駄話をしないね。

さて、これにて四章は終了いたしました。なんだかんだで長かったですね。

次章は……それなりに長そうです。四章に入りきらなかったものが割り込んだり、ブラック要素が増えたりと、作者としても楽しみな章です。

何よりも、五章はこの話のタイトルに迫る章ですから。

そしていつも読んでくださっている方がた、ありがとうございます！ 作者は見直し期間に入ります。（ひさしぶりに一章を読んだらひどかった、が、手のつけようがない）そして幕間に設定を公開しようと思います。（ネタばれはしません、できません）

では、五章でまたお会いいたしましょう！

## キャラ図鑑 1

神の名の下に キャラ図鑑

〈メインキャラクター〉

・かすがゆうせい春日勇輝

人間、十七歳。身長が153と平均男子よりも頭一つ分低いのがコンプレックス。髪色は一年生のころは金だったが現在は黒。さらに童顔で女顔なので女の子に間違えられることもある。実際女装経験あり。

身長や顔のことをからかった相手を片端から殴り飛ばし、不良の道をかけあがった。現在高校のトップ。

武器 素手と麻醉銃。

所属 龍牙隊 死堅牢しけんろう 如月

マイブームがころころ変わり、どれもかなり深い知識をもつがあまり役に立たない。最近はスパイ映画にハマっていたが現在はゲームと漫画に力をいれている。

度胸があり、好奇心に従って行動するのでたまに自爆する。コミユニケーション能力は非常に高く、厄介事と人をひきつける性質ももつ。自分の顔はあまり好きではないが必要とあれば最大限に利用する。

一時期母親がいなかったので家事全般ができる。

甘党、ただしカレーは辛口（たまごを入れるのは許す）

言ってみたいセリフ

「お前、チビだな」

苦しみの形 運命・別れ

・城崎弥生きのなまきやよい 苗字は偽名

魔術師、八十六歳（人間年齢十七）。身長は160（ヒールにより163）で銀髪。灰色の瞳を持つ。

ルナクレア王国出身で、月の属性。月の影響を受け、力が増減する。満月の時に魔力が頂点に達し、新月に近づくにつれ魔力は弱まり身体能力が上昇する。

魔術よりも剣術を得意とし、一時鎖羅に剣術を教わっていたが現在は我流。

魔術の研究が得意で独自に技を造り出す。

武器 月契げっけい（剣で人語を話すが寡黙）

所属 元黒騎 現在 如月リイダ

彩の魂に封印されていたが、彩消失とともに解放された。人間嫌いだったが勇輝と関わるなかでその存在を認めるようになった。

感情が薄く、表情も乏しい。冷笑を浮かべることが多かったが最近笑顔を見せるようになった。少しツンデレ要素を持つ。

剣の蒐集が趣味。

闇の子として生まれ、両親とは不和。幼いころから家出をし、山賊と闘うことで剣の腕をあげた。

苦しみの形 家族・罪

言ってみたいセリフ

「……特にない」

・大宮秀斗おおみやしゅうと

魔術師、八十六歳。身長は172で金髪、黒のヘアバンドを額にしている。瞳の色は灰色。

ステラグニール王国出身で星に属する。魔術は攻撃魔術よりも空間魔術や防御、結界魔術を得意とする。剣は使えない。

武器 星鎧せいがい（額に輪として現れる。能力は一定空間の支配と守護）あまり話さない。弥生に追われる度に出されて呆れ気味。

所属 元黒騎 現在如月（副リーダー）

性格は底抜けに明るい。弥生を好きだと公言し弥生の部屋に遊びに入っては命の危険にさらされている。ややせっかちで早とちりしすることも多い。おもしろいことは何でもやる。鷺と犬猿の仲。酒乱。酒を飲むと人を連れ去って抱き枕にする。

人間界の酒を集めるのが趣味。

闇の子であり、母親は病気がちだった。騎獣に乗って草原を駆けまわり、家出もよくした。

苦しみの形 誓い・自分の弱さ

言ってみたいセリフ

「弥生……そんな目で俺を見るなって。どうして欲しいんだ？ほら、言ってみるよ」

その後秀斗がどうなったかは皆さまのお察しの通りです。

### ・河野錬魔こうのれんま

魔術師、八十六歳。身長は185と如月で一番長身。髪は赤く、後ろ髪の一部だけ伸ばして金輪で束ねている。瞳の色は灰色。

デオファイルメイト王国出身で火に属する。魔術は必要最低限しか使わない。剣も使えるが使わない。

武器 火煉かれん（瞳が赤く縁取られる。人物の状態が分かり、怪我を治せる）意思を持っている。

所属 如月（専属医師）

無口だが情にはあつい。職業は医者であり、知識も豊富。緊急以外は治癒能力を使わない。如月一番の苦労人。

勇輝の女装がお気に入り。コーヒー（魔術師にとっては酒）が大好きで常に飲んでいる。つまり酒豪。

趣味は酒を飲むことと実験。

闇の子として生まれたが比較的理解ある家庭に育った。放浪経験あり。

苦しみの形 命・自分の能力

言ってみたいセリフ

「……酔ったな」

・清水零華  
しみずれいか

魔術師、八十六歳。身長は162（ヒールにより167）で藍色の長髪。瞳の色は灰色。

アクアディナ王国出身で水に属する。魔術は全般でき、魔術の腕は如月一。

武器 不明

所属 元龍牙隊 夜一星<sup>よいつせい</sup> 海龍 現 如月（実質リーダー）

品行方正、才色兼備。いつも微笑を浮かべている。常に穏やかだが怒ると怖い。最近毒舌になってきている。

前に夜一星にいたことから美月に好かれており、迷惑に思っている。

趣味は読書に癒慰とのお茶。事務仕事が得意。

闇の子として生まれ、家族とは隔離されて育った。双子の妹に百

華がいるが不和。

苦しみの形 信頼・闇の子

言ってみたいセリフ

「何もすることがないわ」

・堺癒慰さかいゆい

魔術師、八十六歳。身長は155（ヒールにより158）で茶髪。髪はかるくウェーブがかかり肩のあたりで切っている。

瞳の色は灰色。

ソートティラディア王国出身で、土に属する。使える魔術は広域にわたるものが多い（地割れとか）のであまり使わない。基本情報収集や潜入を担当。

武器 土炯どきょう（鏡で知っている人の居場所を知ることができる。便利）よくしゃべる。

所属 如月（癒し役？）

いつも明るく元気。おもいついたら即行動。感情が豊かで表情がころころ変わる。

可愛いものが大好きで、お部屋がふりふり状態。

趣味はコスプレ。勇輝を着せかえさせるのも大好きでつねにチャンスを伺っている。お茶と料理も好きで、暇があればお茶を飲んでいる。

荒れ果てていた如月の庭を土の力を使って見事な庭園に育て上げた。

闇の子として生まれ、母親とともに牢に閉じ込められて育つ。母親は癒慰を疎み、そのせいで癒慰は闇の子を受け入れられなかった。

苦しみの形 闇の子・恋愛

言ってみたいセリフ

「あなたのことが、好き」

（主人公をとりまく人々）

・桜田彩  
なぐらだあせ

人間、一七歳。身長は166とやや高めで常に勇輝を見下ろす。

黒髪の長髪。可愛い女の子。

勇輝との関係 彼女

勇輝とは一年のころからつきあっていた。勇輝の髪を金髪から黒髪に変えさせた。

一度死に、弥生を封じる器として十年の生を与えられる。勇輝とのデート中に消え、しばらく弥生の魂とつながっていたがやがて成仏した。勇輝の心配をし、弥生に守ってもらえるよう頼んだ。

甘党。カレーも甘口。

武器 口、舌戦が得意。

性格は明るく、物怖じしない。困ると髪を触るくせがあった。

言ってみたいセリフ

「勇輝、お手」 実際言ったらキレられる。

・森本歩  
もりもとあゆむ

人間、十七歳

身長は169と普通な感じ。勇輝をみるとつい頭をなでたくなる



がアップパーが飛んでくるので我慢。髪は黒だが右に白いメッシュを  
いれている。

勇輝との関係 親友

勇輝とは中学の頃に出会いともに不良の道を進んで来た。さぼり  
の達人と自称する。

武器 情報 相手の口をすべらせる話術

所属 龍牙隊 黎明れいめい隼はやぶさ

ノリはいいが、慎重派なので危険と判断するとむやみに近づかない。  
勇輝と不良人生歩みつつも龍牙隊のスパイとしてバイトをしてい  
た高校生。勇輝にばれてからは堂々と学校を休みバイトに専念して  
いる。

言ってみたいセリフ

「お前の過去は全て手に入れた」

・春日晓美かすがあけみ

人間、年齢……教えてくれませんでした。

身長は165。勇輝を楽々抱きしめられる。髪色は黒。

勇輝との関係 母親

可愛い顔立ちをしており、勇輝は母親似。

武器 行動力 人脈

所属 龍牙隊 幹部

快活な人で、幹部の中でも行動派。ここ10年は海外で内戦終結  
や国家内通など幅広く活躍。弥生の如月復帰により帰国した。

国内の仕事は少ないので半ば専業主婦となっている。

言いたいセリフ

「修二さん……別れましょ」 二三度言いたくなつた経験あり

・春日修二  
かすがしゅうじ

人間、身長は176。なぜか勇輝には受け継がれなかった。

勇輝との関係 父親

武器 なし

所属 なし

いつも楽しげで家族をもりあげる。勇輝の不良デビューを応援するほど軽いノリ。暁美の海外出張の折、残された勇輝を心配して離婚したと嘘をついた。

家事能力は一切なく、勇輝が三日も家を空けるとごみ屋敷となる。それゆえに勇輝は家事能力が高くなった。

〈龍牙隊の人々〉

・龍牙

龍牙隊の創始者。かれこれ100年以上生きている。人間であるのかは不明。容姿はほとんど変わっていない。美月の暴走を止められる貴重な人。

武器 戦闘はしない。しいて言えば威圧感

・美月（五代目）

夜一星 よいつせい 誓祈のリーダー。  
せいき

種族は秘密、身長は170。青色の髪に青色の瞳を持つ優男。

落とした女は数知れず、刺されそうになった数も数知れず。全てを笑顔で受け流す。

能力の多くは不明。他人の過去が視えるらしい。  
武器 顔

自分に対する自信はエベレスト並み。

見た目は二十代だがとつくに百歳を超える。年を取らないらしく、一定の期間が過ぎれば容姿を変えて夜一星を引き継いでいる。本当の性別は女。

零華と錬魔にばれた。

四代目の時に零華が所属しており、何かと気にかけてからむ。五代目になってから冷たくなったとふてくされ気味。

・綾覇

鎌堂二 朧月夜のリーダー。

髪の色は赤く、短髪。身長は168で、丰满な胸が自慢の龍牙隊一の剣の使い手。

年は二十代後半。

人間だが能力者であり、身体強化と小技で人に関わる物呼び出せる。

武器 斬れば何でも使えるが、やはり剣。

戦闘意欲が旺盛で、負けず嫌い。

弥生と昔手合わせをしたことがあり、弥生は負けている。武器の蒐集が趣味。

・鷺

黎明 隼

身長は180と長身。灰色の髪と切れ長の目が印象的な男。年は二十八ぐらい。

能力者で、見た人間ならだれでも化けられる。骨格から変わるの  
でほとんどばれない。

牙軍では一番まともな人間と零華に評される。

武器 能力

子ども時代に黒騎に潜入しており、そこで弥生と秀斗に出会った。

その時のいざこざもあって秀斗とは犬猿の仲。

弥生に関心を持ち、彼女の情報を集めることに力をそそぐ。

世界中を飛び回っているので多忙。

・匠

長身の変態技術者。コスプレを愛し、可愛い子に着せたがる。

裏技術研究所の所長をしており、様々な武器や道具を発明している。

如月が使用する麻醉銃もメイドイン匠である。

武器 自分が作った発明品

・初代四剣琅

氏名、年齢は不明。

死堅牢 明星に所属。

白髪の女性で常に無表情だった。仲間を造らず一人で死堅牢として活動した。

未来を視る能力があったが、それを口にはせず。言葉を発することも稀だった。

絶世の美女と言われており、夜に豎琴を弾いていたらしい。近寄る男を焼いてしまうなど恐ろしい伝説を持つ。

く黒騎の人々く

【左遷組】

・阿修羅<sup>あしゅろ</sup>

魔術師、百三十七歳（人間換算二十七歳）。身長は188と長身で黒髪に切れ長の目を持つ。睨まれるととても怖い。

グランオスクリタ王国出身で闇に属する。自身の闇を自在に操って攻撃する。また多数の魔獣を従えている。

武器 闇誠（<sup>あんがい</sup>瞳が金色に変わり白目が黒に染まる。相手の状態が色で視える。過去のつながりを見ることも可能）

所属 黒騎

飄々としていて掴みどころのない美青年。面倒くさがりなくせによく生き物を拾っては鎖羅に怒られる。

昔は本部にいたが、左遷されて現在悠々と異空間で暮らしている。よくふらつとどこかに行くことが多い。

昔秀斗をしつけ、よく慕われている。最近如月に現れるようになった。

鎖羅を気にかけており、スキンシップを図るが反撃にあうことが多い。

・鎖羅<sup>しゆら</sup>

魔術師、百三十六歳（人間換算二十七歳）。身長は169（ヒールで174）と高く、黒髪の長髪で前髪を真中でわけて二つに纏めて垂らしている。

グランオスクリタ王国出身で闇に属する。空間魔術しか使えず、専ら剣で闘う。

鎖羅の剣術は、剣を通して自らの力を相手に注ぎ内部で爆発させる

というもの。

武器 闇宵（剣で人語を話す）  
所属 黒騎

長身で口調が威圧的なので怖い印象を与えるが、面倒見がいい。凜と自立した大人の女性だが、思い込みの激しい一面もある。

弥生とは一時期憎しみ合っていたが和解し、現在はよく如月にお茶をしに来る。弥生と義姉妹の杯を交わしており、姉と慕われている。弥生の剣の師を務めていたこともある。

#### 【中央部・幹部】

##### ・闇の王

氏名、年齢不明。闇の魔術師で王と呼ばれる男。容姿は黒髪で厳しい顔つき。

グランオスクリタ王国出身。

禁術を使い、影で糸をひく。

禁術により魔力が保持できないので度々恨みや憎しみといった負のエネルギーを取りこむ必要がある。

##### ・アフラン

阿修羅の幹部での名前である。

黒騎の象徴でもある四つの頭をもつ蛇の一の頭。

幹部の中で最も古くから仕えており、王の信頼が厚い。普段は裏で動いており、戦いには姿を見せていない。

闇と王に対する忠誠心が高く、王のために負のエネルギーを献上する。

誇りが高く、冷酷な一面もある。  
サクリスとは性格が合わない。

・レガーシア

二の頭。

阿修羅好みの女らしい。王によって造られた。

・ロビナシア

三の頭。

眠りから目を覚ましていない。

・サクリス

四の頭。

軽い言動が多く、いつも笑顔。だがたまにその笑顔が残酷なものに変わる。

王から人間界での潜伏を命じられている。

レガーシアとロビナシアには会えず、アフランもかまってくれないので暇。

## キャラ図鑑 1 (後書き)

今後に関係がある人だけをピックアップしました。

重要人物っぽいのに抜けてる。もしくはこいつのことがもっと知りたい。など要望がありましたらどんどん言ってください。追加します。

書きあげてみると意外と時間がかかった。たぶん主要メンバーにも  
れはないはず……。自信がない。

まだ零華の武器が出てないという残念な結果。戦う必要がなかった  
んですね。

ちゃんと五章で出しますので、ご心配なく。

さて、つぎは如月の屋敷を……載せられるかな？



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9160j/>

---

神の名の下に

2011年11月29日23時53分発行